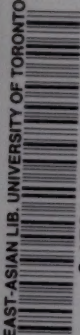
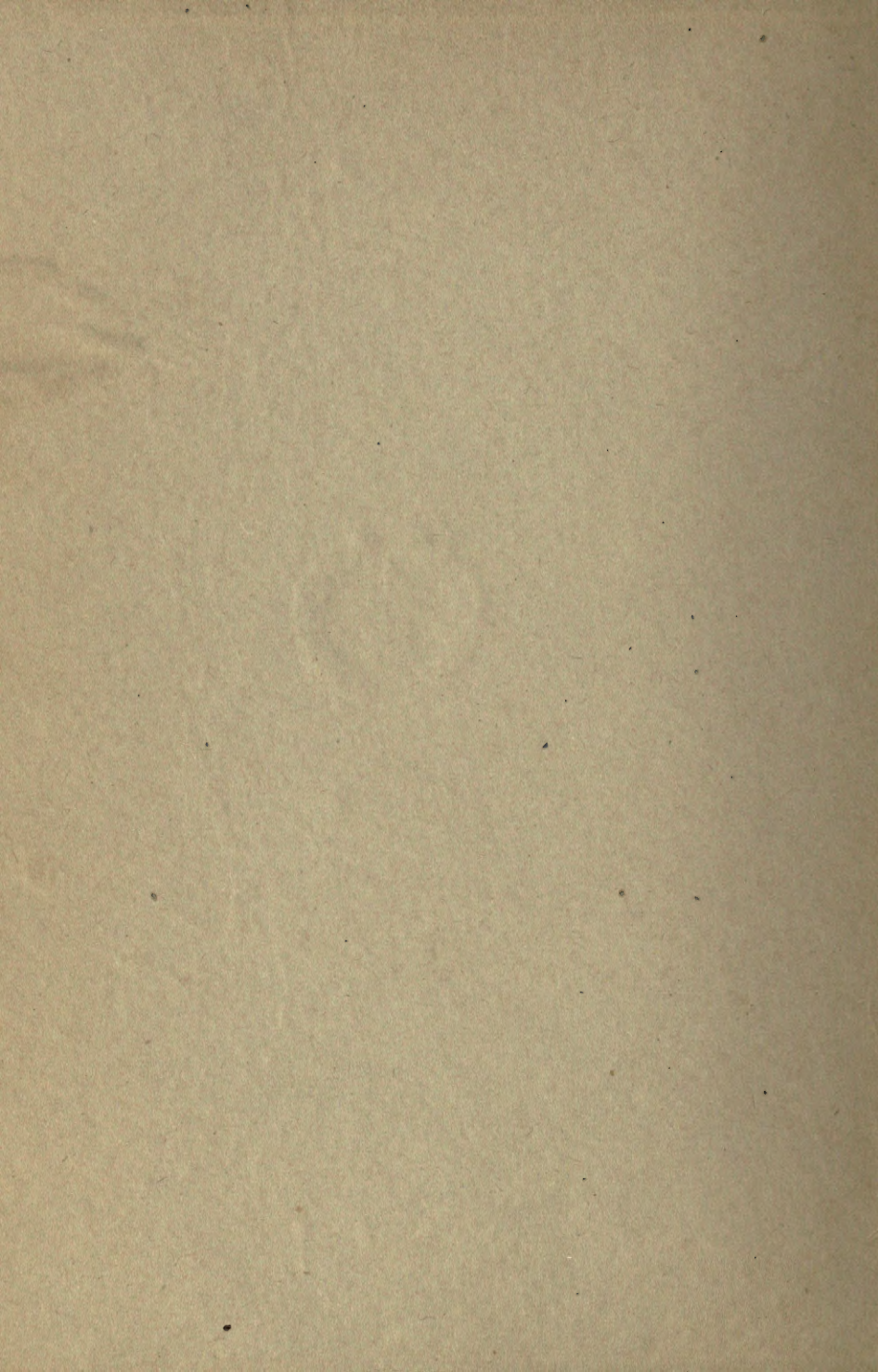


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03148 9925





大東出題

不

一

一

一

昭和六年十一月十五日 印刷
昭和六年十一月二十日 發行
昭和十六年六月二十日 再版發行

不許
複製

發行所

國譯一切經 論集部 六

編輯者兼

岩野真

雄

東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者

長尾文

雄

東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所

日進舍

東京市芝區芝浦二丁目三番地

東京市芝區芝公園地七號地十番

大東出版社

振替東京一九四七一番
電話芝三〇四〇番
芝三九四四番
芝四〇四番

索 引

(頁数は通頁を表す)

—ア—		焰魔	236	句處	76
阿譏悉帝	19	—オ—		功德	271
阿闍世王	60	淤泥	36	拘舍彌	51
阿須羅	60	歇叻	245	俱舍子	21
阿僧祇劫	162	王舍城	46	俱胝髻童子	277
阿耨多羅三藐三菩提	162	橫豎頰罍	120	俱嚧	18
阿鼻	207	陰藏相	119	具四十齒	120
阿鼻地獄	384	—カ—		空	82
阿鼻の報	252	迦尸	36	空無相行	162
阿頼耶識	381	迦梅延經	74	君那花	276
愛欲の論	117	迦癡那	26	軍那華	25
安石榴	67	迦癡羅	21	軍林	381
—イ—		迦葉大尊者	264	—ケ—	
一孔一毛	120	迦葉佛	35	化樂天王	149
一三乘	140	迦羅舍	22	假名	106
一乘	385	迦闍陀竹林	187	解浣	116
一切見	385	伽藍	125	結	117
一切性	389	我	82	月天	17
一切の染	25	我・我所	103	月覺願作	177
一本扁	40	鷄	276	幻化	382
逸象	57	識野惛哩經	27	眼業の處	380
陰	105	戒足	168	眼根業の界	380
陰界入性	187	慣闍	36	現前地	149
—ウ—		渴愛	76	—コ—	
有	73, 81, 104	渴愛根	80	虛空藏經	217
有爲	171	甘露	112	五蘊	380
有學	122	灌頂	152	五陰	166
有所得見	187	歡喜地	146	五戒	39
有情	271	觀自在	277	五根	27
有無二邊	107	願行	140	五邪令	144
憂曇鉢樹	27	—キ—		五種因	68, 78
優婆塞	162	歸命	33	五淨	95
優鉢羅	38	九孔	95, 167	五塵	136
鬱尼沙	122	九門	117	五無間業	168
烏哩囉	24	牛鬪	102	五欲樂	39
蘊・處・界	379	行	75	五里	55
—エ—		行業	16	五塵	145
廻向	140	燒亂	221	交會	27
臍下滿	120	金翅	236	交契	27
緣覺	122	金翅鳥	57	香山	57
刻浮洲	147	—ク—		香流	57
闍浮提	34, 190	九	117	嬌尸樹	20

劫樹	262	四德	114	十善業戒	175
劫樹苑	279	四辯	151	十二因緣	63
劫初の諸王	52	四梵	153	十二支輪	383
恒河沙	165	四梵行	185	十二部經	188
橋怛麼	21	四魔	190	十二輪	133
黑法白法	185	四無量	124	十八種變	53
金剛手	277	四無量心		十力	35, 153, 167
根	77	支提	118, 124	蹤跡	27
—サ—					
三惡道	178	指足跟圓長	118	順忍	190
三有	32	指網密	119	諸種の波羅蜜	113
三衣	215	屍林	89	諸聲聞	380
三果	126	齒白齊必勝	120	初禪	90
三界	176	齒木	216	初地	183
三結	146	紫礦	24	成唯識	381
三禪	93	鷄	55	清淨畢竟忍	177
三十三天	33	自在	270	勝遍光梵王	151
三十二相	118, 170	自性	271	聲聞地	384
三乘	151	地獄	25	燒然	148
三塗	169	慈悲喜捨	187	上身如師子	120
三世	107	色身	122	淨居天	38
三千大千世界	165	識	75	淨居梵王	152
三大	110	七覺	172	城喻經	74
三不善根	176	七種苦	78	靜慮の四種	94
三寶四諦	145	七報	77	心爰	95
三煩惱	77	七寶	52	心空空智	382
三摩地	385	實有	104	身圓滿端直	118
三昧	180	實相	105, 186	身口意三業	101
山王	118	舍利弗	139	身體の三十二分	94
—シ—				身大七處高	118
尸羅	250	奢摩他	240	信智二根	101
尸羅波羅蜜	174	手足滑柔軟	118	信忍	190
止觀	88	手足八十文	119	信力	260
四圍陀	15	手足實相輪	118	眞言力	180
五依	140	首楞嚴金剛三昧	180	眞俗二諦	150
四業	152	首陀	19	眞如	259
四解脫經の説	95	取	76	眞染	89
四種分	79	種姓問雜	19	零何	90
四趣	103	須彌山	41	—ス—	
四重禁	164	受	75	頭陀行	39
四正勤道	179	受記	279	戌陀	24
四相	108	授記	188	戌嚕底經	24
四大	109, 177	宿命通	279	隨色摩尼	220
四大苦	50	習氣	148	隨世間の相	380
四倒	172	十惡	102	隨相有八十	121
		十戒中第五	115	—セ—	
		十善	102	世間	259

世間・出世間	178	大涅槃	385	鬘羅那	26
世諦	120	大悲	378	—八一—	
姓	16	大梵天	140	波羅捺	32
刹田哩花	27	第一義諦	384	波羅提木叉戒	175
刹帝利	25	第九善慧	151	波哩沒羅惹伽	381
刹那	108	第五離勝	149	破邏具膩經	74
刹利	165	第七遠行地	150	婆迦婆	42
舌根脩廣	120	第八童子地不動	151	婆迦晚	25
旃陀羅	25	彈指の頃	171	婆在虞臘麼	21
旋毛端向上	119	檀行	24, 25	婆四陀辟支佛	38
染	167	檀波羅蜜	171	婆羅門	14
染汚	246	—チ—		婆羅帝山	18
染汚心	145	知	16	轉瑟姪	24
染欲	27	智度	152	罽野僧子覺乞囉	23
瘡	254	智波羅蜜多	385	罽野婆	26
瞻波國	42	中陰	67	八難	129, 168
甄陀羅	24	頂骨露尼沙	120	八解	180
圓提波羅蜜	176	—テ—		八相梵音	120*
善覺大仙	26	底逸底哩	22	八法	182
禪那波羅蜜	180	底常哩吹迦	22	半拏罽	27
—リ—		天所生の女	24	般若波羅蜜	183
酥	43	轉輪王	35, 59, 136	般若波羅蜜多	259
草蓐	126	田疇	125	般涅槃	139
相似	68	—ト—		—ヒ—	
僧佉	107	都羅綿	235	悲想非々想處	169
僧佉論	25	兜率天	148	悲愍	230
僧薩多識	21	訥嚧拏	22	坏器	242
僧尸沙	34	德	271	尾濕彌伽怛嚧	26
總持	130	動	110	尾濕彌伽仙	26
總擇	143	—ナ—		尾濕彌伽覽仙・彌伽大仙	25
足安平	119	那栴爾	276	尾世史迦	25
速骨嚧太仙	25	捺囉唎	23	尾鉢奢毘	240
—タ—		—ニ—		毘伽羅論	143
他化自在天	149	二業	77	毘沙門	47, 52
陀羅尼	127	二十五有	163	毘舍	24
拏吉爾	280	二禪	92	毘舍離	38
太使占相	55	尼嚩	107	毘舍離律車子	60
胎生	26	日天	17	毘首羯磨	34
對治	94	仁覺	235	毘羅仙王	56
帝釋背	125	忍辱	35	毘梨耶波羅蜜	178
大自在天	25	—ネ—		微細	272
大自在天王	153	念	15	臂膺大	119
大聖文珠	277	然燈佛	189	蕊菟	89, 280
大乘	138	—ノ—		白毫端嚴面	120
大乘阿含	122	能所詮	16	白毫の福	122

白四羯磨	176	梵王	384	—モ—	
白檀香	246	梵行	35	木叉	143
辟子佛	32	梵宮	95	—ヤ—	
—フ—		梵天	103	夜叉	207
不婬戒	115	梵摩達	56	夜摩	148
普賢	207, 386	—マ—		野鹿採魚人生	23
普賢菩薩	277	摩訶婆羅多	26	—ユ—	
婦語	49	摩耶	278	輸羯羅	255
補處	153	摩梨山	39, 57	輸羯羅血	260
賦斂	37	—ミ—		噫地瑟致囉	26
伏藏	41	彌輪婆	24	—ヨ—	
禪慧行	124	名色	75	陽根	27
糞掃衣服	89	妙人月	250	癢	117
—ハ—		明焰	148	—ラ—	
兵議羅仙	19	明力	280	羅刹	207, 280
吠婆波灑	26	—ム—		—リ—	
遍淨梵王	152	牟尼	67, 76	犛牛	41
—ホ—		無我	111	力度	152
補相	37	無我無人	25	—レ—	
方便	133	無垢地	147	蓮華比丘尼	35
方便善巧	153	無見	82	—ロ—	
法雲	152	無生忍	163, 190	六界	110
法稱菩薩	14	無明	383	六趣	163
法爾	382	無明根	80	六獨	75
法身	122	無邊無空	181	六通	130
法天	14	無漏果	174	六入	75
法忍	130, 187	—メ—		六物	47
傍生	17	名	16	六和敬	125
寶輪	147	命	18	鹿王膊	119
北洲	278			鹿角大仙	26

し。而も悉く無住涅槃に安住す。諸佛世尊咸な是の説を作す。悲心の生ずる所、無量の福聚あり。彼即ち最上の眞實空理なり。諸佛威神の出生する所、自利・利他二行成就す。我今彼の一切性に頂禮す。我常に彼の菩提心を尊敬す。願くは稱讚する所、佛種斷へず、諸佛世尊常に世間に住す。菩提心とは大乘中の最勝、我此心に於て正念に安住す。又菩提心とは、等引心に住し、方便より生ず。若し是の心生死平等を了せば、自利利他二行成就す。又菩提心とは諸見の相を離れ、無分別智は眞實にして轉ず。諸有の智者は菩提心を發し、彼れ福聚を獲て無量無邊なり。又復た若し一刹那間に於て、菩提心を觀想して、彼の福聚を獲ること稱量すべからず。菩提は稱量すべからざるを以ての故に。又菩提心の寶は清淨無染にて、最大最勝最上第一なり。壞する能はず、所壞に非らず、眞實堅固なり。能く煩惱等の魔等の一切魔を破り、諸の菩薩普賢の行願を滿たす。又菩提心は、是れ一切の法の歸趣する所、所説眞實にして諸の戲論を離る。是れ即ち清淨なる普賢の行門にして、一切相を離る。此を是の如くに説く。

我が稱讚する所の菩提心は

二足尊の正しく説く所の如し。

菩提心は最尊勝にて

得る所の福聚も亦た無量なり。

我、此の福を以て衆生に施し、

普く速かに三有海を超ゆるを願ふ。

理の如く實の如く稱揚する所、

智者も應に當に是の如く學ぶべし。

菩提心離相論(終)

の苦を受く。菩薩は悲心に念じて代受せんと欲す。此の種々の苦、種種の相あり。説いて實有るなく、亦無實に非ず。若し空を了知すれば、即ち此の法を知る。諸業果に隨つて是くの如くに順行す。是の故に諸の菩薩、諸の衆生を救度せんと欲する爲の故に、勇猛心を起して生死の泥に入る。生死に處ると雖も而も染著なし。蓮華は清淨にして無染なるが如し。大悲を體と爲して衆生を捨てず。空智の觀する所、煩惱を離れず。是の故に菩薩方便力を以て、生を王宮に示し、城を踰へて出家苦行して修道し、菩提場に坐して等正覺を成じ、神通力を現して諸魔軍を破り、衆生を度せん爲め大法輪を轉す。三道寶階を現じて天より下降して諸化相を起し、世間に隨順して大涅槃に入る。其の中間に於て諸色相を現し、或は梵王と作り、或は帝釋と爲り、若くは天、若しくは人と成り、諸相に隨つて轉す。是の如く種々諸相を示現す。是の故に救世導師と名くるを得たり。此等皆是れ諸佛菩薩の大悲願力の、世間を調伏して悉く相應勝行に安住せしめたるなり。是の故に輪廻の中に於て疲倦を生ぜず、一乘中より二乗の法を説き、一乘二乗皆眞實義なり。若しくは聲聞の菩提、若しくは佛の菩提、智身一相、三摩地一體、所説ありと雖ども是説は説くにあらず。或ひは説あつて種々の相をなさば、但諸の衆生を引導せんが爲の故なり。若し衆生、利を得、佛の菩提福智平等となれば、實に二相の任すべきあるなし。若し住相ありて即ち種子とならば、彼の種子相聚り、類の生ずる所。是故に生死の芽莖を増長す。佛世尊の常に宣説する所の如き、彼の世間種々の行相を破り、但衆生の爲めに諸の方便を作す。而も實は破するに非らず。若し分別を離れば、此義甚深し。甚深義中に二相あるなし。破ありと説くと雖も、此れ亦破に非らず。空法中に於て二相あるなし。諸法は自性の眞實を任持す。智波羅蜜多は是れ即ち菩提心なり。菩提心は一切見を除く。是の故に知るべし。諸の身語心は是れ無常法なり。但だ衆生の爲め利益を作す故に、此中に空と言ふ。空にして斷に非らず。此の中有を説くも、有も亦常ならず。是の故に生死あるなく、亦た涅槃あるな

【五】菩薩方便力を以つて以下、釋迦佛出世の略歴を記す。

【六】大涅槃。(Mahāparinirvāna) 涅槃に同じ前出。

【七】一乘二乘。一乘、成佛する唯一の教。乘は車乘にて佛の教法に喩ふ。教法人を載せて涅槃の岸に運べば乗と名く法華經は此の一乘の理を説けるものである。

二乘。人を乗せて各其の果地に到らしむる教法を乗と名けること前の如し、一乘乃至五乘あり。二乗とは一、聲聞乘に緣覺乘、獨覺乘。詳しくは前出。

【八】三摩地。(Samādhi) 前出

【九】智波羅蜜多。(Pañcāparamitā) 前出。

【一〇】一切見。見。(darśana) 見解の意。

べからず。體を説いて空と爲し、空も亦體なし。若し無實作者は無常なりと了せば、諸の煩惱業は積集して體をなす。是の業は亦復た心より生ずる所なり。心若し無住業ならば如何に得ん。快樂心の如きはれ寂靜の性ならば、彼の寂靜心は取るべからず。諸有の智者は能く實に觀察す。彼れ實を見るが故に解脱を得。又菩提心は最上の眞實なり。此の眞實の義は説いて名づけて空となす。亦眞如と名づけ、亦實際と名づく。是れ即ち無相第一義諦なり。若し是くの如き空の義を了知せざれば、當に知るべし、彼は非解脱分者なり。輪廻の中に於て是は大愚癡にして、輪廻し行く人は六趣に流轉す。若し有智者能く實の如く觀すれば、彼の菩提心は空と相應す。是くの如く觀じ已て、即ち能く利他の智慧・無礙・無著を成就す。是れ即ち恩を知つて佛恩を報ゆる者なり。常に悲心を以て普く衆生の父母眷屬に種種の相あるを觀す。煩惱の猛火は常に燒然する所なり。諸の衆生をして生死に輪廻せしむ。受くる所の苦の如きは當に代受すべきを念ふ。和合樂の如きは普く施すべきを念ふ。復た世間を觀するに愛は愛果に非ず。善趣・惡趣、饒益・不饒益は衆生に隨つて轉ず。而して諸の衆生は本來得るなし。智の差別に隨つて種種の相を起す。所有の梵王・帝釋・護世天等、若しは天、若しは人、一切は世間の相を離れざるが故に。又復た所有一地獄・餓鬼・畜生を觀察するに、是の諸趣中の一切の衆生は無量無數の種類の色相あり、不饒益苦の常に隨轉する所、饑渴の逼る所、互に相殺害し、互に相食噉す。是くの如くに因るが故に、苦果を壞たず。諸佛菩薩は如實に能く善趣惡趣・一切衆生の諸業報事自相の是くの如きを觀じ、觀じ已る所の如く、方便心を起し、善く衆生を護つて諸垢を離れしむ。諸の菩薩此れによつて大悲心を以て根本となし、彼の衆生を以て所縁の境となす。是の故に諸菩薩は一切禪定の樂味に著せず、自利・所得の果報を求めず、聲聞地を過ぎて衆生を捨てず、利他行を修して大菩提心を起し、大菩提の芽を生じて佛菩提の果を求む。大悲心を以て衆生の苦を觀す。阿鼻地獄は廣闊無邊にして、諸の業因に隨つて苦報輪轉し、此の種種の罪は種種

【二〇】 第一義諦。眞諦と同じ。前出。

【二一】 梵王、前出。

【二二】 地獄。(Narak) 前出。

【二三】 聲聞地、聲聞乘十地の意か、大乘同姓經下に四乘に各一地を説く。聲聞乘としては一に受三歸地、初めて三歸戒を受ける位である。二に信地、信根成就の位、三に信法地、四諦の理を信ずる位。四に内梵天位。五停心觀せるを修する位。五に學信戒地。三學成就の位。六に八入地、見道の位である。七に須陀洹地、預流果の位。八に須陀洹地、乘果の位。九は阿那含果、不退果である。十に阿羅漢地、無學果である。

【二四】 阿鼻地獄。(Avīci-narak) 前出。

是の空も亦復た別に體有るべし。是の故に菩提心は諸の所縁を離れて虚空相に住す。若し虚空を觀じて所在となさば、是の中即ち空、有性は二名差別有るべきが故に、空を知るは、猶ほ世間の師子一吼すれば、羣獸皆怖るるが如し。空の一言にして、衆語皆寂たる如し。故に知は虚々常寂にして彼皆皆空なり。又復た識法は是れ無常法にして無常より生ず。彼の無常性は即ち菩提心なり。此れ空を説いて亦相違はず。若し無常性は即ち菩提心ならば、若し菩提を愛樂するは是の心平等なり。而して亦彼の空を愛樂するを説かず。取空の心云何ぞ得べき。當に本來自性眞實一切成就菩提心義を知るべし。又復た應に物に自性なきを知るべし。無自性の性、是れ此の説義なり。此の説く所は是の心如何。若し我法を離るれば、即ち心住せず。此れ一法に非ず、亦諸法に非ず。各各自性にして自性を離る。世の糖蜜は甜きことを自性と爲すが如し。又火は熱を自性とすが如し。彼の諸法は空なり。自性も亦然り。彼の諸法の性は常に非ず、斷に非ず、得に非ず、離るるに非ず。是の義を以ての故に、無明を初めとなし、老死を後となす。諸の縁生法の成立する所。猶ほ夢幻の體も亦實無きが如し。此れに由つて説いて十二支法となす。即ち此亦十二支論と名づく。循環して彼の生死の門中に轉じ、而して實に我なく、別の衆生なし。三業の行果報差別なし。若し是の中に於て縁生の法を了せば、即ち能く諸境界門を出離す。彼の非行相は正因を壞たず、蘊所生の故に。輪迴後邊非行相の故に。一切無持空空生の故に。法法平等にして造因を造つて果を受く。是れ佛の所説なり。所有諸法聚類の生ずる所なり。鼓を撃てば聲有るが如く、麥を殖ゆれば芽を生ずるが如し。諸の法聚類、其の義亦然り。幻の如く、夢の如く、縁によつて生じ、現るる所。諸法因によつて生じて亦生なし。因因自ら空にして何の生ずる所あらんや。是の故に應に知るべし。諸法は生ずる無し。即ち此の無生の説は名づけて空となす。説くが如く五蘊蘊性にして、彼の一切法亦是くの如く念す。若し空を説く有るも眞實の説の如く、而して所説の空體亦斷するに非ず。非斷體中實も亦得

【八】無明。(Avijjā)前出。
 【九】十二支論、十二支法。
 十二因縁を言ふ。

る所の如し。阿頼耶識に所依も亦然り。若し是くの如く彼の識を觀する者あらば、即ち分別の心生ずるあるべからず。若し彼の各々の如實知者ならば、彼彼の名復た如何ぞ説かん。若し彼各々が諸の物性を知るならば、即ち彼は各各稱説する能はず。此の説を作す者は是れ決定の語なり。是の故に諸法も亦決定して生ず。一切事に於て隨轉して成就す。能知と所知とは是れ二の差別なり。所知若し無能知ならば何ぞ立せん。二俱に無實の法ならば云何ぞ得ん。是の故に應に知るべし。言ふ所の心は但名のみ有り。彼の名も亦復た別に得べき無し。但表了を以ての故に彼の名の自性も亦得べからず。是の義を以ての故に、智者應に當さに菩提心の自性は幻の如しと觀づべし、若しは内、若しは外、及び二つの中間、求めて得べからず。法の取るべき無く、法の捨つべき無し。形色見るべきに非ず、顯色表はずべき非ず。男女相に非ず、黃門相に非ず。一切色相中に於て住せず、法の見るべき非ず、眼境界に非ず。唯一切佛は平等を觀察す。若しくは心自性あり、若しくは自性無くんば、平等法中云何ぞ見るを得ん。言ふ所の性とは名の分別なるが故に。若し分別を離るれば心性俱に空なり。若し分別して見るべき心有らば、此の中云何ぞ説いて名けて空となさん。是の故に應に知るべし。能覺無く、所覺なく。若し能く是くの如く菩提心を觀れば、即ち如來を見る。若し能覺なり、及び所覺ならば、菩提心は成立すべからず。是の故に無相にして亦復た無生なり。語言道にして能く稱讚するに非ず。又菩提心は猶ほ虚空の如し。心虚空と俱に二相無し。此れを心空空智平等と説く。佛佛の神通は佛佛異なるなし。所有の諸佛三世の事業は一切皆菩提界中の所攝藏に住す。所攝藏と雖も彼の一切法は常に寂靜なり。亦復た觀察せよ。是の無常法は猶ほ幻化の如し。所攝藏は三有を調伏するに非ず。空法に住するが故に。一切無生はこれを説いて空と爲し、一切無我也亦説いて空となす。若し無生及び彼の無我を以て觀じて空となすは、是の觀成せず。若しくは染、若しは淨、二種分別すれば、即ち斷常二種の見相を成す。若し智を以て彼の空を觀すると言はば、

新稱は河頌耶、譯して藏。一切の事物の種子を含藏する義又、室、此の識は一身の某宅たるをいふ。蓋し此の識中に含藏せられる種子は外縁に打たれて現起し以て其の人の依(外界正(身體)二報を組織する三界唯一心の義は此の識に依つて立つ。

【五】 法爾、白爾法然、又は天然自然と言ふに同じ。他の造作を假らず法の持ち前として自ら然るをいふ。火の熱きが如く水の濕ひの如きものである。

【六】 心空空智。心空は心性廣大にして萬象を包容する。之を大虚空に譬へて心空といふ。

【七】 幻化、陽焰、乾闥婆城。幻化はまぼろしを言ふ、陽焰はかげらち。乾闥婆城。又健闥婆城、健闥婆城、獻津嚩城、(Candhivra) 露、香城、髮氣樓、樂人を乾闥婆と名け、波の樂人巧みに樓閣を幻作して人に觀せしめるのを之を乾闥婆城と稱す。而して彼の空中に現する髮氣樓。

如きは一に非ず、異に非ず。諸の外道波哩沒囉惹迦等有り、諸の異見に隨つて三分別を起す。是の義然らず。人の夢中に殺害の事を造るが如し。彼の所作は實行の相なし。又人の夢に最上處に居るが如し。彼も亦殊勝の行相に非ず。此の義云何。謂く識の光明は取捨の相を破するが故に。識法是の如し。外義何かあらん。是の故に諸法は外義有る無し。當に知るべし、一切色相の表す所、自識の光明かに色想照耀して、人、彼の幻化陽焰乾陀婆城ガシガシを見て、取つて以つて實と爲すが如し。諸の無智人は愚なる執心を以て、色等は實なりと觀るも亦復た是の如し。此の我執に由つて是の心隨轉すること、先きの所説、蘊處界の義の如し。應に知るべし、彼の諸分差別を離る。唯心の分位に施設せる所の故に。而して種種の相は唯だ心の現す所にして、此の義成就して成唯識に説くが如し。此の中間ふて曰く、「前説五蘊の識は云何ぞ自相なるや。」答ふ、「心の義を説くが如く、識も亦是くの如し。佛世尊の如きは常に是の説を作す。應に知るべし、一切は唯だ心の所現なり。此の義甚深なり。諸愚癡者は了するは能ざる故に眞實を見ず。是の故に若し能く其の我相を空しうすれば、即ち其の此の心に於て分別を生ぜず。分別を起すとは謂く邪教なるが故に、彼の建立する所、是の義成ぜず。如實義とは法無我を見るなり。是れ大乘中の法無我の義なり。自心本來にして不生の故に、所生有るに隨つて亦復た平等にして自心増上して眞實義に入る。瑜伽の行門出生する所の故に。此の中應ニに知るべし。彼の後の所依にして實體無し。此れ即ち名づけて淨心現行と爲す。若し過去法ならば、過去無實なり。若し未來法ならば未來未だ至らず。若し現在法ならば現在に住せず。三世の中に於て當に如何ぞ住すべきニ。軍林等多法成ずるが如き故に。應に知るべし、識とは此れ我相なきなり。彼の識も亦所依と爲すに非らざるが故に。若し諸法に於て是くの如く見る。猶ほ赤雲の速疾に散滅するが如し。是の故に當に知るべし。若し法有ならば思より現する所、阿頼耶識も亦復た是くの如し。諸の有情類、若くは來り、若しは去る。法爾として是の如し。譬へば大海は衆流の歸す

【二】 波哩沒囉惹迦、波利阻羅拘伽、般利伐羅多迦、般利伐羅勾迦、般利婆羅闍迦と言ふ。外道の一類。出家外道である。唯識述記、俱舍光記九、

【三】 成唯識論。成唯識論のこと。十卷、護法等の十菩薩各論十卷を造り、世親の三十頌を釋す。唐の玄奘師合釋して十卷となす。即ち瑜伽一宗の精要である。

【三】 軍林等。不明。

【四】 阿頼耶識 (Alaya) 又は阿刺耶に造る。心識の名。八識の中第八、舊稱、阿梨耶、譯して無没。有情根本の心識にて其の人の受用すべき一切の事物を執持して没失せざる事。

非ず。而して實にして彼我の相得べきに非ず」と。諸法は眞實性の中に任持し、常を執す可からず、亦無常に非ず。我蘊の中に於て名尙實なし。況や復た作及び諸分別あらんや。若し一法有りて乃至諸法有りと言はば、此の説を作す者は、世間心は轉た世間の行に隨ひ、彼の非相應は常行の相とならん。此の義然らず。是の故に當に知るべし。諸法は無性にして、若しは内、若しは外、分別すべからず。彼の能く心に執して何の因かある。謂く隨世間の相を離るゝ能はず。若しくは因、若しは相、是れ二にして別なし。是れ即ち常にあらず、亦能く執するに非ず。當に知るべし。心性は常なりと執すべからず。是の故に彼の性は無常にして是は常なり。若し彼の性は是れ無常なりと知らば、何の所作は何の所生より我等の相を取るべき。若し世間を離るれば、即ち蘊中に於て障礙有る無し。若しくは處、若しくは界と覺了するも、亦然り。取捨の二法は即ち得べからず。

此の中蘊と言ふは、謂く色受想行識なり。此を説いて五蘊と爲す。諸聲聞人は是の中に於て學ぶ。復た次に知るべし。色は聚沫の如く、受は浮泡の如く、想は陽焰の如く、行は芭蕉の如く、識は幻士の如し。此の五蘊の義、佛・二足尊は諸の菩薩の爲めに應に宣説するが如し。

言ふ所の色蘊とは、今略して其の相を示さん。謂く四大種及び彼の所造なり。説いて色蘊となす。彼の非色とは、謂く即ち餘す所の受想行の三なり。諸教當に知るべし。識蘊行想は下に當に説くべきが如し。此の中、處と言ふは、謂く内は眼等の處、外は色等の處なり。此を説いて十二處と爲す。

此の中界と言ふは、謂く眼根等の界なり。眼識等の界なり。色等の境界は此を説いて此を十八界と爲す。是の如き蘊處界は諸の取捨を離れ、方無く、分無く、分別す可からず。分別見とは是の義然らず。分別を起すに隨つて即ち所著あり。彼れ復た云何ぞ相應を得る。一相、外義を見るもの有れば、當に知るべし。此は破智の所轉と爲す。意長く養ふ色とは是の義云何。當に知るべし。是の

【五】 世間。(loka) 一切生死の法を世間とする。苦集の二諦は世間である之に對し出世間とは涅槃の法を言ふ。

【六】 隨世間の相。世間に隨ふの相を言ふ。

【七】 五蘊。(Skandha) 色受相行識をいふ。

【八】 諸聲聞。(Śrāvaka) 佛陀の聲を聞いて開悟する者、佛弟子位いの意。

【九】 眼等の處。(āyatana) 十二處入を言ふ。前出。

【一〇】 眼根等の界。眼・耳・鼻・舌・身・意の根(感覺器官) Indriya を言ふ。眼根等の界眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識を言ふ。

菩提心離相論

龍樹菩薩造

西天譯經三藏朝奉大夫試光祿卿傳法

大師賜紫臣施護紹を奉じて譯す。

一切佛に歸命す。我今略して菩提心の義を説かん。至誠をもつて頂禮し奉る。彼の菩提心は、勇健なる軍の勝れたる器仗を執るが如し。其の義も亦然り。而して彼の大菩提心は、所有の諸佛・世尊・諸菩薩・摩訶薩、皆是の菩提心を起すに因るが故に。我菩提心を起すも亦是の如し。所成乃至菩提場に坐して正覺果を成す。是の心堅固なり。又此の菩提心は是の諸の菩薩總持行門なり。是の如く觀想し、是の如く發生す。我今菩提心を讚説するは、一切衆生をして輪迴の苦を息めしめ、未だ度を得ざる者は普く度を得しめ、未だ解脫せざる者は解脫を得しめ、未だ安隱ならざる者は安隱を得しめ、未だ涅槃せざる者は涅槃を得しめんが爲めなり。是の如き勝願を圓滿せんと欲する爲めの故なり。自相正體の因を安立せんが故なり。第一眞實觀に入らんが故なり。彼の菩提心は無生自相なり。是の故に今説く。言ふ所の菩提心は一切性を離る。問ふて曰く、「此の中云何ぞ一切性を離るるや。」答へて謂く、『蘊處界は諸の取捨の法を離れて無我平等なり。自心は本來不生なり。自性空なるが故に。此の中云何ぞ我蘊等表了する所有りと謂ふや。而も分別心は現前に無體なり。是の故に若し常に菩提心を覺了する者は、即ち能く諸法空相に安住す。又復た常に彼の菩提心を覺了する所なり。悲心を以つて觀じ、大悲を體と爲す。是の如きに由るが故に、諸蘊の中に於て、無我の相を得べし。諸の外道有つて、非相應行を起し、執相分別して、謂く「諸蘊は有にして無常の法に

【一】總持。梵語陀羅尼(Dhāraṇī)の譯。善を持して起らしめざる義。念と定と慧とを體とす。菩薩所修の念定慧に此の功德を具するのである。

【二】一切性。性、體の義、因の義、不収の義である。

【三】蘊處界。(五)頌(十二)處(十八)界を言ふ。

【四】大悲、前出。

菩提心離相論解題

菩提心離相論は龍樹の作と言はれ、宋

(九六〇—一一二七)の施護によつて譯された。龍樹に就いては福蓋正行所集經の解題で説いたから省くことにする。

施護 (Dharmapala?) は北方印度優陀耶那 (Uddiyana) の沙門で、紀元九八〇年支那に到着し、數年間譯經に従つた。紀元九八二年支那皇帝から顯教大師の稱號を受けた。彼の譯經は藏經中に百拾壹卷ある。多く小經であるが、中に佛説五十頌聖般若波羅蜜經・佛說聖母般若波羅蜜經・佛說

除蓋障菩薩所問經・讚法界頌等がある。

菩提心離相論は極めて小さい論で、他の菩提心に關する類經論(發菩提心經論・菩提行經等)と同じく、菩提心の意義を説明し、菩提心を發すべきを發願し、菩提心は一切性を離るることであり、問答體にて五蘊・十二處・十八界等を説明し、自性は空にして(阿賴耶識の字出づ)、無相・無我にして、菩提心は虚空の如くであると言つてゐる。かくして空思想を高調して説明し、菩提心は最上眞實にて眞實義

は空と爲し、業報による六趣流轉を説き、菩薩が發願し、衆生を教化すべきを勧め、釋迦佛の出家の略歴を述べ、之を波羅蜜修行の實證とし、無住涅槃眞實空理を説明し、佛種斷へすと述べ、最後に諸菩薩の普賢行願を讚嘆してゐる。

本論は他の菩提心の類經より遙かに實大乘的にて、阿賴耶識を説き、空思想を高潮してゐる。之は龍樹(三世紀位)の思想の特長を現してゐるが、他の思想が三世紀以後と思はれる節もあるので、必ずしも龍樹の著作でなく、龍樹以後の彼の學派の徒の手によつて成つたのかも知れない。

昭和六年十一月五日

譯者 平等 昭 識

大海の如く、深廣無邊なり。若し我、次第を具足して宣説すれば、未來際を窮むると雖も、亦盡すこと能はず。向に明かす所の如き、持戒の功德は、何人か曾つて、是の如き勝報を獲ん。佛大僊の如き、皆悉く成就す。初發心より、淨戒を修持し、乃至三明六通・力無畏等・三十二相・八十種好を獲得して、美妙分明にして圓滿にして減する無く、紺髮右旋して、蜂の黒潤なるが如く、頂に圓光を佩び、猶ほ滿月の如く、面貌端嚴にして、蓮華敷くが如く。形儀挺持なるがこと融金山の如し。雙足は平正にして、妙善安住に、身肢圓滿なること尼俱律陀樹の如し。常に愛眼を以て、諸の衆生を視る。凡そ佛を見る者、皆な利益を蒙り、方便して拔濟し、惡道を出離し、諸の世間に於て、與に等しき者なし。故に、如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號す。若し諸の衆生、淨戒を受持すれば、則ち如上の功德を獲得し、諸の如來と等しくして、異なる有るなく、善く能く一切有情を利樂す。故に布施の後に、彼の持戒を明かす。次第の行相は前に已に説くが如し。汝等比丘よ、常に一心に樂んで施戒を行すべし。人の爲めに顯示すれば、則ち爲めに福蓋を具足成就す。

福蓋正行所集經(終)

を以て煩惱を斷除し、大名稱を得、諸の衰患を離れて、究竟して妙菩提道を成就す。説くが如し。馬鳴智者は、淨戒を堅持し、善く法要を説き、現生に名聞義利を獲得し、復た天中に生れて、勝福業を受け、明慧種々の功德を増長す。當に知るべし、善く能く淨戒を持つ者は、猶ほ貧士の其の賢瓶を獲つて所求に隨つて皆な意の如くなるを得るが如し。常に當に精進して、恭敬守護して、師尊に事ふるが如く、疲勞の想なかるべし。淨戒を持つ者、亦復た是の如し。

世尊の説くが如し、清淨持戒は、則ち能く十種の功德を獲得す。一には持戒に由るが故に、凡て施爲する所、錯謬あるなく、煩惱を生ぜず、心常に喜悅す。喜悅に由るが故に、深心に法も樂む。法を樂むに由るが故に。身に輕安を得。輕安に由るが故に、勝妙樂を受く。妙樂に由るが故に、引いて禪定を生じ、實際を了知す。實際を了するが故、菩提に安住し、障染に棄背し、無我智に住す。則ち能く永く微細の煩惱を斷ず。我が生已に盡き、梵行已に立つて後有を受けず、涅槃界に向ふ。二つには持戒に由るが故に、所有の三業は衆罪を造らず。遠く惡趣を離れ、命終るに臨む時心に怖畏なく所、作の福業・衆善現前し、意に隨つて往生し、勝處樂を受く、三には、持戒に由るが故に、美名流布し、聞く者稱讚す。四には、持戒に由るが故に、睡れるる安らけく。覺めても安らかにして、身にも心にも惱みなし。五には、持戒に由るが故に、常に諸天の愛念守護を得。六には、持戒に由るが故に、大衆中に處りて、心に怯弱なし。七には、持戒に由るが故に、非人の爲に其の短を伺求されず。八には、持戒に由るが故に、諸の惡人を得るも、視ること親族の如し。九には持戒に由るが故に、所須に乏しきことなく、希求を假らずして、常に善人の恭敬供養を得。十には、持戒に由るが故に、所願は心に隨つて、皆な成就する得。若し最上種姓、大富長者・婆羅門の家に生るゝを求め、或ひは復た六欲諸天、乃至色界無色界天に生るゝを求め、或ひは離欲の阿羅漢果・寂靜解脫を求めんと欲せば、威な意の如くなるを得。是の如く持戒より、獲る所の功德は、譬へば、

ら、渴いて絶するも、他命を傷ふなく、應に世尊の戒律に違犯すべからず」と。林下に端坐して、渴を忍んで終る。是の縁を以ての故に、忉利天に生れ、佛を見て法を聞き、預流果を證す。此を則ち名けて清淨持戒となす。

優婆塞あり、久しく梵行を修す。忽爾として其の舎、火の焚く所と爲る。諸子を誡めて曰く、「汝慎んで蟲ある水を以て、其の火に沃ぐ勿れ。所以は何んなれば、我、水中の微細の諸蟲を護つて、貨財を顧みず。豈に少利の爲に、惡道に墮せんや。」と。此を則ち名けて、清淨持戒と爲す。

是の故に智者、應當に清淨持戒に安住して、畢竟して不清淨持戒を遠離すべし。當に知るべし、如來、世に出現して、常に樂んで一切有情を利益し、惡趣門を閉ぢて、天路に生るゝを示す。煩惱の薪を燒いて、貪欲の本を抜き、諸の衆生を化して、家を捨て、縛を離れて、皆吉祥安樂を獲得して、究竟して、生死の瀑流を超越せしめ、智慧の舟に乗じて、彼岸に到り、漸次に菩提涅槃を圓證し、大法幢を建て、諸の外道の我慢高擧を摧かしむ。諸の不善の行は、皆發心して、勇猛精進して、正法の水を以て、其の渴乏を洗はしむ。彼法を聞き已つて、教に依り學を修し、法財・功德の寶藏を積集して、神通に安住し、三有を出離して、勝義諦を了し、解脫處に住せしむ。是の如き持戒は、諸佛の讚する所なり。當に知るべし、是の人は世間眼の爲に、能く衆生を導き、安隱處に至る。亦た明燈の能く癡暗を破るが如し。清淨水の能く罪垢を滌くが如し。妙良藥の煩惱病を療するが如し。大醫王の、善く欲箭を抜くが如し。世の良田の功德の苗を生ずるが如し。善く能く懈怠の衆生を教示して、喜心を生じ、淨戒を樂んで持たしむ。

若し人樂んで不善業道を作せば、寃と同居するが如く、必ず損害に遭ふ。外道・婆羅門の法に依りて出離を求むるが如し。返つて殃咎を招く。當に往古諸佛の教法に依つて、袈裟を標相として、以て解脫を求むれば、則ち能く諸の不善根を銷滅して、諸の魔軍をして大怖畏を生ぜしむ。智慧力

清淨持戒と名く。

復た比丘有り、阿蘭若に住し、寂靜行を修し、里に入りて乞食す。悞ニヤハナつて淫舍を過ぐ。彼の女問ふて曰く、「持戒の比丘、何故に來るや。此は解脱處にあらず。若し和合を樂しまば、當に火坑に入るべし。」と。是の如き比丘は空閑に居り難し。善く觀察せず、彼の爲めに譏訶さる。此亦説いて、不清淨持戒と爲す。

二比丘有り、阿蘭若に住す。然るに實に徳なきに、自ら徳ありと謂ふ。諸の商人に隨つて大海に入る。暴惡の黑風、時に非らずして起り、波濤洶涌して、咸た驚怖を生ず。水族諸獸・鰲魚ツツ等交横往返して、觸れて船舫を壊ち、彼の諸人衆紛擾悲號す。或ひは浮いて濟るを得、或ひは沈溺を爲す。時に老比丘、水中に墜ち已つて、己の衰朽にして、命脱する能はざるを顧み、即ち浮囊を解き、其の同伴に與ふ。彼既に得已つて、多く珍寶摩尼珠等を取り、遂に其の命を喪ふ。此を則ち名けて不清淨持戒と爲す。

次に復た彼の清淨持戒を明かさば、一比丘あり。遠道を涉り、乃ち賊輩の爲に悉く其の衣を奪はる。中に一人有り、先に沙門と作り、其の戒を護るを知れり。彼の徒に語つて曰く「草を以て繫縛し、之を捨て、去れ。」と。比丘は専ら佛所制の戒を念じて、一切の草葉も、挽絶するを得ず、道側に伏し、敢へて少しも動かす。王の畋獵に遇ひ、遙かに見えて是れ裸形外道の、我慢して起たざるなりと疑ふ。即ち往いて之を語る。是れ比丘の、淨戒を護らん爲め、草葉を傷はざるなりと知る。王、希有を歎じ、乃ち之を釋かしめ、爲に飲食を設け、復た其の衣を施す。此は則ち名けて、清淨持戒と爲す。

二比丘右り、遠方より來り、往いて如來の舍利を供養せんと欲し、途、辛勤に涉り、水を求めて飲まんと欲す。第二の比丘も亦た渴乏すと雖も、水に蟲あるを驗し、其の侶に謂つて曰く、「寧ろ自

【三】悞。あやまる、あざむく、まどふ。

亦た損害せず」と。王曰く、「汝は佛戒に違ふて、國令に違拒す。既に用ゆる所なし。汝を養ふて何の益かあらん。」と。時に旃陀羅、復た王に白して言く、「我今決定して淨戒を毀たず。願くは王、試觀せられよ。帝釋諸天も尙ほ佛制に於て、敢て違越することなし。況んや我輩をや。」王曰く、「實に爾り。當に嚴刑を以て先づ汝の首を斷つべし。」旃陀羅曰く、「我今此の身、王に攝屬す。然るに後世に於て、更に餘身あり。此の持戒善根功德を以て、世間上妙の快樂を得べし。乃至諸天も意の願に隨つて往かん。未來世に於て、樂んで善法を求め、信進念定慧力を増長し、功德水を以て、貪等の三毒の垢染を洗滌して、淨盡して餘りなし。決定して當に預流等の果乃至如來淨妙法身を得べし。」と。是の願を作し已つて、大衆の前に於て、高聲に唱へて言く、「我、今此の身因縁より生ず。刹那の頃に於て、必ず當に就いて盡くべし。佛戒を護る爲に心に憂怖なし。」と。王、是の説を聞きて、益々忿怒を増し、即ち使者に敕して旃陀羅を驅り、尸陀林に於て其の命を斷つ。時に諸人咸な驚歎を生ず。乃ち相謂つて曰く、「此の大丈夫甚だ希有となす、佛戒を護らん爲に、其の軀命を捐つ。」と。

是の故に當に知るべし。一切衆生は小大種性の高下に拘るに非ず。但だ能く深心にして、諸の慚愧を具して決定信解す。而して毀犯せずんば則ち清淨持戒と爲すと名く。此の中に復た不清淨持戒を明かす。律中に説くが如し。一比丘有り、遠離の行を修して、巖谷に栖止す。忽ち夜中に於て自ら飡食を取る。忽遽に由るが故に、其の器を破る。時に衆聞き已つて、彼の比丘を誨す。「山間に處ると雖も、而も非時食なり。」此を名けて不清淨持戒と爲す。

復た比丘あり。本は婆羅門にて、後佛法に依り、出家修道して、曠野を樂しみ、己を單ひとりにして居る。慣習に由るが故に、常に夜分に於て、袈裟を摺こみ去り、踞すして坐す。先の徒屬あり、忽ち來りて省問す、乃ち彼に語つて曰く、「此に若し人なくんば、彼の菴羅林中に入り、果を採つて持ち來るべし。」と。弟子、教を受けて、即ち彼所に住す。乃ち王者の執縛する所と爲る。此を亦た説いて不

へず。擯遣して去らしむ。時に彼の比丘、心に憂惱を生じ、長者の前に於て、是の言を作す。「我先づ劣種姓に詣つて、諸の須ゆべき所を求むるを欲せず。今既に得るなし。住するも亦た愧なし。彼下族と雖も、亦能く喜捨す」と是の如く比丘、巧言詭詐して、多きを求むるを以ての故に、心常に熱惱す。

云何ぞ名づけて、安隱樂を失ふと爲すや。彼の持戒者は當に不苦不樂處中の行に安住すべし。外道尼乾子等は棘刺に坐臥し、五熱に身を炙り、虚しく受けて苦を勤み一として、果利なきが如きには非ず。若しくは樂に著するも亦た證する所なし。但だ放逸を増し、後苦報を招く。

云何ぞ名づけて、寡聞にして學ばずと爲すや。外に惡を防ぐといへども、内に明慧なく、一向顯愚にして、咨問する能はず。

云何ぞ名づけて、廢忘習誦となす。但だ飽食を思ひ、進修する能はず。腸胃を充飫して、不淨流溢す。實に沙門にあらず。自ら梵行を稱して、猶ほ鳴螺の、但に虚聲に馳するが如し。

是の如き十緣は随つて一種を具するも此れ即ち不清淨持戒と爲すと名く。諸の修行者、當に了かに知るべし。若し人深く心決定信解し、乃至小罪ありとも大怖畏を生ぜば、當に知るべし、是の人善く淨戒に住するなり。律中に説くが如し。一長者有り。市に一僕を得。既に幼にして且貧し。身を賣つて自濟ふ。然るに彼内心に佛戒を受持す。忽爾にして長者、殺生せしむ。僕即ち白して言く、「長者は正人にして云何ぞ、人をして殺業を爲さしむるや。善と不善とに於て要に分別すべし」と。佛戒を持する爲、敢て命従はず長者は感悟して、乃ち其の殺を止めたり。

復た國王有り、計羅迦と名く。常に嚴刑を以て、世を治む。若し彼の民庶、諸の過咎あれば、官者に擯屬して、悉く當に誅戮すべし。時に一人有り、當に誅せらるべきに臨んで、彼の旃陀羅、王前に稽首し、「我今發心して始めて佛戒を受けたり。諸の罪人に於て、誓つて殺を行はず。乃至螻蟻も、

云何ぞ名けて、攝取損害と爲すや。謂く國王・王子・大臣に於て、其の威勢を懼るゝも、常に當に乃至種々の諸惡律儀を遠離すべし。比丘設ひ渴乏の逼る所となるも、彼に應せずして、水を求めて飲むも、未だ煩惱を斷ぜず、未だ神足を得ず、自ら調ふる能ざれば、多く驚怖を生ず。

云何ぞ名けて深著染欲と爲すや。五塵の境に於て、邪思相續し、自性縱逸して、善修作を廢す。

云何ぞ名けて不求出離となすや。勝處を捨て、非處に趣き、復た勝處を毀ちて、五欲の樂を讚す。

云何ぞ名けて、常に懶惰を生ずると爲すや。數數過去の所作非義利の事を思念し、互に相ひ執諍して、己れの所有資生の具を恃んで、受用すること隨意にして、憍慢を生じ、多く耆年有徳の人に於て、敬を致す能はず、事に託して起たず。

云何ぞ名づけて、遍計希望となすや。謂く智識同梵行者に於て、互に相ひ詔讚して、苟も利養を求む。

云何ぞ名けて、退失正行と名くるや。樂んで諸惡を造り、戒法に違越し、善方便して對治道を起すなし。

云何ぞ名けて、邪を以て活命するとなす。己れ養ひ難きを畏れ、心に止足なし。律中に説くが如し。邪命の比丘、非律を作し、異相を矯現す。大衆中に於て、自ら己れの徳を矜り、多言にして耻するなし。猶ほ狂犬の如し。或は種族を恃んで、多く論議を聞く。或は非時に於て他の爲に説法す。少徳有りとも雖も、貪利の爲の故に、彼の聞法の者多く信受せず。人有りて言ふを聞くに、「某方所に於て、婆羅門大族長者有り、諸の衣服・種々の資具を施す」と。即ち彼所に至り、長者に謂つて言く、「我耆徳の爲に、當に最上奇妙の物を以てすべし。願くば先づ施されよ」と。是の時長者、誼競を生ぜんことを恐れ、其の意に違はず、之を給與す。僕吏見已つて、威な輕毀を生じ、施す所を與

界を了知すれば、本性は唯だ苦なり。猶ほ棘林の稠密にして越へ難きが如く、亦塵垢の有情を空汚して、正法水を以て、之を乾濯するが如し。是の如く觀察すれば、彼の蘊處界は、諸惑を生長して、愛樂すべからず。此に持戒を明すに、二種あり。一には不清淨持戒、二には清淨持戒なり。律中に説くが如し。二比丘あり。持戒に精進して、各一方に處り、善名遠く布く。時に諸人民、咸な其の徳を仰ぐ。共に彼所に詣つて、親近供養す。是の時王あり、迦尼瑟姪と名く。二比丘、淨戒を護持するを聞き、諸臣を従へて、往いて其の所に至る。彼の耆年を見るに、威儀整肅にして、禪定を修習す。乃ち敬心を生じ、先意問訊す。王曰く、「大徳よ、此の持戒するは、何んぞ求むる所を欲すや。」比丘白して曰く、「我が意來世國王と作らんと願ふ。」と。王、語を聞き已つて、忻樂を生ぜず。「云何ぞ持戒して、無慧にして揀擇し、返つて輪迴生死の纏縛に趣く。汝は諸天人民を誑惑するをなす。我今此に於て應に供養すべからず。是の如き持戒は、不清淨と名く。」復た新學比丘の處に詣る。王乃ち問ふて曰く、「汝今戒を持つて、何の願ふ所を欲するや。」比丘白して言く、「王の顧問を承る。我が求むる所は、菩提を成じ、群臣を利樂せんと願ふなり。」と。王、是の説を聞いて、心大に歡喜す。是の如き持戒は則ち錯謬にあらずして、諸の垢染を離る。名けて清淨となす。我今應に最上の供養を作すべし。是の如き沙門は廣大心を發し、帝釋諸天は皆な供養すべし。」と。時に諸人民は、王の稱讚を聞き、皆共に合掌して、比丘の足を禮す。乃ち彼の諸侍臣を顧みて曰く、「各珍とする所を持して、以て奉施せよ」と。此は則ち名けて清淨持戒と爲す。

世尊の説くが如し。十種の緣ありて不清淨持戒と名く。一には攝取損害なり。二には深く染欲に著するなり。三には出離を求めざるなり。四には常に懶惰を生ずるなり。五には遍計して希求するなり。六には正行を退失するなり。七には邪命自活なり。八には安隱等を失ふなり。九には寡聞にして學ばず。十には誦習を廢忘す。

卷の第十二

今此に略して持戒の相を明かさば、始め自ら諸根を任持密護して、飲食に量を知り、睡眠を減除し、常に楽しんで尊重して、諸の梵行を修し、昔の受樂を聞くも、思念するを喜ばず。復た能く沙門の功徳を顯示して、輪迴惡趣の過患を出離し、善知識に近いて、理の如く作意し、樂んで正法を聞いて、其の義に入解し、貪嗔癡を除いて、諸の煩惱を斷じ、虛忘の想を祛し、明慧を増長し、専ら解脫を求めて、疲勞を生せず。設ひ微細なる罪垢を毀犯することあるも、悉く能く發露して、覆藏せず。一切の財物は心に惜惜することなく、常に樂んで貧苦の衆生に惠施し、五欲は諸の過患多きを了知して、己れの眷屬の恩愛纏縛に於て、遠離の想を生ずること、之を深寃に譬ふ。獨り林野に處して、諸の憤鬧を捨て、長物を蓄へざること、諸の貧夫に異る。來つて法を求むるものあらば、慳嫉を生せずして、即ち爲に宣説し、其をして信解せしむ。能く慧劍を以て、煩惱の賊を除かば、諸の善人の尊重讚歎を得て、世間上妙の衣服・臥具・飲食の所供養を受くるに堪ゆ。諸の肉味に於て、亡想を棄絶し、及び世の名利は心に希ひ取ることなし。善不善の二種の業道に於て、若しは作し、若しは止め、決定信解して、自ら入解し已つて、我慢を除去して、鷦益心を以て、他の爲に演説す。諸の外道・尼乾子等を化して、亦た信解を生じて、佛法に安住せしむ。三衣より外の餘の所有物は、清淨心を以て之を施與せば、是の人は則ち聖種族に住すると爲す。身心清涼にして諸の熱惱を離れ、六處は眞實有るなしと了知す。猶ほ腫疽の物に覆はるゝ所となるが如し。常に煩惱の蚊虻の爲に啣食せらるゝ諸の有智者、勤めて方便を求めて、正念處及び八聖道に依り、善法の香煙に依つて、之を薰屏し、五蘊を了知すること、猶ほ芭蕉の如し。若し貪心を生じ、不慳想を作せば、彼の貪に由るが故に、正道を失墮す。先づ諸根を制して、散亂せざらしめ、漸く修習して三摩地に住せしめて、境

【一】祛。そこで、たもと。そでを擧ぐる形。？

酒戒を持つと名く。酒に三種有り。一に蘇囉と曰ふ。謂く、米麩を以て和合して造作す。二には梅
 哩と曰ふ。唯だ根果、或ひは花葉等を用ひて、汁を取りて成す。此の二種の酒は色香味を具し、風
 に因つて香を飄し、聞いて皆な飲まんと欲し、飲み已つて迷醉して、則ち放逸を生ず。三には摩鞞
 と曰ふ。此は略して説かず。是の三種の酒、若し飲んで飲む者を是人を名けて飲酒罪を得るとなす。
 又た雜稱迦經に説くが如し。摩鞞酒は應に造作すべからず。比丘飲み已つて、引いて放逸を生じ、
 財物を損費し、受用して充たす。瞋恚を増益し、或ひは相毆擊し、惡言相ひ加へ、諸の諍訟多く、
 己衣を失ふに至りて裸形にして愧無し。惡名流布して、善人遠く離れ、大乘經典を誦習することを
 廢忘し、智慧を減損し、無明を増長して、三寶を敬はず。父母宗親を族姓中に於て、崇重を爲さず。
 是の如く破戒は、如上の三種の酒を飲むに由るが故に、諸の過失を生ず。是の故に當に知るべし。
 殺生等に於て、復た造作せず。常に當に遠離すべし。」

告げたまはく、『佛法に入らんと欲すれば、先づ五戒を持て。謂く、殺生せず、不與取を離れ、欲邪行を遠ざけ、虚妄語、飲酒放逸を斷ぜよ。是の如き行相を各了知せよ。阿難在在處處、城邑聚落到諸善人清信士女あり、善法に依止して、樂んで淨戒を持ち、淨心を發生し、此の五戒に於て、其の形壽を盡して、能く奉持せよ。』

造作福業經に説くが如し。云何ぞ持戒は福事を成ずるを得るや。若し人能く一切有情に於て、殺戮を行ぜざれば、是の人を不殺戒を持つと名くるを得。殺生とは、初め心を起してより、決定して當に何等の物命を殺し、或ひは他をして殺さしむべしと、加行心を起し、正に彼の命を斷ち、剗割受用す。是の人を名けて、殺生罪を得ると爲す。

若し人他の所有の財物に於て、不與取を離るとは是の人、不盜戒を持つと名くるを得。偷盜とは、謂く、他物に於て、與へられずして取り、或ひは劫掠を行ひ、他の遺忘せるを隠して與へず、乃至初より加行心を起し、其の物を盜り已る。是の人を名けて、偷盜罪を得ると爲す。

若し人能く、一切染欲を離れ、或ひは他色に於て、侵犯を生ぜざるは、是の人を不姪戒を持つと名くるを得。欲邪行とは、非親族の家・街賣の里巷・染欲を生ずる處、皆な應に往くべからず。或親眷の、常に守護する所に、巧みに方便を設けて、其の珠璣を遺し、或ひは他の遭難せるに、強逼を生ず。是の如く心を起し、乃至所作あるは、是の人を名けて、邪欲罪を生を得ると爲す。

若し人能く虚妄の所説を離れ、發言誠諦にして、心口違はざるは、是の人を不妄語戒を持つと名く。妄語とは、謂く、見れども見ずと言ひ、實ならざるを實と言ふ。律中に説くが如し。如し比丘有り、遠方より來り、或ひは問ふて言ふ有り、『某人を見るや否や』と。彼、實に見已つて、答へて言く『見ず』と。是の如き等の類は妄語罪を得。

若し人、酒に於て、已を誡めて飲まず。或ひは風、香を飄すも、亦嗅ぐを欲せざるは、是を不飲

【三】即ち與へられざるを取

す。或は所得あり、或は所得なく、人の呵する所となり、諸の煩惱を生じ、其の聚落を出で、阿蘭若の伊羅樹下に至り、往返遊行して、因つて兩手を以て、其の葉を取る。是の如くすること數四、摘み已つて復た摘み、碎いて以て之を棄つ。時に佛知り已つて、彼の比丘を呵し、爲に戒相を説き、悔謝俾ま令しむ。彼信受せずして是の言を作す。『此れ無情の物。何の咎か之れあらん。』と。二の因縁に由つて、斯の苦報を受く。時を過ぎて乞食して、籠中に生る。信ぜざるに由るが故に、伊羅樹を生す。』と。

佛、諸の比丘に語る。『彼の伊羅葉龍王は少惡因を作し、今多苦を受く。自ら其の因を作して、自ら其果を受く。外の地界水火風界の、能く招集するに非ず。皆な内心の造作する所に由る。』

若し諸の有情、畢竟して樂んで非法の黑業を作せば、惡趣の中に於て、定めて苦報を受く。若し諸の有情、畢竟して樂んで清淨白業を作せば、人天中に於て、定めて樂報を受く。若し諸の有情、所作の業、善惡相參すれば、雜へて其の報を受く。是の故に比丘よ、彼の黑業に於て、畢竟して造る莫れ。彼の白業に於て、決定して修作すれば、果報卒かに至る。猶ほ瀑流の如し。善惡の業は影響して差ふことなし。頌に云ふ有る如し。

設ひ無量劫を經るも 彼の業は壞する能はず。

果報成熟する時

衆生決定して受く。

佛言く『汝等比丘よ、當に佛語に依りて、理の如く思惟すべし。諸の禁戒に於て、應に少しも犯すべからず。是の故に我今委細に毀戒の過患を分別して、爲めに有情をして深く怖畏を生じ、永く諸惡を斷じ、衆善を勤行せしむ。汝等比丘よ、此の經典に於て、人の爲めに演説して、福蓋を成就せよ。』

是の時、會中の尊者阿難陀白して言く、『世尊よ、是の持戒の相、云何ぞ了知するや。』佛、阿難に

り。時に諸大衆、久しく食を離るゝ者、是の惡狀を覩て、猶ほ驚怖を生じ、威な是の念を作す。『是れ何の有情にて、感報是の如くして、此に來るや。佛、大衆に語る。』此乃ち適變じて轉輪王と作つて、我所に來至す。起ち去つて本相を現せしむ』と。爾の時諸の沙門、佛説を聞き已つて、咎嗟懊惱して、默然として住す。時に伊羅葉龍王、既に龍身と作り、悲み啼いて佛に白す。『唯願くは世尊よ、大慈にて悲愍されよ。我、何れの時に此の惡趣を脱するかを記されよ。』と。佛言く、『今汝の爲に説かん。當に諦信を生ずべし。却後當來、衆生の壽命八萬歳の時、佛有ありて出世す。名けて慈氏と云ふ。彼の佛、汝經る所の時分、此龍身を脱するを記さん。』と。是の時龍王、佛説を聞き已つて、聲を擧げて號哭して、涙、河流の如し。佛、大慈を以て、善言誨諭す。『汝自ら咎むるも、徒らに悲花を増すべし。今此の會中久しく處する可きは難し。』と。時に彼の龍王、深く自ら刻責し、我が此の惡業は相似るものなし。願くば佛力を承けて、早く此の苦を離れん。乃ち誓を作して曰く、『是より已後、未來世を盡して、心邪まに思はず、放逸を生ぜず、乃至螻蟻をも殺害を生ぜず。』と。是の語を作し已つて、佛足を頂禮し、即ち會中に於て、忽然として現れず。

時に彼の阿難、即ち座より起ち、一心に合掌して、乃ち如來に問ふ。『此の龍王は先きに何の罪を作り、龍趣の中に墮せしや。』復た何の業に由つて、七頭あり、一一の頭上に伊羅樹ありて、動搖すれば痛苦あり、膿血交流るるや。唯だ願くば如來よ、我等の輩の爲に、其の因縁を説いて、罪犯を知らしめよ。』と。

爾の時世尊、阿難に謂つて曰く、『乃往過去賢劫之中、衆生の壽命二萬歲なる時、佛有り、出世す。迦攝波如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と名く。時に彼の龍王、佛法の中に於て、出家修道して、三藏の比丘となり、煩惱を厭怖し、遠離の行を修し、空閑處に於て、奢摩他を習ひ、定より出で已る。日已に中を過ぎ、彼の聚落に入つて、行いて乞食

廣く多く惡業を造作すれば、所感の果は其の苦量り難し。伊羅婁龍王因緣經に説くが如し。

是の如く我れ聞けり。一時佛、毘囉拏城施鹿林中、仙人隨處に在り、諸の大衆の爲に、法要を宣説す。時に伊羅婁龍王は佛世尊の彼かたじけなくに在つて法を説くを知り、清淨心を發し、佛所に詣りて、親近供養せんと欲す。即ち是の念を作す。『我が身は龍屬にして、諸の窳やく離多し。儻たまたま相會遇すれば、必ず損害を爲さん。』乃ち己身を變じて、轉輪王と作る。相貌端嚴、威徳自在にして、衆寶の環珞を以て、其の身を莊嚴し、妙緻蓋を持し、寶輦ひんに乗る、七寶千子内外に營從す。復た九十俱胝軍衆を以て、前後圍繞し。復た百千外道梵志・婆羅門等・諸乞巧者有り、皆た悉く隨從し、威神翊衛して、天帝釋の如く、即時に如來の法會に奔趨す。

爾の時世尊、諸四衆・天・龍藥叉・乾・闍婆等有りて、恭敬圍繞し、説法を爲す。時に彼の衆會、是の事を見已つて、皆な驚疑を生ず。前んで世尊に白す。『此を何王となすや。威徳乃ち爾しかるや。』佛、大衆に語る。『此れ人王に非らず。且く待て。須臾にして、自ら當に之を知るべし。』と。時に彼の龍王、佛所に至り已つて、頭面にて足を禮して、退いて一面に坐す。佛言く、『龍王よ、汝、昔愚癡にして、今此の報を受く。復た何の緣ありて、此に至れるや。宜しく應に速疾すみやくに此處を離れ、其の變現を捨て、本形を作し、復た此に來りて衆會に顯示すべし。』時に彼の龍王白して言く、『世尊よ、我輩は龍身にて、然も窳對多し。忽ち相逢へば、定めて災難を興す。是れに由つての故に、變化を爲すなり。』時に佛世尊、是の説を聞き已つて、金剛手大藥叉神に勅して、彼の龍王の爲、隨逐して守護し、餘處に至りて、乃ち本形に復せしむ。其の身長大にして、龜澁乾裂し、種々の惡相、積集して軀を成す。先業に由るが故なり。而して七頭有り、一一頭上に伊羅樹あり、彼の樹に由るが故に動搖し、苦楚あり、膿血交流して、極めて甚しく臭穢にして、無數の蛆蟲の嚼食する所となる、本形に復し已つて、還つて佛所に至る。彼の龍の首は囉囉拏城に在りて、其の尾の至る所は、相叉尸羅國な

【一】儻。たまたま、もし、
かりに、萬一。

【二】苦楚。くるしみ。

住して、多く諸物を乞ふ。王、語を聞き已つて、悉く之を與へず。時に近臣ありて、王に意に隨つて婆羅門に施すを勸む。王乃ち答へて曰く「慍む所あるに非ず。此の人に徳なし。故に與へざるなり。」佛言く「阿難よ、我れ亦是の如し。彼れ戒を破るに由つて、是れ法の器にあらず。故に爲に説かず。設ひ彼の爲に説くも領受すること能はず。器に竅あれば水を貯ふるに堪へざるが如し。縱使晝夜力を勤めて添へ汲むも、尋いで復た漏失す。是の破戒者は、功徳の法水を容受する能はざること、亦復た是の如し。設使少分も違して禁戒を犯さば、是の人亦た菩提分等の、種々の法寶に於て、成辨する能はず。當に知るべし、是の人の持する所の淨戒は圓満と名けず。復た增長せず。是の如き戒行は增長せざるが故に、解脫法に於て、亦た增長せず。解脫法に於て、增長せざるが故に、彼の獲得する所、寂靜道に非ず。但し名を以て解脫に相似すると爲す。若し戒法に於て堅持して犯さざれば、是の人則ち菩提分等の、種々の法財に於て、各各入解し、理の如く思惟して、安隱に住するを得。汝等比丘よ、此の經典に於て、常に樂んで受持し、人の爲に施戒の功徳は福蓋を成ずるを得るを演説すべし。

若し諸の比丘よ、正思惟に住し、善友に親近し、樂んで正法を聞き、能く世間の憂畏の熱惱を除き、惡法を遮遣して、生起せしめず。熾火を滅して遺與なからしむるが如し。若し諸の比丘、邪思惟に住し、放逸を引生して、心をして散亂せしむれば、則ち唯だ五欲の因縁を攝取す。是の諸の有情は煩惱處に生じ、決定して諸の功徳法を失壞す。非時の雹は其の苗稼を傷け、能く世間種種の災難を招くが如し。常に詔曲を懷き、慚耻するなければ、彼の白衣の爲に譏毀せらる。此れ法人に非らず。志意下劣にして、彼の沙門清淨善果に於て、心、希樂せず。諸の如來の甘露法水に於て、則ち飲む能はず。樂んで諸惡を作り、險道に趣くを求め、地獄・餓鬼・傍生の極惡の苦處を攝して、依止と爲す。若し佛言に於て、心に信受せずんば、少犯戒なりと雖も、則ち劇報を受く。何んぞ沈んや、

卷の第十一

此の中復た説く。破戒の人は、諸の如來所有の種種なる功德の善法に於て、成就する能はず。譬へば王女出で、貧士に降るが如し。彼の家に至りじつて、其夫に謂つて曰く、『我は是れ王女なり。欲する所意の如し。須らく上妙の燒香花鬘・衆寶の瓔珞・嚴身の具・庫藏の諸物をして、皆な悉く周備すべし。若し是の如くんば、我則ち此に住すべし。』貧士答へて曰く、『上の諸物の如きは家中に無き所なり。』王女聞きじつて、乃ち之を呵責す。『是の如き貧乏は我當に去るべし。』と。佛言く、『彼の破戒者も亦復た是の如し。最上清淨なる解脫の女を成就する能はず。亦た煖頂忍等の所燒の香を得る能はず。亦別解脫戒所成の花を得る能はず。亦禪定解脫所成の鬘を得る能はず。亦た菩提分等の種種の庫藏を得る能はず。亦た聞思修等の所成の智王を得る能はず。亦た最上最勝なる正等菩提を得る能はず。亦た緣覺聲聞を其の眷屬と爲すを得る能はず。是の破戒者は、善業なきに由るが故に、現生中に於て則ち福德なし。一切の善人は、同住するを樂はず。言説する所あるも、人信用せず。出世間所に於て、如來の功德の法財あらば、則ち爲めに永く失ふ。』

是の時會中の尊者阿難即ち座より起ち、前んで佛に向して言く、『云何ぞ世尊よ、弟子中戒を毀犯する者に於て、爲に甚深の法要を宣説せられざるや。復た攝授して擯斥をせられざるや。威な如來は大悲者に非ずと謂はん。佛、阿難に告げたまはく、『我、世間一切衆生に於て、平等に憐愍して、所説の法に於て、心に慍惜すること無し。彼の器に非ざるに由つて、堪任する能はず。故に爲に説かず。世間の智者の説法の如きには非ざるなり。諸の衆生に於て、違順の相あり。若し相違する者には、宣説を爲さず。拳に物を握り、之を秘して與へざるが如きには非ず。國王あり、大施會を作す。諸沙門・婆羅門等を召し、所須の物、皆な之を給與するが如し。婆羅門あり、餘方より來つて王前に

て言く、「此の破戒者は我が弟子に非らず」と。彼をして聞き已つて、過罪を差耻せしむ。

又諸の白衣、既に出家し已らば、當に沙門に依つて、清淨に住すべし。袈裟衣を著し、應器を執持し、精進の鐙を被て、多聞を修習せよ。返つて世俗に依つて、邪活命を作し、象馬に乗御し、身に甲冑を撰き、弓を執して矢を負ひ、軍陣の内に入る。是の如き等の比は、我が法中に於て、律儀を毀壞し、眼に視るを欲せず、譬へば世間の彩畫せる燈炬の如し。設使衆多なるも、暗を除く能はざるが如し。彼の愚癡人は無漏の聖智を發起する能はず、世の照明となる。亦復た是の如し。俳優の如きは妙衣冠を著し、衆人の前に於て、自ら王者と稱するも、然も彼實に第一娛樂なし。破戒の人は、袈裟を服し沙門の相を作すと雖も、則ち清淨出世の妙樂なし。又貧人にして、豪貴と詐稱して、大衆中に於て、高聲にして我は是れ長者なりと謂ふが如し。然も彼に實に隨意自在なし。彼の破戒者は假りに沙門と名くるも、則ち解脱の妙果を得る能はず。」

る。裸形にして家に歸る。時已に昏黒なり。既に門首に至り、潜かに牆下を窺ふ。彼の家人咸た賊至ると謂つて、杖を以て之を撃ち、而して目を傷けて、眼中に血流れて、地に悶絶す。時に惡蟲有り、上より墜つ。其の血腥きを聞きて、復た一日を食ふ。曉に向いて大人舎より出で、其の婿なるを知り、怪んで之を詰る。上事を具陳す。即ち其の婿の爲に、乃ち偈を説いて曰く。

『衣を失ひ及び目を壊ち、

人身何の所爲あらん。

既に承事に堪へず。

此に由つて遐とほに棄つ。

亦た佛弟子の如し。

寧ろ其の多聞を廢して、

戒に於て當に護持すべし、

破戒は目無きが如し。

是によつて知る。毀戒者は

假に名けて沙門と爲すも、

供養を受くべからず、

諸の善き功德を失ふ。』

此の中復た説く。『譬へば長者の如し。多子有り、常に訓誨を加へ、放逸なからしむ。即ち庫藏の種々財物。奴婢僕従を、悉く之れに付與す。此の如くは、則ち長く快樂を守る。其の諸子中、或ひは奢侈にして、女色に樂著するものあり。長者聞き已つて、即ち親屬を集め、苦切之を責む。少財物を以て、遣はして其の舎を出だす。復た之を誡めて曰く、『愼んで放逸して、汝の財を散壞する莫れ。後貧苦を受けて、他の棄つる所とならん』と。是の長者子、其の教に従はず、未だ久しからざるの間に、費す所都べて盡き、形容憔悴して、乞を以て自活し、彼の親族の惡み賤しむ所となる。時に父長者、見已つて憂惱し、心は則ち棄捨す。衆人の前に於て、高聲に唱へて言く、『此れ我が子に非ず。此れ我が子に非らず。』と彼をして聞かしめ已つて、深く慚惡を懷く。佛言く、『我れ亦是の如し、若し諸の弟子、禁戒を破毀して、無慚無愧なれば、即ち佛法の中を擯出して、亦た菩提分等の諸の功德の法・種種の聖財を付與せず。乃ち人天・沙門・婆羅門等の大衆の中に於て、高聲に唱へ

我が佛法の大海にも

終に其の屍を容れず。

彼の鎌田の中には

復た種子を生ぜず。

癩病榮纏すれば、

方に療治すべきが無き如し。

汝、諸の悪業を作して

何んぞ驚怖を生ぜざる。

亦た漏るる缸舫の如し、

自他豈に能く渡らん。」

佛言く、「破戒の人は堪任する所なし、多欲に由るが故に、心則ち多く求め、他色を侵犯して、常に驚懼を懷き、名聞を失壞し、善知識を離る。當に知るべし、此の輩は彼の堅者の、畢竟して少なる施功德もあるなきが如し。彼の破戒の人は貧しくして手なく、寶山に至ると雖ども、得る所なきが如し。不淨の瓶は滿ちて流溢するが如く、彼の陷穽は人見て遠く避くるが如く、室中の蛇は、人常に恐懼するが如く、好園林の中に、猛虎の躡るが如く、險惡道は、人の往くを欲せざるが如く、彼の破車は、運載する能はざるが如く、彼の惡人は、衆皆な擯棄するが如く、彼の毒蛇は、眼に視るを欲せざるが如く、尸陀林は、人多く厭惡するが如く、彼の狂象は、惡人の制する所の如く、竊盜人は、富者の忌む所の如く、猶ほ占博迦花を彩畫するが如し。彼に戒香なきも、亦復た是の如し。旃檀林に、萋麻樹有れば、其の臭相雜はるが如し。速かに當に斫伐すべし。假使百千の舌あるも、盡く破戒の過失を説く能はず。其の數を知らんと欲せば、邊際あるなし。破戒に由るが故に。一切衆生の平等の善法を増長する能はず。契經に説くが如し。一士夫あり。其の婿に謂つて曰く、「汝今車に駕して、林に入りて薪を伐れ。」と。薪を伐るが故に、乃ち其の牛を失ふ。因つて牛を尋ぬるが故に、人をして車を守らしむ。牛尙ほ未だ獲ざるに、車復た失ふ。是の人周惶して、處々推覓す。一池所に至り、飛禽有るを見、即ち其の斧を取つて、遠くして之を擲ち、禽を撃てども中らず、斧は池中に墜つ。衣を岸上に脱ぎ、池に入りて斧を求む。斧復た得ず。衣は人の偷む處とな

を生ぜざること、亦復た是の如し。又た林木の悉く其の本を伐れば、莖幹枝葉、復た滋茂せざるが如し。破戒の人、其の善根を斷ち、功德の法を壞つ。亦た復た是の如し。猶ほ枯井の如し。諸の渴乏者、其の水を求めんと欲するも、必ず得べからず。彼の破戒者は、一切の善人、其れに従つて法を求むるも、亦復た得べからず。旃荼羅は、王と爲るに堪へず、一切の人民は肯じて信伏せざるが如し。彼の破戒の者は、法を説くに堪へず。一切の衆生は聽受する能はず。譬へば人腐爛せる甘蔗に於て其の味を求めんと欲するも、終に得べからざるが如し。若し毀犯に於て、禁戒の人、其の功德を求むるも、畢竟して有るなし。又諸の白衣、彼の沙門の孤單にして累なし、寂靜にして安樂なるを見て、其の家を棄捨て、樂んで沙門とならば、彼れに正因なく、心決定せず、愚癡暗鈍にして、沙門と作り已つて、復た樂んで世俗の事業を經營し、染欲に耽著せば、禁戒を破毀す。時に彼の衆中、諸の耆徳あり、彼を呵責す。爲に偈を説いて言く。

『汝、佛の三衣を持し、

樂んで非法行を作す。

彼の淨衆を汚辱すること、

旃荼羅と異なるなし。

内心邪よこしまにして

五欲の諸境界を思惟して、

猶ほ彼の轡子の

常に水草を念ふが如し。

樂んで世俗の事を作し、

諸の珍異を貨易し、

其の價值を増減して

言説に誠實なし。

彼は則ち漏卮の如く、

其の心常に足らず。

少財利を求むる爲め、

虚詐の事を營構す。

譬へば蜂の花を採るに、

當に蓮花の林に依るべきに、

返つて荆棘の叢に入り、

諸の艱苦を托受するが如し。

鎗鋸・劍輪管索の種々の苦具、皆猛焰を出す。是の諸の獄卒、兇險卒暴にして、彼の罪人に於て少慈悲心なし。或ひは焼き或は煮、或ひは斫り、或ひは鋸き、尋いで即ち命終る。須臾にして復た活き、或ひは復た驅けて燔煨屍糞地獄の中に入り、足を下せば焦爛し、舉ぐれば復た故の如し。遙かに林木を見て、即ち往いて逃避し、到り已れば枝葉皆た鋒刃と爲り、上より墜ち、其の身を斫截す。諸鷲・獸虎・兕・師子・摩竭魚等ありて、口を張り、火を吐き、齒牙鋸利にして、造罪の有情を咀嚼呑噉す。大鐵樹有り、娑拉末黎と名く。上に百千の鋒刃鐵刺有り、一一の鐵刺、長さ十六指なり。時に彼の獄卒は罪人を驅逐し、其の上下するに隨つて、之を逆刺す。諸惡飛禽は競ふて其の上を集り、利喙堅爪にて、或ひは鷓鴣或ひは鴈し、獄卒或ひは大熱鐵丸を以て、鈴を以て口を擊き、逼つて之を呑ましむ。或は洋銅汁を、其の口中に灌ぎ、咽より徹下すれば、悉く皆な焦爛す。或ひは鐵釘を以て、其の舌を釘け、復た鐵型を以て、牛をして之を耕さしむ。或ひは罪人を大鐵臼中に投じ、復た其の杵を以て之を擣碎す。或ひは鐵匣を以て、其の身を夾み、耳鼻口中に悉く皆血を流す。一切の身分は破壊して餘りなし。大炭坑あり極めて深く、炎熾にして、彼の罪人を以て、其の中に擲入すれば、倏然の間に、變じて火聚となる。時に諸の獄卒、威な共に呵責す。汝昔時に於て、多く諸惡を造り、心、慈行なく、禁戒を破犯して、今其の報を受く。自らまさに之を知るべし。此の中の極苦は堪へ難く、忍び難し。長時に罪を受け、業盡きて方に出づ。是の故に佛勅す。『汝等比丘よ、常に此の經に於て、受持讀誦し、人のために演說して、施戒を修して、福蓋を成ずるを得しめよ。』と。

佛言く、『彼の破戒者は彼の惡慧に由つて、内心思構して、對治を起さず。熱惱逼迫して衆罪を造作するは、猶ほ乾枯せる樹穴の中に之の炎火を置けば、必ず燒く所となるが如し。敗種子を良田に植うと雖も、畢竟して其の芽を生長せしむる能はざるが如し。彼の破壊の者は、佛法田に於て善芽

【四】 踐、をどる、行くことはやし。

云何布施の後、即ち持戒を云ふや。此れ、諸經に依りて次第することは是の如し。又諸の衆生、放逸にして樂に著するは、多くは内心に由る。自ら邪よこしまに思惟して、隨順して造作し、乃至現行して、流れて身語に至り、禁戒を破毀す。衆生をして發起し對治せしめん爲の故に、布施の後ち持戒の相を説く。若し佛弟子及び諸の白衣、彼の禁戒に於て、堅持して犯すことなければ、此を是れ清淨持戒と名くと説く。若し諸の衆生、邪思を發起すれば、身語意の業に、衆多の罪を造る。衆生を殺害し、人の命根を斷ち、他の所有物を、與へずして取り、欲染に耽著して、心暫くも捨つるなし。妄語・綺語・惡口・兩舌・大邪見を起して、因果を撥無し、父を殺し、母を害し、阿羅漢を殺し、惡毒の心を以て、佛身より血を出し、和合僧を破り、塔を破り、寺を壞ち、衆僧の物を盜み、淨行尼を汚し、諸の善人に於て、喜んで罵辱を生じ、常に樂んで聚集して無義語を説き、教を輕んじ法を慢おごりり、世務を貪營して、邪活命を爲し、諸惡業を造る。魁膾獄卒、屠殺し、魚を捕へ、穿窬抄劫し、乃至貧人の微少なる財物も、亦た剝奪を行ひ、他に毒藥を與へ、衆生を損害し、象馬牛等を樂んで犍槓をなし、聚落を破壊し、林木を斫伐し、磔毒を發言し、賢善を譏刺し、詐つて威儀を現し、其の心詭曲にして、善を不善と説き、與ふるを與へざらしむ。衆罪を造り已つて、命終の時に臨んで、種々の苦相、皆悉く現前し、讖既に滅謝して、惡業隨逐して、地獄の中に墮して、極重苦を受く。地獄に四有り。一に情熾と曰ふ。二には屍葬と曰ふ。三には劍林と曰ふ。四には灰河と曰ふ。是の四地獄を、名けて近邊と爲す。復た八熱根本地獄あり。一を燒然と名け、二を極燒然と名け、三には衆合と名け、四には號叫と名け、五には大號叫、六には炎熱と名け、七には極炎熱、八には無間と名く。時に彼の獄中に、諸の獄卒有り、厥たの狀醜惡にして、甚だ怖畏すべし。或ひは牛頭・鵝象頭等を作し、其の形長大、肥壯にして力多く、身皮黑澁にして、髮毛黃赤なり。眉を鐵め、目を怒らせ、鼻を塞ふさめ、唇を韜たし、兩臂は堅硬にして、手に鐵棒を執り、或ひは利斧を持ち、槍戟

【一】 撥、はらふ除くこと。

【二】 囊、かぶぐ、ちぢむ。

【三】 韜、あつし(厚)、たらす(垂)。

以て、春雷の震ふが如く、是の言を作す。「汝、來世に於て、當に作佛すべし。能滿衆生志願如來。應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と號し、十力を具足し、諸の魔衆を破り、其の土清淨にして廣大富樂なり。時に虛空中に諸天子有り、妙香花を雨らして供養を爲す。普く佛世界の一切の有情は皆信心を發し、樂んで福行を修せん。」と。爾の時世尊、偈を説いて言く、

『汝、未來世に於て

生死の海中に於て

無數劫を過ぎ已つて

慧眼淨くして垢なく、

相を具し、光明を放ち、

一切衆生をして

天人・大衆中

能く有情を調伏して

第一導師と爲り、

最上菩提を得て、

勝功德を積集し、

諸の沈溺を拯濟し、

當に佛道を成すべし。

一切法を現證す。

世間の杲日の如し。

三毒の黑暗を除かしむ。

最勝にして上に過ぐる無し。

皆梵行を修せしむ。

一切智を具足し、

蓮華の水より出づるが如し。

爾の時世尊、彼の長者の爲に、大衆中に於て佛記を授け已る。時に頻婆娑羅王國內の人民は咸な信心を發し、未曾有を歎す。佛等に於て専ら修行を修するに由つて、人天の中に於て、常に主宰と爲り、大威力あり、常に大悲を以て、一切衆生を利益し安樂せしむ。無上菩提は決定して獲得す。是の故に佛は諸比丘等に勅して、此の經典に於て、常に當に受持して人の爲に宣説すべし。

廣く修行を明かすことは、繁を恐れて且く止む。持戒の功德を今當に顯示すべし。

卷の第十

是の時長者復た伽陀を以て、佛を稱讚し已つて、誠實の言を發し、大誓願を作す。「我が所修の善根功徳を以て、願くは未來世、佛道を成ずるを得ん。亦た世尊の如く、三十二相八十種好を具足し成就して、無碍智・無上の法樂を以て、能く衆生貪恚癡の病を愈やし、親無き者に於ては、爲に主宰となり、黑暗の者に於ては、爲に照明となり、未だ調伏されざる者に於ては、善く調伏せしめ、未だ信解せざる者に於ては、信解を生ぜしめ、未だ安隱ならざる者に於ては、安隱を得しめ、未だ涅槃せざる者に於ては、涅槃を得しめ、畢竟して生死老病死憂悲苦惱を出離して、威な天に生じ、妙快樂を受けしむ。復た能く八聖道行を勸修し、四聖諦法を開示宣暢して、彼をして聞かしめ已つて、心に悟解を得て、佛法僧の種種の功徳を讚し、無量の智慧あり、自性清淨にして廣大なり、威神あり、能く勝さるものなし、能く輪廻生死の苦惱を抜き、方便誘導して解脱城に入り、漸次に諸の功徳法を修せしめ、淨戒を守護して、奢摩他毘鉢舍那を修め、四無畏及び四神足、四正勤等に於て諸の解怠を治し、四念處に於て明記して忘れず、四無量心ありて、平等に修習し、五根力に依つて、五趣障を斷じ、五蘊の相を了し、自他同等にして、六波羅蜜を具足圓成して、七聖財を以て、普く一切に施し、淨戒足を修して、七覺花を踏み、一心に七方便觀に安住して、八聖道支を分別演說し、善く能く九次第定を修習して、十力を具足すれば、名は十方に聞え、十自在を得、乃至成佛せん。

爾の時世尊、彼の長者を見、大衆中に於て誓願を發し已つて、讚じて言く『善い哉、汝今眞に是の人中の大龍、人中の師子、最上最勝にして、人中の大仙、諸垢染を離れて、白蓮華の如し。能く一切衆生を運載するに堪へ、能く無上菩提を荷擔するに堪ゆ。是の時世尊、金色の手を舒べて、蓮華の聞くが如く、指間網絛は其の紋巧妙なり。父の子を撫づるが如く、長者の頂を按せて、梵音聲を

淨戒を持するに由るが故に

善く衆の魔怨を屈し、

大智大悲を具して、

諸有情を憐愍して

最勝の調御師にして

善く衆の毒箭を抜きて

大神通を顯現して

八聖道を開示して

是を大商主と名く。

是を大智者と名く。

生死の暴流を截ぎ、

世尊は大導師なり。

相を具する身は金色に、

諸の衆生を調御し、

永く諸の不善を離れ、

雲の虚空に住して

一切有情をして

如來大聖尊

最上安隱に住し、

白心を調伏し、

應に妙供養を受くべし。

本誓願を捨てず。

威な憂苦を離れしむ。

三界に倫匹するものなし。

三有の纏縛を斷ち、

能く諸の異見を摧く。

諸梵行を修せしむ。

能く大施會を作す。

爲に世間の眼となる。

速に能く諸惡を遠け、

安隱處に至るを得。

喬答摩勝族にして

見る者厭足あるなし。

正教に入解して

清淨心ありて垢なし。

甘露の法味を注ぐが如し。

善根の種子を滋たしむ。

及び諸の比丘衆は

能く彼岸に到る。

如來の身相は金聚の如く、

膚色は猶ほ占菊花の如く、

雙臂膝圓にして極めて潤澤なり。

輪印蔽幅輻

胸廣きこと猶ほ師子の臆の如し。

腹量平滿にして其の身に稱ふ。

雙膺は猶ほ仙鹿王の如く、

右足先づ擧げて印文を現し、

如來の世間に出現するは、

能く衆生のため吉祥を作す。

是に於て長者、偈を以て佛を讚し已つて、心大に歡喜し、信力堅固なり。大衆中に於て重ねて偈

を説いて言く、

『牟尼十方尊は

永く煩惱の垢を離れ、

最上勝族の類にして

勇猛大精進して、

無畏の釋師子にして

微妙法を成就して

三界の苦海に於て

戒を以て根本と爲し、

堅固に充實して與に等しきなし。

亦羸瘦して筋脈を現はさず。

掌紋は衆の形像を顯現し、

寶幢寶瓶及び魚等を具足し、

喜旋の徳相は分明を畫し、

臍は深くして右旋し、中圓淨なり。

行くに迴顧するなく、身俱に轉ず。

安徐無畏にして師子の如し。

日の空に騰りて普く明照するが如し。

天及び非天咸な信禮す。』

能く諸の魔網を破し、

諸根常に寂靜たり。

日親甘蔗種なり。

諸の過失を覺悟す。

諸の功徳を具足す。

衆生の爲に開示し、

諸險難を輪迴して、

畢竟して能く超越す。

瓔莊嚴して、大寶香を燒き、躬ら往いて迎奉す。長者所有の内外の親族、各名花を齋らし、滿掬して散す。時に佛世尊は彼の宅に詣り已つて、堂の中央に於て、佛の爲に座を設け、上妙なる罽纒に重ねて柔軟なる雜綵の茵褥を敷きて、遍く地に布き、寶幢を行列し、珠網四垂し、諸の妙幡を懸け、衆色練錯し、百千の寶鈴を其の上に鋪綴す。微風に動搖して、聲韻和雅たり。眞珠の花縵、遍く寶幔を垂れ、塗香末香をたき、瓶の淨水を澡ぎ、排備し畢つて、命じて座に陞ほし、即ち新好の上妙白紺を以て、所著の衣を裁ち、跪いて以て佛に奉す。然る後上首の大阿羅漢及び彼の新學の諸比丘等は其の堂中に入り、次第にして坐す。諸の飲食味中の上味を以て、佛及び僧に施し、皆な悉く充足す。食し已つて各各鉢を收め、手を淨む。時に彼の長者、十指掌を合せ、尊顔を瞻仰し、偈を以つて讚じて曰く。

如來は殊妙相を具し、

首髮修綴し、雜亂せず。

如來の額は廣く復た平正にして、

眉間の白毫は常に右旋し、

如來の兩目は極めて清淨にして

修廣妙好にして常に照明し、

如來は四十齒を具足して、

長廣なる舌相は妙にして思ひ難く、

唇は寒縮ならず下垂せず、

是の如く大遷の面は圓滿なり。

譬へば開敷せる妙蓮花の

隨形妙好遍く身を嚴にし、

光澤あり紺青にして蜂王の如く、

亦缺減なく、極めて堅固なり。

秋の滿月の光照耀するが如し。

睫は牛王の如くして騫動せず。

俱那花の愛樂すべきが如し。

潔白齊密にして珂雪の如く、

鉢羅奢花の紅に類す可し。

鮮潤にして猶ほ頻婆果の若し。

耳輪柔軟にして相稱す可し。

諸の垢染を離れて觀て厭くなきが如し。

よ。佛、彼を慫むが故に、即ち爲に之を受く。復た百千最勝の龍象を以て、如來に奉施し、及び百千殊妙の天女を以て、蓋を持ち、拂を執り、扇ひで涼風を播がし、以て諸大弟子に承事を爲す。復た百千乾闥波衆を以て妙音樂を奏して供養をなす。

時に王舍城に一長者あり。其の家巨富あり、財寶無量なること、多聞天王に比するに、猶ほ以て勝れたりとなす。然るに彼の長者、深く邪見に著して、外道尼乾子の法を信受せり。是の事を見已つて、心に疑惑を懷く。是の時尊者大目乾連、彼の機の熟するを知つて、即ち往いて化導し、爲に法要を説いて、佛の功德を讃ふ。彼、法を聞き已つて、心に悟解を生ず。尊者に白して言く、「我、今發心して、如來に歸依す。往いて親近して恭敬供養せんと欲す。」と。即ち尊者と同じく佛所に詣り、頭面禮足して一面に住立す。尊者、佛に白す。「此の大長者、邪を捨て、正に歸し、始めて信心を發す。今佛及び衆僧を供養せんと欲す。唯願くは大慈にて彼の勤請を受け玉へ。」と。佛、是を知り已つて、默然として之を許す。時に彼の長者、佛の受請を知り、心大に歡喜し、匍匐して還る。

即ち無數の種々の珍寶・上妙繒綺を以て、其の居を嚴飾し、門樓堂閣、皆な新淨ならしむ。精妙なる百品の飲食を造作して、成辦し既に畢り、即ち使者を遣はし、前んで世尊に白す。「食時將さに至らむとす。唯だ願くは大慈もて我が微供を受けられよ。」と。爾の時世尊、僧坊より出づ。威德自在に、相好端嚴に、身は光明を放ち、日の赫奕たるが如し。諸の弟子・大阿羅漢を將い、諸根寂靜にして、心自在を得。進止詳雅にして、來りて其の舍に詣る。復た百千の天子・天女あり、身意泰然として、諸の散亂を離れ、旃檀を身に塗り、恭敬圍遶す。諸の人民有り、是の事を見已つて、未曾有を怪み、來つて長者に白す。復た百千の清信士女有り、心に歡慶を生じ、彈指して作禮す。各と最上堅黑旃檀を持ち、然して以て供養す。燒く所の香、百千斛に過ぐ。復た無量の上妙なる音樂を奏し、清婉嘹唳として、聲、地に震ふ。時彼の長者、諸の幡蓋を以て、次第に安布して遍く露帳を張り、珠

吠琉璃等を以て、重門・廊廡戸牖・宮殿樓閣を造作し、珊瑚を柱となし、種々の寶物を以て之を裝校す。復た衆寶を以て、諸の珍禽を刻し、空中に懸處す。勢、翔舉するが如し。無數寶鏡は周匝して垂挂し、覺徹して垢なきこと、燦として星月の如し。種々の天衣は光潔柔軟にして、黄金を架となし、以て其の上に敷く。金剛の寶鬘・眞珠の花鬘・雜圓行列し、以て莊嚴となす。衆の名香を燒き、氛氳散徹す。種々の燈を燃して、晝夜明照す。是の如き供養は世に未だ見ざる處なり。其の園中に於て、處處に皆な龍自在花・占博迦化・隅嚕摩花・拘吒波花・無憂樹花を植え、周遍開敷して、甚だ愛樂すべし。花林の中に於て、珊瑚亭有り。門墮廳檻・剗削奇巧にして、皆な衆寶を以て、裝校嚴飾し、微風、花を吹いて、香は遠邇に聞ゆ。諸の天女有り、其の中に遊止し、上妙珍琦を以て璣珞と爲す。獸は珠佩を銜み、其の鳴くや珊瑚たり。林中に復た諸藥叉女あり、形容端肅にして、競ふて共に馳せ觀る。鬘は寶花を遺し、迭に相嬉笑す。復た廣大清淨なる池沼あり。衆寶合成し、香水彌滿す。池中に復た大寶蓮花有り、白銀を葉と爲し、黄金を莖と爲す。諸妙天女は其の中に住立し、動容、樂を作し、妙歌舞を献す。復た無數の金色の蓮花有り、優鉢羅花・拘沒耶花・迦訶羅花は照耀芬敷して、香氣薰洽せり。諸の水鳥有り、鸕鷀鳧鴨、翔けて花塙に集り、其の羽翰を整ふ。諸の戲魚有り、往來游泳して、花に觸れ、浪を翻へし、諸の鷗鴨を驚かす。周匝するに皆な金・銀・玻璃・及び諸の珍寶を以てし、階陞を爲す。池岸復た劫波樹林有り、條を修め、水を拂ふ。密葉、蔭を交へ、諸の妙花鬘、相間開發す。無數百千の士族人民、富樂莊嚴して、衆の伎樂を作し、往き返りて觀賞して、障礙あるなし。

時に彼の天主、佛世尊の爲に、精舍を造立し、月に彌りて方に畢る。須ゆる所を營み辦じて、闕乏なからしむ。種々の庫藏、悉く皆充溢す。前んで佛所に詣り、是の言を作す。『此の地吉祥にして、廣博嚴淨に、歡喜園と、正しく等しくして異なるなし。唯だ願くは如來、此に屆りて安居せられ

し、此の施は是れ最勝友なり。此の生と他世とに、常に其の作をなす。當に知るべし、此の施は、好種子は一切時に於て意の如く果を得るが如し。當に知るべし、此の施は、妙階梯の能く天中に墜り、諸快樂を受くるが如し。當に知るべし、此の施は、猶ほ燈明の、能く俄鬼の、慳吝黑暗を破り、惡趣の中に於て、能く濟拔を爲すが如し。險難處に於て、能く救護を爲し、生死の海を越へて、能く彼岸に到る。若し諸の衆生、是の如く知り已つて、數數清淨作意を發起し、勤めて布施を行じて、相續して斷たず。諸の所有に於て、心に慍慍なく、亦枉費せず、深く覺悟を生ず。此等は皆な不慍の物となす。畢竟して樂んで清淨施業を修す。是に由るの故に、美名返はなむかかに布き、見者忻慕して、常に善人の依止を得て共に住す。大衆中に處りて、心に怯弱なく、善く威儀に住し、施の功德を讚せば、能く富足を招ぎ、免れて惡道を離れて、天上に生ずるを得。解脫城に趣きて、他をして信解せしめ、慍の垢穢を離る。當に知るべし、此の人は、是れ大菩薩なり。是れ善知識、是れ大丈夫なり。能く有情の眞實の善根を長ず。一切衆生應當おつたがに往詣して親近供養し、樂んで正法を聞き、理の如く修作し、出離の道を求むべし。』と。

上に説く所の如し。若し佛等に於て、専ら修行を修すれば、定めて其の報を獲とく。設使一菩薩に遇はざるも而も能く是の如き施心を任持すれば、所感の報前の如く異ならず、是の故に世尊方便顯示して、諸の衆生をして、次第に行學せしむ。

爾の時世尊、遊化依止して、王舍城、迦蘭陀竹林に在り。時に尊者大目乾連、是の思惟を作す。今は世尊、諸聲聞・大弟子衆と、此の林中に住す。當に須しく清淨僧坊を建立すべし。是の念を作し已つて、帝釋處に至り、白して言く『天主よ、敢て仁者を募り、王舍城、迦蘭陀竹林に於て、佛世尊の爲めに精舎を造立せよ。並びに諸弟子・大阿羅漢をして、同じく此に安居せしめよ。時に天帝釋は是の説を聞き已つて、心大に歡喜し、『唯然り、教を受けん』と。即ち無數の金銀珍寶・帝青摩尼。

卷の第九

若し佛等の最勝福田に於て、専ら施行を修すれば、定めて其の報を獲。是の如く乃至、現に世間を見るに、王者の貴く、尊崇なること比なし。首に寶冠を頂き、諸珍間錯せり。耳環臂釧は、金鑿交鑿にて、容儀鮮白にして、相を具すること端嚴なり。珠璣寶璽を以て、其の服を飾る。居る所の宮殿は、高廣宏麗にして、重樓戶牖は、諸の奇巧を盡す。衆色の繪帛にて、遍く露幔を張る。瑞獸師子。俱積羅鳥は之を籠檻に置き、以て玩好と爲す。城墉は峻峙し、力士は環衛す。象馬車乘は、往來して沓を合す。居る所の民庶は安隱豊樂にして、諍訟・剽竊連竄・種々の燒惱・怖畏等の事有るなし。處處に皆妙沙羅樹・多摩羅樹・占博迦樹・無憂樹等有り。枝葉花果は茂盛して愛すべし。王の至らんと欲する所、四衢道に於て、塵穢・瓦礫荆棘を屏去し、衆の香水を以て、其の地に泛灑し、百千の伎樂・簫笛箏篋、鼓を撃ち、貝を吹き、前後に導從し、王は龍象に乗り、威德特尊たり。最上無垢の牛頭旃檀を以て、磨いて以て體に塗り、其の香遠く聞ゆ。絳綃を被服して、日の初めて出づるが如し。右手に特殊の妙白拂を執る。吠琉璃寶を以て、其の柄となし、妙繖蓋を張り、黄金を幹となし、種々の寶物を以て、裝治し華煥なり。時に彼の域中の、一切人民は歡喜合掌し、同音に稱讃して、衆の名花を散じて、地に遍布す。諸の士族あり、或ひは巧思を裁き、作りて詠歌と爲し、徳化を紀揚す。王、是を聞き已つて、倍悦豫を増す。是の如きの勝報は施の得る所に由る。此を説いて勝福田に於て、専ら施行を修し、福蓋を成就すると名く。

云何ぞ布施するや。諸の有情をして、一向に世間の富樂を獲得せしめ、殊妙の五欲の境界を受用す。應當に了知すべし。是の如き施業は、唯だに廣大富樂を招致するのみならず、乃至無上智をも、亦た能く成就す。當に知るべし、此の施は堅固藏と爲す。水火盜賊の壞す所とならず。當に知るべ

能く諸の有情をして

我今少善を以て

悉く醜陋の因を除き、

見る者は意の如く得しめん
普く諸の衆生に及ぼし

皆な端嚴の報を獲しめんことを。

佛言く『賢女よ、我自讚せず。妄語を作さず。供養を求めず。諸の衆生の受くる所の業報に隨つ

て、大悲を起して救護を爲す。』即ち偈を説いて言く。

『我、世間調御師と爲り、

名稱及び利養を求めず、

善く能く彼の五欲の幢を摧き、

威な衆生をして心寂靜ならしむ。

三明二行悉く具足して、

當に人天と吉祥を作すべし。

我、已に衆の魔怨を降伏す。

畢竟して能く勝つ者有るなし。

永く三有の諸過患を離れて、

熱惱を生ぜずして心解脱す。

及び彼の習氣は盡く餘りなく、

世間の廣供養を受くるを得たり。

設ひ衆生有りて來つて惡を加ふるも

其の心動ぜざること虚空の如し。

誓つて當に彼の凡愚を荷負し、

圓明無漏の智を證するを得べし。

若し比丘四衆等有りて

咸我所に來つて樂んで法を聞かば、

皆諸の律儀を具足せしめ、

決定して智者と爲るを得べし。

我は是れ淨飯王の太子にて

樂んで苦行を修して山谷に栖み、

生老病の苦源を脱するを得、

是に由つて無上道を成ずるを得たり。

彼の王女は佛世尊に於て淨心を以て、布施するに由つて、現身に端嚴の色相を獲得す。若し人樂んで最上の快樂を求むれば、當に佛所に於て清淨に供養すべし。是を佛説福蓋正行と名く。汝等比丘よ、常に樂んで施戒定を受持し、當に勤めて修學すべし。』

是の如く佛の身相は

或ひは謂ふ、妙金山の

猛風の吹く所と爲るも、

或ひは謂ふ、阿修羅は

彼の金輦輿を墜して

或ひは謂ふ、帝釋の幢は

挺特復た爛爛にして

或は謂ふ、多聞天の

衆寶を以て莊校するも

或は謂ふ、持地佛母は

種種の光明を放つも、

佛、化を施し已つて、倏然として隠没す。時に彼の王女、加趺して坐し、一心に專注して、佛身を想念す。是の時長者子、先きに園中に在りて、諸の親友の爲に、飲むを逼られて酔ふ。衆相議して曰く『彼の手より易く門鑰を取り、疾く其の舎に往いて門を開きて之を視るべし』と。乃ち彼の妻を見るに、狀、天女の如し。咸皆愕然たり。覺へず作禮す。長者子歸り、其の端正なるを見る。婦、上事を以て夫に白して知らしむ。『今佛世尊は、最上の福田なり。我今復た往いて恭敬供養しまつらん』と。佛事を作し已つて、乃ち自ら誓つて言く。『若し我此の身、所有の惡業は、斯の醜報を招くも、願くは復た受けず、乃至世間一切衆生も、醜陋の身を離れ、皆な端正なるを得んことを』と。即ち佛前に於て、重ねて偈を説いて言く、

「世尊の妙色相

莊嚴皆な具足せり。」

比況して知る能はず。

一峯極めて峻峙にして、

巖然として此に住す。

天主と交戦して

忽然として此に現す。

五 渾金の成する所、

忽然として此に現す。

微妙なる寶樓閣は

忽然として此に現す。

吐いて妙寶藏を出し、

忽然として此に現す。』と。

【五】 渾金、まじりある金。然しこゝでは渾身(全身)の如く「大なり、同じ、全き」の意に用ひたるか。

諸の魔怨を降伏して、

忍を堅甲冑と爲し、

善く彼の智箭を發し、

八解脱を池となし、

無垢精進の水あり、

勇猛に諸過を離れ、

平等の法藥を施して

熾盛なる威徳を具して

功徳心を増長して

善く威儀に住して

拘嚙羅花の如く

怖なく垢染なく

一切縛を解脱して

牟尼大牛王は

能く諸の衆生の

紅僧伽梨を服して

我諸の譬喩を以て

金多羅樹の

亦た融けたる金柱の

又彼の金聚は

彼の樂鹿を嚙むが如し。

慈力を以て弓となし、

永く漏惱の賊を害す。

正行を隄岸と爲し、

覺意の蓮花を開く。

三有の根を拔除し、

貪瞋癡の病を愈す。

相好ありて莊嚴し、

群有を荷擔す。

諸根、散亂するなし。

見る者愛樂を生ず。

最勝心は寂靜なり。

一切智を成就す。

世間に與等なし。

或ひは病、或ひは憂惱を救ひ、

堪然として動かす。

淨心にて稱讚す。

聳幹脩（たか）く且つ直なるが如し。

光明極めて晃耀なるが如し。

塗るに旃檀泥を以てするが如し。

くが如し。時に彼の如來、彼の異見を摧しく、論議して勝を爲し、大神通を現し、阿迦尼吒天に上昇す。其の中所有の一切衆生は皆悉く佛の功德を稱讚す。一切世間に能く勝るゝ者なし。又復た最勝離垢無見頂相烏瑟尼沙を顯現し、右旋し紺青にして、潤澤愛すべし。復た眉間の白毫相の光を放ち、秋の満月の如し。是を如來第一の功德となす。梵天の小善の感ずる所に同じからず。是れ佛の利他の大悲より起る所、設ひ諸の衆生、微塵聚の如きが、正思惟に住するとも、能く彼の烏瑟尼沙を測るなし、剛に非ず、柔に非ず、成にあらず、壞に非ず、念に非ず、暇に非ず、動に非ず、靜に非ず、速なるに非ず、緩きに非ず、強きに非ず、弱きに非ず、沈に非ず、掉に非ず、夷に非ず、險に非ず、靜に非ず、默するに非ず、著するに非ず、離るるに非ず、勤むるに非ず、懈るに非ず、慮るに非ず、度するに非ず、病むに非ず、惱むに非ず、一切衆生は平等に共に最勝の吉祥、第一の功德を有す。時に彼の外道、心淨く信解し、佛法の中に於て、安隱住を得たり。是の時王女、其の室中に處り、佛の光照を蒙り、心安らかに泰然たり。即ち是の念を作す。「今佛世に在まゐりして、衆生を利樂し、厄難有る者は、皆な濟度を蒙る。唯だ願くは世尊、大悲を捨てず、哀愍覆護して、身を我が前に現はしたまへ」と。是の語を作し已つて、遙かに伸びて禮敬し、悲泣して涙下る。佛其の意を知り、彼の室中をして忽然として嚴淨ならしむ。是の時如來は地より涌出す。身は眞金色にして、相好端嚴なり。時に彼の王女、佛の身相を覩て、未曾有を歎じて、妙花香を以て、虔伸供養し、珍寶の瓔珞を以て奉施し、合掌して禮を作し、恭敬親近すれば、佛影は身を蔽ふて、頓に端正を獲て、心大に歡喜し、踊躍すること無量なり。佛前に住立して、偈を以て讚じて曰く。

最勝なる釋師子は、

少欲知足を具して

智慧を利牙と爲し、

枳維巖窟に依り

世間の過失を離る。

慚愧を鬚鬘となし、

是を世尊の、刹那刹那に一切衆生を念々に觀察すると爲す。或ひは近き或ひは遠き、或ひは多く或ひは少なく、或ひは勝れ或ひは劣り、上中下性、皆能く救度して、慧眼悉く見はれ、遺餘あるなし。願ありて言ふが如し。

佛衆生を捨てず。

遠近皆な化度す。

果の成熟する時の如く、

自然に甘味を生ず。

是の故に牟尼尊は

冤親も唯だ一に想つて、

諸衆生を利樂して

亦た其の報を希はず。

爾の時世尊は先づ裸形外道尼乾子を攝化せんが爲の故に、大人相を現し、寶蓮華に坐し、身に紅衣を被むり、目の初めて出づるが如く、色相寂靜にして、威儀に安住すること猶ほ金山の如し。光舒べて極まりなく、無數人天の大會に處る。衆星の中に其の満月を現するが如く、亦た天宮の寶多羅樹、微風に徐るに動き、人樂んで依止するが如し。珊瑚珠の寶華莊嚴の如く、金盤中に大燈炬を然やすが如し。白香象の尼連河に入り、金蓮華の蓋塵の空する所となるが如し。亦春時、羯尼迦樹の金華を開發して、衆の愛樂する所となるが如し、善く能く一切の有情を調御して、諸惡趣に入れども、疲厭を生ぜず、善道に遊化して善く諸法を説いて、皆な發心せしめて、安隱の樂を得しむ。諸有情は無始より已來、相續して、貪瞋癡等種々の惡行を造作するに由つて、若しは冤、若しは親、及び非冤親も、平等に憐愍して、猶ほ一子の如くし、皆な輪迴の險難を出離せしむ。日の暗を破りて盡して餘り無からしむるが如し。是の時世尊、一切智の弊を以て、彼の外道の爲、法要を略説す。「當さに知るべし。世間の、動不動の法は、智を以て了達すれば、皆悉く空寂なり。虛妄心に由つて、眞實見に迷へばなり。自性は涅槃にして、本來清淨なり」と。彼是の説を聞いて、心に解悟を得、則ち能く堅執せる我慢を斷除す。譬へば師子聲を發して震吼すれば、自然に能く其の巨石を裂

【四】坐、ちりつもる、けが

我今當さに、何等の衆生に於て、彼をして愚癡暗鈍を滅除せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、彼をして一切善根を増長せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、彼をして生死淤泥を出離せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、彼をして輪迴の苦海を超越せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、彼をして煩惱の結縛を脱せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、彼をして惡慧の毒箭を拔除せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、四暴流を截ち、彼岸に至らしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、三塗の種々楚毒を免れしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、其の法水を施し、渴愛を除かしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、彼をして境界の癩疽を厭患せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、無始無明の卵殻を破らしむべき。

我今當さに、何等の衆生にして、彼をして我慢の高山を摧伏せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、諸惡を遠さけ、慚愧の衣を著けしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、彼をして具さに戒定慧學を修せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、諸法を達して心、自在を得しむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、彼をして清淨智眼を獲得せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、彼をして大解脱門に越入せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、彼をして大菩提心を發起せしむべき。

我今當さに、何等の衆生に於て、菩提の鬘を以て其の首に繫くべき。

我今當さに勝軍王女をして、醜陋の形を易へて、所願の如きを得しめん。

た偕に往くべし。時に彼の王女、即ち上妙珍奇なる雜寶を以て、其の身を嚴飾して、以て之に妻はす。及び無數の種々財物を與ふ、時に長者子、即ち聚つて婦となす。未だ久しからざる間、同じく本國に歸る。既に家に至り已つて、彼の諸の親屬、見るを求めて禮を設く。長者子曰く「我が妻は王女なり。觀ること何ぞ容易ならん。若し須しく見るべき者は、必ず日を擇ぶべしと。後諸の親屬、復た其の家に至る。長者子言く「却後七日、城の花園に出て、彼處にて相ひ見ん。」乘復た審にして曰く「此の言決定せり。若し往かざれば、我當に錢五十萬數を罰すべし。七日に至り已つて、彼の長者子、其さに種々の美妙飲食を辨じ、先づ一分を取りて、其の房中に置き、婦に白して知り已つて、固く其の門を鎖す。時に長者子、其の罰する所及び飲食を齋らし、彼の園中に往く。是の時遙かに彼の長者子の只獨り來るを見て、咸な相謂つて曰く「是の人誑、妄に先儀に依らず。」既に園に至り已つて親屬に白しく曰く「幸ひに怒らるるなかれ。願くば所罰を輸らん。衆曰く「子が妻は尊崇にして、深室に藏し、日月の光も尙ほ見せしめず。豈に沉んや我曹をや。何んぞ能く觀るを得ん。」と。時に彼の王女、即ち自ら嗟念す。「我年少なりと雖ども、形容極めて醜し。是れ何の惡業ありて、斯の鄙陋を招くや」と。聲を厲して、歎じて曰く「苦なる哉、苦なる哉、其の丈夫をして多くの慚愧を受け、常に虚言を作して、譴罰に遭ふに及ばしむ。斯の如く世に處らば、活るとも奚んぞ爲さん。即ち綽帶を以て、自ら其の頸を經す。時に守宅神、是の事を見已つて、謂く「此の王女は我當に之を釋いて、其の命を保全し、中天なからしむべし。當に知るべし、世尊は無盡の大慈悲を以て、常に樂んで彼彼の有情を救度す」と。毎に是の念を作す。

我れ今當に何等の衆生に於て、爲めに法要を説いて、信解を生ぜしむべき。

我今當さに何等の衆生に於て、彼をして、貪欲の垢穢を洗除せしむべき。

我れ今當さに、何等の衆生に於て、彼の息をして瞋恚の過患を息除せしむべき。

【三】鎖、くさり、ぢやう(鎖)。

福を第一親となす。引いて安隱處に至る。

福は如實の寶の如し。己の掌中に置けば、

最上吉祥を作し、願ふ所皆な成就す。

殊妙の色相を具し、五欲の快樂を受く。

語言は人樂んで聞き、善巧にして極めて明了に、

壽命は長久を得、安隱にして憂惱なし。

一切の諸の衆生は、之を見ること親友の若し。

若し諸の有情は勝福田に於て其の正理に順じ、專注して施せば、決定して此の生に現れ、富饒相應の福應を得。金鬘夫人の如し。佛の功德を聞いて、心に讃仰を生じ、己の先に有せる微妙なる金鬘を以て、如來に奉上す。又善思王女は、妙飲食を以て、尊者須菩提に供養す。又脩髮婆羅門女は自ら首髮を剪つて、以て其の値を鬻ぎ、彼の尊者大迦旃延に飯す。髮復た故の如し。是の三女人、淨施に由るが故に、現身皆な國の后と爲るを得たり。又福嚴長者は躬ら往いて、佛及び諸羅漢を請じ、舍に就いて齋を營み、庫藏復た溢る。牧牛女の栴檀香を持し、及び田舎女の麥稻花を以て佛塔を供養するが如き、皆な天に生るゝを得たり。是の如く、現報を受くるを得たる因縁、勝軍王經に説く所の如し。

佛、舍衛城に住す。時に勝軍大王末利夫人、始めて一女を生む。十八種の極醜の狀を具す。年漸く長大にして當に適くべき所を求む。彼の諸貴族、其の下種姓に姻を爲すを樂まず。王の意許さず。時に外國に一長者子あり。久しく此の城に住す。費用皆な盡き、俾伶周行して、未だ偶する所あらず、臣吏、王に白す。即ち其の請を可とし、王乃ち召して對し、之に謂つて曰く。「我、長女有り。卿を納れて婿と爲さん。若し相從がば、永く終に富貴ならん。設し國に還らんと欲せば、亦

卷の第八

佛言く、「大王よ、當に知るべし。世間一切衆生は淨施に由るが故に、所受の福報は、宛も壞する能はず。設ひ百千人も、亦た奪ふ能はず。所至の處に隨つて、福を前導と爲す。乃至他世の福も亦是の如し。猶ほ伴侶の常に隨逐するが如し。爾の時世尊、偈を説いて言く。

先世に積集せる

廣大なる諸福行に由つて

・ 今人王と爲り、

吉祥尊貴を具するを得。

百千の諸營従ひ

王前に住立するは

福力の攝する所の故なり。

瞻仰して威な悚慄す。

當に知るべし。彼の福業は

眼腹手足の如し。

常に愛護任持して、

相續して斷ぜざらしめよ。

我昔施行を修し、

一切皆な能く捨つ。

唯だ一象を留め、

意に隨つて往く所に乘る。

樂んで山中に依止し、

諸の禪定を修習す。

時に彼の諸人民、

皆悉く來て相ひ従ふ。

或は手に白拂を執り、

或は傘蓋

及び諸茵褥を持し、

至る所床座を敷き、

彼各々王に白し言く。

我等福慧なし。

今願くは威な親近して、

同じく諸の善行を修せん。

福を最勝財となす。

常に眞實の樂を得。

諸の有情等、當に善く思惟すべし。是の如く施し已つて、天の勝報を受け、後人中の大族姓家に生じて、大名稱を具し、大威徳有り、色相端嚴にして、人の樂見する所となり、親屬圓滿にして、財富無量なり。設ひ惡縁に遇ふも、破壊すること能はず。毘舍佉王母因縁經に説くが如し。時に彼の王女は其の眷屬と宮中を出で、園に詣つて遊看す。翫り已つて憇止す。即ち戴く所の上妙の珠珍嚴身の具を解き、收めて幞中に置き、以て其の婢に付す。復た佛所に往き、樂ふて法を聽かんと欲す。聞き已つて宮に還る。婢忽ち所掌の物を忘失す。女聞いて悦ばず。父王に白して知らしむ。母は王に謂つて曰く、「此必ず定めて在らん。設ひ見る者あるも、取る能はず。我、多生、乃至此の身に於て、他物に於て少分も貪を起さず。若し此の念を起さば、我は則ち一切衆生の身分の財物を取らんと欲すれば、我は則ち諸佛に見へ、諸の有情をして、如意果を得しむるを得る能はず。時に彼の尊者阿難、是の物を見已つて、即ち爲めに之を收め、明旦宮に詣りて、即ち王所に納む。王曰く、『彼の遺す所の物、尊者見るを頼。餘人若し得ば、必ず隱匿をなさん。』と。母、王に謂つて曰く、『子何んぞ信ぜざる。我此の物を以て、四衢道に擲つて、其の福力を驗せん。誰れか能く之を取らん。』是の如く棄て已る。彼の往來の者、各々異を見る。或は不淨と云ふあり、或は毒蛇と云ふて、之を捨て去る。王尙ほ疑を生じ、母の熟睡を伺つて、其の指環を取つて、河中に擲置す。母睡り覺めて言ふ、『誰れか環を取つて去れり。』王曰く、『福力の護る所、何んぞ敢へて取る者あらんや。』母言く且らく止めよ。後必ず獲べし。』忽ち一日に於て使を市中に遣り、一魚を買つて歸る。腹を割けば、環を得たり。衆皆な驚異す。王即ち讚じて言く『善い哉、我が母よ言ふ所決定せり。師子吼の如し。後時阿難、復た王所に詣る。王、倍信を生じ、乃ち云ふ、『福力の眞實は是の如し。我當に畢竟して樂んで福業を修せん。』』

人間にして瑜伽の行を修し、貪欲不淨の因縁も破壊し、今此に生ずるを得て、極妙の樂を受けて、諸天女の恭敬し圍遶さるるを得たり。時に彼の天人即ち其の足を禮し、歡喜稱讚して偈を説いて言く。

善い哉、仁者此の天に生れて、最上の五欲の樂を受くるを得たり。

淨滿月は虚空を麗しく、能く青蓮華をを拆けば、香馥郁たるが如し。

昔廣大なる諸善行を修して、身より微妙なる淨光明を出だし、常に慈眼を以て有情を視る。故に天人咸な尊重するを得たり。

復た清淨なる栴檀林あり、枝葉扶疎して極めて愛すべし。

偕藤彌布して四に垂下し、妙花周遍して悉く敷榮せり。

諸の天女其の中に處り、容色潔白にして甚だ端雅なり。

身肢柔軟にして妙香を出だす。競ふて歌舞をなして疲倦するなし。我、今仁者に奉ずるを得て、目明かに心に未曾有を悦ぶ。

此は意樂を生じて唐捐せず。小因縁の得る所にあらず。

百千の天女常に圍遶するは、先の福行に由つて莊嚴するなり。

是の如き施福は思議し難し。應に求く諸の疑惑を斷すべし。

時に彼の新生天子、偈を以て答へて曰く。

若し功德藏を増長せんと欲せば、應さに廣大清淨施を修すべし。

決定して上妙施を獲得すれば、水火・非人も壞つこと能はず。

天中の快樂甚だ希有にして、意に隨つて受用して悉く現前す。

諸有世間聰利の人は當に淨心を發して施行を行すべし。

【三】唐、唐うしなふ、むなし。

彼の所求に随つて、皆な能く之を與ふべし。乃至所有の娛樂の境界。心に吝惜なく、歡喜して之を奉ずべし。是の如く施し已つて、彼能く一切障累を棄背す。復た能く一切の善根を攝取す。是の身を捨て已つて、中に明利あり、決定して天上の第一快樂安隱の處に往生し知足す。時に彼の天宮、劫波樹あり、翠葉鬱茂して、妙光明を放ち、寶花開敷して、皆な悉く周遍す。復た種々の上妙天衣を生じ、諸の天人に被らして、意に随つて取る。復た廣大清淨なる宮殿あり。衆寶の所成にして、黄金間錯して、無數の寶瓶、周匝行列し、衆妙の繪幡、風に随つて宛轉たり。復た無數百千の天王あり、形體殊麗にして、端正なること比なく、上妙の花鬘、其の服を交飾し、衆寶の束帶を以て其の身に繫ぐ。臂釧耳環・珂珮瓔珞は徐歩すれば和鳴して、甚だ愛樂すべし。是の如き天女、其の中に充滿す時に彼の最勝第一の天女は、天子有りて新たに此の間に生ずるを知つて、諸の眷屬と共に、衆の伎樂を作し、天の城門に詣りて、躬ら往いて迎接す。是の時衆中の新生の天子、威德特尊にして、形色殊に異り、紺髪は柔輓にして、右旋して潤澤あり、一切の塵垢の、能く染めざる所なり。目淨かにして脩廣なること、青蓮華の如し。唇の色は赤好にして頻婆果の如し。齒は白くして齊密なること、猶ほ珂雪の如く、身は光明を出だして、面と相照らす。脩短、中を得て、見る者忻樂す。時に彼の最勝第一の天女、天子に白し言く、「今此の天中、殊妙快樂ありて、更に過ぐる者なし。唯だ願くは仁者、我と夫と爲りて、久しく此に住せよ。共に相娛樂せん。」と。即ち金瓶を以て、水を盥掌に注ぎ、及び天の寶冠・種々の瓔珞・嚴身の具にて以て奉獻す。復た天女あり。手に白拂を執り、以て前導をなし、寶花林に至り、衆の歌舞を作して、諸の音樂を奏し、兩ながら相瞻視して、妙欲樂を受く。復た天中微妙の樓觀に陞り、宴處に遊行して意に随つて自在なり。或は寶池に於て、共に遊戲をなす。彼の諸天女、競ふて蓮花を探り、各々新生の天子に奉す。或は散花を作して、以て其の地に布き、各欲想を生じ、感來つて親近す。復た一天あり、來つて相慶慰す。汝昔

て虚ならざるを知り、婆羅門を隠して、自の色相を現し、心に歡喜を生じて、と讚言す。「善い哉大王今は大悲堅固にして、願力決定し、有情を利益して、心傾動せず。在在處處の、一切衆生、王の名字を聞いて、大吉祥を得、久しからずして當に最上菩提を證すべし。時の如き施は、能施の人、及び所施の物、或は廣く或は少く、清淨ならざるなし。是の人念處正勤・神足根力の諸功德法を得て、菩提道に於て、復た退轉せざるべし。則ち清淨なる最上福田を爲し、能く一切衆生の善根を長ず。是れ大丈夫なり。則ち父母親屬朋友の爲めに、歸依處となる。好舍宅は、能く風雨寒諸蟲を障へ、安隱に住するを得るが如し、能く無數の沙門婆羅門等、大衆の中に於て、善く論議を宣べ、類貌熙怡に、身心勇銳にして、決定慧を以て、諸の異見を伏す。譬へば雪山の大力香象、彼の怨敵を摧破して、心に所畏なきが如し。猶ほ衆師の徒衆に教詔して、是の輩を捨てざるが如し。母の子を念ずるが如し。當に知るべし、是の人は清涼池の能く一切の諸渴乏者を濟ふが如し。奇妙華の人の愛樂する所にして、開發する處に隨つて、莊嚴をなすが如し、彼の醫師は、善く衆病を治し、隣所方に至りて、能く安樂を施すが如し。持呪者は、能く蛇螫を除くが如し。彼れは則ち善く貪恚癡の毒を滅す。諸の衆生は貧にして福慧なく、長劫生死の淤泥に没溺するを見て、相應眞實の善法を修せしめ、漸次に引いて功德寶山に至る。旃檀林の如く、香風遠く飄つて、聞く所に隨つて、悅意せざるなし。是の人の美名も亦復た此の如し。一切處に於て、威な欽奉を得。王都城は安隱無畏にして、一切の人民は依附して住するが如し。是の人施を行じて、衆の親近する所となる、秋の滿月、光明清淨にして、一切世間は共に瞻仰する所の如し。樂んで施を行する者は、亦復た是の如し。牟尼尊の、諸根寂靜にして、解脫の法を説き、歡喜布施して、廣大圓滿に、相續して懈る無きが如し。是を布施正念解脫清淨と名く、又彼の施者、人來つて、已に従つて求索するあるを見て、當に起つて迎勞し、光意問訊して、衆の香水を奉じ、以て其の手を淨め、然る後法の如く、諸の飲食を設け、

を善聲と名く、王を善勝と曰ふ。富貴自在にして、諸眷屬多し。人民充滿して安隱豊樂にして、互に相敬愛し、諍訟あるなし。惡言を聞かず、諸の疾疫なく、林木鬱茂し、果味甘美にして、地は唯だ沃壤にして、荆棘を生ぜず。資生の具皆な悉く充足す。彼れ治世に至りて、稟性仁賢に、黎民を等しく視て、猶ほ一子の若く、正法を愛樂して、未だ曾つて捨てず。決定大悲にして、一切を憐愍し、有爲を厭離して、無我に了達す。是れ大丈夫なり。衆の稱讚する處、廣大施に住して、心に慍惜なし。一切の所有、彼皆な能く捨つ。明旦に至る毎に、施場の中に入り、諸來り乞ふ者を善言安慰し、或ひは飲食を須ゆれば、即ち美味を與へ、或は衣を求むる者には、即ち妙服を與へ、乃至金・銀・琉璃・砗磲・碼碯・眞珠摩尼・倉庫の諸物を其の欲する所に隨ひ、皆な之に給與す。是の如く施し已つて、王後宮に入り、諸嬪嬙・童男・童女・大臣・官長を召して、各々に施與して、咸な満足せしむ。種々の所有は皆な盡く捨てて餘りなし。唯著る所の嚴身の服のみあり。時に善勝王、是の思惟を作す。「今此の城中、一切の人民、我已に周給して、皆な富饒を得たるも、唯諸細蟲、未だ曾つて恵に沾はず。思ふに何物を以て能く之を濟はん。」時に王即ち多蚊蚤處に至り、著る所の衣を脱ぎ、彼をして師食して皆な飽食を得しめて、心に勞苦なし。是の時帝釋、下人の世を觀て、是の事を見已つて未曾有を怪しむ。「彼の善勝王、能く是の如き廣大の悲心を發し、一切有情を利益し、安樂す。我當に自ら往いて其の誠實を驗すべし。時に彼の帝釋、一鷲鳥と化し、羽翮黓黓、爪喙銛利にして、飛んで其の前に至り、二目を喙まんと欲す。王、慈忍を積み、殊に驚懼するなし。返つて愛眼を以て、其の驚を顧みて曰く、「今我が身肉、汝の噉ふ所を恣にせよ」と。禽急に身を俯して、忽然として現れず。時に帝釋、復た其の身を變じ、婆羅門と作り、來つて王の前に詣り、親近恭敬し、「唯だ願くは大王よ、我に二眼を施せ」と。王即ち語つて曰く、「大婆羅門よ、汝に誠に要するならば、當に自ら之を取るべし。我已の目に於て、少しの慍惜なし。時に彼の帝釋、其の施行眞實にし

彼の花既に開敷すれば、

後必ず其の實を結ばん。

云何ぞ説いて、施し已つて廻向清淨なりと爲すや。彼の施者は淨戒を堅持するに由つて、體性意樂、本來清淨にして、所有の一切金銀珍寶・倉庫等の物・象馬車乘を心に吝惜なく、皆な悉く能く施せば、施報あるを知る。及び彼、他世に輪廻・速疾流轉を厭患して、眞常を證るを樂み、諸の過失を離れて、彼の世間五欲の快樂に於て、染著を生ぜず、皆な能く棄捨し、毀に於ても譽に於ても、其の心動ぜず。來り乞ふ者を見れば、軟言にて慰問し、面色和悅して、鬻燈を離れ、視ること尊親の如く、心に厭倦なく、彼の意願に隨つて、皆満足せしめ、速疾に持與し、疑悔を生ぜず、諸の詭譎を離れ、堅垢を洗除し、専ら樂んで他を利し、群有を荷負して、威儀を守護し、諸の諍訟を斷つ。或ひは來つて身體肢分を乞ふ有らば、善く忍辱を修して悲惱を生ぜず、心散亂せず、最上施を樂む。彼、善く方便して、我に従つて求索すれば、我當に歡喜して施して之に與ふべし。我をして淨戒・精進・禪定・勝慧の諸波羅蜜を具足せしめ、速かに無爲現法樂住を證し、無上正等菩提を成ずるを得。又諸の有情、彼の財富に由つて、色力勇健に、多く欲樂に著し、彼、世間に於て、善友に親まず、佛法を樂まず、剛彊にして化し難く、乃至多種の病苦風痰癘、或ひは三集病を發起して、命終を取る。又彼の世間所有の官屬・農商工巧の一切人民は心常に怱遽にして暫くも容豫なし。一向に放逸・娛樂を追求して、五欲險難の深坑に墮ち、展轉輪迴して、出要を知らず。大悲心を以て、開示教誨し、癡暝者に於ては爲に智明を發し、救護なき者には、苦惱を拔除し、歸依無き者には、安隱處を得しめ、乃至現に地獄等の苦を受け、我が所修の布施福業を以て、諸の有情に施して皆な苦を離れしめ、我が布施所獲の果報を以て、世間五欲の快樂を求めず。亦た尊榮豪富を愛樂せず。輪廻を超越せる願ふて、畢竟して解脱す。此を施已廻向清淨と名く。

佛言く、「是の如く清淨施を所作し已つて、往昔の因縁を我今略説せん。乃至過去無量世の時、國

を受けて、然る後與ふ。或ひは熟老して病苦に纏綿する所となり、漸く死門に逼つて然る後與ふ。是の如き等の類、皆な施と名けず。或は歌舞・種種の伎藝を觀て、自らの美譽を一沾つて、然る後ち與ふ、或は他人の彼に財物と與ふるを見て、自らは豪富なりと謂つて、倍にして之を與ふ。他の美色に於て、心に愛樂を生じ、己に攝從せしめんと欲し、倍して其の値を與ふ。是の如きの與は、皆施を名けず。所以は何んぞ。彼財を與ふると雖も心に常に熱惱して、貪・嗔・癡・疑惑等と俱にして、正理に順はず、善相應に非らず。唯だ輪迴に趣いて、不饒益を作す。何んぞ能く彼の出世の善根・如來の相好・手指網絕綺畫の相を感じん。此を説いて名けて施者不清淨と爲す。

復た二種を説く。一には施已不清淨、二には施已迴向清淨なり。時に王舍城に、諸の檀越あり、福業を修し已つて、僧伽藍衆僧園中に於て、諸の伎樂を作して、娛樂遊戯す。時に主園者、來りて寺主に白す。耆宿比丘に檀越に語つて言く、『汝等何故に此の放逸に至るや。暫らく意に適ふと雖も、後ち苦報を招かん』と。主園の比丘は耆宿に白して言く、『檀越、此に在り。美言にて喜ばしむ。何故に彼を責めて他をして惱みを生ぜしむるや。』と。時に彼の耆宿、主園者を呵す。『汝先きに未だ學ばず。戒律を知らず。白衣を承奉して、其の財利を苟めにす。汝且らく此の富樂受用を觀て、能く衆人の心に狂亂を生ぜしめ、非理作意して、法縁を壞つを爲す。』時に彼の耆宿、即ち偈を説いて曰く。

若し衆僧園に於て

嬉戲して欲樂を受くれば、

彼の愚夫は盲瞶にして、

法を破りて惡道に墮す。

應當に其の中に於て

布施持戒を修すべし。

此の二を伴侶と爲して

能く解脫門に趣く。

清淨の池沼の中に

美樂を種ゆるが如し。

【一】 沾、うる(實)。

卷の第七

若し衆生ありて、種々の物を以て、諸の有情に於て布施を用ゆ。所謂、飲食・衣服・臥具醫藥、乃至一切衆妙珍寶、及び諸庫藏、皆能く之を與ふ。是の如き施は、廣大施と名く。或ひは諸の衆生、心に樂んで施を行じ、未だ上の如き種々の諸物に及ばず、己の所有に隨つて、能く之を與ふ。是の如き施を隨分施と名く。

佛言く、「此の二種の施あり。謂く身語意業、及び受想等の蘊、思を俱に轉じて、同時に修作し、現前に與へ、相續し愛樂する、是を名けて施と爲す。若し刹那の頃、淨心を發起して、己の所有を以て、能く與ふる者は、亦た名けて施となす。

復た二種を明かす。一は不清淨、二は清淨なり。善く施を行ずる者は、應當に了知すべし。則ち一切種智を建立す。

若し施者に戒なくんば正理に順ぜず。正見を具せず、謂く施に果なし。是の如き施は、則ち其の報なし。或は受者は戒なく、教法を解せず、邪見に深著すれば、施に果なしと説く。彼の施者に於て、亦た報なし。此を不清淨と名く。

若し施者戒を持し、法を解すること正見に、施果あることを知れば、是の如き施者は、則ち其の報あり。或は受者にして戒を具し、法を解すること正見にして、施果ありと説く。彼の施者に於ては則ち其の報あり。此を施者受者、二つながら皆な清淨正行圓滿ありと名く。

若し施者清淨にして、受者不清淨なれば、此も亦説いて施報を成就すと名く。或は施者不清淨なりとは、謂く彼の愚夫、固く其の財を守り、猶ほ僮僕の其の王に奉事するが如し。或ひは、徭役を爲し、官吏催督して、執縛憂惱して、然る後與ふ。或ひは竈賊の爲めに劫奪損害せられ、諸の警怖

し。此の時尊者は彼の親屬を召し、昔の舍宅に還り、諸物を堀り取り、彼の所説の如くに、爲に施會を作す。妙美饌を以て三寶及び婆羅門、諸乞丐者を供養し、皆な満足せしむ。時に尊者の母は住して一面に立ち、無数の人の、廣大なる集會を觀て、己れの醜狀を耻ぢ、涙を流して號哭す。『唯だ願くは世尊よ、哀愍救度し玉へ』と。時に彼の尊者、五體を地に投じ、高聲して母の爲に其の名字を稱す。『願くは此の善を承けて、早く解脱せしめよ』と。其の時、世尊、方便力を以て威神加持して説法をなす。及び彼の時の會の百千の衆生、法を聞いて解悟して、眞實見を得たり。鬼は苦を離る由を得て、尋いで即ち命終す。尊者然る後復た定に入りて觀するに、彼還つて有財中鬼中に生ずるを見る。即ち其の所に至り、爲めに宿因を説き、發心せしめ、施所を行するを勧め、『今當に福を修して、早く出要を求むべし』と。鬼、化を聞き已つて、良久しく思惟し、白して言く。『尊者よ我、施す能はず』と。是の時尊者、聞已つて咨嗟す。『汝極めて愚癡にして、慳習猶ほ在り。黒業を知らず、展轉圍遶せらる。鬼趣は極惡なり。何ぞ厭怖せざる。種々方便して、苦切に責め已つて、漸次誘化して、二白麤を得。尊者受け已つて、持して衆僧に施して、未だ貨易に及ばず、一比丘をして専ら之を收掌せしむ。鬼尙ほ慳惜して、心に捨する能はず。即ち是の夜に於て、潛み取りて而して去る。比丘失ひ已つて往いて尊者に白す。尊者思惟すらく、『此、他人に非らず。我當に往いて取るべし。既に鬼所に至れば、果して其の麤を得たり。是の如く三たび竊まれ、取ること復た初の如し。麤を掌る比丘、心に亦た惱を生じ、即ち分裂して、依して衆僧に散す。各々受け已つて、或は補衣に用ゆ。彼鬼來りて衣を竊み去る。』

佛言く『當に知るべし。慳心は大過失を爲す。彼の纏縛に由つて、永く惡趣に墮す。是の故に我今方便顯示して、諸の有情をして慳垢を斷除して、樂んで廣大清淨なる施業を修せしむ。』と。是を攝受布施福蓋正行と名く。

ざる」復た勸諭を加ふれば、詐つて已に與へたりと言ふ。未だ久しからざる間に、母乃ち命終す。時に長者の子、廣く大施を作し、以て其の母に薦め、然る後に家を捨つ。既に法に入り已つて、勤めて精進を加へ、樂んで正法を聞く。理の如く思惟し、根力を成就し、有爲行に達し、生滅の法を悟り、諸の輪廻を息め、五趣を超越し、無明の翳を破り、三界の貪を離れ、其の金寶を視ること、猶ほ瓦礫の如し。身を塗割して、愛悲を生ぜず、其の心平等にして、猶ほ虚空の如し。決定して永く一切の煩惱を斷じ、現前に阿羅漢果を證得す。大梵天王・帝釋諸天、咸共に尊重し、供養讚嘆す。是の時尊者、洹河の岸に於て草庵に居止し、禪定を修習す。忽ち一鬼あり、其の前に住立す。裸形醜黑にして、焼けたる杭木の如し。頭髮鬢亂して、大腹小頸、肢節焰然として、聲を發して號哭す。尊者問ふて曰く、「汝は是れ誰となすや。」鬼、尊者に白す。「我は即ち汝の母なり。命終りて今に經ること、廿五年なり。餓鬼の中に墮して、極めて飢渴を受く。飲食及び水の名字を聞かず。設ひ大河を見るも、倏然として枯涸す。遙かに果林を見て、到れば復たあらず。乃至刹那も少樂あるなし。唯だ願くは尊者、我を救拔せよ。願くは此に依りて住し、少水を求めて飲まん。」と。尊者聞き已つて、悲泣嗟念し、「生れて福を修せず、死して惡道に墮す。當に志誠を發し、前咎を悔謝すべし。」と。鬼曰く、「我慳垢の爲に、その心を覆弊し、諸の福田に於て未だ曾つて少しも施さず。昔所有の種々の財物、盡く本舎に於て、地を堀つて之を藏せり。尊者、我が爲に、速に其の物を取つて、大施會を作し、沙門及び婆羅門に飯食せしめ、貧窮の者に施し、諸佛及び衆の賢聖に供養し、我が名字を稱へて、發露懺悔して、願くは我が身をして速かに此の苦を脱せしめよ。」と。尊者語つて曰く、「若し能く是の如くんば、剋責して過を悔みなば、罪當に消滅すべし。」と。鬼曰く、「我、前身無慚無愧なるに由つて、斯の裸形を招く。此を止むるに堪へず。」と。尊者謂つて曰く、「若し惡を造り已つて、心に追悼せずんば、彼の業決定す。若し能く發露せば、罪增長せず。今既に發心す。得て此に住すべ

道に墮し、地獄の中に於て種々の苦を受く。地獄の中より出でて、餓鬼の中に生れ、其の形長大にして裸形にして黒瘦に、常に熾火の燒然する所となる。身肢爛爛して、兩目坑の如く、其の腹極大して、咽喉は針の如し。長劫を経歴して、飲食を得ず。皮骨連立して、自ら持する能はず。常に糞穢を噉ふて、以て自ら活命し、唇吻を塗汚して、嫌惡を生せず。若し涎涎を見れば、互に相ひ爭奪し、或は少分を得るも、受くること多きに驚怖し、復た迥絶の廣野早海に生れば、彼に於て水の名字を聞かず。其の身高大にして、猶ほ山峰の如く、猛風の吹く所にして、動搖して響を發す。復た飛禽の往來棲止するところとなり、或は噉まれ、或は攫せられ、諸の苦惱を受く。是より脱するを得て、餘の畜生に生る。所謂夜叉・羅刹婆・畢舍遮・部多・矩畔拏・布單那・羯吒布單那・塞建那・嚧摩那等なり。設ひ人と爲るを得るも、其の形極めて醜く、身皮は黒澁にして、煙熏の如く、諸根閉塞して、眼は明了ならず、貧窶餓羸にして、乞を以て自ら濟ふ。常に磚石を持つて、以て其の胸を擊ち、殘棄の不淨飲食を得るなり。或ひは蛆蟲を生じ、便ち以て足ると爲す。常に風雨寒熱に逼切せられ、蚊虻諸蟲の師食する所となり、永く快樂名聞吉祥を失ふ。是の如き惡報は甚だ怖畏すべし。是れ慳の業行なり。復た尊者所問經に説くが如し。

爾の時佛王舍城迦蘭陀竹園に住す。時に彼の城中長者子有り、常に佛の所に詣で樂んで法を聞かんと欲す。淨信心を發し、出家を求めんと欲す。即ち母に白ふして言ん、『願くは母よ、我を佛法中に於て、出家して道を爲すを聽せ』と。母の言く、『今は唯だ汝一子なり。我身没し已つて、當に自ら意に隨ふべし。』子、其の教の如くす。勤力營求して、得る所の財物は悉く以て母に奉ず、『願くは母此を將て、其の所用を恣にせよ。若し餘るものあらば、諸の福業を修せよ。』と。母、財を得已つて、惠施するを肯ぜず。廣く多く積聚して、地中に埋藏す。或ひは沙門ありて來至し、乞食すれば、手を舉げて呵罵す。謂く『鬼來る』と言ふ。子聞いて悦ばず。『我が母、何故に少飲食に於て、能く施さ

て會つて少許を得るなし。』と。時に勝軍大王、復た佛に曰して言く、『世尊よ、願くは我が爲に大名長者の慳吝の過失の招く所の報を説き、彼の聞く者をして咸開悟を得せしめよ。』と。佛言く、『大王よ、是の如き長者は大富を爲すと雖も、尊親に奉らず、己れに用ふること能はず、勝福田に於ても亦施を樂まず、朋友眷屬にもまだ少惠せず、奴婢僕従、及び諸人民は皆な悉く捨離す。當に知るべし、是の人は財富に處ると雖も、彼の慳に由るが故に、相ひ符順せず。不淨の中に其の蓮華を生ずるが如く、妙園林に猛虎を踞するが如く、珍美膳に之の毒物を置くが如く、摩尼寶の峭壁に生ずるが如く、甘熟果を高崖に植うるが如く、清淨地に塗るに糞穢を以てするが如く、毒藥を服して壽命を延べんと欲するが如く、姪女の家に自ら梵行を稱するが如く、多瞋の者が人の愛敬を欲するが如く、謬解の者が善論議を稱するが如く、言は驕童の如く、定量あるなきが如し。非法を説き、不善を善と説き、多く世間の種々の譏謗を招く。此れ但だ財を守り、名を枉げて富を爲し、珍寶と雖も、物を益するなく、終日勞苦して、財なき者如し。衆人、己れを見て、咸な不祥と謂ふ。親友は之を視て、往いて問訊せず。是の如き慳人は、衆の嫌惡する所なり。彼の群鴈は、寒林に栖まざる如く、彼の財に由るが故に、自ら縛縛せられ、壽命を知らず。山の瀑流の如し。無常を念はず、大怖將に至らんとす。一刹那の頃、自命を喪失す。當に知るべし。財富は久しく住せず。猶ほ象耳の如く、暫くも停息せず。説法の師に於て、下問する能はず。施行を讚するを聞いて、心に信樂せず。來つて化導するを見ては、藏竄して遠く避け、設ひ見るを得るあるも、返つて罵辱に遭ふ。是の如き愚夫は資財多しと雖も、人の夢中に得る所と異ならざる如し。乃至慳吝して、地中に埋藏す。縱ひ病苦に遇ふとも、良藥を求めず。醫師を聞召して、心に則ち惱を生じ、此に由つて沈瘵して、命終を取る。人其の亡するを聞いて、快と稱せざるなし。一切の身分は潰壞して近き難く、猛火は之を焚き、臭煙蓬煇として、候ち灰燼となり、風に任して吹き廻る。當に知るべし、是の人は定めて惡

【五】 鴈。風の吹き上ること。

塗汚すれば、不如意を招く。是の如く慳者は、珍財を積むと雖も、惠施すること能はず。猶ほ鵝鶩の蓮華の叢に止まるが如し。父母所に於て、供養する能はず、親屬の集會も捨避して去る。善言を信せず、經法を樂まず、己の財富を恃んで、他の榮ゆるに耐えず。猶ほ醉象の如く、性は調伏し難し。亦た毒蛇の如く、人視るを欲せず。善人已つて、悉く皆之を遠ざく、勝福業に於て隨喜を樂はず。來つて誘掖するを見れば、心則ち惱を生ず。枯井に於て水を求めんと欲すが如し。出す所の言音人聽くを欲せず、隨所至る處に與に語るものあるなし。大衆中にありては則ち癡者の如く、四衢道を過ぐれば、猶ほ腐屍の如し。彼の愚癡人は世間に居ると雖も、種々の過惡を遠離すること能はず。諸善功德を護持すること能はず。諸善種子を滋長すること能はず。是の如きの慳人は貧窮の因を作す。現に富み足ると雖も、受用する能はず。心を下して求むる者に、少しも恵む能はず。當に知るべし。是の人は尸陀林の如し。諸の世間の人は依止するを樂まず。是れ慳の因縁にして大名長者經に説くが如し。

爾の時世尊は舍衛城祇樹給孤獨園に住しき。時に彼の城中に大長者あり。名づけて大名と曰ふ。巨富あるも子なく、忽爾ち命終す。時に憍薩羅國勝軍大王は是の事を聞き已つて、遽かに其の舍に至る。塵土にて身を塗して到り已つて一切の庫藏及び諸の財物を攝取し、悉く官吏に付す。事畢つて駕を旋らし、世尊の所に詣り、頭面禮足して、退いて一面に坐す。佛言はく、「大王よ、何故に忽遽として、塵土にて身に塗して此に至るや。」王、上事を以て具に佛に申す。佛言はく、「大王よ、彼の大長者は財富幾何なりや。」と。王曰はく、「其の家巨富にして、多く資財あり。金銀珍寶・倉庫の諸物は各々無量百千俱胝有り。是の如く豪富にして與に等しき者なし。彼、唯だ龜糲飲食を受用し、著る所の衣は破爛の故に悪しくして、出るに弊車に乗り、葉を聚めて蓋と爲す。凡そ食せんと欲する時は先づ其の門を扇し、日に澆噉すると雖も未だ飽滿せず。設ひ沙門及び婆羅門・諸乞丐者・遠路を渉る者・伎藝を作す者ありて、是の如き人等ありて、來つて飲食を求むるも、一人とし

【三】塗。ちり、あつまるところ、けがる。

【四】扇。とざし、かんぬき、とざす。

斷除し、諸の疑網を裂き、畢竟して能く菩提の彼岸に至る。諸の有智者は當に精進を勤め、身語意を淨め、施戒定を修すれば、此れ則ち能く佛の大神恩を報するなり。然るに諸の衆生、性・欲各異れば、漸く具さにこの三種の行を修せしむ。或は偶かに五欲を受用するを樂めば、世尊方便して、勤めて布施せしむ。或ひは天に生れて、勝妙の樂を受くるを樂めば、世尊方便して、淨戒を持せしむ。或ひは苦際を解脱出離するを樂めば、世尊方便して、禪定を習せしむ。是の故に世尊は此の三行を説いて、名けて福蓋と爲す。當に具さに奉行すべし。譬へば二鬼の三種を争ふが如し。謂く篋、謂く履、謂く椎なり。兩ながら相交争し、聲を揚げて大に喚び、「某の方所に婆羅門有り、彼は甚だ正直にして此の事を斷すべし」と云ふ。一鬼、物を昇ありて、即ち彼處に往き、合あ掌あして白言あす。「大婆羅門よ、汝當に我が爲めに此の物を均分すべし」と。婆羅門曰く、「此れ微物のみ。何んぞ須しく相競ふて、遠く來りて決を求むべき。」二鬼説いて曰く、「此れ小事に非らず。最も極めて得難し。汝此の篋を觀よ。則ち能く變現す。物を欲する所に隨つて皆な中より出づ。此の雙履は、人或ひは之を躡めば、則ち能く天に陞り、諸の妙樂を受く。又た彼の椎は、則ち能く一切の冤敵を摧伏して、皆な退散せしむ」と。時に婆羅門、是の説を聞き已つて、即ち二鬼をして退いて一面に立たしめ、「我當に汝の爲に久しく思惟して、此の三物を分つて、各平等なるを得しむべし」と。彼の婆羅門、遽に其の履を著け、又た椎篋を取りて空に乗じて去る。二鬼見已つて、是の三物を知らしめて、他の所有と爲すを悔ゆ。此の喻中に於て、當に善く分別すべし。布施は篋の如し。如意を得るが故に。持戒は履の如し。能く天に生ずるが故に。禪定は椎の如し。衆魔を降すが故に。此は世尊施戒定を説いて、方便して福蓋正行を攝受すと名く。

此の中復た三種の惡行を明す。所謂慳悋破戒散亂は、諸の過患を生ず。則ち輪迴惡趣の本と爲り、能く施戒禪定の功德を壞す。是の故に世尊は種々に慳悋の過失を顯示す。猶ほ垢穢の如し。有情を

卷の第六

爾の時、惡趣を超越せる天子、偈を以て佛を讚じ已つて、心に歡喜を生ず。譬へば商主の大財利を得るが如く、彼の農夫の稼穡を成するを得るが如く、亦た勇將の戰陣に勝を得るが如く、久しく病む者の頃に痊愈を獲るが如し。是の時會の中に阿羅漢あり、彼の天子の始末の因縁を知り、此に由りて追念す。「己の本師は没して久しと雖も、知る、何れの道に在る」と。時に檀那あり、寺に於て齋を營む。一比丘あり、新淨なる水を汲み、其の齋次に於て、衆僧に行施す。彼の阿羅漢、白銅鉢を以て、水を受けて飲まんと欲す。指尖にて之に觸れば、極めて甚だ清冷なり。即ち自ら思念す。「我が師昔嘗つて寺主と爲り、大衆事を知り、愷かにして衆物を惜む。資生に貪着して、常に後身も復た此に生れんことを願ふ。是の如き罪あり、若し洋銅地獄の中に墮れば、斯の甘泉を欲するも豈に得べけんや。」是の念を作し已つて、定に入つて之を觀じて、地獄の中に遍くして、傍生鬼趣に泊んで都べて見る所なし。復た更に思惟して、豈に曩に善根を植えず、今成熟するを得て、勝處に托せんや。即ち諸天に於て次第に觀察して乃ち其の師の四五天に生るゝを見る。是の時尊者、彼所に往詣し、安慰問訊して、之に語りて曰く、我れ聞く、此の天は唯だ衆善を修し、淨戒を堅持し、始めて乃ち生るゝを得。師は宿愆を積んで、何ぞ能く此に至るや。」と。是の時、天子尊者に謂つて曰く、「我れ昔日、寺主を經作して、愚癡惡行あるも、曾つて發露せず。將に命終らんとする時、志誠懇惻して、「唯だ佛法僧は是れ我歸伏なり」と。是れに由つて、三寶の恩力を念するに緣つて、此の善根を承けて、此處に來生す」と。時に彼の尊者、是の説を聞き已つて、心淨らかにして踊躍し、未曾有を得、即ち人天・有學・無學・大衆の中に於て、三び「奇なる哉」と稱し、具に上事を陳ぶ。「佛法僧力の功、思議し難し。能く地獄無量の極苦を銷し、能く有情の無量なる善根を長じ、煩惱を

【一】 愷。愷と同じ。

【三】 泊。スムグ、およぶ、
うるほす。

爾の時世尊、彼の天子の心の所念を知りて、即ち爲めに四諦の法輪・三轉行相を宣説す。聞き已つて悟解し、即ち見諦を得たり。座を起たずして預流果を證す。無漏堅固金剛智の杵は、身見邪慢諸山を摧壞す。是の四諦法は諸沙門及び婆羅門・父母朋屬にして能く宣説する處にあらず。唯だ佛世尊のみ我を愍念し、泣血海に盈ち、積骨山の如く、惡越の門を閉ぢ、生天の路を開き、地獄餓鬼畜生を救拔して、皆人天の善果に安住せしむ。時に彼の天子即ち偈を説いて曰く、

我、染欲の深過患に由つて

無間地獄の中に墮するも、

佛の恩力を蒙りて天に生ずるを得たり。復た涅槃道を證得せしむ。

我、淨法眼に依止するに由つて

永く彼の諸惡趣及び未來の生死流に

輪廻するを脱して、

寂靜する菩提の岸に至るを得たり。

我今牟尼主を見るを得るは、

百千生中に値遇し難し。

善く生老病苦の因を超へて、

應に世間の廣供養を受くべし。

寶瓔珞を以つて奉獻し、

合掌右邊して心忻慶す。

故に我、二足尊を頂禮す。

能く人天をして覺悟を生ぜしむ。

は皆盡き、高き者は亦墜つ。合會は離るゝあり。生は必ず滅に歸す。」と。是語を説き已つて、奄忽ち命終す。時に諸大衆、及び彼の弟子共に善利を營み、以て冥福に資す。乃ち相議して曰く、「我師寂に趣く。未だ神識の當さに何所に生ぜるを知らず。」と。其の弟子中、聖を證る者あり、乃ち定觀に入り、諸天を始めて次いで人間乃至鬼畜に及ぶ。皆悉く見へず。遂に遍く諸地獄中を觀じて、乃ち其の師の無間地獄に墮するを知る。弟子見已つて大疑惑を生ず。我が大和尚在世の日、淨戒を堅持し、多聞辯才にして精進修行し、未だ常に暫くも廢せず。八方の僧衆を攝受し、供給す。何の縁を以つての故に、茲に劇報を受くるや。時に彼の弟子、復た定に入りて觀じて、乃ち先因を見るに、嘗て其の母を害す。是の報を以て故に、無間獄に墮して、熾然として火聚りて其の身を燒き、彼の獄卒の爲めに、種々訶毀せらる。汝、在世の時、下劣にして智なく、此の逆罪を造る。今誰を遣はして當らしめんや。獄卒即ち極熱の鐵鎚を以て、以て其の首を碎き、血流れて悶絶す。苦言ふべからず。是の時弟子の大阿羅漢、是の事を見已つて、悲願力を運らし、苦惱を息除し、法の威徳に憑り、宿命を知らしめ、三寶を念ずるに緣りて、其の善根を續け、即時に命終して夜摩天に生る。法爾として新に諸天子等を生ず。彼の天に住し已つて三種の念を起す。一には前身の受生は何族なるや、二には何處に於て身謝して命終せるや、三には何の福を修して天上に生るゝを得るやを觀す。時に彼の天子、是の觀を作し已つて、乃ち自身先に逆罪を造るを見、佛恩の力を承けて、此の天に生ずることを得たり。而して是の念を作す。我れ今一心に別異の想なし。唯佛を見たてまつり、親近供養して、以て大恩を報ずるを求む。天の福力に由つて自然に衆寶の瓔珞あり、其の身を莊嚴して、初夜分に於て、身より光明を放ち、祇陀林を照らし、皆悉く顯現せしむ。前んで佛所に詣り、頭面禮足して、即ち天上の衆色蓮華・曼陀羅華を以て、以て佛上に散じ、積つて膝を過ぎ、供養を作し已つて、退いて一面に坐す。

し。人の執持する所、四方に攸往して、諸の炎熱を遮ぎる。工巧の爲す所にして、久しからずして
 則ち壞す。是の如く福蓋正行の持する所、能く生等の所有の熱惱、及び地獄火の燒煮する所を「怯る。
 衆善の成す所、任持して壞たす。舍衛城中長者の女あり、族姓子と與に匹偶となるが如し。後ち一
 兒を生む。費用度るなく、日に漸く褻寤す。其の妻に謂つて曰く、「我、遠方に詣り、力を勤めて求
 索せん。汝當に愛念して其の子を長育すべし。」と。久しく歲月を経て、夫猶ほ未だ還らず。年既に
 長大にして、漸く放逸を生ず。隣の處女と迭ひに愛樂を生ず。彼の女即ち帶ぶる所の寶璽を解きて
 之を授與す。母、後時に於て其の由る所を知り、乃ち善言を以て種々教誨す。我が子應に樂んで鄙
 事を爲すべからず。當に自ら慎み護れよ。我が懐みをは懼しむる無れ」と。日に檢束を加へて澁行
 せしめず。夜寢門に於て以て其の榻を設く。子一夕に於て、貪欲の燒ぶ所となり、暫く臥ねて復
 た起き、須臾にして停らず、母に白して「門を開き、往いて便利せんとす」と。母、子に語つて言
 く、「此に盆具あり、出づべからず」と。母の爲に嚴約せられて、轉た欲心を増し、遂に惡意を興し
 て以て其の母を害す。是の罪を造り已つて、深く惶怖を生ず。遂に伽藍に往き、白して言ふ。「大徳
 よ、我、出家せんと欲す。願くば攝受を垂れ玉へ。」と。時に諸比丘、觀察し、其の來由を詰ること
 能はず、便ち剃髮す。比丘と作り已つて、遠く他國に遁れ、勇猛精進し、持戒を堅持し、禪定を修
 習して、樂んで經典を誦す。彼に長者あり、其の比丘の是の如き徳を具するを覩て、心を興し供養
 して爲めに伽藍を造り、其を命じて主と爲す。八方の衆僧咸來りて依附す。爾の時比丘、衆の爲め
 に大乘經典を講宣す。復た相應觀經を脩習して、四事の供養、乏少する所なからしむ。時に諸大衆、
 勤修し、懈るもの「匪ず、漸次に羅漢果を證する者あり。而して此の比丘、後に病苦に禁はれ、
 妙藥を服すと雖も、轉た疴瘵を増す。衆僧を招集して、巧みに讖謝して曰く、「謬りて主宰に當りて、
 衆僧を輕慢す。諸弟子等よ、惱亂するも亦た然り。唯願くば衆慈みて我れに歡喜を施せ。常なる者

【三】怯。原本は怯、そで
 (袖)、訂正して讀んだ。

【三】匪。非に同じ。

諸比丘よ、世間の所有の種々の苦因は生を根本となす。若し生縁なくば、輪廻自ら息まん。何ぞ況んや未來無量の生苦をや。生あるに由つての故に則ち色蘊あり。色蘊に由るが故に則ち受蘊あり。受蘊に由るが故に則ち想蘊あり。想蘊に由るが故に則ち行蘊あり。行蘊に由るが故に則ち識蘊あり。是の如く次第して、相續して起りて、苦聚を増長して、輪轉窮りなし。譬へば群賊の城隍に入り、縦燎抄掠して黎庶を擾惱するが如し。是の如き五蘊は彼の識城に依り、諸の煩惱を生じ、諸根を損害す。

又た老病死は、諸の世間に於て、樂んで損惱を爲す。是れ愛すべからず。三種の寃は常に隨逐する所の如し。一には常に過隙を求む。二には險難に墮せしむ。三には其の命を伺斷す。是の故に比丘よ、常に當に福蓋正行を脩習し、經典を受持して、説の如く脩行すべし。設ひ老病死の、衆冤圍繞するも、惶怖を生ぜず、險惡の道に於て則ち能く超越す。是れ大丈夫なり。二世の益を爲すことは火中の蓮の如し。甚だ希有と爲す。則ち寂靜妙樂に安住を爲す。諸比丘よ、彼の福の體性は、正は顯示する所にして、因より果に及び、皆な可愛すべし。乃至無漏の善法を發生し、身語意業は咸な清淨なるを得て、不退轉に住し、道記を授くることを得。秋の滿月の盛なる光明を放てば、一切世間は咸な利益を蒙むるが如し。廣大施を樂んで、限礙有る無し。諸の來り乞ふ者に皆な之に給與し、諸の有情をして心に悅豫を生ぜしむ。戰勝の將の如し。心進み勇銳にして、善王に依りて安隱にして住するが如く、猶ほ大海の諸川流を納るゝが如し。彌盧山の安固として動かさる如し。一切の衆生の奉すること、父母の如し。諸の世間の供養恭敬を得、殊勝第一の吉祥を獲得し、親友明屬の稱讚する所にして、一切の所願は皆成就するを得て、畢竟して輪廻の苦海超越す。此の義、明かす所、福の自性は、猶ほ金器の如し。堅固にして愛す可し。諸の衆生の最勝依止となる。非福の自性は愛樂すべがらず。猶ほ坏瓶の如し。決定して破壊す。諸の衆生をして惡道に流轉せしむ。世の蓋の如

極重苦を受け、或時は悶絶す。亦た藏鼠ありて、魚の泥に沈むが如し。即ち鐵鈎を以て臂を挽いて出だす。大鐵網を以て熱地に垂置し、大火猛焰として、翻覆焼烙す。復た鐵鉗を以て撃いて其の口を開き、即ち銅汗を以て逼つて以て之れに灌く。或は熱鐵丸、驅つて呑嗽せしめ、斷齧喉舌各々焦爛して、咽より徹下し、悉く焼く所となる。復た兩石あり。以て其の身を夾み、首より足に至り、鋸にて之を解く。獄卒の暴悪なること、猶ほ醉象の如く、怒髮衝直し、火星四迸し、彼の罪人を驅つて鐵床の上に臥し、線を以て之を押る。或ひは斲り、或ひは鑿つ。火炎四起して唯號哭を聞く。又山峰あり、空より墜ち、彼の罪人を撃つ。身肢俱に碎け、悶絶して地に墮る。良久して乃ち蘇る。諸の獄卒あり、其の狀醜惡にして、或ひは利斧・椎棒・刀輪・弓箭・杵砲・熱鐵哭杖の種々の苦具を執り、罪人を考掠す。復た百千の猛焰火刺あり、四方より來り、叢りて其の身に集り、燃えたる杭木の如く、悉く皆焦爛す。復た利刀を以て其の舌を取り、或ひは斲り、或は剉む。百千分と爲し、乃至あらゆる一切の身肢倏然分散すること猶ほ浮雲の如し。復た罪人を熱鐵の甕中に置き、熾火四に逼り、其の湯は沸溢して上下漂沈すること、猶ほ豆を煎るが如し。身體脹盡し、皮肉消盡し、唯骨鎖を餘して、地に撈撫す。業風の吹く所、還活して故の如し。是の如き衆苦、甚だ怖畏すべし。此の獄に墮するものは、能く免るを得るものなし。復た廣大なる寒冰地獄あり。大雪聚あり。其の高きこと山の如し。嚴冷なる惡風は飄注して絶へず、大深淵あり、結んで冰臼を成し、其の狀宛として水精の成す所の如し。諸獄卒あり、彼の罪人を逐つて盡く其の中に入れ、寒苦逼切して發聲悲號す。復た二杵あり。更に相上下して以て之を擣つ。其の身の碎壞すること聚沫團の如し。業風吹いて活くこと、前の如く異ならず。長時苦を受け、業盡きて方に出づ。彼の諸の有情、皆染惡邪欲の因縁に由る。他の身色に於て耽著して捨てず、微少の樂を貪り、多苦の報を受く。是の故に世尊は深く憐愍を生じ、大悲心を起して此の經を説く。

復た何を名けて窳憎會苦と爲すや。謂く、彼の有情、貪欲に樂著し、多く財利を求む。互に相侵競して、深冤を結ぶ。或ひは妻子の恩愛に纏縛さるる所となり、猶ほ桎梏の如く、自在を得ず。當さに知るべし、女色は人をして惑亂せしむ。其の語柔輒にして、拘卒那花の如し。愚夫之を嗜み、壯色を銷除して久しからずして枯悴す。喬答摩仙乃至諸天の多く欲樂に著するが如し。薪の火に近づけば、必ず焚く所と爲るが如し。是の故に比丘よ、常に當に遠離すべし。若し彼の欲に近ければ第一苦を得。一切世間・諸天及び人は皆欲火の普く逼迫するところとなる。現に衆苦を招き、死して惡趣に墮す。彼の十三廣大火聚の爲めに圍繞されて燒然さる。佛は世間の衆生の慈父となり、彼を憐愍するが故に、此の經を説く。所謂地獄には十三種あり。一には等活、二には黑繩、三には衆合、四には號叫、吾は大號叫し、六には燒然、七には極燒然、八には無間、九には糖煨、十には屍糞、十一には鋒刃、十二には、劍林十三には灰河なり。是の如き地獄は諸惡險難にして無量の苦惱あり。其中に聚集せる無數の有情、無量の惡業を造り、命終つて彼かしこに入り、多種の苦を受け、諸の獄卒の爲めに種々治罰せらる。熱鐵鎚を以て忿恚して撃つ。形體碎爛して、周うま遍く血を流す。諸骨節の間悉く皆火然たり。後た其の足を捉らへ、擲ちて火坑に入れば、手を舉げて忙亂し、惡聲號哭す。彼の殘廢卒は極惡にして懼るべし。諸の罪を受くる人、見て即ち惶怖す。或は復た趁もつて糖煨の獄中に入り、皮内筋骨・不足消潰す。惡業に由るが故に、踵を旋らして還た生る。復た深廣極熱の屍糞あり。臭く聞くべからず。鐵笄蟲あり、酷擊波と名く。其の中に往來して罪人の足を噛み、肉を徹して骨を穿ち、髓を取りて食ふ。復た無數の鋸利鋒刃を以て、次第に排列して其の路をなし、彼の罪人を逐つて足履を以て踐む。復た猛風吹きて其の上を走るが爲めに、其の苦を避くるに由りて劍葉林に入れば、無數の劍鋒空より下り、其の身を斫刺して斷壞せざるなし。復た大河あり。灰汁盈滿し、波浪湧沸して、彼の罪人を煮る。其の兩岸に於て諸の獄卒あり、三戟叉を執つて往來し又刺し、

【一】趁。はしる、おふ。

卷の第五

復た何の義を以て説いて名けて憂となすや。謂く、諸の有情、貪欲に由るが故に、憂怖の中に没す。猶ほ猛獸の火に圍繞せらるゝが如し。深淵の魚を之を陸地に置くが如し。大海に入りて其の船筏を損じて、深心愁感して身命を失ふを恐るゝが如し。小水を以て熱鐵團に滴らすが如し。將さに死門に入れば、命は久住ならず。譬へば釜中豆を煮るに彌滿騰沸すれば復た乾薪を増すが如し。彼の世間の人、身家に處りて憂の逼切するところ爲り、諸根衰悴して心暫くも安きことなし。酥瓶を以て炎火に近づくが如し。當に知るべし、久しからずして則ち消壞をなす。

復た何の義を以て説いて名けて悲と爲すや。謂く、諸の有情先きに珍財あり、任持すること能はず。身復た懈懈にして貧苦を致すを以て、身形裸露し、容色憔悴し、咽喉乾焦し、言意悽切にして昔の富饒を念ひ、復た得る能はず。

復た何の義を以て説いて名けて苦となすや。謂く諸の有情は非法行を造り、身は憲綱・刀杖毒藥に觸れ、或ひは非人の斫刺殘害する所となる。乃至命を斷つて諸の楚毒を受く。

復た何の義を以て説いて惱と名くる。謂く諸の有情は惡言相加へ、毒箭に中るが如く、諸根煩擾して樂想を失壞す。

復た何を名けて求めて得ざるの苦とするや。或ひは諸の有情、正法を樂習し、能解に入る能はず。身心勞苦す。或ひは放逸に由つて多く求めて遂げず、熱惱を發生して欲なく求むるなく、心則ち安穩なり。

復た何を名けて愛別離苦と爲すや。謂く、所樂に於て眷屬朋友、和合歡慰し、勿爾たぢともに離散し、心に戀慕を懷きて熱惱を生ず。

し、或ひは先の所作、諸の放逸の行、皆悉く厭患して思惟せず。猶ほ深寃あつて心に樂見せざるが如く、甘蔗滓は再び味ふべからざる如く、枯枿を焚けば、盡きて餘り無からしむる如し。是の如く覺了すれば、是の人璣摩羅王の逼切する所とならず。又諸の女人は諸の貪很多く、心に怨嫉を懷き、樂んで主宰を爲す。猶ほ漏瓶に其の不淨を貯ふるが如く、牝馬藏の深く厭惡すべきが如く、毒藥を以て其の美膳に和するが如く、寃は劍を執つて附近すべからざる如く、彼の火聚の觸れて熱惱を生ずるが如し。若し欲境を樂めば、心則ち錯亂して諸梵行を破し、無戒者の其の樂因を斷つが如し。慧命を喪失して死軍現前して、獨一にして往き、彼の嶮難に趣いて、能く救ふ者なし。皆な欲染に由つて、諸の妄念を生じ、無慚無愧にして、知足の行を捨て、世間人の種々の譏謗を爲す、云何ぞ死と名くるや。頗有あつて云ふが如し。

慧を最勝眼となし、

癡を極重暗となし、

病は必ず其の寃による。

死を第一の怖を稱す。

當に意は正法を樂んで

慧善を以て修作すべし。

是の故に命終の時、

決定して嶮難を離る。

是を名けて死所有の熱惱と爲す。

瘦して、唯一毛聚となるが如し。朝に作す所あるも、暮には即ち癡忘し、初め施爲せんと欲して、後中には則ち懈退す。言は小兒の如く、期度あるなく、或る時は終日、口、語を發せず。晝夜の中に於て唯睡眠を務む。縦ひ眠るも寐ねず、喘嗽時なく、所苦を説かんと欲するも、言明了ならず、遠行の人の久しく住するを樂まざるが如し。諸有の作す所、意の如くすべきは難し、小しも心に稱はざれば、則ち悲惱を生ず。親友慰諭すれば、宜しく自から安懷す。目に境界を視るも、諸の快樂事を受用する能はず。但だ耳に説くを聞き、意遊行せんと欲するも、足動く能はず。唯几杖を假りて、以て、其の伴となすも、諸女人の輕笑する所となる。因つて昔日、諸根康愈にして諸の快樂を受け、剎那に變壞するを念へば、深く自ら悔惱す。久しく活きて何をかなさん。是れを衰老熱惱の行相と名く。

云何ぞ病苦所有の熱惱と云ふや。謂く、諸の愚夫盛年壯色にして、放逸にして欲に著し、漸く怯弱を成せば、痲疾に榮纏せられ、衆苦現前す。善人之を視て、深く憐愍を生じ、善言誨誘して、其をして發露せしむ。聞き已つて憂怖し、惡道に墮することを恐る。形貌の端正も、病の侵奪する所となり、上妙の飲食も食噉する能はず。豪富に處ると雖も貧窶者の如し。世の有智の人は常に自ら省察して、病苦は愛樂すべからざるを知るべし。電の苗を損じて頓に榮盛を傷ふが如く、陸地の龜の常に其の水を思ふが如く、白晝の月の彼の光輝なきが如く、渴乏の人其の枯井に墮つるが如く、油盡きたる燈の久住するを得ざるが如く、腐れたる牆壁は堅牢あるなきが如く、癡騷の童は人の輕侮する所となるの如く。彼の狂象の蓮花池を壞るが如し。是を病苦所有の熱惱と名く。云何ぞ愚夫、數數貪著して壽命を減損し、善根を焚燬し、無明の覆ふ所となり、耶命耶求して、彼の世間の飲食衣服を貪り、身漏心漏に正智を破壞して、寂靜山林に依止するを樂はず。大乘經典を受持讀誦して、堅固に淨戒を護持する能はず。何に由つて能く菩提の彼岸に趣かん。若心寂靜にして、欲境に樂背

衆僧和合の樂

諸の善行を修せしむ。

若し佛興世せずは

三界何んぞ樂あらん。

佛出現に由るが故に

我等安樂を獲ん。

諸の有情、不善の種子に由つて、以て其の因を爲し、能く苦樹の境界に生長し、常に三毒苦火の燒くところとなる。彼の世間の富樂の事に於て、但だ他説を聞くのみ。何に由てか識知せん。曠野を馳涉して、險難なる惡道、砂磔荆棘を馳涉して、諸の艱辛を受け、以て、自濟を乞ふて、歸趣する處なし。是の如き有情、宿に善本乏しく、惡道に沈溺して、輪轉すること窮なく、俳優者の其の形色を易せるが如し。設ひ人となるを得るも、貧窮の家に生れ、母胎の中に於て、種々の苦を受く。

云何ぞ有情、胎藏中に處りて、諸の苦惱を受くるや。世尊説くが如し。初めて生を結ぶ時、其の父母赤白二物の不淨を攪つて縁と爲し、漸次増長して、其の形質を成し、生藏の下熟藏の上に居りて、其の中間に處し、極惡臭穢なり。母或ひは飽食し、或る時は飢渴し、身肢動轉し、及び染欲の事をなす時は、皆其の苦を受く。又將に産する時、母胎の中に於て居止するを樂ばず、不淨想を起して、生間に廻趣し、二手乍ち胎子の身分に觸れ、大苦楚を受けて、極重熱惱す。彼の初生子は飢渴に由るが故に、發聲啼哭して、母に向つて乳を求む。又乳は、血を轉じて成す所、或ひは食充たざる時は、其の熱惱を受く。漸く嬰子となりて便利に臥し、或る時は戯劇しくして、溝坑に墜つ。此を生じ已つて受くる所々熱惱と名く。餘の世間人も亦皆是の如し。又彼の有情、年漸く長大にして、色力充滿し、嬌恣放逸にして、念々に五欲の塵境を追求す。染慧に由るが故に、耽著し捨てず。自ら其の情に任かせて、速に斃るゝに至る。

云何ぞ衰老所有諸苦といふや。形色羸瘦して面頰凹戻し、牙齒疎缺し、毛髮稀白に、頸臂胸脇は悉く皆骨現はれ、火力漸く微かにして、飲食薄少となる。猶ほ飛鳥の籠内に置かれて、日に漸く消

福を時を俱にして盡く。二者なる往詣に亦た三種あり。一は自往猛獸を捕ふる等、二は他詣劫掠する等、三は自他相遇鬪戰等なり。復た山類あり。一には放逸、二には毀戒、三には報盡なり。放逸に由るが故に其の慧命を斷つ。毀戒に由るが故に、諸威儀を破る。報盡に由るが故に、内外眷屬は、圍繞して悲戀し、捨て去る能はず。是を名けて死となす。

云何ぞ憂と名くる。内心愁感して火の逼ること切なるが如く、亦炎日の如く炙水湯の如し。是を名けて憂と云ふ。

云何ぞ悲と名くる。涕泣流涙し、哽咽言ひ難く、其の孝子の慈父を追念するが如く、及び餘の親屬も一切皆な然り。意、寂靜ならず。是を名けて悲を爲す。

云何ぞ苦となす。礫辣荼毒・樂と相違し、五識身に同じ。相應領納する、是を名けて苦となす。

云何ぞ惱となす。譬へば枯木の中を火を以て燒くが如し。彼の有情をして、煩惋懊擾して、意識身と相應領納せしむ。是を名けて惱となす。

云何ぞ求不得苦となす。謂く、所求の諸相應事に於て、未だ意の如きを得ず。心に疲極を生ず。陶家の輪の如し。此の心隨轉す。

云何ぞ名けて愛別離苦となす。所樂の境に於て、相應の眷屬所有の色相、剎那にして、變異するを云ふ。

云何ぞ冤憎會苦となす。謂く、一切の非相應人に於て、互に嫌惡を生じ、返つて值遇すれば、此の中の所説生等の次第轉展推求して、皆熱惱をなすこと、曠野の鹿火に圍繞せられて自ら出づる能はざるが如し。必ず燒かるゝ所とならむ。唯だ如來初めて降生の時善法を増長し、寂靜安穩にして、體性自然に諸の熱惱を離るゝを除く。契經の偈に云ふが如し。

諸佛出世の樂

演說正法の樂

る、是を念戒と名く。常に飲食を以て、佛及び僧に施し、是の如き因に住する、是を念施と名く。常に樂んで諸大菩薩を禮敬し、佛勅に隨順する、念賢聖と名く。

若し諸の衆生、佛の所説に依り、正惟に住すれば、則ち疑惑を除く。正念に依止すれば、則ち散亂なし。是を六念となし、諸善を生長す。何の義を以ての故に比丘と爲すや。謂く能く永く諸の煩惱を斷するが故に。あらゆる世間の生苦・老苦・病苦・死苦・憂悲苦惱・五取蘊苦・求不得苦・愛別離苦・怨憎會苦、是の如き諸苦は皆已に盡くる故に。此の世間五取蘊苦を明し、是の如き説を作す。

何の義を生と名くるや。世尊の説くが如し。彼彼の有情は種々の行を造り、命根・蘊處界等を招感し、展轉相續して、五根發生し、五根生ずるが故に、衆は同じく分生す。是に由りて増長し、形色圓滿す。是を名けて生と爲す。

何の義を老と名くる。世尊の説くが如し。行蘊邊壞して、諸根衰朽し、身形偃曲し、肌肉枯槁し、皮膚緩皺して、多く鬢點を生じ、舉止沈重して、行くに須しく杖に倚り、疲乏して堪ゆるなく、人に假りて守護すべし。かくの如き老相は此に二種あり。一つには人の承事を須ゆ。二には依怙する所なし。是を名けて老と爲す。

何の義を病と名くるや。世尊説くが如し。四大は増減し、界は不平等なること、猶ほ毒蛇の如く、諸の苦惱を生ず。此に二種あり。一は内より發起する所、二は外縁の損害する所。復た三種あり。一は業報の招く所、二つに横難の侵損する所、三は他の爲に呪詛する所なり。委細に分別すれば、無數の種あり。謂く風痲痰癘疥癰癩疽・嗽瀉熱毒・麻痺疼痛等なり。是を病と名く。

何の義を死と名く。世尊の説くが如し。謂く彼の有情は衆の同分を捨て、諸蘊散亂し、觸觸漸く微かに命根斷滅す。此れに二類あり。一は自盡なり。二は往詣なり。初(自盡)復た三あり。謂く、命根盡くと雖も、其の福未だ盡きず。或ひは福盡くれども、其の命未だ盡きず。或ひは命と

「大悲無上尊

世の名聞

初め降つて王宮に生れ、

現に微笑思惟するは

専ら利他の行を修し、

及び財利を増長するを求めず。

四方に於て瞻視し、

皆な群有を度せん爲なり」

是の時復た妙臂童子あり。亦た伽陀を説いて佛を讚す。

牟尼尊大優は

過を離れて希望なく、

善く諸の法要を説く。

聞く者皆な益を蒙る。

諸天及び世人

十力尊に歸命し奉る。

咸な供養したまへる。

唯願くは攝受せられんことを。

此の祇陀林の給孤獨園は、五種の因に由つて咸な愛樂を生ず。一には廣博にして城の中央に居る。二には、比丘乞食するに遠からず。三には幽寂にして諸の喧鬧を離る。四には清潔にして諸の蚊蛇なし。五には善人多く其の中に遊ぶ。是の故に世尊多く樂んで此に居たまふ。住すること實智の如く、無慚の行を離れ、一切功德依止顯現して、十力を具足し、福智莊嚴して、彼の世間第一の導師たり。故に能く衆生の善根を成熟し、猶ほ蓮華の淤泥に出するが如し。自利利他、悉く圓滿なるが故なり。時に勝軍王、并びに諸人民、及び諸外道、婆羅門等、皆な悉く往いて祇園精舎に詣り、合掌して、佛足を頂禮す。時に佛世尊、諸の有情を憐愍攝受するが故に、諸の異見を破して、信解を生ぜしむ。不善の因に由るが故に、五趣に馳流す。當に正法に依りて出離を求むべし。彼が爲めに六念の法を宣説し玉ふ。善男子よ、我が法中に於て、教誨を信受し、諸の正見を具する、是を念佛と名く。若し樂廣大に、正法を聽聞し、理の如く思惟する、是を念法と云ふ。諸の比丘に於て、常に善智識を尊重する想を生ずる、是を念僧と名く。諸の善法に於て、愛樂攝受し、威儀を具足す

本を植へ、昔の宿願力に由つて、今復た是の如し。時に外道あり、摩多呬致那と名く。草菴に居止して、苦行を修習し、諸の世間一切衆生の言論智慧に於て、皆悉く通達す。謂ふに『祇陀林は、最上殊妙にして、諸の奢麗を極む。云何ぞ世尊、及び諸の比丘は受用を得るや。』佛、是を知り已つて、大方便を以て彼の類を憐愍して、之れに語つて曰く、『我、諸弟子は苦際を盡し、善く出世の經律論藏に達するを得て、煩惱を斷するが故なり』と。是に於て、世尊は彼の外道の爲めに伽陀を説いて曰く。

汝、大龍の如しと雖も、

讚毀二種に於て

身若し衆瘡あらば、

三有の中を循環すること

時に彼の外道、佛説を聞き已つて、心に悟解を生じ、偈を以て佛を讚す。

如來、世間に出て

況んや我微劣の知を以て

設ひ多劫中に於て

佛の功德を稱讚するも

佛は天中の僊となり、

四威儀の中に於て

時に舍衛城は諸外道、及び婆羅門多し。聰智の者、佛此に至るを聞き、競ひ來つて詰難す。如

來方便して、宜しきに隨つて説を爲す。師子吼へて諸群獸怖るゝが如し。悉く了悟せしめ、諸癡暗

を離る。時に智者あり。羅護羅と名く。佛徳を讚するを聞き、偈を説いて言く。

尙ほ食の所染となり、

則ち彼の動かす所となる。』

飛蠅は則ち隨逐す。

蟲の糞壤に居るが如し。

慧日は諸暗を破る

何に由てか悟解を得ん。』

復た百千の舌を以て

少分も盡す能はず。

衆生の諸行を知る。』

唯、含識を利樂す。

唯、含識を利樂す。

卷の第四

何の義を以ての故に、祇陀林と名くるや。昔勝軍王、其の隣國と、鬪戦して勝を獲たり。是の時に當つて、太子誕生す。乃ち戦勝を以て名を立てたり。林は彼に屬するが故に、祇陀林と稱す。富貴自在にして、無量の莊嚴あり、一切の人民、皆な悉く喜見す。此の林中に於て、廣く人財を以て營治守護して、嬉遊の處となす。其の稠密にして枚葉鬱茂し、清陰彌布して、諸の光炎を蔽ふ。夏は清涼多く、冬は嚴風なし。雨ふりて泥淖なく、奇葩芬馥として、周遍開敷し、樛枚偃亞して、其の莊蓋の如し。諸の警衛多く、盜寇を無し。其の地清勝にして、歡喜園に倅し。

何の義を以ての故に、給孤獨と名くる。親無き者に於て、飲食を施與して、周く給するが故なり。毘奈耶藏中に廣く其の事を明かにする如し。彼の長者、宿善根力に由るが故に、世尊を請じて供養恭敬せんと欲す。先づ如來の與へて、精舍を造立す。即ち百千俱胝の黄金を以て、其の價値となし、太子の所に於て其の地を貿易し、即ち其の志を遂げ、諸方一切の奇巧を召集し、最上宮殿樓閣を造作す。門軒戶牖、流泉浴地、種々の莊嚴皆悉く具備す。垣牆を崇峻にし、周匝圍繞す。是に於て長者王舍城に詣で、佛足を頂禮して、是の言を作す。『我今佛を請じ舍衛城に詣らん。唯だ願くは如來、大慈を以て允諾したまへ。彼に伽藍あり。廣大清淨なり、及び諸の弟子、同じく往いて安居さるべし』と。是時長者白し已つて還る。時に王舍城に、一長者あり。其の名を善寂と云ふ。世尊に白して言く。『須しく彼に往くべからず。我當に佛の與へて、精舍を造立すべし』と。佛即ち之を止む。時に佛、彼の舍衛城に至り已つて、長者乃ち造る所の伽藍を以て、如來に奉施す。彼を哀愍するが故に佛即ち之を受く。復た彼の地方所は、最上吉祥にして、第一安穩にて、過去の諸佛も亦た此の地に於て、一切衆生を利益し、安樂せるを稱讚するを爲す。汝先佛に於て、久しく徳

【二】倅。均也。ひとし、同じ。

ち數の始なればなり。謂く一聖生、一出離法、一遊止處、一淨梵行、一解脫音とを、皆悉く同しきが故なり。何の義を時と名く。世俗に依りて立つるなり。經を説くこと已りて、大衆喜懽す。名けて一時となす。如來の法を説くは、日の世を照すが如し。三有の暗を破り、今出離する故に、諸魔外道、正法を毀謗す。今佛甚深希有難得の法を顯現して、降伏せしむるが故に。何の義か薄伽梵と稱する。殊勝廣大の名聞を具足して、世・出世間に、與に等しき者なし。畢竟して昇趣輪廻を超越して、當に人天の妙供養を受くべきが故に。云何ぞ舍衛城と云ふ。諸妙物、及び文行士・清信士女・豪富長者豊かにして、受用勝る故なり。何の義が住と名くる。遊化依止し、諸の思構を離れ、若くは遠く、若くは近く、隨意に至るが故なり。

て、恭敬供養す。是を過ぎて已後、彼の諸の人民、咸な佛所に詣り、佛に請ふて、五年、諸の供養を設け、一切の所須、充足せざるなし。諸の比丘よ、意に於て云何。往昔國王として彼を供する者、則ち我が身是なり。曩に因を植うるに由りて、今方に成熟して諸人天の廣く供養を興すを得たり。宿因今果、毫髪も差はず。因に由りて果を感じ、果は其の因の如し。此に於て正に知る。諸の疑網を除けば、善惡の業報は、決定して虚しからず。猶ほ瀑流を加へ、勢制すべからざるが如し。彼の業力の故に、各々其の報を招く。地界水界・火界風界及び蘊處等、自ら福因を作して則ち樂果を受く。時に世尊、伽陀を説いて曰く。

百千劫を經るも、彼の業は壞すべからず。

因縁和合する時 果報決定して受く。

諸の比丘よ、是を福蓋正行と名く。汝當に受持して施戒及び禪定を勤修すべし。受用の福蓋は熱惱を離るゝを得。

此の義略して先佛の所説、結集・契經・緣起の行相を明す。最初經首に其の「如是我聞」の言を標す。何に由りての故に、如是と稱する耶。佛の説く所の如く、別異なきが故に。何の義を我と名くるや。現在身を指すなり。世俗に順するが故に。何の義を聞と爲すや。謂く耳、識を發して、現前に若くは文若くは、義を了智して、増減顛倒の失を離るゝ故に。最初の結集は梵網經と謂ふ。是の時の衆集は、大阿羅漢にして、數四百九十九人あり。唯阿難獨り學地に居るを除く。及び一切の天龍鬼神、初めに唱へて「如是我聞」と言ふを聞きて、聲を擧げて悲泣して、自ら勝ふる能はず。我等昔にあつては、親しく世尊は十力・四無所畏を具足して、梵音聲を以て、衆の爲めに演説するを觀る。如何ぞ今は乃ち「我聞けり」と稱するや。將さに知る、無常の力は脱すべからず」と。時に彼の衆會、皆な覺悟を得。三毒の垢を離れ、正念に安住して狂持して忘れず。何の義か一と稱する。乃

阿闍世王、是の事を聞き已つて、即ち宮中の最上樓閣に陞り、俯視諦觀して、佛世尊、及び諸弟子の、竹林園に在りて、寂靜安穩にして、嚴かに供養を設けて、大佛事を作すを見る。是の時國王、心に覺悟を生じ、悔過自責すらく、「我大愚癡無智錯謬にして、極重罪を造ること須彌山の如し。今佛世尊、世に出現して、廣大清淨なる功德を具足せり。而して我教誨を信受すること能はず。此の業縁に由つて必ず苦處に墮せん。彼の諸天子、尙ほ天中の上妙欲樂を捨て、佛所に來詣せり。我等云何んぞ、善利を興さざる。」と。是の語を作し已つて、即ち寶駕を嚴かにし、佛所に往詣して、頭面禮足し、心に憂惱を懷き、涕淚悲泣し、先咎を讞謝す。時に王舍城の清信士女、高聲に唱へて言く、「善い哉國王。佛法中に於て大覺悟を得たり。我等今は同じく善利を得たり。是の時國王、鐘を鳴らし宣令して、一切の大臣・人民、及び諸眷屬を召集して、之に告げて曰く、「我佛の出世には遭逢を得がたし。今既に觀るを獲たり。當に淨心を發して、供養恭敬して、樂ふて正法を聞くべし。即ち上妙香花燈明・塗香末香、及び諸花鬘・珍玩衣服を以て、種々莊嚴して供養を爲す。是の事をなし已つて、心大に歡悅す。是の時如來梵音聲を以て、彼の時會の爲めに、苦集滅道の四諦の聖諦法を開示し、演説す。無量の人天、法を聞いて解了して眞實見を得たり。時に佛世尊、諸の比丘に問ひ玉ふ『汝等是の諸天人民今我が前に於て、廣大施設供養し已るを見るや不や。』時に諸比丘、合掌頂上して、未曾有を歎じ、唯だ『然り、已に見たり』と。佛言く『我が法中に於て、若し人淨心をもつて、他の福業に於て、隨喜を生ずる者は、當に知るべし。是の人不壞信を得て、淨智眼を具す。』と。

『諸の比丘よ、我れ念ふに往昔無量生中、佛の出世あり。名けて寶山如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ふ。世に住して說法し、衆生を遶益し玉ふ。爾の時王あり。彼の如來及び諸弟子を請じ、王宮中に於て、夏の三月を度す。即ち種々の衣服飲食を以

し、蕭笛笙篔・琴瑟鼓吹、一時に具奏して、空より下る。時に彼の天主、身より光明を出し、諸の山川を照して皆悉く盈爛す。摩尼冠を戴き、諸珍嚴かに瑩らして其の光晃耀として日の盛んに明かなるが如し。面貌端嚴にして、額廣く平正なり。其の目は紺長にして鼻修く高直に、頤頰鮮白にして紅潤なること比なし。耳に寶鬘を帯び、頸に瓔珞を垂れ、指環臂釧は衆寶より成る所にして、展轉して光を舒べ、猶ほ珂月の如し。形儀挺持して、常に盛年の加く、修短充實して、各其の宜しきを得。公酷摩香及び多摩羅跋旃檀香を以て其の身に塗り、柔軟光澤ありて、手指纖圓に、甲は銅葉の如く、發語巧妙にして、清徹して遠く聞へ、迦陵音の如く、聽く者厭くなとなし。復た上妙奇絶の細繩を以てし、金を研いて之を飾り、以て其の服と爲し、諸妙珍琦を其の束帶と爲す。衆寶間錯して光明聚をなす。復た天上の諸妙花鬘を以て、其の身を嚴にし、周匝垂委し、行歩平正なること、猶ほ象王の如く、進止優遊して、扶掖を假らず。時に諸の人民、咸な瞻奉るを獲、願悲を懷く者も即ち歡悅を生じ、怨惡を起す者は、即ち慈心を發し、睡眠に耽ける者は、即ち惺寤を得。是の時天主、彼の閻に至り已つて、遍に所作を觀るに、皆悉く意の如し。踊躍すること無量なり。乃ち舊稱迦蘭陀を易へて、歡喜園と名く。即ち上妙衆色の茵褥を以て、遍く其の地を覆ひ、復た金銀・眞珠・摩尼・帝青・瑠璃・末囉迦寶を以て、高廣座となし、佛世尊を請じて其の上に安處し、衆寶を凡となし、以て其の足を承く。五色の繒線を以て、設けて衆位となし、諸の比丘に命じて、亦た各々坐に就かしむ。是の時天主合掌恭敬し、尊重讚嘆して、佛足を頂禮し、具さに天中の上饌美味なるを設く。是の時如來金色の臂を舒べて、象王の鼻の如く、其の食を受け、食し已つて鉢を置き、盥にて掌を澡漱し、安住して威儀は寂然消淨たり。時に彼の天主、諸の眷屬と希有心を生じ、樂んで法を聞かんと欲し、自ら卑座に處りて、專注に肅然たり。爾の時世尊、大方便を以て、爲めに法要を説き、施等の行を讚じ、示教利喜して、信解を生ぜしむ。是の如く供養すること、四日を経たり。時に

葉となし、綠寶を幹となす。無數の天女其中に住立して、衆の伎樂を作して供養をなす。表刹高顯にして衆の繪幡を懸け、空中に廻旋して遠邇皆な觀る。諸力士ありて、閤闔を守護し、青寶杖を持して左右に行列し、處々皆な曼陀羅華・龍自在華を植え、芬馥開榮して、地に繽紛たり。翠葉交映して時に香風を飄す。諸天子あり、形體光潔にして、顏貌熙怡として其の下に遊憩す。又た諸天女あり、殊妙なること比なく、徐歩して璫を鳴らし、聲韻和雅たり。諸の藥叉女、林内に嬉遊し、美目四盼に、花を遣り、香を墜す。諸の龍象あり、林中に徐行し、鼻を擧げて枝を嚼み、宛轉として戲をなす。及び諸の飛禽あり其の羽五色にして、翼を鼓して自若たり。喙もて花葩を啄ばむ。復た金籠を以て妙鸚鵡を置く。妙音清巧にして其の舌簧の如し。復た河源あり。清冷にして愛すべく、流泉激響し蛙鼃驚き避く。又廣大なる清淨池沼あり。七寶雜圓して以て階岸をなす。其の水瀾滿して澄湛にして垢なく、優鉢羅花・菡牟那花行列開敷して衆色相雜へ、翡翠鸚鵡、其の中に翔集す。諸戲魚あり、往來遊泳し、騰躍して浪を翻へす。鸚鵡驚轟。復た水鳥あり。鸕鶿鳧、聲を擧げて啜啜す。人の樂み聞く所なり。池の四岸に於て劫波木あり。柔條は水を拂ひ、清涼の風を生ず。諸花を叢植し、修藤滋布して枝葉繁盛し、其の香遠く聞ゆ。諸の遊蜂あり、競ふて其の藥を採り、發聲微かに響く。猶ほ詠歌の如し。復た金花あり。周匝圍遶して園圍に流注し、縈紆して絶へず。時に諸人民、迭たがひに相呼籲し、親屬朋友、咸な共に往いて觀る。諸の仕族あり。富樂莊嚴し、僕從雍容たり、幢蓋を執持して、諸の伎樂を爲す。具さに飾儀を設けて遊行周覽し、心厭捨なし其の地柔輦にして兜羅綿の如く、徘徊往來して足に疲情なし。是の如き最勝廣大なる園林、清淨なる池沼、唯だ天中を除きて餘に及ぶ者なし。

是の時工巧諸天子等、所作已に辦じ、即ち天宮に詣り、前んで帝釋に白ふす。是の説を聞き已つて、心に忻慶を生じ、未曾有を得たり。即ち無量百千の天子と、前後圍繞せられて、衆の伎樂を作

卷の第三

爾の時帝釋天主、佛に白して言く、「世尊よ、唯願くば此の王舍城に安住し玉へ。我當さに飲食衣服・臥具醫藥を供給して、乏しき所なからしむべし。」と。佛言はく、「天主よ、且らく斯の事を止めよ。諸の人天ありて、清淨心ありて、皆我に於て其の福業を興さんと欲す」と。是の時、帝釋復た佛に白して言く、「唯た願くば此に於て五夏安居して我が供養を受け給へ」と。是の説を作し已つて、佛復た之を止む。帝釋復た言く、「我今佛を請じて五日供養せん。唯願くば大慈をもつて、我が度請を受けられよ。」と。爾の時世尊、天主を憐惻し、福力を現する故に、未來に於て善因相續せしめんため、默然として許可す。時に帝釋、佛の請を受くるを知り、心大に忻悅し、即ち天宮に還り、工巧敏匠の天子を召集し、而して之に謂つて曰く、「卿等當さに知るべし、我今王舍城迦闍陀竹園に於て大精舍を建て、嚴に四事を辦じ、如來及び諸弟子を供養せんと欲す。汝當さに最上摩尼・金銀瑠璃・珊瑚玻璃・帝青寶等を持取し、彼に詣でて殊勝清淨廣大なる宮殿を造作し、要するに天中の如く、等しくして異なるあるなかるべし。是の諸天子意を盡して工巧して宮殿を造立し、廊廡柱楹・戸牖欄檻悉く衆寶を以て、間錯莊嚴して、千の日光更に相顯照するが如し。復た以て諸の妙珍禽を雕飾するが如し。眞珠花鬘、綜雜繡列して、微妙の香を燒き、衆の名華を散じて、氤氳普薰して周迴せざるなし。又復た重門樓閣を造作して、峻峙嚴麗なり。亦百寶を以て之を裝校し、諸の妙摩尼を以て其の戸となす。彼の諸寶柱は一一皆な金剛の諸珍を用ひて、共に合成せり。無數の寶鑑、淨くして瑕垢なく、空中に懸柱して百千の月の如し。復た鑿金を以て三足の床を作り、殊妙の天衣を以て其の上に敷く。又復た衆妙の天女を刻成し、容止端雅にて、能く往來して手に蓮花を持ち、以て奉獻するが如し。妙玻璃の寶を以て其の地を焚き、妙池沼ありて、蓮花をもつて莊嚴し、黄金を

陀、是の語を聞き已つて、即ち往いて佛に白す。佛、之に語つて曰く、「我豫め知り已る。奚んぞ必ずしも軫慮せん。我が法中に於て未だ嘗つて一聲聞弟子だも闕乏せる所あらず。況んや我が身をや」と。時に佛世尊、大光明を放ちて王舍城を照し、皆な清淨ならしむ。斯の光に觸るゝ者、身心泰然たり。是の時帝釋は佛の光明を觀、天眼を以て觀じ、其の由る所を知りて大勇猛を發し、大威徳を現じ、大檀越と爲りて大供養を興す。

るを信せず。設ひ人となるを得るも、下劣の族に生る。或は屠殺の家、或ひは除糞の家、造車・作餅・捕魚・審師・耕夫・織者・作剃髮人・染洗衣の人の諸の不善處に生れ、衣食弊乏にして、他に役使せられ、手足皴裂して、多苦多求にして日に少暇なし。復た諸病の纏縛する所となる。疥癩・瘡癬・痔瘻・癩疽・嗽瘡・瀉痢・癩狂・熱病、是の如き等の疾、其の身に逼惱し、羸瘦憔悴して、手足攀躓し、唇口喎斜し、頭髮鬢亂して、兩泪流淚し、下色にして人に求め、破弊の衣を著け、拽挽して進み、或は復た遺棄せらる。亦た覺知せず、風の吹く所となりて形體裸露し、糞壤に坐臥して、猶ほ自ら娛と爲す。自ら其の髮を抜いて、殊に慚耻なし。往來の者に語りて我を顧みて何するものぞ」と。或は破器を持して週に里巷を経て、少殘食を得、以て自ら活命す。百千の蠅虫、競ひ來つて糞啖し、内外の垢穢は、衆の惡賤する所となる。不善の因の招集する所に由りて自ら惡行をなし、復た他をして作さしむ。是の人は則ち苦惱の藏と爲る。是の故世尊は常に大悲を以て一切を憐念して、發心して決定して悔過せしめ、速かに諸惡の過患を解脱せしむ。

此の經中に説く。唯だ正行福業を修作して、能く天の富樂勝報を招く。是の故比丘よ、此の經を受持し、人の爲めに演説し、説の如くに修行すれば、則ち自他の福蓋をして成就せしむ。

爾の時世尊、王舍城迦蘭陀竹園に住す。時に提婆達多是極めて大愚癡なり。毒惡心を以て佛法を損害し、爲めに百千の障礙留難をなすも、佛の一毛の端をも動亂する能はず。即ち時に彼の阿闍世王に語る。「當に嚴敕を出して城中に宣布すべし、「一人も佛所に往詣し、及び飯食を以て供養をなすを得ず。」と。當に知るべし、瞿曇は則ち所得なく、必ず當に此を捨て、遠く他國に適くべし」と。

王、是の説を聞きて信じて之れに従ふ。時に彼の城中の諸優婆塞、是の事を知り已つて、咸曰く、「苦しい哉、今王舍城は主宰あるなし。如來の出世は值遇し難きこと、優曇鉢化の如し。云何ぞ大王は佛師を信受して、我等の往詣供養するを聽さず、如來の我輩を攝受するを許さざるや」と。尊者阿難

一切の愛樂も悉く他の有となり、一切の珍寶は咸な盡きて棄捨せられ、霹靂火の破壊して餘りなきが如し。覺知する所なく、奄然として長逝し、刹那に變異して人をして怖懼せしむ。父母妻子・内外親屬は、悲哽流涙して心腑痛裂し、迭ひに相號呼す。「我を捨て、何に去るや」と彼の他世に於て獨一にして往くこと、猶ほ幼童にして其の伴侶なきが如し。大黑暗に入り、大險難に趣き、大深坑に墮し、大苦海に没し、歸するなく、救ふなく、依止する所なし。琰摩の使者、黑夜母天、目を怒らし、牙を利し、醜狀畏るべし。憤怒叱責して繫縛して去る。其の疾きこと風の如し。琰摩所に至り生れて崇善されず、死して苦處に歸すれば、無量の鋒刃空より下り、身分を斫刺し、肢節を斷壞し、心を割ち、舌を割き、血肉交潰し、手足の指節截ちて棄擲し、唯筋肉ありて、連持して散せず。大苦惱を受け、尋いで即ち悶絶す。業風の吹く所、倏爾ちに還活し、長時に苦を受けて業盡きて脱を得。

若し諸の衆生、佛語に信順し、樂んで福業を作し、一切衆生を利益し安樂し、其の所須に隨つて能く給與し、寒凍に於ては、其の炎煥を與へ、煩熱に於ては爲めに清涼を作し、渴乏に於ては汲むに清泉を以てし、飢餓の者に於て之に飲食を施し、河流に溺るゝ者には之を濟ふに船筏を以てし、居止なき者には其に舍宅を給し、貧窮の者に於ては之に財帛を賜ひ、評訟する者に於ては勸めて和順せしめ、獨り行く者には爲めに伴侶を作し、病苦の者には之に良藥を示し、服して輕安ならしむ。蛇に螫されたる者には、眞言加持して其の毒を消除す。我慢を恃む者には、投くるに智劍を以て自ら調伏せしめ、各々悉く安隱快樂を得しむ。若し能く是の如く衆生を利樂すれば、現在に即ち如意の福報を得、他世の中に於て唯だ此の福業は其の伴侶と爲り、歸と爲り、救となり、所依止となる。若し諸の衆生、慳業に慣習すれば、勝福田に於て惠施する能はず。設へば佛弟子、優波離の如し。來つて彼人を化するに、心亦た喜ばず、施福は能く樂報を招き、罪惡を集積すれば、後輪廻を受く

の根隨煩惱を祛り解脫を得しむ。然るに彼の有情、善種子なく、資糧あるなく、勇猛を發さず、解脫を求めず、三毒痼疾の纏縛する所たり。是の如き人化度すべきこと難し。是の故に如來は平等の大悲を以て冤親の想なく、法藥を授與して之を服行せしむ。爲めに布施持戒等の行を説く。常に當に甚深の經典を受持すべし。又彼の人身は極めて得難しとなす。譬へば盲龜の浮木の孔に遇ふが如し。勤めて十善を修めて苦際を離るゝことを求め、縦ひ人身を得るも中國に生せず、諸根具せず、或は佛法に於て心愛樂せず。或ひは復た彼の無佛世界に生れ、或は惡業に因りて瘡癩の報を受け、口に諸佛の正法を宣ぶる能はず。又諸の衆生、愚癡の覆ふ所となり、邪見惑心ありて善知識に背き、正法の船を壊ち、法寶の山を摧き、智林の木を伐り、解脫の城を逃れて、三惡道を闢き、淨心信索に入解する能はず、眞實の法幢を建立する能はず。則ち爲めに天中の宮殿を焚燒して世間廣大の珍財を積聚して、自ら豪富を恃んで、大我慢を起し、無智愚癡にして能く觀察せず。惠施を修せず、亦受用せず、彼の憍耀の執持する所となり、此の身は老病死苦の常に隨逐する所たるを悟らず、諸惡業を造りて發露する能はず。彼の盛年の時、色力充實し、身形光澤し、諸垢を潔去し、常に愛樂を生じ、其の衰老するに及び、身肢は顫動し、皮膚緩皺して、多く黑點を生じ、唇口乾焦して氣息喘迫し、髮白稀少に、牙齒疎落して、體に瘡癬を生じ、肥肉消瘦して、諸根は暗塞す。筋急に拘牽して、頭足相近づき、行歩遲留す。一切の身分猶ほ執縛の如く、意欲の至る所、須しく扶掖を假るべし。歌舞嬉戲も復た思惟せず。上妙美味も復た食するなし。設ひ飲噉せんと欲するも、喉嚢む能はず。目は文字を視るも辨了する能はず。意欲の囑する所言分明ならず。出入の息微かにして氣相續かず。涎涕流落して便利は身を汚し、腹脹りて絞痛して呻吟遠く徹る。唯皮骨のみありて假臥して床に在り。面は醜狀を現して大恐怖を生ず。是の時風あり、肢節の間に觸れば、猶ほ針刺の如くして、痛は忍ぶべからず。一切の醫師は之を捨て、去る。無量の憂惱の燒煮する所となり。

法師に親近して、理の如く思惟し、心に覺悟を生ず。當さに知るべし、是の人は能く生死長夜の中に於て、大智炬を秉り、涅槃城に入り、甚深の法、若しは理、若しは事に於て、悉く能く了解し、成なる通達を得。諸の疑惑を離れて、諸癡暗を破し、輪廻を出離して心に解脱を得て、能く無盡の法樂を受用す。

世尊の説くが如し。有漏の世間は勝慧を生ぜず。唯だ正智燈のみ、能く癡暗を破る。是の故に智者は當さに出世無漏の正法を求むべし。と。佛所説の契經に於て、相應の教法を論議す。應に善く觀察すべし。諸の有情、福非福を造り、各彼の報を受けて、定めて差減する無きが如し。當さに知るべし。世間は皆な因縁生なり。若し衆生なくんば則ち煩惱なく、若し煩惱なくんば則ち地獄なし。是の故に我今因縁法を説く。外道の邪執異見の、無因無縁にして一切法を生ずといふが如きに非らず。彼は計つて、棘刺鎗利は何人の削づる所ぞ、禽獸の毛羽は誰れが彩繪を爲すや。是の事顯然なり。何んぞ因業を假らむ。此に由つて了知す。世間の所有は自然より出て、脩作を須めずと、如來知り已つて大悲心を起し、憐愍教化して、彼智光明を以て、彼の癡暗を滅し、漸く一切知智に悟入せしめ、木の邪見を捨て、佛法の中に於て、心解脱を得たり。

此の經中に説く。佛の教誨する所、施等の法は能く輪廻を出て、諸の快樂を得ると説く。現に世間の諸の有情類を見るに、福非福を造りて苦樂の報を受く。給孤獨長者の如き、淨信心を起して、三十俱胝の金銀珍寶を以て、如來及び諸弟子、阿菟樓駄大阿羅漢等に奉じ、精舍を建立し、大供養を興し、現生に無量福報を獲得し、大名稱を具して安隱富饒に、種々の帑藏悉く皆盈溢し、親屬朋友・奴婢僕從、廣多熾盛にして皆な圓滿を得。無盡殊勝の快樂を受用す。斯く施に由るが故に、感報是の如し。又諸の如來、大悲にて一切衆生を憐愍すること、世の醫王の能く良藥を以て善く世間の風痼痿癱、種々の諸疾を療し、除愈せしむるが如し。如來も亦た然り、善く法藥を説いて、能く衆生

卷の第二

爾の時帝釋天王は首に摩尼殊妙の寶冠を戴き、切利天より佛所に來詣して佛の身相衆の功莊嚴を見たてまつり、心大に歡喜して未曾有を得、頭面して佛世尊の足を敬禮し、大妙音を以て佛徳を稱揚す。「若しくは諸の衆生、佛の相好を靦て、希有心を發して、供養恭敬し、尊重讚嘆すれば、則ち能く四種の魔業を破壞し、義利を成就して大吉祥を獲る。汝等天人よ、及び諸魔梵よ、皆な當さに此に至つて、無上尊に觀ゆべし。」是の時諸の持明大仙、日月天子及び諸の宿曜・水天・火天・多聞天・焰摩天・大梵天・力堅天・那羅延天・鉢囉吹摩那天等、及び諸龍神・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・畢殊多・毘舍遮・塞健陀等あり。是の如き衆類、皆共に一心に、佛が功徳を供養し、禮拜し、讚じ奉る。是は出世間・第一の智慧、廣大なる名稱ありて、聞智せざるなし。舍利弗等の諸大聲聞は皆な彼の智境界を了する能はず。蘇彌盧の頂より色究竟天の頂に至る、一切有情、咸共に諦かに如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊を觀す。其の所説の法、言に虚妄なく、初中後善に、其の言巧妙にして、其の義深廣、能く寡聞無智の衆生の愚癡闇鈍を破り、彼をして聞かしめ已つて、大覺悟を生じ、樂ふて正行を修し、慧命を増益して、決定して惡道の怖畏を免れ、能く涅槃廣大の城門を開き、不思議解脫の境界に入るを得。

此の經中に福蓋の先因を説く、云何ぞ了知するや。是の説を聞き已つて、廣く淨施を行じ、禁戒を堅持し、世の欲樂に於て、愛樂を生ぜず、あらゆる善利、咸な信順を生ず。是の如く修作すれば、速に成就を得。譬へば人ありて夜暗中に於て、大炬火を持し、大舍宅に入り、彼の方處に於て皆明見を得るが如し。是の中のあらゆる珍寶庫藏・種々の什物、若くは精、若しは龜、各々顯現して、悉く能く受用し、安穩樂を獲。若し復た人ありて、此の經中に於て、受持讀誦し、樂ふて深義を聞き、

「汝善男子よ、我、三大阿僧祇劫に於て、無量清淨正行を修習し、廣大無邊の福智を積集するは、少因を以て能く獲得するに非らず。無盡功德寶藏に安住して、大悲心を以て決定して無量百千の地獄の衆生を拔濟して、冤親の想を離れ、皆な苦を息めしむ。」と。

異論を破り、入解せしめ已つて、智心を發生して皆身心の熱惱を遣除するを得て、一切の罪惡皆な消殄を得。彼の牟尼言は蓋廣の蔭は煩惱の日を蔽ひ、清涼を獲る如し。若し能く畫を彩り佛像造作して、香花鬘を以て隨分供養し、乃ち生天の階漸を爲す。佛言に依るが故に。所有の業障、刹那清淨にして禪定解脫して、皆現前することを得。外道の一生を虚擲して修作する所なく、邪妄見を起し、恒河の水に依つて洗ひ、解脫を求むるが如きに非ず。是の如く知り已つて、當さに勇猛して魔境界を越ゆべし。瑟劍を執持して煩惱の賊を破り、生死の輪を壞りて、纏蓋網を裂き、淨智眼を具して諸の癡暗を滅し、貪愛の心を息めて、瞋毒の蛇を降し、諸邪見を斷じて我慢の山を摧き、佛の生處に於て、愛樂尊重し、娑羅花を散じて供養を爲す。意の所求の如く皆な成就するを得べし。諸の毀謗を離れて諸怖を解脫し、諸佛眞實正理に安住して生滅の相を離れ、寂靜の樂を得て、應に一心に樂んで法を聞かんと欲すべし。是の如く我れ聞けり。一時佛王舍城祇樹給孤獨園に住し玉ふ。是の時の衆會に二外道あり。迦毘羅大仙、烏嚧迦大仙と曰ふ。本の邪見を捨て、佛智に入解し、善く癡暗を除き、能く苦海を越ゆと。是の思惟を作す。云何ぞ如來は清淨廣大福蓋功德を成就すること乃ち爾るや。殊妙の色相は鎔くる眞金の如く、巍巍挺持して猶ほ須彌の若し。三十二種大丈夫の相、及び八十種隨形妙好は顯現分明にして、端嚴なること匹ひなし。一切塵垢の能く染めざる所、丈六の身を現じ、光明晃耀として虚空界を盡し、若しは幽に若しは顯に、遍く瞞せざるなし。目は廣大青蓮花の葉の如く、眉間の毫相は秋の満月の如し。其の面光澤ありて、微妙にして愛すべし。髮は紺青色にして孔雀の尾の如く、頂相平滿にして天帝の蓋の如し。清淨の肉髻は摩尼寶の如く、擧身の金光は燦として相照らし、一切衆生の樂見する處なり。譬へば群蜂の妙花香を採るが如く、一の相好は觀じて厭足するなきこと、春に拘蘇摩花を開發するが如し。是の時如來、彼の外道心の所念の如く、淨智眼を以て彼の無量無邊世界の一切衆生を觀じて、大憐愍を生じ、之に告げて曰く、

解する者は内外煩惱の燒逼する處とならず。是の人則ち善く淨戒を持し、忍辱地に住し、念處分を得。智光明を具して無明の暗を破すると爲す。彼は則ち八聖道水を飲み、復た能く菩提分の花を開發し、是は能く三世樓閣を超越し、諸の有結を斷じ、智慧海に入り、菩提場に於て結伽趺坐して善く四禪無漏勝定に住し、一切無上の法樂を受用す。

又諸の愚夫、善法分を壞り、世間五欲の境界に樂著し、風の露に觸るゝが如く、長久に苦海を漂流する能はず、解脱するを得ず。法の橋梁を見て、捨て、遠く去る。

經中に説くが如し。昔婆羅門に一長者あり、利劍を以て彼の女人を害せんと欲す。忽ち如來を觀て高聲にて唱へて言く、「願くは佛救度したまへ」と。即ち解脱を得たり。又た央崛摩羅の母等を害せんと欲するが如し。又能く長爪梵志の大我慢を起すを降伏して、佛法に入りて正法味を漬せしむるが如し。亦た一切愚癡の人をして是の説を聞き已つて憍慢を捨除せしむ。亦た惡龍、心に熱惱を懷き、猛毒氣を吐き、苗稼を損傷するが如し。又夜叉・惡眼を以て、百千の衆生を視て、損害を爲すが如し。衆商人、大海に没し、底彌魚の爲めに、即ち吞噉せられんと欲するが如し。是の如く恐怖・諸惡險難を唯除いて如來は能く救度を爲す。又日月は阿修羅を怖れ、帝釋天王は惡道に墮するを怖れ、梵王は異執し、我を計して常となすが如し。諸の是の如き等は眞實見にあらず。輪廻往來して諸の逼迫を受く。正法を聞かして咸な悟解を得しめ、解脱味を飲んで無明の殼を破る。彼の智光明は月の清淨なるが如し。是の故に當に如來の言教に於て深く尊重を生じ、法師に親近して正法を聞くを樂む。眞實義を究めて教の如く奉行すべし。彼の外道の教は是れ輪廻の法なり。諸の有智者當さに善く之を思ふべし。

又牟尼尊、甘露の法を説き、智光明となりて諸の癡暗を破る。高峯に處りて群物を俯視するが如し。非法を積聚すること堆糞壤の如し。當さに智錘を以て之を屏去すべし。諸の魔怨を摧き、諸の

畏を以てし、爲めに正法を説き、信解を生ぜしむ。魔網を破壊して佛法中に於て心安住を得しむ。是れ大丈夫なり。能く師子吼すること大龍象の如く、威德特に尊くして大雲雷を興し、甘露の雨を注ぐ。無漏の戒定の妙香薰修し、あらゆる所作皆な唐捐ならず。諸の衆生の爲めに法要を宣説し、諸の很惱を離れ、衆をして悦豫せしむ。劫波樹の如く柔軟の花を敷き、最上の法藥ありて心垢を蠲除す。

世尊の説くが如し。淨戒を持するものは、則ち善法あり。諸の憂怖を離れ、安穩の樂を得。能く苦海を越えて、彼岸に至り、善く四魔を破る。語る所の天魔・蘊魔・死魔、及び煩惱魔なり。是の人則ち大法螺を吹き、大法鼓を撃ち、大法炬を燃やし、心淨歡喜して一切を利益し、天人を教化して爲めに佛事をなす。又諸の如來無量劫中功を積み、徳を累ね、智慧を修習して、能く無礙辯才を成就し、四無所畏・十種智力を以て、方便して菩提分法に通達し、能く智箭を以て諸の魔怨を破る。現に是の如き諸功德を證し已つて、三界中に於て最も第一となす。諸の有情の爲めに大慈父となる。

又諸の如來、十種の殊勝智力を具するに由つて、諸の外道を化して弟子となす。佛智戒に於て深く樂欲を生じ、最初に聖を證するものを憍陳如と曰ふ。能く愚癡暗鈍賢膜を決し、正法の中に於て最も殊特となすを、摩訶迦葉・優樓頻螺迦葉と曰ふ。梵志中に於て其の上首となり、佛の法藥を服して煩惱の病を愈すを、舍利子となす。能く智鉤を以て心の狂象を制して、大神力あるを大目乾連と云ふ。具さに勝行を修し、正法の梯を躡み、清淨解脱の樓閣に安處するを、阿菟樓駄・寶頭盧・頗羅隄闍・摩訶俱絺羅・阿難陀等と謂ふ。又能く頻婆娑羅王を化度して、佛の法中に於て深く信解を生じ、尊重恭敬して佛弟子となる。是等の諸聖者、皆な智斧を以て緣生の樹を伐り、諸妄念を離れ、一切智を希ひ、外道の見を捨て、我慢を伏除し、悉く能く一切徳を成就せり。

若し四大毒蛇・五蘊空聚に於て妄に主宰をなさば、則ち解脱なし。當に慧劍を以て之を斷烈すべし。又智眼を以て六處境界を觀すること、猶ほ寃賊の如く、十二處等は猶ほ叢棘の如く、善く入

眞實の功能ありて、美名^{うらな}遐かに布き、諸の過患を離れ、壽命長遠なり。廣く梵行を修すれば、則ち能く貪患癡の毒・邪見等の咎を破壊し、功德乘に乗じて永く墮落することなし。若し染汚心を以て欲境に耽著し、黑業を造り已らば、譏摩那娑羅天子の速疾に遷謝するが如し。當に知るべし。女人は惡露膩ふべきも、愚癡の有情は争ひ競ふて貪著す。是の欲に著する者は、彼の渴人の其の鹹水を飲んで心止足するなきが如く、木の根を断てば久からずして枯槁するが如く、山の瀑流は隄障すべからざるが如く、蛇窟に處れば彼の爲めに侵蝕さるゝが如く、熱鐵團は觸るれば苦惱を生ずるが如く、毒果を食すれば後必ず損をなすが如く、草の法露は久しく停まるを得ざるが如く、空の浮雲は倏忽ちに散滅するが如く、沙を城となせば、當に凶かに摧毁するが如く、坏を器となせば體堅牢に非ざるが如く、帝釋の弓は久しからずして隱没するが如く、破車に乗り、動かば即ち顛覆するが如く、猶ほ網羅觸るゝれば縛をなすが如し。一切災難は以て伴侶を爲す。是の故に正士は應當に捨離すべし。

又世尊言はく、若し五欲に於て貪著を生ぜずんば、現前に無量の樂報を獲得す。彼則ち能く煩惱の暴流を截ち、正法の船に乗り、能く彼岸に到る、我れ三大阿僧劫に於て福行を積集し、始めて能く豐義味辯を獲得して、諸の衆生の爲めに平等に開示す。汝等當さに空閑靜處に詣るべし。我が所説に於て研究思擇せば、乳中に於て酥酪醍醐を求むるが如し。是の如く知り已つて、法賊及び清淨物を積集して、以て用ひて布施せよ。又諸の如來、已に三界煩惱の淤泥を出でて、清淨無漏の勝徳を成就し、方便して知足の法を開示して勝園林の如し。居る者清涼にして諸の熱惱を離れ、善く是の行を修め、梵天に生ずることを得。我れ是の處に於て、一切煩惱も動亂すること能はず。一切の怖畏、皆悉く斷除す。是を以ての故に破壞輪廻し、正覺を成ずるを得たり。又諸の如來は大悲相應して善く一切の外道を降伏するに、清淨智を以て觀察揀擇し、柔軟の言を以て攝受教誨し、施すに無

能く甘雨を注ぐが如く、秋の満月の能く熱惱を除くが如し。畢竟して諸佛の正法を任持し、一切佛の智慧を増長し、根力覺支を決定成就して、業・惑二種の風浪を息除し、愛河を沒溺する所とならず。正法の船に乗りて彼岸に至り、施等の行に於て應に善く修作すべし。諸の珍寶を以て布施を持用して貪の過失を壞り、義利を増益し、淨戒を樂持して經典を讀誦す。是の如く作し已る。汝諸比丘よ、其の福蓋に於て速に圓滿を得ん。

佛の所説の如し。十善業に於て何んぞ修作せざる。心を貪使となす。猶ほ僮僕の如し。身は快樂に著して無常を悟らず。數々追求して休息あることなし。愚癡に由るが故に而かも我慢を生ず。己が財寶に於て慳惜守護し、諸の來り乞ふ者、面を頰して去る。未だ嘗て暫らくも空閑靜處に於て淨戒を修持し、諸の禪定を習はず。佛の所説の如き有情の行を利す。汝是の中に於て得る所なし。又此の財は憍慢掉舉散亂を増長し、多く憂惱を起して諸の怖畏を生じ、善道を覆障す。是れ散壞の法なり。是れ墮落の法なり。是れ無常の法なり。主宰あるなく、歸趣する所なく、前後際に於て俱に得べからず。現在の少樂、刹那も住せず。猶ほ夢境、幻化陽焰、乾闥婆城、及び旋火輪の如し。彼の芭蕉の中に實あるなきが如く、水上の沫の須臾にして散壞するが如し。愚夫は了せずして種々希取す。是の縁を以ての故に苦多く樂少なく、一切の煩惱の根本を積集す。是の故に應當に不堅想をなし、無常想を作すべし。是の如く對治すれば、則ち盜賊水火官吏親屬の侵損する所とならず。亦た彼の琰魔羅王の吞噉する所とならず。而も後世に於て決定して快樂福報を成就す。財施を以て諸の有情を攝するに由る。是の人、彼の酤牟那花の榮盛開敷すれば衆の樂見する所となるが如し。あらゆる積集せる一切の罪障は刹那に消滅すること、猶ほ熾火の其の乾ける薪を焚いて遺餘あるなきが如し。恒河に於て諸の垢染を滌げば、悉く清淨を得るが如し。摩尼寶の意に隨つて成就し、諸の來つて乞ふ者をして皆な満足せしむるが如し。咸な共に稱讚し、是の依止する所、勝吉祥を作す。

福蓋正行所集經

龍 樹 菩 薩 集

西天譯經三藏朝散大夫試鴻臚卿宣梵大師賜紫沙門臣日稱等、詔を奉じて譯す

卷の第一

諸佛及び諸菩薩衆に

能く淨智眼を以て

帝釋は千眼を具し

及び日月の光明は

那羅延は二目にして、

阿修羅を降伏するも、

唯だ佛は智光を具し、

孔雀の尾を以て

如來は大丈夫なり。

七匝に右して螺を成じ、

日月・世の燈明は

諸天及び世人

稽首し禮し奉る。

普く群有を導き給ふ。

大自在は三目にして

皆な遍く照す能はず。

諸の色像を變現して、

憍慢を恃んで瞋恚す。

惡を滅し積暗を除くこと

諸の垢毒を拂除する如し。

頂に白毫の相を舒べ、

潤澤にして極めて愛すべし。

隱蔽して皆な現ぜず。

威な供養し稱讚したてまつる。

是の説を聞き已つて、何の所作あらんと欲するや。當に佛言に於て尊重愛敬すべし。彼の智の光明は、燈の遠く照すが如く、能く愚癡翳障の黑暗を破る。是の故に佛の智眼を開示す。猶ほ大雲の

この點、古來佛敎思想上特色ある重要な經典では通り得ない。唯、この經は

多くの未知の經を引用する點、説話に富み、之によつて平易に明快に諸徳を例説

する點、佛敎修養書としては興味深いものである。

昭和六年十一月六日

譯者 平等昭識

更に持戒の福報を述べ、持戒相を説き、毀禁戒の業報を記し、四種の地獄を述べ、惡惡・多欲による破戒者の苦患を説き、一士夫の婦の薪を取つて赴いて牛・車・斧・衣を失つて、我家で盜賊と誤られて血を流した者を例とし、破戒の弟子を放逸亂費の子を父が我が子に非ずと言ふに喩へ、沙門にして持戒せずば、沙門と名く

るも解脱の果を得ずと極論してゐる。第十一卷には破戒の人は貧しくて王女を妻とせる者の妻を養ひ得ざるに喩へ、王の大施會に徳無き婆羅門は供養を受け得ず、比丘は善く思惟し、功德法を修め、施戒功德に努めて福蓋を成す可しと言ふ。更に伊羅葉龍王因緣經の説を引き、

佛は囉囉拏城にて來詣せし龍王に惡相にて伊羅葉樹背に生へ、苦痛あるは食を離れざりしに由り、慈氏如來の所にあらざれば龍身を脱し得ずと述べてゐる。佛は阿難に彼が迦葉佛の比丘たりし時、伊羅

葉樹の葉を四度嚙み、佛の呵責に逆らつた爲だとしてゐる。又造作福業經難闍迦經を引き、五戒不殺生・不與取・不梵行・不妄語・禁酒を説いてゐる。

第十二卷は持戒の相を明かにし、清淨持戒と不清淨持戒を擧げ、迦尼瑟姪(Anika)王が國王となる爲、持戒する比丘を樂まず、菩提を求めぬ持戒比丘を恭敬した故事を出してゐる。更に不清淨持戒の十種縁を擧げ、攝取損害・深著染欲・

不求出離・常生顛墮・遍計希求・退失正行・邪命自活・失安隱樂・寡聞不學・癡忘誦習を説く。清淨戒の例を擧げ、計羅迦王治下に過失あり、殺さるるに當り、佛戒を持ち、佛徳を讃じ殺された旃陀羅を述べ、姓の高下なく、尊しとする。不清淨戒の例を擧げ、比丘にて菴摩樹果を弟子に盜ましたもの、比丘にて好んで姪舎を過ぎ、遊女に耽しめられたもの、破船し、水中に落ち、命を脱し得ず、浮袋によつて寶

玉を取り、死んだものを引いてゐる。

更に賊に會ひ、草に結ばれ、草を苦めるを恐れ、動かぬもの、渴して、水中の蟲を殺すを恐れ、泉水を飲まず、死んだもの、火を失し、水中の虫を殺すを恐れ、火を消さぬ優婆塞を擧げて、清淨戒を説明し、持戒に勵んで菩提を求むべしと述べ、馬鳴智者が淨戒を堅持し、名聞義利を獲得し天に生れ、勝福報を受けたと述べてゐる。

最後に清淨持戒の十種功德を列擧し、生天・三明六通・力無畏・三十二相・八十種好を得るを述べ、施戒を樂行し、福蓋を具足成就すべきを述べてゐる。

之を要するに、福蓋正行所集經は布施持戒を中心にして小乘の諸徳を修し、その福徳を積むべきを説いたもので、六波羅蜜思想さへも伺へず、小乘の見解に立つもので、到底龍樹の中道の空思想・大乘思想は何ひ知り得ない。

先因を擧げ、施等の法の功德を説べ、人身の受け難きを説き、諸善業を勧めてゐる。

第三卷は帝釋天が佛の許可を得て、工巧敏匠天子を召集して王舎城迦蘭陀竹園に大宮殿を建設し、五日供養することを記してゐる。佛は前生に寶山如來の時王が如來を供養したことを記し、福蓋正行の説明をし、更に「一」の意義を説いてゐる。

第四卷は祇陀林・給孤獨園の意味を説明し、舍衛城祇園精舎建立の因縁を示してゐる。更に諸外道の回心の因縁と羅護羅智者・妙臂太子の讚辭・勝軍王等の回心を記し、生老病死・憂悲惱・愛別苦・冤憎會苦を詳しく説明してゐる。

第五卷は憂・悲・惱・苦・求不得苦・愛別離苦・冤憎會苦を説き、十三大地獄を詳説し、種々の苦の因は生とし、福蓋正行によつて免る可しと説き、舍衛城の一男子

が愛する女子との密會を妨ぐる母を殺し、出家し、衆徳備つたが、死後地獄に墮ち、弟子の福力により生天した説話を出し、佛はかの天となつた僧に四諦を説いてゐる。

第六卷はその釋尊の説法の會中に阿羅漢あり、之を聞いて嘗ての本師が何道に居るかを念ひ、彼の師が寺主たりし時貪欲にして今地獄にあるを知り、解脱せしめた。佛は此處に精進・淨身口意・施戒定の三種行を述べ、二鬼が篋・履・椎の三物を奪つて婆羅門に奪はれた説話を引き、施戒定を説き、福蓋正行を勧めてゐる。

三惡行慳吝破戒散亂を警め、佛在世中舍衛城の大名長者が慳吝にて惡道に墮ち、王舎城の長者子の母が惠施を拒んで鬼となつて苦んだ説話をだし、攝受布施福蓋正行を説いてゐる。

第七卷には施を廣大施と隨分施とに分ち、更に清淨と不清淨とに別ち、清淨施

を説明し、往古の善聲國善勝王が布施を好んで知足天上に往生し、快樂を得たことを述べ、毘舍佉王母因縁經中の王女説話を擧げてゐる。

第八卷には淨施の福報は百千人も奪ひ得ずと述べ、金鬘夫人・善思王女・福嚴長者・牧女・田舎女が夫々小さき供養により生天したことを述べ、勝軍王經の所説を擧げ、妃末利夫人の一女醜く夫を恥しめたので自殺した。宋宅神は憐んで蘇生させ、自ら誓願を立てた。佛は尼健子外道を化する爲の大人相にて王女の前に現れ、天女の如くに化した。王女は佛を讚嘆し、現身に瑞嚴色相を得た。

第九卷には最勝福田に於て施行を行する王者の功德を語り、再び天帝釋の舍衛城精舎建立を記し(看第三卷)、王舎城尼健子長者の佛供養讚嘆を記してゐる。

第十卷にはその長者の授記と毘婆娑羅王の回心を記してゐる。

『友書』(Suhjaleha)と言ふ龍樹が王に贈つた書簡が残つてゐる。之は佛教の根本教義に就いて書いた百二十三頌から成り、西藏傳本が現存し漢譯は西紀四三一年に出た。義淨も亦『龍樹の書翰』の譯を支那の友人に送つた。この信書は巴利聖典にないやうな珍しいものは一つもなく各偈皆法句經や之に似寄つた原本と逐語的に一致し、或ひは婆羅門教の金言とも一致してゐる。支那の求法僧義淨は龍樹のこの書を稱揚して彼の時代に印度に愛誦暗誦されたものの一であると言つてゐる。

十萬頌般若婆羅蜜多經は新しい大乘經典で、龍樹の作であると傳へるが、之は肯き難い。他の般若婆羅蜜多經と同じく、龍樹の創設した中觀派系統の教理も無限の反覆を以て成るので、此の般若經も龍樹學派から出た偽經であるとは言へよ

°(Winternitz: Geschichte der Indischen Litteratur II. S. 250-254)

大智度論百卷は龍樹の眞作であらう。

般若波羅蜜多經を彼の中觀思想の立場から經釋したものである。この外、龍樹の著書としては漢譯に於けるもののみでも二十一部百六十四卷現存してゐる。その内大智度論の外、中觀論四卷・十二門論一卷・十住毘婆沙論十四卷が最も確實に彼の著とされてゐる。

龍樹は全北方の印度では「三十二相なき佛陀」と言はれ、この著書は「佛陀金口の經典」と同様に尊敬されてゐる。

譯者 北宋(九六〇—一一二七)

の日稱(Sūryasāsa)は印度沙門で、宣梵大師の稱號を持ち、法護(一〇〇四—一〇五八)と同時代である。譯經は少く、數經に止る。

第二 結 構

福蓋正行所集經は相當大部の經で、十二卷より成つてゐる。品に分たず、各卷には名稱を附けてゐない。各卷の長さは各均等である。

文體は散文で、中に偈文を混へてゐる。行文は平易で、何れかと言へば明快の方である。

第三 内 容

福蓋正行所集經十二卷は福蓋即ち福德身を覆ふことを成就する正行の法を撰集したものである。多く佛説を引き、佛教の善業を擧げて之を實話を以て説明してゐる。

先づ第一卷には歸敬文を出し、十善業を説明して諸惡を警め、害心を持つた婆羅門長者、央崛摩羅(アムラ)の經中の故事、佛在世中の迦毘羅・烏嚧迦仙の故事を引いてゐる。

第二卷は佛身の莊嚴等を擧げ、福蓋の

大乘佛教の主流派の開祖として「非常に尊敬されて居たに相違ない。之が爲に數世紀後の著書がその特別の權威を確保せん爲に龍樹に歸せられるに至つた。然し、彼は傳へられるやうに、大乘の創始者とは言へない。之は馬鳴と同様である。大乘經典は既に西紀二世紀には支那に譯され、又大乘佛教藝術である犍駄維美術は西紀一世紀から四世紀迄に發達してゐるから、大乘教義及び大乘經典は既に紀元一世紀には存在して居たに相違ない。彼は寧ろ當時にあつた初步の大乘佛教を更に思索して深め、組織整理して、體系立てたと言ふ可きであらう。

二、龍樹の著書 龍樹の著書の一は中觀本頌(Madhymakakarika, Madhyamīkasūtra)である。「この頌書は婆羅門の科學的文書によくある略頌(kṛitika)風の系統的哲學書である。この頌には著者自ら經釋を書くのが慣例である。龍樹

の自ら書いた註釋(Aktobhaya)の梵本は散佚したが、西藏譯が残つてゐる。現存の梵語註譯は約西紀七世紀の前半に生存してゐた月稱(Candrakīrti)の作である。この哲學的經典によつて我々は始めて既に入座部の主張した無我説から出發した有・無(實在・非實在)をも否定し、かの『中道』と稱する教義を茲に會得することが出来る。茲には(二四・一以下)否定主義の反論者が明白な駁論を試みて居る。即ち若し一切空にして生無くば、四聖諦もなく、この眞諦の認識に立つた生活もなく、善惡業の果もなく、佛法もなく、偈圍もなく、終には又佛陀もなくならなければならぬ。然らば佛陀の凡ての法は無に歸する、と。之に對する龍樹の答は『抑も佛教の教は二諦によつて支へられる。一は深理の埋没せる俗諦で、一は最高義の眞諦である。この二諦を識別しない者は佛教の深理を理解しない者であ

る。俗諦に立つてのみ眞諦は會得され、眞諦の叻を以て我々は涅槃に入るのである。實に狂想無我の如き般若波羅蜜多經に意義を得んとすれば、此の哲學史上嘗て知られなかつた二諦説を取る外に道はないのである。

原典 Mūlamadhymakakarikās (Madhyamīkasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā, commentaire de Candrakīrti, publié par L. de La Vallée Poussin, St. Petersburg (Bibliotheca Buddhica IV), 1903

中觀本頌の外龍樹に歸せられる著作は非常に多い。然しその眞否は決し兼ねる。法集名數經(Dharmasaṅgraha)は彼の著として通つて居る。佛教術語の簡單な目錄で、その梵文原書も現存する。

Kasawaru, Max Müller, H. Wenzel : Dharmasaṅgraha, (Anecdota Oxoniensia Aryan Series, Vol. 1, part 5)

以て之に授く。誦持愛樂して實義に通ずれども、未だ通利を得ず。諸國に周遊して更に餘經を求められども得ず。自ら念じて言く、『佛經妙なれども猶ほ盡さざる所あり。我れ未盡を推して之を演べ、經學を悟らさん』と。此に於て更に衣服を造つて戒戒を立て、佛法に附して小異あらしめんと欲し、獨り靜處の水精房中に在て此の事を思惟す。大龍菩薩、これを見て惜んで之を憐れみ、即ち之を接して海に入る。宮殿の中に於て七寶の華函を發し、諸の方等深奥の經典無量の妙法を以て之に授く。龍樹學讀九日中通解甚だ多し。龍問うて曰く、『看經通しや』。答へて曰く、『汝の諸函中の經典無量なり。我が讀む所已に閻浮提に十倍す。龍送つて南天竺に出でしむ。大に佛法を弘め、外道を摧伏す。〔付法藏因緣傳五同〕

龍樹が提婆を教化した由來は龍樹の教化方便の一端と兩人の面目を示してゐ

る。玄奘の大唐西域記十に「時に提婆菩薩、執師子國（即ち錫蘭）より來り、論議を求む。門者に謂つて曰く、『爲に調を通ぜよ』と。門者、龍猛（即ち龍樹）に通ず。龍猛、其の名を知る。滿鉢の水を盛り、弟子に命じて曰く、『汝此の水を持して彼の提婆に示せ。』と。提婆、水を見て黙して鉢を投ず。弟子、鉢を持し、疑を懷いて返る。龍猛曰く『彼の何の辭ぞや。』對へて曰く、『黙して説なし。但針を水に投ずるのみ。』龍猛曰く、『智人なり。滿鉢の水は我が智の周きに譬ふ。彼、針を投ずるは遂に其の底を極む。是れ常人にあらず。速かに召進すべし』と。提婆、頗る自負し、將に大に對抗せんことを期す。忽ち威顏を靨して言ふ所を忘れ、自ら責を引いて教を受けんことを請ふ。龍猛曰く、『斯の俊彦に遇ふ。寫瓶寄あり』と。

之等の傳説から押して、龍樹は馬鳴

(Asvaghosa)と同じく、婆羅門の出身であることは事實であるらしい。その著作は婆羅門科學に造詣の深かつたことを證してゐる。馬鳴の在世は略々西紀一世紀末より二世紀初頭（平等、『梵文佛傳文學の研究』二一—二六）、先づ西紀一世紀と考へれば確實であるから、龍樹は馬鳴の二代後、提婆の前として、西紀二世紀末から三世紀中の在世であらう。正に大乘佛教興隆の氣運盛んな頃のことである。現世の佛教に満足せず、南海に經を求めたと言ふのは、龍樹が當時の佛教説に満足せず、新しき佛教を求め、大乘教理を求め得て、之を更に思索し、深めて、組織したことを象徴するのであらう。龍樹學派は龍樹宗と言はれ、龍樹は八宗の祖であるが、將に三論の空宗を言つてゐる。是は天竺に於て彌勒の瑜伽宗に對して並び行はれた大乘宗の隨一である。ウインタニーツ教授の言ふ如く「兎に角、彼は

福蓋正行所集經解題

福蓋正行所集經は福蓋を成就する正行の法を撰集したものであつて、十二卷の相當大部な經典で、龍樹菩薩が集めたと言はれ、趙宋の日稱等が釋した。

第一 著作者並に譯者

著者 福蓋正行所集經の著作は龍樹(Nāgārjuna)であると傳へられてゐる。然しながら、經中の思想には、その長大な内容の内にも龍樹特有の思想の特色乃至片鱗も伺ひ得ないのである。本經は福蓋正行とその實例を數多く擧げてゐるのみで、菩提心離相論等程にも空・般若の思想を説いてゐない。龍樹程の思想家が之丈長大の經にその中道思想を吐露しないことは寧ろ不思議である。或ひは本經著者は別人で、龍樹の高名を利して、彼の

著に歸したのかも知れない。唯此處では研究論文ではないので、在來の傳説に従つて、龍樹を著作者として解説することとする。

一、龍樹の生涯

龍樹は舊稱那伽曷樹那

那伽阿周陀那(Nāgārjuna)と言ふ。阿周

陀那の下に生れたので阿周陀那と名け、

龍を以て道を成じたので龍と字したとい

ふ。新稱は那伽闍刺樹那で、又龍勝・龍猛

とも譯す。傳燈史上十四世である。佛滅後

七百年南天竺に出世し(摩訶摩耶經下)、

馬鳴の弟子迦毘摩羅尊者の弟子であつ

て、提婆(Dīpa)尊者の師である(付法藏

因緣傳五)。龍宮に入つて華嚴經を齎ら

し、鐵塔を開いて密藏を傳へ、顯密八宗

の祖師であるとされてゐる。

傳説的には龍樹菩薩の本地は過去の妙

雲相佛又は妙雲自在王如來と言はれ、今は垂迹の身であつて初歡喜地の位にある、と傳へられてゐる。之によつても、龍樹が如何に尊敬されてゐたかが知られよう。

鳩摩羅什(Kumārajīva. 西紀四百五

年)の漢譯龍樹傳は傳記を次の如く傳へてゐる。

「龍樹、婆羅門種に生れ、一切の經書道術通ぜざる所なし。契な三人あり、相共に衛家に至り、隱身の法を學び、王の宮中に娼樂を爲す。王、之を悟り、諸の宮門を閉し、數百の力士をして刀を以て空を斬らしむ。三人の者即ち死し、唯龍樹、王の頭側に依り、免るゝを得たり。是の時始めて欲の衆禍の本たるを知り、山に入つて一佛塔に詣り、出家受戒す。『付法藏因緣傳五同じ』」

「龍樹已に出家して靈山に入る。山中に塔あり、塔中一老比丘あり、大乘經典を

彼の有情をして

及び聲聞の樂を得。

意重くして恒に護る。

出家こゝに恒に得。

【90】
文殊師利住し、

力に隨つて能く與ふ。

一切を生ずるを得ん。

及び聞くを欲する者あらば、

【91】
文殊師利尊は

一切の有情の爲め

我、是の如き行を得、

或は世間に住すれば、

世間の苦を壞するを得。

彼の一切を我得。

菩薩の樂を得る

一切皆な富み樂み、

佛敎久しく住し、

文殊に歸命し、

清淨にして此を増長す。

菩提行經(終)

辟支佛の安樂を得しめん。

天人阿修羅

若くは彼の宿命通あらば

若し彼の歡喜地ならば、

我若し彼の位を以て、

若し和合住を知らば、

若し見るを欲する者あらば、

是の如く彼れ見るを得ん。

日の十方を照すが如く

彼の文殊は修行す。

彼、或は虚空に住し、

今我住する亦た然り。

世間若し苦あらば、

世間の一切善

一薬もつて世間を救ひ、

一切利養を同じうす。

善意を以て清淨なり。

我、善知識を説く。

【90】 文殊 *Mañjuśrī*

【91】 文殊 *Mañjuśrī*

王法は依行を得

明力、皆な成就す。

斯等皆な悲愍す

罪なく復た病なく、

煩惱、所得なし、

隨意にして行住し、

僧事を成就し、

復た一切解を得、

諸煩惱を捨離す

當に遠く鬪評を離る。

禁戒を破るを得ず。

恒に諸罪を樂盡す。

益を得て天趣に往く。

善利を得る爲め

名聞諸方に満ち、

恒に無苦處に行じ、

一切佛を供養し

彼成佛し、世間

佛を樂ふて樂を得。

菩薩成就するを得ん。

藥力は倍す増盛す。

羅刹、擊吉備

苦の有情あるなし。

輕慢下劣ならず。

讀誦して自在なり。

衆、集りて乃ち恒常なり。

苾芻淨戒に住す。

心業を觀察して

苾芻の所得の利

諸の出家亦然り

戒を得れば守護し、

若し彼れ破戒せずば、

若し彼れ持鉢の者は

清淨の種子を得。

永く罪苦を受けず。

無邊の諸の有情

當に一天身を受くべし。

有情を思議せず

願くは世間の爲めに

彼の尊若し思惟して、

【三六】明力。明 Mantra、即ち眞言。前出。

【三七】羅刹 (Rakasa)、前出。

【三八】擊吉備 (Dakini)、前出。

【三九】苾芻 (Bhiksu)、比丘と同じ。

當に色相を得べし。

彼をして丈夫を得べし。

當に我慢の意を破るべし。

諸の有情等を利し、

恒に善利の事を作す。

菩提行、退かず、

當に佛の受記三三を得べし。

無量の壽命を得、

無常の聲を破壊す

一切方さに皆得

佛佛の圓滿に同じ。

掌の如く平坦に、

一切の地皆得たり。

諸國土に普遍し、

大地を莊嚴して

光、虚空に明くして

諸の有情常に聞く。

彼彼恒に見るを得て、

世尊を供養す。

穀麥成な豊かに實る。

若し彼れ三界にあらば、

亦高下の品を離れ、

今我一切の福

常に一切の罪を離れ、

菩提心の所行

遠く我慢の業を離れ、

一切の有情等は

壽命恒ねに長きを得。

劫樹苑三五は適悦なり。

妙法にして適意

彼の諸の高下の石

柔軟にして瑠璃の色あり。

諸大菩薩衆

自ら光明に住するを以て、

諸樹及び飛禽

説法の聲住せず。

佛及び佛子等

無邊なる供養の雲は

天雨、時節に依り、

世間は具足を得、

【三三】受記 (Yakurana) 前出。佛がある人にその人の善業により未來人の佛の下に開悟すべしと豫言すること。
【三五】劫樹苑、劫樹 (Kalpataru) の苑。劫樹、前出。

妊娠及び産生

衣と雖も、飲食と雖も、

一切求意に随ひ、

怖者、怖を受けず、

煩惱は無惱を得、

病者は安樂を獲、

無力にして力を得、

十方を安樂にし、

惡事皆滅盡し、

乗船商賈の人

安樂にして彼岸に到る。

飢饉の時路を行けば、

賊と虎とを怖れず、

曠野に病難なく、

賢聖悉く加護し

悲愍信智慧

恒に宿命通^三を得て、

乃至虚空藏

少才にして喜ばざるなし。

當に大名稱を得べし。

摩耶^三に苦なきに喩ふ。

莊嚴にして清淨

利を得、復た益を得る。

樂ますして樂を得。

見る者皆な歡喜す。

一切の縛を解脫す。

愛心互に相ひ施す。

行道一切に至る。

當に好事を成就すべし。

所求の意を滿すを得。

親等同じく嬉戲す。

伴を得て所畏なし。

復た迷醉を怖れず。

耄幼主宰なし。

諸煩惱解脫す。

具足し、相修行す。

而も無盡藏を得る。

緣無く方便なく、

有情は名聞乏しく、

出家若し醜陋ならば、

【三】摩耶(Maya)、幻、幻術の意。

【三】宿命通、六神通の一、前出。

烏鷲等の飛類

彼を愛して普く快樂す。

福は虚空に喩ふ。

金剛手を見るが如く、

彼の花香の雨を降らして、

云何ぞ快樂と名くる。

彼の地獄に處る者は

同じく一切の威徳

大悲の菩提心もて

彼の天の供養を以て、

乃至悲心花

天女の言説

大聖文殊

此の善功德を以て

大聖觀自在

無量の苦怖るべし。

彼の諸の餓鬼を濟ひ、

清涼を飽滿せしめて

彼北洲^三の人の如き、

聾者、聲を聞くを得、

悉く惡食の苦を離れ、

此れ何の善を得て生ずるや。

此の上下等を觀じて、

速に災患を滅除す。

地獄の火を破滅す。

云何ぞ歡喜と名くる。

觀自在を見るを得。

俱胝髻童子

一切を救度す。

天冠及び天花

適悅なる寶樓閣

百千種の歌詠もて

及び普賢菩薩^{二九}を讚じ、

地獄に同ずる者

地獄の苦を觀察す。

手に甘露の乳を出して、

食と與に洗浴す。

苦を離れて快樂を得。

色力并びに壽命あり、

盲者は色を見るを得、

【五】金剛手(Vajrapāni)。

手に金剛杖又は金剛杵を執るもの、執金剛又持金剛と云ふ。

總別の二名あり。總名は一切の金剛衆に通じ、別名は金剛薩埵をさす。即ち義眼別名である。

【六】觀自在(Kaṃala-pāni)。

前出。

【七】俱胝髻童子、不明。

【八】大聖文殊(Mañjuśrī-ghoṣi)、前出。

【九】普賢菩薩(Saṃantabhadra)、前出。

【一〇】觀自在(Avalokiteśvara)、前出。

【三】北洲、饕多羅究留(Uttarakuru)。大海の中心に立てる須彌山の四方に在る四大洲の中、北方の大洲の名。

若し自在ならざる有つて、
世間の樂を得、

若し世界の中にあり、

彼等の人をして

寒苦、溫暖を得、

菩薩の大雲覆ひ

鐵樹鐵山峯

一切は劫樹を成し、

噓へば迦那摩・迦囉拏

池沼清淨にして濁穢なく、

地獄爐炭の聚は

熱地は水精をもつて嚴かに、

是の如き供養を以て

炭は熱劍の雨

彼の劍互に相殺し、

諸の身肉を爛搗し、

肉骨と火と同じ。

我が善力を以ての故に

彼の光は千日の如く

焰魔の獄卒

輪迴に處すれば、

及び菩提の樂を得しむ。

乃至地獄に於ては

悉く極快樂を受けしむ。

熱苦、清涼を得、

復た法水の海に浴す。

劍林光閃爍やく

罪人、安樂を喜ぶ。

鶯鶯・鶉・鴈の聲適悅し、

微妙の諸香、喜樂を生ず。

摩尼珠を得。

復た寶山和合す。

善逝の宮皆な滿つ。

今後花雨を灑ぐ。

今後花互に散る。

君那花色に噓ふ。

奈河水に棄墮す。

天の宮殿を得しむ。

彼の滿那枳儻

見る者驚怖せず。

【一〇】 迦那摩・迦囉拏 (Kāṇham-bh-Kurūṇa)。

【一一】 鶯鶯 (Oṅkaravāṇa) 印度にても夫婦仲よき例に噓へられる。

【一二】 鶉 (hamsa) 白鳥のこと。

【一三】 君那花 (kunda) 花の名。その花西方に向ひ、白色である。

【一四】 那枳儻 (Dakṣiṇ) 又茶枳尼、拏吉儻、吒枳尼。夜叉鬼の類にして自在の通力を有し、六月前に人の死を知り、其の人の心臓を取つて之を食とす。其の法を修する者をして通力を得しむと云ふ。外道邪法の一神なり。是れ四門補供の一神である。

彼彼の諸魔事

彼の多くの正道に於て

復た刹那の中に於て

過去未來の苦

而して此の苦海に於て

是の如く此に安住して、

須臾の如く須臾にして

是の如き自利を見て、

老死に自在なし、

彼の惡法來るより、

苦の火熱、是の如し。

自ら快樂を作し、

我を以て何を見知するや。

具足知に稽首す。

【一〇】 菩提心廻向品第八

菩提の行、此の若し。

菩提行莊嚴すれば、

乃至一切處

彼、此の妙福を得て、

斯を大罪塵となす。

勝ち難くして行ぜず。

覺悟を生ずるを得がたし。

煩惱の海を竭しがたし。

我、苦を恨んで離るる求む。

若し自ら樂住せず。

火に入りて燥浴す。

而して此の苦を受く。

彼の行因是の如し。

惡を感じて前に死す。

我、何の時か息むを得ん。

福雲緋遠を生ず。

知慧、空を説く。

福德重に稽首す。

行福を思惟して

一切人皆な得。

身心苦惱のもの

快樂海を歡喜す。

滅不滅を分別して

性空乃ち是の如し。

何の苦、何の快樂、

彼の愛、何を愛する所、

世間も亦知るべし。

何人か何の所親か。

一切は虛空に喩ふ。

歡喜と瞋と相對し

諸の邪行を瞋にして

罪惡自ら愛樂す

死して即ち惡趣に墮し、

或は天中に往來し

多罪の崖を捨つ

是の如き眞は無性なり。

彼の將來の惡を説きて、

色力并びに壽命

快樂を獲ると雖も

眠睡炎昏迷して

當に彼の虛幻を盡すべし。

彼は學ぶも何の所作あらん。

一切不可得なり。

彼彼云何ぞ得ん。

何を愛し何を愛せざる。

要は當に自性を知るべし。

何を名けて無上となす。

何の生にして何を得る。

彼此受けて皆な失ふ。

喜に因りて或は鬪諍す。

一切を破壊せしむ。

是に惡趣の名を得。

苦を得て悔なし。

生々にして樂を得る。

謂く眞實にして是の如し。

復た互に相ひ憎愛す。

無邊の苦際に溺る。

彼得て、唯だ少し。

飢困に由れば、

虛幻の如く和合す。

若し此にして得難くんば、

何の行何を斷除せん。

彼の性若し有を見れば、

是の故に彼の性を知る。

一切皆な主なし。

彼れ別異なきに由つて、

實に於て彼若し迷へば、

因より生ずる所と爲し、

何より來り、彼何に去る。

若し此に了知すれば、

云何ぞ假實を知らん。

性若し自有と云はゞ、

彼若し是れあらずんば、

有無の性相

彼の位云何ぞ性なる。

彼性、無性の時

無性即ち無生なり。

性に過去性なく、

無有性にして無性

一切有無の性

此の一切世間は

行空不實なるを知る。

乃ち不實の生者なり。

因なくして即ち無所なり。

因縁中安住す。

住せず、復た去らず。

返つて世間の勝となす。

幻化より作すと爲す。

了知して此の若し。

乃ち彼の無性を見る。

影像等に同じ。

是の因何によりて立つる所。

彼の因故用ゐられず。

俱胝百千に因る。

何ぞ別性を得る。

是の性何れの時に得ん。

當に彼の性行に依るべし。

而も性に由つて生ぜず。

幻化の和合に喩ふ

是の如く不滅あり

是の故に生滅せず。

夢に喩へ、芭蕉に喩ふ。

彼等快樂の因の

此の衣等の快樂は

彼等の快樂は

彼れ是の微細（みこ）を得る。

快樂、是の如く實なり。

龜を離れて微細を得。

一切の物亦然り。

快樂は不龜を得。

彼れ所生あるなし。

彼は眞實の徳より生ず。

食を爲す淨食ならず。

無價の衣を愛して

世間の癡を愛せず。

彼の智は世間に有り。

彼の世間の量に同じ。

世は量にして量にあらず。

是の故に眞如を觀ず。

知性の觸れざる、

彼の性は實にして實に非ず。

是の故に彼の夢覺は

有無は衣等の若し。

此れ乃ち性の快樂なり。

久遠なるを得る能はず

云何ぞ是れ龜細なる。

思惟何ぞ受けざる。

微細は久遠ならず。

久遠何ぞ得ざる。

快樂常に定まらず。

此説、眞實ならず。

彼は欲住なきを得。

而して因果あり。

靚羅種子を買ひ、

彼れ眞如の智に住す。

云何にして見ざる。

若し此れ分明に見れば、

彼は妄言説なし。

彼れ空にして生ぜず。

是の性は執なし。

是の故に實性にあらず。

此れ彼あるなしと疑ふ。

【二八】微細（mikama）、數論術語。

自在は思議せず。

彼の主何ぞ最上ならん。

善惡の各自性。

因業苦樂あり。

先因若し有らずんば、

云何ぞ恒をなさざる

彼の作既に別なし。

若し和合の因を見れば、

此の和合主なくんば、

彼の愛は自ら愛せず、

所得にして他に由る。

彼は過去を作らず。

愛は此れ最上數なり。

^{一四}有情塵闇蔽は

謂く此の説最上なり。

^{一五}一三の自性は

是の徳所有なし。

^{一六}功德は聲なしと雖も、

衣等の如く無心にして、
色性も亦然り。

此の理應さに説くべからず。

彼亦た自ら定まるなし。

智者、無邊を知る。

彼の説何等か作らん。

果報誰か得ると云はん。

彼、別見なし。

何ぞ彼彼を見るを得ん。

復た自在と云ふなし。

彼の法乃ち主なし。

此の愛は無作なり。

何ぞ自在作と云はん。

謂く若し恒に滅せずば、

謂く世間恒に常なり。

此の惡功德に住す。

此は世間の惡を説く。

合せずして有るなし。

彼の各各の三種の

此の聲有りて還つて遠し。

此に由つて快樂を生ず。
之を觀て性あるなし。

【一四】有情・塵・闇蔽 (sattva-rajas-tamas) 三徳 (guna) を言ふ。前出。
 【一五】自性 (svabhava) 前出。
 【一六】徳 (guna) 數論術語。
 【一七】功德 (guna) 數論術語としての徳を言ふ。

無住即ち無生なり。

若し彼の二法

若し法は智に由らば、

是の智は知に由る。

二法互に相由つて

父なくば定めて子なし。

父あつて子あり。

芽は種子より生ず。

知は智より生ずる所。

芽は智種より生ず。

若し彼知にして知らずんば、

一切人の因縁は

因果の生起する所、

因果何に由つて作すや、

此果云何ぞ得ん。

世間は自在に由る。

是の如く後有を得る。

是の事唯だ定まらず。

過惡にして善報なし。

虚空の如きを見ず。

彼れ、涅槃を説く。

是の如きは極めて住し難し。

智者何に因りて有らん。

知者、所得なし。

是の有情は性無し。

子生れんと欲して何をか得ん。

彼の二法も亦爾り。

種子、何ぞ求むるを得ん。

彼は實に何ぞ行はざる。

知は智芽に従つてあり。

何ぞ智智あるを得ん。

彼前きに皆已に説く。

等しく喩へれば蓮花の如し。

皆な過去に従ふ。

過去の業力に由る。

自在は彼れ何を説く。

彼々何の雜はると名く。

心に非らず、賢聖にあらず。

彼れ何ぞ自在を得ん。

自の過去を見ず。

【三】自在 (Ivany)、創造神
を言ふ。

若し此れ自身を觀すれば、

所受既に實ならざれば、

若し此れ自身なくんば、

色性の自住は

内無く外色なし。

身若し異處なくんば、

有情の自性

智者若し先に知らば、

智者同智の故に

是の智は是れ後得なり。

是の如き一切法

是の如き法若し無なれば、

彼の餘法、是の若し。

彼の他心、疑あり。

彼の定、彼の後有、

自心を思惟して

正住を得るが如く

若し諸智ある者は

智者、是の智を得て、

智者是の智を得れば、

受も亦所得なし。

彼は即ち無有を知る。

云何ぞ是の如く害あらん。

根なく、中間もなく、

別處亦得ず。

合もなく分別もなし。

寂靜にして彼れ無所

云何ぞ著するあらん。

彼の生何ぞ著するを得ん。

是の智云何ぞ得するや。

生ずと雖も得なし。

是法云何ぞ二ならん。

有情皆な寂靜なり。

自らに於て即ち有なし。

此の法彼此なし。

是の二互に相ひ住す。

一切知者説く。

智智を獲得す。

彼は即ち是れ無位なり。

得ありて住なし。

彼、微細を以ての故に、

瞋に因つて苦生じ、

若し定に於て見あらば、

是の如く既に知つて

禪愛或は相應し、

善根の利する所

彼、此何の和合ぞ。

人、虚空に喩ふ。

入るなければ合するに非らず。

和合の名を求めず。

和合彼れ求めず。

物ありて和合に非ず。

彼の識、無相にして

彼の觸法是の如し。

我今何の所爲にして

若し所受を得ずんば、

此の位は彼れ見るを得。

今此の夢觸を見るは

既に彼の觸性を見れば、

先世と後世と

説かずして他を喜ばしむ。

既に生じて滅あり。

生に於て自ら受けず。

是の如く因果を觀ず。

彼の疑地に生ずるを得る。

皆な何人と爲さん。

和合して何を得るや。

合すと雖も入るなし。

是れ無分別行なり。

若し見にして無見ならば、

云何ぞ得生と名けん。

導の如く先づ知る。

和合に住せず。

何を受けて生ずるを得ん。

苦害を得ん。

苦害覺へず。

何の愛か遠離せざる。

自心の幻化

彼女を受くるも亦得たり。

念々に受なし。

【三】和合(samīgga)。

彼れ處々に行いて、

彼の身手等を以て

彼の一身是の如し。

内なく外なきの身

手等分別なし。

彼は既に無癡身、

住し已つて殊勝に近く。

若し彼の因和合すれば、

若し是の如き相を了すれば、

是の如く足指を捨つれば、

彼れ初め節合を觀じ、

此の身の破已に竟つて

分別して此の身を見れば、

是の如きの夢色

設ひ施すも若し身なければ、

若し眞に苦を得るを喜べば、

此を觀察するに云何に

樂者の實ならざる

汝の苦復た云何

彼、苦ありて微細に

何處に自から安住せん。

一切處に皆な住す。

乃至手等に於て

何ぞ獨り身手等のみならむ

云何ぞ彼復た有らん。

寧ろ意手等と云ふ。

見る者、人喩を知る。

本人も此れ同すべし。

彼の身、此の見に同じ。

手指亦た皆な捨つ。

後節の自ら離るゝを見る。

彼、分別の見に住す。

得も喩へば虚空の如し。

智者何の樂む處ぞ。

何ぞ男女等あらん。

此の者何ぞ解せざる。

愛樂し煩惱深からん。

彼の如く執受なし。

彼の自ら得なきが如し。

既に微にして説かず。

破壞の業を若し爲さば、

此の二の行果

彼の説知りて虚ならず。

因果定めて相應し、

此の行は實に住す。

過去未來の心

此の心生すれば我破れ、

芭蕉の柱となるが如し。

我が心生するも亦た然り。

有情若し有らずんば、

彼の行今若し爲さば、

有情何ぞ實なからむ。

若し苦惱を滅すれば、

我慢を苦の因となす。

彼の事心に廻せず。

足無く、脛膝なく、

臂なく、亦肩なく、

肋なく、兼ねて脇なく、

項なく、復た頭なし。

此の一切身を觀じ、

善果云何ぞ得ん。

互に相破して成就す。

彼自からにして無事なり。

惡見、不生を要す。

作受今當に説くべし。

彼我生あるなし。

我復た生起なし。

無所能く勝任す。

是に善觀察を得。

此の行云何ぞ爲さん。

有癡事を爲す。

癡は其の愛事に喩ふ。

當さに癡事を斷すべし。

癡は是れ増長するを得。

空を觀するを最上となす。

腰なく、復た腿無く、

臍なく、胸背なく、

手なく、亦鼻なく、

骨鎖等皆な爾り。

一處に行はず。

【一】我慢 (Ahankara)、
論の舊語。敬

若し聲智離るゝを説けば、

若し智の知らざれば、

彼の智既に決定すれば、

此の智は聲受に非らず。

彼の心は心に近し。

若し色聲を受くれば、

彼の一父子の如し。

有情・塵・所驛

聲色、是の如きを知る。

彼の色是の如しと知る

彼の自性も是の如し。

餘色感な實ならず。

彼の一切智心は

一覺心を思惟すれば

愛若し虚にして實ならざれば、

我なく、心なく、

是の心相應して

是の如きの自心

彼れ愚癡にして行なく、

行ありて自ら出離す、

彼の離、云何ぞ知らん。

彼の智知り難きが故なり。

乃ち智智に近し

彼の聲何を以て聞ん。

彼れ色を知ること是の如し。

色復た何を受けん。

思惟すれば眞實なし。

父なく、亦た子なし。

亦自性なし。

喩へば樂暫く和合するが如し。

彼れ一にして言あり。

此を色下品と説く。

煩惱悉く清淨なり。

彼等は彼れ無きが如し。

云何ぞ見に住するや。

此の心、畫像の如し。

清淨にして愚癡を破る。

彼作して云何ぞ作さん。

此我にして虚作す。

而して惡業の果なし、

【九】 以下數論教義を扱ふ。

有情・塵・所驛 (Sattva-rājya-
tamas, 喜憂暗)。數論 (Sān-
khya) の術語にて、徳性 (dā-
na) を三に分け、三徳とす。
【一〇】 自性 (Svabhāva, jñā-
kā) (自性) と書かない。自ら
なる状態位の位か。

是の義乃ち大乘なり。

説法の一時

一味の平等

迦葉大尊者

彼汝は覺らずと云ひ、

解脱力若し怖ならば、

彼の苦空の事に迷ひ、

空に迷ふて彼れ此の如し。

此空審かに觀察せよ。

闇を離れて煩惱を知り、

速かに一切知ならんと欲して。

若し物、苦を生ずれば

彼の苦空に因つて作せば、

若し後の物に於て怖れば

是の如き成無所、

牙齒髮爪甲

鼻涙唾膿涎

便痢汗熱風

是の如き諸法等は

彼の智と聲とを説けば、

大乘は平等を行す。」

一切過患を了す。

諸佛説かざるなし。

言の知らざる如し。

當に何を作すべきかを受けず。」

輪廻して成就するを得。」

而して此の果を得。

法を謗るを得ず。

此の故に不疑を得ん。

法に因つて空を知る。

彼の言審かに觀察す。

是の苦怖生ずるを得る。

彼何ぞ怖を生ずるを得ん。

斯を即ち我所と名く。

苦怖云何ぞ得ん。

骨肉并びに血髓

脂肪及び腸胃

九漏并に六識

一切皆な無我なり。

聲恒に一切を受く。

【八】 迦葉大尊者。佛弟子の中に摩訶迦葉 Mahākāśyapa、優樓迦葉 Uruvilvakaśyapa、伽耶迦葉 Gayākāśyapa、那提迦葉 Nadi kāśyapa、十力迦葉 Dśābhakāśyapa の五人あり。單に迦葉と言ふのは摩訶迦葉と指す。頭陀第一、法附藏の第一祖。

供養等は眞實にして

云何ぞ法空を得る。

牟尼道を離れず、

汝、大乘を求めず。

二乗は成就を得る。

若し彼の所作の因

別怖怖にして實に非らず。

此の法要は當に

此を離るれば他法と爲す。

法は乃ち僧の根本なり。

心若し著處あらば、

解脫心は著するなく、

煩惱業消除す。

愛取は相縁らず。

愛業は而して羸劣なり。」

受愛は相縁を得。

安住して著心あり。

若し心の空ならざれば

心性若し空と云はゞ、

應正等覺の如き、

果を得て實を稱す。

實に解脫法を得。

當に菩提を得べし。

何の法によりて圓滿を求めん。」

成就は圓滿にあらず。

大乘を怖畏すれば、

此の怖は實に怖と名く。

大乘の所論なりと知るべし。

彼の外道の論なりと知れ。

僧は法を知つて出離す。

涅槃は得べからず。

煩惱は消滅を得。

斯は解脫力に由る。

此を以て執持するなし。

是れ癡愛あるなし。

此の受は得るあり。

是の得を處々ちと名く。

復た得て爲著と名く。

識は得なきが如し。

所説の妙法は

【七】處々、不明。

是の如く心意を用いて、

幻境の一切を知つて、

彼の幻三毒に於て

煩惱心を知りて

彼の得見の時に於て

煩惱性盡くるに非らず。

彼の無所學に至りて

彼の性にして得なし。

若し無住ならば、

若し性有るなくんば、

是の性は去來する如く

劫樹と摩尼と

佛の變化も亦然り、

喻へば法、林樹を呪するが如し。

毒等久しく害すと雖も、

菩薩の修行

菩提の行は最勝にして

彼の平等の行を以て、

及び不思議を作して

彼の所行の因に随つて、

而して何の功德かある。」

煩惱云何ぞ斷する。

遠離して作らず。

彼作りて未だ盡さず。

空は意ありて力なし。

空と相雜ゆる。

彼、後に乃ち盡くるを得。

亦復た見る能はず。

云何ぞ此の身に住するや、

身、無性に住す。

隨現して著するなし。

能く如意圓滿す

當に斯の行願を爲す。

呪成つて樹枯壞す。

彼彼皆な消除す。

所作の諸の事業

佛樹能く成就す。

而も寂靜に住す。

供養して何の果を得たる。

彼の果を得る。

【六】劫樹(Kalpitaru)、劫波樹の略。帝釋天の喜林園に在る樹名。劫波は時の義。時に應じて一切所須の物を出す。摩尼、梵文 oñamāni (如意摩尼)。意の如くに所望のものを取つ出せる寶玉。

又水精珠の若し。

青に因りて青あり、

青に非らずして青を現す。

又彼の燈光の如し。

智慧此に開通す。

開くと雖も開かず。

石女の義生ます。

亦た心識なきに同じ。

念に非らずして別生す。

謂く若しは因、若しは果

眼の藥方を談するあり。

若し見聞覺知すれば、

念は苦因を斷す。

念念に別なし。

前塵は常に人を惑はし

幻の如くして實ならず。

塵處に住して輪迴す。

塵性に住するも亦然り。

若し不善と俱ならば、

若し心取捨あらば、

體本唯だ清徹なり。

影の現れて衆色に隨ふ。

心の自作するが如し。

智者、此の説を知る。

知る者何ぞ説く所あらん。

人の觀る所なきが如し。

此の義と二ならず。

緣念、所得なし。

虚妄の念は毒の如し。

法の爲に自ら説く。

瓶を見るに藥なし。

此の有は有にあらず。

此れ實に念は當に念すべし。

此の心は平等に當る。

之を了する所有なし。

妄心にして自ら見る。

喩へば空の所依なきが如し。

亦所得あるなし。

不善は汝の所得なり。

一切如來に施す。

【五】石女、妊娠せざる女。

有情若し幻境ならば、

彼の因集和合して

有情は種子より生ず。

彼の虚幻の人を殺すも、

平等心は虚幻なり。

眞言力等持して

彼の種々の幻を以て

何ぞ一人ありて

若し眞如に住し、

是の如きは即ち佛行なり。

因縁當に斷盡すべし。

因縁若し斷盡すれば、

若し疑妄に住せずんば

幻境若し彼れ無くば、

是の如きは即ち眞如にして

心、是の如く若し分たば、

心は自からの心を見ず

劍刃は利なりと雖も

自性由つて斯くの若し。

闇を破りて然へて名を得。

云何ぞ復た生滅せん。」

乃ち幻縁を得。

云何ぞ眞實あらむ。」

心性等の罪なし。

罪福は生起を得。

幻境心に著するなし。

種々の因業生ず。

一切の力を得ん。

或は淨戒に住れば、

誰れか菩提行と云ふや。」

幻化は得べからず。

無生にして自得す。

幻境は立たず。

一切は得べからず。

心體を現すを得。

虚幻は何に由りてか見ん。

世尊の所説

利と雖も自から斷ぜざる如し。

復た喩へば燈光の如し。

而も自照と云はず。

【三】眞言力。眞言、梵語 Mantra。是れ如来三密の隨一語密なり。總じては法身佛の説法を云ふ。たとひ經中顯言あるも、其の聲夕句文は大日如来の秘密加持を以て體となす故に總じて眞言秘密藏である。

卷の第四

菩提心般若波羅蜜多品第七

如來は智慧の仁なり。

苦を遠離するを求めしむ。

眞如及び世門

佛眞如を知るが故に

彼影死世間の凡夫

害及び勝害等

彼の二事已る。

智は世間性を見る。

此の説、去來なく

色等甚だ分明にして

不淨にして淨となす。

世間を知らんが爲の故に。

眞如を見むが爲

世間の行相應す。

女人の不淨を知る

佛の福は虚幻なりと謂ふ。

一切世門の爲に

是の故に智慧生ず。

今此の二法を説く。

法を説くは智慧なり。

二種の相應を見る。

乃ち世の相應の事なり。

之を見て乃ち智となす。

是を眞如に喩ふ

智者見ざるなし。

乃ち世の相應の事なり。

智者、有利に喩ふ。

是を世間性と説く。

見て以て刹那に住す。

此の行過失なし。

世の諸害事に異る。

我をして云何に信ぜしめん。

【一】般若波羅蜜多品梵 IX. prajñā-paramitā 波羅蜜の1. 前出。

【二】眞如 (paramartha) 眞諦と譯す。又第一義諦。

【三】世間 (Samsāra) 世俗諦又は俗諦のこと。並に前出。

我今此の身を愛す、
一切は自身を愛す。

是故に我身を捨つ、
此を觀るに過苦多し、

彼業、世間の行、

念を靜かにして散亂せず。

是の故に煩惱を破し、

邪道は心を牽かず。

乃ち我が所親の爲なり。

云何ぞ我愛せざらん。

世間を捨てんが爲なり。

喩へば業器を持つが如し。

我去つて身に隨ふ。

當に無明を斷ずべし。

我れ禪定に處る。

自ら最上の住と名く。

自愛を作さず、

若し自の護持するを見れば、

此身乃ち如如として、

上品柔軟を得て、

若し此に到るを得ば、

若し圓滿なる能はざれば、

愛心の煩惱、

彼の如く久しく富貴にして、

若し他物を貪れば、

是の故に増勝を求めて、

彼の愛は終に滅盡して、

諸惡不淨の身、

我、此の身云何に、

土と異なるなし。

此れが爲め不實の身なり。

何んぞ更に無情に於て、

我今徒らに育養して、

此に至りて愛瞋なし。

若し彼、瞋怒に住すれば、

彼、是の如く知らずんば、

而も自愛あるを得。

護持は實ならざる故に、

守護を作す。

此に到るも亦復た然り。

地の一切を受くる如く、

何人か用意を求めん、

破り得る能はず。

一切を求むる能はず。

賢名を受けず。

身心、放逸ならず。

此の動此れ覺えず。

此の我、云何ぞ執せん。

活すと雖も、必ず死せん。

我見、何ぞ破れざる。

虚しく苦惱を受く。

復た瞋怒を起さん。

終に豺鷲の食をなさむ。

彼の愛何ぞ能く立たん。

當に歡喜供養すべし。

何ぞ辛苦を作すとせん。

別の勝善等を以て、

喩へば僕人の主に事ふるが如く、

彼、過失に住し、

自ら知らざる人の如く、

汝若し緊迅に作さば、

彼の緊迅此の若し、

此の修は乃ち第一なり。

新に威儀に住するに喩ふ。

此の如く身を受持して、

汝當に是の如く住すべし。

是を以て常に觀察して、

此の如く我を調伏して、

我を見るに何處にか去る。」

彼の過去の時と同じく、

自利我今あり。

人の他に賣るが如し。

汝、有情に與からず。

是の故に以て人の如く、

獄中種々の事、

此の得を自利と爲す。

他に於て暗に稱讚す。

當に有情に於て事ふべし。」

定なく、功德なし。

此の功德意をなす。

自の爲め及び他の爲めに。」

必ず苦惱自から退かん。

而も未だ其の力を得ず。

財を以て驚怖す。

降心して散亂せず。

汝は此、何を作さざる。

妄心を起らざらしむ。

一切の過失を息む。

無明は一切を壞す。

汝の我を壞するが如し。

此れ遠く離れて遠らず。

苦多くして自在ならず。

不散亂と名くと雖も、

獄卒に附して殊ならず。

被害も亦長久なり。

怨み彼の不生を念す。

此を以て得利となす、

宿造織毫の因、

此の少報を盡し已つて、

是の如く輪廻の中、

無邊劫を過ぎて、

苦を被つて常に大に困み、

是の如く知覺せず、

後、如來の言を見て、

汝若し過去を見れば、

菩提は正しき快樂にして、

是の故に喩を取る。

汝云何ぞ更に作すや。

諸行及び己身、

是の如き離を獲得して、

自ら楽しんで他を苦しめば、

汝自ら一心、

中間忽ち思惟して、

乃ち自ら快樂を捨てて、

寧ろ自ら其の顔を落す、

乃至小過に於ても、

自ら功德の力と謂ふ。

此を得れば正業ならず。

永く輪廻にあり。

彼の百千の苦を受け、

其の出離を知らず。

罪心、覺えず。

久々にして善種を發す。

眞實に功德を得。

彼の惡業を受けず。

此の樂は離るゝを得ず。」

彼の輸揭羅等、

我慢及び不善、

之を觀て見ず。

利他を汝常に行ぜよ。

此の行乃ち下劣なり。

他に於て憎愛を作す。

何れの時、何か此を作す。」

他の苦も亦た行ぜず。

更に別の過を造らず。

此れ大牟尼の説なり。

【二〇】輸揭羅、不明。精液と血液の意か。

彼の徳を以て稱さずとも、
嫌下して此の若く、

戒を離れて煩惱を見る。

諸病人を醫するが如く、

我れ、是の如く救療す。

然も自ら功徳あり、

地獄の惡門、

功徳あるを以ての故に。

若し自ら平等を觀すれば、

自利は尊卑を分ち、

此の一切世間、

若し此の功徳の名、

罪蓋は心寶を覆ふ。

自の利益分に於て、

見ありて暫く喜ぶも、^一

是の如き一切人、

下劣の心我慢、

智慧・顔容、

此を以て自徳と爲し、

讃を聞いて勝心を生じ、

一切の徳自ら有す。

我に勝るは斯に由つて得。

無我の力を得るに由る。

藥力に随つて瘡差す。

自見は云何。

彼の徳、我れ住するなし。

彼の愁に於て生ぜず。

斯くして乃ち智者となす。

利益自ら増長す。

鬪諍して成就す。

誰れか功徳を見るを得ん。

此の人の得るを聞かず。

是れ自ら供養せず。

總じて獲得せず。

久々にして必ず喜ばす。

哂笑して毀譽す。

自ら勝れて人を嫌ふも同じ。

種族・財富等を誇り、

常に稱讃を聞かんと欲す。

歡喜して樂を得る。

【五】 瘡。癩瘡めること。

【五】 哂笑。哂は嘲さ笑ふ。

奴僕に於て業を起し、

互相の利樂は、

而して互に相ひ苦む。

若し世間の災を得、

彼、一切を自ら作せるなり。

自身を捨つる能はず、

火を離れざる如く、

自苦を若し能く除けば、

彼を以て自他受く。

汝今別思なく、

汝決定作意して、

眼は見るを以て能となし、

但だ諸の有情の爲、

見を離れて乃ち善逝は、

彼、下品の人を見るに、

彼の憎愛を觀すと雖も、

此の善無我を作して、

大毀し及び讚歎するも、

我が所作の業因、

世に嫌下するは最上にして、

主者返つて受く。

迷者は見て離る。

當に惡の苦報を受くべし。

乃至苦を驚怖するも。

云何にして此を作せしや。

苦に於て離るゝ能はず。

遠く燒害する能はず。

能く他苦を消除す。

是の故に喩を取る。

諸の有情を利益す。

業に因つて分別あり。

所觀は眼の爲めならず。

亦身見に住せず。

常に是の如き利を行す。

自他の見を起し、

我が心疑惑せず、

無我我を護得す。

苦なく、亦た樂なし。

彼善く安住するを護。

徳なくして乃ち徳あり。

猶ほ今時に於て、

若し財利の爲めに、

世の惡莊嚴を見て、

何ぞ智者ありて、

冤を見て觀るを欲せず。

斯の鬼にして自ら利す。

他を利して生せず、

自ら利し他を害するを以て、

自ら害し他を利するは、

作意の善逝見る。

下劣にして自ら愛せず、

自利にして微細を知れば、

利他にして微細を知れば、

世に諸苦あるは、

世の諸の快樂あるは、

何ぞ多種の説を要せん。

愚迷なる者は自爲を樂しみ、

佛の菩提を求めず、

自ら苦んで他に與へんと欲し、

後世を觀察して、

飢渴を救度する若し。

父を殺し、三寶を毀てば、

死して阿鼻阿鼻の財を得る。

惡を見て供養せん。

供養云何に説くや。

之を捨て何を受くるや。

云何ぞ捨を受用せん。

地獄に別に生ず。

諸の功德具足す。

是の如き行は別處なり。

愚癡にして惡趣に投ず。

今當さに奴僕に墮すべし。

當さに自在の主となるべし。

昔自ら貪愛に迷ひしなり。

他に於て音利樂せしなり。

此中間已に見ゆ。

牟尼は利他を作す。

輪廻して何んぞ樂を得ん。

廻輪して由つて得るなし。

善利、成就せず。

【三】阿鼻の報。一本阿鼻財。財の代りに報を取る。阿鼻。(Avīci)、無間地獄の意。

智者は此を了するを得。

是の身、別作にあらず。

自らを以て他身を知る。

自ら己の過あるを知つて、

自性は捨を樂まず、

此の身の和合、

此は是れ世間の縁、

云何ぞ無生を學ぶや。

自身にして身に非ず。

是の如く利他して

果熟して自ら受け、

是の故に世間の學は

此の愛心自ら蔽ふて、

有情の怖畏を知つて、

若し能く是の如く學べば、

沙門は怖畏を見るも、

若し自ら及び他と、

瞋は冤怖多きが如く、

最上の秘密を以て、

水陸と飛空と、

物を觀察して實ならず。

何を以て自ら知らざる。

是の如き故に難からず。

他の徳を知らず。

徒らに他施を觀察す。

因縁は拍手の如し。

有情何ぞ知らざる。

學の如く自ら知る。

自らを以て他の身の如くす。

作し已つて疑慮せず。

當に彼の無生を獲るべし。

悲心と護心と。

深重にして煩惱の如し。

師と爲つて學を示す。

難しと雖も退かず。

彼は護を得るなき者なり。

急速に當に救ふべし。

愛なければ怖を獲ること少し。

自他轉じて利を行す。

人をして殺に住せしむる勿れ。

此の若くにして苦なければ、

苦は木と主宰に非らず。

若し尸羅^{シラ}に住すれば、

若し戒清淨に住すれば

一切の苦因無ければ、

悲苦云何ぞ多き。

世間を思惟す。

一苦にして多に非らず。

悲苦、是の如して生ず。

自らの苦を消除せずして

是故に妙人月は

善者は是の如く觀じて、

設^{シヤ}ひ無間の中に在つても、

有情を解脱せん爲にして

是の如くして恒に足らず。

是の利他を作すの日、

利他、所求なし。

是の故に我れ此の如し。

悲心と護心と

智者は細微に知る

彼は何を得るかを知らず。

世の一切勝れず。

是の苦立つ能はず。

能く一切の苦を障^{サヤ}つ。

諸苦あるなし。

何の力によつて能く生ずるや。」

是の故に悲苦多し。

有情の護得するを見る。

自他に於て平等なり。

他の苦を消除せんと欲す。

彼の有情の句を説く。

他苦を平等に護る。

鵝の如く蓮池に遊ぶ。

彼は歡喜海の如し。

彼の解脱味の如し。

無我、疑あるなし。

果報を誰れか愛と云ふや。

徳なくして自ら謂う。

他の爲めに是の如く起る。

輪羯羅血等。

【10】尸羅(śīla)、戒律のこと、前出。

【11】妙人月、人名か。西藏譯妙月遊。

【12】輪羯羅血、梵本手許になく不明。精液と血液の意か。

復た正菩提心は

先づ當に是の如く觀すべし。

我が自らの一切行

手に多種の事を作し、

世壞すれども法を壞せず。

己の別苦の如く

是くの如く我受持するは

我、若し他を愛せば、

彼、快樂を得已つて、

我若し他を愛せざれば、

彼の苦怖脱せずんば、

苦害を今若し得れば、

未來苦害の身、

我若し邪見に住し、

是の如く別に生を得、

罪を作し、罪を作さず、

手足の苦同じからず。

此を以て不合を知り、

是の合當に盡く斷すべし。

種子次第を集め、

疑惑を消除す。

自他不二を重じ、

苦樂も亦平等なり。

守護する事一身の如し。

苦樂も亦爾り。

一一皆な消盡す。

有情等の爲めなり。

平等樂を得しむ。

自勝に於て何をか奪はん。

彼諸の苦怖を得ん。

自らに於て當に何に勝ゆべき。

愛護せざるに由る。

云何ぞ護るべき。

復た我慢を起せば、

是の如く別に死を得ん。

彼の手と足との如し。

云何ぞ同じく説護せん。

心、我慢に住す。

彼れ自ら宜しく力に隨ふべし。

行を排すること軍伍の若し。

牛の重車を牽くに喩ふ。

欲味と無草と

見已つて知非を破り、

而も身此を作す爲めに、

勝定業を修せず、

彼百俱胝劫

彼の大苦を行するの苦は

器仗、毒火なく、

欲を離るる者此の若く、

遠く是の如き欲を離れ、

愛樂は空處に非らず。

善財、月光明かに、

廣寶樓閣の間

善林の聲聞かず、

彼處にして寂靜なり。

若し處何ぞ親しむ可き。

愛を捨てて煩惱を離れ、

是の處主宰なし。

歡喜して快樂を愛す。

功德智慧、

彼に至りて口に草なし。

見る者人得がたし。

刹那に希有を覺る。

一切の時に疲倦す。

必ず當に地獄に墮すべし。

受を分つて困んで覺えず、

菩提を求むる爲ならず。

山崖冤等なし。

地獄の苦を離るゝを説く。

愛樂を生じて分別す。

而して善林地を諍ふ。

白檀の涼香潔し。

行住甚だ適悅なり。

清淨の風長なへに扇ぐ、

思惟して心爽やかに利あり。

空舍嶽樹の下。

自在に根と識を護る。

自在に隨行して住す。

何ぞ帝釋天を推さん。

是の如き等の諸法を觀す。

【九】閣、闍は闍の略字。養つて靜かならぬこと。

聚落に枯骨動げば、

不淨乃ち是の如し。

彼の那落の中の如く、

少年貪つて樂を受け、

少年もし求めざれば、

彼の日將に落ちんとする如く。

復た鹿獸群^{ちか}りて、

錫杖鉢隨つて行き、

犢の母に隨つて行くが如く、

若し自ら欲に迷ふをなせば、

彼自在を得ず、

女の林野に産するが如し。

迷者は欲の爲めに誑かれ、

欲を斷つ者心淨かにして、

彼を見て火に焼かれんと欲し、

迷人は欲境を求め、

無利の事無邊にして、

世間は幻財虚しく、

輪廻往來の苦は、

是の如く貪欲の味は、

迷人返つて愛樂す。

此の苦、彼の愛となす。

苦痛なくして受けず。

勝善力を求めず。

老至つて何をか作さんと欲するや。

作困をなして就かず。

夜に至りて空しく還り去るが如く。

路に在つて困苦す。

無所畏も亦た爾り。

自ら賣つて僕従となるなり。

亦復業に隨つて牽く。

戰つて命、保ち難き如し。

我を恃んで、奴僕を感ず。

苦に於て能く審察す。

復た若しは毒槍に刺さる。

喜を獲て、妄りに守護す。

清淨は皆な破壊す。

愚人は忙忙として貪る。

何れ時にか解脱せん。

欲者受くること少からず。

彼の不淨地に於て

汝、不淨身を受く。

是の身既に淨に非らず。

不淨にして一ならず。

別に不淨器無し。

龍腦香米等。

口に入れて最上を味ふ。

是れ甚だ分明なる若し、

穢惡を尸林に棄つ。

皮剝かれ、肉潰亂す。

既に能く皮を知り已る。

白檀香復た潔し。

云何ぞ殊勝の香、

自性臭にして、若し食ならば、

亦法の諸香に於て、

若し復た髪甲長く、

垢膩の持する所にて、

狂亂して自ら癡迷し、

復た諸の器仗を持して、

寒林枯骨の形、

種子は生じて増長す。

此の身唯だ蟲聚なり。

淨に非らざれば愛すべからず。

而も汝自ら嫌はず。

此の器孰れか愛多き。

食飲して適悦す。

是の地清淨に合ふ。

彼淨ならず、離れず、

是の身同じく此の若し。

之を見て、大怖を得。

復た何ぞ愛樂を生ずるや。

身、是の如く妙なるなし。

心を用いて別に愛するや。

寂靜を樂ます。

一切皆な染汚す。

牙齒兼ねて垢に黒く、

惡性の身は裸露にして、

用いて大地を行かんと欲す。

一心に自殺を待つ。

見て乃ち惡聲を發す。

【六】尸林。尸陀林の略。屍陀林のこと。尸多婆那(Sita-Yana)尸多(Sita)は寒、婆那は林、寒林ともいふ、死骸を棄てる林。

【七】白檀香(Sandana)。印度香木の1。香高し。その末香を塗香としても用ふ。冷感を與ふ。今のサンダル。

【八】染汚、前出。

不淨は堪ゆる所に非ず。

觀羅綿藏し、

臭穢豈に漏れざらむ。

此の食は苦蓋と謂ひ、

無著なれば即ち無事なり。

衰老は相隨つて生じ、

識らず、彼は空幻にして

袋に不淨滿つるが如し。

不淨は是の如く多し。

身肉は淨成に非らず、

自性、元と心なし。

若も彼の愛心無ければ、

若し能く彼此なくば、

別に不淨に非らざるあるも、

是の如く自ら淨ならず。

愚迷、淨心ならず、

慧日照して開敷す。

不淨は今無常なり。

正淨身を出でんと欲す。

云何ぞ他を歎吻するや。

食飲彼、何ぞ愛さん。

觸は細滑にして嬉戲を樂む。

慾者の心自ら迷ふて、

迷ふ者は堅く樂著す。

云何ぞ離れざる。

肉染は飾染を加ふ。

而して復た歎吻を樂む。

迷人は思惟せず。

彼、汝何ぞ喜び行ぜん。

愚智皆見る。

云何ぞ妄に肉を愛するや。

是、分明の見を得る。

自ら歎吻を見ず。

自ら希有せず。

彼汝希有に非ず。

體を蓮花に喩ふ。

淨身に非らず、何ぞ愛せん。」

染愛今正しからず。

云何ぞ染愛によるや。

貪に由つて彼れ不淨なり。」

【五】歎吻。歎は形聲。歎吐すること。欠(氣息)は其の義を示し、鳥は音符。

自心を解脱して

此心平等なるを得て、

彼の苦惱の縛

若し男女等ありて

善利は算數に非ず

善く自らの金を用ゆるあらば、

此の行若し能く行ぜば、

彼の人、此の獲あり、

明了に是の如く行じて、

一心貪愛に住あれば、

業は焰魔の門を感ず。

彼門は是れ汝が冤

分明に貪愛に住すれば、

過咎自ら藏護し、

彼、今食噉する所、

飛鷲常に食する所、

復た血を以て莊嚴し、

喙へば鬼の形容を見るに、

相貌、既に是の如し。

口吻及び牙涎

復た一切を解脱す。

今世・後世に於て

乃至地獄等を斷つ。

合掌して多く恭敬すれば、

無罪にて稱説すべし。

遠く棄擲怖を離る。

最上の寂靜を得

我自ら得て異なるなし。

何ぞ寂靜に趣かざる。

此は下趣に牽くをなす。

前見の見は怖るべし。

煩惱今同じからず。

今見、何ぞ能く脱せん。

一一他眼に見る。

妬忌して何ぞ護らざる。

唯だ此の肥肉を愛す。

此の食偏く重する所なり。

枯瘦し及び行動す。

之を觀て怖るべきに堪へたり。

皆な不淨より生ず。

受用然も自由なり。

他人の衣を盗んで

行住、自在ならず

自身を稱量すれば

我は此れ是の如き身、

此の身を觀察するに、

性は然も壞つ所なし。

一生定まつて一死あり。

彼復た何事を見るや。

人の遠路を行くが如く、

憂苦彼別になし。

喩へば輪廻も亦然り。

直ちに四人に至り

是の如きの一身、

直ちに至つて是の如く成じ、

過去世間の時

所行の行近からず、

念佛に心口同じく、

是の故に身意調ひ、
是の如く我れ恒に行じ、

苦惱にして速かに至らば、

之を分けて身上に著るが如し。

苦惱は當に離るを求むべし。

彼は實に苦惱の法なり。

是身は必ず當に壞すべし。

性と身と相離る。

身は當に豺の食となるべし。

有情界は是の如し。

諸大・各分去る。

住舎に及ばんと欲す。

唯だ障礙なきを求む。

咸、生住を受く。

彼方に遠離を得。

冤家の讃せざる所。

世間を厭患せず。

生死に悔恨なし

能く世間の苦を離る。

人を嫉毀することあるなし。

寂靜にして煩擾なし。
諸の煩悩を滅盡す。

千種の苦惱を知つて、
若し利那の頃に於て
好名稱を獲得すれば、
彼の同利の人を以て
若し此れ毀謗を加ふれば、
毀謗に墮らずと雖も、
謂く佛及び有情は
稱讚は功德を得
世間は思惟せず、
自性は同住に苦む。
愚迷は朋友に非らず、
若し愚迷に在れば
有情を毀たず、
利物の行を損じて
彼の天宮殿
彼の愛樂心に随つて
自性の廣大なる
彼の所は未曾見にして
富貴は坏器に喩ふ。

之に住して決定して受く。
自ら精進を修し、
亦復た利養多し。
我を毀つは功德に非らず。
我れ歡喜を讚すると謂ふ。
稱讚亦た喜ばず。
種々皆な此の如し。
毀謗は苦報を招く。
是を愚癡と謂ふが故に、
彼の生、何の樂む所あらん。
此乃ち如來の説なり。
自利も愛せざるなし。
是の如く自愛をなさば、
一心に承奉せず、
煩惱の善を壞るが如し。
及び樹根舎に於けるが如し。
意に従つて上と爲るを得。
斯くして無礙處となす。
亦た觀察する能はず。
不堅牢を成すと雖も、

【四一】 瓦器。瓦、坏と同じ。
山再び成ると言ふ又燒かぬ瓦、
陶瓦。

行、愚迷と同じ。

何んぞ愚迷と同じきを得ん。

而して自らの眷屬に於て

凡夫の性は異りて生じ、

瞋多くして承事難く、

下劣の心自ら讃し、

彼瞋を捨てず、

迷愚、心を攝せず。

自ら讃して他を毀謗し、

愚迷の持する所、

不善、和合せず、

一身の我が樂む所、

遠く愚迷を離れ、

讚歎を爲さず。

略ぼ蜂の蜜を造るが如し。

我れ一切處に行じ、

恆に多人を得て、

若し處々に迷ふて、

此を以て世間に於て

是の故に彼の智者は

決定して惡趣に墮す。

毒分牽くを以ての故に。

刹那にして怨恨を獲る。

喜怒定まりなし。

遠く善利を離る。

憎愛の罪に縛著す。

當に惡趣に墮すべし。

此れが爲功德なし。

輪迴の樂自ら得。

是等の不善に住す。

彼の事皆な獲得す。

意に貪る所なし。

當に承事を愛し得べし。

何の善事に住するや。

寂靜にして成就を得る。

未曾有の如きは、

讚歎して敬愛す。

意樂を得て快樂すれば、

生死の怖畏を得る。

生死を怖畏す。

卷の第三

菩提心靜慮般若波羅蜜多品第六

佛は精進の増を喜ぶ。

彼の散心の人

我今心身を知り、

是の故に世間を遠ざけ、

利谷の行變すべく、

智者乃ち思惟し、

奢摩他

是の如く起行して

先づ奢摩他を求めて、

無常にして恒有

若し千生を見るも、

尾鉢捨を樂します、

見已つて止足せず、

如實に見ずんば

意は愛集に緣りて

彼の下墮して

善友は長久ならず

禪定意に安住して

煩惱の芽間に住するを感む。

散亂を生ぜず。

亦速く疑惑を離る。

愛は世間を離れず。

是の故に此を皆な捨つ。

尾鉢奢糞等に依つて

煩惱を破壊す。

世間の行を藉らず。

愛に於て何ぞ要を得ん。

復た愛著を起さず。

亦等持に住せず。

是の患は過去の渴による。

安んぞ煩惱を盡すを得ん。

煩惱に燒然せらる。

短命にて須臾も住するを思惟す。

堅固法は成ぜず。

【一】梵 VIII. Dhyanapa-ranita.

【二】奢摩他(Samatha) 前出。

【三】尾鉢奢糞(Vipassana) 前出。毘婆舍耶、毘鉢舍那に造る。課、觀、見、種種觀察など。事理を觀見するのである。

一一の深過。

此の過守るべからず。

和合の業因は

云何ぞ自位と名く。

正念心、發らず。

來業、徃行の如く、

二
三
彼の觀羅綿タラソの如し。

精進の人も亦然り。

迴心して思惟するを要す。

云何ぞ我れ復たなさん。

斷するに正念の劍を以てせよ。

此の念にして獲得せば、

纖毫も能く滅せず。

一切の報皆な得る。

風に隨つて來徃す

増上して是の如く得。

【二三】 都羅綿 (talaka)、都羅
は綿のこと。

此の精進を修するに因つて、

勝果報を獲得して、

快樂の爲に因を修し、

所修、決定せず、

輪廻足らざらんと欲す。

福の甘露、若し貪らば、

是の故に業は寂靜なり。

日温かに月寒く、

精進の力ある、

遠離を獲得するが故に、

煩惱の棒は堅牢なり。

棒劍相持つに喩ふ。

劍を執つて手に力なく、

劍を失ふを念ふも亦た然り。

世間は善人を知る。

心の過も亦た然り。

出家精進の心は

鉢墜つれば必ず當に死すべし。

睡眠懈怠に著して

去らすんば當に傷けらるべし。

彼の慢業盡くるを得たり。

自ら嬉戲の樂を感ず。

彼れ却つて獲得せず。

亦殊勝ならざるを得。

喩へば刀刃の蜜を食るが如し。

食の後轉た美し。

妙果の隨行を感ず。

晝夜相逐ふが如し。

能く懈怠を破る。

深心して愛樂す。

彼と闘ふに慧劍を念ず。

彼の女人の學ぶに同じ。

之を失ふて怖るること急なり。

地獄は心に在り。

毒血を飲むを肯んせず。

心過つて作さず。

油を執持するに喩ふ。

之を墜す故に驚怖す。

毒蛇懷に在るに喩ふ。

之を去るは宜しく急を須たつべし。

是の故に清淨心にて

彼の三界を知らしめ、

我れ一切に勝るゝを得て、

我今にして自ら知る。

有情、我人を離れ、

懈怠の冤を降さず、

惡趣を以て牽く所となり、

僕の愚惡に従ふに由つて、

彼、一切を受けて

而して此れ名聲を得。

是の如く若し勇猛ならば、

勇猛に此の修を行じて、

彼の慢心若し起らば

勝果、生ぜんと欲すと雖も、

精進は師子に喩ふ。

煩惱の獸は千萬にして

世に大苦惱あり。

煩惱は降伏せず

我れ寧ろ頭を落さしめ、

煩惱の諸冤家に

頌して此の文句を作る。

我れ速く戲論を離る。

人の能く我に勝るなし。

是れ佛師子の子なり。

而して彼、最上を得る。

懈怠の冤自ら降る。

身の善、速かに破壊す。

寄食して瘦を受く。

修行して我慢に住す。

下劣、云何ぞ説かん。

自ら彼の冤家に勝つ。

冤を慢つて勝たず。

此れ更に我が冤家なり。

是の果悉く皆な捨つ。

煩惱獸中に見れ、

衆しと雖も、敵する能はず。

人自ら悉く具さに見る。

乃ち是の如き苦を得。

及び心腸を剝則するも、

一切、我れ降らす。

焔魔の獄卒

火坑及び洋銅に

焔熾なる殺器杖

熱鐵、地に墮落す。

是の故に心を善を作す。

彼の金剛幡に依つて

初學は和合を觀じ、

而して最上の名なし。

生中の所作は

上の事業は修めず

三種の事應に知るべし。

將來の惡因は

世間の煩惱は

我、人の能くせざる如く、

下業の所修ハタカシム

當に我無我を觀すべし。

一滴の甘露を

我が意、微劣と云ふ。

願は無心の難を作す。

無心に發起せられ、

罪魂を牽引し、

燒煮して悉く皆な入る。

肉を斷ること百千斤、

斯に由つて不善多し。

極微細に觀察す。

修學して觀を作す。

汝の非學を觀す。

汝、迴心を作すを要す。

罪苦を増長す。

彼の下は勝を求めず、

業の煩惱力に由つて

此に於て云何ぞ作さん。

人を拘して自由ならず。

是の故に我も作すなし。

云何ぞ安住せしめん。

此我の所作

鳥食してニ金翅と變ず。

能く少苦難を脱す。

不善罪を以ての故に。

廣大にて勝れて及び難し。

【一〇】焔魔(Yama)、夜摩と同じ。同上。

【二】金翅(Garuda)、傳説的の鳥王。詳しくは前出。

纖毫の功德も

或は當に生を得べきの處、

我、大供を興すを樂んで、

貧の爲能く作す。

施して稀れざる者は安かなり。

母の胎藏に入るが如し。

過去に法を離るゝ爲に、

所生既に是の如し。

一切善心の根

彼の根は恒に退かず、

煩惱は苦の纏綿にして

他の愛に於て障礙あり。

若し人處處に於て

彼彼の福を感じて、

若し人處處に於て

而して彼彼の報を感じて

月藏中、清凉にして

佛音の味は第一なり。

而して彼の善逝子、

蓮は出で最上なるが如く、

我生れて曾て作らず。

虚しく度して所有なし。

佛・世尊を供養す。

圓滿ならざるを願ふ。

母の快樂を修せずして

母唯だ病み苦惱す。

我今果報を得。

當さに何の法を行じて行すべき。

世間の牟尼

常に果報を好むを得。

種々の怖を得。

罪を生じて自ら感ず。

能く善願を起せば、

供養の果を獲得す。

罪を作して快樂を取り、

苦器の侵を獲得す。

廣博にして妙香潔

修に非ずして得す。

善逝の法を解するを得。

亦仁覺の月の如し。

【八】月藏中云云。月藏經なるものある。大方等大集大月藏經の略名。十卷。高齊の那連提耶舍譯。大集經六十卷中第四十六より五十六に至る月藏分十一卷が是である。月藏は菩薩の名。月藏菩薩西方より來て、方等の妙理を説いたもの。月宮、月天子の宮殿。即ち月の世界。

【九】仁覺の月、月の名。

智者、身肉を觀じ、
枯謝すれば糞土に棄つ。

身の所作の苦若し

智者の心は惡に非らず。

法意快樂を知らば、

此の虛輪迴なし、

過去の罪を求盡して

此の力は菩提心なり。

是の如き利は樂まず、

菩提心の鞏固は

有情を成就せん爲

身力は苦怖を作る。

是の如き分別を斷つて、

我身にして能く捨て、

我れ自他の

一一の過失

彼の過一一盡くる、

無邊の苦已に脱せば

我れ功德多きを求め、

一一の功德を學ぶも、

榮にして生有るに喩ふ。

是の捨は難しと名けず。

心に其の虚作を謂ふ。

彼に惡業の苦なし。

福を具して身快樂に、

苦を得るとも云何ぞ悲まん。

利他の福海を深くす。

二乘等しく急を要す。

行々何んぞ苦を得ん。

智者乗つて樂を得る。

樂んで方便力を施す。

之を觀じて唯た稱讚す。

精進を増長す。

身方便を超過す。

無數の過失を消除す。

劫盡くるも餘るなきが若し。

我、纖毫もあるなし。

我心、何ぞ損ぜん。

自他を利するを爲す。

劫盡きて學ぶこと盡くるなし。

負を見るに矚力多し。

自他の各の所行

我何ぞ菩提を得ん。

如來、眞實を以て

彼の蚊・蚋・蝻・蠅

若し精進力を獲ば、

彼我何生の人

恒に諸精進を知つて

或は手足を捨てて

愚迷は師教に違ふ。

斷壞及び燒煮

無數俱胝劫にして

此の無數の苦を歴て

喩へば毒苦の傷の若し。

一切の醫人と作りて、

是の故に苦消除すれば、

是の故に救療を説く。

上醫、大病を療するに

前後皆な是の如し

後後にして進修し、

彼自ら精進を知る。

自他、平等なるが如し。

而して分別して作すなし

實に正解脱を言ふ。

及び蟲・蛄・蝦等も

亦當に菩提を得べし。

能く利不利を知る。

何ぞ菩提を得ざる。

此に於て怖を生ず。

此の利、彼知らず。

無邊にして皆拔出す。

未だ菩提を得ず。

久久に菩提を證す。

毒盡くれば苦皆出づ。

諸の病苦を救療す。

一切の病皆少なし。

甜藥は病に利あらず。

甜藥を皆與へず。

智者咸な行する所なり。

身肉にして捨用す。

【七】蝻。蟲の俗字。

若し此にして見ざれば

彼既に所得なし

若し威儀を得ば、

施は及ぶべからずと爲す。

精進にして

忽然として無常に趣く。

彼の煩惱の門を見よ。

刹那にして涙下り、

地獄の聲を聽聞して

身は不淨處に住し、

地獄の苦は極めて惡なり。

魚の鼎中に活けるが如く、

地獄の業作し已つて

身は苦惱の糜爛す。

魔王は人を苦すこと多く、

無常の苦は畏るべし。

愚迷は睡眠に著す。

大苦の河に入り、

樂の最上法、

懈怠し并びに戲笑す。

一切の道皆な斷す。

云何ぞ睡眠を樂しまん。

無常にして忽ち至る。

何を以てか懈怠に住せん。

安然として若し精進を修せざれば、

思惟すれば苦々たり。

苦惱にして復た情急なり。

眷屬も救ふ能はず。

自ら業の熱惱を念ふ。

驚怖して極むる能はず。

惡業も何ぞ復た作さん。

彼は是の如き怖を得る。

乃ち湯火の苦を受く。

如何ぞ清淨なるを得ん。

人を捉へて無常を送る。

此は懈怠の果を見る。

此は過にして劣らず。

復た人身を得ず。

無邊の樂の種子を除き、

苦の因に汝何ぞ樂まん。

瞋は王の令する所に非ず。
有情を煩惱して
喜は王の與ふる所に非ず。
善心は有情に於て
將に有情を護らんとして
感を見て尊重し稱す。
無病にして復た端嚴に
富貴にして輪王と作る。

六
菩提心精進波羅蜜多品第五

智者は忍辱を行じ、
懈怠は遠く福を離れ、
精進力とは何を解する。
懈怠は精進ならず、
貪つて睡眠を味ひ、
輪廻は苦にして嫌ふべく、
煩惱の舍宅は
已に無常の門に到る。
精進は自他の爲なり。
懈怠は復た睡眠なり。

彼の地獄の苦の如し。
彼の苦にして自ら受く。
佛等に得るが如し。
此の心何ぞ受けざる。
後當に成佛を得べし。
此の善何ぞ見ざる。
快樂にして長命、
斯く皆忍に従つて得るなり。

菩提は精進に住す。
風行を離るゝが如し。
彼、分別して説くを要す。
毒の如く宜しく自ら觀すべし。
快樂事なしと謂ふ。
懈怠より生ず。
懈怠の力牽いて入る
云何ぞ今知らざる。
此行を汝見ず。
此れ、肆牛を屠るが如し。

喻ひ世人自在の主となるも

云何ぞ彼の爲めに子となるも、

喻ひ佛、苦に入りて苦なきも、

要は彼の一切佛を歡喜して

身の煩惱普く有るが如く、

有情の苦に於ても亦復た然り。

是の故に此の苦を我遠離す。

先づ忍辱の人を憐憫す。

我今如來に奉事すること

衆人の足、我が頂上を踏むも、

世間一切の賤能作

此の一切無比の色を見て、

是の如く如來に奉ずるを爲す。

是の如く世の苦惱を除かん爲めに

譬へば一王人の

衆、一に非らずして能く調ふは、

彼一にして獨に非らず。

制斷は怯劣ならず。

悲愍心は忍に住す。

將に有情を護らんとす。

己の事に由つて情を稱へず。

我は彼の奴僕性に非るを作す。

快樂を得るが如くに復た歡喜す。

佛喜んで彼れが爲めに能く此を作す。

一切乏しきを悉く充足せんと欲す。

我、方便なく、空しく悲愍す。

一切苦を救ふて大悲を興す。

彼の罪を我今にして懺悔す。

世間の諸僕從に同じ。

之を受けて歡喜して佛に同じ。

悲愍を以つての故に礙あるなし。

彼の是の如き尊を誰れか敬せざる。

是の如く自利成就を爲す。

是の如く我今出家す。

能く大衆を調伏するが如し。

王を長親するを以ての故なり。

蓋し王の力あればなり。

亦過失あるなし。

力若し地獄の卒ならば、

以て惡王に事ふるが如し。

【五】悲愍。愍は敏なること、
聽なること。又慈闕に通ずる。

彼彼の惡心に於て

是の如き得忍に於て

佛土・衆生土

彼に於て奉事多く、

如來及び法に於て

佛を尊重する故に

立意乃ち是の如し。

彼の大平等を以て

大意は有情に於て

發心して佛福の如く、

是の故に佛法行はれ、

佛は、平等なる所なく、

佛の功德精純にして

三界供養すと雖も、

佛法等の師は

諸の有情を供養し、

自らの眷屬に於て

他の奉事に於て

身を破壊して無間獄に入るも、

廣大の心は彼の一切の爲なり。

各各に忍辱を與ふ。

因つて妙法を供養す。

大牟尼は此を説く。

能く富貴を感ず。

有情と平等なり。

尊きこと有情も亦然り。

自らに於て所作なし。

有情に平等なり。

慈心にして供養す。

佛福得つきが如し。

佛と有情と平等なり。

功德海は無邊なり。

功德の能く比するなし。」

之を見て能はず。

是れ最上の有情なり。

當に此の如く作意すべし。」

利行を起す能はず。

何の過を得るを作さず。

若し彼れ作し已れば我復た作す。

是の如く常に善事を行すれば、

若し人、苦を捨てんと欲し、

此は是れ佛の威徳にして

此の瞋、我なさず

平等忍を修行して

自身の諸過失は

過失作さざるが故に、

若し人、福有るなくんば、

常に忍に安住せしむ。

世に利益を求む人は

出家を障礙する故、

世間の諸の得難きものも

我唯善利を説く。

彼の菩提行を以て

舎中の藏を出すが如し。

懺悔を業因に於てす。

是の故に忍果に於て

彼の無我所心

不思議を成就して

此の心は利他を爲す。
或は冤を以て供せず。

來つて解脱の門に入らば、

云何ぞ我れ彼を瞋らむ。

福に於て障礙なるが故に。

彼、獲得せざるなし。

忍辱の故に作さず。

彼の福獲得す。

安んぞ忍んで自生せん。

云何ぞ障礙を説かん。

施に於て障を作さず。

是れ出家を得ず。

求むる者には能く與へらる。

過に於て所得なし。

遠く所冤を離る。

是の故に難からずと云ふ。

彼、初め先導を爲す。

是の如く生ずるを得たり。

此の心は乃ち忍に住す。

妙法を供養す。

乃至壽命を以て
云何ぞ別に忍を説かん。

自利の行、圓かならず。

後々にして自ら行じ、

修行は稱讚を要す。

世の不實の如く、

譬へば舍を破壊するが如し。

亦稱讚の非に由る。

汝、聲は起滅して

心、此の如く利他ならば、

他に於て何の所受あつて

彼既に快樂を獲。

彼々利樂を獲て、

云何ぞ我に於て

彼、是の如く我を讚じ、

彼の無縁、此の若し。

此の讚、我獲ると雖も、

正徳者を憎惡し、

是の讚は障礙を成す。

護つて惡趣に墮せず、

若し諸の有情、

有情をして解脱せしむ。

智者應に覺を須つべし。

當に圓滿を愛樂すべし。

若し刃を持つて自殺すれば、

益なく、利樂なし。

日は内外を照して見る

須しく心を用いて明了すべし。

平等なるを思惟せよ。

當さに是の如き行を行すべし。

利益を行ぜん。

我が利益、虚に非ず。

一切を以て我を讚す。

別の威徳の樂無からん。

愛を以て彼自得す。

愚の如く、迷者の如し。

速に破して著する勿れ。

此に由つて瞋作る。

我發起せざらしむ。

彼の爲めに無我を行す。

利養尊卑の縛を解かば、

彼の意云何ぞ顧らん。

佛、三界の供となり、

世の利得は實ならず、

若し人の骨肉は

養育して命等を興ふ。

彼の菩提を求むる如く、

而して有情を愛せざれば、

若し人求むる所あらば、

所求既に獲られずんば、

清淨功德の福

得已つて自ら受けず。

罪と作福とを作して

亦復た依作せず。

冤家を愛するが若し。

復た諸の讚説を求む。

圓滿を利せんと欲すと雖も、

菩提心、忍ばざれば、

煩惱の惡鈎

猶ほ地獄の卒

我、本利もと他を求む。

福なく、壽命なく、

有情の成佛を欲す。

彼の煩惱、何をか作さん。

乃ち諸眷屬に及ぶ。

瞋を喜ばず、何ぞ生を。

當に菩提心を用ゆべし。

福自ら捨つ。何ぞ瞋れる。

財を出して大いに捨施せよ。

財舎に在るに如かず。

何の障にてか獲られざる。

瞋の修行に修するが如し。

同ぜず、隨喜せず、

當に自ら一も得る無かるべし。

其の歡喜を求めんと欲し、

此の事因得なし。

返つて苦んで樂なし。

利に於て成就せず。

人を牽いて自在ならず。

人を擲つて湯火に入るが如し。

何ぞ虚しく稱讚を要せん。

力なく、安樂なし。

是の如く還た心に喩ふ。

彼の福功徳を燒けば、

若し人殺して手に在り。

地獄の苦能く免れれば、

若し人、世間に在つて、

地獄の苦は無量なり。

我、是の如き苦を以て、

一一、利他の爲めに於て、

我、是の如き等の

世間を離るゝを以ての故に、

苦を離れ、快樂を獲て、

彼、是の如き讚を得て、

彼既に此の如き、

利他の行は最上なり。

是の如き最上の行は

此の見若し捨てずんば、

若し他を敬愛し、

他徳既に稱讚し

嘗に菩提心を發し、

諸の快樂を得しむべし。

瞋火を和合し、

剎那に所有なし。

之を放てば善く稱すべし。

此の善誰か讚せざらん。

少苦も忍ぶ能はず。

瞋の因、何ぞ斷たざる。

百千の地獄を歷るも、

所作自ら爲さず。

諸大苦惱事なきも、

是の如きの行を利するを爲す。

彼皆な功徳を讚す。

云何ぞ喜ばざる。

無礙の快樂を得。

智者何ぞ勉めざる。

快樂を得て修せず。

正見を破壊す。

徳を以て稱讚すれば、

乃ち是れ自ら敬愛す。

一切有情の爲めに

云何ぞ有情を瞋らん。

彼、何ぞ活命を爲さん。

是の如く思惟せず

得るなくして瞋を讚す。

是の如く心の利他

彼の修心の人の爲に、

彼の煩惱生ずるを見て、

塔像妙法等

佛等には苦惱なし。

師及び眷屬に於て

今過去の生に因つて

覺心、有情を觀じ、

彼、是の如きを見已つて、

瞋恚と愚癡と

此に於て毒の過咎

云何ぞ過去に於て

是の如き諸業因あり。

佛の福の如き亦然り。

一切の有情と

喩へば火の其の舍を燒くが如し。

舍中若し草あれば、

一向に不善を作し、

無善は破壊されず

有情を破壊するが故に。

彼の瞋は由つて生ずるなし。

忍に於て住せざるが故に、

是に忍の功德を讚す。

謗及破壊するあるも

我、彼れに於て瞋らず。

愛業を作さず。

之を見て自ら勉めよ。

恒に衆の苦情に在り、

苦惱に於て能く忍ぶ。

分別して一等を過ぐ。

何ぞ説いて過なきを得ん。

他業を害するを作さん。

間斷して此に何を作すや。

我今一心に作し、

慈心互に相觀る。

舍中に火の入り、

彼の火自ら延蔓す。

我が所行を盡すに、
瞋を忍ばず護らずんば、
意は無相無形にして、
身を護持するに由る故。」

我、口惡業に於て

身、衆苦を被らず、

我今生の中に於て、

利益に於て既になし。」

凡そ作爲する所の事、

彼、利なく、愛に非らず。」

如かず、今

邪命の住は久しと雖も、

譬へば夢中に在りて、

眞實に樂を得るが如くも、

彼時無常にして

此の二事を覺り已つて、

久しく歡娛に處し、

行人劫され、

福利は過減に隨ひ、

種盡きて罪生ぜず、

因を得ること彼の時の如し。
修行を破壊す。

散亂即ち破壊す。

身苦は當に忍受すべし。

衆過を作さず。

云何ぞ心に瞋あらん。

淨心にして利行を行じ、

何事か食飲に於てあらむ。

要するに利他にあり。

定めて罪を護るに疑ひなし。

無貪・邪壽命に殞没せんには。

死して當に苦趣に墮すべし。

百年、快樂を受くるが如し。

覺め已つて知つて暫くは非なり。

壽命の延促に喩ふ。

彼何ぞ快樂を得ん。

自ら多益を得ると謂ふ。

裸形復た空手なるが如し。

罪根還た復た生ず。

不瞋の利を護ると爲す。」

愚迷なるが故に此の若し。

若し人、瞋を誑らすんば、

杖を持つて人に勧め、

我、過去生に於て

是故に今身に於て

我が身は鐵に喩ふ。

彼の鐵の身を持つるが如し。

我今此の身を見て、

諸の苦惱を被ると雖も、

愚迷にして愛業を起し、

苦縁を得て自ら過つ。

喩地獄の苦、

自業の生ずる所を知る。

我、是の如き業を得る。

設令地獄なごに入るも、

私の業を盡くさんと欲するも、

我が業、是の如し。

云何が分別して知らん。

若し人自から護持して、

是の心功德生ず。

煙の虚空に熏するが如し。

愚迷無智なる故に

彼の瞋惱を増すが如し。

苦惱の諸有情

苦惱を被つて能く忍ぶ。

彼の焼かれて鎚鍛を受く。

何ぞ其の苦あるを得ん。

情の形像無きが如し。

而も瞋に起る所なし。

其の苦の本を知らず。

云何ぞ瞋惱を生ぜん。

飛禽劍林等を受くるも、

何處にか瞋惱あらむ。

此の過の起る所を知る。

他の所作に由らず。

無量にして邊あるなし。

彼、實に我が冤家なり。

愚迷にして瞋を造作す。

冤忍に對して恚らすんば、

地獄に云何ぞ入らん。

彼の所行の因に随つて、

一切は因に由ると雖も、

性の寂靜を求むと説くも、

若し和合の因を取らば、

此心住す可からず。

是の故に冤家を見て、

行に因て是の如く行じ、

是の如き諸の有情は

自在若し成就すれば、

散亂心は緣塵なり。

食斷じて食瞋を増し、

自ら若し福行なければ、

毒藥を殖するが如く、

自らは是の煩惱に住す

他人を解脱せしめんと欲するも、

煩惱は迷昏にして濁り、

毒盛りて悲しみあるなし。

自性既に愚迷して

彼、瞋無疑を生じて

有情性愚なる時

等因にして果を感ず。

因の善惡なるは心に由る。

是の如きは何の過かあらん。

是の苦惱を樂む

智人應に自ら勤むべし。

善知識を作すを想ふ。

當に快樂を獲得すべし。

業に因つて自在ならず。

誰れか肯て苦に趣かむ。

心刺されて覺らず。

苦に於て返つて愛す。

返つて縛縛の業を愛す。

食は生死の崖に墮す。

誠に自ら護らざるに由る。

此事、何に由つて得ん。

自殺を致す。

云何ぞ瞋を護らざる。

他に於て行燒亂す。

火の能く燒くが如し。

所行に諸の過失あり。

【四】燒亂。燒、奸媚の貌。
擾るに戲弄する貌。

之を殺すを無勇と謂ひ、

如來は大悲者なり。

罪の根本を識らしめ、

父母何ぞ心に計つて

持心、瞋怒を離れ、

譬へば無智人の

修行して智なく、

不思議に住せんと欲せば、

此の生に於て愛重せば、

若し彼の塵境を貪らば、

彼の諸業力に由つて

境に於て若し貪らずんば、

和合心なきが故に、

貪らずして生ぜず、

我、是の如きを得るが故に、

彼、無生にして生ぜず、

彼此を瞻察して

此の心恒に清淨にして

變する所、悉く因に従ふ。

過去行行の時

彼を殺せば最勝を得。

苦を愍んで輪迴を説く。

忍に住して作さず。

子の淪溺に遭ふを懼るるや。

自ら大苦報を遠ざく。

罪せられて生を得しむる如し。

生を瞋るも亦復た爾り。

當に自心を持つべし。

瞋をして生起せざらしむ。

種々の罪を生ず。

自由を得ず。

彼の集因つて立つなし。

是の故に生あるなし。

得るなくして自ら説く。

是の生不思議なり。

是云何ぞ有るを得ん。

滅盡して無餘を得。

隨色摩尼に喩ふ。

無因の相何ぞ有らん。

彼の行は何の所作あらん。

【三】隨色摩尼(māni)は寶玉のこと。摩尼寶珠は別色を有せず、所對の物色に隨つて色相を現するを言ふ。

冤に於て若し瞋を起せば、

忍心常に此の若く、

忍に住するは時節なり。

若し人自ら愛を保てば、

口業若し離れずんば、

苦を畏るれば出離せず。

是の故に堅忍の心は

彼の訥陵譏子は

刀にて火に焼く身を割き、

愚癡にして正見なく、

我、菩提心を以て

蚊蚤壁虱等

大痒は苦人を煩はし、

寒熱并びに雨風

諸の苦惱の事を被つて、

他を殺して血流逆り、

身を割いて自ら血を見、

智者は心清淨にして

煩惱と相持して

蛇腹行いて地に在り、

善利終に滅盡す。

瞋をして起るを得ざらしむ。

瞋冤自ら生ぜず。

悪口の業を作さず。

後ち冤家の苦を感ず。

衆の苦因を行ぜず。

諸の快樂を獲得す。

邪見をもつて解脱を求め、

利由なくして能く忍ぶ。

虚しく大苦惱を受く。

云何ぞ苦を忍ばざらむ。

常に飢渴して苦惱す。

忍に住して見ず。

病枷鎖捶打

忍んで快樂を求めず。

堅牢心勇猛なり。

怕怖して驚倒す。

常に瞋惱の侵すを懼る。

忍心恒に勇猛なり。

瞋の心を伏するに喩ふ。

【一】 訥陵譏子 (Gangarika-aka)。

【二】 怕怖、怕、懼れる事。

卷の第二

菩提心忍辱波羅蜜多品第四

諸善業を奉行するには、

如來を供養して

屬提を修行すれば、

種々の體空を觀す。

貪快樂を得ず、

心に瞋惱の病あらば、

彼此に施主あり、

彼の愛重心に隨つて

凡そ諸の親近の事は

彼に於て瞋る所なく、

是の如き等の事を忍びて、

瞋に於て若し能く除いて、

冤若し心に生ぜば、

若し瞋惱の食を殮せば、

彼れ我が大冤を食すれば、

彼の冤食せざるを知れば、

凡そ冤の來去を見れば、

施戒を先導とす。

百千劫も盡くるなし。

瞋罪にして立たず。

是の故に一心に忍べば、

意を守つて平等ならしむ。

睡なくしては恒に足らず。

利養を供給す。

瞋惱を生ずるを得るなし。

憎嫌を起さず、

乃ちその安樂を得。

若し冤家に對すれば、

世々安樂を獲。

愛に於て亦た喜び無し。

忍善の壞れざるなし。

我に於て善利なし。

是の故に忍は堅牢なり。

歡喜して瞋らず。

行道普く懺悔して

菩提心は自ら住し

佛子、學戒に住し、

佛の戒體は清淨にして

恒に是の如きの行をなせば、

無始より有情となりて、

是の如く有情となりて

當に知るべし、善知識は

菩薩戒は其上なり。

解脱して師に依つて學び

佛々は智經を説き、

若し人心、戒を護らば

若しは身、若しは心位に、

口に誦して身に行はざらば

喩へば重病人に

虛空藏經中に

戒定を集むるを見る如し

聖龍樹菩薩は

所住の處に隨つて

佛、菩提心に住す。

亦た他をして獲得せしむ。

一心に是の如く持す。

纖毫あるを見ず。

彼の福は量あるなし。

行行にして別たす。

化して一切を覺らしむ。

命の捨つべからざる如し。

大乘の法も亦爾り。

能く吉祥を生ず。

之を讀んで戒法を見る。

所行悉く已に見はる。

當に微細に觀察すべし。

何に喩ふる所を得べき。

空しく藥力を談ずる如し。

説く、謨羅波底

廣く經に説く所の如し。

一心の集むる所

勸めて恒に供養を伸ぶ。

【一】 虛空藏經 (Kasasutra)
虛空藏菩薩經の略一卷姚秦佛
陀耶舍譯、虛空藏菩薩、西方
の勝華敷藏佛の所より大神力
を現じて來る。佛、其の頂上
の寶珠の因を説き、一切の罪
を消し、一切の所求を濟すを
説。

【二】 謨羅波底 (Mūlapāṭi)。

人の勝劣を分たす、

法の廣大ならざる

遠離して敬禮せず、

齒木及び淺唾

淨水と及び淨舎に、

食を喫ふて口に滿たす勿れ。

食ふ時は語言せず

坐するに足を垂るゝを得ず。

女と同乗せず、

諸所不律事は

一切の人既に觀て、

人、道路を問はゞ、

雙手して之を指して、

凡ての所、諸の行歩、

亦妄りに彈指する勿れ。

師已に化滅すと雖も、

戒行を奉じて輕からず、

菩薩の行無量にして

當に清淨心を以て

一晝一夜に於て

彼をして平等を重せしむ。

乃ほ法行に非らず。

大乘を樂説して

淨地に棄てず。

便痢を棄つるを得る勿れ。

食するに聲あらしむ勿れ。

亦た開口を大にする勿れ。

行くも亦臂を挑はず。

亦同じく坐臥せず、

人見て心喜ばず、

遠く離れて敬せず。

一手指する得ず。

其の道の至る所を示す。

臂を弄んで聲を作さず。

威儀是の如く守らば、

四儀應當に學ぶべし。

決定して聖果を獲。

所説、邊あるなし。

決定して奉行せよ。

之を分つて各々三時、

【一】齒木。Danta-Kautilya。齒を刷する小木である。

彼の適意の事を顯して、

恒に有情を悲念して

彼の爲に眞實に住して、

彼れ眞實に成ずるを得て、

刹那に功德を修して

功德を殷に勤修して、

銜はず、覆藏せず、

檀波羅蜜等

別行は最上に非らず、

佛、是の如き利他は、

如來の教中

三界の師入滅す

食に可不可有り、

妙法身を將求して

衆生に於て是の如し。

捨は須く命を盡すべきに非らず。

悲心は當に清淨なるべし。

淨心にして法を重んじ、

傘蓋頭を持せず、

男子女人の爲めに

當に眞實の語を信すべし。

愛護すること愛眼の如し。

必ず當に成佛を得べし。

各よ此に朋友を利す。

苦を離れて大安樂なり。

恒に作して自得す。

誰か諸事等を云はん。

殊妙にして最上なり。

利下は遠離なし。

恒に常に之れ切する所。

彼の慈悲の事を見るに

出家人を分別して

三衣等を離れず、

衆生を苦惱せず、

隨意に圓滿を獲、

彼の捨は平等を要す

果報は自ら圓滿す。

器械等を執らず、

諸の輕慢の事無し。

說法して深く廣大に

【10】三衣、佛制の衣を言ふ、
三衣は一、僧伽梨 Saṅgāṭhī 衆衆
時衣二、憍多羅僧 Uttarasīṅga
三、安陀會 Anarvasaka 中
着衣を言ふ、詳しくは前出。

是の如く遠處せざれば、

人の生身

身を受けて智増さす。

世に於て親しむは親むに非らず。

是の如きは常に自ら制して、

笑ふて高聲なるを得ず。

輕手、他の門を撃ち、

盜の如く、猫鷲の如く。

修心も亦た此の如し。

他人の嫌ふ所

恒に諸の弟子を得て、

一切の言説する所、

彼の作福の事を觀じて、

裏に私かに彼の徳を説けば

彼の時を讚說せんと欲せば、

諸の歡喜の事を修するも

利他の徳を勤修して

憎愛の苦は宜しく捨つべし。

此苦に我れ住せず、

善言の聲は柔軟にして

彼の諸の不善を得。

肢體の成就を求むるが如し。

輪廻りて徒らに自ら困む。

悅顔にして先づ慰喻す。

心に念じて恒に捨てず。

戯れに坐具を擲たず、

諦信して恒に自ら執る。

事を求むるに無聲を行す。

當に龜獮を離るべし。

義利なくして説かず。

言上して尊愛すべし。

之を聞いて善を稱へしむ。

稱讚して歡喜せしむ。

彼は心を開いて必ず喜ぶ。

先づ彼の徳行を觀す。

彼の誠心を得がたし。

當に快樂の報を受くべし。

來つて大苦を生ずるが故に。

來生するは大快樂なり。

悲恨聞いて喜びを生ず。

身心、修行せずんば

云何ぞ身意を護り、

汝等何の所行ぞ、

迷愚自ら制せず、

此の身は不淨の作

骨鎖と肉と連持して

自ら覺めて食らず、

諸の身分を割截して

審かに觀察思惟せしむ。」

一心、是の如く觀じ、

云何ぞ不淨の身は

胎に處して不淨を食し、

是の如く食飲せず。

豺鷲等は食を貪り、

要するに同じ人、身を愛して、

但だ是の如く身を護り、

豺鷲と別なし。

身は死して識は住せず。

身謝すれば識は必ず往く。」

是の故に今意を作して、

云何ぞ能く出離せん。

一切時に自ら勤めん。

各々専ら一心に

妄りに貪つて木身の如し。

云何ぞ返つて愛戀するや。

外皮にて莊飾す。

慧刀を解脱せしむ。

中に精髓を見て、

云何ぞ人あるを見るや。

審諦して人を見ず。

貪愛して守護するや。

出胎して血乳を飲む。

云何ぞ此の身を作らん。

善と惡とを分たす。

受用して業累を成す。

死に至つて慈忍なし。

汝、何ぞ恒に此を作さん。

衣食寧ぞ留むべけん。

受用云何が食らむ。

是の如き事を食らず。」

惟れ自らの讃譽を求む。

若し他人、我に於て

謂く是れ瞋癡等

木は利養尊卑の稱を、

亦た眷屬

利他は自利ならず、

是の故に我心は

一心に住して木の如く、

乃至三業に於て、

煩惱を観察するに、

當に勇猛堅牢にして

善慚は怖るべきなく、

清淨にして三昧に住し。

童稚の位に居ると雖も、

自らも亦他を瞋らず、

我、禪那を受持して

一切有情の爲めに

念念須臾の間

是の如く心を受持して、

鷲は肉を食つて厭はず。

彼れ修行者に非らず。

而も毀謗を生じ、

心に住して恒に木に似たり。

分別せざるが如し。

乃至承事等を爲さず。

但だ一切の爲にせんと欲す。

堅住にして恒に木の如しと説く。

尊親・朋友に於て

憎愛怖を生ぜず。

空にして著せざる如く、

受持して恒常と爲すべし。

當に一心に他に求むべし。

他の尊重する所となる。

他をして瞋惱せしめず。

慈悲恒に此の若し。

意を恒に寂靜ならしむ。

恒に居して罪處なし。

多時は最勝を爲す。

動ぜざること須彌の如し。

人は善を食つて亦然り。

云何ぞ此の身に住するや。

觀内の心亦た然り。

法を以て大柱となし、

當に是の如き意を以て、

諸識皆な是の如し。

若し因業の力を怖れて、

彼の檀戒の度

若し菩提の因を修すれば、

一向に自心を修して

是の如く諸善を修すれば

而して諸煩惱をして

種々正言に説く。

觀覽悉く決了し、

草の割截せらるゝ如く、

刹那に此の行を行じて、

諸の正説を欲して

當に自心を觀照して、

木の情なく

自心を見るも亦然り。

心に輕慢を起す。

當に復た中間を觀すべし。

而も諸の方便を用ゆ。

之を縛して脱せざらしむ。

我れの所在を觀すべし。

攝して刹那に住せしむ。

能く快樂を趣求すれば、

乃至大捨等を修すべし。

彼れ別に思惟せず、

當に是の如き見を起すべし。

怖畏を起さず。

決定して増長せざらしむ。

在を見て而して甚だ多し。

疑網を破りて果を得。

佛戒を念じて能く忍ぶ。

殊勝の果を獲得す。

皆悉く通達を得る。

常に精進を修すべし。

言なく、所作なきに喩ふ。

決定して是の如くならしむ。

彼の迷醉の人の如し。

魔羅發起して

彼の意根門を守らば、

彼の罪の苦惱を念ふ

善い哉、師教に随つて

教誨師に奉して

諸佛・菩薩に於て、

當に稀長憶念し、

塵心にて定まらざれば、」

若し能く意門を守つて

我今此の心を守り、

木の根無く、

眼に色相を觀じ、

物々恒に諦觀す

見るに因つて觀察し、」

所來觀見し已つて、

行くを欲して道を知らず、

決定して方を知り已る。

智者の所行は

是は善、是は惡等

此の身に任せず

善生命を破壊するに由る。」

惡は牽法する能はず、

次に復た安住を獲。

善念生を獲得す。

當に一心に供給すべし。

剎那に心決定すれば、

慈哀し、而前に現るべし。

去々復た還らず、

之を護つて住して散ぜず。

恒に常に是の如く住す。

惡枝葉を生ぜざるに喩ふ。

虛假不實を知る。

是の故に著せず。

之を觀じて惑はざらしむ。

安長して以て善來す。

四方を望んで怖れを生ず。

觀心の行亦た然り。

前後を思惟し、

是の如き事失はず。

此を離れて復た何をか作さん。

是の故に我心を觀じて、

喩へば彌猴の身瘡あらば、

人中の惡も是の如し。

苦惱の瘡を怖れて、

衆合を破壞すれば、

常に是の如く行はずべし。

人中の罪犯さざれば、

我、身命を盡さんと欲し。

別別に身命盡きて

我れ心を守護せんと欲す。

心、念々の中

重病人に喩ふ

散亂心亦た然り。

心散亂して定らず、

器の水を滲漏するが如し。】

多聞に由るの人

過失心定まらず、

心、決定せざる故、

所有の福善

煩惱衆盜賊

恒時にして護るを作す。

一心にして將に護らんとす。

恒に常にして心を護る。

我れ一心に常護す。

心瘡乃ち稀なし。

人中の惡を行ぜず。

自然にして稀れず。

利行して供養す。

善心にして退かず。

合掌して今専らに作す。

一切方便して護る。

諸事忍ぶに寧やすかならず。

諸の事業に堪へず。

聞いて思惟して觀察せよ。】

盛る能はず。

信方便等に於て

不寂靜罪を獲る。

迷惑の賊の得る所となる。

惡處に偷墮し、

魔著するが故に便を得る。

誰れか作り、復を何より生ずるや。

彼の諸の罪心によりて

三界心滅するが故に

若し昔檀施を行せば

今貧なるも煩惱する勿れ。

若し人心少分なりとも、

是の故に果報を説くこと

若の人心に持戒すれば、

願心の冤家

大地は量無邊なり。

履用の皮少分なるも

外の我性も亦然り。

但だ自心を勤めて、

身貧にして福なく、

若し心一衣を施せば、

諸行若し修持すれば、

一切の無利の心

一切心の法財は

苦を離れて安樂を獲。

我云何ぞ修行するや。

貪墮癡の所有なり

佛は諸の世間に生じ、

是の故に怖畏なし。

今世にて貧しからず。

過去云何ぞ悔いん。

檀波羅蜜を行ぜよ。

一切の布施に同じ。

誰を嫌つて牽殺せん

殺し盡すも虚空に等し。

何の皮にして能く蓋おほほん。

處處に隨行して覆ふ。

所有誰れか能く觀めん。

外我にして自ら伏す。

彼の果、所行に同じ。

果を感じて福を増す。

心念じて恒に捨てず。

虚假にして宜しく遠離すべし。

宜しく祕密に觀察すべし。

彼、世間を超ゆるを得たり。

修行は唯だ心を護るなり。

自在と云ふ。觀世音とは世人彼の菩薩の名を稱する音を觀じて救を垂る故に觀世音と云ひ、觀世自在とは世界を觀じて拔苦樂するに自在なるを言ふ。觀音に方觀音、七觀音乃至三十三觀音あり。但し常に觀音と言へば方觀音中の聖觀音を指す。

【五】 以下梵本五十三偈及び持名 *Bodhisattva-pariṣat-sūtra* 三十二偈不放逸品 *Bo dhicitta-pramāṇa* 四十九偈あり。

【六】 *V. Samprajanyanaka's am.*

【七】 阿鼻 (*Avīci*) 前出。無間地獄をいふ。

【八】 夜反 (*Yakṣa*)、富神クウヘーラ (*Kuvera*) に仕ふる半神半人。

【九】 羅刹 (*rakṣasa*)、人獸を殺して食ふ惡鬼。

如來無垢身を洗浴す。

清淨の香は上妙衣に薰じ、

我今此の上衣服を獻す。

種々柔軟なる妙天衣は

如來并びに普賢

護戒品第三

持戒を心を護るをなす。

此の心護る能はずば、

醉象の降らざるに喩ふ。

放心すること醉象の如し。

念素常に執持して

放逸の怖を離るゝを得て、

若し能く一心を繫げば

若し自ら一心を降せば、

師子熊虎狼

一切地獄の卒

若し一切の冤を怖るれば、

皆な心に囚つて得る所なり

地獄の衆の苦器

我れ當に讚詠して歌樂を獻すべし。

蓋を用ひて彼の最上色を覆ふ。

願くは佛、慈悲をもつて哀んで納受せられよ。

彼の莊嚴中にて最上なり。

及び彼の文珠觀自在に供養す。

之を護つて堅牢ならしむ。

云何ぞ能く衆を護らむ

疼痛を患はず、

阿鼻等を招くべし。

心象を繫縛し、

一切の安樂を獲る。

一切皆能く繫ぐ。

一切自ら降伏す。

夜叉・羅刹等

皆悉く是れ冤なり

無邊の苦惱集る。

佛世尊は正説す。

及び熱鐵丸等

【一】普賢。梵に菩薩摩訶薩 Visvabhadra. 又は三曼多跋

陀羅 Samantabhadra. と言ひ

或ひは普賢と譯し、徧吉と譯す。

一切諸佛の理徳、定徳、行徳を主つ、文殊の智慧、辯徳と相對す。理智即ち一雙、行證

一雙、三昧般若一雙である。故に以て釋迦如來の二脇士と爲す。

文殊は師子に駕して佛の左方に侍し、普賢は白象に乗じて佛の右方の侍す。此の理智相即し、行證相應じ、三昧と般若を全したものが即ち毘盧舍那法身である。華嚴一經の所明は此の一佛二菩薩妙法門に歸するので、之を華嚴の三聖と稱する。一切行徳の本體である故に華嚴の席に十大願を説き、又諸法實相の理體である故に、法華の席に法華三昧の道場に其の身を現すべしと誓ふ。文殊 (Mañjuśrī)、殊師利の略。舊稱、文殊師和、滿殊尸利、新稱曼殊室利、外に種々の異譯がある。文殊又は曼殊は妙の義、師利又は室利は頭の義、徳の義、吉祥の義である。此の菩薩は普賢を一對であつて、常に釋迦如來の左に侍して普賢を司る。觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

觀自在 (Avalokiteśvara) 舊

及び彼の清淨妙法寶は

世間所有の諸妙花

所有珍寶の澄清水

山中の寶及び衆寶

蔓花莊嚴樹は光明あり、

人間天上の香塗香

池水清淨にして復た莊嚴す。

穀自然に生じて種うる所にあらず。

虚空界に等しくして量は廣大なり。

我今獻する處并びに子等

我が爲めに大悲を捨てず。

我、無福の大貧窮を以て

我今思惟して自他の爲めにす。

我、自身に一切佛に施し、

我が作上の有情に加被し、

我れ如來の加被を得已つて、

過去の罪業悉く遠離し、

寶光明處甚だ適悅にして、

水精清淨にして復た光明あり。

大寶瓶香水を滿し盛り、

佛の功德は海量無邊なり。

乃至妙菓及び湯藥

皆な悉く奉供して意に適ひ、

樹林寂靜處に適悅して、

結菓低く枝を垂れて椀椽たり。

乃至劫樹及び寶樹

鵝鴻好聲にして極めて適意なり。

別々に莊嚴して供養す。

此の一切は悉く受用あり。

最上佛牟尼に供養す。

彼の最上の供養を受けよ。

更らに纖毫なく別に供養す。

願くは佛斯の隨力施を受けよ。

自身を以て等しく一切に遍くす。

有情は恒に常に佛に教化されん。

化して有情を利して怖畏なし。

未來の衆罪復た作さず、

天蓋莊嚴して眞如を奉ず。

種々の妙堂香浴を作す。

復た適意の諸妙色を著く。

菩提心を發して

愛樂の快樂に迷ふ

遠離を隨行と

若し彼れ快樂を求むれば、

諸善快樂を積んで、

迷惑の因を破壞して

彼の善知識に親めば、

作利若し迴向すれば、

善を作して利を求めず。

若し少食を布施して、

所施の大小は蚊蚋の如し。

云何ぞ能仁を獲得するや。

有情無盡にして虚空の如し。

佛子、念を靜めて思惟す。

數煩惱を生じて復た疑ひを生ず。

佛子は若し菩提心を發さば、

我今摩尼心に歸命し

如來を供養せし爲なり。

乃ち冤嫌に喩ふ。

悉く自意に従ふ。

苦惱の種は無邊なり。

諸の苦惱消除す。

善い哉云何ぞ得ん。

彼の福是の如く得。

彼れ返つて讚歎す。

彼れを説いて是れ菩薩とす。

善を修めて世間を供養するあれば、

亦快樂を獲て、半日を得たり。

要は無邊の有情を度して盡くすなり。

一切智求めて自ら圓滿す。

若し煩惱生ずれば自心作す。

佛此の人は地獄に墮すと説く。

大罪力を滅して勝果を得。

有情を救度して快樂を得。

菩提心施供養品第二

彼の摩尼恭敬心をたゞしくして

用つて如來を供養し奉まる。

福の故に間斷せず、

若し彼等無邊ならば、

彼の心と平等なり。

彼等睡眠を好み、

福流を間斷すること、

妙臂を

解脫得生に於て

乃ち思惟して

苦惱を盡つくさしめ已つて、

有情の無邊苦

一一安樂にして

何を以て父母を利するや。

天及び仙人

是の如き彼の有情は

自利を願はず、

有情は最勝寶にして

種種に利他を意とし

世間種を歡喜し、

心寶と有福と

云何ぞ諸の有情

亦彼の行意の如し。

有情界解脫して

菩提の願は退かず。

亦復た迷醉多し。

空の所有なきに喩ふ。

此の劣意の有情に問へば、

爲めに自ら如來と爲る。

苦惱の有情を療除し、

無邊の福を獲得す。

云何にして療治せん。

無邊の功德を獲らしめん。

是の如き及び眷屬は

淨行婆羅門を得。

乃ち過去の睡夢なり。

唯だ利他を生ずるを願ふ。

希有にして何んぞ生ずるを得ん。

獨り自利に於てせず。

世間樂を精進す。

而して彼れ云何に説くや。

一切快樂を得るや。

若し不快樂に快樂を得ば、

諸の有情處の衆苦の爲めに

多くの快樂百千種を受け、

彼の善逝子、纏蓋に處し、

若し刹那に菩提心を説けば、

若し不淨の像を受持するあらば、

藥變化して遍く堅牢なるが如く、

菩提心の寶像は邊なく

行人伴侶等を調御して

芭蕉實のらずして實を生ず。

菩提心は樹にして清淨なり。

已に暴惡なる衆罪業を作すも、

勇猛に依托して大怖なし。

譬へば劫盡の時の大火の如し。

若し慈尊の無量の言を讚せば、

彼種々の覺心

菩提誓願心にして

去る者行かんと欲するに喩ふ

智分別し説き已つて

菩提の願心

無邊衆を増長救度す。

百千の諸苦怖を離れしめ、

爲に恒に菩提心を離れず。

行は輪廻に在りて愛する所なし。

人天歡喜して悉く歸命す。

佛の寶像に喩ふるに價なし。

等しく妙菩提心を修持す。

價値は世間に喩ふべきなし。

悉く受持して堅牢ならしむ。

實を生ずれば芭蕉は身は謝る。

恒に勝果を生じて盡きず。

菩提心の刹那に依りて脱す。

彼の癡の有情、何んぞ依らざる。

刹那にして罪業の薪を焚燒す。

是を善哉の智者と曰ふ。

正智にして平等なり。

菩提の行を行す。

彼の分別説は

所行は智の用の如し

大果は輪廻の如し。

菩提行經

聖龍樹菩薩集頌

西天中印度惹爛駱國密林寺三藏明教

大師賜紫沙門臣天災詔を奉して譯す。

卷の第一

讚菩提心品第一

佛の如く妙法體は無邊なり。

佛は甘露戒を垂れて覆護す。

此説未曾有なるなし。

我れ自他無く是の如き時は

是の如く發心觀察する時

時に是の如き沙婆界を見る

此の界は刹那にして生を得難し。

思惟す、若し菩提心を離るれば、

雲覆蔽して夜闇黒なるが如し。

佛の威徳の利も亦復た然り。

是の故に善少にして力劣ると雖も、

是の如く若し菩提心を發せば、

無量無邊劫を思惟して

佛子正心に歸命し禮し奉る。

我今説を讚して悉く法に依る。

亦自我にして獨專するに非らず。

乃ち自ら思惟し、觀察して作す。

能く我をして此の善を増長せしむ。

此れ乃ち是れ彼佛世尊は

生を得て人の爲に自ら慶すべし。

復た次に此に來つて何を以てか得ん。

閃電光明刹那に現す。

刹那に意を發して人は福を獲。

能く大惡の業力を破る。

此れ善く勇進して能く彼れを超ゆ。

佛を見て、威な此の眞實を説く。

を斷除し、正覺を得ることであつた。寂天はこの覺悟の彼岸に達する菩提行の大道を示し、憐むべき衆生の爲に、一切苦患を除き、進んで幸福を與へる菩提心を發すを勧め、その實踐を教へたものである。この菩提行經一卷は、外、社會一般の思想問題に關してはいざ知らず、内先づ自らの混沌たる思想に指針を與へ、統制と指導を與へ、自己研鑽に資するもの極めて多いであらう。

更に本書の一大特色は文學的にして記

昭和六年十一月五日

述極めて美しく、興味深くして人を飽かしめず、楽しんで人々の修養求道に役立つことである。美しき佛教の要諦書、興味深き修養求道書として隨一たるを失はない。

更に學者にとつて有意義なのは、本書が梵本・西藏語譯・漢譯を共に有し、略々一致することであつて、この三者を對象することによつて、漢藏兩譯の譯文體、譯語例、佛教語彙の蒐集決定に役立つことと多からう。

譯者平等昭識

本書は佛教教理史上極めて重視される書と言ふことは出来ないが、印度殊に西藏に於ては佛教求道者に佛道修行の好伴侶として好んで愛讀されたもので、その内容は今尙生々とした生命を有してゐるのである。短日月の譯註のことにて、梵文と十分なる對照をなす暇もなく、且漢文難解にして誤譯多き故に、誤謬も少くないことと思ふ。後日梵本と兩譯を對照して研鑽するを期したい。

人は自ら手足を愛す。

これ我が身の四肢なる愛なり。」

是の如く我々は眞に他の生物を愛しなければならぬ。彼等は凡て實に同一生物界の同胞であるのである。我々が眞ならざるこの肉體を以て自我と考へるのは唯習慣の力である。同じくこの習慣の力を以て自我を他人の内に發見するに至らねばならない。(八・九〇以下。漢譯十)。

唯眞實なる確信のみが之を迸出せしめ得るこの驚く可き雄辯を以て、寂天は自明の理として菩提を求める敬虔なる弟子にとつては完全に自他同一 (paramitva samita) であると説き、更に一步を進めて、遂に自他互融 (入我我入 paramāpā-rivartana) に引入れたのである。

第九章(漢譯七品)は感動的の文辭は少なくて、純粹に學究的内容である。この章には中觀派に從つて空の哲學的教義を宣揚して居る。この體系の否定消極主義

は本書の第一章に高調した歸依犧牲主義と矛盾してゐる。寂天も二諦の區別の教義を以て、この矛盾に架橋する手段としてゐる。實に世の凡ては空にして無である。我執 (ātmanoha) は眞に恥づべきではあるが、然も業執 (karmānoha) は有益である。同情慈悲の教を説いた後に彼の詩人寂天は決論としてから言つてゐる。(九・一五二以下)

「凡ての存在は空にして無なるが故に、何を得、何を奪はれたりとすべきや。誰か敬はれ、誰か語られん。

如何にして喜び、愛し憎むべきことあるべき。

如何にして欲と無欲あるべき。

汝が求むる處には遂に何物をも得じ。」

ウインテルニッツ教授は第十章(漢譯八品)は金剛手並に文殊菩薩の稱名や本經の功德を讚嘆して居て、他の章の精神と全然矛盾して居るので、確かに後世の

竄入であるとしてゐる。ターラナータ又夙にこの章の眞正を疑つてゐる。(Pous-sin, Bodhicaryāvatara traduit, p. 143 Vintemity : G. I. I. II. S. 2663-266 印度佛敎文學史三三六—三四二)。

第五 結 論

寂天は本書の初に「自ら修むる記憶の便宜の爲是を述作する、若し我と志を同うする者あつて此の書を見ることあれば意義あるべし」と謙遜なる意を現してゐる。其故に本書は他人を教化する教説でなくて、眞摯に自ら親しく實行を念願する心底より著作されたものである。然しながら事實當時隱遁自適し、自己の安逸自利と獨覺に低徊する佛僧が多い折には、眼前の利益に眼暗んでゐる人々にとつて、よき教訓箴警となつたものであらう。佛陀の眞意から押せばこの世は苦である、而して之より解脱するのは無明

「御身等若し無量劫の苦より逃れんと思はば、

生きとし生ける者とその苦より救ひ出

さんと思はば、

又あらゆる歡喜を樂まんと思はば、

須らく心を菩提に集め來りて一時もた

ぢろがされ。」

斯くその心を菩提に專注して後、この

詩人は感激に満ちた言葉でその感情を描

いて居る。彼は一切衆生の善業とその解

脱とを衷心より法悦し、十方世界の諸佛、

願くは無明の深林に彷徨へる者の爲に法

の光を輝かせ給へと祈り、諸の菩薩衆に

はその入涅槃を猶豫せられんことを冀

ひ、而して自ら一切衆生の救済の爲に、

一切衆生に自己を犠牲に供せんことを誓

つて居る。

『我が善行に依つて嘗て得し功德を以て

一切衆生の爲に

一切の苦痛を和らげん。

病める者には醫藥たらん。
その病の續く限りは

彼等の醫師となり、看護者とならん。

保護を要する者には保護者となり、

彼岸を願へる者には船筏となり、橋梁

とならん。

燈火を要する者には燈火となり、

奴隸を要する者には奴隸とならん。

(三・六、七、二七、一七、漢譯五品)

菩薩が一身に負擔した義務に就いては

第四章乃至第八章に説いてゐる。菩提を

獲んと欲する者は有情の願念に心を注ぎ

一切衆生の福祉に責を負ふ可きである。

一切の波羅蜜を勉勵しなければならぬ。

殊に完全なる犠牲に任ずる覺悟がなくて

はならない。而も亦聖典所載の禁戒法規

に服従し、従つて之を研究修習しなければ

ばならない。凡ての人々と等しく彼等を

愛す可きである。何となれば我等若し有

情を愛せば佛陀爲に歡喜し給ひ、我等若

し有情を害へば、佛陀を害し奉る者であ

る。人ありて我に害を加ふる者があれば、

それは唯ある業の果である。どうして怒

を含むことが出來よう。佛像、窳堵婆、否

實に正法を破壊し、凌辱する者ありとも、

嘗て一度も憎惡の念を起してはならない

衆生に善をなす者は、實にかの一再なら

ずその身を碎き、衆生を想へばこそ、し

かも地獄に迄も墮ち行き給ふたかの諸佛

諸菩薩に善を爲す者である。故に我に多

くの害惡を加へた者に一切の善を酬ひね

ばならない。(看六・一九、三三、六八、

一一〇、一二四、一二六、漢譯八)。實に

菩薩は始めより自他の平等に努力する。

我と非我を相即するのは、菩薩の特に努

め給ふ所の一種の精神修練である。

『他の苦を取り去らざるべからず。

そは又我が苦なればなり。

他に善をなさざるべからず。

頌を四句に譯してゐる如くである。

漢譯の文體は簡潔で難澁にて、意をよ
く盡して居ない所がある。偈文の平仄を
踏む爲無理をなしたことも多いのであら
う。

梵文は勿論頌文としての韻律を持つて
語彙の豊富・表現の綾と相伴つて、流麗・
美麗のものであつたらう。

第四内 容

菩提行經に大乘集菩薩學論が獨創の少
い學者的著作であるのに反して、卓越せ
る詩人の著作である。然し兩書が同一著
者の手に成つたことは殆んど疑ふ餘地は
無い。兩者は全然その性質を異にし、大
乘集菩薩學論は「嘔氣を催ふす可き冗長
多辯な煩瑣哲學」である(バルト Barth:
R. H. R. 42, 1900, p. 65) が、菩提行論
經はトマス・ア・ケンダス Thomas a
Kempis の『基督の模倣』(Imitatio Chri-

sti) と比す可きものである(同 R. H. R.
1898, p. 259f.)。然し、菩提行經は如何
にして佛陀を模倣すべきかを説いたので
なく、如何にして佛陀と成るかを教へた
ものである(Foucher: R. H. R. 1908,
t. 57, p. 241ff. 參)。かく兩者の性質は
異なるのであるが、それにも拘らず兩書は
同一の教義に立脚してゐる。然も大乘集
菩薩學論中に引用文として出る二三の章
句は菩提行經にも出てゐる。例へば前者
一五五頁以下は後者六・一一〇以下に出
で、菩提行經では大乘集菩薩學論の研究
を薦めてゐる。兩書に「將來正覺を得ん
と決心した菩薩の道德的理想を説いてゐ
る。即ちその最高目的を實現するには先
づ一切衆生に對し、無限の慈悲を垂れ、
第二に佛陀崇拜に専念しなくてはならな
い。而して彼は「空」を證得して最高智を
見證するのである。

の中に博學を衒らつた駄句があつたのに
反し、菩提行經には活氣横溢した宗教詩
に乏しくない。確かに寂天は此著をなす
に當つてはある文學的目的、或ひは自己
満足爲にか、或は自分と思を同じうす
る同志の參考(一一以下)の爲にか、何れ
かの目的で編纂したのである。何れにし
ても、彼は熱情と感激とを以てその宗教
的情緒を吐露し、殆んど知らず識らずの
裡に自ら詩人となつてゐる。」(Wintert
nitz: Geschichte der Indischen Litera-
tur II. 263ff.)
本書は他の菩提心又は菩提行に關する
類書(例へば發菩提心經論・菩提離相論・
菩提資糧論等)と共に、菩提心を讃嘆し、
解説し、獎勵し、菩提に到達す可き徳目
たる波羅蜜を説明してゐる。本書は先づ
菩提心即ち正覺への思考、一切衆生救濟
の爲に成佛せんと決心を嘆美してゐ
る。一・八には

て、解するに困難多きが故に、漢譯は自然混雜するに至りしものなるべし。忌憚なく云へば、漢文の譯者は善く原文の意義を了解せずして、翻譯せしものとす外に道なきが如し。」「入菩薩行序一六七」。

邦譯は河口慧海氏によつて大正十年五月「入菩薩行」の名の下に西藏譯から成された。西藏譯本を中心として、之に梵本を参照され、「梵本にあつて藏譯にならぬものは添加し、藏譯にあつて梵本にないものは其の旨を誌され、梵本と藏譯と其の意義の相違のあるものは、大抵は原典に隨つて其の意義を改譯された」とのことである。

四、註釋書。原典は非常に要約された箇處が多く、甚だ解難の書であるので、印度でも其の註釋書が非常に多く著述され、現今西藏藏經祖師部藏中に遺つたもの丈でも十一部に達し、西藏に於ても十數大

家の註釋書が出でたと言ふ。

第三 結 構

「入菩提行」は梵本藏譯は共に四卷十品あるが、漢譯は本書中重要な菩提心全持品第三(三十二偈)と菩提心不放逸品(四十九偈)即ち藏譯の注意教意品第四の二

卷品 梵 本

- 一・一、 Bodhicittānusāsa (菩提心教示品) 菩提心利益說明品 漢譯 讚菩提品
- 一・二、 Pāpadesanā (罪業懺悔品) 罪業懺悔品 菩提心施供養品 (梵本の五偈不足)
- 一・三、 Bodhicittaparigraha (菩提心全持品) 菩提心全持品 缺(三偈無し)
- 一・四、 Bodhicittāpamāda (菩提心不放逸品) 注意教示品 缺(四九偈無し)
- 一・五、 Samprajayaṛakṣaṇa (認識守護品) 認識守護品 護戒品
- 一・六、 Kṣantipāramitā (忍辱波羅蜜品) 忍辱教示品 忍辱波羅蜜多品
- 一・七、 Viryapāramitā (精進波羅蜜) 精進教示品 精進波羅蜜多品
- 一・八、 Dhyanapāramitā (禪定波羅蜜) 禪定教示品 靜慮波羅蜜品
- 一・九、 Prajñāpāramitā (般若波羅蜜) 般若到彼岸品 般若波羅蜜品
- 一・一〇、 Parīṭamaṇā (迴向品) 迴向品 菩提心迴向品

而して漢譯は五字一句又は七字一句から成る韻文であつて、各品の長さは略々

品とが無く、菩提心施供養品第二の終五十三偈を缺いてゐる。是が爲漢譯は修行部の最も重要な説明を失つたので、入菩提行の面目が多分に失はれてゐる。今三本對照の題目品名を列舉すれば、次の如くである。

均等である。然し、各卷の含む品數並びに頁數は不定である。漢譯は大體梵文一

入菩薩行も漢譯の菩提行論經も當つてゐない。然し、現存梵本の如く寂天の著述の當時、Bodhicaryāvatāra といふ名を用ひたか、Bodhisattvacaryāvatāra (入菩薩行) といふ名を用ひたかは多少考ふる餘地がある。

三、漢譯、漢譯は著者の名を異にして聖龍樹菩薩集頌とするのみでなく、原著及び西藏譯には十品あるが、漢譯は八品であつて、其の中第二品の如きは梵本には十六偈及び西藏譯には六十四偈あるが、漢譯は僅かに其の五分の一であつて、十二偈あるのみである。品の數が異なるのみでなく、意義に於ても大いに異なる處が多いが、然し仔細に對照する時は確かに寂天の著である菩提行經の誤譯抄譯である。

漢譯の譯文は韻文より成つてゐるが、譯者が原文の語學及び教學に通曉しない故か、又は筆受者が譯者の意を解さな

つた故か、誤譯が多く、梵本・西藏譯の意より遠ざかり、漢文としてもその意を解し難い個所が多い。一言にして言へば、難解である。例へば河口慧海氏の指摘の如く、梵本・西藏譯の第一品第二十八偈は符合するが、漢譯第一章二十八偈は意義さへ判然しない。又梵藏本第一品と漢譯第一、梵藏本第一品第一と漢譯同、梵藏本第五品第八と漢譯第三の八、梵藏本第六の一、二と漢譯第四の一、二、梵藏本第八の四、五と漢譯第六の四、五、梵藏本第九の一、二と漢譯第七の一、二の如きであつて、梵本と西藏譯は略と一致するが、漢譯はその意を解し難い。唯意味を解し易い部分では、漢譯でも梵藏譯と共に其の義が一致してゐるのである。而して漢譯の難解なることは河口慧海氏が次の如く述べてゐられるのでも十分伺はれるであらう。

くは佛教の漢文學者と雖も、其の意義を採るに困難なる點多からん。云何に漢文を解釋するに巧妙なる學者と雖ども、極く解し易き部分を除いては、漢譯菩提行經の全部の意義を明解する者は一人も非ざるべし。其の中の一句或ひは二句宛を別々に離して見る時は、其の意義の通ぜざる所なきに非ざれども一節として一品として、亦一經として、纏りたる意義を知るには、殆んど不可能なるものあり。是れ本典の有名にして廣く行はれし原書なるにも拘らず、漢譯が廣く世に行はれざりし所以なるか。特に本書中最も難解にして、哲學的根據を説明せる所の緊要なる般若波羅蜜品第九の如きは、其の漢譯に至つては何れの句が批難者の言にして、何れが其の答辯なるか、少しも判然せざる故に、主意混沌として全く原書の意を解すること能はず。前にも一言せし如く、原梵典の文章自體も甚だ簡潔にし

Kavatira)・普曜經 (Lalitavistara)・妙法華華經・金光明經等である。

譯者

譯者天息災は北印度の迦濕彌羅 (Kashmir)

Smira (Cashmere) 又は北印度の煮爛駄羅 Jalandhara の沙門であつて、紀元九八〇年に支那に到着し、廿年間譯經に従つた。九百八十二年に明教大師の稱號を受け、紀元千年に死んだ。彼の追號は慧辨法師である。十八經が彼の譯出とされてゐる。その中に聖觀自在菩薩一百八名經・法集要頌經 (Dharmapada)・佛說十號經等がある。

菩提行經は北宋(九六〇—一二二七)に紀元九八〇年より千一年の間に譯された。譯經家としては、彼の學力によるか、筆受者の拙文によるか、原本の意をよく譯出してゐない。

第二 原典 漢譯並びに

その他の譯註書

解 説 書

一、梵本。菩提行經 (Bodhicaryāvatāra) の梵本はミナイエフ氏 P. Minajeff によつて出版された (Zapiski IV, 1889)。後に重ねて Journal of the Buddhist Text Society (1894) に出された。更によき校訂本をプーサン Poussin がブラジユナーカラマテイ (Pragjākarāmatī) の菩提行經註譯と共に出版した。(Bibliotheca Indica, Calcutta, 1901 ff)。更にプーサンは之を翻譯した。

Bodhicaryāvatāra Introduction à la pratique des futurs Bouddhas poème de Santideva, Paris, 1907.
(尚) Poussin, Bouddhisme, p. 297ff;
C. H. Tawney: J. R. A. S., 1908, p. 583ff (参照)

獨逸語譯はリヒアルト・シュミット教授によつて、一九二三年に成された。

Richard Schmidt: Der Eintritt in den Wandel in Erleuchtung (Bodhi-

caryāvatāra) von Santideva Ein buddhistisches Lehrgeheimnis des VII. Jahrhunderts n. Chr., Paderborn, 1923

菩提行經の梵語寫本は東京帝國大學梵文學研究室所藏の梵策の中に河口慧海氏將來のものがある。

二、西藏譯。西藏譯はナルタン版祖師部藏經中の經部 (イ) ヲラ函にある。

原典と西藏譯は—他の經の場合でも同様であるが、—よく一致する。唯西藏本は梵本の書名が Bodhicaryāvatāra 入菩提行であり、漢譯は菩提行經であるのに、「入菩薩行となつてゐる。藏譯が梵本の入菩提行によらず、入菩薩行の題目を採んだのは、何れの梵本も冠頭に「善逝法子の誓戒即ち菩薩行に入ることを佛説に隨ひ要を集めて説明すべし」との明文があるに依つて撰んだのであらう。Bodhicaryāvatāra の譯名としては西藏語の

は彼等に學處要集と諸經要集との二が市舎の窓側にある木皮の中に、學者が細字で記したものが存在したと告げられた。此の地でも尊者に隨つて學ぶ比丘五百あり、時に日々多くの鹿が尊者の庵室に入つたが、外に出る者一匹もないので、

王を始め諸比丘が皆惡言を放つたので、尊者は總ての鹿を外部に出した。其の後尊者は吉祥山の南方で烏桓瑟摩明王の修法に行かれた時、外道の教師シャンカル・デーヅア Shankar-teva が大自在天の曼荼羅を建立したので、尊者は大暴風を起して、彼の曼荼羅を破壊して大河の彼岸に投下した。而して彼等を降して佛教に入らしめた。是を要するに、尊者の事業は

諸佛を歡喜せしめ、著述完全にして、論議の敵を破り、不可思議神力を現したのと、乞食行と諸王を化導し、外道を降伏する等七種の相を示した。

尊者は西藏にても高名で、印度に於てもブラツギヤ・カラ・マチ大徳は尊者を聖人なりと説かれた。尊者は御歳百歳まで世に住された。(如意寶樹史一〇三、河口慧海氏、入菩薩行序一八一―二二頁)。

記述は甚だ傳説的に粉飾されてゐるが、これにて寂天の大體は伺はれよう。

二、寂天の著作。寂天の著『大乘集菩薩學論』は二十七頌並に之に著者自ら蒐集した浩瀚な註釋から成る大乘佛教の教科書である。註釋も寂天が蒐集したものと思

はれるが、多く聖典の引用と、拔萃から成り、之を略頌の周圍に集めて章に分類したものである。この書は博學と精通を示すもので、獨創はない。大乘の道德概論として好適なもので、殊に今現存しない原本から數多くの拔萃をし、しかも引用が極めて綿密で信頼すべきであるので有益で重要である。

成佛を志す者は菩提心即ち正覺に對す

る思惟、菩薩の修行の經路を歩むべく、布施・慈悲を行つて、その爲に自己を否定し、他人の爲に最後まで犠牲となり、親隣の爲に現在と未來の幸福をも犠牲にし、更に一切の他の波羅蜜特に最高智空觀なる禪定を以て空を領解し、佛陀崇拜の信仰・寧堵婆の建立等を擧げ、常に衆生救済に志し、「我一切衆生を涅槃の都に引導せん」ことを常住の念願とすべきを願つてゐる。

大乘集菩薩學論の引用する原本には虚空藏經(Ākṣagarbhasūtra) 優波梨所問經(Uplīparipīcchā) 具緊惡提叱所問經(Ugradataparipīcchā) 月燈經(Cāndra pradīpasūtra) 寶嚴樹經・維摩經(Vimālakīrtinīdeśa) 大事(Mahāvastu) 中の觀音經(Avalokānasūtra) 十地經(Daśabhūmikāsūtra) 法集經(Dharmasamgīṭisūtra) 悲華經(Karunāpuṅḍarīka) 寶積經(Ratnakūṭasūtra) 楞伽經(Laṅkā-

にカルヤーナ・ヴァアルト Kaljāna-varma
と言ふ王があつた。一の王子があり、其
の名を靜シラヤツカ 錮カと云つた。成長の後一
夜夢に曼珠菩薩が王座に坐してゐた。時
に解脱佛母は彼の頭上に水を注いで「王
國は地獄の熱湯に似たり」などと説いた
ので、王子は王位を繼ぐことを不適當で
あると知つた。而して王位に上らうとす
る前夜、彼は王宮より脱れ出で、旅行す
ること廿一日にして、路傍林中の瀧水を
飲もうとした時、一の婦人が出で來つて、
他の甘水である水を與へて飲みしめ、林
中の窟内に住する一の瑜伽行者の前に導
いた。王子は彼の行者に就いて教を受け
て觀じた處、高き三昧地を獲得した。後
に東方印度の第五獅子王の許に行いて、
彼の王に臣事すること十二年に及んだ。
彼は其の尊信する本尊の三昧形である
木劍を腰に帯びてゐた。多くの臣下中彼
が大臣であつて、木劍を帯したことを奇

として王に告げる者があつた。王は彼に
迫つて其の劍の中身を見せることを請う
た。彼は「是を示せば王は兩眼を失う、
若し強いて見ようとされるならば、一眼
を覆うて見られたし」と言つて示した處、
王は遂に左眼を失つた。此に於て王は彼
の行者たることを知つて懺悔し、大に供
養を行つた。
其の後中央印度に行き、那爛陀寺に入
つて、耆那提婆(Jinadeva 勝天)に隨つ
て出家得度して、Gandhava 寂天と名け
た。後に學處要集と諸經要集とを著述し
て、内密に三摩地を精修し、無爲行に入
つても、外には五合の米を食ひ、常に臥
眠した如くに見へた。それ故諸王は彼を
呼んで三行者(喫食・放便・睡眠の三行)と
言つた。那爛陀寺の大衆等は彼を寺から
放逐せんと欲し、各僧が順次に經を誦す
る集會を開いた。遂に靜天の誦する時に
當つて三千の大衆は各々其の上衣を脱い

で座上に重ねたので、高くして上ること
が出来なかつた程であつたが、彼は神力
にて高座に上り、大衆に問ふて言つた。
「從來に存したものを誦さうか、或ひは古
來存しないものを説かうか。大衆等は總
べて「古來存しないものを述べよ」と言つ
た。此に於て彼は大乘一切藏の意義を要
集した「入菩薩行」を説いた。同書は十品
ある内、第九の般若波羅蜜多品の第三十
五偈の上二句、即ち
(心に何も思はざる時は)實在と無實在
等は心の前(境)に於て住せざる故に
と説かれた處から、尊者の身は次第に
空中に上つて、姿は見へずになつて行つ
たが、説法の聲は相續して聞へたので、
學者は之を聞いて記憶した。
其後尊者はヅリリンガ Dhilliga 國(南
印度)の首府カリンガ市に居られた時、
三人の學者が尊者の許に行いて、中印度
に招待したが行かなかつた。然し、尊者

菩提行論經解題

菩提行經 *Boḍhicaryavatāra* は菩提行を中心として佛教の要諦を經として、佛教修道者の修道を美しい韻文で記述した中大の經である。漢譯は龍樹の作として

ゐるが、梵本・西藏譯共に寂天 (*Śāntideva*) の作とし、この方が妥當である。この經は何れの宗の所依の經でもないが、倫理修道書として人々に愛讀されて來た。

第一 著作者並に譯者

一、著者の生涯。菩提行論の著作者は漢譯を除いて、梵本・西藏語譯並に寂天 (*Śāntideva*) としてゐる。漢譯は龍樹としてゐるが、龍樹の著たる文獻的思想的根據は極めて薄弱である。書中の思想に龍樹の著として主張し得る何等の特徴も現れて

ゐない。又一方寂天の著大乘集菩薩學論 (*Śikṣāsamuccaya*) と相關連するものも多いので、寂天著とするのが妥當と思はれる。

漢譯が龍樹菩薩集頌とし、龍樹が編著した如くなしたのは、天息災翻譯の當時靜天の名が世に知られなかつたのでその名が廣く知られた龍樹の名を用ひるに至つたが、印度にある時に一方に菩提行經が龍樹の編著した如く傳へられてゐたのであらう。勿論漢譯者の輕卒であつたことは否めない。

珊底提婆 (*Śāntideva*) 即ち寂天は世親の四大弟子一戒律最勝の教主功德光、論部最勝の教主智賢、因明最勝の教主陳那伽 (*Diṅnaga*)、般若最勝の教主聖解脫部 (*Śāntarāga*) の四人と略々同時代であつて、那

爛陀寺 (*Nalanda*) に於て大乘中道教義を顯揚し、菩提行を宣傳した。大乘佛教の後年の學匠中最も有名であつて、且詩人として頭角を現した人である。彼は西紀七世紀に住んでゐたと思はれる。ターラナータ (*Taranatha*) によれば、彼はサウラーシネトラ *Saurāstra* (今日のグヂェラート *Gujerat*) の王子であつたが、瑜伽行者に權化した文珠師利菩薩 (*Mañjuśrī*) に就いて學問をしてゐる内に、女神多羅 (*Tārā*) に導かれて王位を捨てた。彼は大魔術を得て、一時パンチャシンハ王 (*Pañcasiṅha*) の大臣となつたが、結局比丘になつた。ターラナータは彼の著作として『大乘集菩薩學論』 (*Śikṣāsamuccaya*)・經集論 (*Sūtrasamuccaya*)・菩提行論 (*Boḍhicaryavatāra*) を擧げてゐる。

次に如意寶樹史の尊者小傳を河口慧海氏譯によつて、出せば左の如くである。『南方印度サウラーシネトラ *Saurāstra* 國

佛の履行する所なればなり。是の故に行者は是の經を聞くを得て、當さに自ら慶幸して大善利を獲。若し書寫して此の經を讀誦するあらば、當さに知るべし、此の人獲る所の福報は無量無邊なり。所以は何ぞや。此の經の所縁は無邊なるが故に。無量の誓願を興發する故に、一切の衆生を攝受するが故に、無上大菩提を莊嚴するが故に。獲る所の福報も亦た復た是の如く限量あることなし。若し能く其の義趣を解せば、説の如く修行せよ。一切諸佛は阿僧祇劫に於て、無盡智を以て其の福報を説くも、亦盡す能はず。若し法師あり、是の經を説く處には、當さに知るべし、是の中に便ち塔を起すべし。何を以ての故に。是れ眞實正法の出生する所の處なる故に。是の經隨つて國土・城邑・聚落・寺廟精舎に在り。當さに知るべし、是の中に即ち法身あり。若し人、香花・伎樂・懸繪・幡蓋・歌頌を供養し、讚歎合掌恭敬すれば、當さに知るべし、是の人已に佛種を紹ぐ。沉んや復た具足して經を受持する者は、是の諸人等は、功德智慧莊嚴を成就し、未來世に於て當さに授記を得べし。決定して當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。

發菩提心經論（終）

名ける。二に陰魔、又五泉魔と云ひ、新譯に蘊魔と云ふ、色等の五陰能く種々の苦惱を生ずるので魔と名ける。三に死魔、死能く人の命根を斷つので魔と名ける。四に他化自在天魔、新譯では自在天魔と云ふ。欲界の第六天即ち他化自在の魔王能く人の善事を害するので魔と名ける。此の中第四を以て魔の本法とし、他の三魔は類從して皆魔と稱する〔智度論五〕

んと欲するを見て、能く説乃至は一偈讀誦して法をして絶えざらしめ、専心に法を護つて身命を惜しみます。六には諸の衆生の恐畏苦惱するを見て、救護を作さんが爲、施すに無畏を以てす。七には發勤修行して是くの如き等の方等大乘甚深の經法諸菩薩藏を求む。八には是の法を得て已つて受持讀誦し、所説の如く行じ、所説の如く住す。九には自ら法に住して、亦能く勸導して、多くの衆生をして是の法中に入らしむ。十には法中に入り已つて能く解説を爲し、示教利喜して衆生を開悟す。菩薩は是くの如き十法を成就して、無上菩提に於て終に退失せず。

菩薩應當に是くの如く此の經を修行すべし。是くの如き經典は思議すべからず。所謂能く一切大慈悲の種を生ず。是の經は能く具縛の衆生を開悟引導して、其れをして發心せしむ。是の經は能く菩提に向はん者の爲には生因となる、是の經は能く一切菩薩無動の行を成ず。是の經は能く過去未來現在の諸佛の護念する所となす。若し善男子善女人有つて、勤めて無上菩提を修集せんと欲せば、當に是くの如き經典を廣宣流布して、^{四八} 閻浮提に於て斷絶せざらしめ、無量無邊の衆生をして是の經を聞くを得しむべし。若し善男子・善女人あつて、是の經を聞く者は、是の諸人等は悉く猛利を得て、不可思議なる大智慧の聚なり。福德果報を稱量すべからず。所以は何ぞや、是の經は能く無量の清淨なる慧眼を開き、能く佛種をして相續して斷へざらしむ。能く無量なる苦惱の衆生を救ひ、能く一切の無明の癡闇を照らし、能く^{五〇} 四魔及び諸塵業を破り、能く一切外道の邪見を壊し、能く一切煩惱の大火を滅し、能く因縁を消して諸行を生起し、能く慳貪・破戒・瞋恚・懈怠・亂意・愚癡・六極の重病を斷じ、能く業障・報障・煩惱障・諸見障・無明障・智障・習障を除く。要を取つて之を言へば、此の經は能く一切惡法を消滅して餘り無からしむ。能く一切の善法は熾然として增長せしむ。若し善男子・善女人有つて、是の經を聞き已つて、歡喜愛樂して希有心を生ずれば、當さに知るべし、是の人已に曾つて無量の諸佛を供養し、深く善根を種う。所以は何ぞや、此の經は是れ三世諸

以て未來成佛の記別を受けたのである。

【四四】 無生忍、前出。殊に看註一三四。

【四五】 信忍。三忍中善導所説の三忍中の第三。彌陀を信じて正信に住するもの（無量壽經鈔五）。

五忍、仁王經の所説の第二、初地より三地の間に、既に法性を見て正信を得たる位に名く。六忍中の一。別教の菩薩十住位の中に於て一切心皆悉く空寂なりと信ずる。能く空法に於て忍認の信證する位に信忍と名く。

【四六】 順忍。四地より六地の間に於て菩提の道に順じて無生の果に趣向する位に名く。十忍に於ては順忍は柔順忍に同じ。慧心柔軟にして能く眞理に隨順するもの。

【四七】 菩薩菩提を退失せざる十法。

【四八】 閻浮提 Jambudvīpa、前出。

【四九】 本經修持の功德を述ぶ。

【五〇】 四魔。魔、梵語 Mara、能奪命、障礙、擾亂、破壞などと譯す。人命を害し、人の善事を障礙するもの。欲界の第六天主を魔王とし、其の眷屬を魔民魔人とする。

四魔とは煩惱魔、貪等の煩惱能く身心を侵害するので魔と

意の菩薩、誠心敬仰して菩提を愛樂す。佛語を信するが故に漸く能く入るを得たり。云何が信となすや。信は四諦を觀じ、諸の煩惱妄見の結縛を除いて、阿羅漢を得、十二因縁を信觀じて、無明を滅除し、諸行を生起して辟支佛を得。四無量心・六波羅蜜を信修して阿耨多羅三藐三菩提を得、是を四三信忍と名く。衆生は無始生死に於て、相を取つて執著し、法性を見ず。當に先づ自身五陰假名の衆生を觀察すべし。是の中無我にして衆生有る無し。何を以ての故に。若し有我ならば、我は應に自在なるべし。而も諸の衆生は常に生老病死の侵害する所となり、自在なるを得ず。當に無我なりと知るべし。無我は即ち無作者なり。無作者は亦無受者なり。法性は清淨にして常の如く常住なり。是くの如く觀察すれば、未だ究竟すること能はず、是を四六順忍と名く。菩薩は順忍を修信し已つて、久しからずして當に最上法忍を成すべし。

功德持品第十二

菩薩具足して無相心を修して、心未だ曾つて作業に住せず。是の菩薩は諸の業相に於て知つて故に作す。善根を修し、菩提を求むるが爲の故に、有爲を捨てず。諸の衆生の爲に大悲を修するが故に無爲に住せず。一切佛の眞妙智の爲の故に生死を捨てず。無邊の衆生を度し、無餘ならしむるが爲の故に涅槃に住せず。是れを菩薩摩訶薩、深心に阿耨多羅三藐三菩提を求むると名く。

諸の佛子よ、菩薩、十法を成就して、終に無上菩提を退失せず。何を謂つて十となす。一には菩薩深く無上菩提の心を發し、衆生を教化して亦發心せしむ。二には常に佛を見るを樂しむで、己の所珍を以て奉施し、深種の善根に供養す。三には求法の爲の故に尊敬心を以て法師を供養し、法を聽いて厭くことなし。四には若し比丘僧の壞して二部と爲り、互に諍訟を起し、共に相過惡するを見れば、方便を勤求して其れをして和合せしむ。五には若し國土邪惡にして増上して佛法を壞た

因縁を説く經文である。法華經中樂王菩薩本事品の如きは是である。六に開多伽 *Madhira*、本生と譯す。佛自身の過去世の因縁を説く經文である。七に阿浮達磨 *Abhūt dharma*、新に阿毘達磨と云ふ。未曾有と譯す。佛が種々の神力不思議を現じ給ふのを記した經文である。八に阿波陀羅 *Avadhuta*、譬喩と譯す。經中に譬喩を説く處がある。九に優婆提舍 *Upāsaka*、論議と譯す。法理を論義問答する經文である。阿彌陀經の如きは是である。十一毗佛略 *Vipula*、方廣と略す。方正廣大の眞理を説く經文である。十二に和伽維 *Takirana*、授記と譯す。菩薩に成佛の記を授ける經文である。此の十二部の中に修多羅と祇夜と伽陀との三は經文の上の體裁である。他の九部は其の經文に載せる内容に従つて名付けたのである。〔智度論三十三〕

【三】然燈佛、梵語は *Dipati*、*Ikana*、提洵竭、提和竭羅と言ふ。瑞應經に錠光と譯し、智度論に然燈と譯す。錠は燈の足である。釋迦如來の因行中第二阿僧祇劫の滿時に此の佛の出世に逢つて五華の蓮を買つて佛に供養し、髮を泥に布いて佛をして之を踏ましめ、

子よ、譬へば菩薩仰いで虚空に書くが如し。悉く如來四二十二部經を寫す。無量劫を経て、佛法已に滅す。求法の人は見聞する所なし。衆生顛倒して惡を造ること無邊なり。復た他方の淨智慧人有り。衆生憐愍して廣く佛法を求む。行いて此に到りて、空中の字を見、文畫分明にして即便ち之を識る。讀誦受持して所説の如く行ふ。廣演分別して衆生を利益す。此の空に書する者は空字を識り、人、思議すべからず。而も宣傳を得て、修習受持す。衆生を引導して繫縛を離れしむ。諸佛子よ、如來説いて言く、過去世の時善提道を求めて、三十三億九萬八千の諸佛に值ふを得たり。爾の時皆轉輪聖王となり、一切の樂具を以て、諸佛及び弟子衆を供養す。所得有るを以ての故に、授記を得ず。後に於て復た八萬四千億九萬の辟支佛に值ひ、亦四事を以て盡形供養す。是を過ぐる以後、復た六百二十萬一千二百六十一佛に值ふ。爾の時皆轉輪聖王となり、一切樂具を以て形を盡して供養す。諸佛の滅後、七寶の塔を起して舍利を供養す。後佛出世し、奉迎勸請して正法輪を轉す。是くの如く百千萬億の諸佛を供養す。是の諸の如來は皆空法、中に於て諸の法相を説く。有所得を以ての故に、亦授記を得ず。是くの如く展轉して乃至四三然燈佛の興るに值ふを得て、佛を見、法を聞いて、即ち一切四四無生法忍を得たり。是の忍を得已つて即ち授記を得たり。然燈如來、空法中に於て諸法相を説き、無量百千の衆生を度脱して、所説なく、亦所度なし。牟尼世尊は世に興出して、空法中にして文字有りと言く。示教利喜普く得て行を受く、而も所示なく、亦受行なし。當に知るべし、是の法性の相は空を盡す。書は亦空にして、識も亦空なり。説く者も空なり、解す者も亦空なり。本來より空にして、未來亦空にして現在も亦空なり。而して諸の菩薩は萬善方便力を積集するが故に、精勤にして懈らず、功德圓滿して、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。此れ實に甚だ難くして、思議すべからず。無法中に於て諸の法相を説き、無得の中に於て有得の法を説く。是くの如きの事は諸佛の境界にして、無量智を以て乃ち解くを得べし。是れ思量の能く知るを得る所に非ず。新發

の理を信忍するを道法忍と云ふ。又大乘の菩薩初地の見道に於て無生の理を信忍するを無生忍と云ひ、其他種々の法忍がある。

【四二】授記 (Yakranā)。佛陀がある人の善業に對し、その功德によつて、未來、何佛の下に何某の名にて佛と成るべしと成覺を豫言すること。

【四三】十二部經。一切經を十二種類に分けた名である。一に修多羅 Sūtra、此を契經と云ふ。經典の中に直ちに法義を説ける長行の文を云ふ。二に頌文に對して頌文でない通常の經文を長行といふ。契經とは理に契ひ、據に契ふ。經典であるから言ふ。二に祇夜 Geṅḍya、應頌又は重頌と譯す。前の長行の文に應じ、重ねて其の義を宣べて頌となしたからである。凡そ字句を定めた文體を頌と云ふ。三に伽陀 Gāthā、韻頌又は孤起頌と譯す。長行に依らず、直ちに偈頌の句を作る者を言。法句の如きは是である。四に尼陀那 Nidāna、此に因緣と譯す。經中見佛開法の因緣、佛の説法教化の因緣を説く處である。即ち諸經の序品の如きは因緣縁である。

五に伊帝目多 Itivuttako、本事と譯す。佛弟子の過去世の

著なき故に諸善惡に於て解するに果報なし。所習の慈に於て了かに我あるなし。所習の悲に於て了かに衆生なし。所修の喜に於て了かに命あるなし。所習の捨に於て了かに人あるなし。布施を行すと雖も、施物を見ず。持戒を行すと雖も、淨心を見ず。忍辱を行すと雖も、衆生を見ず。精進を行すと雖も、離欲心なし。禪を行すと雖も學んで除惡の心なし。智慧を行すと雖も、心に所行なし。一切の緣に於て皆是れ智慧なり。而も智慧に著せず。智慧を得ず、智慧を見ず。行者是の如く智慧を修行すれば、所修なく亦修せざるなし。衆生を化するために現に六度を行じて内清淨なり。行者是の如く善く其心を修め、一念の頃に於て種ゆる所の善根は、福德果報無量無邊なり。百千萬億阿僧祇劫に窮盡すべからず。自然に阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得る。

空無相品第十一

往昔一時佛、迦蘭陀竹林に在しましき。諸大衆無量の集會と與なりき。爾の時世尊、正法を班宣し、諸大衆に告げたまふ。如來所説の諸法は無性・空にして所有なし。一切世間の信解し難き所なり。何を以ての故に。色は縛なく、解くなし。受想行識は縛なく、解くなし。色は無相にして諸相を離れ、受想行識は無相にして諸相を離れ、色は無念にして諸念を離れ、受想行識は無念にして諸念を離れ、眼色・耳聲・鼻香・舌味・身觸・意法も亦復た是の如し。取なく捨なく垢なく淨なく、去なく來なく向なく背なく、闇なく明なく癡なく慧なく、此の岸に非らず、彼岸にあらず、中流に非らず。是を無縛と名づく。無縛の故に空なり。空を無相と名づく。無相亦た空なり。是を名づけて空となす。空は無念に名づく。無念亦空なり。是れを名づけて空と爲す。空念亦空なり。是を名づけて空となす。空中善なく惡なく、乃至亦た空相なし。是の故に空と名く。菩薩若し是の如く、陰界入性を知れば、即ち著を取らず。是を法忍と名く。菩薩是くの如く忍ぶが故に、授記の忍を得、諸佛

涅槃を、大乘は我法二空の涅槃を實相とする。(緣田)

【二六】 有所得見。有所得は執着の心。分別の心。見はそれに関する見解。

以下風着心、意識、心無相等を説明する。

【毛】 慈悲喜捨、四無量心である。前に詳し出す。

【三八】 迦蘭陀竹林(Kaṣāpāyana) 又迦蘭陀竹園、迦藍陀竹園、竹陵竹園等。又、迦蘭陀長者の所有であつた竹林。摩竭陀國王舍城と上茅城との間に在り。迦蘭陀長者の所有に係り、もと尼犍外道に與へたのを、後に佛に奉つて僧團となしたで、是れが印度佛教僧團の初めで、所謂竹林精舍は是である。

【三九】 陰界入性。五陰と十八界とである。陰入界とは五陰十二入、十八界である。之を三科と言ふ。

【四〇】 法忍。忍は忍許の義にて今まで信じ難かつた理を信じて今まで信じて忍許するの法に施して忍許するのである。

此の忍許に依て愈惑を離れ已つて理を照明する智の決定するのを法智と云ふ。依つて忍は斷惑の位であつて因に屬し、智は證理の位にて果に屬する。小乗の見道に於て欲界の苦諦

此の如き七法は是の故に菩薩應當に遠離すべし。

若し疾く無上菩提を得んと欲せば、當に七法を修すべし。何を謂つて七となす。一には菩薩當に善知識に親近すべし。善知識とは、所謂諸佛及び諸菩薩若くは聲聞人なり。能く菩薩をして深法藏諸波羅蜜に住せしむ。亦是の菩薩の善知識なり。二には菩薩當に出家に親近すべし。亦當に阿蘭若法に親近し、女色及び諸嗜欲を離れ、世人と共に事に從はざるべし。三には菩薩應當に自ら觀すべし。形は糞土の如く、但だ臭穢を盛る。風寒熱血、貪著すべきなし。日に當に死に就くべし。宜く厭離を思ふて精勤修道すべし。四には菩薩應當に常に和忍恭敬柔順を行すべし。亦他人を勸化して忍中に住せしむ。五には菩薩應當に精進を修集して、常に慚愧を生ずべし。師長を敬奉して窮下を憐愍し、厄苦を見れば、身を以て之に代はる。六には菩薩應當に方等大乘諸菩薩藏を修習し、佛所讚の法は受持讀誦すべし。七には菩薩應に第一義諦に親近し、修習すべし。所謂三五實相一相無相、若し諸菩薩疾く無上菩提を得んと欲せば、應當に是の如き七法に親近すべし。

復た次に、若し人菩提心を發せば、所得あるを以つての故に、無量阿僧祇劫に於て、慈悲・喜捨・布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修集す。當に知るべし、是の人生死を離れず、菩提に向はず。何を以ての故に。所得心及び諸得見、陰界入見、我見・人見・衆生見・壽命見・慈悲喜捨施戒忍進定智等の見あればなり。要を取りて之を言へば、佛法は俗見、及び涅槃見なり。是の如きは、有所得見三六即ち是れ執著心なり。執著とは是を邪見と名く。所以は何ぞや。邪見の人三界に輪轉し、永く出要を離る。是の執著とは亦復た是の如し。永く出要を離れ、終に阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。若し人、菩提心を發せば、應當に是心空相を觀察すべし。何等か是れ心ぞ、云何か空相なる、心は意識と名く。即ち是れ識陰意入境界なり、心空相とは、心心無く、相亦作る無きなり。何を以ての故に。是心相空にして作者あるなし。作らしむる者無しとは、一切法に於て即ち執著なきなり。執

【三〇】疾く無上菩提を得んと欲する者の修すべき七法。

【三一】實相。實とは虛空にある。是れ萬有の本體を指稱せる語である。法性と言つても眞如と言つても眞如といひ、其の體眞實にして常住である義に就ては眞如と言ひ、此の眞實であつて常住なのが萬法の實相である義に就いて實相といふ。其他一實。一如。一相。無相。法身。法證。法位。涅槃。無爲。眞諦。眞性。眞空。眞性。實諦。實際と言ふのも、皆是れ實相の異名である。又名隨徳用の三諦に依れば、空諦を眞如と言ひ、假諦を實相と言ひ、中諦を法界と言ふ。此の中法華は實相を説き、華嚴には法界を説き、深密には眞如又は無爲を説き、般若には般若佛母を説き、楞伽には如來藏を説き、涅槃には佛性を説き、阿含には涅槃を説く。而して華嚴の始教。天台の通教已下に在つては不變の空眞如を實相とし、華嚴の終教已上、天台の別教已上に在つては不變・隨緣の二相を實相とする。而して華嚴は隨緣の萬法を實相とし、天台・眞言は性具の諸法を實相とし、小乘は我空の

と雖も、其の心は菩提に發越するを忘れず。是を菩薩觀三世方便と名く。過去は已に滅し、未來は未だ至らず、現在に任せず。是くの如く觀すると雖も、心心數法生滅散壞して、而して常に善根を聚集するを捨てず、菩提法を助く。是を菩薩觀三世方便と名づく。

復た次に、菩薩は一切の善・不善・我・無我・實不實・空不空・世諦・眞諦・正定・邪定・有爲・無爲・有漏・無漏・黑法・白法・生死・涅槃を觀じ、法界性一相無相の如く、此の中、法は無相と名づくべき無く、亦法は以て無相となす有るなし。是れ即ち名けて一切法印と爲す。印を壞すべからず。是の印中に於て亦印相なし。是れを眞實智慧方便般若波羅蜜と名く。菩提心を發して、菩薩摩訶薩は應に是くの如く學ぶべし。應に是くの如く行すべし。是くの如く行すれば、即ち阿耨多羅三藐三菩提に近く。菩薩摩訶薩、智慧を修行して心に行する所なし。法性淨なるが故に。是れ即ち般若波羅蜜を具足す。

如實法門品第十

若し善男子・善女人、六波羅蜜を修習して、阿耨多羅三藐三菩提を求むる者は、應に七法を離るべし。何等か七とする。一には惡知識を離る。惡知識とは、所謂人をして上信・上欲・上精進を捨離して衆の雜行を集めしむ。二には女色を離る。嗜欲に貪著して、世人に狎習して與に事を執る。三には惡覺を離れ、自から形容を觀じ、貪著愛重して、染著守護し、久しく保つべしと謂ふを離る。四には瞋恚・暴慢・嫉忌にして、諍訟を興起して善心を壞亂するを離る。五には放逸にして、憍慢懈怠にして、自ら小善を恃み、人を輕蔑するを離る。六には外道の書論及び世俗の文頌・綺飾せる言辭を離れ、佛の所説にあらずんば、應に讚誦すべからず。七には應に邪見・惡見に親近すべからず。是の如き七法は應に遠離すべき所。如來説いて言はく、更に餘法有りて深く佛道を障ゆるを見ず、

地である。十に佛地、是れ菩薩の最後身に於て餘殘の習氣を斷じ、七、寶樹下に天衣を座とし、成就し乃至入定する位である。但し是れ通教の佛に就いて言ふ。若し藏教の佛ならば菩提樹の下に吉祥草を座として成道するのである。(織田) 【八】 四梵行、又四梵住とも言ふ。慈悲喜捨の四無量心である。此の四心は梵天に生ずる行業なので梵行と名く。梵行とは梵は清淨の義、婬欲を斷ずる法を梵行とする。即ち梵天の行法である。梵行を修して梵天に生ずるのである。 【九】 菩薩の十法の善思惟心。 【一〇】 菩薩の十二善入法門。 【一一】 この前後菩薩の善觀三世方便を説明す。 【一二】 黑法白法、黑白は善惡の異名である。 【一三】 菩提を求める者の離る七法。

する心、煩惱を降伏するは伴侶に非らざる心、諸善法を護り、自らの伴侶とする心、惡法を抑制して除斷せしむる心、正法を修習して増廣せしむる心、二乗を修すと雖も常に捨離するの心、菩薩藏を聞いて奉行するを樂む心、自利利他隨順して諸善業を増進する心、眞實行を修して一切佛法を求むる心を發すべし。

復た次に^{二五}菩薩は智慧を修行して、復た十法の善思惟心ありて聲聞・辟支佛と共ならず。何を謂つて十となすや。定慧の根本を分別するを思惟す。斷常二邊を捨てざるを思惟す。因縁は諸法を生起するを思惟す。衆生我人の壽命無きを思惟す。三世去來住法なきを思惟す。發行なくして因果を斷ぜざるを思惟す。法は空なりと思惟して善を殖へて懈らず。無相を思惟して衆生を度して廢せず。無願を思惟して菩提を求めて離れず。無作を思惟して受身不捨を現す。

復た次に^{三〇}菩薩復た十二善入法門あり。何を謂つて十二とするや。善く空等三昧に入つて證を取らず。善く諸禪三昧に入つて禪生に隨はず。善く諸通智に入つて無漏法を證せず。善く内觀法に入つて決定を證せず。善く入つて觀一切衆生空寂を觀じて大慈を捨てず。善く入つて一切衆生無我を觀じて大悲を捨てず。善く入つて諸惡趣に生れて業に非らざるが故に生ず。善く入りて欲を離れ、離欲の法を證せず。善く入りて欲樂する所を捨て、法樂を捨てず。善く入りて一切戲論諸覺を捨て、方便諸觀を捨てず。善く入りて有爲法は過思多きを思量して有爲を捨てず。善く入りて無爲法は清淨にして遠離れて、無爲に住せず。菩薩善く一切善入法門を修し、即ち善く三世は空にして所なきを解す。若し是の觀を作せば、三世空智慧力を觀するが故に。若し三世諸佛の種く所の無量の功德に於て、悉く以て無上菩提に廻向す。是れ菩薩の善觀三世方便と名く。

復た次に過去の盡法、未來に至らざるを見ると雖ども、而も常に善精進を修して懈らず。未來法を觀じて生出する無しと雖も、精進を捨てずして菩提に向ふを願ふ。現在法を觀じて、念念に滅す

るが、今は因道を決定する邊に就いて但だ八忍を取つて名としたのである。四に見地、第十六心の道類智にして藏教の預流果の位である。此の位に於て三界の見惑を斷じ、上下八諦の理を見ることが故に見地下と云ふ。五に薄地、欲界の修惑九品の中前六品を斷じた位で、藏教の一來果である。欲界九品の惑中僅かに後の三品を残すので薄地と云ふ。六に離欲地、欲界九品の修惑を斷盡した位で、即ち藏教の不還果である。七に已辨地、悉く三界見思の惑を斷盡した位であつて、藏教の阿羅漢果である。是れ斷惑の一道に於ては所作已辨の位なので、已辨地と云ふ。八に支佛地、此は緣覺の位に上更に三界の見思二惑を斷じた上更に其の二惑の習氣を侵害して空觀に入るのである。侵とは斷でなく、斷とは炭を焼いて灰となした上尙其の灰を吹いて之を散じ盡すが如くである。是が第一佛地である。今緣覺の習氣に於ては猶ほ炭を燒いて灰となすに止る如くであるので侵といふのである。緣覺は初地から此に至つて入證するのである。緣覺の梵語辟支佛地と云ふのである。九に菩薩地、是れ菩薩の三無數劫六度萬行の修行

佛世界を觀じて、菩提道場を莊嚴す。是を方便と名く。其の心永寂にして我なく、衆生なし。諸法の本性を思惟して亂れず、諸佛界を見ること虚空に同じ。莊嚴する所を觀るに寂滅に同じ。是を名けて慧となす。是れを菩薩修行の禪定通・知・方便慧と名くる故に差別して、四事俱に行ふて、阿耨多羅三藐三菩提に近くを得。菩薩摩訶薩、禪定を修行して、餘の惡心なし。不動法を以ての故に。是は則ち禪那波羅蜜を具足す。

二五
般若波羅蜜品第九

云何ぞ菩薩は智慧を修習するや。智慧若し自利・他利及び二俱利の爲ならば、是の如き智慧は則ち能く菩提の道を莊嚴す。菩薩、衆生を調伏し苦惱を離れしむる爲の故に智慧を修す。智慧を修するとは、悉く一切世間の事を學び、貪瞋癡を捨て、慈心を建立し、一切衆生を憐愍し饒益し、常に拔濟を念ひ、將導を作さんと欲す。能く正道邪道及び善惡報を分別す。是れを菩薩初智慧心と名く。智慧を修する故に遠く無明を離れ、煩惱障及び智慧障を除く。是を自利と名づく。衆生を教化して調伏を得しむ。是を利他と名づく。己の修むる所の無上菩提を以て、諸の衆生を化し、己の利に同じからしむ。是を俱利と名づく。智慧を修するに因つて、初地乃至薩婆若智を獲得す。是を莊嚴菩提の道と名づく。

菩薩、智慧を修行するに二十心ありて、能く善く建立す。何をか二十と謂ふ。當に善く善友に親近せんと欲する心を發し、憍慢を捨離して不放逸なる心、教誨に隨順して樂んで法を聽く心、法を聞いて善思惟を厭ふなき心、四梵行を修して正智を修する心、不淨行を觀じて厭離を生ずる心、四眞諦十六聖を觀する心、十二因縁を觀じて明慧を修する心、諸波羅蜜を聞いて修集せんと欲するを念ふ心、無常苦・無我寂滅を觀する心、空無相無願無作を觀する心、陰界は入つて過患多きを觀

【二五】般若波羅蜜(Pratipatti)般若は智慧と譯す。諸法に通達する智及び斷惑證悟する慧とある。

【二六】自利・他利・二俱利の爲の智慧を記述す。

【二七】初地、菩薩の十地中の初地であらう。薩婆若(Sarvajñā)薩婆若、薩婆若、薩婆若那等に作る。一切智。薩婆若は薩婆若智の意であらうか。然らば佛地の意。然らば初地乃至薩婆若地は三乘共一地の意である。是は智度論七十八の所説で、聲緣善の三乘を通じて立てた十地である。天台宗は之を以て四教中通教の地位とする。一に乾慧地、此は外凡の位であつて、藏教の五停心別總念處總相念處の三賢の位に當たる。乾は乾燥の義である、此の位には未だ法性の理水を得ざる智慧であるので、乾慧地と云ふ。又有漏の智慧は法性の理水を以て潤されないので、乾慧と云ふ二に性地、此は内凡の位であつて、藏教の四善根である。此の位には見思の惑を伏して朦朧として法性の空理を觀見するを性地と云ふ。三に八人地、人は忍である。見道の苦法智忍等の八忍を八心地と云ふ。即ち見道十五心の位である。見道十五は八忍七智であ

復た次に、菩薩、定を修するに、復た十法行ありて、聲聞辟支佛と共ならず。何等を十となるや。

一とは定を修して吾我あることなし。如來の諸禪定を具足するが故に。二とは定を修して味はず、著せず、染心を捨離して、己の樂を求めざる故に。三とは定を修して諸の通業を具す。衆生の諸心行を知る爲の故に。四とは定を修して衆心を知り、一切諸衆生を度脱する爲の故に。五とは定を修して大悲を行す。諸の衆生の煩惱結を斷するが故に。六とは定・諸禪三昧を定して、善く入出を知りて三界に過ぐる故に。七とは定を修して常に自在を得る。一切諸善法を具足するが故に。八とは定を修して其の心寂滅なり。二乘諸禪三昧に勝ぐるが故に。九とは定を修して常に智慧に入り、諸世間を過ぎて彼岸に到るが故に。十には定を修して能く正法を興す。三寶を紹隆して斷絶せざらしむが故に。是の如き定は聲聞の辟支佛と共ならず。

復た次に、一切衆生煩惱心を知る爲の故に。是の故に諸禪定を修集して住心を助成して、此の禪定をして平等心に住せしむ。是れを名けて定となす。是の如き等の定は則ち空・無相・無願・無作に等し。空・無相・無願・無作に等しとは則ち衆生に等しきなり。衆生に等しとは則ち諸法に等しきなり。是の如き等に入る、是を名けて定となす。

復た次に、菩薩世行に隨ふと雖も、世に雜らず、世の八法二を捨て、一切結を滅す。憍闍を遠離して獨處を樂しむ。菩薩、是の如く禪定を修行すれば、心安らかに止住して世所作を離る。

復た次に、菩薩、定を修す、諸通智方便慧を具するが故に。云何ぞ通となすや。云何ぞ智となすや。若し色相を見、若しくは音聲を聞き、若しくは他心を知り、若しは過去を念ふ。若しくは能く過く諸佛世界に至る。是を名けて通と爲す。若し色は即ち法性と知り、音聲の心行を解了して、性相寂滅に、三世平等に、諸佛界虚空相に同じきを知りて、滅盡を證せず。是を名けて智と爲す。

云何ぞ方便、云何ぞ慧となすや。禪定に入る時大慈悲を生じ誓願を捨てず。心は金剛の如く、諸

【三】菩薩禪定を修するの十法行。

【三】二乘、前出。

【四】八法、三種ある。

一は利衰等の八風を言ふ。世間の愛する所、憎む所、能く人心を騷動するので、八風と名ける。一に利、二に衰、三に毀、四に譽、五に稱、六に譏、七に苦、八に樂である。又地水火風を名けて四大となし、その四種處として有らざることなきを以ての故である。色香味觸を名けて四微となす。其の四種體性微細なるを以てである。人の身時四大の場合に因つて有り、此の四大亦四微の所成に由る故に總稱して八法となすのである。〔楞嚴經義海十四〕

又一に教、師所説の教法である。二に理、教所詮の諦理である。三に智、行人眞智の觀解である。四に斷、眞智所斷の煩惱である。五に行、學人所修の行法である。六に位、次第趣入の位次なり。七に門、正しく諸果を感ずる因體である。八に果、所得の聖果である。一切法門は皆此の八法に歸する。

何を聞慧と云ふや。所聞法の如く心常に愛樂し、復た是の念を作す。無礙解脱等諸佛の法は要は多聞に因つて成就を得と。是の念を作し已つて、一切求法の時に於て轉た精勤を加ふ。日夜常に樂んで法を聽き、厭足あるなし。是を聞慧と名く。

何を思慧と云ふや。一切有爲法を思念觀察して實相の如くす。所謂無常苦空無我不淨、念々生滅して久しからずして敗壞す。而して諸の衆生憂悲苦惱憎愛の繋る所、但貪患癡の然す所と爲り、後世苦惱の大聚を増長し、實性あるなく、猶ほ幻化の如し。是の如く見已つて、一切有爲法に於て即ち厭離を生ず。轉た精勤を加へて佛の智慧に趣く。如來の智慧を思惟するに不可思議、不可稱量にして、大勢力あり、能く勝るゝ者なし。能く無畏安隱の大城に至りて復た轉還せず。能く無量の苦惱せる衆生を救ふ。是の如く佛の無量智を知見して、有爲法は無量の苦惱なるを見て、志無上大乗を進求せんと願ふ。是を思慧と名く。

何ぞ修慧と云ふや。初め骨觀より乃至阿耨多羅三藐三菩提、皆修慧と名く。欲不・善法を離れて、有覺有觀喜樂を離生して初禪に入る。覺を滅して内清淨心を一處に觀じ、無覺無觀定を以て二禪に入る。喜を離る故に捨を行じて、心、安慧を念ふて身、樂を受く。諸賢聖能く能捨を譯き、常に樂受を念じて三禪に入る。苦を斷じ、樂を斷ずる故に、先づ憂喜を滅する故に、苦まず樂まず捨を行じて淨を念じて四禪に入る。一切色相を過ぎて一切有對相を滅し、一切別異相を念はざる故に、無邊虛空を知る。即ち虛空無色定處に入つて、一切虛空の相を過ぐ。無邊識を知るが故に、即ち無色識定處に入りて、一切識相を過ぎて、所有無きを知り、即ち無所有無色定處に入る。一切無所有處を過ぎて、非有想非無想を知り、安隱にして即ち無色非有想非無想處に入る。但し諸法行に隨順するが故に樂著せず、無上乘を求めて最正樂を成ず。是を修慧と名く。苦蘊是に從つて聞・思・修慧して、精勤攝心すれば、則ち能く通明三昧禪波羅蜜を成就す。

一切事竟と譯す。佛所得の三昧の名である。健相とは幢旗の堅固に譬へたのである。以て佛徳の堅固、諸魔の能く壞するなきに比する。一切事竟とは佛徳の究竟を云ふ。
【二〇】禪定の生ずる三法―聞慧・思慧・修慧。

【一九】以下初禪より四禪に至る順序を記す。各禪については前に詳しく出づ。
【二〇】覺、觀、舊にはかく言ひ、新には尋伺といふ。不定法中の二種の心所である、詳しくは前に出づ。
【二一】無邊虛空、虛空無色定處、無邊識、無色識定處、無所有、非所有無色定處、非有想一切無所有處、非有想、非有想、無色有想非無想。禪定の各階段であるが、その詳しいを知らず、非有想非無想處、前出。

べし。衆生を調伏せん爲、心善く大悲中に安止す。是を勇健精進と名く。菩薩、善根を修習して精進を起す。一切善根を發起する所、悉く阿耨多羅三藐三菩提に迴向するが如く、一切智を成就せんと欲する爲の故に、是れを修習善根精進と名く。菩薩、衆生を教化して精進を起す。衆生の性は稱計すべからず。無量無邊にして虚空界に同じ。菩薩誓を立つ。我當さに之を度して遺餘あること無かるべし。化度せんと欲する爲、勤行精進す。是を教化精進と名く。要を取つて之を言へば、菩薩道の功德を修助して無上智慧を助く、佛法を修集して精進を起す。諸佛の功德は無量無邊なり。菩薩摩訶薩は大莊嚴を起し、所行の精進も亦復た是の如く無量無邊なり。菩薩摩訶薩は精進を修行して離欲の心無し。衆苦を抜くが故に。是は則ち毘梨耶波羅蜜を具足す。

二 禪那波羅蜜品第八

云何ぞ菩薩、禪定を修習するや。禪定若し自利・他利及び二俱利の爲にするならば、是の如き禪定は、則ち能く菩提の道を莊嚴す。菩薩、衆生を調伏し、苦惱を離れしめんと欲する故に、禪定を修す。禪定を修するとは、善く其の心を攝して、一切の亂想妄干せしめず。行住坐臥、係念して前に在り。逆順に嚮饑、頂脊臂肘胸脇、（三） 髀腓脛踝を觀察して、安般數息す。是を菩薩所修の定心と名く。禪定を修するが故に。衆惡を受けず、心常に悅樂す。是を自利と名く。衆生を教化して正念を修せしむ。是を利他と名く。已の所修を以て清淨（四） 三昧、惡を離れて覺觀し、諸の衆生を化して已の利と同じからしむ。是を俱利と名く。禪定を修するに因つて、八解乃至首楞嚴金剛三昧を獲得す。是を莊嚴菩提の道と名く。

禪定は三法に由つて生ず。云何ぞ三と爲す。一には聞慧よりし、二には思慧よりし、三には修慧よりす。是の三法より漸々に一切の三昧を生ず。

【一】 禪那波羅蜜 (Dhyāna-paramitā) 禪は禪那 (Dhyāna) の略。惟修と譯し、新に解處。又は三昧と名け、定と譯す。眞理を思惟して散亂の心を安止する要法である。四禪八定乃至百八三昧等の別がある。

【二】 自利、利他、二俱利の爲の禪定を述ぶ。

【三】 次第を初めより終りにし、順修の如くするを順觀といふ。終りより初めへ逆に觀するのを逆觀といふ。

【四】 膂、ものの上、また、こしばね、膊上、股間、肘骨。

【五】 三昧 (Samādhi) の音譯。禪定のこと。又三摩提、定、正受調直定等。心を一處に定めて動かないの定と云ひ、正しく正觀の法を受くるので受と云ひ、心に暴を調へ、心の曲れるを直し、心の散れるを定むるは調直定と云ひ、心の行動を正して法に合せしむる依處であるので正心行處と云ひ、緣應を息止し、心念を凝結するので息靜凝心と云ふ。

【六】 八解。又八解脫。八背捨といふ。三界の煩惱に違背し、之を捨離して其の繫縛を解脫する八種の禪定である。

【七】 首楞嚴金剛三昧。首楞嚴 Sūrahṅgama 新譯では首楞伽摩と云ふ。健相、健行、

るなし。是れを能く正念を起して精進すると名く。

菩薩、精進するに復た四事あり。所謂 四正勤道を修行するなり。未生の惡は遮して生ぜざらむ。已生の惡法は速かに除斷せしむ。未生の善法は方便して生ぜしむ。已生の善法は修滿増廣す。

菩薩は是の如く四正勤道を修して、休息なし。是を精進と名く。是の勤精進は能く一切諸煩惱界を壞して、無上菩提の正因を増長す。菩薩若し能く一切身心の大苦を受けて、諸の衆生を安立せんと欲する爲の故に、疲倦せず。是を精進と名く。菩薩は惡時詔曲邪精進を遠離し已つて、正精進を修し。所謂施、戒、忍、定、慧、慈悲、喜捨を修信して、作さんと欲し已に作し、當に作すべく、至心に常に精進を行じて悔ゆるなし。諸善法及び衆苦を拔濟するに於て、頭の然せるを救ふが如く、心退沒せず。是を精進と名く。菩薩復た身命を惜まずと雖も、然かも衆苦を拔濟せんが爲め正法を救護す。當應に愛惜すべし。威儀を捨てず、常に善法を修す。善法を修する時、心懈怠なく、身命を失ふ時法の如く捨てず。是を菩薩菩提道を修して精進勤行すると名く。懈怠の人は一時に一切布施をする能はず、戒なし衆苦を忍ぶ能はず。精進を勤行し、心を攝し定を念じて、善惡を分別す。是の故に六波羅蜜は、精進に因て増長を得ると言ふ。若し菩薩摩訶薩、精進増上すれば、則ち能く疾く阿耨多羅三藐三菩提を得。

菩薩、大莊嚴を發して精進を起すに復た四事あり。一には大莊嚴を發す。二には勇健を積集す。三には諸善根を修す。四には衆生を教化す。

云何ぞ菩薩、大莊嚴を發すや。諸の生死に於て心能く堪忍して劫數を計らず。無量無邊なる百千萬億那由他の恒河沙の阿僧祇劫に於て、當に佛道を成じ、心、疲倦せざるべし。是を不懈莊嚴精進と名く。菩薩、勇健を積集して精進を起すとは、若し三千大千世界に滿中する盛火も、佛を見ん爲の故に、法を聞く爲の故に、衆生を善法に安止せしめん爲の故に、要は當に是の火中に從つて過ぐ

【七】菩薩精進の四事。

【八】四正勤道。又四意斷、四正斷、正勝と云ふ。三十七道品中、四念處に次いで修する所の行品である。法界次第中之下に「一に已生の惡に對して除斷の爲に勤めて精進す。二に未生の惡に對して更に生ぜしめんが爲に勤めて精進す。三に未生の善に對して生ぜんが爲に勤めて精進す。四に已生の善に對して増長せしめて爲に勤めて精進す」と。一心に精進して此の四法を行ずる故に四正勤と名け、正しく身語意を策勵する中に於て此が最意であるが故に四正勝と名け、意中決定して之を斷行すれば四意斷と名ける。

【九】菩薩大莊嚴を發して精進を起す四事。

【一〇】大莊嚴精進名。不懈莊嚴精進勇健精進、修習善根精進、教化精進。

卷の 下

毘梨耶波羅蜜品第七

云何ぞ菩薩は精進を修行するや。精進若し自利・他利及び俱利の爲めならば、是の如き精進は則ち能く菩提の道を莊嚴す。菩薩は衆生を調伏せんと欲し、苦惱を離れんが爲の故に精進を修す。精進を修むる者は、一切時に於て常に勤めて清淨梵行を修集す。怠慢を捨離して心放逸ならず。諸艱難不徳益の事に於て、心常に精勤して終に退没せず。是を菩薩の初精進心と名く。精進を修するが故に、能く世間出世間の上妙善法を得る。是を自利と名く。衆生を教化して善を勤修せしむ。是を他利と名く。己れの所修の菩提の正因を以て諸の衆生を化して己の利に同じからしむ。是を俱利と名く。精進を修するに因つて、轉勝清淨妙果を獲得し、諸地を超越し、乃至速かに正覺を成ず。是れを莊嚴菩提の道と名く。

精進に二種あり。一には無上道を求むる爲の故に。二には廣く衆苦を拔濟せんと欲して精進を起す。

菩薩の十念を成就して、乃ち能く發心して精進を勤行す。何をか十念と云ふや。一には佛の無量功徳を念す。二には法の不思議解脱を念す。三には僧清淨にして染なきを念す。四には大慈を行じて衆生を安立するを念す。五には大悲を行じて衆苦を拔濟するを念す。六には正定聚を勤めて善を樂修するを念す。七には邪定聚を抜いて正に反せしむるを念す。八には諸餓鬼の飢渴・執慳を念す。

九には諸の畜生、長いて衆苦を受くるを念す。十には諸の地獄は燒煮を受くるを念す。菩薩是の如く十念を思惟し、三寶の功徳を我當に修集すべし。慈悲正定を我當に勤勵すべし。邪定の衆生、三惡道の苦を我當に拔濟すべし。是の如く思惟して專念にして亂れず。日夜勤修して休廢すること有

【一】 毘梨耶波羅蜜 (Vīrya-paramita) 毘梨耶 (Vīrya) は精進と譯す。身心を精勵して前後の五波羅蜜を進修するのである。

【二】 自利・他利・俱利の爲の精進を説明する。

【三】 世間、出世間。一切生死の法を世間とし、涅槃の法を出世間とす。即ち苦・集の二諦は世間である。滅道の二諦は出世間である。

【四】 諸地。菩薩の十地をいふ。

【五】 菩薩の十念を以下に説明す。十念、余佛等の十種の念をいふ。念 (Smṛti) とは深く事を思ふのである。

【六】 三惡道。惡業に依つて往來すべき處が三所ある。三惡道と名ける。一に地獄道、上品の十惡業を成ぜしもの之に趣く。二に餓鬼道、中品の十惡業を成ぜしもの之に趣く。三に畜生道、下品の十惡業を成ぜしもの之に趣く。

處。

【八〇】 四大、前出。五衆、五蘊のこと。身體は四大、五蘊の結合である。

【八一】 罵者の二種一實、虛。

【八二】 生忍の因縁の十事を列擧す。生忍、二忍の一、衆生忍である。一切衆に於て不瞋

不愠、たとひ彼より種種の害を加へるとも、我能く心に忍耐して瞋らず報いないのをいふ。忍とは忍耐である。違逆の境、忍耐して瞋心を起さないのである。又安忍である。道理に安住して心を動かさないものである。

【八三】 清淨畢竟忍、二忍、三忍、五忍、六忍、十忍、十四忍の中に術語としてかゝる名なし。以下に本論は之を説明す。

【八四】 見覺願作。特殊の術語なりや否や、不明。【八五】 結。結集の義。繫縛の

義。煩惱の異名。煩惱因となつて生死を結集するので結と言ひ、又衆生を繫縛して解脱せしめないもので結と云ふ。即ち生死の因であるもの。三結（見結・疑結・戒取結）、五結（貪結・嗔結・慢結・嫉結・慳結）等がある。

す。四には惡來るも報いず。五には無常想を觀ず。六には慈悲を修す。七には心放逸せず。八には飢渴苦樂等の事を捨つ。九にはは瞋恚を斷除す。十には智慧を修習す。若し人能く是の如きの十事を成せば、當さに知るべし、是の人能く忍を修す。

菩薩摩訶薩の清淨畢竟忍を修する時、若し空相無相無願無作に入りて、見覺願作と和合せず、空無相無願無作に著せず、是の諸見覺願作は皆空なり。是の如き忍は是れ無二相なり。是れを清淨畢竟忍と名くるなり。若しくは盡結に入り、若しくは寂靜に入らば、結、生死と合せず、盡結寂滅に著らず、諸結の生死皆な空なり。是の如き忍は是れ無二の相なり。是れを清淨畢竟忍と名く。若し性は自生せず、他より生せず、和合より生せず、亦出するあるなく、破壊すべからず、壞つべからずんば、是れ盡すべからず。是の如き忍は是れ無二の相にして、是れを清淨畢竟忍と名くるなり。無作非作にして、著著する所なく、分別なく、莊嚴なく、修治なく、發進なく、終に生を造らず。是の如き忍は是れ無生の忍なり。是の如く菩薩是の忍を修行して、受記の忍を得。菩薩摩訶薩は忍辱を修行して性相盡く空なり。衆生なきが故なり。是を則ち盧提波羅蜜を具足すと名く。

洲、下は無間地獄に至るまでは欲界と云ふ。二に色界、色は實證の義にて有形の物質を云ふ。此の界は欲界の上に在つて飲食の二欲を離れた有情の住所にて、身體と云ひ、宮殿と云ひ、物質的の物は總て殊妙精好なので色界と名ける。此の色界を禪定の淺深の微妙に由つて四級を分ちて四禪天と稱し、新に靜慮と云ふ。此の中或ひは十六天を立て、或

ひは十七天を立て或ひは十八天を立てる。三に無色界、此の界には物即ち物質的の者は、一もなく、身體もなければ、宮殿國土もなく、唯心識を以て深妙なる禪定に住するものである。之を無色界と云ふ。これ既に無物質の世界なれば方所を何れとも定むべきでない。唯果報が勝れた意味で色界の上にあると云ふのである。之に四天があり、四無

色又は四空處と云ふ。
【七四】 三不善根、貪瞋癡の三毒をいふ。
【七五】 慢の五種。慢、已を恃つて他を憐れむをいふ、十六惑の一。七慢九慢あり。七慢は慢・過慢・慢過慢・我慢・增上慢・卑慢・先慢、この五種のうち我慢は我あり、我が所有ありと執して心をして高擧ならしむるもの。增上慢、未だ理道を證得せざるに己れ證得すと謂ふもの。

授戒の如き重法に就ては僧衆に向つて先づその事を告白するを白と云ひ、次に三度其の可否を問ふてその事を決するを三羯磨 *Tri-tya Karma-rcara* と云ふ。即ち一度の白と三度の羯磨とを合せて白四羯磨と云ふ。是れ最重の作法である。

【七六】 菩薩の各種の戒の名。善持戒、慈心戒、憍心戒、善心戒、捨心戒、裏施戒、忍辱戒、精進戒、禪定戒、智慧戒、親近、善知識戒、遠離惡知識戒、清淨戒。

【七七】 以下清淨戒の説明。三界、凡夫の生死經來する世界を三つに分つ。一に欲界、淫欲と食欲との二欲を有する有情の住所である。上は六欲天より中は人界の四大

【七八】 毘提波羅蜜 *Kantim-pamriti*、隨從 *(Santit)*、忍辱の意である。一切衆生の罵詈雑言打等及び非情の寒熱飢渴等を忍受する大行である。
【七九】 利他、二俱利の爲の忍辱。善附初忍辱心を説明す。
【七八】 忍辱の三種。身忍、口忍、意忍を擧ぐ。
【七九】 世間の打者の二種。實

色受想行識假名の相に著せず、是れ清淨戒なり。因に繋らず、諸見を起さず、疑悔に住せず、是れ清淨戒なり。貪瞋癡の三不善根に住せず、是れ清淨戒なり。我慢・憍慢・増上慢・慢慢・大慢に住せず、柔和善順なる、是れ清淨戒なり。利衰・毀譽・稱讃・苦樂、以て傾動せず、是れ清淨戒なり。世諦・虛妄・假名に染せず、眞諦に順する、是れ清淨戒なり。惱まず、熱せず、寂滅離相なる是れ清淨戒なり。要を取りて之を言へば、乃至身命を惜まず、無常想を觀じて厭離を生ず、勤めて善根を行じて勇猛精進する、是れ清淨戒なり。菩薩摩訶薩、持戒を修行して淨心を見ず。離想を以ての故に。是れ則ち尸羅波羅蜜を具足するなり。

七六
屬提波羅蜜品第六

云何ぞ菩薩忍辱を修行するや。忍辱若し自利他利及び二俱利の爲めならば、是の如き忍辱は則ち能く菩提の道を莊嚴す。菩薩衆生を調伏し、苦惱を離れしめんと欲する故に、忍辱を修す。忍辱を修すとは、心常に一切衆生に謙下す。剛強・憍慢は捨て、行はず。兪惡を見れば、憐愍の心を起し、言常に柔濡にして修善を勸化し、能く分別して瞋恚と和忍との果報の差別を説く。是を菩薩初忍辱心と名く。忍辱を修するが故に、遠く衆惡を離れて身心安樂なり。是を自利と名く。衆生を化導して皆和順ならしむ。是を利他と名く。已の修する所の無上大忍は諸衆生を化し、已利と同じからしむ。是を俱利と名く。忍辱を修するに因つて端政を護得して、人の宗敬する所となり、乃至佛の上妙相好を得る。是を莊嚴菩提之道と名く。

忍辱に三つあり。身口意を謂ふ。何を身忍と云ふや。若し他、惡を加へ、侵毀搥打し、乃至傷害するも、悉く能く忍受す。諸の衆生に危逼り、恐懼するを見ては、身を以て之に代りて疲意なし。是を身忍と名く。云何ぞ口忍。若し罵る者を見るも、默受して報せず。若し理あらずして來りて呵

廢退すべきでない。この故に念覺を除き、他の六覺は行人の要に隨つて之を用ふるのである。此の七事を以て無學果を證するを得るのである。

【六〇】 無漏果、無漏 anāraṃya、

漏は漏泄の義。貪瞋等の煩惱日夜に眼耳等の六根門より漏泄流注して止まないの爲と名け、又漏は漏落の義。煩惱は能く人を三惡道に漏落するので、漏と名く。依つて煩惱を有する法を有漏と言ふ。煩惱を離れた法を無漏と言ふ。無漏果とは無漏道所得の果徳を言ふ。四諦中滅諦の涅槃が是である。

【六一】 尸羅波羅蜜 (Sīlāpari-
āraṃ) 尸羅 (Sīla) とは戒律の意である。即ち持戒波羅蜜のこと。在家出家・小乘大乘の一切の戒行である。

【六二】 持戒の自利、利他、二俱利。

【六三】 戒の三種。身戒、口戒、心戒。

【六四】 眈眈。眈は眈の俗字。眈は目を偏して、視る。よこに見る、よこめを使ふ。ながしからず。遊が眺む。みまはす、わきみす。よこめを使ふ、かへりみる。

【六五】 暫、せむ、そしる。

報じ心に慳慳なく、樂んで福德を作して常に以つて人を化す。常に慈心を修して一切を憐愍す。是を心戒と名く。是れ六六十善業戒なり。五事の利益あり。一には能く惡行を制す。二には能く善心を作す。三には能く煩惱を遮す。四には淨心を成就す。五には能く戒を増長す。若し人善く不放逸行を修すれば、正念を具足して善惡を分別す。當に知るべし。是の人決定して能く十善業戒を修す。八萬四千の無量戒品、悉く皆十善戒中に攝在せり。是の十善戒は能く一切善戒の根本となる。身口意の惡を斷じ、能く一切の不善の法を制す。故に名けて戒と爲す。

六六戒に五種あり。一には波羅提木叉戒、二には定共戒、三には無漏戒四には攝根戒、五には無作戒、白四羯磨モロクシは師に従つて受く。波羅提木叉戒と名く。根本四禪四未到禪、是を定共戒と名く。根本四禪初禪未到を無漏戒と名く。諸根を收攝して正念心を修め、覺知を見聞し色聲香味觸、放逸を生ぜざるを、攝根戒と名く。身を捨て、後世更らに惡をなさざるを、無作戒と名く。

善薩セニの戒を修するや、聲聞・辟支佛と共にあらず。不共を以ての故に善持戒と名く。善戒を持つが故に則ち能く一切衆生を利益す。慈心戒を持つとは衆生を救護して安樂ならしむる故に。悲心戒を持つとは、忍んで諸苦を受け、危難を抜くが故に。喜心戒を持つとは歡樂し、善を修め懈怠せざるが故に。捨心戒を持つとは怨親平等にして、愛恚を離るゝが故に。惠施戒を持つとは、諸の衆生を教化調伏する故に。忍戒辱を持つとは、心常に柔軟にして恚礙なきが故に。精進戒を持つとは、善業日に増して退還せざる故に。禪定戒を持つとは、欲・不善を離れ、長く禪支するが故に。智惡戒を持つとは、多く善根を聞いて、厭足無きが故に。親近善知識戒を持つとは、菩提無上道を助成するが故に。遠離惡知識戒を持つとは、三惡八難處を捨離するが故に。菩薩の人、淨戒を持つとは、欲界に依らず、色界に近よらず、無色戒に住せず、是れ清淨戒なり。欲塵を捨離し、瞋恚の礙を除き、無明障を滅する。是れ清淨戒なり。斷常二邊を離れ、因縁に逆はず、是れ清淨戒なり。

等ならしむる法である故に等覺と名け、覺法七種に分れるので、支或ひは分と云ふ。修道に於て思惑を斷ずる事は此の七覺の方に依るのである。それ故修行の次第に約すれば八正七覺と列ねべきであるが、數の次第に約して七覺八正と列ねるのである。一に擇法覺支、智慧を以て法の眞偽を簡擇するのである。二に精進覺支、勇猛の心を以て邪行を離れ、眞法を行ずるのである。三に喜覺支、心に善法を得て歡喜を生ずるのである。四に輕安覺支、止觀及び法界次第に除覺分と名けてゐる。身心重を斷除して身心をして輕利安適ならしめるのである。五に念覺支、常に定慧を明記して忘れず、之をして均等ならしめるのである。六に定覺支、心を一境に住して散亂せしめないのである。七に行捨覺支、諸の妄念を捨て、一切の法を捨て、平心坦懷更に追憶しないのである。是れ行蘊所攝の捨の心所であるので行捨と云ふ。此の七法に於て若し行者の心浮動する時は於捨定の三覺支を用ひて之を攝むべく、若し心沈没する時は擇法精進喜の三覺支を用ひて之を起すであらう。念覺支は常に定慧を念ずるのである。

菩薩摩訶薩は布施を修行するに、財物施す者受る者を見ず。無相を以ての故に。是れ則ち檀波羅蜜を具足す。

尸羅波羅蜜品第五

云何ぞ菩薩は持戒を修行するや。持戒、若し自利他利及び二俱利の爲にせば、是の如き持戒は則ち能く菩提の道を莊嚴す。菩薩、衆生を調伏せんと欲し、苦惱を離れしめん爲、是の故に持戒す。持戒を修すれば、悉く一切身口業を淨めて、不善行心に於て能く捨遣す。善く能く惡行毀禁を呵嘖し、小罪に於ても中心常に恐怖す。是を菩薩初持戒心と名く。持戒を修する故に、一切諸惡過患を遠離して、常に善處に生ず。是を自利と名づく。衆生を教化して惡を犯さざらしむ。是を利他と名づく。己の所修を以て菩提戒に向け、諸衆生を化して己が利と同じうせしむ。是を俱利と名づく。持戒を修するに因つて離欲を獲得し、乃至漏盡して最正覺を成ず。是を莊嚴菩提の道と名く。戒に三種あり。一には身、二には口、三には心をり。身戒を持するとは、永く一切の殺盤淫行を離れ、物命を奪はず、他財を侵さず、外色を犯さず、又亦殺盜の因縁及び其の方便を爲さず。杖木瓦石を以て衆生を侵害せず、若し物他に屬し、他所に受用すれば、一草一葉も與へられざるを取らず。亦未だ嘗つて 眇睺細色せず。四威儀に於て恭謹詳密にす。是を身戒と名く。口戒を持するとは、一切の妄語・兩舌・惡口・綺語を斷除し、常に欺誑して和合を離間せず、誹謗・毀譽・文飾言辭し、及び方便を造つて憫人に觸せず。言へば則ち至誠柔軟忠信、言常に饒益・勸化し修善す。是を口戒と名く。心戒を持つとは、貪欲・瞋恚・邪見を除滅し、常に柔軟心を修して過罪を作らず。是の罪業は惡果報を得るを信じ、思惟力の故に諸惡を造らず。輕罪中に於て極重想を生じ、設へば誤つて作らば、恐怖憂悔し、衆生所に於て瞋惱を起さず。衆生を見已つて愛念の心を生じ、恩を知り恩を

無畏施、三財物施。その一々の説明は本文に詳し。

【五二】四倒。四種類倒の妄見である。之に二種あり。一は生死の無常無樂無我無淨に於て常樂我淨を執するを凡夫四倒となし、一は涅槃の常樂我淨に於て無常無樂無我無淨を執するを二乘の四倒とし、初めを有爲の四倒とし、後を無爲の四倒と云ふ。有爲の四倒を斷ずるを二乘とし、有爲の四倒を斷ずるを菩薩とする。

【五三】擲、一本團とす。挺、冕の前後に垂れて覆ふもの。おほひ。一本線、この方よし。

【五四】財施の五種。一、至心施、二、信心施、三、隨時施、四、自手施、五、如法施。

【五五】施すべからざる所の五事。

【五六】置は又一本置。羅羅機網、魚磯の道具であらう。

【五七】施を樂しむ人の五種の名聞善利。

【五八】以下一切施の意義。

【五九】七覺分。七菩提分、七覺支といひ、俱舍論に七等覺支と云ふ。七科道品中の第六である。覺とは覺了觀察の義、聖道の生ぜないのは定慧の調はなぬに由る。故に心の定慧に據るを明かに見分けて偏に一方に片寄らしめず、定慧均

に。音樂女色は以て人に施さず。淨心を壞つが故に。要を取つて之を言はず、法に如かざるの物は、衆生を惱亂すれば、以て人に施さず。

自餘の一切は能く衆生をして安樂を得しむる者は、如法施と名く。

施を樂む人は復た五種の名聞・善利を獲る。一には一切賢聖に親近するを得る。二には一切衆生の樂み見る所となる、三には大衆に入る時、人の宗敬する處となる。四には好名善譽は十方に流聞す。五には能く菩提の爲に上妙因と作る。

菩薩の人を一切施と名く。一切施とは多財を謂ふにあらず。施心を謂ふなり。法の如く財を求め、持するに布施を以てす。一切施と名く。清淨心を以て詔曲なくして施すを一切施と名く。貧窮者を見て、憐愍心にて施すを一切施と名く。厄苦者を見て、慈悲心にて施すを一切施と名く。居貧にして財少なく能く施を用ふるを、一切施と名く。寶物を愛重して開意能く施すを、一切施と名く。持戒毀戒田非田を觀ぜずして施すを、一切施と名く。人天の妙善樂施を、求めざるを一切施と名く。無上大菩提を志求して施すを、一切施と名く。志、無上大菩提を求めて施すを一切施と名く。施さんと欲して施す時、施し已つて悔いざるを、一切施と名く。若し華を以て施せば陀羅尼・七覺華を具する故に、若し香を以て施せば戒定慧を具して熏を身に塗するが故に、若し果を以つて施せば具足して、無漏果を成就するが故に、若し食施を以てすれば、命辯色力樂を具足するが故に、若し衣服を以て施せば、清淨色を具して無慚愧を除くが故に、若し燈明を以て施せば、佛眼を具足して一切諸法性を照了するが故に、象馬車乘を以て施せば、無上乘を得て、神通を具足するが故に。瓔珞を以て施せば、八十隨形好を具足するが故に、珍寶を以て施せば、大人三十二相を具足するが故に、筋力僕使を以て施せば、佛の十力・四無畏を具するが故に、要を取つて之を言へば、乃至國城・妻子・頭目・手足、身を舉げて施與して心に憍惜なし。無上菩提を得て、衆生を度するが爲の故に、

【四七】有爲。爲とは造作の義にして造作を有するを有爲と云ふ。即ち因縁所生の事物は盡く有爲である。能生の因縁は是れ所生の事物を造作するもの、所生の事物は必ず此の因縁の造作を有すれば有爲法と云ひ、本來自爾にして、因縁所生でないものを無爲法と云ふ。故に有爲とは有因縁といふ如くである。

無爲。梵語 (anāraṅka) 爲は造作の義、因縁の造作なきを無爲と云ふ。即ち眞理の異名である。此の無爲法に三種六種の別があり。三無爲の中の擇滅無爲、六無爲の中の眞如無爲是れは正しく理智所證の眞理である。涅槃と言ひ法性と云ひ、實相と云ひ、法界と云ふ。皆無爲の異名である。(織田)。

【四八】彈指の頃、極めて短き時間をいふ。壯年の男子が指を彈く間をいふ。

【四九】檀波羅蜜 (dānaparimitā)。檀は檀那 (dāna)。て、布施の意である。布施波羅蜜をいふ。財施、無畏施法施の三あり。

【五〇】自利・利他・二俱利の爲の布施の利益を記す。二俱利、自他を共に利益すること。

【五一】施の三種、一以法施、二

云何ぞ菩薩は布施を修行するや。布施とは自利他利及び三〇二俱利と爲す。是の如く布施すれば、則ち菩提の道を莊嚴す。菩薩衆生を調伏せんと欲する爲に苦惱を離れしむ。是の故に施を行す。

施を修行するとは己の財物に於て常に捨心を生じ、來求者に於て尊重の心を起すこと、父母・師長・善知識の想の如くす。貧窮下賤に於て憐愍を生ずること、一子の想の如くす。隨所に須く與へて心喜んで恭敬す。是を菩薩初めて施を修するの心と名く。布施を修するが故に善名流布す。所生の處に隨つて財寶豐盈なり。是を自利と名く。能く衆生をして心に満足を得しめ、教化調伏して慳吝なからしむ。是を利他と名く。己の所修無相の大施を以て、諸の衆生を化して己の利と同じからしむ。是を俱利と名く。布施を修するに因つて轉輪王位を獲得して、一切無量の衆生を攝受し、乃至佛の無盡の法藏を得しむ。是を莊嚴菩提の道と名く。

三一施に三種あり。一には以法施、二には無畏施、三には財物施なり。以法施とは、人に受戒して出家心を修するを勸め、邪見を壞たん爲め三二斷常四倒・衆惡過患を説き、眞諦の義を分別開示して、精進の功德を讚し、放逸の過惡を説く。是を法施と名く。若し衆生ありて王者師子虎狼・水火・盜賊を怖畏するあらば、菩薩見已つて能く救護を爲すを、無畏施と名く。自ら財物に於て施して慍まず、上は珍寶・象馬・車乘・綯帛・穀麥・衣服・飲食より、下は三三鬘・搏一縷の縵に至るまで、若くは少く、稱求す者には意の所須に隨ふて與ふ。是を財施と名く。

三四財施、復た五種あり。一には至心施、二には信心施、三には隨時施、四には自手施、五には如法施なり。

施すべからざる所に復た五事あり。理に非ずして財を求めて以て人に施さず。物不淨なるが故に。酒及び毒藥は以て人に施さず。衆生を亂す故に。

三五買羅機網は以て人に施さず。衆生を惱害する故に。刀杖弓箭は以て人に施さず。衆生を害する故

ある。この十地は智度論七十八の所説で、聲聞緣覺菩薩の三乘を共通して立てた十地である。天台宗は之を以て四教中通教の地位とする。第一の乾慧地は外凡の位であつて、藏教の五停心別總念處總相念處の三賢の位に當たる。乾は乾燥の義である。此の位には未だ法性の理水を得ない智慧なので乾慧地と云ふ。又右彌の智慧は法性の理水を以て潤さないので乾慧と云ふと。

三六勝十大正願を記す。

三七陀羅尼(Tarānī)譯總持。前出。

三八五通、前出。

三九世諦、俗諦と同じ。第一義諦、眞諦と同じ。前出。

四〇善提の因としての六波羅蜜を記す。

四一三十二相、八十隨形好、轉輪王、轉法輪王(佛)、佛弟子の相好、即ち身體上の德相である。詳しくは前に出づ。

四二四無量心、前出。三十七品、三十七道品、三十七分法、三十七菩提分法などと云ふ。道は能通の義得樂に至る道路の表徴三十七種あり。四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道である。

四三決定の誓を立てる五事。

四四菩薩の誓願。

り。何を以ての故に。決定の誓を立つるに、五事ありて持するが故に。一には能く其の心を堅固にす。二には能く煩惱を制伏す。三には能く放逸を遮す。四には能く五蓋を破す。五には能く勤めて六波羅蜜を修行す。佛の讚する所の如し。

如來大智尊は

功徳證を顯説す。

忍慧福業力

誓願力最勝なり。

云何ぞ誓を立つるや。若し人ありて種々、求索すれば、我爾の時に於て隨つて施與するあり、乃至一念慳吝の心を生ぜず。若し惡心を生ずること彈指頃の如きも、施の因縁を以て淨報を求むれば、我即ち十方世界の無量無邊なる阿僧祇の現在諸佛を欺くなり。未來世に於ても亦當さに必定して阿耨多羅三藐三菩提を成ぜず。若し我持戒して乃至命を失ふも、淨心の誓を建立して改悔なし。若し我れ忍を修すれば、他の爲に侵害さられ、乃至割截せらるゝも、常に慈愛を生じ誓つて悲礙なし。若し我れ精進を修すれば、寒暑・王賊・水火・師子虎狼・無水穀處に遭逢するも、要は必ず其の心を空強して誓つて退没せず。若し我禪を修せば、外事の燒もてあぶ所となりて、心を攝するを得ず。要は念を繋けて境に在り。誓つて暫らくも非法亂想を起さず。若し我れ智慧を修集すれば、一切法を觀するに實性の如くす。隨順受持して、善不善四七・有爲無爲・生死・涅槃に於て、二見を起さず。若し我が心恚礙退没亂想を悔いれば、二見を起して、彈指頃の如きも、戒忍精進禪智を以て淨報を求むる者は、我即ち十方世界の無量無邊なる阿僧祇の現在諸佛を欺くなり。未來世に於ても亦當に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜざるべし。菩薩十大願を以て正法行を持し、六大誓を以て放逸の心を制す。必ず能く精勤して六波羅蜜を修集し、阿耨多羅三藐三菩提を成ず。

檀波羅蜜品第四

檀波羅蜜品第四

八

暇といふ。道業を修する間暇がないのである。一に地獄、二に餓鬼、三に畜生、四に饕餮（新に北拘盧洲と云ふ）、樂報殊勝にして總て苦がないからである。五に長壽天、色界無色界の長壽安穩なる處。六に瞿曇痲癩、七に世智辨聰、八に佛前佛後、二佛の中間佛法なき處。

【三七】 非非想々想處 *Kāyānī sanjñhāsamūhāyātana* 智度論では非有想非無想處と云い、俱舍論には非非想々想といふ。無色界の第四處即ち三界の最頂である。此の處に生ずるものは下の如き處想の煩惱がないので、非有想又は非想と云ひ、細想の煩惱が無いでも無いので、非無想又は非非想といふ。非有想であるので、外道は此處を以て眞の涅槃處とし、非無想であるので佛者は尙生死の境であるとする。佛陀が求道中阿羅漢Arhatの非非想々想處を未だ流轉の境であるとして捨てたのはこの故である。

【三三】 三塗。四解脫經の説。塗は途の義。一に火途、地獄趣の猛火に燒かれる處。二に血途、畜生趣の互に相食む處。三に刀途、餓鬼趣の刀劍杖を以て逼迫せらるる處。

【三七】 三乘共通十地の第一で

了して、眞實性の如く、正法智を得ん。願くは我れ正法智を得已つて、無厭心を以て衆生の爲めに説き、示教利喜して皆な開解せしめん。願くは、我能く諸の衆生を開解せしめ已つて、佛の神力を以て遍く十方無餘世界に至り、諸佛を供養して正法を聴受し、廣く衆生を攝せん。願くは我諸佛所に於て正法を受け已つて、即能く隨つて清淨法輪を轉じ、十方世界一切衆生、我が法を聴く者、我が名を聞く者、即ち一切煩惱を捨離し、菩提心を發するを得しめん。願くは我能く一切衆生をして菩提心を發さしめ已つて、常に隨つて將に護つて無利益を除き無量業を與へ、身命財を捨て、衆生を攝受して正法を荷負せんとす。願くは我能く正法を荷負し已つて、正法を行すと雖も心に所行なし。諸菩薩、正法を行するが如く、而して所行なく、亦た行ぜざるなし。衆生を化さん爲正願を捨てず。是を發心菩薩十大正願と名く。此の十大願は衆生界に遍く、一切恒沙の諸願を攝受す。若し衆生盡くれば、我が願乃ち盡く。而して衆生は實に盡くべからず。我が此の大願も亦盡くるあるなし。

復た次に布施は是れ菩提の因なり。一切衆生を攝取するが故に。持戒は是れ菩提の因なり。衆善を具足して本願を滿すが故に。忍辱は是れ菩提の因なり。三十二相・八十隨形好を成就するが故に。精進は是れ菩提の因なり。善行を諸の衆生に増長して勤めて教化するが故に。禪定は是れ菩提の因なり。菩薩善く自ら調伏して能く衆生の諸心行を知るが故に。智慧は是れ菩提の因なり。具足して能く諸法性相を知るが故に。要を取りて之を言へば、六波羅蜜は是れ菩提の因なり。四無量心・三七品諸善萬行共に相助成す。若し菩薩、六波羅蜜を修集し、其の所行に隨へば、漸々に阿耨多羅三藐三菩提に近くを得ん。諸佛子よ、菩提を求むる者は應に不放逸なるべし。放逸の行は能く善根を壞す。若し菩薩、六根を調伏して不放逸なる者は、是の人は能く六波羅蜜を修す。

菩薩發心して先づ至誠を建て、決定の誓を立つ。誓を立つるの人、終に不放逸にして懈怠慢大

【七】 無明の所縛する所の四事。

【八】 衆苦纏ふ所の四事。

【九】 不善業を集むる四事。

【十】 戒足(Śīlapāda)戒は佛道に超越する要具となるので足に譬へる。

【十一】 極重惡を造る四事。

【十二】 五無間業、無間地獄の苦果を感ずる五種の惡業、即ち五逆罪である。罪惡の鑑みて、理に違ふこと甚しいので逆と云ひ、是れが無間地獄の苦果を感ずる惡業であるので、無間業といふのである。之に三乘通相の五逆、大乘別途の五逆、同類の五逆、提婆の五逆など種々ある。

三乘通相の五逆とは三乘に通じて立てる所の五逆である。

又小乘の五逆とも言ふ。常に五逆といふのは是である。一に父を殺し、二に母を殺し、三に阿羅漢を殺し、四に佛身より血を出し、五に和合偈を破る。(罪の輕重大次第に由る)和合偈を破るとは數名の僧衆和合して法事を行ひ、佛道を修するを、手段を以て之を離間し、開亂せしめて法事を廢せしめることである。五逆の中此の罪最も重し。

【十三】 正法を修せざる四事。

【十四】 八難。見佛聞法に就て障礙ある八處である。又八無

知らず。二には諸の衆生を見るに、佛の出世に値て正法を聞説して受持する能はず。三には諸の衆生を見るに、外道に染習して身を苦めて修業して、永く出要を離る。四には諸の衆生を見るに、非想非非想定を修得して、是を涅槃と謂ひ、善報既に盡きて還つて三六三途に墮す。菩薩諸の衆生を見るに、無明造業し、長夜苦を受け、正法を捨離し、出路に迷ふ。是等の爲の故に大慈悲を發す。志、阿耨多羅三藐三菩提を求めて、頭の燃ゆるを救ふが如し。一切衆生の苦惱あるもの、我當に、拔濟して餘り有るなからしむべし。諸佛子よ、我今略々初行菩薩の緣事發心を説けり。若し廣説すれば無量無邊なり。

願誓品第三

菩薩云何ぞ菩提を發趣するや。何の業行を以て菩提を成就するや。發心の菩薩は、乾慧地に住し、先當に堅固に正願を發すべし。一切無量の衆生を攝受し、我無上菩提を求め、救護度脱して餘ある無からしめ、皆究竟して無餘涅槃せしめんと。是の故に初始發心は大悲を首となす。悲心を以ての故に能く三五勝十大正願を發す。何を謂つて十と爲すや。願くは我が先世及び今身に種く所の善根を以て、此の善根を以て、一切無邊の衆生に施與し、悉く共に無上菩提に迴向して、我此願をして念々に増長せしむ。世々生ずる所、常に繋けて心に在り、終に忘失せず。陀羅尼三九の守護する所とならむ。願くは、我れ大菩提に迴向し已つて、此の善根を以て、一切生處に於て常に一切諸佛に供養すること得て、永く必ず無佛國土に生ぜざらん。願くは我れ諸佛國に生るゝを得已つて、常に左右に親近隨侍することを得て、影の形に隨ふ如く、刹那の頃も遠く諸佛を離ることなけん。願くは、我れ佛に親近するを得已つて、我が所應に隨つて我が爲説法し、即ち菩薩の五通を成就するを得ん。願くは菩薩の五通を成就し已つて、即ち能く四〇世諦に通達して假名流布し、第一義諦を解

法と名け、識の心は心の自性なので、之を心王と名ける。即ち五蘊は身心の二法にて色界欲界の如き身のある有情は五蘊から成り、無色界の如き身なき有情は四蘊(色蘊を除く)から成るのである。【二】九孔、前出。身體中の九の孔をいふ。【三】最勝果を求めて菩提心を發する五事。【四】染、染まるの外に精神的の意をこゝにても持つ、染垢染汚と熟語にして不潔不淨の義で、執著の妄念及び所執の事を言ふ。【五】十力、四無畏、前出。大悲、他人の心を救ふ心を悲と云ふ。佛菩薩の悲心は廣大なので大悲といふ。三念處、舊譯三念處。新譯三念住。佛の大悲衆生を攝化するのに常に三種の念に住す。第一念住、衆生佛を信するも佛喜心を生ぜず、常に正念正智に安住すること。第二念住、衆生佛を信ぜざるも、佛憂惱を生ぜずして常に正念正智に安住すること。第三念住、同時に一類は信じ、一類は信ぜざることあるも佛之を知りて歡喜と憂感を生ぜず、常に正念正智に安住すること。(俱舍二七)【六】衆生を慈愍して菩提心を發する五事。

の爲めに、修集を爲すが故に。

三三 衆生を慈愍して菩提心を發すに復た五事あり。一には諸の衆生を見るに、無明の縛する所となる。二には諸の衆生を見るに、衆苦の纏ふ所となる。三には諸の衆生を見るに、不善業を集む。四には諸の衆生を見るに、極重惡を造る。五には諸衆生を見るに正法を修せず。

三二 無明の縛する所に復た四事あり。一には諸の衆生を見るに、癡愛の所惑となりて、大劇苦を受く。二には諸の衆生を見るに、因果を信ぜず、惡業を造作す。三には諸の衆生を見るに、正信を捨離し、邪道を信受す。四には諸衆生を見るに、煩惱河に没し、四流に漂ふ所となる。

三一 衆苦纏ふ所に復た四事あり。一には諸の衆生を見るに、生老病死を畏れて解脱を求めずして、復た業を造る。二には諸の衆生を見るに憂悲惱苦して、而も常に造作して休息あることなし。三には諸の衆生を見るに、愛と別離するを苦み、方便染著を覺悟せず。四には諸の衆生を見るに、怨憎に會ふを苦んで、常に嫌嫉を起して、更に復た怨を造る。

三〇 不善業を集むるに復た四事あり。一には諸の衆生を見るに、愛欲の爲めの故に諸惡を造作す。二には諸の衆生を見るに苦を欲するの苦を知りて欲を捨てず。三には諸の衆生を見るに、樂を求めんと欲すと雖も、戒足を具せず。四には諸の衆生を見るに、苦を樂まずと雖も、苦を造りて息まず。

二九 極重惡を造るに復た四事あり。一には諸の衆生を見るに、重戒を毀犯して、復た憂懼すと雖も而も猶ほ放逸す。二には諸の衆生を見るに、極惡 三三 五無間業を興造して、兇頑自蔽ふて漸愧を生ぜず。三には諸の衆生を見るに、大乘方等正法を謗毀して、専ら愚目ら執して、方に憍慢を起す。四には諸の衆生を見るに、聰哲を懷くと雖も、而も具さに善根を斷じ、反つて自ら貢高にして永く改悔なし。

二八 正法を修せざるに復た四事あり。一には諸の衆生を見るに、八難を生じて正法を聞かず、修善を

世界の上に三千とあるのは、此の大千世界は小千と中千と大千との三種の千より成立したことを示してゐる。内容は即ち一大千世界である。此の一大千世界を以て一佛の化境とする。且つこの三千大千世界の廣き恰も第四禪天と同じであつて、成も壞も同時である。

【二九】 菩提心を起す十法。

【一】 菩提心を起す四緣。

【二】 諸佛を思惟する五事。

【三】 願。字即、たまご。字甲、から。

【三〇】 身の過惡を觀じて菩提心を發する五事。

【三一】 五陰、五蘊の舊譯。梵語摩訶陀の譯。陰は積集の義である。色受想行識の五に大別する。色蘊は五根五境等の有形の物質を總談する。二受蘊は境に對して事物を受け込む心の作用である。三想蘊、事物を想像する心の作用、四、行蘊、其他境に對して膩り貪る等の善惡に關する一切の心の作用。五識蘊、境に對して事物を了別識する心の本體である。之を一有情に徴すれば色蘊の一は即ち身であつて、他の四蘊は即ち心である。心の中に受想行の三は心性上各一種特別の作用なので、之を心所有法、即ち心王の所有の

諸佛を思惟するに復た五事あり。一には十方過去未來現在諸佛の初始發心を思惟して、煩惱性を具するも亦た我の今の如し。終に正覺を成じて無上尊となる。此の縁を以ての故に菩提心を發す。

二には一切三世佛諸大勇猛を起し、各各能く無上菩提を得るを思惟し、若し此の菩提は是れ得べくんば法を我も亦應に得べし。此の事に縁るが故に菩提心を發す。三には一切三世諸佛は大明慧を發すを思惟し、無明の穀中に於て勝心を建立して積集苦行す。皆な能く自ら抜いて三界を超出す。

我も亦是の如く、當に自ら拔濟すべし。此の事に縁るが故に菩提心を發す。四には一切三世諸佛は人中の雄となり、皆生死煩惱の大海を度するを思惟し、我も亦大丈夫亦た能く度すべしと。此の事に縁りての故に菩提心を發す。五には一切三世諸佛大精心を發し、身命財を捨て、一切智を求め、我今亦た當に諸佛に隨ひ學ぶべしと思惟す。此の事に縁るが故に菩提心を發す。

身の過患を觀じて菩提心を發する復た五事あり。一には即ち我が身は五陰四大俱に能く無量の惡業を興造すと觀す。捨離せんと欲するが故に。二には自ら我が身は九孔常に臭穢を流して不淨なりと觀す。厭離を生ずるが故に。三には自ら我が身は貪瞋癡無量の煩惱有り、善心を燒然すると觀す。除滅せんと欲するが故に。四には自ら我が身は泡の如く、沫の如く、念々生滅すと觀す。是れ捨つ可きの法は棄捐せんと欲するが故に。五には自ら我れ身は無明の覆ふ處にして常に惡業を造と觀す。六趣に輪廻して利益なきが故に。

最勝果を求めて菩提心を發すに、復た五事あり。一には諸の如來を見るに、相好莊嚴に光明清徹にして、遇ふ者は惱を除く。修集の爲の故に。二には諸の如來を見るに、法身常住にして清淨にして、染なし。修集の爲の故に。三には諸の如來を見るに、戒・定・慧・解脫・解脫知見・清淨法聚あり。修集の爲の故に。四には諸如來を見るに、十力・四無畏・大悲・三念處あり。修集の爲の故に。五には諸の如來を見るに、一切智あり、衆生を憐愍して慈悲普く覆ふ。能く一切の正道に愚迷するもの

善するのである。畜生を害するは殺畜生戒と名け、九十單提の中第六十一である。四に大妄語戒、梵に妄說上人法 [T.ferminung's dharmā] と云ふ。利養を貪り、自ら聖法を得たり、我は聖人なりと欺言するのである。他の妄語は之を小妄語戒と名け、九十單提中の第一である。以上の五重罪は五篇(じふご)中の第一の初篇と云ふ。

【一】 利利 (Kāstya)。婆羅門 (Brahman)。昆舍 (Vajra)。首陀 (Sūta)。金剛針論の註に詳しく出づ。

【二】 維。天地の極隅、すみ。恒河沙 (Gangā-sandhi-vahika)。恒河 (Ganga) の砂の如く多いことを喩ふる。恒河は今のガンヂイヌ (Ganges) 河で、雪山麓より印度中央を流れ、ベシガル灣にそゞ。流域に沃野大都市が多い。

【三】 三千大千世界。須彌山を中心として七山八海を交互に繞らし、更に鐵岡山を以て外部となし、之を一小世界と稱し、此の一小世界を一千合せたのを小千世界とし、此小千世界を一千合せたのを中千世界とし、此の中千世界を一千合せたのを大千世界とする。即ち大千世界の數は一〇〇〇〇〇〇〇〇である。大千

す。百萬億恒河沙の阿僧祇一三三千大千世界の所有の衆生、悉く共に聚集して共に一塵と取るも、二百萬億恒河沙の阿僧祇の三千大千世界の所有の衆生、共に二塵を取る。是の如く展轉し、十方の各の千億恒河沙の阿僧祇諸佛世界の所有の地種、微塵都て盡すも、此の衆生界なほ盡すべからず。譬へば人ありて一毛を拆破し、以て百分となし、一分毛を以て大海を滂すが如し。我れ今所説の衆生の少分も亦復た是の如し。其の説ざるは大海水の如く、假使諸佛、無量無邊阿僧祇劫に於て、廣く譬喩を演べて説くも亦た盡きず。菩薩の發心は悉く能く遍く是の如き衆生を覆ふ。云何ぞ諸佛子よ、是の菩提心豈に盡すべけんや。菩薩ありて是の如き説を聞き、不驚・不怖・不退・不沒ならん、當に知るべし、是の人決定して能く菩提の心を發す、假令無量一切諸佛無量の阿僧祇劫に於て、其の功徳を讚するも亦た盡すべからず。何を以ての故に。是の菩提心齊限有るなし。盡すべからざるの故に。是の如き等の無量の利益あり。是の故に宣説して衆生をして普く受行を得しめん爲に菩提心を發す。

發心品第二

菩薩云何ぞ菩提心を發し、何の因縁を以て菩提を修集するや。若し菩薩善知識に親近し、諸佛を供養し、善根を修集し、志、勝法を求め、心常に柔和にして苦に遭ふて能く忍び、慈悲淳厚にして、深心平等に、大乘を信樂して佛の智慧を求む。若し人能く是の如き十法を具せば、乃ち能く阿耨多羅三藐三菩提心を發す。

復た四縁あり。發心して無上菩提を修集す。何を謂つて四とするや。一には諸佛を思惟し、菩提心を發す。二には身の過患を觀じて菩提心を發す。三には衆生を慈愍し、菩提心を發す。四には最勝果を求めて菩提心を發す。

生は一の世人の如くで、人の卵生は世羅と那波世羅と鶻卵より生じ、鷹母所生の三十二子と般遮羅王の五百子の如くである。人の濕生は曇狀多と遮盧と那波遮盧と鶻鷲と菴羅衛等の如し。人の化生とは唯劫初の人である。畜生の胎卵濕は共に現見することを得る。その化生は龍と羯路茶(Chelidonium)鳥の如し。次に鬼趣は胎化の二種である。胎生は餓鬼化の日夜所生の五子を食べふと云ふ如くで、次の一切の地獄と天人と中有とは皆化生のみである。(續田)但し人間の出生にも四生ありと解する如きは賛成し難し。

【一】四重禁。四重、四乘、四極重感障罪、四波羅夷とも云ひ、比丘にて四戒を犯す罪である。一は姪戒梵語では非梵行 Abrahmanya である。人・畜生・鬼神等に向つて姪事を行ふのである。男は大便處及び口の二道、女は大小便處及び口の二道は姪處である。二に盜戒、梵語では不樂取 Adattana と云ふ。人・畜生・三寶等の五錢及び值五錢の餘の雜物(五錢に限つたのは彼の王法五に滿つれば死に至るを以て佛が之を制したのである)を盜取するのである。三に殺人戒、梵 Adimant 人命を

訶薩は無量身心を成ぜんと欲し、勤修精進して深く大願を發し、大方便を行じ、大慈悲を起し、大智慧無見頂相を求む。求めて是等諸佛大法の如くす。當に知るべし、是の法は無量無邊なり。法は無量なるが故に福德果報も亦復た無量なり。如來説いて言く、「諸菩薩最初の發心の下劣なる一念の福德果報の如きも、百千萬劫説くとも盡きず。況んや復た一日・一月・一歳乃至百歳に習ふ所の諸心の福德果報は豈に説き盡す可けんや。何を以ての故に。菩薩の所行は無盡にして、一切衆生をして皆な無生法忍に住せしめ、阿耨多羅三藐三菩提を得しめんと欲する故に。

諸佛子よ、菩薩初^ニ始^ニ菩提心を發すや、譬へば大海初めて漸起の時の如し。當に知るべし、皆な下中上、價乃至無價の如意寶珠の作所住を作す處となる。此の寶皆な大海より生ずるが故に。菩薩の發心も亦復た是の如し。初漸起の時、當に知るべし、便ち人天・聲聞・緣覺・諸佛・菩薩の一切善法・禪定・智慧の所生處となる。復た次に又三千大千世界の初漸起の時の如し。當に知るべし、便ち二十五有と爲す。其の中の所有一切衆生は悉く皆な荷負して依止處と作す。菩薩の發菩提心も亦復た是の如し。初漸起時普く一切無量衆生の爲めにす。所謂六趣・四生正見・邪見修善・習修惡、淨戒を護持し、四重禁を犯し、三寶を尊奉し、正法を謗毀し、諸魔・外道・沙門・梵志、利利・婆羅

門・毘舍・首陀一切荷負して依止處となる。復た次に菩薩の發心は、慈悲を首と爲す。菩薩の慈は無量無邊なり。是の故に發心して齊等あるなく、衆生界に等し。譬へば虚空の普く覆はざるなきが如し。菩薩の發心も亦復た是の如し。一切衆生の覆はざるなきは、衆生界の無量無邊にして窮盡すべからざる如し。菩薩の發心も亦復た是の如し。無量無邊にして窮盡あるなし。虚空無盡なるが故に衆生無盡なり。衆生無盡なる故に菩薩の發心は衆生界に等し。衆生界は齊限あるなし。我今當に聖旨を承けて其の少分を説くべし。東方に盡千億恒河沙の阿僧祇の諸佛世界あり、南西北方四維上下各千億恒河沙の阿僧祇の諸佛世尊あり、盡く未だ塵となす、此の諸微塵皆な肉眼と對を作さ

【七】無生忍。略して無生忍と云ふ。無生法とは生滅を遠離せる眞如實相の理體である。眞智此の理に安住して動かぬのを無生法忍と云ふ。初地或は七八九地に於て得べき悟である。

【八】無價。極めて高價なること。

【九】二十五有。三界を開いて二十五有となす。欲界の十四有あり。四惡趣四洲六欲天である。色界に七有ある四禪天及び初禪中の大梵天、並に第四禪中の淨居天と無想天とである。無色界に四有あり、四空處是である。三界を通じて二十五の果報あり、二十五有といふ。

【一〇】六趣。人・天・地獄・餓鬼・畜生・阿修羅の六をいふ。四生(Caturyon)。一に胎生 Jarsya、常の人間の如く母胎に在つて體を形して後出生するもの。二に卵生 Andon、鳥の如く卵殼に在つて體を形して後出生するもの。三に濕生(Damsyadajin)、蟲の如く濕に依つて形を受くるもの。四に化生(Upanadatan)、依託する所なく、唯業力に依つて忽ち起るもの。諸天と地獄及び劫初の衆生皆是である。之を五道に分別するに人趣と畜生趣とは各四趣を具す。人の胎

發菩提心經論卷上

天 親 菩 薩 造

後秦 龜茲國三藏鳩摩羅什譯

歡發品第一

無邊際なる 去來・現在の佛

等空不動智 救世大悲尊に敬禮す。

大方等最上妙法あり。摩得勒伽藏菩薩摩訶薩の修行する所、所謂無上菩提を勸業修集して、能く衆生をして深廣心を發さしむ。誓願を建立して莊嚴を畢定し、身命財を捨て、貪恪を攝伏し、五聚を戒修して、犯禁を化導し、行畢竟して忍は障礙を調伏し、發勇精進して衆生を安止し、諸の禪定を修むるは衆心を知らんが爲なり。智慧を修行して無明を滅除し、如實門に入りて諸の執著を離る。甚深なる空無相行を宣示して、功德を稱讚して佛種をして斷えざらしむ。是の如き等の無量の方便ありて菩提法清淨の門を助け、當に一切上々善を爲して分別顯示せんと欲し、悉く阿耨多羅三藐三菩提を究意せしむ。諸佛子若くは佛弟子、佛語を受持して、能く衆生の爲めに法を演説する者は、應に先づ佛の功德を稱揚すべし。衆生聞已りて、乃ち能く發心して佛の智慧を求むれば、發心を以ての故に佛種斷えず。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、佛を念じ、法を念じ、又如來を念す。菩薩道を行ずる時、法を求めん爲めの故に、阿僧祇劫に諸の勤苦を受く。是の如き念を以て、菩薩の爲め説法し、乃至一偈す。菩薩、是の法を聞くを得て示教利喜す。當に善根を種き、佛法を修習し、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。無量衆生無、始生死の諸苦惱を斷ぜん爲めの故に、菩薩摩

【一】 龜茲國 Kucha、又丘慈、屈支。國の名、西域に在る。古來佛教の繁昌の地にして鳩摩羅什の生國である。近來佛教の遺物多く發見された。

【二】 摩得勒伽藏菩薩摩訶薩、摩得勒伽藏不明。菩薩 Bodhi-Ishtva、菩提 Bodhi、に進む衆生の意。摩訶薩 Mahasattva、大なる衆生の意。

【三】 空無相行。空とは一切諸法無得涉入の義である。無相とは萬徳輪圓無盡にして一の別相なき義である。

【四】 阿耨多羅三藐三菩提 Anuttara-samyak-sambodhi、佛智の名。舊譯無上正遍知、無上正遍道。無上等正覺。眞正に遍く一切の眞理を知る無上の智慧のこと。

【五】 優婆塞 Uparaka、在家の佛教信者又は修業者、譯信士又は居士。優婆夷 Uparika、在家の女の佛教信者。譯信女 (Kalyāṇī) 劫は年時の名。阿僧祇 asankhya、舊稱、阿僧祇譯無數。或ひは無央數。印度數目の名。

功德持品にては菩薩が無上菩提を退失しない十法を擧げ、最後に大乘經典の例に倣つて、此の發菩提心經論を護持宣流する者の功德を擧げ、佛種を紹ぎ、阿耨多羅三藐三菩提を成すべしと述べてゐる。

この經の各法數に就いての各内容に就

いては解説紹、註釋に略しなかつたが介して置いたので之に就いて知られたい。

この經の思想の特徴とする所は、この内容によつてもた易く知られるやうに、大乘教論にも拘らず、佛教の繁煩哲學と言はれる小乘阿毘達磨論的傾向が多分に

あることである。即ち大乘的思想・術語を小乘阿毘達磨論書の如く細かく註釋し、分類し法、數を並べ、全篇の大半が殆んどこの法數の説明を以て占められてゐることである。而して之は世親が既に小乘阿毘達磨論師であつたことをから原因してゐるのであらう。

昭和六年十一月三日

平等通昭識

く。次に戒を三種―身戒・口戒・心戒に分

ち、諸悪業より離れるを述べ、十善業戒

を擧げて五種の利益を述べ、戒を波羅提

木又戒・定共戒・無漏戒・攝根戒・無作戒に

分類して解説し、菩薩の各種の戒の名と

して善持戒・慈心戒・悲心戒・喜心戒・捨心

戒・惠施戒・忍辱戒・精進戒・禪定戒・智慧

戒・親近戒・善知識戒・遠離惡知識戒・清淨

戒を擧げ、一々説明して、殊に清淨戒を

詳説してゐる。

羅提波羅蜜品第六には羅提波羅蜜ra-

ti-pramitā を中心にして説いてゐ

る。羅提 Kṣānti とは忍辱のことで、一

切衆生の罵辱撃打等及び非情の寒熱飢渴

等を忍受する大行である。先づ自利・利

他二俱利の爲めの忍辱を述べ、忍辱を三

種に分ち、身口意辱としてゐる。更に世

間の打者を實と横、罵者を實と虚とし、

意に介すべきでないものに分つてゐ

る。忍を生ずる因縛十事を擧げ、清淨畢

竟忍を説明してゐる。

下卷毘梨耶波羅蜜品第七には毘梨耶波

羅蜜 Virāṭī-pramitā を扱つてゐる。毘

梨耶 Virāṭī とは精進の謂で、身心を精勵

して前後の五波羅蜜を進修することあつ

て、先づ自利・利他二俱利の爲の波羅蜜

を述べ、精進を二種に分ち、菩薩に十念

を擧げ、六波羅蜜に精進するを言ひ、菩

薩が大莊嚴を發し、精進を起す四事を擧

げ、不懈莊嚴精進・勇健精進・修習善根精

進・教化精進を擧げて説明してゐる。

禪那波羅蜜品第八は禪那波羅蜜 Dhyāna-

na-pramitā を扱つてゐる。禪那とは惟

修と譯し、新に靜慮又は三昧と名け、定

を譯してゐる。眞理を思惟して散亂の心

を定止する要法であつて、四禪八定乃至

百八三昧等の別がある。先づ自利・利他・

二俱利の爲の禪那波羅蜜を扱ひ、禪定の

由つて生ずる三法―聞慧・思慧・修慧を説

明し、四禪を修する經過とその内容を記

してゐる。更に定を修するの十法行を説
き、最後に禪定・智慧の解釋をなしてゐ
る。

般若波羅蜜品は般若波羅蜜を中心にし
てゐる。般若は智慧と譯し、諸法に通達
する智及び斷惑證理する慧である。先づ
自利・利他二俱利の爲の智慧を説明し、
菩薩の智慧を修行する二十心を説き、十
法善思惟心を擧げ、十二善入法門を解釋
し、善觀三世方便を説明してゐる。

如實法門品第十は六波羅蜜を修習し、
阿耨多羅三藐三菩提を求むる者の離るべ
き七法を述べ、無上菩提を速かに得んと
欲する者の修すべき七法を擧げ、次に菩
提を求めんとする者の修すべき諸徳目を
列記してゐる。

以上にて六波羅蜜を終り、空無相品第
十一は空無相を説き、空・信及び菩薩の修
する諸忍即ち無生法忍・信忍・順忍等を説
明してゐる。

論書でなく、平易なる爲に多分に教化的な修養的な意味を持つてゐる。

内容

發菩提心經論は大乗思想に立脚して菩薩の發菩提心を中心として修道思想を記述してゐる。元來菩薩思想、從つて發菩提思想を高潮するのは大乘の特色の一をなすものである。

その思想の概要を示せば、勸發品第一には歸敬文の後に佛法の偉大を説いて之を讃嘆する者の功德を述べ、菩薩の菩提心を發して、諸惡業を捨離し、諸の善事を勵み、諸波羅蜜等に精進し、百萬億恒河沙の阿僧祇の三千大千世界の求道者凡てが、阿耨多羅三藐三菩提に到達することを願つてゐる。

(註)*之等の用語は大乗思想特有のものである。

發心品第二に於ては先づ菩薩が菩提心を修集する因縁十法を擧げ、菩提心を起

す因縁、諸佛を思惟する五事、身邊の過惡を觀じて菩提心を發する五事、最勝果を求めて菩提心を發する五事、衆生を慈愍して菩提心を發する五事を列擧し、更に衆生を慈愍して菩提心を發する五事の内の個々の無明の縛する所の四事、衆苦纏文所の四事、不善業を集むる四事、極重惡を造る四事、正法を修せざる四事を列記し、諸惡業を排し、諸善行に勵み、菩薩は是等の爲に大慈悲を發し、阿耨多羅三藐三菩提を求め、一切衆生の苦惱を救濟すべきを述べてゐる。

願誓品第三には乾慧地に住する發心の菩薩が菩提を發越し、成就する次第を述べ、勝十大正願を記し、菩提の因としての六波羅蜜を擧げ、四無量心三十七品諸善萬行之を助すると記し、決定の誓を立てる五事を擧げ、誓願を建て阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを願つてゐる。

第四品以下は各波羅蜜を中心にして菩

薩の修する徳目を説明してゐる。波羅蜜 (Paramita) とは新彼岸の意で、彼岸即ち正覺、涅槃に達する修道徳目であつて、六又は十種に分つてゐる。

先づ檀波羅蜜品第四は布施波羅蜜を扱つてゐる。檀泥羅蜜とは檀那波羅蜜 *dāna-pāramitā* 即ち布施波羅蜜であつて、求むる者に心身物資を惜みなく施すことである。先づ自利・利他・二俱利の爲の布施波羅蜜を就き、施の三種——法施・無畏施・財物施を説明し、更に財施の五種——至心施・信心施・隨時施・自手施・如法施を擧げ、施す可からざる所の五事を列ねて警め、施を樂む人の五種の名利善利を擧げ、更に一切施を詳説し、布施者の取くる甚大なる功德を列ねてゐる。

尸羅波羅蜜品第五は、持戒波羅蜜を扱ふ。尸羅・波羅蜜 *śīla-pāramitā* とは在家出家の一切の戒行の波羅蜜であつて、先づ自利・利他、二俱利の爲の利益を説

Yasomir)に從つて、初めて大乘の教理を聞き、小乗の學修は黄金を知らずして銅を最上と思つてゐる如くであつた、と告白した。この時以後大乘の宣揚に身を捧げた。彼の師ウアンヅダツタも彼によつて同心した。

紀元三百八十三年にカラチャルは秦王符堅の將呂光に亡され、國王は殺され、鳩摩羅什は捕へられた。彼は支那への途中呂光によつて亡王の娘と眠るを餘儀なくされた。彼は尙若く三十五歳以前であつた。呂光は符堅の敗を聞いて涼州にて自立した。鳩摩羅什は呂光と共に紀元四百一年まで支那の涼州に留つた。後秦の姚興は涼を伐ち、彼は同年の十二月二十日に長安に到着し、興は國師の禮を以て歓迎し、西明閣及び逍遙園に入れて多くの經を譯させた。鳩摩羅什は紀元四〇二年より四一二年間に譯經三百八十餘卷の外に支那語の論文・詩をも著した。彼は

數に於て三千以上の弟子を持ち、數著を著した十大弟子を持つた。鳩摩羅什は長安に於て紀元三百九十九年より四百十五年間に死んだ。然し正確な年代は不明であるが、一傳は紀元四〇九年八月二十日に死んだとも言つてゐる。(秦の弘始十一年、晋の熙寧五年)。傳説によれば、彼は終に臨んで「吾が所傳謬りなくば焚身の後舌焦爛せず」と言ひ、遙遙園で外國の法に依つて火化したのが、薪減し、形碎けて、唯舌が灰とならなかつたといふ。

譯す所小品般若波羅密經・十住經・大莊嚴論經・妙法蓮華經・佛說阿彌陀經其他の重要經典があり、支那譯經史上玄奘・義淨と相並ぶ大譯經僧である。

第二 結構

發菩提心經論は上下二卷、十二品で、各卷は六品より成つてゐる。その品名を舉げれば、左の如くである。

上卷

- 一、勸發品第一
- 二、發心品第二
- 三、願誓品第三
- 四、檀波羅蜜品第四
- 五、尸羅波羅蜜品第五
- 六、羼提波羅蜜品第六

下卷

- 七、毘梨耶波羅蜜品第七
- 八、禪那波羅蜜品第八
- 九、般若波羅蜜品第九
- 一〇、如實法門品第十
- 一一、空無相品第十一
- 一二、功德持品第十二

各品各卷の長さは略々均等であつた。文體は散文であつて、論文體を爲すが、行文は平易で明快である。阿毘達磨論書的解說的註釋的の傾向を多く帯びてゐる。容積は中大であつて、文體は冗長でなく、緊縮してゐる。單に簡枯な難解な

が論駁した數論書の著者は外道ウインド
ヤデーサ *Vindhyavāsa* であると言つて
ゐる。高楠博士は *Vindhyavāsa* と自在
黒とは同一人であるとしてゐる。(尙看山
本快龍學士「宗教研究」三月號、自在年代
論參照)。支那人は自在黒の著の註釋は世
親の作であるとしてゐる。(Dr. Takai-
kusu: *T'oung Pao*, 1914, pp. 15ff., 461
ff. *Bulletin de l'école française d'Ex-
trême Orient*, t. IV, 1904, p. 1 ff.; *JR*
AS, 1905, p. 16 ff.)

漸く晩年に至つて世親は兄無著に導か
れて大乘に改宗した。傳に據ると、彼は
先到大乘を誹謗した罪を痛恨して將に自
ら舌を斷たうとした。然し、兄無著に「嘗
ては大乘を痛撃したその舌を以て今や大
乗の教義宣傳に努めるならば斷舌に勝る
贖罪であらう」と教へられた。世親は之
に服し、無著の死後妙法蓮華經・般若波羅
蜜多經等の諸大乘經典並に其の他の學術

書の註釋を書いた。然し此等は僅かに漢
譯及び西藏譯が残存するのみである。眞
諦は彼の著書の雄麗と折伏力とを激稱
し、且此の故に印度全國國境諸國に於け
る大小乗の研究者は凡て世親の著書を教
科書に使つてゐるのである。「苟も世親の
名を聞いて畏敬の念を生ずる者は佛教派
のみでなく、外道教派にも一人もなす。
彼は八十の高齡を以てアエロドヤ (*Āyō-
dhyā*) に逝した。彼は世俗生活を送つた
のであるが、その眞面目を領解するのは
困難である」と言つてゐる。

發菩提心經論は勿論彼が大乘に歸した
晩年の作である。

譯者

譯者鳩摩羅什 (*Kuṃṃāṣīya*) は鳩摩羅
什婆・鳩摩羅時婆・鳩摩羅耆婆とも音譯し
て童壽と言つてゐる。彼は印度沙門であ
つて、祖先是代々大臣であつた、父 *Śī-*
hāraṅga は同じく大臣で、カラチャル

Kharacur に行き、彼は其處でその國の
皇妹デーバー *Jivā* と結婚した。Ku-
māraṅga の名は兩親の名に由來してゐ
る。

彼はカラチャル *Kharacur* に生れ、七
歳で出家した。二年の後、既に尼となつ
てゐた母はクパー *Kubhā* (*Cabul*) へ子を
遣り、クパー王の従弟で、ヴァンヅダツ
タと名ける有名な僧の弟子とした。彼が
十二歳の折、母はカラチャルに歸り、途
中に於て、二人は阿羅漢に會ひ、彼は母
に「子が放逸ならぬやう守るべきで、
若し三十五歳まで罪を犯さぬならば、佛
陀の法を大に宣傳し、無數の人を救ひ、
ウバグプタ (*Uṣagṛta*) の如くであらう。
反對に、彼が戒律を保たぬならば、賢き
比丘以上でもあり得ぬ」と述べた。彼は
卑摩羅叉 (*Vimaraśa*, 無垢眼・龜茲國)
の教の下に説一切有部 (*Śāstivādin*)
を學んだ。その後スールヤソーマ (*Sū-*

Yasomitra の『俱舍釋論』Abhidharma-
kaśavyākya と支那西藏の傳本とを見る
のみである。最も古い漢譯は西紀五百六
十三年から五百六十七年の間に出來た眞
諦の譯である。第二の譯は有名な玄奘三
藏の譯(六五二—六五四)である。阿毘達
磨俱舍論は婆羅門哲學書に倣つて、經に
略頌を以て倫理學心理學形而上學世界觀
を論じたものである。本書は毘婆沙派
(Vaibhāṣika) の原本大毘婆沙論 (Vibhā
ṣa) を豫想し、之を整理したものである。
本書は小乘所屬說一切有部宗 (Sarvāstī-
vādin) の書であるが、佛教の他の學派で
も同じく權威とされてゐる。支那日本の
大乘教徒は之を教科書に用ひ、之に關す
る註釋書も多い。(俱舍論に就ては木村泰
賢氏、『阿毘達磨論の研究第五篇俱舍論述
作の參考書に就て』を参照されよ。)

稱友の俱舍釋論に就ては

Rāṣṭradraṅgi Mītra : Nepalese Bud-

dhist Literature, p. 3 ff ;

Bendall, Catalogue, p. 25ff.

Burnouf, Introduction, p. 502 ff.

S. Levi Encyclopaedia of Religion
and Ethics, I, p. 20 ;

Poussin : *ibid* IV, p. 129 ff.

G. H. Grierson : The Prokrite Vi-
bhāṣas, JKAS, XIV p. 489-519, 19
18.

國譯大藏經論部第十一、第十二、看、
木村泰賢博士、阿毘達磨論の研究、第
四篇、大毘婆沙論結果の因縁に就て。

世親の著として漢譯に存するものは阿

毘達磨俱舍論二十卷を始として實に二十
八部一百二卷ある。唯識二十論一卷、唯

識三十論頌一卷、攝大乘論釋十卷、十地
經論十二卷、佛性論四卷、百論釋二卷、

妙法蓮華經論優波提舍一卷、無量壽經優

波提舍願生偈一卷、涅槃論一卷、遺教經
論一卷等によつても、論師が如何に廣く

如何に深く佛教思想を研究し、體驗した
かを示して餘りがある。

「西藏本文が現存してゐる世親著と稱す
る『偈集』Gāthāṅgraha も全く小乗の
見地に立つもので、その註釋書が附して
居り、その二、三の例をシーフェル Se-
hierfer 氏が擧げた。(Über Yasuband-
hu's Gāthāṅgraha, Mélanges asiati-
ques VIII. Bulletin t. XXV, St. Pé-
tersburg 1878, p. 559 ff.) その二十四偈
は全く法句經金言の眞髓中にある。その
註も亦當然彼に歸す可きものであるが、
之を見ると哲人世親は又機智に富んだ説
教者であつた。(Winternitz: Geschichte
der Indischen Literatur; II, S. 257 ff.)
哲學者として世親は又數論哲學の反駁
書『勝義七十論』(Paramārthasaptati) を
書いた。この書の梵語原本は散逸して傳
はらなすが、自在黑 (Iśvarakṛṣṇa) の金
七十論を駁したものでらし。眞諦は世親

て、無著(Asaṅga)が長兄で、仲弟が世親で、末弟はヴィリンチヴァツア(Viṅśatīvatāsa)で、長兄無著は大乗佛教瑜伽派の學匠で、瑜伽師地論(Yogicārābhūmiśāstra, Saptadśābhūmi-śāstra)及び大乘莊嚴經論(Mahāyāna-sūtrāṅkāra)レヴィ Levi 發見並に出版)の著作である。末弟ヴィリンチヴァツアは文學的思想的にさして秀でてゐなかつた。仲弟世親は最も有名で、佛教文學史上最も卓越した學匠の一人である。印度最西北のブルシヤブラ Puruṣapura (現今のヘシヤワル Peshwar) のカウシカ Kauśika 姓婆羅門の末孫である。世親の出世年代に就いては古來多くの異説あり、未だ定説はなし。高楠順次郎博士は世親を紀元四二〇—一五〇〇年とすれ(Journal of the Royal Asiatic Society, 1905, p. ff.)、荻原雲來氏は世親を三九〇—四七〇年に、無著を三七五—四五〇年に(a. n. o. S. 16)。

シルヴァンレヴィ Dr. Lévi 氏は無著の活動を五世紀の前半に置く。然るに、ヘリズ Peri (A propos de la date de Vasubandhu, Bulletin de l'école française d'Extrême Orient. XI. 1911, Nos. 3-4) は恐らく世親は西紀三五〇年に死んだとする。椎尾辨匡博士は世親の年代を二七〇—三三〇年とし(高楠博士及びペリ氏の世親年代論に就て、哲學雜誌三〇九—三一〇號、大正元年)、宇井伯壽博士は彌勒を二七〇—三三〇年、無著を三二〇—三九〇年、世親を三二〇—四〇〇年とする(史的人物として彌勒及び無著の著述、哲學雜誌四一一、四一三號、大正十年)、「尙高楠博士著、The Date of Vasubandhu "in the Nine Hundreds," J. R. A. S. (M. C.) p. 1013, 1914 看高楠博士、世親年代論、現代佛教(昭和五年)。而して之等を總合するに、四、五世紀説が多く、五世紀と思へば略と妥當であらう。

義淨は無著世親を馬鳴龍・樹・提婆の時代と彼の生存時代との間である「中古」の有名な人物としてゐる。印度僧眞諦(Pāramārtha 四九九—五六九)は無著の傳をも含んでゐる世親傳を編纂した。之を支那譯から高楠博士が英譯した(Engineering Pao. V. 1904, p.p. 1ff.)。之をワシイリヒフ W. Wassiljew 氏が抄譯した。(Der Buddhismus S. 235 ff. (タラナータ(Tranatha)の佛教史(S. 107ff.)にある世親の西藏傳は支那傳よりも一層傳説的である。眞諦は此の無著、世親に關する著書を西紀五三九年摩訶陀から支那に持ち歸した。

三、經歷・思想・著作 世親は驚く可き程博學にして、然も思惟・整理組織の才に長じてゐた。世親の名著『阿毘達磨俱舍論(Abhidharma-kośa)の梵本は惜しくも散失し、我々は僅かに本書の註釋稱友

發菩提心經論解題

發菩提心經論は發菩提心を中心にして論註した大乘の論書で、天親(世親)菩薩の作で、鳩摩羅什の譯になつてゐる。

第一 作者並びに譯者

著作者

天親の原名は婆藪槃豆、又は婆修槃陀 Yasubandhu であつて、天親と譯すと共に新譯では伐蘇呬度・世親と譯してゐる。婆藪 Vāśi 是世天と譯し、毘紐天 Vīśiṇu の異名である。槃陀 bandhu は親族の意で、「世天の親族」即ち「世親」である。傳説的には父母が世天の親愛を求めて名けたとも、或ひは天帝の弟である故に、天親と名けたとも言つてゐる。

一、傳説的記述 世親の傳記である眞諦

譯「婆藪槃豆法師傳」では「婆藪槃豆は北

天竺富婁沙富羅國(丈夫國と譯す)の人

で、佛滅後九百年に出づ。兄弟三人あり、

共に婆藪槃豆と名く。長兄別に阿僧伽(無

著と譯す)と稱す。小弟別に比鄰持跋婆

(比鄰持は母の名、跋婆は兒と稱す)と稱

す。中子獨通名を以て稱す。初め阿踰闍

國に於て薩婆多に於て出家し、小乗を研

學す。既に大毘婆沙論の義に通じ、衆の

爲に之を講じ、一日に一偈を作り、六百

偈を出す。俱舍論と稱す。後に無著の示

誨を用ひて、小執の非を懺悔し、舌を斷

つて其の罪を謝せんとす。無著云く、汝

既に舌を以て大乘を誹謗す。更に此の舌

を以て大乘を讚せば可なり」と。是に於

て唯識論等の諸大乘論を造つて大教を弘

宣し、壽八十、阿踰闍國に寂す。」

「付法藏因緣傳」六には「尊者闍夜多減度

に臨んで比丘婆修槃陀に告ぐ。「無上の妙法今汝に付屬す。汝至心に護持すべし」と。婆修槃陀、教を受け、一切の修多羅を解し、廣く衆生を化す」

「百論序疏」には「婆藪を天親と云ふ。天

親とは天帝の弟なり。闍浮提に生ぜしめ

て修羅を伏するなり。是れ割那舍闍の人、

丈夫國と云ふ。もと小乘學にして、五百

部の小乘に通ず。兄の阿僧伽は是れ大乘

の人、弟の盛に小乗を弘めて大乘を覆へ

すを見て、殊に病を現じて曰く、「汝の罪

過は深重なり。我れ之が爲に病む」と。

弟曰く「若し爾らば是れ舌の過なり。當

に舌を斷つべし」と。曰く、「更に大乘論

を造つて大道を宣流するに如かず」と。

是に於て五百部の大乘論を作る。時人呼

んで千部の論主と爲す。」と。

之等の諸説には傳説的粉飾もあり、そ

の凡てを採用し難い。

二、世親の氏族 世親は三人兄弟であつ

寶行王正論一卷

出家正行品第五

dhāritvān deva. のことか。
淨居天については前出。

【二七】大自在天王 (Mahāvīra-
Rādeva)。前出。

【二八】補處。前佛既に滅して
後、成佛してその處を補ふを
補處といふ。即ち前佛に嗣いで
成佛する菩薩を言ふのである。
而かも一生を隔て、成佛
すれば一生補處と云ふ。又此
の位を等覺と名ける。彌勒は
即ち經迦如來に於ける補處の
菩薩である。
【二九】佛地を菩薩の十地に比
して以下に説く。

この附近より著者の成佛の願
文となる。

【三〇】十力。如來の十力であ
るとは道理の義、物の道理非道
理を知る智力である。二に智
三世業報智力、一切衆生の三
世の因果業報を知る智力であ
る。三に知諸禪解脫三昧智力、
諸の禪定及び八解脫三三昧を
知る智力である。五は知種種
解智力、一切衆生の種々の知
解を知る智力である。六は知
種種界智力、世間の衆生の種
種の境界同じからざるに於て

如實に善く知る智力である。
七に智一切至所道智力、五が
十善の行は人間天上に至り、
八正道の無漏は涅槃に至る
等の如く各其の行因の至る所
を知るのである。八に天眼無
碍智力、天眼を以て衆生の生
死及び善惡の業縁を見るに障
碍の無い智力である。九に智
宿命無漏智力、衆生の宿命を
知り、又無漏の涅槃を知る智
力である。十に知永斷習氣智
力、一切の妄惑の餘業を永く
斷じて生ぜしめざるに於て能
く如實に知る智力である (智

度論二五、俱舍論十九)
【三二】方便善巧。方便、前出。
善巧、善良に巧妙なる方便で
ある。

【三一】四無量心である。前出。
【三三】四梵。四梵行と同じ。
又四梵住とも言ふ。梵行、梵
は清淨の義。梵欲を斷する法
を梵行と爲す。即ち梵天の行
である。梵行を修して梵天に
生ずるのである。四梵行とは
慈悲喜捨の四無量心である。
此の四心は梵天に生ずる行業
であるので梵行と名ける。
【三四】六波羅密である。

五三

善友は汝を教ふべし。

内外の勝徳に由つて

實誓して愛言を説き、

正事、詔曲を増す。

已に捨てて悔あるなく、

懈緩掉動なく、

願くは清涼なること月の如く、

甚深なること大海の如く、

一切の果、離る所、

衆生の受用する所、

我但だ王の爲に

理の如く餘の人の爲めに、

大王よ此の正論を

自及び他をして

勝戒は敬尊さるること長く、

財を愒ますして足るを知り、

能く善惡の人を

弘く佛の正法を護り、

汝、敬順の行を知れ。

汝必ず勝處に至らん。

樂性動かす可からず。

願くは汝教へ易し。

煩識ありて心寂す。

高貢ならずして和同す。

熾盛有ること日の如く、

堅住すること山王の如くあれ。

衆徳の莊嚴する所、

願くは汝一切智たれ。

此の如き善法を説くにあらず。

一切を利せんと欲するに由つてなり。

汝日日諦に聽け。

無上菩提を得しめん爲。

忍辱は嫉妬なく、

救済して難事に墮す。

攝持し及び制伏し、

菩提を求めて應に行すべし。

説無礙と云ふ。前の三種の智を以て衆生の爲に樂説自在なるを樂説無礙と云ふ。又正理に契ふ無滯の言説を起すを辯無礙と名く。無滯の言説は即ち辯である。

【八〇】力度。力波羅蜜、修習力と思擇力との二あり。

【八一】遍淨梵王。遍淨天のことが、色界第三禪天の第三天の名。此の天の淨光は周遍するが故に名く。

【八二】四等。慈 Matri・悲 Karuna・喜 Mudita・捨 Upekasi の四無量心である。所縁の境に従へて無量と云ひ、能起の心に從へて等と云ふ。平等にこの心を起すからである。

【八三】法雲。智波羅蜜を成就し、亦修慈を勵じて無邊の功德を具足して無定の功德水を出生すること大雲の虚空を覆ふて清淨の衆水を出す如くである故に法雲地と言ふ。

【八四】灌頂 (Abhisheka)。普通王の即位の時種々の盛大なる儀式と共に水を身體に灌ぐ。引いて佛位に登るに之を行ふ。灌頂位とは佛位又は王位を言ふ。

【八五】智度。十波羅蜜の一としての (Jana-jane-mita) 受用法樂智・成熟有情智の二がある。

【八六】淨居梵王。淨居天 (Suddhāvahāra) の梵王である。

願くは我れ他の愛する所。

願くは我、衆生を念する、

願くは彼の所作の悪、

是は我が所行の善、

一人未だ解脱せず、

願くは我、彼の爲めに住し、

能く此の如く修行すれば、

恒沙の世界に於て

佛世尊自ら説く。

衆生界無量にして

此の法我略説して

願くは汝此の法を愛すること、

若し人此法を愛すれば。

是の所愛は應に惡むべく、

故に法に事ふるを身の如く、

行事の如く慧然り、

淨順にして智慧あり、

自ら他を疑ふを惡むに由つて、

是の諸の善知識

知足は慈悲の戒にて

自の壽命を念するが如くせん。

萬倍、自愛に勝れん。

我が果報に於て熟さん。

彼の果報に於て熟さん。

有に於て隨つて道を生ぜん。

菩提を取らず。

福徳若し體あれば、

其の功量る可からず。

此の如き因、量り難し。

利益の願亦爾り。

能く自他の利を生ず。

愛して自身を念するが如し。

是實に自身を愛す。

此憎は法に由つて成ず。

行に事ふること法に事ふるが如くせよ。

慧事の如く、智者

他を伏するに正理を説く。

此の人自らの事を損ず。

汝、應に略相を知るべし。

智慧は能く惡を滅す。

【七四】三乘。前出。

【七五】第八童子地不動。願波羅蜜を成就し、修惑を斷じて無相觀を作し、任運無功用に相續するが故に不動地と云ふ。

大事譬喩譚(Mahāvastu-sūtra-dāna)一、四五—五四第八、

生誕因緣(Janamāyā-sūtra)と類例せるもつか。

【七六】願波羅蜜(Prañihāra-paramita)。十波羅蜜の一、求菩提願と利樂他樂との二種あり。

【七七】勝遍光梵王。不明。

【七八】第九善慧。力(śakti)波羅蜜を成就し、修惑を斷じて十力を具足し、一切處に於て可度不可度を知つて能く説法するが故に善慧地と云ふ。

大事(Mahāvastu)一、四五—五四、王子位(Yanurvarajya-bhūmi)に相當す。

【七九】四辯。四無礙解、四無礙辯と云ふ。是れが菩薩説法の智辯であるので意業に約して解と云ひ、智と云ひ、口業に約して辯と言ふ。一に法無礙、名句文能詮の教法を法と名け、教法に於て辯ることなきをいふ。二に義無礙、教法所詮の義理を知りて滯ることなきを義無礙と名ける。三に辭無礙、又詞無礙と云ふ。諸方の言辭に於て通達自在なるをいふ。四、樂説無礙、又辯

諸の苦畏を解脱して

方便善巧に於て

慈・悲・喜・淨捨、

施・戒・忍・精進、

福慧の行を圓滿し、

願くは彼れ想量し難く、

此の徳と相應して

一切の過を解脱せんことを。

一切善及び衆生の

能く他の衆苦を除かん。

若し他の怖畏するあらば、

唯我が名を憶ふによつて、

敬つて我を信じ、及び願ひ、

乃至我が名を聞かば、

願くは我れ五通を得て、

願くは我恒に能く

若し他、惡を作さんと欲せば

願くは遍く彼の惡を斷じ、

地水火風

他の受用を欲するが如くせん。

一向に三寶に歸し、

佛法を大財となし、

恒に四梵に居して住す。

定・智の莊嚴する所、

相好の光明かに照さん。

十地を行して礙げなく、

餘の徳の莊嚴する所。

願くは我、衆生を愛し、

所樂を圓滿して

願くは我れ恒に此の如し

一切の時及び處にて

一切苦を脱するを得ん。

若し見及び憶持し、

願はくは彼れ定めて菩提を得ん。

常に一切に隨つて生ぜん。

衆生の善及び樂を生ぜん。

一切世界に於て

理の如く修善せしめん。

野藥及び林樹の如きは

願くは我自ら忍受せん。

ある。佛の成道のとき來つて障害を試みたのもこの天摩である。或は言ふ、第六天の上に別に廣の宮殿あつて摩王は之に住する。他化天王にあらずと。(織田)。

【三七】 廣俗二諦、一に俗諦、善情所見の世間の事相である。是れ凡俗の衆情に願する法であるので俗と云ひ、其の凡俗の法たる道理決定して動かないので諦と云ふ。又此事相俗にして實であるので諦と云ふ。二に眞諦、聖智所見の眞實の理性である。是れ虛妄を離れるので眞と云ひ、その理決定して動かなければ諦と云ふ。又此の理性理に於て實であるので諦と言ふ。名稱は經論の所説が一でなく、涅槃經仁王般若經では世諦、第一義諦と言ひ、金剛不壞假名論には眞諦俗諦と云ひ、瑜伽論唯識論には世俗諦勝義諦と云ひ、此の中で眞俗の名が最も汎く行はれる。

【三七】 第七遠行地。方便(Upaya)波羅蜜を成就し、大悲心を養ひ、亦修慈を斷じて二乘の自度を遠離するが故に遠行地と云ふ。此の位は即ち第二阿僧祇劫の行を終へたのである。

【三七】 大梵天(Mahabrahma)前出。

諸佛無量の徳

若し此の因を見ざれば、

此の因と果との爲めに、

日夜各三遍

諸の佛・法及び僧、

我れ頂禮し歸依す。

我、一切惡を離れて、

衆生の諸善を行じ、

頭面に諸佛を禮し、

願くは轉法輪の爲め、

此より、我が徳を行ぜん。

此に因つて願くは衆生の

一切の障礙を度して

淨命を具して相應せんことを。

一切具さに無邊にして

後際を窮め盡くるなし。

願くは一切の女人、

恒に一切時に於て

勝れし形貌威徳ありて

無病にて力辦具して、

餘人に於て信じ難し。

量り難きこと此の果の如し。

佛支提を現前す。

二十偈を頌するを願ふ。

一切の諸菩薩を

餘は尊み亦敬すべし。

一切善を攝持す。

隨喜し及び順行す。

合掌して勸請して住す。

生死の後際を窮め、

已作及び未作に

皆な菩提心を發せんことを。

圓滿にして垢根なく、

願くは彼の自在の事

寶手と相應して

願くは衆生も此の如くあらんことを。」

皆な勝丈夫と成り、

明かに足り圓滿を得、

好色、他に愛見せられ、

長壽にして願くは彼に然かんことを。

どといふ。新に都史多傳、

上足、妙足、知足、喜足等。

欲界の天處にして夜摩天と樂

變化天との中間に在つて下よ

り第四重に當つてゐる。天處

内處の二に分れ、その内院を

彌勒菩薩の淨土とし、外院は

則ち天衆の欲樂處である。

【六七】第五難勝(Durjaya)。

又極難勝地、禪定(Dhyana)

波羅蜜を成就し、修惑を斷じ

て眞俗二智の行相互に違する

を合して相應せしめる故に極

難勝地といふ。

【六八】化樂天五(Nirmanar-

ajita)。大欲天の第五で、梵語

で須涅密陀、又化自樂天、化

樂天。

【六九】現前地。慧(Prjia)波

羅蜜を成就し、修惑を斷じて

最勝智を發し、染淨の差別な

きを現前せしめるが故に現前

此の地の果報に因つて

勝遍光梵主となり、

二乗等しく及ばず、

俱に動靜を修すが故に。

第九を善惡と名く。

此の中智最も勝れ、

此の地の果報に因つて

遍淨梵王と爲り、

第十を法雲と名け、

佛の光水、身に灌ぎ、

此の地の果報に因つて

淨居梵王。

智慧の境思ひ難く、

自在を具足するを得。

此の如く菩薩の地

佛地は彼と異なり、

此の地但だ略説せん。

此の一一の力に隨つて、

此の如き等

十方虚空

願度常に現前す。

淨土等自在なり。

眞俗の一義に於て

二利無間を行す。

法王太子の位なり。

四辯に通達するに由りて。

力度常に現前す。

四等難無等なり。

能く正法の雨を雨らす。

佛の灌頂位を受く。

智度現前す。

自在在天王となり。

諸佛の秘密藏にして

後ち補處の位に生ず。

十種を我れ已に説けり。

具する勝徳量り難し。

十力等相應して

量り難きこと虚空の如し。

諸佛の無量の徳と言ふ可し。

及び地水火風の如き、

戒(śīla)波羅蜜を成就して修惑を斷じ、毀犯の探を除き、身を以て清淨ならしむるが故に離垢地と云ふ。

【三】第三明焰(Khoira-shāmi)。發光地とも言ふ。忍辱(ksanti)波羅蜜を成就して修惑を斷じ、諸佛法忍を得て、智慧顯發するが故に撥光地といふ。

【三】夜摩(Yama)。具さには須夜摩(Suryama)欲界六天中第二天の名。舊に焰天と云ふ。晝、時分善分。善く時分を知つて五欲の樂を受くるが故である。

【六】習氣。大乘には妄惑に現行と種子と習氣の三を分ち既に惑の現行を伏し、且つ惑の種子を斷ずるも尙惑の氣分あつて惑相を現ずるを習氣と云ふ。舍利弗が既に瞋惑の種子を斷ずるも動もすれば怒氣を催す如き、是れ瞋惑の習氣尙存する現證である。三乘の中聲聞は全く之を斷ぜず、圓覺は稍之を侵害し、佛は之を全く斷ずるのである。

【七】第四燒然。又攝慧地といふ。精進波羅蜜を成就し、修惑を斷じて慧性をして熾盛ならしむるが故に熾盛地と云ふ。

【六】兜率天(Tuṣṭita)。天の名。舊に兜率兜、率陀、兜術な

多く道品を修習して

^{一六六} 兜率陀天王となり、

自在を生ずるを得るに由つて、

往還して障礙なく、

^{一六七} 第五を難勝と名く。

聖諦微細の義

此の地の果報に因つて

^{一六八} 化樂天主と爲り、

^{一六九} 第六を現前と名く。

數々定慧を習するに因つて、

此の地の果報に因つて

^{一七〇} 他化自在天となり、

^{一七一} 第七を遠行と名く。

中に於て念々に

此の地の果報に因つて

^{一七二} 大梵王と爲るを得て、

方便勝智を證して

^{一七三} 三乘の世俗に於て

^{一七四} 童子地は不動にて

無分別にして思ひ難し。

滅度の爲めに道を生ず。

外道を除いて戒を見る。

十方佛土に於て

餘の義、前地の如し。

魔・二乗も及ばず、

證見の生ずる所の故に。

定度現前するを得て、

二乗を廻して大乘に向ふ。

正に佛法に向ふが故に。

滅を證得して圓滿す。

般若度現前す。

能く、眞俗の諦を教め、

^{一七五} 速く行き、數々相續す。

無生及び無滅を得る。

方便智現前して

第一義を通ずるを得。

六度、無間に生ず。

最第一師となる。

眞觀を出でざるに由つて、

身口意の境にあらず。

の斷ずる所の三種の煩惱、結

とは結果の義。繫縛の義、煩惱の異名である。煩惱が因となつて生死を結果するので結と云ひ、又衆生を繫縛して解脱せしめないのが結といふ。即ち生死の因となるもの。

三結、一に見結、我見である。

二に戒取結、邪戒を行ふのである。三に疑結、正理を疑ふのである。見惑の中に此の三の過が最も重きが故に此の三結を以て見惑の總稱となし、此の三結を斷ずるのを預流果とする。

【一六五】布施(檀那)波羅蜜をいふ。波羅蜜(Paramita)は到彼岸の意で、菩薩の修する徳目にて、涅槃の究極境に導く故かく言ふ。初地の菩薩の修するもの。

【一六六】剎浮洲(Jambudvīpa)閻浮洲とも書く。中央に閻浮の大木あるによつて、この名がある。須彌山の南に位する大洲で今の印度を言ふ。

【一六七】寶輪(Vara)法輪(Dharmacakra)。前者は轉輪王が世界を統一する爲に用ひる武器で、後者は轉法輪王(佛)が法界を統一し、人を教化するに用ひる法の武器である。

【一六八】第二無垢地(Amala-bhūmi)。又離垢地とも言ふ。

【一五六】初地を歡喜地と名け、

【一五七】三結滅盡するに由つて

此地の果報に因りて、

【一五九】百佛世界に於て

剡浮等の洲に於て

世間に於て恒に

【一六一】第二を無垢と名く。

十種皆清淨にして

此地の果報に因りて

千佛の世界に於て

仙人・天帝釋

天魔及び外道

【一六二】第三を明焰と名く。

定及び神通に依りて

此の地の果報に因りて、

【一六三】萬佛の世界に於て

夜摩天帝となり、

【一六四】一切の邪師執して

【一六五】第四を燒然と名く。

此の地の果報に因りて

中に於て喜希有なり。

及び生れて佛家に在り。

現前に施度^{【一六六】}を修す。

動せずして自在を得、

大轉輪王となり、

【一六七】寶輪及び法輪を轉す。

身口意等の業は

自性は自在を得、

現前に戒度を修し、

動せずして自在を得。

能く天の愛欲を除き、

皆能く動かさざる所なり。

寂慧光明生じ、

欲・瞋・惑滅する故に、

現前に忍辱を修し、

動せずして自在を得。

身を滅して^{【一六八】}習氣を見る。

能く能正の教を破る。

智火光焰生ず。

請進度現前す。

眞理實至極であるからである。

而して二者共に果を先にし、

因を後にしたのは、果は見易

く、因は知り難いので、先づ

苦果を示して之を厭はしめ、

然る後その因を断たしめ、又

涅槃の妙果を擧て之を樂ば

しめ、然る後其の道を修せし

めんとす。是れ最劣の小機を

誘引する善巧である。佛菩提

樹下を起ち、鹿野苑に至り、

五比丘の爲に初めて此の法を

説く。之を佛轉法輪の初めと

する。之に依つて道を修し、

滅を證するを聲聞人と稱す

のである。

【一六九】對治。煩惱を断除する

を云ふ。

【一七〇】以下六波羅蜜を説明す。

【一七一】小乘の聲聞地に對し、

大乘の十地を説く。十地に種

々あるが、以下本書に出づる

十地は華嚴仁王等の諸大乘經

に明かに一致する大乘菩薩の

十地 (Daśabhūmi) である。

【一七二】歡喜地 (Nanda)。菩薩

十地中の初地である。菩薩既

に初阿僧祇功の行を滿じて初

めて聖性を獲得て見惑を破し、

二空の理を證し、大歡喜を生

ずる位であるので歡喜地とい

ふ。菩薩は此の位に於て檀

(Dāna) 波羅蜜を成就するの

である。

【一七三】三結。預流果を得る人

他に於て損害の意あるは

三時、災横を疑ふを

身心重きに由るが故に、

心晦きを説いて睡と名け、

悪事に由つて悔を生じ、

三寶四諦に於て

若し出家せし菩薩は

若し能く此の悪を免ん、

此の中の諸功德を

謂く一五施戒及び忍

自物を捨つるを施と名け、

瞋を懈怠するを忍と名け、

心寂靜なるを定と名け、

一切衆生に於て

施は富を生し戒は樂を

定は靜を、智は解脫を、

此の七法若し成すれば

思ひ難き智境界

小乗の中に於て

大乘に於ても亦爾り。

九の因縁より生ず。

説ひて名けて順悲となす。

事無能なるを弱と名け、

身心一五掉一五ふを動と名け、

後ち一五熾然の名を憂ふ。

猶豫するを説いて疑と名く。

此の魚類を離るべし。

對治すれば徳は生じ易し。

菩薩應に修治すべし。

勤・定・慧・悲等なり。

利他を起すを戒と名け、

善を攝するを精進と名け、

眞義に通ずるを智と名け、

一味の利を悲と名く。

忍は愛を勤は煩惱なり。

悲は一切利を生ず。

俱に究竟に至るを得。

今、世尊の位に到る。

諸の聲聞地を説くが如し。

菩薩の十地を説けば、

ふかくしづか。

【四八】染汚心、染汚意のことか。第七識の異名。七識は迷染の根本にして、我痴、我見、我慢、我愛の四煩惱と俱起して八識の見分を緣じて我執を生ずる故である。

【四九】五塵。五境のこと。

【五〇】掉。ふる、ふるふ、と訓す。動搖す、うごく、ゆるぐ、ゆらめく。

【五一】熾然。熾、こがす、こがる。

【五二】三寶四諦。三寶、佛法僧。四諦は苦集滅道諦をいふ。梵語 *catvāri-āryasatyāni* 苦諦 *Duḥkha-āryasāya* とは三界六趣の苦報である、是れ迷の果である。二に集諦 *Saṃhāyaya* 貪瞋等の煩惱及び善惡の諸業である。此の二は能く三界六趣の苦報を集起すれば集諦と名ける。三に滅諦 *Nirodha* の涅槃である。涅槃は惡業を滅し、生死の苦を離れて眞空寂滅であるので滅と名ける。是れ悟の果である。四は道諦 *Mārga* の八正道である。是れは能く涅槃と通ずるので道と名ける。是は悟の因である。此の中初二は流轉の因果である。又世間因果と云ふ。後二は還滅の因果である。又出世間の因果と云ふ。此の四共に諦と言ふのはその

非境の女人に於て

自ら徳なくして徳を顯はす。

知足知・恒求を離る。

他の我が徳を知るを願ふ。

安んじて苦を受くる能はず。

師尊の正事に於て

法の善言の如く教ふるを。

親人の愛著に於て

方處を欲するに由つて、

死を慮つて怖畏せざるを

眞實功德に由つて

此の思は他識を縁る。

愛及び憎心に由つて

自ら及び餘人を縁る。

染汚心を憂慮し、

身沈むを説いて極と名け。

隨上心惑に由つて

身亂れて節食せざるを

身心極めて疲羸なるを

五塵に貪愛するを

非法の欲を得るを求む。

説いて名けて惡欲と爲す。

説いて此を大欲と名く。

説いて爲識欲と名く。

説いて爲不忍と名く。

邪行なるを不貴と名く。

輕慢するを雜語と名く。

思惟するを親覺と名く。

得るを思ふを土覺と名く。

説いて不死覺と名く。

他の我を尊重するを願ふ。

説いて順覺覺と名く。

自ら益し他を損するを思ひ、

説いて害他覺と名く。

依るなきを不安と名く。

遲緩なるを懈怠と名け、

發身を曲ぐるを頻と名け、

説いて食醉と名け、

説いて名けて下劣と爲す。

説いて名けて欲欲と爲す。

げる。夫々に説明あるを以て一々註釋せず。

怪、恨、覆、欺誑、諂、嫉、格、慚等。

【四四】慢の七種。慢、下慢、高慢、過慢、我慢、增上慢、邪慢を擧ぐ。

【四五】以下に擧ぐる龜類の術語下の如し。實高、謝言、非

責、利求利、憍隘、種相、非

恩値、不恭敬、不尊重、輕害、

過著、貪、不平等欲、惡欲、大

欲、爲識欲、不貴、雜語、親

覺、土覺、不死覺、順覺覺、

害他覺、不安、懈怠、頻、食

醉、下劣、爲欲欲、曠恚、弱

睡、動、癡。

【四六】五邪命。比丘不如法の

事を營みて生活を爲すを邪命

と云ふ。五種ある。一に詐現

異相、世俗の人に於て詐つて

奇特の相を現じ、以て利養を

求めること。二に自說功能、

醉を他を計らずと謂ひ、

慢の類に二種七種あり、

若し人、分別を起せば、

從下及び等勝、

下人、自身を計つて、

此を説いて下慢と名く。

下人、自身を高くし、

此の惑を高慢と名く。

下人自己を計して、

此を説いて過慢と名く。

五種の取陰に於て

癡に由るか故に我を計す。

實に未だ聖道を得ざるに、

偏道を修するに由るが故に。

若し人、作惡に由りて

兼ねて復た他徳を撥す。

我今復た用なし。

此れ亦下慢と名く。

利養の讃を求むる爲めの、

能く貪欲の意を隠す。

放逸は善を修せず。

我今當に略説すべし。

從下下等等

此の惑を説いて慢と爲す。

等人に如かずとす。

自ら下等の類に由り、

勝人と平等なりとす。

自ら高等勝なるに由つて、

勝類の人に勝るとす。

癡の如く上に泡を起す。

自性空無なるに人、

此を説いて我慢を名く。

自身已に得たりと計す。

説いて増上慢と名く。

而して自身勝れりと計す。

此を説いて邪慢と名く。

或は能く自體を下す。

但し自體起るを縁とす。

故に守つて六根を攝し、

此の惑を貢高と名く。

心、大塵に對して起り耽迷して奪らない。牛羊と何ぞ罵らう。謙を恣にすれば妄惑を増長するのみである。智は本心照明の徳。以て法性に契合すべきである。學人は宜しく妄識を定止して眞智を策發すべきである。

人四依。涅槃經文に如來の使者となつて末世の弘經をなし、人天の依止となる者四人を擧ぐ。之を人の四依といふ。一は具煩惱性の人（即ち三寶四善根）、二は須陀洹（即ち預流果）斯陀舍（即ち一來果）の人、三は阿那含（即ち不還果）の人、四は阿羅漢の人。是れ内證は大乗の菩薩であるけれども、外に聲聞の相を現じて法を傳へ、人を化するなり。而してその内證の涅槃に就いて之を大乘の位次に配するの諸説不同である。先づ天親の涅槃論に初地を初依とし、六七地を二依とし、八九地を三依とし、第十地を四依とする。天台は法華玄義五に地前を通じて初依とし、初地より五地を二依とし、六七地を三依とし、八九十地を四依とする。（別教）又五品六根を初依とし、十住を二依とし、十行十迴向を三依とし、十地等覺を四依とす。（圓教による）慈恩は地前を初依とし、初地より六地に至る

是の故に聰明の人當に勝信受を起し、信に由つて大乘を受け、故に無上道を成ず。施戒及び忍辱は此法は悲を上と爲す。世は平等ならざるに由つて、好名及法事の爲に、

出家正行品第五

初めて出家を學ぶ人は木叉・毘尼に於て

次に正勤の心を起し、
數^{三三} 五十七あり、
怪は心相違と謂ふ。
覆は惡罪にて秘と名く
他を張るを欺誑と名け、
嫉は他徳に於て憂ひ、
羞なく及び慚なし。
下らず、他を敬はず、

應に大乘を惜むを捨つべし。無等覺を得るを爲すべし。及び大乘を行す。中間種々の樂多く在家の爲めに説く、願くは汝修して性を成ぜよ。王位若し法に乖けば、及び出家勝る。

敬心して禁戒を修し、多く破立の義を學べ、魚類の感を捨離せよ。諦かに聽け。我當に説くべし。恨は是れ他失を結ぶ。及び惡を著し、善と顯す。詔は曲心の續くを謂ひ、悋心は捨を怖畏す。自他に於て耻となす。動亂するは願の方便にて、

の四種の法は入道の縁、上根利器の依止する所であるので、行の四依と名ける。又之を四聖種と名ける。此の法は能く聖道を生じ、聖が爲に種となるが故に聖種と曰ふ。法四依。一に依法不依人。人は情有の假者なり。法は法性自爾の軌模なり。法に依つて道に入るべし。人何ぞ實行に關せん。其の人假命凡夫外道なるとも説く所法に契はば、以て信受奉行すべし。たとひ佛身の相好を現ずるも、説く所法に契はざれば、捨てて依るべからず。況んや餘人をや。二依了義經不依不了義經。三藏中了義經あり、不了義經あり、明かに中道實相の義を明かすを了義經とし、然らざるを不了義經となす。群生は情識の淺深利鈍の異なるに依つて大臣をして別説せしむ。故に入道の人先づ之を曉らしむべし。墮として通ぜざるなく疑あれば皆決せん。三に依義不依語。語は言説、但是れ筌蹄を張るのである。若しこの語に依れば徒らに疑惑諍訟を増すのみである。義は中道第一義である。言語の及ぶ所でない。學人は宜しく筌蹄を去つて實義を思惟すべきである。四に依智不依識。識は妄想の

眞空及び佛徳

大小兩乘の教は

佛の二五 不了義の説は

一三乘の説中

若し捨てれば非福なし。

若し自身を愛せんと欲せば、

菩薩の二三 願及び行

若し小乗の修に依れば、

菩薩道は二五 四依にて

何の法か佛の所修にて

諦の助道に依るに約せば、

目を修する、既に異ならず

菩提二四、總別を行す。

大乘に於て具二六さに辯ず。

毘伽羅論の如きは

佛の教を立つるも此の如し。

有る處にて或は法を説き、

或は成福徳を成するを爲し、

或は此の二を遺すを爲し、

或は深く悲んで上と爲し、

若し法の如く簡擇すれば、

智人に於て何ぞ諍はん。

下人解し易きに非らず。

自體を護つて傷ふ莫れ。

若し憎惡すれば善なし。

大乘は應に誘るべからず。

廻向等は彼は無し。

云何ぞ菩薩と成らん。

小乘に於ては説かず。

而して説いて能く彼に勝らん。」

佛は彼と同じきが若し。

云何ぞ果殊に越えん。

小乗中に説かず。

故に智は應に信受すべし。

先づ教へて字母を學ぶ。

受化の根性に約する故に、

彼をして衆惡を離れしむ。

或は具さに前の二に依る。

甚だ深く劣人を怖る。

他の爲めに菩提を成す。

【二五】佛説に了義と不了義あり。了義とは諸大乘經中明らに究竟眞實の理を説くもの。煩惱即菩提、悉有佛性の如きは是なり。二に不了義、諸經中實義を隱蔽して方便の説を爲すもの。我を空する爲に法有を説き、法有を遣る爲に皆空を説く如きは是である。

【二六】一三乘。一乘、成佛する唯一の教。乘は車乘にて佛の教法に譬へる。教法人を載せて涅槃の岸に運べば乘と名く。法華經は此の乘の理を説いたものである。

三乘、三人を乗せて各其の果地に到らしめる教法を乗と名ける。一乘乃至五乘あり。その中三乘に四種ある。大乘の三乘は一、聲聞乘又は小乘、二、緣覺乘、三、大乘又は菩薩乘。詳しくは前出。

【二七】願行。誓願と修行と。此の二相待つて事を成す。一を缺けば不可である。

【二八】廻向。一切所修の善根を衆生に向け、又佛道に向けるのである。

【二九】四依。四種あり、一に行の四依、二に法の四依、三人の四依、四に説の四依である。行人所依の四依である。一に糞掃衣、二に常乞食、三に樹下坐、四に腐爛藥。此

犯罪は恕すべからず。
或は見事宜しからざれば、
或は制し、或は開許す。

諸菩薩の威儀は

大乘の説、此の如し。

無智の故に沈没す。

故に大乘を誹謗すれば、

施・戒・忍・精進

佛、大乘を説くも爾り。

施戒に由つて他を利し、

定慧、自他を脱し、

略して佛の正教を説く。

此の六度を藏と爲す

福慧を種類となし、

此を立て、大乘と名く。

空は思量し難きが如し。

諸佛の徳は思ひ難し。

大徳、^{三三}舍利弗は

故に佛徳思ひ難し。

大乘無生に於て

故に汝の義成は然らず。
智者は義に由つて行ふ。

此の義處々にあり。

悲を先となして智成す。

何に因りて誹謗すべき。

上乘廣深の義なり。

自他の怨家と成る。

定・智・悲を體と爲す。

何の邪説ありて漏らさん。

忍進を自利となす。

略ぼ大乘の義を攝し、

謂く自他を解脱するは

何人能く此を撥せん。

佛、菩提道を説く。

癡盲忍ぶ能はず。

福慧の行成するが故に

大乘の願忍に於て

佛戒は其の境非らず。

云何ぞ忍ぶ可らざる。

小乗は空滅を説く。
自ら義して違反する莫れ。

【二三】六波羅蜜の數目である。
【二四】舍利弗、舍利弗多、舍利子等とも言ふ。舍利、*Śāri*は母の名。弗又は弗多は子の義である。舍利女の子であるので、舍利弗又は舍利子といふ。又父の名を優婆提舍と云ひ、父に従つて優婆提舍 *Upāsaka*とも稱す。母名の舍利に就いて古來二釋あり。一は鳥の名と爲し、鶯、鶯、鶯と譯す。或ひは母の眼が彼の鳥に似た故であると、又母の才辯は猶ほ鶯の如くである故に言ふと。舍利弗は目連と共に佛弟子中最も重要な一人である。その出家の因縁はもと外道であつたが、馬勝比丘の安摩として歩むのを見て、その師と法とを明ひ、因縁所生の偈を聞いて出家しといふ。

菩薩見ること此の如し。

大^三 悲引に由るが故に。

諸菩薩は道を修す。

無智憎嫉の人は

功德を失ふを識らずして

或は憎嫉勝利するが

若し罪の他を損するを知らば、

故に誹謗の人を説いて、

自利を觀ぜざるに由る。

大乘は衆の德器なり。

信人は僻執に由り、

信人謗れば尙ほ燒く。

毒を合して毒を治するを爲す。

苦の惡を滅するも亦爾り。

諸法は心先きに行く。

苦は他の惡を滅するを以て

苦來つて若し能く利あらば、

或は自及び他に於て、

能く小樂を棄つるに由つて、

智人は小樂を捨て、

若し此の言を忍びず。

菩提に於て退かず。

後に相續して佛に至る。

佛、大乘を説くも

自ら害して撥して受けず。

德に於て失想を起す。

故人、^三大乘を謗る。

功德能く利益あり。

憎嫉の善を識らず。

一味、他を利益す。

故に謗る人は灰粉となる。

不信は憎嫉に由る。

何ぞ況んや瞋妬する者をや。

醫方の所説の如し。

此の言何ぞ相違ある。

心を以て上首とす。

善心の人は何ぞ過たん。

取るべし。何ぞ況んや樂をや。」

此は是れ本首法なり。

後若し大樂を見る。

後の大樂を觀す。

醫師、苦樂を施す。

【三】悲引。大悲の引導である。

【三】大乘(Mahāyāna)。大なる乗物の意。引いて如何なる劣根の衆生とも涅槃の彼岸に渡す大なる乗物の意にて、發達佛敎(主として龍樹以後の)を指す。

去來世の根塵

二世を出でざる故に

眼の火輪を見るが如し。

現在、塵中に於て

五根及び境界は

一一の大は虚なる故に

若し大各と離れて成ずれば、

若し離に別體なくんば、

四大二義は虚なるが

既に實にして和同なし。

識・受・想及び行は

合はざれば縁に乗じて生じ、

喜樂を分別するが如く、

此の如く苦を計する所。

樂に於て和合の愛

苦に於て遠く貪を離れ、

若し世の言説に依れば、

然らず、所見を離れて

觀行して世間を觀れば、

取るなく、分別なく、

成らざるは無義に由る。

塵根、義無きを現す。

根の到亂するに由つての故に。

根は塵を縁するも亦爾り。

是れ四大塵類なり。

塵根あらざるに非らず。

薪火を離れて塵に然ゆべし。

塵も亦此の判に同じ。

故に和同を成ぜず。

故に色塵成らず。

一一の體成ぜず。

非有の故に合なし。

苦を縁として對治成す。

樂を因とし壞する故に成す。

縁に相なければ則ち滅す。

此に由つて觀じて生ぜず。

心を能見となす者あり、

能見成ぜざるが故に。

幻の如く實は有らず。

般涅槃は火の如し。

轉輪王は地を得、

但し身心の二樂

但し衆苦を對治し

心樂は是れ想類にて

苦を對治するを體と爲す。

世間一切の樂は

洲處土の居止・

飲食・臥具・乘

若し心、一緣に隨へば、

餘境は緣にあらざる故に。

五根は、五塵を緣とす。

復た塵を成すを得と雖も、

此の塵根の所緣の

故に所餘の塵根は

此の塵根の所緣

分別して淨想を起し、

一塵心の所緣

既に心を離るれば塵に非らず。

父母を以て因となし、

此の如く眼色を緣とし、

或は四天下を具す。

餘の富貴は皆虛し。

身の喜樂を受くと謂ふ。

皆分別の所作なり。

及び分別を類と爲す。

虛なるが故に眞實なし。

座處及び衣等

妻象馬、一を用ゆ。

即ち彼に由つて樂を生ず。

是の時虚しく用なし。

若し心分別せざれば、

此に由つて樂を生ぜず。

餘は則ち能所に非らず。

眞實にして義有るなし。

心は過去の相を取り、

彼に於て樂受を生ず。

心塵は世を同じうせず、

塵を離るるも亦心に非ず。

汝説いて子生ずるありと。

織等ありて生ずると説く。

【三二】轉輪王(Oakrapravastinrajana) 輪を轉じて四天下を征伏し、正法にて政める理想王である。

【三六】この佛所行讚 Buddhas-carita 十一・四七・八と言辭的に一致す。共に王侯たりとも普通人と同じく座、衣、居は同時には一であるとする。之等は同一系統に屬するか。更に摩訶婆羅多十二(解脫法品 Mokṣadharma) 三三〇・一三五―一四〇にも一致する。【三九】五塵、色聲香味觸の五境である。此の五は能く眞性を染汚するので塵と名ける。

乃至彼未だ散ぜざれば、
莊飾・浣・飲食・

王他の器を成ぜんと欲せば、
善悪の人皆な同じ。

熟思し實に知り已つて
殺さず、彼に逼らず、

自家を看ること怨の如し。
恒に無放逸を念へ。

賞重く供養を加へ、
徳の勝負を思ふが如く、

將接して饒花を爲し、
王樹の忍辱の影は

王、戒を持して能く施せば、
譬へば砂糖丸の如し。

若し王、道理に依らば、
難なく、非法なし。

昔世の引くに從はず、
王位は法に從つて得、

王位は肆家の如く、
爲めに更に求得せず、

繫と雖も亦安樂なり。
藥扇等相應す。

悲に依つて善教を立てよ。
瞋及び欲に由らず、

人、反逆を増起すれば、
願くは王は他土に擯しよげよ。

參人の淨眼に參するに由る。
願くは法事の如く作せ。

恩人をして得しむるあり。
報償亦是の如し。

施を賞して大果を爲す。
民鳥の遍く依る事。

威あつて物心を得。
香刺味、相雜ゆ。

愚法は則ち行はず、
常に法の歡樂あり。

將に入來すべからず。
位の爲め法を壞つことなかれ。

若し傳へば所價の如し。
此を用ひて汝應に行すべし。

他の心事等に於て

富み財ありて眷屬多し。

月月に應に彼に

己の法事等を問ふて

法の爲めに王位に處り、

王位、有利に勝る。

大王即ち世間にて

法王の位義を立てよ。

王處に長老となり、

惡を畏れて多く相順ふ。

罰繫鞭杖等は

王は恒に大悲を潤ほす。

一切人を利せん爲め

若し彼最重惡なるも、

重惡極害の心は

彼は卽是れ悲器にして、

貴人若し駐とどめらるれば、

餘人も亦理の如し。

若し一人所に於て

人生に隨つて護らず、

罪を畏れて王を親愛し、

宜しく立てて職掌をなすべし。

一切の財の出入を問ふべし。

喜心にて善く教誨す。

名欲の塵を求めず、

此に異れば則ち如かず。

多く互に相食噉す。

汝諦かに我が説を聽け。

上族は是非を解す。

願くは彼れ王事を看よ。

若し彼れ理に依つて行へば、

彼に於て更に恩を施す。

應に恒に慈心を起すべし。

亦大悲を生ずべし。

必ず彼に於て悲を行へ。

正行の人の悲塚なり。

五日に放散すべし。

隨一に拘留する莫れ。

長く繫駐の心を起さば、

此に因つて惡恒に流る。

殺を離れて常に善を行ひ、

巧に財を増して諍なく、

清淨にして積聚するなく、

安立して導者となり、

盲・病・根不具

廟に於て遮するを得ず、

道徳、人に求むるなし

供事亦た相ひ似、

一切の法事に於て

無貪聰智の善は

正論を了して善を行じ、

美語にして怯弱ならず

恩を識りて他苦を知り、

八人互に相羞ぢ、

柔和にして大度あり、

堅實にして能く財を用ひ、

所作の事を熟思して、

常に四方便を行じて

法戒を持して清淨に

能く生じて護財に長じ、

戒を持して舊を愛容せよ。

力を勤めて恒に善を修し、

他事を捨てず、

彼の功徳藏を受けよ。

悲しむべく、勾依るなきに勾へよ。

平等に彼と食す。

或は餘の王界に住して

應に作すべくして此彼なし。

勤力の人を立つべし。

法を侵して罪を畏れず。

四觀淨を親愛し、

上姓能く戒を持し、

理の如く巧に決斷す。

國の爲めに八座を立つ。

膽勇にして甚だ王を愛す。

無放逸にして恒に善なり。

能く十二輪を別つ。

應に立て、大臣となすべし。

事を了して幹用あり。

義を解して書算に巧なり。

【二三】四觀淨。不明。

【二四】八人、八座。不明。

【二五】十二輪。普通十二輪とは十二因縁のことを言ふ。轉じて極りなき故に言ふ。こゝでは如何?

【二六】方便。梵語、*Upāya*。二釋あり、一は般若に對して釋し、二は眞實に對して釋す。一に般若に對して釋すれば眞實に通ずる智を般若と名け、權道に通ずる智を方便と云ふ。權道とは他を利益する手段方法である。此の釋に依れば大小乘一切の佛教を概して方便と稱するのである。方は方法である、便は使用である。一切衆生の機に契ふ方法は方正の理と巧妙の言とを用ふるのである。又方とは衆生の方域である、便とは教化の便法である。諸機の方域に應じて道化の便法を用ふるを方便と云ふ。是皆一大佛教に通ずる名である。(維田)

願くは汝大心を發せ。

若し大心事を行はよ、

小意にて陋劣王は

好名吉祥の事

王后等の毛を望めば、

死するも亦惡名を起す。

廣大の事能く起らば、

能く下人の願を障へて、

自ら棄物在るなくんば、

若し法に於て財を安んぜば、

先帝の諸產業

能く前王の爲め、

財を用ひず現喜を受けよ。

此二は、^{三二}唐失に非らず。

將さに終らんとして施を行はんと欲するも。

祥絶せるが故に愛を捨て、

若し一切物を捨つれば、

亦常に死の縁もに在つて

先づ諸王の起す所の

謂く天神の廟堂を

恒に大事を興建せよ。

是の人大家を得。

心願未だ曾つて觸れず、

三寶依つて應に作すべし。

若し事汝の法に非ざれば、

王は最勝を作さず、

大人、希用あるを希ふ。

命を以て此事を成す。

隻身未來に入る。

前、逆に至つて相待つ。

本を棄て、新王に屬す。

法樂と好名を生じ、

若し施せば感じ來つて樂む。

唯だ苦を生じて歡びなし。

臣は自在を礙失す。

新王の樂欲に隨ふ。

汝今安んぞ法を弘めん。

譬へば風中の燈の如し。

平等の功德處、

願くは本の如く修理して

【三三】唐。空し、うしなふ。

此の業及び果の如き
故に應に利他を修し、

正教王品第四

王若し非法を行じ、

王に事ふる人亦讚する

亦世間に入り、

何ぞ況んや大國王、

我今汝を愍念し、

故に我れ汝を善く教ふ。

眞滑にして義利あり、

佛、弟子を教へしむ。

若し實語を聽聞せば、

必ず須く受くべきを取るべし。

我今善言を説く。

汝知りて應に受行すべし。

昔貧苦に施すに由つての

貪に因つて恩を知らず。

世間は唯路糧

施して下品に供するに由つて、

已に義相應を知る。

即ち菩薩は自ら利すべし。

或は非道理を作すとも、

故に惡を好み、知り難し。

善を愛するに非らずんば教へ難し。

能く善人の語を受けんや。

及び諸世間を悲む。

實益するも若し愛するに非らずんば、

時に依りて慈悲に由り、

故に我れ汝の爲めに説く。

應に無瞋に住すべし。

浴するが如くに淨水を受けよ。

現來に利益あり。

自の爲め、及び世に於て、

故に今富財を感ず。

施を廢して更らに得るなし。

雇はずしては人負ふなし。

未來に百倍を荷ふ。

無貪ならば事の成ずる、

慢を離れて上品を招き、

五實施を行じ

諸罵も能く辱むるに非らず。

支提に燈行を列して、

布施して明油を積くるが、

支提を供養する時、

鬘、角等の妙音の

他失に於て默然たり。

隨順、彼の意を護る

施に由つて舟乗を徒し、

恭謹して尊長を瞻るの

他をして法事

或は淨心施法の

眞實義を知るに由つて、

故に第六通を得、

平等悲、相應し、

故に自から成佛を得、

種々の淨願に由つての

衆寶を支提に獻するが

不慳ならば財物長ず。

法忍は總持を得。

及び無怖長を惠むに由つて

故に大勝力を感ず。

幽闇に火燭を秉る。

故に淨天眼を得。

即ち鼓聲樂を設く。

故に淨天耳を得。

人の徳の闕くるを談ぜず。

故に他心智を得。

羸之の人を運致す。

故に如意通を獲る。

及び正法句義を憶はしめ、

故に宿命智を感ず。

諸法は無性なりと謂ふ

最勝なる是流盡き、

如實智を修するに由つての

恒に衆生を解脱せしむ。

故に佛土清淨なり。

故に無邊光を放つ。

【一六】法忍。忍は忍許の義にて今まで信じ難かりし理を信じてうけて惑の出ぬ様になるを忍と云ふ。即ち所觀の法に施して忍許するのである。此の忍許に依て愈惑を離れ已つて理を照明する智の決定するを法智と云ふ。依つて忍は斷惑の位にて因に屬し、智は證理の位にて果に屬す。小乘の且道に於て欲界の苦諦の理を信忍するを苦法忍と云ひ、乃至道諦の理を信忍するを道法忍と云ふ。又大乘の菩薩初地の見道に於て無生の理を信忍するを無生法忍と云ひ、其他の種々の法忍がある。

【一七】總持。陀羅尼 dhāraṇī のこと。前出。

【一八】鬘。鬘と同じ。一、木の心を嚼む蟲。ひさご。蝶に通ず。

【一九】羸。よわし、やす、つかる、やむ。

【二〇】六通。前出。一神境智證通、二天眼智證通、三耳智證通、三天耳智證通、四他心智證通、五宿命智證通、之である。之に第六通として漏盡智證通 kāmavahānye-jāna を加ふる。漏盡智證通とは三乘の極致諸漏即ち一切の煩惱を斷盡するに無礙なるもの。此の六通を成就するは三乘の聖者に限るのである。

若し人、父母を養ひ、

善を恭ひ、人、財を用ひ、

軟語にして兩舌せず

此れ二四九の天帝の因

昔、九法を行するに由つて、

時々法堂に處り、

一日に三時施し

福、刹那に及ばず。

天人等愛護し、

怨火毒杖を免る。

功用なくして財を護り、

慈の十功德を得。

一切衆生を救へて

菩薩の徳は山の如く、

信に由つて、八難を離れ、

數眞シヤク如空を修すれば、

無諂は念根を得、

恭敬して義理を得、

布施して法を聽聞し、

疾く所愛の如きを得て、

恭しく自家の尊を奉じ、

忍辱して大度あり。

實言同じく樂を止む。

壽を盡して應に修行すべし。

天主、帝位を感ず。

今に至るも恒に此を説く。

美食三百器

慈を行ふ百分一

日夜喜樂を受け、

是れ慈を行ふの現果にして

後色界に生ず。

若し人未だ解脱せずんば、

堅く菩提心を發さしむ。

菩提心牢固なり。

戒に因つて善道を生ず。

善を得て放逸なし。

恒に思ふて慧根を得。

法を護り、宿命を感じ、

或は他聞を障へず、

佛と相値遇す。

【二四】九の天帝の因。右の九を天帝となる九の因とする。

【二五】八難。見佛聞法に就て障難ある八處なり。又八無暇と云ふ。道業を修するに間暇なきなり。一に地獄、二に餓鬼、三に畜生、四に鷲單越、(新に北拘盧洲)、樂報殊勝にして總て苦なきが故である。五に長壽天、色界、無色界の長壽安穩なる處。六に聾盲瘖啞、七に世智辨聰、八に佛前、佛後、二佛の中間で佛法のない處である。

他、己れを辱しむるも瞋る莫れ。

他に對して惡を報する莫れ。

他に於て恩を作すべし。

唯だ自ら應に苦を受くべし。

若し大富貴を得るも

枉たがひに違へば餓鬼の如く、

假設たがひ王位を失ふとも、

亦恒に此語を説き、

言の如く、此の行の如く、

此に因つて好名遍く

應に熟つまさに簡擇を作すべし。

他作を信するに由る莫れ。

若し理に依つて善を行へば、

王侯續いて斷へず、

死の縁は百一種にして

此の因は或は死縁なるが

若し人恒に善を行へば、

自他に於て等しきが若し。

法によりて性人となり。

夢中に善事を見れば、

即ち宿惡の業を觀ぜよ。

後の爲に苦を受けず。

彼の報答を希ふ莫れ。

共に業に求めて樂を受けよ。

自ら高くして作すべからず。

下悲行を起す莫れ。

或は死するも、實言に由れ。

實利なければ默然たれ。

願くは堅く善を行へ。

自在に勝量を成す。

後は則ち理に依つて行へ。

須らく自ら實義を了すべし。

好名十方に遍し。

王の富樂轉じて大なり。

壽命因つて多からず。

故に恒に善を修すべし。

是の所得は安樂なり。

此の善樂圓かに足る。

臥覺に常に安樂なり。

内に由つて過惡なし。

【二三】枉。冤罪、虚げ。虚げに違へる者、又、邪曲、よこしま、よこしまなる人。

光明、種々の色あり、

花香等、施に應じ、

若し人此縁を離るれば、

則ち應に之に施與すべし。

毒も亦た彼に施すを許す。

甘露も施すを許さず。

若し蛇、人指を嚙まば、

或は佛、利他を教ゆ。

固より謹んで正法。

恭敬して法を聽受し、

世の讚嘆を愛する莫れ。

自體の徳を立つる如し。

聞に於て足るを知る莫れ。

師に於て恩を報いて施せ。

外の邪論を讀む莫れ。

應に自徳を讚すべからず。

他の密事。

自ら他に於て過あらば、

若し此の過失に由つて

自らは須らく此の失を離るべし。

衣服莊嚴の具。

悲に依つて求むる者に恵む。

法に於て安行なし。

之を過して後患む莫れ。

若し此能く他を利するならば、

若し此れ他を損害するならば、

佛も亦聽いて則ち除く。

逼惱するも亦行すべし。

及び能説法人を持す。

或は法を以て他に施す。

恒に出俗の法を樂め。

他に於ても亦此の如し。

及び實義を思修せよ。

應に敬行して憍む莫るべし。

但だ諍慢を起す故に

怨徳亦た讚すべし。

及び惡心兩舌を顯はす莫れ。

理の如く觀じて悔を露せ。

智者は他を訶責すれば、

能く他を拔濟する有つて

このごろ。七歩頃は「しばらくの間」の意か。

【二】陀羅尼 Dhāraṇī、譯總持。善法を持して散せしめず、惡法を持して起らしめざる力用に名く。之を四種に分つ。一に法陀羅尼、佛の教法に於て開持して忘れざるを言ふ。又聞陀羅尼と名く。二に義陀羅尼、諸法の義に於て總持して忘れざるを言ふ。三に咒陀羅尼、禪定に依て秘密語を發し、不測の神驗を有するを呪と云ふ。呪に於て總持して失せざるをいふ。四に忍陀羅尼、法の實相に於て安住するを忍と云ふ。忍を持するを忍陀羅尼と名く。開義呪忍の四は所持の法である。能持の體より言へば法義の二は念と慧とを體とし、忍は無分別智を體とする。

災疫飢餓の時

國敗れて濟度を須つ。

田夫農業を絶たば

時に隨つて租税を^{一〇九}蠲し、

施物をして貧債を放ひ、

直防、休偃を許し、

境の内外の劫盜を

時に隨つて商侶を遣り、

八座等しく事を判じ、

事能く萬姓を利し、

應に何の自利を作すべき。

利他云何ぞ成さん。

地水風火等。

此の如くし或は暫時にして

七歩の頃にて心を起し、

菩薩の福德成る。

童女は好色にて嚴かに

故に^{一一〇}陀羅尼を獲て、

愛色具さに莊嚴して、

八萬の童女を施す。

水旱及び賊難

願くは汝恒に^{一一一}拯恤せよ。

願くは糧種の具を給せよ。

輕微にして^{一一二}調飲を受けよ。

息を出して長輕ならず、

時を以て賓客に接す。

方便して斷つて息めしめよ。

物價を平かにして^{一一三}鈞調す。

自から理の如く觀察す。

恒に恭敬して修行すれば

汝恒に敬思するが如し。

此の如く汝急思して

草藥及び野樹

他の無疑の策を受け、

爲めに内外の財を捨つ。

量り難きこと虚空の如し。

求得者に惠施す。

能く一切法を持す。

井びに一切は具を生じ、

釋迦佛の昔時

Charitra の略。課來園。信衆の住む園庭にて寺院の總稱。

【九七】草藥。藥。しきわら。しきぐさ。しとね。しきもの。

【九八】佛僧六趣に供養すべき食を記す。

【九九】須。まつ、もちゆる。

【一〇〇】履。くつ、くさぐつ、わらぐつ、鱗、物をはさみて抜き取る用をなす具、くぎぬき、ゆぬき。

【一〇一】襪。足の前後に垂れて覆ふもの。おほひ。

【一〇二】葦。一、芥粉。からしのこと。又一種の香草。二、茎と通ず。ふしづけ。三、紵と通ず。細布、ほそぬの。

【一〇三】三果。三辛、不明である。

【一〇四】醃。生齋を熟り腐して屑末となせるもの、むぎこがし。

【一〇五】拯恤。すくひめぐむ。

【一〇六】鈞。のぞく、いさぎよし、とし。

【一〇七】調。令を下して飲む。をさむ、もとむ、ととのふ。

飲、ほつす、あたふ、飲れて物を乞ふ、こふ、むさぼる。

【一〇八】直防許休偃。不明。

【一〇九】鈞。量の名、三十斤。ひとしと調す。

【一一〇】八座。不明。

【一一一】七歩頃。頃、一、田一

百畝の稱。二、しばらく。三、

諸道に九六 伽藍。

中に於て生具、

小大國土に於て

遠路、水漿乏しければ、

病苦・無依・貧

慈悲に依りて攝受し、

時に隨つて飲食を新たにし、

大衆及び九七 須つ者に

屣織瓶鉤鉢

荖提寢息の具を

三果及び三辛

恒に應に安息し省す

首、身に塗る藥油・

水器及び刀斧を

米・穀・麻・飲食

恒に陰涼の處に置き、

蟻鼠の空門に於て

願くは信すべき人をして、

意の如く前後の食を

狗鼠鳥蟻等に施せ。

園・塘・湖・亭屋を起し

草蓐・飲食・薪を給し、

應に寺亭館を起すべし。

井池を造りて飲を施し、

下姓怖畏等

心を勤めて彼を安立せしよ。

果菜及び新穀と

未だ施さずして先づ用ゆる莫れ。

針纒及び扇等

應に寺亭館に施すべし。

蜜糖酥眼藥

書呪及び藥方と

澡盤・燈・鉢果

應に亭館中に給すべし。

糖膏等相應して

及び淨水を器に満たし、

飲食穀糖等を

日分布し、散ぜしめよ。

恒に餓鬼・

願はくは汝恒に食を施せ。

を讀す。

【九〇】織。きぬがさ、かき。

【九一】帝釋膏。寶珠の名。梵語にて因陀羅尼羅日多 Indra-niramantri、帝釋寶であつて、

青色であり、最勝であるので、帝釋膏といふ。

【九二】六和敬。僧は和合を義となす。和合に二義あり、一に理和、同じく滅理を證するのである。是は見道以上の聖者にある、二に事、之に六種ある。即ち六種敬具である。見道以前の凡僧に屬す。一に身和敬、禮拜等の身業を同じくするのである。二に口和敬、讚詠等の口業を同じくするのである。三に意和敬、信心等の意業を同じくするのである。四に戒和敬、戒法を同じくするのである。五に見和敬、空等の見解を同じくするのである。六に利和敬、衣食等の利を同じくするのである。或は行和敬と言別意同である。或は施和敬と名く。布施の行法を同じくするのである。

【九三】天・外道を禮拜するのは邪道である。

【九四】田疇。穀を植うるを田といひ、麻をうるを疇といふ。

【九五】以下佛法僧に供養すべき施設を記す。

【九六】伽藍。僧伽藍摩 Sāṅgha-

佛像及び^{八九}支提

最勝にして供具多くし、

寶蓮花の上に坐し、

一切金寶種にて

正法及び聖衆

金寶網の^{九〇}繖蓋を

金銀・衆寶花

帝釋青・大青

能く正法の人を説いて、

六和敬等の法を

尊に於て恭敬して聴き、

菩薩必ず行すべし。

天・外道衆に於て

無知に因りて邪信し、

佛の阿含及び論を

亦紙筆墨を恵みて

國に於て學堂を起し、

永基業を建興せよ。

賢巧曆數を解して

老小の病苦を潤して

殿堂并びに寺廟

汝應に敬つて成立すべし。

好色微妙に畫き、

汝、應に佛像を造るべし。

命を以て急事を護り、

奉獻して支提を覆ひ、

珊瑚・琉璃の珠

金剛をもつて支提に貢ぐ。

四事を以て供養す。

常に應に勤めて修行すべし。

勤事して侍護せよ。

亡後亦供養せよ。

親事して禮すべからず。

惡知識に事ふる莫れ。

書寫讀誦して施せ。

汝應に此の福を修すべし。

師を雇ふて學士に供し、

汝の行は長慧となる。

皆な^{九一}田疇を立つるを爲せ。

國に於て濟益あり。

二の法性の隠れたのを如來藏と言ひ、始覺の功積んで其の法性の顯れたのを法身と云ふ。即ち言ふべし、法性顯現せし有爲無爲一切の功德法を以て成就莊嚴する身なるが故に法身と名ける。(織田)。

【八七】四無量。四無量心と同じ。又四等と云ひ、四梵行と云ふ。十二門禪中の四禪である。一に慈無量心、能く樂を興ふる心である。二に悲無量心、能く苦を抜く心である。三に喜無量心、人の離苦得樂を見て慶悅の心を生ずるのである。四に捨無量心、如上の三心之を捨して心に存着しないのである。又怨親平等にして怨を捨て親を捨てるのである。此の四心普く無量の衆生を緣じ、無量の福を引けば無量心と名け、又平等に一切の衆生を利すれば等心と名け、此の四心は四禪定によつて修する所、之を修すれば色界の梵天に生ずるを得れば四梵行と云ふ。

【八八】福慧行。福行。三行の一。五戒十善等の人天の福利を感じる行法である。(三行とは福行、罪行、不動行をいふ。)慧行。不明。福慧二行の法數不明。

【八九】支提(citya)。聖者を記念する塔をいふ。多く舍利

菩提は無量なりと雖も、
福慧の二行を修す。

福慧の二種の行は

菩薩の身心、苦む

惡道飢渴等に

菩薩永く惡を離れ、

欲願怖畏等に

二智無きに依由つて、

苦ある時若し促さば、

苦なき時長遠なれば、

身苦永くあらず、

世間の二苦を悲むが

故に菩提の長き時に

滅惡の爲めに善を生ず。

貪瞋及び無明は

無貪等の惡善は

貪は鬼道を生ずるに由り、

癡に由りて畜生に入る。

惡を捨て及び善を修す。

若し是の解脱の法は

前の四無量に因つて、

云何ぞ得べきこと難き。

是の如く邊際なし。

故に疾く消除を得。

身苦んで惡業生ず。

善を行じて苦生ぜず。

心苦しむは癡より生ず。

菩薩は心苦を離る。

忍び難し。何ぞ況んや多をや。

樂あり。云何ぞ難き。

假りに心苦ありと説くも、

故に恒に生死に住す。

智人は心沈まず。

是の時は間無く修せよ。

願くは汝識つて捨離せよ。

知つて應に恭敬して修すべし。

瞋に由つて地獄に墮つ。

此に翻すれば人天を感ず。

此の法は是れ樂因なり。

智捨二執に由る。

相の法身と別相の法身とあり、
總相の法身は理智の二法を兼
ぬ、金光明の如如と如如智と
を法身と曰ふ義に同じである。
是れ所證の眞如と應照の眞覺
とを以て法身とするのである。

三身を以て言へば自性身と自
學用報身の二身を合せ見たの
である。此の義に依れば、釋
して言ふべし、法身とは理智
顯現して有爲(智)・無爲(理)

一切功德法の體性たり、所依
たれば、法身と名くと。又一
切の功德法を成就莊嚴する故
に法身と言ふべし。

次に別相の法身とは三身中の
自性身にて唯清淨法界の眞如
である。此の眞如は佛の自性
であるから自性身と名け、又

此の眞如に眞常の功德を具し
て一切有爲無爲功德法の所依
となれば亦法身と名くるので
あると。功德法を成就莊嚴す
る故に法身と名くとは言ふべ
し。

此法は唯理の法身にして有爲
の功德即ち智法身を含攝しな
いからである。

若し性宗の義に依れば、眞如
の理性に眞實覺智の相がある
のである。それ故理智不二に
して眞如の無爲と共に眞智亦
無爲である。又性相不二なる
故に眞如にして法性なれば眞
智亦法性である。此の理智不

諸佛^{▲三} 色身の因

況んや佛の^{▲六} 法身の因は。

世間の因は小なりと雖も、

佛の因は既に無量なり。

諸佛有色の身は

大王よ、佛の法身は

故に佛の福慧の行は

故に願くは汝恒に

菩提の福を成ずるに於て行ぜよ。

理及び阿含あり、

十方無邊なるが如くして

諸の衆生を苦しむるあり。

此の無邊の衆生は

苦よりして拔濟さる。

従つて此の堅心を

或は時に小放逸するも

福量は衆生の如く

因果既に相稱ふ。

時節及び衆生

此の^{▲四} 無量に由つて

尙ほ世の無量なるが如し。

而して當に邊際あるべし。

若し果大なれば量り難し。

果量云何ぞ思はん。

皆な福行より起る。

智慧の行に由りて成る。

是菩提の正因なり。

菩提は福慧行を。

汝、沈憂に隨する莫れ。

能く心を安じて信ぜしむ。

空及び地水火

彼、無邊なるも亦爾り。

菩薩の大悲に依り

願くは彼、般涅槃して

行住及び臥覺に發せんことを。

無量の福恒に流れて、

恒に流れて間隙なく、

故に菩提難からず

菩提と福德と

菩薩心行を堅くす。

【七〇】大乗阿含。大乗四阿含

無し。何を指すか。最近中央

亞細亞等に發見された梵語の

阿含を言ふのであらうか。阿

含、A Sanna とは文字通りには

「古聖典」の意で、佛敎のみで

なく、一般外道にも用ひられ

る。梵語では阿含といひ、之

に相當する五部原始聖典(長・

中・增一・相應・雜部)に對し、

巴利語では尼柯耶 Nikaya の

名を付ける。

【七一】緣覺 Pratyekabuddha、

獨覺とも言ふ。外部的の緣に

より覺悟するので、緣覺とい

ふと。

【七二】有學、無學。小乗四果

の聖者中、前の三果を有學と

いひ、第四果を無學といふ。

前三果は尙學修すべき道があ

るからである。

【七三】好。相好の意。

【七四】毫。長くして端の鋭き

毛、細毛。

【七五】白毫の福。眉間白毫相

をいふ。

【七六】露尼沙 unisa、肉髻

を言ふ。前出(看註六七)。

【七七】色身 Rāpakaya 佛三

種身の一、四大五塵等の色法

から成つた身を色身といふ。

【七八】法身 Dharmakaya 佛

の體身である。名を釋するに

性相の二宗其の義を異にする。

先づ相宗は唯識論に依るに總

菩提資糧品第三

「諸佛の大相好は

我今汝の爲めに説かん。

一切縁覺の福、

及び十方世の福、

此の福更に十倍して、

九萬九千毛

此の如き衆多の福、

復た更に百倍増せば、

是の如く是の如く多ければ、

乃至八十に満つれば、

是の如く福徳聚まれば、

合せて更に百倍増せば、

是の如き多くの福徳は

復た更らに百倍増せば、

能く、白毫の福を感じ

此の福感じて見難し。

此の如き無量の福、

一切十方に於て

難思の福より生ず。

大乘阿含に依れば、

有學・無學の福、

福は世の量り難きが如し。

佛の一毛の相を感ず。

一一の福、皆な隨り。

佛の一切毛を生ず。

方に佛の一好を感ず。

一一好は成ずるを得て、

隨つて一大相を飾る。

能く八十好を感ず。

佛の一大相を感ず。

能く三十相を感ず。

毫滿月の如きを感ず。

復た更らに千倍増せば、

頂上の鬘尼沙

方便して有量を説く。

十倍世を説くが如し。

【七】 具四十齒。第六、四十齒具足。Gatvārimśadantāḥ (普通人は三十二)

【八】 眼珠青滑る。瞭暖如牛王。第五、眼色紺青而眼瞳如牛王。Abhinīhanetṛṅgopāksmā 眼が紺青にして暖が牛の如くであること。

【九】 以上の内三十二大人相中こゝに記述されないものがある。第三、額廣平 Samāla-lāṭhā 第八、齒根深 Avīrala-dantāḥ 第十咽中津液得上味 Kusarāśāgratā 臂頭圓相 su-saravṛtāśāndhāḥ 第十七皮膚細滑 Sūkamaṇṣavaruṇeehāvīḥ 廿五、足不足踈 Uccāhā-khāpādāḥ 第廿八、指纖長 Dīghāṅgulīḥ 等である。然し元來、三十二相と八十隨好とは混淆し、且各々の内とも論經によつて甚しい異同がある。

【十】 隨相有八十、隨好(Anuvyañjanāni)は八十を數ぶ。三十二相好中に洩れた身體の莊嚴を含む。

されど、相好隨好共に、實際的には身體としては異形、奇異と思はるものも多し。

【十一】 相好隨好は佛、轉輪王、佛弟子、菩薩にも亦有り。然し、佛には最も明瞭、深くして他のは之に遙かに劣ると考へられる。

好、師子の如く、

他を尊んで輕んぜず、

齒白く齊ふして必ず勝る。

數々此の言を習ふに由つて、

故に四十齒を具す。

衆生を瞻視するに由つて、

眼珠青くして滑了、

此に略説するが如きに由つて

轉輪王・菩薩は

隨相は八十あり、

大王よ、我説かず。

諸の轉輪王

淨明及び愛すべきは、

菩薩善心の

輪王の相好の因は

一人、萬億劫に

佛の一毛の相に於て

諸佛と輪王と

譬へば螢と日との如し。

而門方に愛す可きを得る。

隨順して正理を行ふに由つて

譬へば眞珠の行するが如し。

謂く實に兩舌せず。

平滑にして堅く遺淨なり。」

滑かにして貪瞋癡なし。

臉暖牛王の如し。

大人相及び因あり、

美飾さる。汝當に知るべし。

慈悲より流生す。

多くの文辨を避けんが爲なり。

同じく此の相好ありと雖も、

終に如來に速ばす。

一念中より一分あり。

尙ほ此れに等しき能はず。」

善根を修して生長す。

此の因も亦た感ぜず。

相中の一分等し。

光に於て微かなるも似るあり。

言ふに至つたのか。(高楠博士説)。

【三】一孔一毛。二十一、身毛上生青色柔軟、*Ekakho-ro-ma-pradakṣiṇāvartak*。一毛根より毛髮が右旋して生ずること。

【四】白毫端嚴面。四、眉間白毫 *Uṇṇakosā*。眉間に白き毛があること。こゝより御光を發するといふ。

【五】上身如師子。十九、上身如獅子、*Sīmhapūrvardha-kāyāḥ*。

【六】頸圓喻甘浮。不明。【七】腋下滿。第十六兩腋滿相、*oṭṭanturāṅgaḥ*。腋下が圓になつて居らむこと。

【八】頂骨髀尼沙。第一頂上肉髻 *ḍeṇḍasiṇe-kuṭṭa*。頂上に肉塊のもとどり(鶏のとさかの如きものか)があること。

【九】橫豎頤壓。第二〇、身縱廣等如薺草答樹 *Nyagere-ḍḍaparimandalaḥ*。身がニヤクローダ樹の如くであること。

【一〇】八相梵音。十三、聲如梵王 *Brahma-svareḥ*。聲が梵天の如くであること。

【一一】舌根脩廣。第十二、舌覆而至髮際 *prabhūtaḥjīhvāḥ*。舌の長いこと。

【一二】齒白齊必勝。第七、齒齊密 *Sannadantāḥ*。第九、齒白淨 *Suśakṣadantāḥ*。

長く棄背せず。

恭敬施受

故に六〇鹿王の驛

他、自らに求むるに物あれば、

此に由つて、臂膺大にして、

親愛若くは別離、

此れ六一陰藏相を感ず。

常に樓殿の具を施す。

故に天の色身を感じ、

施無上を護り、

六一一孔一毛、

常に善愛の語を説き、

上身は師子の如く、

看病、醫藥を給し、

故に六二腋下の満を得、

自他の法事に於て

頂骨ウシユニヤ髻ニシヤニシヤ

長時の巧説

八相梵音

已に事實の利を知り、

本受持する所の法に由る。

明處及び工巧なるに由つての

及び聰明大智を得。

我疾く能く惠施す。

世の化主となるを得る。

菩薩、和集せしむ。

恒に慚羞の衣を服し、

細軟愛すべきの色あり、

潤滑の光微妙にして

理の如く尊長に順ぜしに由る。

六三白毫端殿の面を感ず。

又能く正教に順ず。

頸圓かにして甘浮に喩ふ。

或ひは他をして養護せしむ。

千脈、百味を別ち、

常に能く端首を爲す。

横堅頬ヒキクワ窟クワ瞿クワ

實美滑善の言に由つて

及び六四舌根脩廣を得。

數々他の爲めに説く。

のかゝとの圓好なること。

【五〇】足安平。第三十、足下安平、Suprati sthitapada。遍平足であること。

【五一】指網密。第二十七の手足纒網 Jalavanaddhahasthi-pada。手足の指間に水禽の水掻きの如き薄膜のあるのを言ふ。之は佛像彫刻に際し、指間は折れ易き故、その間に少しく石材等を殘せしより、相好に數へられるに至つたか。

(高楠博士説)。

【五二】手足八十文、脚踏高。八十文はなし。第三十一、足踏高隆 Ayatapadapamsuṭh。

足の甲の高きこと。所謂「甲高」。

【五三】旋毛端向上。第二十二、毛上靡、Urdhyvngaromah。

第二、頭髮右旋 pradaksina-vartakesah。

【五四】鹿王躄。第三十二、腦如鹿王、Ameya-janggha。

「うれが鹿の如くであること。

【五六】臂膺大。正しく當る相好なし。十八、正立不屈二手過膝、Sahitana yanai-pra-

Imba-dānta に當るか。

【五七】陰藏相。二十三陰藏如馬王、Kosagotavastiguhya-

。男根が馬又は象の如く腹中に藏されてゐるのをいふ。

之は希臘彫刻にて男根の前に薄物をままとふてゐることから

譬へば糞に穢れし汚身

是の人若し彼に至らば、

譬へば夏月の大雲に

故に汝惡法を捨てよ、

自他の爲め俱に

是の菩提の根本

十方際悲と

大王、汝諦しんじやくに聽け。

三十二相を感じて

支提の聖尊人を

手足の寶相輪

手足滑かに柔軟にして、

美飲食を他に於て施して

身圓滿にして端直

汝、當に長壽を感すべし。

大王堅く法を持し、

此に由つて 足安平なり。

布施愛語を行すれば、

此に由つて 指網密に

脚趺高くして愛すべし。

毒惡を流出する蛇の如し。

衆生は安樂を得。

田夫、雨を欲するを見る。

決心し、善行を修し、

無上菩提の果を得よ。

心堅くして 山王やまのおうの如し。

及び無二依智に因る。

此れ我に因つて今説く。

能く汝の身を莊嚴せよ。

供養して恒に親侍せよ。

當さに轉輪王と成るべし。

身大七處高きは、

等しく豐足ならしむに由る。

指足眼長にして

悲に由つて死囚を濟ふ。

清淨にして久しく住せしむ。

當に菩薩を成ずるを得べし。

利行及び同利

手足八十文

毛端旋りて上に向ひ、

【三八】 山王。須彌山 Sumera

又は雪山 Himalaya と言ふ。

【三九】 三十二相。大丈夫の三

十二相 Dvātrīṃśat mahāpu-

ruṣalakāṇa 等。轉輪王

Caakra-purvartharajan 又は轉

法輪王 Dharmacakra pra-

vartin rājan の所持する身體

上の特相である。以下阿毘達

磨俱舍論によりて註釋す。本

文三十二相の個々の、その由

つて來る功德善根を記す。

【四〇】 支提 (Caitya)。聖者等

の死後建てたる記念碑をいふ。

その中に舍利 (遺骨)、灰等を

藏す。

【五一】 手足寶相輪。普通二十

九、手足具千幅輪 (Caakra vi-

kiṅkaṣṭapadānīya) 手足の

掌に輻輪 (車輪のやはず) の印

あるを言ふ。

此の身穢種滿つ。

若し汝不淨を憎まば、

香華鬘飲食

汝、併せて憎悪する如く、

云何ぞ汝厭はざる。

女身の不淨なるが如し。

是の故に欲を離るゝ人は

九門、不淨を流し、

若し不淨を知らずして

希有にして極めて無知。

最も不淨なる身に於て

多くの衆生は此に因り、

塵欲の爲怨を結び、

瘞を搔きて樂と謂ふが如し。

此の如き欲樂あり。

若し汝此の義を思はば、

思欲輕きに由つての故に

獵るに從つて短壽を感じ、

未來決して此を受く。

何人か若し他見すれば、

云何ぞ汝厭はざる。

云何ぞ身を惡まざる。

本は淨にして能く汚る。

自他に於て糞穢あり。

自他不淨の身なり。

自身の穢るゝも亦然り。

内外に於て相稱ふ。

自證して自ら流濯す。

愛欲の論を遣らば、

無慚にして及び他を輕するなり。

何方にか汝を利益せん。

無明、其心を覆ひ、

狗の鬪つて糞を争ふが如し。

瘞せずんば最も安樂なり。

無欲の人は最も樂し。

離欲成するを得ず。

姪逸の過に遭はず。

苦を怖れ重ねて逼惱す。

故に堅く悲を行ふべし。

彼に極驚怖を生ぜん。

【四五】 九門。九有情居を言ふ。當らず。九孔の意であらう。

兩眼、兩耳、兩鼻及び口、大小便の九處を言ふ。又九入、九漏、九滲とも言ふ。

【四六】 愛欲の論、ヴァイツヤーナナ Vatsyayana の愛經 Kama-sūtra を言ふか。愛經は愛慾に關する市民の凡ての心得(夫妻、青年、戀人の心得、性交等)について記述する。元來印度では人生の目的を愛慾・射(經濟)、法(政治・宗教) Kanarhadharma の三に分つ。その一分科として愛は重大な地位を占む。

【四七】 瘞。かゆきこと。かゆきを搔いて氣持がいと言ふより、かゆき病にかゝらぬ方がいゝの意。

中に於て若し愛を生ぜば、

譬へば尿尿器の如く

身の不淨門に於て

此の門の生ずる所以は

癡人は邪愛に著して

汝自から一分を見る。

此の聚を説いて身と名く。

四二 赤白、生種と爲り、

如し身の不淨を知らば、

穢聚は憎惡すべく、

若し能く中に處つて臥せば、

愛すべき如くして憎む可きは

女身は皆不淨なり。

設へば糞聚が好色にして

愛を起せば則ち應ぜず。

内は臭にして極めて不淨なるも

是れ死屍の種性にして、

皮は不淨にして衣の如く、

云何ぞ穢聚の皮を。

瓶を畫いて糞穢を満し、

何に縁つて離欲を得ん。

猪は好んで中に在つて戯る。

多欲にして戯るも亦爾り。

身土の穢を棄るが爲なり。

己の善利を願みず。

尿尿等の不淨、

云何ぞ汝愛を生ずる。

四三 鬪汁、汝養する所、

何の意ぞ苦に愛を生ずる。

臭は皮の纏裹を濕す。

則ち女身を愛著するなり。

衰老及び童女なり。

汝何れの處にか欲を生ずる。

軟滑の相は端正なるも、

女身を愛するも亦爾り。

外皮の覆藏する所なり。

云何ぞ見て知らざる。

暫くも 解洗すべからず。

四四 摧く可き時に汰淨す。

外飾するも汝の憎むが若し。

【四二】 男性の精蟲、女性の卵子を言ふか。
【四三】 汝、汝と通ず、さらふ、そよぐ。

【四四】 解洗。洗、衣の垢を洗ふ、すよぐ。

善く人を説くは得難く、

第三人最勝にして

薬は味苦しと雖も、

壽は病王の位になし。

次に厭怖の想を生じて、

決定して死すべきを見、

智人は現樂を爲す。

一念怖れなきを見。

若し一念心安ければ、

酒は他に輕ぜらるるに遭ふに由つて、

癡となり非事を行ふに由るが故に

圍碁等の嬉戲は

誑妄惡口の因を生ず

淫逸過失の生ずるは、

尋ねて女身の中を思へば、

女の口は涎唾の器

鼻臭は涕流に由る。

腹は屎尿の腸器、

癡人の迷なり。

根門は最も臭穢にして

善言を聽くも亦難し。

能く疾かに善教を行ふ。

差を樂んで強服すべきが如し。

恒に應に無常を思ふべし。

後専ら心に法を行す。

死して惡見の苦に従ふ。

故に應に罪を作すべからず。

若しくは後時の畏を見る。

云何ぞ後に畏れざる。

事を損じて、身力を減ず。

智人は酒を斷つ。

貪瞋憂詔。

故に應に恒に遠離すべし。

女身の淨を想ふに由る。

實に一毫の淨なし。

齒舌は垢臭に穢れ、

目淚種類の處

餘身は骨肉の聚、

故に此の身を貪著するを厭ふ可し。

是れ厭惡身の因なり。

【七】 差。瘴ゆ、病除く意。

【八】 飲酒戒を記す。十戒中の第五、Sura-mereya-mojja-pamukkuḍḍhāna veramaṇi sikkhā-padam (各種の酒に弱くも中位のも強くのもを禁ずる戒處)。Khandakā-nikāya 2 列五、二六右、張二、(八右)

【九】 十戒中第五、maoca-gita-vādita-visukhadassana veramaṇi sikkhāpadam (舞踏・唱歌・音楽・觀樂を禁ずる戒處)に當るか。當時の印度にては將棋に類したものはあつたかも知れぬが、所謂圍碁があつたか、不明。【一〇】 不淫戒 Abrahmacariya S. (不梵行を禁ずる戒處)に當る。以下不淨觀に類す。

【一一】 生殖器(陰門)を言ふ。

若し人専ら他を誑かば、

此に因つて萬生に於て、

若し怨憂せしめんと欲せば、

己れの利は此に由つて圓かなり。

施及び愛語を約し。

願くは汝世間を攝して、

王若し一實語ならば、

此の妄語を尊ぶが如きは、

實意起つて違ふなくんば、

是を説いて實語と名く。

一財を捨て若し明かならば、

此の如く主は三五賄を三六愒めば、

若し王、諸惡を靜むれば、

此に因つて明王を教ふるが故に

智王は動じ難きに由つて、

永く欺誑に遭はず。

諦に依りて靜智を捨つれば、

四徳の正法の如きは、

能く伏して清淨を説く。

恒に智人と共に集り、

云何ぞ正事を説かん。」

恒に他の欺誑に遭ふ。

失を捨て、其徳を取れ。

即ち怨をして憂惱せしむ。

利行と同利と

此に因りて正法を弘めよ。」

生民堅く信するが如し。

他に安信を起さず。

流れて能く他を利する靡し。

此に翻するを妄言となす。

能く王失を隠す如し。」

能く王の衆徳を害す。」

徳深く、人は愛重す。」

事に應じて寂靜なり。」

自了してして他を信ぜず、

故に決して應に智を修すべし。」

王は則ち四善を具す。

人天の讚歎する所なり。」

智悲無垢なるに由る。」

王法智生長す。」

【三】賄。財貨の總稱、たから。

【三】四徳。大乘の大般若涅槃所具の徳である。一に常徳、涅槃の體は恒に不變にして生滅なし、之を名けて常と爲し、又隨緣化用常に絶えないのを常と名ける。二に樂徳、涅槃の體は寂滅にして永く安する之を名けて樂と爲し、又運命自在にして所爲心に適ふ、之を名けて樂と爲す。三に我徳、我を解するに二種あり。一は體に就き自實を我と名く。こは用に就き自在なるを我と名ける。四に淨徳、涅槃の體一切の垢染を解脱するを名けて淨となし、又化に隨ひ縁に處して汚れざるを名けて淨と爲す。常樂我淨を説くは涅槃經一部の所詮とす。故に涅槃經を踐常教と云ふ。

謗を起し、自身を壞す。

譬へば勝れし飲食の如し。

若し理の如く量食すれば、

若し偏へに正法を解すれば、

若し能く理の如く、

智人は正法に於て

正智に於て起用するが故に

此法を了せざるに由つて、

此に因つて三業を造り、

乃至未だ法を證せず、

恒に敬つて正勤を起し、

作事の法を先きとなす。

謂く虚なき眞理

法に因つて好名を現し、

唯法は是れ正治なり。

若し主となりて民の愛を感じば、

若し非法に治化されれば、

世間憎惡するに由つて、

王法、他を欺誑すれば、

惡智邪命論は

首を下にして地獄に墮つ。

偏に用ふれば危害に遭ふ。

壽力強く樂むを得。

若し遭ふも亦此の如し。

感樂菩提を解すれば、

謗及び邪執を捨て、

意の如く事を成す。

人起つて我見を長ず。

次に善惡の道を生ず。

能く我見を除滅す。

戒・施・忍等に於て

及び法を中後となす。

現じ來つて汝沈まず、

樂んで死に臨んで怖なし。

法に因つて天下愛す。

現に來りて誑かれず。

主は臣に遭ふて厭惡さる。

現に來つて歡喜せず。

是れ大なる難惡道なり。

云何ぞ説いて正と爲さん。

【三】 諸種の波羅蜜（證覺の爲の佛教徳目）、戒、施、忍、精進、慈悲、智慧、禪定等を言ふ。

【四】 この前後に王者としての政治の心得を佛教の立場より教ふ。

世を説くこと幻化の如し。

譬へば^三幻化の像の如し。

此の像及び生滅

世間は幻化の如し。

世間及び生滅は

約像從來するなし。

但、衆生心に迷ひ、

世體、三世に過ぐ。

誰か言つて有無を説かん。

故に佛四句に約して

有無に由つて皆虚なり。

是の身は不淨相にして

恒に數數見る所、

況んや正法は微細なるをや。

散心を證し難し。

故に佛初めて成道して、

此の正法を見るに由つて、

若し法、正了さるるに非らざれば、

此を執する如くならざる故に、

人の識法は明かたらず、

是れ佛の^{三〇}甘露の教なり。

生滅は尙ほ見るべし。

^{三一}實義、檢して有に非らず。

生滅見るべき^の兩。

實義に約して皆虚なり。

去も亦無有處なり。

實有に由つて住せず。

若し^よ兩らば世何ぞ實ならん。

有無は實に義なし。

世間を記説せず。

此の虚は虚ならざる故に、

龜にして智境界を證す。

尙心の住に入らず。

甚深にして依底なし。

云何ぞ易く入るべき。

説を捨て、涅槃せんと欲す。

甚深の故に解し難し。

即ち害、人を聴くせず。

邪見の穢坑に墮す。

自らの高輕の法に由り、

【三〇】甘露。梵語 *amrita*、不死の意味である。

【三一】幻化。まぼろし。

【三二】實義。眞實の義理である。

四大は我が虚の如し。

雜品第二

分分、蕉を拆くが如く

六界に約して人を拆せば、

是の故に佛正説す。

但六界を法と名く。

我^ニ無我の二義

是の故に如來は

見聞覺知言は

二相待ち成するの故に

實の如く世間を檢するに、

則ち世間は實に依るが

若し法遍く如らずんば、

有邊及び無邊、

過去の佛は無量にして

過數の衆生の邊

世間は長因無く、

世間は有無を過ぐ。

法に由つて此の如く深し。

六界は人法に非らず。

餘盡なく有らず。

盡く空なること亦是の如し。

一切法は無我なりと。

決判すれば實に無我なり。

實の如しにて檢して得ず。

我・無我の一邊を遮す。

佛、無實虚と説く。

此二實の如くにてなし。

實に過ぎ、亦た虚に過ぐ。

故に有無に墮す。

云何ぞ佛は説くを得ん。

有二と無二と

現來は算數に過ぐ。

三世は佛に由つて顯はる。

此の際世に約して顯はる。

云何ぞ佛記邊なる。

凡てに於て祕して説かず。

【二九】無我。梵語 Anātman、又は非我と云ふ、常一の體にて主宰の用ある者を我と爲す。人身に於て之があると執するのを人我と云ひ、法に於て之があると執するのを法我と云ひ、自己に於て之があると執するのを自我と云ひ、他に於て之があると執するのを他我と云ふ。然るに人身は五蘊の假和合である。常一の我體があるのではない。法は總べて因縁生である。亦常一の我體があるのではない。既に人我なく法我がないので、自我他我的ないの言ふを待たない。此の如くに畢竟して我があることがない。之が究竟の眞理であるとするのが佛教の立場である。

各成じて偏多なし。

色・聲・香・味・觸は

眼色と識と無明と

作者の業及び事は

短長及び名想

地水風火等

善惡、識智を言ひ

識處形なきが如く、

此の内地等の大は

此に於て無相の智・

名色及び諸陰

此の如き等、識に於て

識に於て若し智を起さば、

是の如き等の世法は

實量の火光に依りて

癡別の有無に由つて

有を尋ねて既に得ずんば、

無色によりて成ずる所の

大を離れて何を色と爲さん。

受想行及び識は

故に相と假に名けて説く。

簡擇すれば義、大の如し。

業生と擇んで亦爾り。

數々因果の世に合す。

非想擇んで亦然り。

長短及び小大

智中の滅も餘りなし。

無邊にして一切に遍し。

一切皆な滅盡す。

短長の善惡業

此くの如く滅して餘りなし。

無明の先有に由る。

此等は後に皆な盡く。

是れ然ゆる識の火薪なり。

世の識の薪は焼き盡す。

後眞如を簡擇す。

云何ぞ得べきなからむ。

故に空は但だ名字のみ。

故に色亦唯名のみ。

應に思ふべし、四大の如し。

のではない(成實論)、依つて稱して大と言ふのである。或は之を二種に分ち、正報の人身を内の四大と稱し、或ひは有識の四大と稱する。依報の諸色を外の四大と言ひ、或ひは無識の四大と言ふ。(織田)大は要素の意。

【三三】六界。六大のこと。地水火風空識の六法を言ふ。此の六法は各分齊があるので、界と名ける。

【三六】普通三大とは大乘起信論の體大、相大、用大を言ふも、この三大とは水風火を言ふらし。

【三七】動。風大の自性なり。四大所造の物質をして相續して此より彼に至らしむるをいふ。

礙。止む、妨ぐ、阻つ、さへざる。

【三〇】五蘊をいふ。前出。

若し合離して人に非ずんば、

六界、人に非ざる如し。

一一の界も同然にして

陰は我我所にあらず。

薪火雜はる如きにあらず。

地界は 三大に非らず。

三中亦地なし。

地水火風の大も

一は三を離れて成ぜず。

一三及び三一

各々自ら成ぜず。

若し各々自らを離れて成ず。

動礙及び相聚

若し火は自ら成ぜずんば、

三大の縁にて義を生ず。

若し彼各々自ら成ぜば、

若し各々自ら成ぜずんば、

若し相離れずと言はば、

雜はらずんば則ち共にせず。

云何ぞ人、有に執せん。

聚の故に虚にして實に非ず。

聚に由るが故に實なるに非らず。

陰を離れて我顯はれず。

何ぞ陰によりて我を成ぜん。

地中も亦三大なし。

相離れて互に成ぜず。

各々自性成ぜず。

三は一を離れて亦た然り。

相離れて若し成ぜずんば、

彼れ相離るゝは云何ぞ。

薪を離れて何ぞ火無けん。

水風地も亦た然り。

三云何ぞ各立たん。

相違云何ぞ成ぜん。

云何ぞ更に互に有らん。

云何ぞ互に有を成ぜん。

諸大各々自ら成じ、

若し雜はらば獨り成するに非ず。

の二説を排する。

【三四】四大。地水火風の四で

ある。俱舍論によれば假實の

二種がある。實の四を四界又

は四大界と稱し、假の四を單

に四大と云ふ。實の四大とは

一に地大で、堅を性とし、物

を支持する。二に水大で、濕

を性とし、物を收攝す。三に

火大で、煖を性として物を調

熟す。四に風大で動を性とし、

物を生長す。此の四を以て一

切の色法を造作するので能造

の四大といふ。其の四大の體

は觸處所攝にして唯身根所得

である。身根諸色と觸れて堅

澁燒動を覺知するのである。

假の四大とは世間の稱する所

の地水火風である。此の四大

は其の實地水火風及び色聲香

味觸の九法の假和合であるが、

其の中最も堅性の増盛なるを

地と名け、乃至動性の最も増

前中後の三際は

一念の分に非ざる故に。

一多を離れて云何ぞ。

滅及び^三對治に由つて

此の無及び對治は

是の故に世の涅槃は

世間、後際あり、

是の尊は一切智なる

此の甚深の法に由つて、

此の如く解脱の法は

諸佛は一切智なる

無依著の法に於て

世人、依著を受け、

彼、自ら失して他を壞す。

王よ、願くは汝、動かす、

汝の爲めに成じて壞たす。

倒合なきに依つて、

此れ福非福を過ぐ。

身見空を怖るゝにあらす。

四大及び空識は

自他に由つて成らす、

若し無ならば、分何ぞ有ならん。

有を離れて何の法か無からん。

若し有は無を成ずと言はば、

何の法かあらん。無なる故に。

義に由つて有を成ぜず。

他佛に問へば默然たり。

故に智人は佛を識る。

非器處を説かず。

甚深にして繫攝なし。

故に無依底を説く。

有無二邊を過ぐ。

癡に由つて失を驚怖す。

怖畏して依處なし。

彼れに由つて自ら壞する莫れ。

我當さに眞理を説くべし。

有無の二執を離る。

甚深にして義明了なり。

二人の境當に説くべし。

一に聚つて俱に人に非らす。

經量部等は主張するのである。又三世といふ認識には對象がなければならぬが、想像・記憶・推定も對象となし得るとする。(施設足論、俱舍論二十卷)

【一〇】 説一切有部にては現象には生・住・異・滅の一切の働きがあり、一切法が變遷する。之を四相と言ふ。妙香論師の如きは三世の區別を相 (catvāriyaṅga) とした。即ち三世相があり、その現れ方により、過去現在未來が生ずるとする。

【一一】 刹那 (kṣana) 譯、一念。時の最小なるもの。刹那生滅とは一刹那の短時間の中に生滅を有するをいふ。凡ての法 (現象) は刹那に生じ、刹那に滅する。轉轉相續するのを言ふ。(成實論の説)。

刹那三世、刹那を相待望して三世を立て、現在の刹那、後の刹那を未來とするのである。刹那無常とは刹那の間に生住異滅の四相を具して轉變無常なのを言ふ。一期無常に對する。

【一二】 對治。煩惱を斷ずることを言ふ。之に四種ある。詳しくは前出。

【一三】 有無二邊。前出。この世は存在するとの見解と存在せぬとの見解。佛故に共にこ

此の如く無を破するが故に。

無言行及び心は

若し彼れ無に墮すと説かば、

僧法・鞞世師

世に約す。汝彼に問へ。

是れ法と言ふべからず。

汝應に知るべし。甚深なる

曉に去來なきが如し。

若し體、三世を過ぐれば、

二世、去來なし。

世の生及び住滅に住せず。

若し恒に變異あらば、

若し念念滅するなくんば、

若し念々滅すと言はど、

等しく見を證せざる故に、

若し念滅して皆な盡くれば、

若し堅く念滅するなくんば、

刹那後際の如し。

刹那三分に由るが

是の一念は三際にして

云何ぞ有に墮さざる。

由つて菩提に依るが故に。

何に依りて有に墮さざる。

尼隄は人に陰を説き、

若し有無を過ぐると説かば、

有無を過ぐるを以ての故に。

佛の正教は甘露にして、

亦一念の住するなし。

何れの世にか實有と爲さん。

現在、實ならば、

此は言云何ぞ實なりと言はん。

何の法か念滅せざる。

云何ぞ變異あらむ。

分に具し分に滅する故に。

此の二は道理なし。

云何ぞ故物あらむ。

故物云何ぞ成ぜん。

前・中際亦たあり。

故に世の念は無住なり。

應に際を擇んで念の如くすべし。

【七】僧法(Saṅkhyā)。印度

六派哲學の一、詳しくは前出。

鞞世師(Viśeṣika)。印度六

派哲學の一、詳しくは前出。

【八】尼隄(Nirgrantha)。六

大外道の一、離繫、無結等と

譯す。三界の繫縛を離るる意

である。外道出家の總名であ

るが、特に耆那教の總名を言

ふ。この外道は殊に裸形塗灰

等離繫の苦行を修すれば、總

名を取つて別名とする。開祖

は佛と同時代の耆那 Jaina だ

である。母の名を若提 Jatic(親

友)と名ける。その子である

の P. 尼乾陀耆提子 Nirgr-

anthaṅkīputra と云ふ。そ

の教徒を尼乾陀非阻羅 Nirgr-

anthaṅkīputra と云ふ。

【九】大衆部系の過未無體論

現在一刹那を豫想してゐるか

説一切有部系の三世實有の思

想を批難し、三世は實有でな

く、佛のいふ三世實有は一切

の意味で、眞の實在は現在一

刹那と無爲法のみである。有

部の言ふ如く法體恒有なら、

三世に渡つて作用を起すべき

であり、有部が現在に因縁が

あつて作用を起すといふなら

過去未來にも因縁がある筈で

あり、有部の言ふ如く一作用

を起すに他の作用を要するな

ら、無窮となり、説が成り立

たないとして、過未無體論を

光明生ぜざる故に、

是の如く因果生ず。

已に世の眞實は、

見滅虚に非らざる故に、

是の故に有を執せず、

色は是れ遠く見る所、

鹿の渴、若し實ならば、

若し遠ければ實知に於て、

證實ならば則ち見えす。

鹿の渴は水に似る如し。

此の陰、人に似る如し。

鹿の渴を計つて水となし、

若し無執を水と爲せば、

世間は鹿の渴の如し。

此即ち是れ無明なり。

執して惡趣に墮するなし。

若し能く如實を知らば、

有無の執を樂まず、

若し無執に墮せば、

若し破有に由ると言はゞ、

燈も亦實有にあらす。

若し見、無を執せざれば、

亂心に由つて生ずる所を信ず。

即ち眞如を證得す。

二解脱によらず。

若し近けば最も分明なり。

云何ぞ近いて見ざる。

即ち世間有を見る。

無相は鹿の渴の如し。

水に非らず、實物に非らず。

人に非らず、實法に非らず。

彼に往いて此を飲むが若し。

此の如き人は愚癡なり。

若し實有無に執せば、

癡の故に解脱なし。

有を執して善道に生れ、

二ならずして解脱に依る。

眞實の義を擇ぶに由る。

何ぞ有に墮するを説かざる。

義至るが故に無に墮す。

變の空眞如を實相とし、華嚴の終教已上天台の別教已上に在りては不變隨緣の二相を實相とす。而して華嚴は隨緣の萬法を實相とし、天台眞言は性具の諸法を實相とし、小乘は我空の涅槃を、大乘は我法二空の涅槃を實相とす。(織田)この論にてかゝる實大乘の實相思想を含んではゐないらしい。

【二】假名。二釋ある。一は名に就て釋す。諸法はもと名がない。人爲を以て假に名を付ける丈である。故に一切の名は虛假不實にして實體に契はないこと、貧窮の人に富貴の名を與へる如きを言ふ。二に法に就て釋する。諸法は因緣和合に成り、眞實の體がなければ、以て自ら差別すべからず、名を假りて僅かに差別の諸法がある。名を離れては差別の諸法がない。故に諸法を指して假名とする。(織田)假名有。三有の一。色香味觸の四事の因緣の和合するのを假りに名けて酪となすが如くである。是れ酪は其の實色香味觸にして、酪の自體がないけれども、假名の故に酪あれば假名有と名ける。色香味觸の一一に就くも亦然り。

無智に由つて怖を生ず。

涅槃處此無し。

所説の如く實空なり、

解脫に我陰なし。

我及び諸陰を捨つ。

無は尙ほ涅槃に非らず。

有無、淨を執して盡くれば、

若し略して邪見を説かば、

此れ今福滿るに非らず。

若し略して正見を説かば、

能く福德をして滿たしむれば、

智に由つて有無は寂し、

故に善惡の道を離るを、

若し生を見て因あらば、

見滅共因に由つて

先きの俱生の二因

假名依る無き故に、

若し此の有、彼の有は

此の生に由つて彼生ず。

先を長とし、後を短と爲す。

無に於て怖畏する處、

汝云何ぞ怖を生ぜん。

云何ぞ汝をして怖れしむる。

汝若し此の法を受くれば、

汝云何ぞ樂しまさる。

何ぞ況んや是れ有なるべき。

佛説いて涅槃と名く。

謂く因果を撥はらひ無くすなり。

惡道の因最も重し。

謂く因果あるを信ず。

善道の因最上なり。

福・非福を超度す。

佛説いて解脫と名く。

智人は無の執を捨て、

是の故に有の執を捨つ。

實義は則ち因に非らず。

及び非實を生ずるが故に。

譬へば長及び短の如し。

譬へば燈と光との如し。

然らずんば非性の故に。」

【一〇】陰。色聲等の有爲法を言ふ。此に就いて諸師に異釋がある。天台は陰に二義、一は陰は蔭覆の義、色聲等の有爲法は眞理を蔭覆するを云ふ。二は積聚の義。色聲等の有爲法は生死の苦果を積聚するを言ふ。

【一〇】實相。實とは虛妄にあらざる義で、相とは無相である。是は萬有の本體を指稱した語である。法性と云ふも眞如と云ふも實相と云ふも、其の體は同一である。萬法の體性となる義に就いては法性と云ひ、其の體眞實にして常住なる義に就ては眞如と云ひ、此の眞實にして常住なるが萬法の實の相なる義に就て實相と云ふ。其の他の一實、一如、一相、無相、法身、法證、法位、涅槃、無爲、眞諦、眞性、眞空、實性、實體、眞諦、實際と云ふ、皆是れ實相の異名である。又名隨徳用の三諦に依れば、空諦を眞如と云ひ、假諦を實相と云ひ、中諦を法界と云ふ。此の中法華は實相を説き、華嚴には眞如又は無爲を説き、般若には般若佛母を説き、楞伽には如來藏を説き、涅槃には佛性を説き、阿含には涅槃を説く。而して華嚴の始教、天台の通教已下に在りては不

若し種子實ならずんば、

若し陰を見て實ならずんば、

我見、滅盡するに由つて、

人の淨鏡に依るが如し。

此影は但だ見るべく、

我見亦是の如し、

實に捨すれば有るに非ざる如し。

人、鏡を執らざれば、

此の如く折陰の若く

因つて是の如き義を聞き、

即ち淨法眼を得て、

陰執乃至在らば、

我見あるに由る故に、

生死輪の三節

譬へば旋る火輪の如し。

自他及び二に従つて

此の我見滅するを證す。

此の如く因果の

故に、實有を執せず、

愚人此の法を聞きて、

芽等は云何ぞ眞ならん。

我見は則ち生ぜず。

諸陰更に起らず。

自らの面影を見るを得る。

一向に眞實ならず。

陰に依つて顯現を得る。

猶ほ鏡の面影の如し。

自らの面影を見ず。

我見は即ちあらず。

大淨命阿難は

恒に他の爲めに此を説く。

我見亦恒に存す。

業及び有は恒に有り。

初中後轉する無し。

生起は互に相由る。

三世有らざる故に、

次の業報も亦然り。

生起及び滅盡を見る。

世間有及び無は

能く一切苦を盡す。

【二】 説一切有部の三世實有、法體恒有思想を豫想してゐるのであらうか。三世實有の思想は現象界を構成する色々の要素を規定する關係は過去現在未來に存在し、その法體(要素)それ自身は異り滅するものでないとするので、物質不滅を精神界に及した主張である。有部では萬有を分けて五とし、色(物)、心、心所、(心の作用)、心不相應(心の狀態)、無爲で(世々の分類)、この五位の下に色々の現象の要素を攝し、萬有の整理をなし、五位のものは純く存在し、滅するものでなく、唯同時に存在せず縱に存在するのである。

法の變化は要するに未來から現在に現れるので、現れる事々に變化があるのである。未來に五位七十五法があり、現れるのを待ち、現れば一瞬間にして過去となる。現れた凡ては過去に存在するのであるとする。然し、この論に言ふ實有は有部のそれではなく、我見を立てる外道の夫であるかも知れない。

【三】 實有。虛妄にあらずして事實にありといふ義。凡夫は一切諸法の因縁生じて其の實性なきを知らず、之を實有と執するのである。

此の報は人道にあり、殺生等の罪法は

無貪等及び業

惡修及び諸苦は

諸の善道は安樂なり。

常に一切の惡を離れ、

身口意の業に由る。

一法の能く脱するに由り、

第二法能く感ず。

定めて。梵は空に住するに由り、

是の如く略して名を説く。

復た次に解脱の法は

耳心無き凡夫は

我當に生ぜざるべきなし。

凡人、此の畏を思ひ、

世間我見生じ、

佛は道證に至るに由つて

我有及び我所、

如實の理を見るに由つて、

諸陰より我執生じ、

先に已に惡趣を受けたり。

所説の果報の如し。

説いて善習の因と名づく。

皆な邪法より生ず。

皆善法に因つて起る。

恒に一切の善を行じ、

應に知るべし、此の二法

地獄等の四趣

人天王は富み樂み、

梵と等しき樂を受くるを得。

樂因及び樂果なり。

微細にして深く見難し。

聞けば則ち驚怖を生ず。

現來の我れは無き所。

智者は怖、永く盡く。

他事、所繫を執す。

悲に依りて他の爲めに説く。

此の二は實にして皆虚なり。

二執更に生ぜず。

我は義に由つて虚を執す。」

【九】 人天を除いた四趣即ち地獄・餓鬼・畜生・修羅を言ふ。
【一〇】 梵天 Brahma-deva を言ふ。佛教にいふ梵天は外道の夫と少しく異なる。梵天は色界の初禪天である。この天は欲界の淫欲を離れ、寂靜清淨なので梵天といふ。此の中に三天がある。第一を梵業天 Brahma-kayika 第二を梵輔天 Brahmapurohita 第三を大梵天 Maha-Brahman と云ふ。但し常に梵天と言ふのは大梵天を指すのである。名を尸棄と言ひ、深く正法を信し、佛の出世毎に必ず最初に來り、轉法輪を乞ひ、又常に佛の右邊に在つて手に白佛を持つ。
【一一】 已が身に一の主宰あつて常住せるもの。外道は多く我を認定し、佛教は之の存在を否定す。
我所。我所有の略、自身を我とし、自身外の萬物を我が所有といふ。有我の情には自身外の事物を皆我が所有となすからである。
以下我、我所を破してゐる。多分に阿毘達磨論的傾向あり。

惡罵は應に語るべからず。

此の法を 十惡と名づく。

酒を離るれば清淨命にして、

供養して敬ふべき所、

若し但だ苦行を行すれば、

智慧を離るゝを以ての故に、

他を除損する能はず。

施戒とは修して明かなる所、

若し之を棄てて邪道を行へば、

是の生死の曠澤、

或ひは狼の 食噉する所となる。

殺に因つて短壽を生じ、

盜に由つて乏財を致し、

妄語して誹謗に遭ひ、

惡口は不愛を聞き、

貪に由つて害は求むる所、

邪見は僻執に生じ、

施さざる故に貧窮し、

不恭は卑賤に生れ、
但に形色の醜を懼めば、

貪瞋と邪見と

此れに翻するを即ち 十善となす。

逼惱心なく施し

略して法を説く、當に爾り。

決して善法を生せず。

若し唯苦行あらば、

救済と利益と

正法は 大夷路なり。

自ら舌んで 牛鬪を受く。

飲食なきの樹陰に

長遠にして中に於て行く。

逼惱は多病を招く。

他境を侵せば怨多し。

兩舌は親愛なるも離れ、

綺語は他に憎嫉せらる。

瞋恚は驚怖を受け、

飲酒は心を 訥亂す。

邪命は欺誑に逢ふ。

嫉妬は威徳なし。
聰を問はざる故に癡なり。

【四】 十惡、十善。十惡とは

一に殺生、二に偷盜、新には

不與取といふ。三、邪惡、自

らの妻妾に非ずして欲を行ず

るもの。四に妄語、新に虚誑

語といふ。五、兩舌、新に離

間語といふ。六に惡口、新に

無惡語と云ふ。七に綺語、新

に雜機語と云ふ。語に姦意を

含むもの。八に食欲、九に曠

恚、十に邪見、正因果を發し

て僻信福を求めもの。此十

並に理に乖いて起る故に惡と

名け、又此の十惡は苦報の業

因であるので、十惡業又は十

不善業と云ひ、又此十業能く

苦報に通ずるを以て十不善道

又は十惡業道と云ふ。次に十

善とは不殺生乃至不邪見である。此の十は能く理に順ずる故に善と名け、十善業又は十善道又は十善業道と言ふ。

【五】 大夷道。夷、おほいな

り、たひらなり、やすし。

【六】 牛鬪。不明。牛戒の意か。然らば、戒禁取見の一種。天然の外道に牛の行をなして以て生天の因と執するあり。再考すべし。

【七】 駁。啖に同じ。くらふ。【八】 訥亂。訥、言說敏捷ならず。おそし、にぶし、かたし。

寶行王正論一卷

陳天竺三藏眞諦譯

安樂解脫品第一

一切障を解脫して

一切智尊を禮す。

正法決定の善

我當さに法に由り説き、

先づ樂の因の法を説き、

衆生は前に安樂にして

善道は具さに樂と名け

略して此の二因を説けば、

信に因つて能く法を持し、

二の中の智は最勝なり。

寢貪瞋怖に由つて

當さに知るべし、是の有信は

已に能く熟つひまかに

恒に自他を利益し、

殺生・盜・邪淫

圓徳の莊嚴する所の

衆生の眞善友にして

愛法の大王となす。

法器の人に流注すべし。

後解脫のちの法を辨ぜん。

次に後ちに解脫を得。

解脫は惑の盡と謂ふ。

唯だ信・智の二根なり。

智に由つて實了の如し。

先づ信を藉りて行を發す。

而して能く法を壞こわれず。

吉祥樂の名器にして

身口意の三業を簡擇し、

説いて有智人となす。

妄言及び兩舌、

【一】 以下六句、歸敬文である。

【二】 信智二根。五根の内。信根、三寶四諦を信ずること。智根即ち慧根、眞理を思惟すること。外に精進根、念根、定根あり、此の五法は能く他の一切の善法を生ずる本となるので、五根といふ。

【三】 身口意三業。一、身業、身に作すこと。二、口業、口に説くこと。三、意業、意に思ふこと。

を記してゐる。

五品には論師は最後に自ら成佛すべき希願文を出して、この論を終つてゐる。

これらの内には大乘的術語・法數が多く出で、三十二相・菩薩十地の外、六波羅蜜・五十七龜類惑・三乘・四無量・十力・六通四辯・四答其他列擧の暇なき程である。而して之等については繁煩と思はれる程に克明に註釋を加へて置いたので、讀者

昭和六年十月二十五日

は之を参照されたく、こゝに本論の部分的の思想を紹介するのを避けることとする。思ふに本論の大乘思想は四、五世紀のものであつて、本書にも亦その頃の成立と考へられる。

第四 結 論

要するに本論は明瞭に大乘思想に立ち、一王を中心とし、王が個人及び王者

として修すべき徳を大乘的立場より説法し、兼ねて佛教の要諦を修道論・世界觀を中心として記述したものである。

行文簡潔にて、相當に美文であり、釋文又さして難解でなく、全篇も長きに過ぎないので、教理史上の地位は兎も角として、大乘的佛教の要諦・概説として愛讀に價するものである。

譯 者 平 等 通 昭 識

相當難解であるが、意を取るに困難する程ではない。何れかと言へば名文であつて、原文は韻律の美と相伴つて、立派であつたらう。

大乘思想に立脚してゐる爲に、多くの大乘の術語を含んでゐる。

第三 内 容

寶行王正論は一佛教思想家が一行王(寶行王?)に佛教の要諦を説いて之を教化し、修道を勧め、正しき政治を王者として行ふ可きを教へる體裁になつてゐる。

その立場は明かに大乘思想である。

先づ安樂解脱品第一品には歸敬文を印度普通の著作に慣つて出し、十善十惡等を記述して修道の概要を示し、進んで大乘佛教の世界觀を出し、有無の二邊、我有我所の二邪見を破し、三世の實在問題を扱つて、進歩的思想を取り、或ひは三世實有・法體恒有を排し、過未無體論を豫

想するかの如くにも思はれる。少くとも僧佉(Srinikya)・韓世師(Vaśeṣika)・尼健子(Nirgrantha-putra)・有我論・自性論・句義論等の世界觀を非難してゐる。然して佛教の業論・因縁論を宣揚し、佛教的解脱を高揚してゐる。

雜品第二に於ては各種の善行を列記して、その功德の深大なるを説き、諸惡事を破し、十戒を守るべきを勧め、殊に邪淫戒を警め、女性の醜惡にして嫌惡すべきを女性の醜狀を一々列擧して記述してゐる。

更に第二品の後半より菩提資糧品の前半にかけて轉輪聖王(Cakrapurvarin-rājan 轉法輪王Dharmaśakrapurvarin-rājan(即ち佛)大人相好三十二相(Talka-sana)の各々と八十隨好の殆んど全部を列擧し、その一々が如何なる功德善根によつて成就されたかを懸念に説明してゐる。

第三品の後半には貪瞋癡其他の惡徳を止め、個人的の諸善業を積むことを勧むる外に、王者として佛像・支提・寺廟等を建立莊嚴し、經をなし、道路・旅舎を増修し、藥品・衣食を豊かに具ふ可く、之等が皆上天・成佛の因縁となるべきを説いてゐる。

正教王品第四では論師は親しく王に呼び掛けて教へ、善業と惡業とを細かに分つて諄々として人として、又王者としての踏む可き道を懇ろに教へてゐる。この内に佛教徒の菩薩として一般に修徳すべきものを含んでゐる。

出家正行品第五は龜類の惑五十七を一々擧げて説明し、更に菩薩の十地(Tenārdhūni)の思想を述べてゐる。この菩薩十地思想は明かに大乘の夫であつて、仁王經・華嚴經に記述される十地と全く一致するものである。論師はこの内に各地とその地で修すべき各波羅蜜、居住の天

況んや復た^{三二}心猿を縦にし、
多時に於て想を繫げ。

次漸に及び餘人に
漸く寛にして海際に至り、

此の定既に成じ已つて。
略する時は外より捨す。

還た足の指端を觀す。
或る時は片片に捨て、

應に知るべし、最後心を
苦し此の修習をなせば、

^{三三}三塗に落墮せず、
人間は心善を散じ、

智人の修定の心は
即ち諸縁を捨つべく、

無常をして逼らし、
般若の淨心を以て、

後有を願ふて
剃髮して袈裟を著け、

止觀行門七十頌

止觀門論頌

馳せて諸境に求趣せんや。
自ら能く善く住する知る。

總じて觀じて骨鎖を爲す。
滿中皆白骨なり。

廣を捨て、狹ならしむ。
乃至唯身骨のみ。

是れを定心の次第なり。
極めて頂骨に至る。

眉間に攝して住せしむ。
常に勝れし梵宮に生れ、

^{三四}五淨に生るゝを得。
還つて生死の河に流る。

身衣の火を救ふが如し。
宜しく靜林處に居るべし。

虚しく死して心中に散ぜしむる勿れ。
終に獲て果を愛すべし。

勝道に於て應修すべからざる如し。
宜しく應に聖道を修すべし。

咸な生死の因を爲す。

【一】腎臟 (yakuzai)・心臓 (hondaijin)・肝臟 (yakkanan)・脾臟 (pikukan)・肺臟 (poppan)・腹 (ontan)・腹間膜 (antginom)・胃臟 (udaijin)・養尿 (kaiisan)・膽 (pittin)・痰 (seman)・濃汁 (pubbo)・血 (lohita)・汗水氣 (sodo)・脂肪 (medo)・淚 (assu)・血漿 (yasa)・唾 (kheho)・鼻液 (singhanka)・髓 (asika)・尿 (mutan)・首 (matthaka)・頭腦 (matthahigan)。

【二】九孔。兩眼、兩耳、兩鼻及び口、大小便の九處を言ふ。又九入、九漏、九瘡とも言ふ。

【三】心猿。猿、猴の屬、ひぢながざる、てながざる。心を猿に喩へたのである。

【四】梵宮。梵天の宮殿をいふ。

【五】四解脫經の説。塗は途の義。一に火途、地獄趣の猛火に燒かる處。二、血途、畜生趣の互に相食む處。三、刀途、餓鬼趣の刀劍杖を以て刀迫せらる處。

【六】五淨。普通の五淨は黄牛、糞と尿と乳と酪と酥である。異なる。五淨天であらう。色界の第四禪に不還果を證せる聖者の生すべき處五地あり。一に無煩天、一切煩雜なき處。二に無熱天、能く熱惱なき處。三に善現天、能く勝法の現はる處。四に善見天、能く勝法を見る處。五に色究竟天、色界にて最勝の處。

内三百骨を扶け、

九孔は不淨を流し、

審に觀すれば、眞に惡むべし。

既に他の女體を觀するに、

斯に於て貪染の囚は

三界の獄を出でず、

是の故に明智者は

地獄苦多きを経て、

豈に縱狂の心を得て、

饑食に多種有り、

一觀并びに能く除く。

色觸形矯態

何の藥か能く此を除かん。

先づ足の五指に於て

破壞すれば既に濃流る。

即ち指骨の形を觀し、

其の瘡既に漸く大にして、

是の如き次第をなして、

正念勝解成すれば、

若し片肉の在るあれば、

横に九百筋を纏ひ、

垢は汚穢にして陳べ難し。

智者應に親しむべからず。

亦復た己の形を察せよ。

理應に常に繫念すべし。

咸な欲染の心に由る。

極めて其の事を善思せよ。

幸ひに人身を得るに會ふ。

殊勝の行を修せざらんや。

生に隨つて愛同からず。

謂く是れ白骨觀なり。

衣纒に染著を生ず。

白骨の觀に過ぐるなし。

心を定めて緣じて瘡を作せ。

肉皆な隨つて墮落す。

由つて白鴿の色の如し。

膚肉盡く皆な除く。

身肉皆な除盡す。

但だ其の骨鎖を觀す。

即ち名けて亂意と爲す。

(織田)

【一〇】 靜慮の四種—退分、勝進分、住分、決擇分。

【一一】 以下不淨觀を記述す。入定し、身體の不淨にして無常なるを觀する。

【一二】 對治。煩惱を斷ずることである。之に四種ある。一に厭患對治、謂く加行道である。見道以前に在つて苦樂二諦を緣じて深く厭患の念を生ずるを云ふ。二に斷對治、無間道を言ふ。無間道に於て四諦を緣じて正しく煩惱を斷ずるを云ふ。三、持對治、解脫道を謂ふ。無間道の後に解脫道を起し、更に四諦を緣じて彼の無間道に得たる擇滅の得を攝持し以て所斷の煩惱をして更に起らしめざるを云ふ。

四に遠分對治、勝進道を謂ふ。解脫道の後に勝進道に入り、更に四諦を緣じ、所斷の惑をして轉た更に遠からしめるを言ふ。この内正對治は第二の無間斷である。(織田)

【一三】 口親之所説。不明。

【一四】 身體の三十二分。屈陀迦阿舍(Khundake-nikāya)、三十二身分(Dvatisakāraṇa)は左の如くである。

頭毛(kesa)・身毛(loṃā)・指爪(nakha)・齒(danta)・皮(tu-

so)肉(maṃsa)・髓筋(mahā-

ra)・骨(aṅghri)・骨髓(aṅghri-

ni)・骨髄(aṅghri-

ni)・骨髄(aṅghri-

ni)・骨髄(aṅghri-

ni)・骨髄(aṅghri-

ni)・骨髄(aṅghri-

ni)・骨髄(aṅghri-

ni)・骨髄(aṅghri-

彼、全身を愛するに對して、
屍骸を狐貉啖ひ、

肌膚を愛するを對治するには、
手足の諸支骨

支分を食る人に對しては、
即ち骨亂の相に於て

愛全身の爲には

屍骸は刀斫を被り、

流血は殘軀に遍く、

淨潔の香を體に塗り、

此の食を起す人には

境に於て唯獨り愛し、

多虫・死屍を啖ひ、

骸肉は皆な銷散し、

齒に於て食を生ずる者は

若し新死者を見れば、

衆生食に樂著するには、

屎尿及び涎唾

三十二種の物

髮毛并びに爪齒

大仙尊は説を爲す。
鳥啄んで殘筋有り。

爲に食殘の相を説く。
隨處に皆な分散す。

骨邪の亂相を説く。
刀杖もて斫つて分離す。

打亂の相を觀ぜしむ。

或ひは鋒箭の傷に由つて

名けて血塗の相と爲す。

新莊して彩衣を著く。

斯を用ひて妙藥と爲す。

外人の看るを許さず。

惡念を除くを觀ぜしむ。

但だ唯だ牙骨のみ存す。

齒骨の相を觀ぜしむ。

識去つて殘形あり。

嬌態の欲を除かしむ。

合聚して共に身を成す。

皮囊を喚んで人と作す。

肝肚等、相ひ困り、

支、(俱舍には之を五根中の信根となす。深く勝實の功德を信受するのである。淨は信の相なので淨と言ひ、心に屬するので内と言ふ。喜支、樂支(輕安樂)、一心支(新定支)である。

【一八】三禪。第二の喜受を呵棄して三禪を得るのである。五支を具する。捨支(行捨にして捨受にあらず)、念支(三禪の樂極勝なれば染着せざる爲に正念を要す)、慧支(同上)、樂支(意識の樂)、一心支(新に定支寂然在定である)(織田)

【一九】四定、靜慮、四禪、三禪の樂受を呵棄す。四支は不苦不樂支(新に中受支、五受中の捨受なり)、捨支(第三禪の樂受を捨てて憂悔せず)、念支(下地の過自己の功德を念じ長養す)。一心支(猶如鐵、猶如清水)である。初禪の五支乃至四禪の四支に就て何れを行體にかなしかと言ふのに、俱舍の意に依つて初禪の五支について言へば、此の時二十二の心數一時に發す。(大地の十と大善地法の十と覺と觀とである)。中にて強い者を取つて五支とする。五支皆定體である。成論には五支前後相次いで起ると明かし、四支を取つて方便とし、一心支を實體とする。

靜慮に四種あり。
若し定めて煩惱に順すれば、

後勝を勝分と爲し、

先の善分別に由るは、

此の定、能く彼を招く。」

無常等の相に於て

若し此の定を得れば

青髓等の相に於て

聖教の如く修行すれば、

死屍風鼓腹

連跨並びに皆な龜なり。

不愛身は龜分なり。

此の染心に對する人は

若し死屍の分に於て

餘肉並びに多青なり。

色を觀て愛を生ず。

對治するに青髓を以てす。

死屍の濃は過く出ず。

彼の愛香の人に對して

死屍の腰爛斷す。

修定者は初めて知る。

此を名けて退分と爲す。

自住住して應に知るべし。

是れ決擇道の因なり。

名けて決擇分と爲す。

苦等の行解を作す。

是の煖等の道分

事を觀するに多途あり。

差別は宜しく識るべし。

穴處より膿の流るゝあり。

説いて名けて髓脹となす。

唯だ細滑の身を食る。

是の如き觀を修すべし。

少しく白膿の流るゝあり、

此を説いて青髓と爲す。

斯を愛色の人と爲す。

日親の説く所、

是を濃流の相と謂ふ。

染心を觀ぜしむれば息む。

名けて斷壞の相と爲す。

智・善心・柔順・喜樂・解脫・境界相續が是である。此の八觸

十功德は唯初禪に在つて二禪

以上にないのである。是は初

禪の特相である。而して四禪

總體に就けば十八支を以て分

別するのである。十八支とは

初禪に五支、二禪に四支、三

禪に五支、四禪に四支である。

此等の功德法を以て禪を支持

するので支と名ける。初禪五

支は覺支(新譯尋支)、觀支(新

伺支)、喜支(新同)、樂支(同

經部は眠耳身三識の覺受とし

有部は定中三識を許さず、唯

意識のみなので、輕安樂とす。

一心支である。

【一七】根本定。前出(十三を

見よ)。

【一八】他心宿住他心智證通

(paricitta-jhana)を言ふか。

他人の心念を知るに於て無礙

なるもの。

神道天眼耳天眼智證通、Div-

ya-paṅkajāna 色界天の眼根を得

て照久無疑なるをいふ。

天耳、天耳智證通、Divyaṅ-

ga-kotina 色界天の耳根を得て聽

聞無疑なるものを言ふ。

夫々五又は六神通の内(織田)

【一七】二禪。初禪の覺觀を呵

棄して此禪を得るのである。

初禪に於て已に色界四大轉換

し終れば、二禪以上八觸十功

徳なし。二禪の四支とは内淨

既に差別の相を見れば、次に當に悪作を除くべし。

寂靜は障礙なく、

龜尋を用ひて

即ち心影の内に於て

差別を見て心喜ぶ。

次に樂定を證す。

即ち是れ^{二五} 根本の定にて

猶ほ欲、村に至り、

既に根本定を得て、

^{二六} 他心宿住、

此に於て有伺の時、

猶ほ河の浪有るが如し。

既に初定を得已つて、

次に^{二七} 二靜慮に於て

此の位に住するを得ると雖も、

第三定に入る時、

其の心に樂あるに由つて、

既に^{二八} 四靜慮を證し、

退分・勝進分

疑情即ち便ち息む。

善行は隱路に安隱にして、

能く掉擧を防ぐ。

其の所取の相を觀するを知るべし。

伺細を以て推求し、

此に由つて輕安を得。

定支は次いで是の如し。

善く念心を安んず。

及び村中の者に至るが如し。

更らに復た餘修を作さば、

神通天眼耳を得る。

心未だ靜かに住する能はず。

上地に非らず、應に知るべし。

仍ほ所緣に於て住す。

尋伺皆な止息す。

尚ほ喜水の漂ふ有り、

其の心便ち靜住す。

未だ能く念に住せしめず。

衆過並びに皆除く。

住分・決擇分なり。

此の心路を覺するに混泯として澄淨である。怙怙として安穩である。その心緣に在れども居然として馳散せないものを應住と名ける。此の心より後に怙怙たることに勝るのを名けて細住と爲す。その後一兩日或ひは兩月あつて豁爾として心地に一分の開明を作す。我身雲の如く、影の如く、爽々として空淨である。空淨であるけれども、猶ほ身心の相を見、未だ定内の功德がない。之を名けて欲界定といふ。是の心から後混然として一轉し、欲界定中の身首衣服床鋪を見ず、猶ほ虚空の如くであるのを未到定と名ける。此の時に性の障猶ほ在つて未だ初禪に入らないのである。此の未到定に在ては身心豁虚として空寂である。内は身を見ず、外に物を見ることがない。此の如く、一日乃至一月一歳を経て定心壞れなければ、此の定中に於て即ち自心の微微動搖するを覺し、或は微痒を感じずる。即ち動痒輕重冷煖澁滑を發する。之を八觸と名ける。是は色界の四大の極微と欲界の四大の極微を轉喚する爲此の觸相を發するのである。是は正しく初禪に入つた相である。此の時十功德あり、又十眷屬とも云ふ。空・明・定・

澄念觀察する時

心沈んで應に策舉して、

蛙の血を飲んで困み、

還りて應に速に收斂して、

意をして堪能あらしむれば、

若し其の心。掉舉ならば、

心をして寂靜に住せしめよ。

遠く 沈・掉を遠離し、

情に隨つて舍中に住せば、

此に從つて漸く住を得て、

中道の行に明了して、

此の時 尋伺を用ひ、

定影即ち便ち生じ、

明靜を動搖せず。

此の影を前觀に望む。

此の相既に生じ已つて

即ち是れ繫心の人

次に瞋恚の體を知れば、

欲愛既に已に除けば、

次に勤策を以て念すれば、

闇味は能く住せず。

勝妙の事を觀すべし。

水澆いで甦らしむるが如し。

舊境に於て安心せよ。

善を調へて皆念に隨ふ。

應さに厭惡の事を思ふべし。

鈎の象頭を斷るが如し。

應に平等に心を運らすべし。

此の時過咎なし。

相を取つて影心安し。

正念の燈にて照らす。

次第にして應に觀察すべし。

分明に現前して住す。

大丈夫の形の如し。

是を差別の相となす。

愛欲等便ち除く。

初定方便の相なり。

本、貪染に由りて發す。

瞋恚を離るゝを得。

昏睡の心を遣除す。

頭陀行の一とする。糞掃衣の功徳は貪著を離れるにある。【七】以下入定の場所について記述す。

【八】攝斂。斂、しまる。管束す、ちぢむ。をさまる。

【九】肥滿せる下腹部、かくしどころの邊をいふ。入定に當り性慾に對する警戒を特に嚴にすること何はる。

【一〇】掉舉。前出、(三を見よ)。心を輕浮ならしめること。

【一一】象を制御するには象使は鈎の如き鈎を用ひ、之を象頭に刺して巧みに御す。

【一二】沈掉。惰沈、掉舉をいふ。

【一三】尋伺。七十五法中不定地法八の内である。尋は事理を尋求する産性の作用である。伺は事理を伺案する細性の作用である。

【一四】初禪。四禪定の一。此の四禪定を修して色界の四禪天に生れるのである。此の四禪は内道外道共に之を修し、因に在つては欲界の惑網を超へ、果に在つては色界に生じ、且つ諸の功徳を生ずる依地根本となるので本禪といふ。

【一五】初禪の前行に粗住、細住、欲界定、未到定あり。其正禪に八觸十功徳を具す。先づ行者安坐し、身端しく心を攝むれば、氣息調和である。

然る後に邪思を息む。

應に 屍林に住し、

常に靜息の事を求め、

乞食して女人を見れば、

眼を擧して邪意を除けば

多言は事務多し。

惱亂の緣來りて逼まらば、

樹下草積中

觀する時應に此に住すべし。

習定は境に緣する時に

應に極めて近遠なるべからず、

善く所緣境を取つて

目を閉ぢ心を任する時、

根門皆 攝斂し、

緣境は現前に觀じ、

前の所取の相に於て

隨脹せる女根の邊は

猶ほ濁池の水は

諸の樹影を觀する時、

心垢煩惱の水、

是れ茲芻の初業なり。

糞掃の衣服を著け、

焔染の心を斷除すべし。

應に觀じて不淨と爲すべし。

正心にして當に食を取るべし。

此れ皆な須しく遠離すべし。

慧力をもつて應に須しく忍べし。

或ひは崖窟内に居て、

寂靜にして心を修すべし。

太高く、太下からず、

境に於て相應せしめよ。

子細に能く觀察せよ。

猶ほ眼を開いて見るが如し。

念念に住して内心を凝らせ。

念々相續せしむ。

形貌は心を用ひて觀ぜよ。

畏るべし、嫌賤すべし。

風吹きて動搖せしむるが如し。

善く分明に住せず。

情風を亂して吹く所、

を觀じて、解脫を得るに資せんとす。所謂不淨觀が主題となつてゐる。

【一】 隨脹、隨、脹

【二】 焔染。焔は又熾毒と云ふ。三毒の一。梵に訖羅駄 Krodha と云ふ。苦と苦具に於て憎惡するを熾と言ふ。身心をして熱惱せしめ、諸の惡業の意か。昏沈、普惰沈と書す。

心をして憎重ならしむるもの。悼惡作、悼舉のことか、然らば心をして安靜ならしめざるもの。惡作は惡作の事を思念する。疑、不信と同じ。上の行に反して心をして澄淨ならしめぬ作用。

【四】 葱藪、Dhikra の音譯。普通は比丘。「乞食」の意。佛教僧侶に用ひる。

【五】 屍林。印度にて死體を放棄する森林をいふ。寒林とも言ふ。

【六】 糞掃衣服。又納衣とも言ふ。火燒牛嚼鼠噬死人衣月水衣等の如き衣を印度人は巷野に棄てる。糞を拭つた器物に同じなので糞掃衣と名ける。之を浣洗縫濯して外に着る。又糞掃の衣片を補納して着用するので納衣と名ける。比丘林この糞掃衣を着して更に檀越の施衣を用いぬのを十二

止觀門論頌

世親菩薩造

三藏法師義淨、詔を奉じて譯す。

若し女形相

愚人は了知せずして

佛は、麤服等を説ひて

能く世尊の教に隨ひ、

戒淨にして聞思あり、

繫念して諸境を觀ぜよ。

若し人、曠染

掉惡作并びに疑有らば、

少聞と衆居と

愛身并びに受用は

心亂るゝに五緣あり。

味著及び洗掉

苾芻ビシユは聖教によりて、

善く住心の緣を取る。

次に寂靜處に依りて、

及び艶たる嬌姿を見れば、

妄りに淫染意を生ず。

淫欲の念を觸除す。

勝果を得て餘す非らず。

策勵して常に修習して

斯れを解脱の因となす。

及び昏沈・睡眠。

此の五は定を修するを遮す

鄙事情・欣樂は

亦た能く定心を遮す。

情は衆境に隨つて散す。

我慢は名聞を重んず。

過あれば除くを説くべし。

是を最初の行と爲す。

睡を妨げれば并びに皆無なり。

【一】止觀。梵者摩訶 Sam-

tha 毘鉢舍那 Vipasyana と

云ふ。止は停止の意。諦理に

停止して動かないのである。

能止に就て名を得た。又止息

の義で、妄念を止息するので

ある。所觀について名を得た。

觀とは觀達の意。觀智通達し

て眞如に契會するのである。

此れは能觀に就て名を得た。

又貫穿の義。智慧の利用煩惱

を穿鑿して之を殄滅するので

ある。それ故所修の方便に就

て之を言へば、止は空門眞如

門に屬し、無爲の眞如を緣じ

て諸相を遠離するを言ひ、觀

は有門、生滅門に屬し、有爲

の事相を緣じて智解を發達す

るを云ふ。且所修の次第に就

て言へば、止は前に在つて先

づ煩惱を伏し、觀は後に在つ

て煩惱を斷じ、正に眞如を證

するのである。何となくば止

にして妄念を伏するは鏡を磨

くが如く、磨き已れば淨體諸

垢を離れて能く萬像を現す。

是れ即ち觀である。然し眞正

眞觀は必ず止である。法性

の常照は觀であるからであ

る。それ故眞觀は必ず寂然で

あるから、觀は即ち止で、眞

正は必ず明淨であるので止即

ち觀である。

こゝでは主として人身の不淨

止觀門論頌解題

止觀門論は短い頌文であつて、世親菩薩作、義淨の譯とされてゐる。譯文は明快である。

世親 (Vasubandhu) は後の發菩提心經論の著者として説くのを便宜とするので此處では記さないが、紀元五、六世紀(定説なし)の佛教教理史上重要著名な論師で、無著 (Asaṅga) の弟で、三十六卷の著を現した。譯者義淨(一六七一一六九

昭和六年十月二十三日

解題

五) は又又一百五十讚の譯者として記すことゝするが、唐代の有名な求法僧で南海を経て印度に赴き(六七一一六九五)印度那爛陀大學に學び、多くの梵策を携へて歸り、五十六部二百三十卷以上を譯出した。

本頌は世人の迷ふは多く婬慾に基くとなし、比丘は蔽衣粗食にて禪定に入つて修道すべきを勧めてゐる。先づ禪定の場

所・態度を教へ、殊に女形を思ふを避け、四禪定に入る順序と心境、各禪定の内容を語つてゐる。殊に女色を警める爲に、不淨觀・白骨觀を説き、この實踐をすゝめてゐる。美しき皮肌脂肉が斫られ、腐り、白骨と化して行く過程が眼前に髣髴とする如くに書かれてゐる。最後に般若淨心によつて聖道を修習し、解脱すべきを説いて、結んでゐる。

流石に義淨の譯文丈あつて、よくこなれた明快な行文であつて、反覆誦するに相應しい。

譯者 平等昭 職

「燈炎轉生する如く、

先際と後際と

無生亦有生

生じ已つて亦無住にして

若し彼の緣生に於て、

其の施設の教を度して、

識身も亦是の如し。

亦聚集あるなし。

破壊して相著するなし。

而して此は業轉を作す。

能く觀じて空を知らば

彼も亦是れ中道なり。」

中に於て無明・行・渴愛・取・有、是を集諦となす。識・名色・六入・觸・受・生・老死、是を苦諦と爲す。彼等十二分の滅するを滅諦となす。若し緣生に於て實の如く能く知る。是を道諦となす。

【四】 無明・行・渴愛・取・有―集諦
識・名色・六入・觸・受・生・老死
―苦諦
十二分の滅―滅諦
緣生を知る―道諦

種、面と鏡との二種、音と響との二種、日と火との二種、種子と芽との二種、酢と舌涎との二種、此等の所有は皆な超到ならず。亦生ぜざるに非らず。亦無因に非らず。而も彼の二種を生ず。五受衆相續して到る時、是れ初受衆にあらず。超到して第二受衆なり。亦不生に非らず。亦無因にあらず。而も智を生ずるは、此の受衆に於て相續して超へず。次第して到る。應當に正觀すべし。

又た外内受用は俱に十種あり。皆應當に見るべし。中に於て外の十種とは、一には非常の故に。

二には非斷の故に。三には不超到の故に。四には中間なきが故に。五には彼の體にあらざるが故に。六には別異にあらざるが故に。七には無作者の故に。八には無因に非らざるが故に。九には念々空なるが故に。十には同類果相繋るが故に。彼の外の所有の種子滅して餘りなきが故に。非常の芽出生するが故に。非斷の種子滅して餘りなきのみ。其の芽本無くして今生するあるが故に超到ならず。彼の所相續斷絶あるなし。因果相繋くるが故に中間なし。種子と芽との差別の故に彼の體にあらず。彼より出生するが故に別異にあらず。因縁和合するが故に作者なし。種子、因を爲す故に無因にあらず。種子、芽、莖、枝葉、花果等傳傳相生するが故に念念空なり。甜酢鹹苦辛澁は因に隨つて差別の果、轉出するが故に。同類の果、中に相繋る。内の十種とは、一には死邊の受衆滅して餘りなきが故に常に非らず。二には次生分受衆を得るが故に斷に非らず。三には死邊の受衆滅して餘りなし。次生受衆を分つ。本無なるも今生あるが故に超到ならず。四には受衆相續して斷絶有るなし。因果相繋る故に中間なし。五には死邊次生に受衆を分つに差別あるが故に彼の體にあらず。六には彼の出生に従ふが故に別異にあらず。七には因縁和合の故に作者なし。八には煩惱業、因と爲る故に無因にあらず。九には迦羅邏、頽浮陀、篋尸、伽那、奢佉、出胎、嬰孩、童子、少年、長宿等、傳傳相生する故に、念念空なり。十には善不善熏、因に隨つて差別果轉生するが故に、同類果相繋る。又三偈有り。

【三九】 内外受用の十一種を記述す。以下外の受用十種。

【四〇】 以下の十種を列記す。

【四一】 以下胎内五位をいふ。

人の胎内にあつて生長するを五に分つ。一、迦羅邏、普通歌羅邏、羯邏藍等と書く。 *Kra-* *ti-*、譯凝滑、雜穢。父母の兩精初めて和合凝結したもの。受精の初めより七日間の間。胎内五位の一。二、頽浮陀篋尸、又頽部曼位を書く。 *Ay-* *pu-* *dhān-*、施と譯す。二七日を經て漸く增長して瘡疱の形を爲す位。三に閉尸位、 *Pa-* *ni-*、血肉と譯す。三七日を經て漸く血肉を爲す位。四に健南位 *Gha-* *na-*、堅肉、濃厚、肉團と譯す。四七日を經て漸く肉の堅る位。五に鉢羅奢佉位、 *Pa-* *ra-* *ś-* *ka-*、支節、形位、五支根の具はる位。是に於て漸く六南を伽那、鉢羅奢佉を奢佉と書す。

死の七種なり。彼の七分中前に説く所の如く、還た三種を生ず。彼の三に復た二あり。其の二に更らに七あり。是の故に二種は次第して斷せず。此れは之れ輪ありて、是の如く普く轉ず。

「因果諸生の世

別に衆生あるなく、

唯だ是れ空法に於て、

還た自ら空法を生ず。」

「因果諸生の世 別に衆生あるなし」とは、無明・行・渴愛・取は五種ありて因と名づく。識・名色・六入・觸・受・生・老病死の七種を果と名く。此等の所有普く世間に遍し。若しは我、若しは衆生、若しは壽、若しは生、若しは丈夫、若しは人、若しは作者、是等を首となす。次第に分別して其は唯だ虚誑なり。應當に之を知るべし。彼云何ぞ生する。唯だ是れ空法に於て還た自ら空法を生ず。謂く自性定中假りに煩惱業果と名く。唯だ別に空の假名ありて、煩惱業果の法生ず。此は是れ其の義なり。

「縁を藉りて煩惱を生じ。

縁を藉りて亦業を生ず。

縁を藉りて亦た報を生ず。

一として縁あらざるなり。」

若し煩惱あらば、則ち種々無量種の業あり。及び種々業所生の果報あり。彼れ皆な共因共縁なり。應當に之を知るべし。一處として因縁なき者あるなし。

又彼義を明かさん爲めに、今更に譬喩を説く。

「誦・燈・印・鏡・音

日光・種子・酢

衆續して超倒せず、

智、應に彼の二を觀すべし。」

誦の如し。教誦者受誦者あり。所有の教誦は受誦に到らず。何を以ての故に。教誦者は仍ほ安住す。安きが故に、其の教誦者も亦た相續せず。何を以ての故に。自ら生ぜざるが故に。燈の如く次第に生ず。是れ初燈にあらず。超到も亦た第二にあらず。無因にして生ず。是の如く印と像との二

【三七】 無明・行・渴愛・取—五因、識・名色・六入・觸・受・生・老病死—七果

【三八】 以下因果關係を例を擧げて説明す。

く、及び我・我所中を攝取するに於て、若し慢を離るゝを得ば、則ち法の如く空に入る。及び受衆を厭ふが故に、業果の合するに迷はず」とは、五受衆中に我・我所を攝取する故に。則ち世間に遍して輪轉して息まず。彼の受衆に於て厭離を起するが故に。此に於て業果相續すれば、則ち顛倒なし。亦迷惑せず。

又問ふ。此の義云何。

「業は縁を作して續生す。

亦此れに縁らざるに非ず。

空緣當に此れあるべし。

業報受用具す。」

「業は縁を作して續生す。亦此れに縁らざるに非ず」とは、煩惱業染は前に説く所の如し。彼の如き淨不淨の業を以て、衆生を推遣して、傍及び上下相續して生ず。若し此の業にあらざれば則ち縁とならず。若し然らずんば、則ち未だ作り竟らずして來る。及び已に作り竟つて失す。(來るとは謂く、業未だ作り竟らずして、その果即ち來る。失ふとは謂く、業已に作り竟つて其の果便ち失ふ。)空緣當に此あるべし。業報受用して具す」とは、若し此等淨不淨業に由つて、報受用あらば、則ち自性はれ空なり。本、我あるなし。縁を作して發生す。彼の自性空なるも亦た知るべし。彼の義今更らに略説す。

「十二分の差別は

前に已に縁生を説く。

彼の煩惱・業・苦の

三の中に法の如く攝す。」

無明を初めと爲し、老死を邊と爲す。是の十二分縁生の差別は、前に説く所の如し。彼の中の三は是れ煩惱なり。二は是れ業なり。七は是れ苦なり。皆已に攝入す。

「三中二を生じ、

二中七を生じ、

七中復た三を生ず。

輪ありて是の如く轉ず。」

無明・渴愛・取三種の生ずる所。行に二種あり。彼の二の生ずる所は、識・名色・六入・觸・受・生・老

【三六】無明・渴愛・取の三↓行
二↓識・名色・六入・觸・受・生・
老死の七↓三↓二↓七……輪
の如く轉ず。

彼も亦此の中道を覺し已つて、諸の衆中に於て、佛、無我を説く。所謂比丘は【三】我・我所あり。小兒凡夫無聞の類は假名に嘖嘖す。中に於て復た我・我所なき比丘は生ずる時但だ苦生ず。滅する時但苦滅す。城喻經の中に導師已に此義を説くが如し。又た

「迦旃延經に

正見と空見とを説く

破羅具賦經に

亦た殊勝空を説く。」

此等の三經、及び餘處に、是の如きの相を世尊已に説く。

「緣生を若し正しく知らば、

彼の知、空と相應す。

緣生を若し知らずんば、

亦彼れ空を知らず。」

前の所説の緣生に於て、若し正知あらば、彼れ無異を知る。彼また何を知るや。謂く、空を知る。【三】「緣生を若し知らずんば、亦彼れ空を知らず」とは、此緣生に於て若し其れ知らずんば、亦た彼の空に於て解入する能はず。應當に之を知るべし。

「空に於て若し慢を起さば、

則ち受衆を厭はず。

若し彼れ無見あらば、

則ち緣生の義に迷ふ。」

「空に於て若し慢を起さば、則ち受衆を厭はず」とは、若し空慢を起さば、則ち五受衆中に於て、厭離を生ぜず。【三】若し彼れ無見あらば、則ち緣生の義に迷ふ」とは、若し復た無見に由つて此の緣生の義に迷ふ故に。則ち四種見中に於て、隨つて何見を取るや。一には斷見なり。二には常見なり。三には自在化語なり。四には唯だ宿世の所作に依る。

「緣生に迷はざる故に、

慢を離れて彼は空を知る。

及び受衆を厭ふが故に、

業果合するに迷はず。」

「緣生に迷はざる故に慢を離れて彼は空を知る」とは、前の所説に於て、各各緣生中に若し迷心な

【三】我。己が身に一の主宰ありて常住なるもの。我を認定するものを外道とし、之を否定するを佛敎とする。我所。我所有の略。身我を我とし、自身外の萬物を我所有と云ふ。有我の情には自身外の事物を皆我の所有となすからである。

【三】空。因緣所生の法、究竟して實體のないのを空といふ。又、理體の空寂なのを言ふ。

【三】無見、有見、斷見、常見、前出(註三〇)。

乏果なり。生は是れ轉出果なり。老死は是れ津流果なり。是の如く此れ等は則ち八果有り。

「此は十二種あり。」

力を等しうして縁により自生す。

衆生なく、命なく、

動なく、慧を以つて知る。」

是の如く無明を初めと爲し、老死を邊と爲して、十二分あり。平等に勝るゝが故に、各各縁により生ず。而して衆生なく、壽命なく、動作なし。慧を以て應に知るべし。中に於て衆生無しとは、牢固ならざるを以ての故に。壽命なしとは、無我を以つての故に。動作なしとは、作者無きを以ての故なり。

「無我と無我所と

無我と無我因との中にての

四種の無智は空なり。」

餘分も亦是の如し。」

無我中に於て無智、無我所中にて無智、無我中にて無智、無我因中にて無智なり。此の中無我を以ての故に、四種の無智は空なり。四種次第して無智は空なる如く、是の如く行等の餘分も亦皆な是れ空なり。應當に之を知るべし。

「斷常の二邊を離れば、

此れ即ち是れ中道なり。

若し覺り已つて成就すれば、

覺の體は是れ諸佛なり。」

有は是れ常の攝にして、無は是れ斷の攝なり。此の如き二邊、彼、彼處を緣するを作す。彼處に諸有は轉生す。此の二邊を離るれば即ち是れ中道なり。若し無智の諸外道ならば則ち邊に墮す。若し已に諸佛世尊を覺悟せば、則ち覺の體となす。此の世間に於て獨り能く成就す。餘人悉く此の義なし。

「覺し已つて衆中に於て

仙聖は無我を説く。

曾つて城喻經に於て

導師此の義を説く。」

【三二】有に關し二見あり。一、有見、有に偏する邪見。二、無見、無に偏する邪見。又一、斷見、身心の斷滅を執する見、無見に關す。二、常見、身心の常住を執する見、有見に關する。以下邪見を破す。

「二と二と三と三と二と二とは

苦時に五法有り。

作者は胎境界に

發轉して生じて流行す。」

「二二」の法とは、無明・行を説いて二種と爲す。識・名色を説いて二種となす。「三三」とは、六入・觸・受を説いて三種となし、渴愛・取・有を説いて三種となす。

又「二」とは、生老死を説いて二種となす。此等の五法、是れ苦の時中作者は胎藏境界に發轉し出生し、中に於て流行す。數の如く當に知るべし。中に於いて無明・行の二種は説いて苦と爲す時中の如く見るべし。六入・觸・受の三種は説いて苦と爲す時中の胎藏なり。應に是の如く見るべし。六入・觸・受の三種は説いて苦と爲す時中の境界なり。渴愛・取は三種あり。説いて苦をなす時中に發轉す。生老死の二種は説いて苦を爲す時に出生す。

又果に差別あり。

「迷惑・發起果、

報・流・の果を二と爲す。

相應根分中

一と一と三と二との分なり。」

前の所説の如く、此の無明根及び渴愛根は、無明根に於て第一分中、迷惑・發起・報・流を四種果と名づく。一と一と三と二との數分の中、其の次第に隨つて當に與に相應すべし、中に於て無明は是れ迷惑の果なり。行は是れ發起の果なり。識・名色・六入は是れ報果なり。觸・受は是れ津流果なり。復た餘殘の果あり。

「熱惱・貧乏の果は

轉出・津流果は

他の分の中に相應す。

二と一と一と一との法なり。」

前に説く所の如し。第二渴愛根分の中、熱惱・貧乏・轉生・津流果等とは、其の數分二と一と一と一とに隨つて、此の法中に當に與に相應すべし。中に於て渴愛・取は是れ熱惱果なり。有は是れ貧

【二】表示

二種〔無明・行〕……作者

三種〔六入・觸・受〕……胎藏

二種〔生・老死〕……出生

【三〇】第一無明根

無明——迷惑果

行——發起果

識・名色・六入——報果

觸・受——津流果

【三一】第二渴愛根

渴愛・取——熱惱果

生——轉出果

老死——津流果

又此更に別分あり。

「世中の四種分は

煩惱業果、合すれば

因果合する故に有り。
念欲を六分となす。」

二六 「世中の四種分は因果合する故に有り」とは、

道中五種の因及び七種の果は和合する故に總じて略して四種となす。次第に四種分有り。中に於て無明・行は過去時中なり。一法を第一分となす。識・名色・六入・觸・受は現在時中なり。第二分となす。渴愛・取・有も亦是れ現在時中なり。第三分となす。生・老死は未來時中なり。二法を第四分となす。此を四種分と謂ふなり。「煩惱業果合し念欲は六分と爲す」とは、煩惱・業・報の三種和合す。次第を以ての故に。二根本に於て六種に分あり。中に於て無明の攝する所、乃至受にして無明を以て根と爲す。渴愛の攝する所は乃至老死にして渴愛を以て根となす。無明根中無明は是れ煩惱分なり。行は是れ業分なり。識・名色・六入・觸・受は是れ報分なり。渴愛根中渴愛・取は是れ煩惱分なり。有は是れ業分なり。生老死は是れ報分なり。

又節分を總略す。

「有の節の所攝の故に

因果雜へて節と爲す。

二節及び三節は總略なり。
三四節は總略なり。」

二七 有の節を本と爲し、二節を發起す。所謂有生の兩間は第一節となす。行識の兩間は、是れ第二節

なり。此の二は並んで業果の節をなす。受・渴愛中因果共に雜はる。是は第三節なり。此の三節復た四種の總略あり。無明・行の二種は、是れ第一の總略なり。識・名色・六入・觸・受の五種は、是れ第二の總略なり。渴愛・取・有の三種は、是れ第三の總略なり。生老死の二種は、是れ第四の總略なり。

此を三節及び四節を總略と謂ふ。又此等の法中に住時の差別あり。

【二六】 四種分

第一分—過去時—無明・行

第二分—現在時—識・名色・六入・觸・受

第三分—現在時—渴愛・取・有

第四分—未來時—生・老死

【二七】 無明—煩惱分
行—業分
識・名色・六入・觸・受—報分

渴愛所攝—煩惱分
有—業分
生・老死—報分

【二八】

第一節—有生の兩間

第二節—行識の兩間

第三節—受・渴愛

第一の總略—無明・行
第二の總略—識・名色・六入・觸・受

第三の總略—渴愛・取・有
第四の總略—生・老死

「惱は業を起して報を感じ。」

煩惱復た業を生ず。

報は還つて煩惱を生ず、亦業に由つて報あり。」

煩惱・業・報の三種は前に説く所の如し。彼の煩惱に由つての故に業あり。業に由つての故に報あり。還た報に由つての故に煩惱あり。煩惱に由つての故に業あり。業に由つての故に報あり。

問ふて曰く、「煩惱盡くるに由つて、各各寂滅す。其の義云何ぞ。」答へて曰く。

「惱を離れて何ぞ業有る。」

業壞すれば報なし。

報なければ則ち惱を離る、

此の三は各々自ら滅す。」

若し其れ此の心煩惱の染なくんば、則ち業を集めず。若し業を作さずんば則ち報を受けず。若し報を滅すれば、亦た煩惱を生ぜず。是の如く此の三は各各自ら滅す。

又此等は因果の分あり。

「五分の因は果を生ず。」

名けて煩惱と爲す。

七分は以て果をなす。

七種の苦は應に念すべし。」

「五種の因を名けて煩惱業となす」とは、前に説く所の如し。無明・行・渴愛・取是れなり。「七種の果轉生す」とは、亦前に説く所の如し。七種の苦とは所謂識・名色・六入・觸・受・生・老死是れなり。

又因果の二種は空なり。

「因中空にして果なし。」

因中亦た因なし。

果中空にして因なし。

果中亦果なし。

因果の二は俱に空なり。

智者と相應す。」(梵本もと一偈なり。今一偈半となす。)

若し此の所説の因果の二種の中に於て若し因、空なれば果果も亦空因なり。是の如く因亦空因にして、果も亦空果なり。此の四際に於て當に與に相應すべし。

【五】

五種因—無明・行・渴愛・取
七種苦—識・名色・六入・觸・受・生・老死

句處は、名身・色身の相は是れ有なり。彼の生句處は、五衆出生の相は是れ生なり。彼の老句處は、成熟の相は是れ老なり。彼の死句處は、命根斷するは是れ死なり。彼の憂句處は、高擧の相は是れ憂なり。彼の悲句處は、哭聲は是れ悲なり。彼の苦句處は、身燒熱の相は是れ苦なり。彼の惱苦處は、心逼惱の相は是れ惱なり。彼の困句處は、極疲乏の相は是れ困なり。

「無智と業・識と」

名色と根と正和と

知と渴と及び取と

集と出と熟と後邊と」

中に於て無智は是れ無明なり。業とは是れ行なり。識とは是れ解なり。名色とは是れ五衆總聚なり。根とは是れ入なり。三和とは是れ觸なり。知とは是れ受なり。渴とは是れ渴愛なり。取とは是れ執持なり。集とは是れ有なり。出とは是れ生なり。熟とは是れ老なり。後邊とは是れ死なり。

又此等の差別相ひ攝して、我當に次第に之を説くべし。中に於て業・煩惱・報の差別あり。

「初と八と九は煩惱なり。」

第二第十は業なり。」

餘の七は皆な是れ苦なり。」

三は十二法を攝す。」

三煩惱とは、無明・渴愛・取なり。二業とは行・有なり。七報とは、識・名色・六入・觸・受・生・老死等なり。此の十二法は三種の所攝なり。

又時によりて差別あり。

「初の二は是れ過去にして、

後の二は未來時なり。

餘の八は是れ現在なり。」

此れを三時法と謂ふ。」

無明・行の初の二種は過去時中なり。生・老死の後の二種は未來時中なり。識・名色・六入・觸・受・渴愛・取・有の八種は、現在時中なり。

又此等は各各次第にして相ひ生ず。」

【三】根 (Gāhita)。感覺器官をいふ。

【三】三煩惱—無明・渴愛・取
二業—行・有
七報—識・名色・六入・觸・受・生・老死

【三】過去時—無明・行
現在時—識・名色・六入・觸・受・渴愛・取・有
未來時—生・老死

り。「此の三復た三あり」とは、還た彼等三受より、三種の渴愛を轉生するなり。所謂欲渴愛・有渴愛・無有渴愛なり。「三復た四を生ず」とは、彼の三種の渴愛より、四取を轉生するなり。欲取・見取・戒苦行取・我語取なり。「四復た三を生ず」とは、彼の四取より、三有を轉生するなり。所謂欲有・色有・無色有なり。

「三より一を生じ、

彼の一復た七を生ず。

中に於て所有の苦

牟尼説ひて皆な攝す。」

三より一を生ずとは、還た彼等三有の作緣を以て、當來一種生を生ずるなり。「彼の一は復た七を生ず」とは、還た彼の一より、當に老・死・憂・悲・苦・惱・困等の七種あるべし。「中に於て所有の苦」牟尼説いて皆攝す」とは、中に於て無明を始となし、困を終りと爲すなり。無量種の苦を世尊略ぼ説いて、皆此に攝する所なり。

「十二種の差別

善淨にして説いて空となす。

緣生、力を分つが故に。

應さに十二法を知るべし。」

十二種の差別 善淨して説いて空となす」とは、此の無智等は各別に雜はらず、十二分あり。又彼れ皆自性は空にして、應當に正見なるべし。此の如き所説は唯是れ空法にして、自ら空法を生ずるなり。「緣生、力を分つか故に 十二法を知るべし」とは、若し次第を以て分力を生ずるが故に、彼の十二法は是の如く當に知るべし。彼の中の迷惑の相は是れ無明なり。彼の行・句處は、積集して當に有相は是れ行なるべし。彼の識句處は、次に生分を受轉出する相は是れ識なり。彼の名色句處は、名身・色身相合相は是れ名色なり。彼の六入の句處は相安置の相は是れ六入なり。彼の觸の句處は、眼色識にて、共聚の相は是れ觸なり。彼の受の句處は、愛・不愛受用の相は、是れ受なり。彼の渴愛句處は、厭足無きの相は是れ渴愛なり。彼の取句處は、執持攝取の相は是れ取なり。彼の有

【一七】渴愛(Tiṅṅa)。欲望をいふ。三種に分つ。欲(渴)愛 Kamā-taṅṅha は愛欲の欲望である。有愛 Bhava-taṅṅha は存在に關する欲望である。無有愛 n bhava-taṅṅha

【一八】取 upādāna。執着である。四取に分つ。

【一九】有(Bhava)。存在である。三有は三界の異名である。生死の境界に因あり果あるを有といふ。三有は三界の生死である。一に欲有、欲界の生死である。二に色有、色界の生死である。三、無色有、無色界の生死である。

【二〇】牟尼(Muni)。聖者をいふ。こゝでは佛陀を指す。

【二一】句處。句は事物の義理を詮はすをいふ。處、道理の義にてコトワリと訓ず。句處は Paṭṭha(句義、處)の意味か。

因果諸生の世

別に業生あるなし。

唯だ是れ空法に於て、

還つて自ら空法を生ず。

縁を藉りて煩惱を生じ、

縁を藉りて亦業を生じ、

縁を藉りて亦報を生ず。

一として縁あらざるなし。』

誦・燈・印・鏡・音

日光・種子・積

衆續いて超到せず。智は應に彼の二を觀すべし。

縁生三十論本竟る。

緣生三十論を我れ當に次第に隨順して解釋すべし。

「一より三を生じ、

三より轉じて六を生ず。

六は二を生じ二は更に六を生じ

六より復た六を生ず。」

「一より三を生ずとは、一とは、無知を謂ふ。此の無智とは説いて無明と名く。苦集滅道中に於て、

覺知せざるが故に、名けて無智となす。無智に由るが故に、則ち有福非福不動なり。説いて三行

と名づく。及び身行・口行・心行等は其れより轉生す。三より六を轉生すとは、彼の三行より、六識

身を生ずることなり。所謂眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識なり。「六は二を生ず」とは彼の六識身

は轉じて二種を生ずることなり。所謂、名色なり。「二は更に六を生ず」とは、名色の二種轉じて、六

入を生ずることなり。所謂眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・意入なり。「六より亦た六を生ず」とは、彼

の六入より六觸を轉生す。所謂眼觸・耳觸・鼻觸・舌觸・身觸・意觸なり。

「六より三あり。

此の三復た三あり。

三復た四を生ず。

四復た三を生ず。」

「六より三あり」とは、彼の六觸より轉じて三受を生ずるなり。所謂樂受・苦受・不苦・不樂受な

【八】 以下緣生三十論本の註經である。

【九】 以下十二因緣の順觀を記す。

【一〇】 無智又は無明 *avijhā*、十二因緣論に詳述す。

【一一】 行 *Saṃkhāra*、同上。三行とは身行・口行・心行に宛てはめたのである。

【一二】 識 *viññāna*、之に六識（眼・耳・鼻・舌・身・意の六識）を宛つ。

【一三】 名色 *namarūpa*、前出。精神と物質。

【一四】 六入 (*Saḍḍayutana*)、前出。感覺器官である。

【一五】 觸 (*Sparśa*)、前出。感覺である。

【一六】 受 (*Veḍḍanā*)、感情である。

無我と無我所と

四種の無智は空なり。

斷常の二邊を離るれば、

若し覺り已れば成就す。

覺り已つて衆中に於て、

曾つて五城喻經に於て

六迦梅延經は

七破選具賦經

緣生を若し正しく知れば、

緣生を若し知らずんば、

空に於て若し慢を起さば、

若し彼の無見あらば

緣生に迷はざるが故に、

及び受衆を厭ふが故に、

業を緣をなして續生し、

空緣はまさに此れあるべし。

十二分の差別は

彼の煩惱・業・苦の

三中に二を生じ、

七中に復た三を生ず。

無我と無我因との中にて

餘分も亦た是の如し。

此即ち是れ中道なり。

覺の體は是れ諸佛なり。

仙聖、無我を説く。

導師、此の義を説く。

正見及び空見を説く。

亦た殊勝空を説く。

彼の空を知りて相應す。

亦た彼の空を知らず。

則ち受衆を厭はず。

則ち緣生の義に迷ふ。

慢を離れて彼れ空を知る。

業果の合するに迷はず。

亦此を緣とせざるにあらず。

業報受用具す。

前に已に緣生を説く。

三の中に法の如く攝す。

二中に七を生ず。

輪ありて是の如く轉ず。

【五】 城喻經。不明。

【六】 迦梅延經。經中に有無の二邊を離るるを説く、智度論二、探玄記二等に引用さる。

【七】 破選具賦經。不明。

煩惱復た業を生じ、

惱を離れて何の業あらん。

報なければ則ち惱を離る。

五分の因は果を生じ、

七分は以て果となす。

因中空にして果なく、

果中空にして因なく、

因果の二は俱に空なり。

世中の四種の分

煩惱業の果合し、

有の節の所攝の故に、

因果雜へて節と爲す。

二二三三二と

作者は胎境界に

迷惑・發起果、

根分中に相應し、

熱惱・貧乏の果は

他の分の中に相應し

此れに十二種あり、

衆生なく、命なく、

亦た業に由つて報あり。

業壞して亦報なし。

此の三は各々自滅す。

名けて煩惱業となす。

七種の苦を應に念ふべし。

因中亦因なく、

果中亦た果なし。

智者と相應す。(梵本の一偈は今
一偈半となす。)

因果合するが故にあり。

念欲は六分となす。

二節及び三節は總略なり。

三四節は總略なり。

苦の時に五法あり、

發轉し生じて流行す。

報・流の果を二となす。

二二三二分なり。

轉出・津流果は

二二一一法なり。
力を等しうして縁によつて自ら生ず。

動なし。慧を以つて知る。

【二】漢文、二二三三二。

【三】漢文、一一三(別本三
二)二分。

【四】漢文、二二一一法。

緣生論

緣生論

聖者 鬱 楞 迦 造

大隋南印度三藏達磨笈多譯

一より三を生じ、

六は二を生じ、二は更に六を生ず。

六より三あり。

三復た四を生ず。

三より一を生じ、

中に於て所有の苦

十二種の差別は

緣生力を分つが故に。

無知と業識と

知と渴と及び取と

初と八と九は煩惱なり。

餘の七は皆是れ苦なり。

初の二は是れ過去なり。

餘の八は是れ現在なり。

惱は業を起して報を感じ、

三より轉じて六を生ず。

六より亦た六を生ず。

此の三復た三あり。

四復た三を生ず。

彼の一復た七を生ず。

牟尼説いて皆な攝す。

善淨にして説いて空となす。

應に十二法を知るべし。

名色と根と三和と

集と出と熟と後邊と。

第二と第十とは業なり。

三は十二法を攝す。

後の二は未來時なり。

此れを三時法と謂ふ。

報は還つて煩惱を生ず。

【一】 十二因緣と同じ偈文である。前者よりは明快である。之等の偈の詳しい註釋は後に出づ。其故にこの一々についての註を此處に出す要なし。

修し、終に現世に於て如來の聲教を開きて四諦の理を悟り、以て阿羅漢を證するもの。二に緣覺乘、又中乘、辟支佛乘と云ふ。速きは四生、遅きは百劫の間空法を修し、其の最後生に於て如來の聲教に依らず飛花落葉の外緣に感じて自ら十二因緣の理を覺り、以て

辟支佛果を證するもの。三に大乘、又菩薩乘といふ。三無數劫の間、六度の行を修し、更に百劫の間三十二相の福因を植え、以て無上菩提を證するもの。或ひは之を羊鹿牛の三車に喩へ、或ひは之を象馬兔の三獸に比ぶ。之れ大乘の三乘である故に不愚法の二乘

を攝しない。

【二】南賢豆國。賢豆は *githi*、*githi* の音譯か。信度と共に印度を指す。

【三】三藏師。三藏は經律論をいふ。三藏師とは譯經三藏の意にて、三藏に通ずるものをいふのであらう。こゝにてはこの經論の譯者等をいふ。

【四】葉本。梵經を記した多羅葉をいふか。印度古代にては甘蔗の葉の一種に小鐵刀にて搖き記し、之に煤をなすり、記録す。

對。對校の意か。

【五】扣。たゞく、うつ。更相扣擊、互に討究し合ふことを言ふか。

緣生論序

原是れ一心にて、積つて三界と爲り、癡流は漫速に、苦樹は鬱高たり。其の際を討ねんと欲するも、其の末を測り難し。理は實相の門を極め、筈は假名の域を窮む。五因七果・十有二分緣生之法、總て此に備れり。凡ては則ち迷ふて妄を起し、聖は則ち悟つて以つて眞に通ず、下は免浮に似て、上象度るが如し。大なる哉、妙覺。淵なる乎洞盡。十地は雙林と俱に暢ぶ。聞城と共に稻芋成敷く。此の經の若きに至つては獨り彼の例を苞む。彼の未だ説かざる所。此れ乃ち具さに演ぶ。緣に攀つて首と爲す。對治して末と爲す、總れば則ち一十一門なり。別すれば則ち百二十間なり。其の旨微にして密なり。其の詞約して隱る。經の綱目は攝して茲に在り。并に聖者、樹楞迦有り、此の經旨を附して論を作し、其の論を顯發するなり。遍く三乘の意を取り、一部の筈を執せず。先づ偈章を立て、後に論釋を興す。偈三十有り。故に亦三十論を名くるなり。大業二年十月、南賢豆國舊名天竺は訛なり三藏法師達磨笈多・與故翻經法師彥琮、東都上林園に在り、林邑に依つて獲る所の賢豆の梵本、譯して隋言と爲し、三年九月其の巧乃ち竟る。經二卷・論一卷、三藏師、論を究めて闡明に、義解して沈密なり、琮法師は經論に博通し、兼ねて梵文を善くす。共に葉本を對し、更に相扣繫す。一言の遺す靡らず。三覆して審を逾ゆ。辭頗る簡質に、意存すること尤正なり。之を昔人に比するに差、尤失も無し。眞に法燈と曰ひ、智藏と稱するに足れり。願くは後際を窮め、常に世間を益せんことを。云爾。

【一】漫。あまねし、ひろし。はるけし。

【二】筈。魚を取る竹器、ふせう、うへ、やな(?)。

【三】五因七果。十有二分緣生、後註を見よ。

【四】下似免浮。免は免(うさぎ)か。免浮(う)に似たりか。

【五】原文、大哉妙覺、聞中洞盡、十地與雙林俱暢、兩彼共稻芋成敷。至著此經獨苞彼例。

【六】十地。大乘菩薩の十地を次に擧ぐ。一、歡喜地。二、離垢地。三、發光地。四、焰慧地。五、極難勝地。六、現前地。七、遠行地。八、不動地。九、善慧地。十に法雲地である。

【七】雙林。特に俱尸那竭城外の沙羅双樹林をいふか。

【八】聞城。舍衛城(Savatthi)の譯か。Savaththiに關する意味あり。

【九】對治。煩惱を斷ずること。

【一〇】樹楞迦(Ullāsa)。

【一一】佛跡不明。

【一二】三乘。人を乘せて各其の果地に到らしむる教法を乘と名く。一乘乃至五乘の別あり。其の中三乘に四種あり。一は大乘の三乘なり。一に聲聞乘、又小乘と言ふ。速きは三生、遅きは六十劫間空法を

やうに、輪の如く轉ずるとする。

而してこの因果關係を十二因縁と同じく誦・燈・印と像、面と鏡、種子と芽、酢と舌涎との例によつて説明してゐる。

更に内外・受用の十種を列記し、最後に無明・行・渴愛・取・有を集締とし、識・名

色・六入・觸・受・生・老死を苦締とし、十二分の滅が四諦中の滅諦とし、是の如き縁生を知るのを道諦としてゐる。

而して之等は明かに大乘的の見解に立つ所多い。その論述は組織的にして緻密、到底十二因縁論の問答體に比すべき

ではない。

本書の異譯として大乘縁生論(Mahāyāna-nidāna-sāstra)がある。後に唐代に不空(Amoghavajra、紀元七四六—七七二)に譯された。

昭和六年十月二十二日

譯者 平等 昭 識

として之の摘要を圖表にて示せば、

十二因縁を三分類して

として を數ふ

三煩惱—無明・渴愛・取

二業—行・有

七報—識・名色・六入・觸・受・生・老死

十二因縁を時に分つては

過去時—無明・行

現在時—識・名色・六入・觸・受・渴愛・

取・有

未來時—生・老死

因と果とに分けて

五種因—無明・行・渴愛・取

七種苦(果)—識・名色・六入・觸・受・生・

老死

之を更に四種に分つて

第一分—過去時—無明・行

第二分—現在時—識・名色・六入・觸・受

第三分—現在時—渴愛・取・有

第四分—未來時—生・老死

之を所攝によつて分ければ、

無明—煩惱分

無明所攝—行—業分

識・名色・六入・觸・受—報分

渴愛・取—煩惱分

渴愛所攝—有—業分

生・老死—報分

節・並に總略によつて分ければ

第一節—有生の兩間

第二節—行・識の兩間

第三節—受・渴愛

第一の總略—無明・行

第二の總略—識・名色・六入・觸・受

第三の總略—渴愛・取・有

第四の總略—生・老死

之を發生的に分類すれば、

二種—無明・行……………作者

二種—識・名色……………胎藏

三種—六入・觸・受……………境界

三種—渴愛・取・有……………發轉

二種—生・老死……………出生

之を四種果によつて分てば、

一、第一無明根

迷惑果—無明

發起果—行

報果—識・名色・六入

津流果—觸・受

二、第二渴愛根

熱惱果—渴愛・取

貧乏果—有

轉出果—生

津流果—老死

簡單にして理解し難いことと思ふが、詳しくは本文を参照されたい。

更に斷見・常見・有無の二邪見を破し、

我・我所に執するを破し、空を立て、現象

界の出來事は凡て縁起生なりと説き、無

明・渴愛・取の三より行の二が生じ、行の

二より識・名色・六入・觸・受・生・老死の七

が生じ、この七より前の三が生じ、この

三より前の二が生じ、二より七が生ずる

緣生論解題

緣生論は前の十二因緣論 (Vidana or Pratityasamutpada-Sastra) と相類するものであつて、前者より詳しき十二因緣偈文を更に詳しく釋密に註釋したものであつて、聖者憍勝迦 (Ulagha) の著で、達磨笈多 (Dharmagupta) の譯とされてゐる。

一、著者・譯者並びに成立年代

著者の聖者憍勝迦 (Ulagha) については知られてゐない。譯者達磨笈多 (Dharmagupta) は法密又は法藏と譯され、羅邏 (即ち南方印度の州) の沙門である。隋代に支那に來り、紀元五百九十年から六百拾六年に數卷を譯し、六百拾九年に死んでゐる。現在藏經中に十部譯經が残

り、その中には金剛能斷般若波羅密經・佛說大方等大果菩薩念佛三昧經・佛說緣生初勝分法本經緣生論等がある。本論は紀元六〇七年に譯出された。

本論には序文が附してあるが、之は翻譯由來を記し、極めて難解古雅な文であつて、譯者達磨笈多が書いたものではないらしい。之には三界が五因七果・十二緣生法によつて生起してゐることを大乘的態度に於て記し、聖者憍勝迦が三十論を作つた由來を記し、大業二年十月南賢豆 (印度) の三藏法師達磨笈多と翻經法師彦琮が譯出して、三年九月に成つた。博識であつたが、よく對校論究し、極めて慎重であつて、辭簡潔で意通じ、昔の人に比し決して劣らないと記してゐる。

この序文によつて緣生論の成立年代は

知り得ないが、原本が梵文であることと翻譯年代との際の狀況を略し知り得て貴重な記述である。

二、結構並びに内容

一、結構 緣生論は十二因緣と類を同じうして先づ十二因緣に關する三十論本 (偈文) を出し、之に對して印度の普通の註釋書の如く、更に四句 (恐らくこの四句は梵文にては一頌 *Ula* を爲すのであらう) を引用し、之を克明に詳細に註解してゐる。三十論本も梵天よりは長く、詳しく、十二因緣を分類し、因果關係を説明してゐる。然し十二因緣論の場合と同じく、之のみにては難解にて數字にて示すことのみ多く、理解し難い。その註釋も亦十二因緣論と趣を異にし、本格的な註釋であつて精緻である。

二、内容 内容は本論に於ては更に前者よりも詳細にして理解し易い。蛇足

のない有情は四蘊（色蘊を除く）から成る。

【三】相似。相似覺、相似即、相似位など、菩薩の階位に名ける。相似覺とは起信論所説の四覺の第二。菩薩十住十行十廻向の三十位に於て、眞覺に類せる智慧を發して諸の煩惱を制伏する位に名ける。相似即、天台所立の六即の第四。

五十二位の中の十信にして、六根清淨の徳を得る位である。四教には之を内凡とする。此の智は有漏であるが、無明を斷すべき眞無漏智に似るが故に相似と言ひ、初後の位が不二であるので、即と言ふ。

一、生因。四大種所生する色を生ずるを生因と名ける。二、依因。造色生に已りて大種に隨逐すること弟子の師に依る如きを依因と名ける。三、生因。四大種所造の色を任持すること壁の畫を持する如きを生因と名ける。四、持因。所造の色をして相續して斷絶せしめないのをいふ。五、養因、

四大種所造の色を増長するを養因と名ける。此の五因は六因の中には能作因の攝、四緣の中には因緣の攝である。然し、この五因は緣生論によれば、無明・行・渴・愛・取・有七苦とは同じく識・名色・六入・觸・受・生老死を言ふらしい。

き等の句あり。中に於て偈あり。

無縁生を見ず。

諸の最妙の事に於て、

中に於て所滅なし。

應に見るべし。諸質の如し。

決定して是れ正義なり。

是の故に斷を成ぜず。

亦復た所増なし。

隨狀及び彼の如し。

を言ふ。此界は欲界の上に在

つて婬食の二欲を離れたる有

情の住所にて、身體・宮殿等

物質的の物は總て殊妙精妙な

ので色界と名ける。此の色界

を禪定の淺深血妙によつて四

級を分つて四禪天と稱し、新

には靜慮と云ふ。此の中に十

六天、十七天、又は十八天を

立てる。三、無色界、此の界

には色即ち物質的の者は一も

之なく、身體も宮殿國土もな

く、唯心識を以て深妙なる禪

定に住するもので、之を無色

係に喩へる。

【九】安石榴。ざくろ。

菴羅(Anjira)、マンゴーの木。

甘き實を生ず。學名 Mani-

Sitara Indian

【一〇】中陰。又中有といふ。

此に死して彼に生ずる中間に

於て受くる陰形を言ふ。陰は

五蘊の陰なり。(新譯には五蘊

といふ。)俱舍宗では一定の中

陰ありとし、成實宗には無し

とし、大乘宗には有無不定と

する。極善極惡の人には中陰

なく、直ちに所至に至る。餘

分が相集つて其用を作すと、

概して之を陰又は蘊と言ひ、

之を大別して五法とする。一、

色蘊、五根五境等の有形の物

質を總括する。二受蘊境に對

して事物を受け込む心の作用

である。三、想蘊境に對して

事物を想像する心の作用であ

る。四行蘊、其他境に對して

曠り貪る等の善惡に關する一

切の心の作用である。五識蘊、

境に對して事物を了別識知す

る心の本体である。之を一有

情に徴すると、色蘊の一は即ち

答へて曰く、「^一偈に言く、「誦・燈・印・鏡・響、日・珠・種子・水。」と。是の如き等の諸喩、證と爲して取るべし。信は口體なし。性の假名なるが故に。言有り。現在世・未來世は、師の誦する所の如し。實は師に從はざるも、轉じて弟子に至る。師に從はずと雖も轉じて弟子に至る。豈に弟子の義を授くるを成ぜざるべけんや。弟子無因にして得ると言ふ可し。妄計を遮護して因の患なきが故に。是の如くして命終るに臨む時、心識、未來世間に至らず。常患を防ぐが故に。未來身は餘處より來るに非らず。妄計を遮護し、因の患なきが故に。師誦するを因となし、弟子をして得しむ。彼、説く可らず。即是れ亦不可説をなすを以て、一向異となす。是の如くして命終るに臨むの時、心識を因となす。是の故に後身心識を生ずるを得。彼の心識は、一と説く可からず、異と説く可からず。亦た彼を離れず。亦た彼に即せず。是の如く燈より燈を生じ、印より印を生じ、鏡より象を生じ、聲より響あり。日より珠より、火を出生し、種子より芽を生ず。ⁿ安石榴・菴羅菓等の如し。口より涎水を生ず。是の如き等の法、彼れに即すると名けず。彼に異ると名けず。是の如く一切の諸（ぶく）の因縁法、轉不轉の事、諸の有智者は善く思量して應に知るべし。是の^o中陰とは、所謂^二色受想行識を説くなり。彼の託生とは、此れ諸の陰滅なり。彼の陰を滅するによりて、後^三相似生ず。然るに實は一毫實法あるなく、此より彼に至る。此れ是れ世間漸時の義なり。是の義を以ての故に、一切世間は無常・不淨・苦・無我等なり。以て能く是の如き事を觀察するが故に、諸法中に於て疑惑を生ぜず。疑惑せざるが故に、則ち染を生ぜず。染を生ぜざる故に則ち著を生ぜず。著を生ぜざる故に、虚渴ならず。虚渴ならざる故に則ち業を造らず。業無きを以つての故に事を取らず。事を取らざる故に有爲行を造らず。有爲行なき故に則ち復た生ぜず。不生を以ての故に、一切身心等の苦あるなし。是の如く^五五種の因を造らざる故に、則ち彼處に於いて^七七種の果なし。果無きを以ての故に名けて解脱となす。是の如く作す故に、則ち是れ不生不滅不常不斷を成ずと釋す。有邊無邊是の如

感歎、受を感情、愛を愛慾、取を執着、有を存在、生老死は生老死と解し、無明を因とし乃至生老死を生じ流轉し、無明を斷ずれば、生老死即ち流轉が斷ぜられると解する如くである。更に十二因縁を四種に分類す。本論と關連する所多し。

一に利那、是は利那に於て十二支を立てるのである。利那の頃に食に出つて殺を行ずるのに十二支を具す。即ち食は無明である。殺を行はうと思ふ、思は行である。所殺の人其等の諸境の事に於て了別するのは識である。その識と俱である色想行の三蘊は名色である。名色は是は總で、六蘊は是は別で、別は必ず總に在つて住する。その所在の法は即ち六蘊である。意處は過去に屬するが、もと六蘊の攝であるので、六蘊と名ける。六蘊は是は根であつて、餘の諸境と合して生ずる心所は觸である。觸を領する心所は觸である。觸を領する心所は受である。食は即ち受である。(殺を行すの本の貪心)食と相應する諸煩惱は取である。此に依つて起す所の身語二業は有である。是の如き諸法の起すのは生である。その法の熟變するのには是は老である。そ

し。餘の七とは、謂く識・名色・六入・觸・受及び生老死なり。恩愛と別離し、怨憎と合會し、所求を得ず。是の如き等の法は一切苦を生ず。是の如き諸分は向の所説に於て、煩惱・業・苦を以て根本と爲す。應さに知るべし。十二分を攝するに、唯だ三事ありて、更に餘の法なし。一切經中但此の分あり。更に餘有るなし。』と。

問ふて曰く、『已に此れ等諸勝分の義を知る。我の爲めに煩惱・業・苦の何處に在るかを解釋せよ。復た云何ぞ一切諸事を成するや。』

答へて曰く、『三より二を生ず。三とは是れ煩惱なり。二とは是れ業なり。謂く煩惱よりして業を生ず。二より七を生ず。七とは是れ苦なり。謂く業より苦を生ず。七より三を生ずとは、謂く苦より煩惱を生ずるなり。此くて説く。煩惱業苦の三種迭互に相生すと。是の故に有を生じ、輪轉不定なり。言ふ所の有とは、所謂欲・色・無色界等なり。彼中に住せず。喩へば輪轉の如し。彼の有を以ての故に、一切世間の凡夫衆生は次第上下して猶ほ輪轉の如し。中にありて不定なり。不定を以つての故に、三處ありと説く。』と。

問ふて曰く、『彼れ一切身を造る。自在なる衆生とは何者か、是れ彼の作事なるか云何。』

答へて曰く、『偈に言ふ、一切世間の法は、唯因果によりて、人あるなし。假りに説くを除くが故に有り。此は是れ正思量なり。彼、性を説くに非らず。是の故に衆生を作すを見て成ぜず。』

問ふて曰く、『若し是の如くんば、云何ぞ現在の世間より未來の世間を取ることを得るや?』
答へて曰く、『乃至一毫等の法あるなくして、現在世間より未來世間を取る。是の故に偈に言く。

「但だ諸空法より、唯だ空法を生ず」と。此れ自我我所の空なるを明かにす。謂く煩惱業處、此の五行の性は無我を離る。應に是の如く取るべし。』と。

問ふて曰く、『若し性は無我法中にして、行性無我ならば、今何を説いて證となすや。』

廻の極りなきを知るのである。即ち現在の惑(愛取)業(有)より現在の苦果(識乃至受)より生ずるのを見れば、過去の惑(無明)業(行)が亦過去の苦果から生ずるのを知り、既に現在の苦果(識乃至受)現在の業(有)を生ずるのを見れば亦未來の苦果(生老苦)未來の業を生ずるのを知る。之を週れば、過去の惑業は更に過去の苦果より來り、之を趁へば未來の苦果は更に未來の惑業を生じて過去に始めなく未來に終なし。之を無始無終の生死輪廻と云ふ。辟支佛は之を觀じて一は以て生死を厭ひ、一は以て常實の我體なきを知り、遂に惑業を斷じて涅槃を證するのである。而してこの中因と縁とを分別すれば、行と有との二支は因であつて、無明と愛取の三支は縁である。余の七支は總じて果である。但し果遣つて惑業の因縁を起す縁となれば、之を縁の中に攝して別に果の名を存せず、因縁觀といふのである(識田、佛教辭典)。

之の解釋は論師の解釋にて本論次の緣生論の解釋に近いものである。然し、原始佛教では、無明を無智、行を盲目的意志、識を認識、名色を精神と物質、六處を感官、觸を

牟尼の演説する所の

因縁所生の法。

是の如き等の諸事

顯くは我が爲めに解釋し、

師、弟子の意を見、

恭敬して請示するの故に

十二勝上分

煩惱・業及び苦は

是の中十及び二

彼れ不異分を以つての

車輿分の如き故に

十二勝上分

彼は三の爲めに攝する所なり。

今知らんが爲めに請問す。

我が疑網を除斷せよ。

法に於て渴仰を生じ、

即ち答へて言く。「汝聽け、

彼は三の爲めに攝せらるゝ所にして、

次に説く。應當に知るべし。

故に曰つて十二と爲す。

故に名けて勝分と爲す。

勝分と説く。應に知るべし。

牟尼とは名けて寂滅と爲し、亦た無分別と名け、亦名けて定となし、亦無言説と名く。彼の牟尼の所演、宣暢辨説す。是を假名と名づく。然かも彼は是れ大人丈夫に非らず。自ら定に在る時、性相の生ずる所。但唯因縁所生にして成ずる故に。彼の十二分は、煩惱業及び苦處に於て、三法迭互に共に因縁と作る。瓶案を拒くが如し。是の如く三處攝する所、應に知るべし。

問ふて曰く。「何者を煩惱となすや。何者を業となすや。何者を苦となすや。而して此の諸の因縁法あるを得て、勝分攝し成ずるや?」

答へて曰く、「此の十二勝分の中に於て、初めを無明となし、第八を愛となし、第九を有となす。

第三勝分は是れ煩惱の所攝なり。第二を行となし、第十を有となす。此の二勝分は是れ業の所攝なり。餘の七勝分は是れ苦の所攝なり。此は是れ煩惱・業・苦等の三、十二勝分を攝す。應に知るべし。

歳の間事物に對して未だ苦樂を識別することなく、唯物に觸れんとする位である。七、受 Vedana、六七歳から已後漸く事物に對して苦樂を識別して之を感受する位である。八、愛 Tṛṣṇā 十四五歳已後種々の強劣なる愛欲を生ずる位をいふ。九、取 Upādāna、成人已後愛欲愈々盛にして諸境に馳驅して所欲を取求する位をいふ。十に有、Bhava、愛取の煩惱によつて種々の業を作り、當來の果を定める位をいふ。有とは業であつて、業能く當來の果を有するので、有と名けると。十一、生 Jāti、即ち現在の業に依つて未來に生を受ける位を言ふ。十二、老死 Parinirvāṇa、來世に於て老い死する位である。

此の兩重の因果に因つて輪

十二因緣論一卷

淨 意 菩 薩 造

後魏北印度三藏菩提流支譯す。

牟尼尊。

略して因緣論を作る。

牟尼の演説する所

因緣所生の法は

煩惱・業及び苦は

煩惱は初八九、

餘の七は説いて苦となす。

三よりの故に二を生ず。

七より復た三を生ず。

一切世間の法は

但だ諸空法より

誦・燈・印・鏡・響

諸陰轉じて轉せず。

弟子有り隨所聞法を成就して、能く受持するに堪ゆ。如來の法を忘失せざらしむ。謂く事・非事及び性相等、是の如き義を中心として疑惑を懷き、知るを得ん爲めの故に問ふて尊者に言く。

妙法・比丘僧に歸命し奉る。

義を顯現する爲めの故に。

十二勝上分は

彼、三の爲に攝せらるる所なり。

次に説く。應當に知るべし。

業は二及び十、

三は十二法を攝す。

二よりの故に七を生ず。

是の故に輪の轉する如し。

唯だ因果にして、人なし。

唯だ空法を生ず。

日・珠・種子・水

智者善く思量せよ。

【一】 以下二十六句は頌文であつて、之に對する註釋的の釋文が来る。頌文は簡潔總解であるが、次の「緣生論」の釋文と参照する時に發明するもの多い。

牟尼以下の二句、佛法僧に對する歸敬文である。牟尼尊、牟尼(Muni)、聖者、仙士の意。こゝでは佛に用ふ。後に牟尼の註出つ。

【二】 十二因緣。勝上分、十二因緣(Dvadasāṅga-Puṭṭhya-samutpāda)を言ふ。譬支佛の親門であつて、衆生が三世に涉つて六道に輪迴する次第緣起を説いたのである。一に無明 avidyā、過去世の無始の煩惱を言ふ。二、行 saṃsāra 過去世の煩惱に依りて作つた善惡の行業を言ふ。三、識 vijñāna 過去世の業に依つて受けた現世の受胎の一念を言ふ。四に名色 nāmarūpa、胎中に在つて心身の發育する位をいふ。名とは心法であつて、心法は體を以て示すことが出來ず、名を以て之を詮すのでかういふと。色は物質であつて、眼等の身である。五、六處 ṣaḍāyatanā 六根のこと、六根が具足して將に胎を出でんとする位である。此の中に五位がある。六、觸 Avara 感覺であつて、二、三

次名色 Nama-rūpa 六處 Saḍḍayatana

觸 Sparsa 受 Vedanā 愛 Tisṇā 取

Upadāna 有 bhava 生 jīti があり、生

あるにより老死 Jaṇantya があるとす

る。かくして無明を断すれば漸次行識以

下を断じ、生無ければ老死の苦なく、解

脱・涅槃の境地に達し得られると説くので

ある。本論はこの十二因縁を更に阿毘

達磨論的に分類し、更に大乘的に解釋し

たものを註釋したのである。

即ち本論は十二因縁を次の如く分類し

てゐる。

第一無明・第八愛・第九有——煩惱所攝

第二行・第十有——業所攝 一切苦を生ず

餘の七(識・名色・六入)——苦所攝

三即ち(一)煩惱より 二即ち(一)業を生ず

二 業 ↓ 七 苦

七 苦 ↓ 三 煩惱

三 煩惱

而して三世の現象は凡て因果關係によつ

て生起するのであつて、現在・未來の關係

は師誦し、弟子に轉じ、燈より燈が生じ、

印より印が生じ、鏡より像が生ずるが如

くであると言つてゐる。

互に生ず

この間の十二因縁説の説明に相當進んだものがある。

この經は同時に次の縁生論と十二因縁偈文を註釋する點に於て同一傾向にあるものである。

昭和六年十月二十日

譯者 平等 昭識

十二因緣論解題

十二因緣論一卷は十二因緣についての偈文を中心として之を問答體にて註釋したもので、淨意菩薩の著で後魏の菩提流支の譯である。

一、著者譯者並に成立年代

淨意菩薩(Suddhamati?)はこの十二因緣論(Pattiyasamutpada-sūtra?)として記されてゐる外、何も知られてゐない。

菩提流(又は留)支(Bodhiśuci)は道希又は覺希と譯される。北印度の沙門で、紀元五百八年に洛陽に到達し、五百三十五年までに三十部以上を譯し、紀元七百年には二十九部存在してゐた。現在三十部が著作中に入つてゐる。その中には入楞伽經・金剛般若波羅密經・佛說佛名經・一地經論等を譯してゐる。

十二因緣論の成立年代を知る手係りはない。淨意菩薩の生存年代が不明であり、又その眞作なりや否やを決定することも出来ない。唯菩提流支の最低翻譯年代が紀元五百三十五年である爲、其迄に成立して居つたことは確實である。十二因緣論の偈文は相當發達したものであり、小乗のものとは思はれないから、比較的後世に成立したことは頷かれる。四、五世紀のものであらうか。

二、結構並に内容

一、結構 十二因緣論は先づ十二因緣についての偈文二十六句を引用し、之に就いて弟子が疑問ありて質問し、師が之を説明する體裁となつてゐる。この偈文なるものは極めて簡潔にして數字を以

て十二因緣を各種に分類し、その緣起關係を説明してゐるのであるが、この偈文のみにては何人と雖も全く判讀し難き底のものである。(之の偈文は次に出す緣生論の偈文と同類である)。

之に對し、前述の如く弟子と師が問答して理解して行く形式になつてゐるのであるが、勿論之は假りに師弟間の問答體となし、偈文を明かに平易に理解し易く註釋して行かうと意圖してゐるのである。即ち體裁は問答體であるが、事實は偈文の註釋書なのである。

二、内容

内容は通讀されれば釋明する所であるが、之を略解すれば、元來十二因緣(Dvādaśāṅgapattiyasamutpada)は略せば現象界の流轉輪廻の姿を因果關係緣起觀によつて説明せんとし、生死の苦の因を求めんとしたものであつて、無明 Avidyā あるによつて行 saṃskāra あり、行あるにより識 Viñāna あり、順

骨腐敗す。是を以て生死の過患を種々思惟し、即時に覺悟して、辟支佛を得て、身虚空に昇りて千人變を作す。母即ち復た請願して『遠く去るなかれ。園苑中に住して我が供養を受けよ。』と。時に辟支佛、諸母の請を受け、即ち後園に住す。日日供養して多時を経歷す。時に辟支佛、是の有身を厭ひて、即ち棄捨てて涅槃に入る。諸母戀念して、大に香薪を積んで、以て其の身を焼く。其の舍利を收めて寶瓶に盛著し、即ち後園に於て爲めに大塔を起す。時に轉輪王、四城に遊んで還り、後園の中に到りて大塔あるを見て、怪んで之を問ふ。時に守園者、王に白して言く、『是は王の最小の子なり。辟支佛を得て、此に於て涅槃す。諸母此に於て其れが爲めに塔を起す。』時に轉輪聖王即ち其の母を召して、之に問ふて言く、『我が子云何ぞ死して此の塔を起すや。』時に其の母等具さに上事を以て王に白ふす。王、其の母を責む『我兒得んと欲して、何ぞ我れに語らざる。今涅槃すと雖も、王の容飾を以て塔上に置かん。』是の因縁に由つて、無量劫中、恒に轉輪聖王となり、自然の福を食ふて今に至るも盡きず。若し生死に處して、應に二千五百世轉輪聖王と爲るべし。成佛に由るが故に。二千五百の寶蓋を得。阿闍世王、佛に上つる五百寶蓋、毘舍離律車子、佛に上つる五百寶蓋、海龍王、佛に上つる五百寶蓋、阿須羅王亦た佛に上つる五百寶蓋、天帝釋亦た佛に上つる五百寶蓋なり。爾の時世尊唯一蓋をも受けず。何を以ての故に。將來の弟子若し衣食供養乏しき爲、此の福力を以て當に人天をして自然に供給せしむべし。是の因縁を以て、當に知るべし。賢聖の福田は深廣にして無量なり。

辟支佛因緣論卷下

【三】阿闍世王 (Ajatashatru)。普通未生怨と譯す。但し、生れながらに敵なき意なり。佛在世の頃、摩訶陀國王舍城の治者。父頻婆娑羅 (Bimbisara) 王を弑して即位す。母は韋提希夫人。韋提希懷胎の時、相師占つて此兒生れて父を害すべしといふ。由つて未生怨と名く。未生以前より怨を結ぶ意といふも、これは合成語 (Compound) の解釋の上から當つてゐない俗説である。

(荻原雲來博士説)

【三】毘舍離律車子 (Vishali-yani Itthivari)。毘舍離は城名にて國名。律車は族名。詳しくは前出。

【三】阿須羅 (Asura) 王。阿修羅は六趣の二で、戰を好み、常に戰鬥に従ふと言はる。

て言く、

「女能く愛を生ずる如く、

人中ら爾らざるなし。

還た復た大惡を生ず。

恩愛合會の時

我が愛樂する處のものは、

一旦にして死は來集せん。

云何ぞ是れ樂あらん。

恩愛合會の時にして

老病死患を畏るべし。

此の思惟を作す時、

即ち王者の衣服・璣珞を著けて、飛んで虚空に昇り、虚空の中に於て、上の如き偈を説く。變じて

沙門となり、飛んで雪山中諸辟支佛所に到る。

九、轉輪聖王最小子、辟子佛を悟る緣

過去無量劫の時、一二九轉輪聖王あり。千子具足す。其の最小子、父の金輪寶に乗じて七寶具足

し、四兵翼從鼓蓋容飾悉く皆具備せるを見て、其の最小子即ち母に問ふて言く「我、何れの時にか

是の蓋等の種々容飾を得べき？」母即ち答へて曰く、「汝の骨朽るに至るも亦た是を得ず。」見即ち

問ふ言く、「何を以て得ざる？」「汝九百九十九大兄有り。應に位を紹ぐを得べし。其の次第を計ら

ば、都て汝に至らず。」見即ち思惟して「我は既に是の如き容飾を得ず。生あらば必ず死ありて、形

生累極めて衆多なり。

愛に因りて樂を生ず。

愛は苦の根本となす。

必ず是れ無常を知る。

端政と盛年となり。

是を以ての故に當に知るべし。

唯智慧ある人は

當に喜樂を生じ、

是の故に我永く離れん。

即ち辟支佛を得たり。

即ち王者の衣服・璣珞を著けて、飛んで虚空に昇り、虚空の中に於て、上の如き偈を説く。變じて

沙門となり、飛んで雪山中諸辟支佛所に到る。

九、轉輪聖王最小子、辟子佛を悟る緣

二八

【二九】轉輪王 (Cakravartin-
Rajan)。世界統一の理想王。

詳しくは前出、以下千子、七
寶四兵等轉輪王の特相である。

【三〇】印度の軍制は四種の兵
に分り。歩兵 (Patan)、騎兵

(Asva)、車軍 (Ratha)、象軍
(dandina) である。之を王、

軍師の補佐によつて率ゆ。將
棋の王、車、角等は之より來

ると。歴山大帝も象軍には惱
まされた。象軍は象を酒に酔

はして、敵軍中に放ち、敵兵
を採捕せしめるのである。車

軍は戰車である。

是の如し。王、宮人の是の如く憂へ苦むを聞き、心中驚動し、天冠・璽路、身に著する服飾を皆地に棄て、入つて喪邊に到る。諸姝女を見るに、哀苦理極まれり。王是を見已つて大愁惱を生じ、而も自ら思惟す。即ち偈を説いて言く、

「譬へば盛暑日

能く好花を炙つて萎らすが如し。

死日、人形を消し、

面色、青黒に變ず。

犀齒は塵垢に穢れ、

眼は陥り、鼻角は戻る。

歌舞する妙容儀は

轟直して木石の如し。

先には能く我をして

極樂處に愛著せしむ。

云何ぞ卒する今日は

能く我に怖畏を生ずるや？

惡むべき生死の思は

不淨にして極めて臭穢なり。

夢の如く虚しく實ならず、

亦芭蕉の心の如し。

堅實の相あるなし。

幻泡・泡沫の如し。

暫らく現して水波の如し。

智者厭惡する所、

知らずして觀察する者は

横に樂著の想を生ず。

此の不淨の中に於て

横に身想を生じ、

迷悶して守著すること、

猶ほ睡眠者の如し。

是の如く思惟し、未だ久しからざる間、夫人の屍を焼いて喪事已に竟り、第二夫人已が過を藏さん爲に、好飲食を食し、詐つて自ら懊惱し、斷食せんと欲すと言ひ、現に哀慘を作す。然かも其の過の彰露して發覺するを恐れ、心中愁結す。愁結を以ての故に、飲食消せず、即ち大病を成す。王、病を見已つて倍す懊惱を増し、即ち厭惡を生ず。是の如きは皆是れ生死の過患なり。即ち偈を説い

神通力を以ての故に、

即ち沙門の形となり、

尋ねて虚空の中に於て

即ち飛んで雪山中諸辟支佛所に至る。時に辟支佛問ふて言く。何の因縁を以て悟道果を悟るを得たるや? 具さに上の偈を説いて之れに答ふ。

八、波羅捺國王親軍、辟支佛を悟る縁

世間戲笑の樂

悉く皆な放棄捨して

諸根悉く寂定にして

我れ昔先師に従つて

鬚髮自然に落つ。

身を踊らして虚空に昇り、

即ち上の如き偈を説く。

及び我・我所を愛す。

心意は解説を得る。

獨行すること犀角の如し。

此の如き事を傳聞す。

過去波羅捺城王^{ワッラナセキ}を名けて親軍と曰ふ。二夫人あり、心甚だ愛悦す。欲事に樂著して恒に放逸を爲す。耽荒醉^{ニヒク}へるが如し。亦た香山^{ニヒク}の逸象^{ニヒク}、香流出づる時^{ニヒク}、摩梨山に入り、自ら欲事を縦にするが如し。時に二夫人更らに相ひ妬嫉し、各々相ひ伺便す。其の一夫人、便ち毒藥を以て其の親信に與ふ。親信、藥を齎らして彼の夫人に與ふ。夫人、藥を得て狂悶して臥す。甚大の苦毒ありて尋ねて便ち命終す。第二夫人其の命終るを見て、詐つて懊惱を現す。自ら其の髮を散らし、胸を搥つて哭す。宮を擧げて哀感す。王、其の死を聞いて大苦惱を生ず。夫人の左右所に直人あり、所著の瓔珞嚴身の具、悉く皆な挽絶す。土を以て身を塗じ、憂毒心に入る。彼の群鶴、鷹の爲めに逐はるゝが如し。金翅鳥^{ニヒク}、諸龍女を驚かす如し。宮中の姪女、死の警かす所と爲るも亦復た是の如し。爾の時宮中、警へば塚間の如く、又黑塵の光明を掩蔽するが如し。諸宮人等憂の弊ふ所となるも、亦復た

【二四】香山。無熱池の北に在つて闍浮提洲の最高中心。俱舍論には香醉山といふ。

【二五】逸象。生殖期にある象の意であらう。

【二六】香流。生殖期にある象はこめがみより芳香ある液を出し女家を誘ふ。麝香鹿の麝香の如し。

【二七】摩梨山。山名。旃檀を出す處。

【二八】金翅鳥(Garuda)。迦留羅の譯。神話的の鳥王。四天下の大樹に在り、龍を取つて食となす。八部衆の一。

王、彼の國に隨つて即ち其の位を捨て、微服して國に行じ、漸々經歷して、行いて三婆翅多城に至る。彼の城に到り已るに、異國王、軍を興して來り伐つあり。婆翅多王國樂の爲めの故に、兵を興して往いて拒ぐ。兩陣交戦して二王俱に死す。婆翅多城諸王子等、競ふて共に國を諍ふ。復た大に戦闘す。毘羅仙王、是の事を見已つて、唱へて「怪しい哉」と言ふ。即ち偈を説いて言く。

「王位、尊豪なりと雖も、

云何ぞ是の爲めの故に

競心、鬪戦を生じ、

蠅の食蜜を食るが如く、

人も亦復た是の如し。

鬪戦して自ら傷害す。

多く諸の苦惱を集め、

雜毒の漿を飲むが如く、

一己身の爲の故に、

愚にして王者の樂を食り、

我今より永く止めて、

而して此の國の事務

榮樂は須臾の頃にて

譬へば妙金屋の如く、

智者は燒香を畏れ、

是の思惟をたすの時、

其の樂甚だ輕微なり。

具さに諸の苦毒を受けん。

樂んで衆惡に著隨す。

著蜜して喪はざるなし。

小樂を食る爲めの故に、

王位は鄙賤すべし。

患害用ひて滅に至る。

毒消へて身敗喪す。

多く傷害する所あり。

樂少くして苦甚だ多し。

更に此の樂を求めず。

憂怖其の中に充つ。

憂患の苦延長す。

火焚炎して熾然たり。

應に其の中に入るべからず。」と。

即ち辟支佛を悟る。

【三】 婆翅多城。前出。

【三】 毘羅仙王。事跡不明。

出離を忍業して

能く貪愛癡を盡して

解脱を得るに由るが故に

曾つて先師所に從つて、

昔辟支佛あり、過去佛所に於て諸の善根を修す。最後身に於て拘舍彌國に生れ、拘舍彌王と爲り、

其の國土内大災變あり。大旱・惡風・五星倒錯す。王、太使・占相の徒を召す。偈を説いて問ふて言

く、「何に緣りて是の災ある、

虚空に雲翳なく

肉を食ふ諸惡鳥

虚空中に、^{三は}適かに翔び

咸な是の如き災を言ふ。

能く諸妖異

諸苦を斷滅し、

其の心、解脱を得。

獨一なること犀角の如し。

是の如き事を聞くを得たり。

大旱、降雨せず、

日を觀るに威光なし。

烏・鶯及^二・鴉・梟

見る者、恐怖を生ず。

是れ誰れの所作にして

怪變をして乃ち是の如くならしむるや。」

爾の時太史即ち王に答へて言ふ。「我が所知に隨へ。今當さに説をなすべし、我が意の如んば、

一切國民必ず逼迫苦惱の事あり。」と。王復た問ふて言く。「當に何方を以て此の災患を積ふべき。」太

史白して言ふ。「王若し國をして安隱ならしめんと欲せば、當に我が語に隨ふべし。即ち偈を説いて

言く、

王若し能く退位し、

具足すること六月に滿つれば、

災患自ら消除し

服を脱して餘人と與にし、

微服して行乞せよ。

王、當に滿月の如くなるべし。」

【一】五星。七曜として日月と火水木金土の五星を言ふ。

五星とはこの内の後の五をいふ。

【二】太使占相。星宿等によつて占ふもの。

【三】鴉。鴉と同じ。鳥の子を捉り食ふ一種の惡鳥。ふくろふ。

【四】適。はるか、遠く。

頭破る者あり、手脚を折る者あり、身體碎壞す。爾の時王子是の衆苦を見て、厭患思惟して、是の言を作す『此は我を覺悟せしむ。是の如き盲人も亦曾つて富貴なりき。縦逸に依るが故に今是の苦を得。我は今に於て是の事を觀じつて、宜しく好んで檢行すべし。應に放逸すべからず。』と。即ち偈を説いて言く、

「譬ひ火は金鬘を燒くも、
而も用いて首飾と爲すが如し。

金鬘は珍妙なりと雖も、
熾火終に害をなす。

王位も亦是の如し。
當に慎んで放逸する莫るべし。

此盲は我を覺悟せしむ。
宜しく自ら寛縱すべからず。

此の王位に因るが故に
身、大橋慢を起し、

威、國の人民に迫り、
皆苦惱を生ぜしむ。

後自ら苦を受くる時、
苦劇しきこと百千倍ならん。

目、他の受苦を觀て、
云何ぞ能く自ら安ぜん。

此れ即ち是れ我が師
我に衆の苦患を示せしなり。』

此の思惟を作す時、
即ち辟支佛を獲たり。

爾の時王子、大いに盲者に錢財珍寶を賜ひ、沙門法服にして身虚空に昇り、諸の神變を現し、諸の親に語つて言く『我今は瞋恚・怖畏・憂愁を以てせざるが故に、汝等を嫌はざるが故に、我、親愛なる國土人民を捨つ。都べて怨親・錢財・寶物なし。上に説く偈の如し。』

七、拘舍彌國土、辟支佛を悟る緣

戲笑の衆樂具

棄捨して啼唾の如く、

我等諸親友

但だ慰諭の言あり、

及び汝の命將に絶んする時、

唯當に自ら汝を持つべし。」

王其の病を諦觀し、

深く諸の苦患を悟る。

一切有生類

病は常に人を惱患して、

一切世間の人

都て厭畏を生せず、

彼は是れ我が親屬

彼は我に親厚あり、

意は癡の病む所となり、

火災の患は前に在り、

上來諸所親

此に於て正思惟し、

王の所親内外眷屬、王の得道を見て、世事を絶棄し、愛別離火の燒然する所となり、大惱熱を生

ず。時に辟支佛の身、虚空に昇り、十八種變を作し、上の如き偈を説く。

復た有る説は云ふ。『此の王、王子たりし時、園苑の中に入り、諸盲者更に互に相捉ふを見て、王

子の出づるを聞いて、飲食あるを謂ひ、道側に在りて道路を見ず。大深坑に墮して即死する者あり。

汝の苦患に遇ふを見て、

憂愁して涙を流涕す。

能く救濟する者なし。

由來所作善し。

心、禪を得る者の如し。

『衆生決定して有り、

必ず病の趣所となる。

哀愍の心あるなし。

決定して死道に入る。

言く此は我が妻子、

此は是れ我が財賄

我は彼れに親友なり、

横に是の如きの想を作す。

愚盲にして親す、

能く救濟する者なし。』

即ち辟支佛を獲たり。

【七】十八種變。十八神變である。神は天心に名け、天然の内慧であつて、又陰陽不測の意、妙用無方の義である。變とは變動の意で、常のことを改める意、變略の義である。天然の内慧にて外に不測無方の變動改異を呈現するのを神通といふ。五通六通十通の中の神通である。

愛欲を喜捨して

我昔諸師に從つて

獨行すること犀角の如し。
傳授して此事を聞く。

昔曾て迦葉佛所に於て比丘と作る有り。智慧聰敏にして柔和、忍辱なり。日々に於て、常に諸法眞實體性を觀す。所謂陰苦空無常無我を觀す。猶ほ苗蕉熱時の炎の如く、幻の如く、夢の如く、水の泡沫の如し。能く善く觀察して自ら其の心を修す。命終つて天に生る。天壽盡くるに於て、下りて拘舍彌城に生れ、國王子と爲り、名けて大帝と云ふ。其の父王崩じ、先業を承嗣し、王位を紹繼す。劫初の諸王の如く、能く戒行を修して正法をもつて國を治む。爾の時城中に大長者あり、財富無量なり。大帝王と少しく親舊を爲して、極めて相厚く昵む。彼の大長者の身重病に嬰る。王其の疾を聞き、躬自ら往いて問ふ。長者の病んで形容萎悴せるを見て、王心樂ます、低頭愁慘たり。時に彼の長者、七寶鉢を以て中に金を盛滿し、用つて王に奉獻す。王、長者に言ふ、「汝今疾苦極めて困篤なりや。」長者對へて曰く、「願くは王顧視して我が所説を聽け。

『我が家大巨富あり、

愛語及び財寶

妻子と眷屬と

我皆な所欲を恣にし、

今我死時至り、

王即ち慰勞して言く。

汝の子、諸親と

及び我が勇健の力

是の如き等ありと雖も、

猶ほ 毘沙門の如し。

多く集り、親友衆く、

僮僕と諸走使とあり。

待遇極めて豐厚なり。

一として我が伴と爲るなし。』

『此語極めて眞實なり。

財寶衆庫藏と

象馬車歩兵、

能く救拔する者なし。

【一四】 劫初の諸王。この劫の初つた頃、千王(Manu)等の轉輪聖王(世界の統一王)現れて、政治がよく行はれた。之を言ふ。

【一五】 七寶。經によつて多少の相違がある。阿彌陀經によれば、金(Suvarna)・銀(Rūpya)・瑠璃(Vaidurya)・水晶(Sphatika)・砗磲(Musari-galya)・赤珠(Rohita-mukta)・瑪瑙(Aśmugarbha)を舉げてゐる。

【一六】 毘沙門(Vaiśravaṇa)。富神クウエーラ(Kubera)のこと。前出。

國の微少の樂を貪り、

欲忿既に増長し、

財利を貪るを以ての故に

勝解脱を求めず、

大熾火の中

怪しい哉、生死の中

極めて劬勞業を作し、

彼の高山の巔の如く

愚人、少味を貪り、

是の如く自ら思惟し、

欲泥中に没溺す。

鬪戰、是非を生ず。

互に共に相ひ殺害す。

王位を盡滅し、

飛蛾投じて死すが如し。

所作事顛倒し、

返つて其の苦殃を獲。

崖傍、蜜蜂あり、

苦に墮墜するを覺へず。

即ち辟支佛を得たり。

即ち子に告げて言く、「汝能く惡人の言を用いず、勃逆の意なし。汝若し國を治むれば、必ず正法を以てせよ。我今國を以て汝に付囑す。吾將さに去らんとす。子及び輔相・一切眷屬、王の此の語を聞きて、悉く皆懊惱涕泣流涙して、合掌して王に白ふす。「不審なり、大王よ、何處に去らんと欲するや。」爾の時父王身を虚空に踊らし、日出する山上に在り。上の如き偈を説き、沙門の服を著けて、十八種變を作す。國人の見る者歡喜せざるなし。譬へば調馬の如し。若し鞭影を見れば、即ち調順す。智人亦爾り。他の苦を受くるを見て、心即ち調順す。

六、拘舍彌國王大帝、辟支佛を悟る緣

父母及び妻子

智者深く觀察して、

穀帛・財寶等を

暫く過ぐることを、客舍の如し。

六、拘舍彌國王大帝、辟支佛を悟る緣

二〇

【三】 拘舍彌 (Kusāmbhi)。拘昧彌とも書く。中印度に在つて周圍六千里、土地肥沃で、都城の宮内に大精舎があり、高さ六十尺、内に刻檀の佛像があり、佛昇天中優曇王の作つたものであると。城東の故墟室にて世親菩薩、唯識論を作り、その東の菴沒羅林中の故基で、無著菩薩は顯揚論を作り、東北七百餘里の屍伽河の邊に加奢富羅城があり、瞿法菩薩がこゝに外道を降伏した等、發達佛敎に關係のある所が多い。

爾の時王子具さに上事を以てす。往いて父王に白うす。王、子の語を聞き、憚蹙して眼目を怒らし、赤銅の如し。王是の時に當つて、使に勅語して言く、「其未だ泄れざるに曼んで、急に追つて將來せよ。」時に王子、輔相子來ると聞き、即使ち出迎へ、既に相見し已る。尋時患に遇ふ。使還つて王に白して言く、「王子病極めて痿篤を成す。」王、是の事を聞いて即ち自ら出て看る。既に其の子の所患の困篤にして、命、危懼に在りて、四大苦痛あるを見る。此の事を見已つて、便ち自ら思惟す。此の王位は、甚だ大惡となす。然るに彼の輔相父子、陰かに我が子を教へて、天常に悖逆して、不軌を爲さんと欲す。而して我が王位は彼の能く得る所に非ず。我が子今は苦を患ひ、命垂とす。一切世人皆貪疾を生ず。此を以て言ふ。當に知るべし、王位は惡鄙弊處なり。何故に鄙弊なるや。王位を以ての故に其の善行を捨つ。王位の爲めの故に父及び祖親厚を爲す者を害し、大過惡を作す。慚愧を捨て能く橋逸ならしむ。少樂の爲の故に後世を畏れず。即ち偈を説いて言く。

蛾の熾火に投ずる如く、

貪國の盲も亦た兩り。

得失

作^サ及び不作に深着し、

國事の淤泥に没し、

寂定處を得ず。

是の思惟を作す時

身行極めて清淨なり。

厭惡心を速得して

即ち辟支佛を獲たり。

復た師ありて云ふ。此の王、兒の患を見已つて、即ち宮に還る。一隣國親厚の王あり、賊の爲めに逼る所となり、即ち使を遣して來つて援助を求索せしむ。此の王聞き已つて、尋ねて兵衆を將いて往いて彼の王を救はしむ。既に彼の國に到りて兵を連ねて刃を交ふ。極めて相ひ殺害す。乃至婦人の胎中の小兒を剝いて之を殺す。王斯の事を見て、深く王位に於て厭惡を生じて、即ち偈を説いて言く、

【九】 危懼。懼、うれふ、つかる、きびし。

【一〇】 四大苦。四苦は生老病死の苦である。果報が初めて初るのを生となし、生れる時苦があり、生苦と名ける。二に老苦、身體の衰變を老となし、老時に苦があり、老苦とする。三は病苦で、四大苦増減を病と爲す。病時に苦があるのを病苦とする。四は死苦で、五種の壞離を死となす。死時に苦あり、死苦とする。

【一】 悖逆。もとりをむくこと。

【三】 法を守らず。むぼん。

林寂に處して解脱す。

猶ほ犀の一角の如し。

善逝に従つて聞く所

傳へて我が師に至る。

我復た師に従つて聞く、

今當に之を演説すべし。

昔辟支佛あり、迦葉佛所に於て、萬二千歲、梵行を修行し、恒に忍辱を修し、衆生を慈悲す。乃至微戒だも曾つて毀犯せず、命終つて天に生ず。彼の天命終りて、下りて人間、波羅捺國王の家に生ず。月出る時生る。因つて月出と名く。漸く長大なるを以て立て、太子となす。其の父王崩じて王位を紹繼し、宿善力を以て正法王と作り、國を治む。輔相子を遣はし、小國を曲領し、女を以て之に妻はす。此の輔相子勇力絶倫にして多く眷屬あり、自ら橋豪を恃んで越逸過度なり。時に國王子、輔相子は是れ姊妹の夫なるを以て、極めて親昵を成す。其の私屏閑宴の處に因つて陰かに讒計を構へて王子に語つて言く、「爾の叔父兄弟眷屬其の數甚だ多し。而して世人多く、婦語を用ゆ。爾の父王一旦傾覆して、爾の諸母或は讒詔を生じ、自ら其の子を用つて此を以て之を推し、汝の父の王位必ず汝に至らず。王曼くして未だ覺らざるに宜しく早く之を圖るべし。夫れ王位は天下の尊、極樂の處、天と異なるなし。一切世人信伏せざるなし。若し國主と爲り、法を以て國を治むれば、命終の後必ず天に生ずるを得ん。譬へば美肉は衆皆な之を嗜むが如し。王位も亦爾り。貪ぼらざるなし。即ち偈を説いて言く、「譬へば水未だ至らざるに、宜しく務めて橋梁を造るべきが如し。瀑流若し卒かに至らば、所爲あるを得ず。王位も亦た是の如し。宜しく應に先づ之を圖るべし。擒り獲て汝の手に在り、爾乃ち自ら安んずべし。兄弟更に相ひ嫉まば後求むるは甚だ易からず。」と。

王子思惟して言く。

此の如き親友は

將に我を陷墜せんと欲す

灰の熾火を覆ふが如く、

現在既に樂しみなし。

來世は大苦を獲ん。

【五】 前出。

【六】 波羅捺國 (Varanasi)。

【七】 婦語。普通女の言葉使ひの心得に言ふ。この個所に符合せず。婦を陰の性の物類の名稱に用ふることあり。陰險なる語の意に用ひたのであるか。

【八】 曼。蒙昧なるをいふ。

親愛を

生死の稠林に於て斷絶し、

自然に解脱を得。

即ち彼處に於て辟支佛道を得たり。時に彼の親友即ち之に語つて言ふ、『日已に暮に向ふ。共に家に還るべし。』親友に答へて言く、『汝自ら家に歸られよ。我家に向ふの因今已に斷じ竟れる。』親友問ふて言く、『汝云何ぞ斷つ。寤へて言く。』我昔愛に由るが故に居家に著す。今我已に此の如き愛業を斷つ。人愛著する所は妻子眷屬にして、小子稚孫恩愛憐愍して、若し父を見る時、弄聲了らず、疾走攀緣し、此の事に戀著する故に愛著を生ず。我妻子及び眷屬に於て、此の如きの事愛心永く息む。我本家に在つて衆務を營理す。或は出で、或は入り、或は彼に與ふと言ひ、或は此を取ると言ひ、或は應に作すべしと言ひ、或は應に作すべからずと言ふ。此の如き事、我今已に斷つ。已に欲樂を捨て、解脱の樂を獲たり。愛樹の根を伐つて、諸趣の門を閉ぢ、大なる闇障を滅す。我赤子に於て反つて怨家等に似て、異なる有るなし。今我是の如し。云何にして當さに復た家に還らんや。』時に其の親友即ち家中に還り、其の男女に語る。男女の大小、其の來らざるを聞き、悉く往いて就いて看る。眷屬既に至り、但だ其の父を見るに、沙門法服にて虚空に飛昇す。男女白して言く、『今何事を以て眷屬を厭惡し、虚空の中に處るや。』即ち一偈を説き、以て男女に答ふ。

既に偈を説き已つて、即時に飛んで雪山の中に至り、諸辟支佛と共に集會し已つて、還り來つて本得道園中に到り、身を捨て、涅槃す。時に其の眷屬爲めに塔廟を造る。時の人因つて名けて多子塔と爲す。凡ての諸智人善根成熟す。少因縁を以て便ち開悟を得たり。

五、波羅捺國王月出、辟支佛を悟る縁

妻子と親友と財とは

生死中の過患なり。

雖も出家を求めず。然るに其れ専心在家戒を持して、毘羅漸く増して迦葉佛所に於て出家して道を學び、樂んで頭陀を修して、六物具足して、欲を厭惡す。彼に於て命終つて天宮に生ずるを得。天壽盡きてより、王舍城大長者の家に生る。此の長者家の財富は無量にして倉庫盈溢せり。漸く長大なるを以て遂に盛年に至る。父命終つて後意に隨つて快樂すること、毘沙門子那羅究伏羅の如し。己の家中に於て諸緣務を樂み、男女各三十人を生育し、庫藏僕從其の數甚だ衆し。男女婚娶其の事業多なり。但だ目前を營み、所修の法を忘れ、緣務の縛する所となる。家業を捨てず、僕從所に於て諸の親戚多く死喪あるを聞き、女某甲の舍既に喪福あるを聞き、又業を失ふを聞き、廣く是の如き喪失の聲を聞きて、愁毒懊惱して、百箭の一時に心に入るが如し。亦美善可愛の語を聞き、家の估客大に珍寶を獲て、安隱にして還歸す。其の子某甲男兒を産生す。又己が女、福子を生むを聞き、復た歡喜を生ず。向の衰利を聞き、憂喜交々集る。猶ほ作伎旋す所の輪の如し。一親友と園苑の中に至つて適々行いて遊觀す。一林間に到り、一人あり、大樹を斫るを見る。枝柯一條葉繁茂盛して、多くの象により挽くも、出でしむる能はず。一小樹を斫り、諸の枝柯なし。一人獨り挽いて都て滯礙なし。即ち挽いて林を出す。此の事を見已つて、即ち自ら思惟して是の言を作す。我今に於ては因縁を見るを得たり。即ち偈を説いて言く。

一我、大樹を伐るを見る。

稠林相ひ鈎掛して

枝葉極めて繁多なり。
山りて出するを得べきに由なし。

世間も亦是の如し。

男女諸の眷屬の

愛憎繫縛の心は

生死の稠林に於て

解脱すべからず。

少樹、枝柯なく、

稠林礙ぐる能はず。

彼を觀て覺悟し、我は

【三】六物。佛、比丘を制して必ず蓄へされるものに六種あり、一に僧伽梨、九條乃至二十五條の大衣である。二に鬱多羅僧、七條の中衣である。三に安陀會、五條の下衣である。以上を三衣と言ふ。四に鐵多羅、鐵鉢である。五に尼師壇、坐具である。六は澆水囊で、水中の蟲命を護る具である。三衣は六物の内にあるが、六物中の根本であるので、之を擧げる。

【四】毘沙門 (Vishvannu) は富神クヴェーラ Kuvēra のこと。雪山のアラカール Alaka に宮殿あり、快樂に當み、夜又 Yakṣa、キンナラ Kinnara、アプサラス Apsaras に侍かれ、日夜歌舞技業ありとさる。

那羅究伏羅 (Nalokurva) は那羅鳩羅とも書き、クヴェーラ (毘沙門) の子である。

辟支佛因緣論卷下

- 四、王舍城大長者、辟支佛を悟る緣
- 五、波羅捺國王月出、辟支佛を悟る緣
- 六、拘舍彌國王大帝、辟支佛を悟る緣
- 七、拘舍彌國王、辟支佛を悟る緣
- 八、波羅捺國王親軍、辟支佛を悟る緣
- 九、轉輪聖王最小子、辟支佛を悟る緣

四、王舍城大長者、辟支佛を悟る緣

譬へば稠林中の如し。

大樹を挽いて出さんと欲せば、

枝柯相妨礙し、

出するを求めて將に由なし。

在家は稠林の如し。

衆務は枝柯の如し。

出要を求んと欲すと雖も、

縛著永く因なし。

林野に靜處し、

境を觀じて其の心を修め、

衆縁の務を解脱して

諸の親しむ所の愛を離れ、

獨一の行を修して

犀角の二なきが如し。

先師相ひ傳授し、

我れ斯の事を聞くを得たり。

昔辟支佛あり。過法五佛所に於て恒に諸善を修し、優婆塞の爲めに家事に樂著し、諸佛を觀ると

【一】王舍城(Kaśyapa)。中印度摩訶陀國に在つて頻婆娑羅王が上茅城の舊都から新たに都した所である。王舍城を圍んで五山あり、五山の第一は即ち靈鷲山である。

【二】過去に於て普通七佛を數ふ。長阿含大本經 Mahā-paṭamaṅkutaṇṇa によれば、毘婆尸如來、Vipasīyā、尸棄如來、Sikhin、毘舍婆如來、Vivahū、拘樓株如來、Kā-kūśhalā、拘那含如來、Kā-nakamuni、迦葉如來、Kaśyapa。

我今若し死を受くるとも、

法の爲めの故に身を喪ふなり。

決定して天上に生れん。

何んぞ驚畏を生ずるに足らん。

即ち王に答へて言く、假使王今我が身を切割して、碎くこと胡麻の如きも、受くる所の禁戒は終に放捨せず。今我仙聖の道の中に住す。若し此の舌を以て妄語を作せば、我れ宜しき所に非ず。

我今若し當に王の爲めの故に妄語を作せば、後地獄に墮せん。何ぞ恃怙する所あらん。王時に羞愧して、瞋忿を倍増し、怒眼にて之を視る。熾然たる火の如し。月愛爾の時心に歡喜を生ず。「今正に是れ我、定意を生ずる時なり。今正に是れ我持法を乗るの時なり。更に何處に於てか法を聞くを求めんと欲するや？今日此れ即ち我が爲めに說法す。今我、法の爲乃至命を捨てん。今王、我に於て眞の大親友なり。」と。是の如く法を念じて即時に開悟して、辟支佛を得、身を虚空に踊して、破戒者をして其の是の如くなるを見て、皆慚愧を生ぜしむ。修善を爲す者は信行を増長し、實語を爲す者は實事果を現す。虚空の中に於て鬚髮自ら落つ。時に淨居天は其の法服を奉じ、飛んで香山に往き、諸の辟支佛と與に、一處に集る。偈を説くこと上の如し。

辟支佛因緣論卷上

復た自ら惟忖す。「法身を取つて勝るゝとせんや。此の身勝るゝなり。即ち自ら計を決す。我今寧ろ此の身を捨てん。終に戒法身を捨てず。」即ち偈を説いて言く、

「我今自から思惟す。

此の二身の中に於て

當に何れの身を捨つべしと爲すや。

復た諦かに自ら觀察せよ。

寧ろ鄙穢の形を捐つるも、

終に戒律を捨てず。

若し當に法身を捨つれば、

惡名即ち流布すべし。

我、衆善の手に處り、

彼の携持する所とならん。

若し我惡をなさば、

我自ら甘樂ならず、

心、悔熱火を生じ、

此の穢身を捨て已つて、

當さに地獄に趣くべし。

自ら禁戒の行を毀ち、

終に安樂を得ず。

但し一形樂の爲めに

無量身を虧損す。

若し當に戒を護るべくんば、

無量身は安樂なり。

是の故に我應當に

法身を覆護し、

毀壞有らしめざるべし。

利正法の爲めの故に

當に妄語を斷すべし。」

月愛大臣即ち王に白して言く、「願くは王恩を聞いて我を忿る莫れ。我實に王と彼に價を與へしを見るを憶はず。」時王大に怒つて劍を扣へて言く、「云何ぞ見ざるや?」

月愛大臣自ら其の意を定めて、

而して是の念を作す。

寧ろ聖法の爲めに死するとも、

愚癡の爲めに生きず。

一切の諸の有生は

誰れか不死の者あらん。

此の事を集議す。佞臣、王に白して言く、「若し其の價を酬ひなば、庫藏竭盡せん。」王即ち答へて言く、「我今に於て若し直を與へずば、私の惡名、天下に流布せん。一切の國民當に我を患ふべし。復た當に四方の商估を斷絶すべし。」佞臣復た言く、「王の爲め計れば、錢財を須いずして其の馬を得ん。復た能く王の惡名を出さず、國民をして患さざらしめん。今王國內の月愛大臣は一切人の體信する所なり。彼若し來り索めば、王但だ當に言ふべし。」「我、月愛をして金を送り、汝に付せしむ。」と。時に彼の估客萬匹の馬あり。其の一々の馬各の直一萬金錢なり。若し王但だ月愛大臣其の直を與ふと言はゞ、國內人民必ず疑惑を生じ、或は王を疑ひ、或は月愛を疑はん。王の惡名必ずしも彰露せず。亦た復た萬民の厭患を爲さず。」と。諸商估人來りて王に白して言く、「我が馬の價を歸せ。我れ家に還らんと欲す。王即ち答へて言く、「我先きに月愛をして爾の價を償はしめずや。寧ろ再び爾の直を過與すべきや？」諸估客等即ち王に答へて言く、「此月愛先より已に來り實に我が馬の價値を與へず。而して彼の忠信は寧ろ身命を捨つるも、終に妄語して我に價を與ふると言はず。即ち傷を説いて言く、

「假使月、火を雨ふらし、

沙を厭して膏油を得るも、

火中に蓮花を生ずるも、

鹿獮なる妄語を作さしめんと欲するも、

終に是の處あるなし。」

諸估客等、復た王に白して言く、「人中の天よ、假使月愛審に王勅の如く我に與ふと言はゞ、我終に恨まず。」時に王即ち月愛を召して之に語つて言く、「汝先に我前にあらず、我汝に金を與へて一估客を償ふや。王即ち目を動して現に詭相を作す。「汝、我に従はずんば我定めて汝を殺さん」と。時に月愛私かに自から思惟す。「我れ今日に於て、實語に従はんと爲さんや。王言を用ゆるとせんや。」

日は冷水を雨ふらすも、

水を鑽りて酥を得るも、

彼れ月愛をして

終に是の處あるなし。」

【五】鑽。鑽の俗字。きる、さす。深く入る。
【六】酥。牛羊の乳を以て作つた漿。乳を酪、酥、醍醐味と次第に精製す。

れ。時に辟支佛説くこと上僞の如く、以て諸人に答ふ。飛んで雪山に至り、諸辟支佛を見て、亦た上事を以て而して具さに之を説く。

三、月愛大臣、辟支佛を悟る縁

海潮、限を過ぎず、

隆牛尾を守りて死す。

月性自ら冷かなる如く、

變じて熱せしむるべからず。」

諸根を調伏するは

戒を守護するも亦然り。

是を獨一行と名け、

犀角二なきが如し。

往昔の諸大師は

展轉して相教授す。

我れ先勝の聞に従つて

今之を顯説せんと欲す。

過去の時辟支佛あり、名を月愛と曰ふ。婆伽婆迦葉佛所に於て、諸の善根を種ゑ、善く戒行を修す。恒に智慧を以て諸陰は皆悉く無常なるを觀す。彼の佛所に於て竟に沙門道果を獲得せず、彼に於て命終りて即ち天上に生じ、宿願力を以て天の快樂を受く。天壽盡き已つて人間に還り、中大長者の家に生れ、初め生れて冲雅、恒に禁戒に依つて自ら身を修め、其の善行を觀すること宿老に過ぐ。亦輕躁せず、瞋嫌あるなし。所有の資財は貧乏に周給す。家の豊儉に隨つて衆と共に分つ。戒を以て璵珞として自ら莊嚴す。其の父命終つて法に順つて家を治む。彼城の人民其の忠諫を見、深く敬信を生じ、師長に同じ。其年盛壯にして姿貌端政なり。諸妙婦女、一切の見るもの耽愛せざるなし。諸商估客、其の忠實を以て咸な來りて依附す。時に北方に諸

五三

五三

【五二】婆伽婆、Bhagavati 尊き。或ひは「世尊」の意か。即ち迦葉佛世尊、尊者迦葉佛の意か。

【五三】瞻波國 (Uttara) 瞻波は木の名。金色花樹と譯し、その花香氣あり。遠く薫する。木名を以て國に名ける。中印度に在つて恒河に濱す。此の國の都城を瞻波城と名け、中印度都城の元始であると。

【五四】估客。商人をいふ。

乘りて瞻婆國に至る。時に瞻波國王、其の馬を盡く取る。王の心暴虐にして正法に依らず。王自ら思惟す。我今多く彼の馬を取る。云何ぞ當に價値を與へずして其の馬を得るを得べき。即ち佞臣と

即ち使を遣して往いて蘇摩を殺さしむ。爾の時蘇摩、馬の射られて箭、骨に徹するが如し。即ち自ら思惟す。人富貴の時、所愛の色盡く來つて前に在り。雜毒の食極めて香美食と爲すが如し。消さんと欲する時身則ち敗壞す。人の五欲を貪る如き、其味甚だ妙なし。譬へば金屋火の燒く所と爲るが如し。人、其の色を貪り、中に入りて害せらる。命盡んと欲する時、心意擾亂す。即ち自ら安慰して自ら念言す。『我れ淨戒を持して毀缺有るなし。我の持戒たるや、犀牛の尾を愛するが如し。我れ禁戒を守るや、猶ほ貧人の地の^{五〇}伏藏を得て、勤加守護するが如し。』と。而して偈を説いて曰く。

『龜澁なる嶮惡道を

我れ已に之を得度したり。

我れ厄急の事に遭ふも、

戒を護つて而も捨てず。

猶ほ大海潮の

期限を失はざるが如し。

今我持戒を守る。

其の事亦是の如し。』

是の偈を説き已る。爾の時諸天并びに諸善神、此の輔相の誓願是の如きを見て、皆な歡喜を生ず。時に諸惡鬼尋ねて夫人に著す。夫人狂發す。即ち王前に於て鬼の著する所となり、而して偈を説いて言く。

『我今自ら壞破す。

我れ應に身死を受くべし。

彼は是れ純善の人

應に傷害を加ふべからず。

我は之れ癡嬰愚にして

口^{五一}に須彌山を吹き、

動搖せしむる能はず。

彼は實に穢行なし。

我妄りに是の謗を生ず。』

時に彼の輔相、園苑の中に於て、思惟厭惡し、辟支佛を得て、虚空に踊昇して鬚髮自ら落つ。時に淨居天即ち袈裟を奉ず。爾の時諸人之を勸請して言く、「願くは我を捨て、而して天上に上る莫

【四九】 犀牛。牛に似て尾長き獸。西藏ヤク牛。その尾を拂子に用ふる。

【五〇】 伏藏 (nakha)。地下に埋伏されたる寶。印度では寶物を地下に藏する慣あり。

【五一】 須彌山 (Cintamani)。譯妙高。佛教の世界觀では器世界の最下を風輪とし、その上を水輪とし、その上を金輪即ち地輪とし、その上に九山八海あり、中心の山が須彌山である。水に入ること八萬由旬、水を出づること八萬由旬、その頂上を帝釋天の所居とし、その半腹を四王天の所居とし、その周圍に七仞海七金山あり、その第七金山の外に鹹海ありて、その外圍を鐵圍山といふ。瞻浮洲等の四大洲は此の鹹海の四方にあると。

て我に供給し、汝の修善に任ぜよ。輔相歡喜す。王は蘇摩を以て用ひて輔相となす。爵賞を給賜して、倍して父に勝る。衆人愛敬し、往古に於て牛王大臣、能く一切女人の愛敬を生ずるに同じ。時に王夫人は蘇摩に愛著し、蘇摩に語つて言く。「汝今若し能く我が願ひを稱へば、能く學國並びに王に及ぶまで、盡く汝に隨從せしめん。又能く汝をして惡名を得ざらしめん。其の施す所の教、王と異なるなからむ。」と。爾の時蘇摩志を執ること堅固にして怯弱ならず。偈を以て答へ言く。

請ふ。所説を聽かれよ。

嫌責を見るを莫れ。

我、此語を聞く

滲みて地に入る如し。

譬へば羸馬の如し。

困乏の時

騎して戰陣に入れば

前進に堪えず。

我他婦を見るも、

情、染著なく、

心意開けず、

夜の藕花の如し。

凡べて敬する所に在り、

母と異なるなし。

況んや夫人に在りては。

是れ我が尊ぶ所なる。

我れ心を堅く持し

所尊に敬事す。

我れ臣子と爲り、

應に逆を爲すべからず。

又我が情欲

發動の時も

他の婦女を見て、

自然に休息す。

彼の濯水起れば

諸の波涌多し。

我は秋水の如く

自然に潔清なり。」と。

爾の時夫人

心に自ら念じ言へらく。

彼れ若し我が

親昵の意を斷たば、

我は必ず彼に於て

誹謗を生ぜん。

即ち王に白して言く、

輔相蘇摩

意を興して理なく

我を侵辱せんと欲す。

時に王意疑疑して、爾るか爾らざるかを審かにす。時に蘇摩往いて園苑に至る。兩牛の耕すを見る。觀、頂上にあり、極めて大いに疲れ勞して、厭惡心を生ず。時に王迷惑つて夫人の讒言を信じ、

【觀】一本稿、辭典に見當らず。觀を取る。

二、輔相蘇摩、辟支佛を悟る緣

禁戒を堅く持して行を毀たす、

諸の有智者解脱を得。

他に從つて學ばず、他を惱まさず、^{三九} 獨一の行は犀角の如し。

曾つて諸師に從つて是の如き説を聞く。迦葉佛の時一比丘あり。十千歳に於て梵行を修行し、坐禪して忍を得、禁戒を修持し、憤鬧を離れて^{四〇} 頭陀行を具し、命終りて天に生る。天宮の中に於て五欲樂を受け、天壽盡くるに從つて^{四一} 婆翅多城輔相夫人^{四二} 提婆胎中に生る。爾の時夫人、偈を説いて夫に白す。

「我今、娠めるあり、

心甚だ愛樂す。

必ず福人あり、

來つて我が子とならん。」

是に由るの故に、乃ち一切に於て常に慈愍を生ず。又我今は、放逸心息んで更に欲意なし。譬へば海中の^{四三} 摩梨大山の能く水波を截るが如し。今我れ息まんと欲す。亦た復た是の如し。我今妄語を畏れて常に實語を思ふ。又功德善人の缺失を畏るゝが如し。今我慎懼すること亦た復た是の如し。我今酒を見ること、毒藥を觀るが如し。他の財物を畏るゝこと火聚を畏るが如し。是の如きの衆惡今悉く捨離せり。皆我が胎の福德の子に由つて、姪欲既に除きて用ひて快樂となす。」と。爾の時輔相即ち婦に語つて曰く、「今汝の意を恣にして^{四五} 五戒を修行せよ。」夫人爾の時衆善を修行して、十月を滿ち已つて其の子を生む。字を^{四六} 蘇摩と曰ふ。漸漸に長大して、^{四七} 一切經論・六十四藝明達せざるなし。端政殊妙にして猶ほ滿月の如し。能く父母の情願を満足せしむ。遂に盛年に至る。輔相王に請ふ。我今年老たり。當に後世の爲め我の福を修するを聽かるべし。」と。時に王答へて曰く、「我今汝の修福に於て障礙を爲す能はず。汝は汝の子の蘇摩を以て、汝の處に代はらしめて、以

【三九】蘇摩(Soma)。

【四〇】前出の如し。

【四一】頭陀行(Dhuta)。衣服飲食住處の三種の食着を抖擻ふ行法を言ふ。十二の頭陀行を數ふ。

【四二】五欲樂。色聲香味觸の五境。即ち眼耳鼻舌身の五根に對するもので、人の欲心を起すもので、欲と名ける。

【四三】婆翅多城。

【四四】提婆(Devi)。

【四五】摩梨山、山名、旃檀を出す所。

【四六】五戒。殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒の五制戒。佛教戒律中根本的のものである。

【四七】蘇摩(Soma)。

【四八】むしろ外道の諸經論を指すのであらう。六十四藝は外道の六十四の諸伎藝を言ふ。

犯罪深重なる者は

彼、自ら罪害を招く

若し彼の命を害せば、

應に向つて慈悲を生ずべし。
當に宜しく哀矜を生ずべし。
自ら所愛の法を毀たん。」

諸舊臣等即ち王に白して言く、「我等今は、王勅に違して必ず當に害を加ふべしと雖も、終いに縦捨せず。」と。即ち王前に於て劍を抜いて之を斬る。王殺すを見已りて即ち厭惡を生ず。前の境界を見、便ち過去の忍を修するの心を見る。尋時開解して辟支佛道を悟る。優鉢羅花開敷の時の如く、身を虚空に踊らす。一切の臣三三佐、合掌し仰瞻す。辟支佛の生死を厭ふ者は證道是の如し。我今得る所の持戒果報なり。即ち偈を説いて言く、

「我、瓔珞を服すと雖も、

身を捨てて根を調伏し、

一切人所に於て

心に淨梵行を修し、
淡泊にして常に寂滅す。
兵刀杖を捨て、
犀牛角の一角の如し。」

獨一の行を修す。

犀牛角の一角の如し。」

是の偈を説き已り鬚髮自ら落つ。時に三三淨居天即ち袈裟を奉じ、尋ねて即ち空を飛んで雪山中に詣る。時に彼の山中辟支佛あり、之に問ふて曰く、「汝王位に處りて、何事を厭惡して斯の道跡を悟るや。」即ち上偈を説いて用いて之に答ふ。是の故に如來は忍を修行する能はずと爲すが故に、故に忍辱の因縁を説く。貪を以て憤鬧に親近する故に、故に不親近の因縁を説く。辟支佛の功德を悟せしめんと欲するが故に。故に辟支佛因縁を説く。佛、諸天の爲めに善法堂上に於て辟支佛因縁を説く。佛、三十三天に於て、諸天をして厭惡を生ぜしむるが故に、故に斯事を説く。婆四陀辟支佛、三三毘舍離に於て、身を捨て涅槃に入るを説く。今現に塔あり。三三優陀耶と名く。

【三三】 優鉢羅(Uphala)。花の名。普蓮花のこと。學名 Nymphaea cernua。

【三三】 佐。補佐するもの。

【三三】 淨居天(Suddhāvahāra-vistāra)。直譯は淨居淨性の天。諸天中高位の神とされる。佛教的の神格で、佛教を守護するとされる。

【三三】 婆四陀辟支佛(Bhāsiṣā or Vāsistha?)。不明。

【三三】 毘舍離、Vaiśālī。中印度國名、譯、廣嚴。この國內の種族を離車、Līcchāvīとも跋闍子、Vāṣṭīとも言ふ。佛は遊化し、槃地に赴く途次滞在する。摩訶陀の北東、舍衛國の東にあり、佛滅百年、七百賢聖第二の結果を爲した處である。

【三三】 優陀耶(Udaya?)。

や。諸人懼畏して敢へて王に應へず。是に由るの故に、所行の無道、日々轉た盛なり。火は乾薪を得て其の炎轉た熾なるが如し。姪荒暴亂、所爲勃逆にして、王所受の婦亦た復た妻掠せらる。時に王夫人、其の是の如きを見て、懊惱垂涙して往いて王に白す。瞋心猛盛に唇口臙動して、言解了せず。猶ほ嬰兒の如し。此の情事を以て具さに王に向つて説く。王、是を聞き已つて即ち召して來らしむ。之に語つて言ふ。『我の妃后汝ち尙ほ隱忍して能く非法を行ふ。況んや復た萬民をや。』王即ち教誡す。『今より後更に是の如くなる莫れ。』時に彼の輔相、王の嫌ふを見じり及び民の厭患せるを見て、即ち國を棄て逃れて他土に至り、彼の國王及び其の軍衆を將いて、還つて本國に向つて規つて討伐せんとす。時に本國中諸舊輔相、兵を將いて逆拒して其の軍衆を破り、生擒して將さに還へらんとす。舊輔相等、復た王に白ふして言く。『彼の人、王に侵毀せられ、即ち彼の臣をして王所に詣らんとす。』時に王其の顔色既に變じて慚懼の相あるを見る。王の曰く、『怪いかな、生死』即ち偈を説いて言く。

『愚癡覆蔽の心

小樂の縁の爲めの故に、

譬へば上善食の如し。

其の中雜毒の藥

味を食るの故に食を取る。

王、諸輔相に告ぐ。『彼の愆過復た尤も重しと雖も、然も我が意は害を加ふるを欲せず。』復た偈を説いて曰く、

『一切皆な壽愛す。

他の命を害して

後の大苦を覺らず。

今此の慚耻を受く。

色香皆な具足す。

愚人觀察せず。

食消せば則ち害を成す。』

宜しく速かに彼の罪を赦すべし。

安樂を得る者あるを見ず。

【五】 國事に當れば、修行成らず、修行に努めれば、國治亂るるを言ふ。

【六】 之と同じ句、馬鳴 Avaghoṣa 作ブツダチャリタ (Buddhacarita) 一、四八に出つ。桑達多が瓶沙王と同じく王者は權力あり、富裕なりとも、諸物に利せられるのは、他の人と同じと言ふ所に用ふ。

本句はブツダチャリタより引用し來つたのであらう。同じ句が又摩訶婆羅多十二、解脱法品三二〇、一三五—一四〇に出で、酷似す。同一系統に屬すると思はれる。看平等、佛陀の生涯一、四三、及び註四四頁、同、梵文佛傳文學の研究一、五四三—五八頁「馬鳴と解脱法品との關係」同、Avaghoṣa's Acquaintance with the Mokṣadharmas in the Mahābhāṣya (Proceeding to the Imperial Academy, 1928)

【七】 付。授く。

【八】 賦歛。年貢を取り立てること。

【九】 効。效の俗字、學ぶ、習ふ。

【一〇】 愆過。愆、あやまち。

【一一】 補相。補佐する大臣、即ち大臣。

今の如く五濁惡世は

若し刑戮を行はゞ、

必ず當に刑戮を須ふべし。
即ち是れ旃陀羅なり。」

時に王即ち親む所の愛臣に告ぐ。『汝今は且く聽け。吾が食ふ所は一味に過ぎず。吾衣る所者は一襲に過ぎず。坐臥する所は身を容るゝに過ぎず。此れよりして觀るに、何の用あつて多求にして厭足なき。王位、尊號を稱する所以は、其の教を以て必ず行ぜしめ、承肅せざるなし。唯此の事ありて衆庶に異るを取る。又輔相に告ぐ。王者重んずる所唯此の一事なり。我今汝に付す。汝今應當に後世正法治國を畏るべし。賦斂舊によりて常限を違ふ莫れ。即ち偈を説いて言ふ。

「我、王宮に生れ、

而も我、未だ刑戮過罰の事を

我今怖畏する故に

汝今我を効ふ莫れ。

世人皆愚癡にして

所犯罪の中に於て

汝當に正法を以て、

當に正法に依りて

祖先の後を承籍すと雖も、

學習せず。

此の業を造ること能はず。

但く民庶を育ふべし。

各自に徳理を作り、

復た其の恐怖を生ず。

撫育して無畏を施すべし。

民庶を化導すべし。」

時に王偈を説き已つて、即ち便ち國を以て此を大臣に付す、而して此の大臣は既に國を得已つて、二年の中に於て寛縱度なく、萬民を恤まず、恣心極意にして、諸の非法を作し、漸々經久なり。榮位深重にして便ち憍逸を生じ、諸の非法を行じて、河の瀑漲して損壞する所多きが如し。城中の當は一切税有り、奪せらる。時に城内の人皆な之を諫めて言ふ。『此の事をなす莫れ。』と。他の忠言を聞いて、倍々瞋恚を生じ、顰蹙色を作して是の言を作す。『汝等何ぞ敢へて是の如きの語を發する

脫三昧智力、諸の禪定及び八解脫三昧を知る智力。五、知種種界智力、一切衆生の種種の知解を知る智力。六、知種種界智力、世間の衆生の種種の境界の同じくないの如實に譬く知る智力である。七、智一切至所道智力、五戒十善の行は人間天上に至り、八正道の無漏法は涅槃に至る等の如く、各々其の行因の至る所を知る。八、知天眼智、天眼を以て衆生の生死及び善惡の業縁を見るに障礙なき智力、九、知宿命無漏智力、衆生の宿命を知り、又無漏の涅槃を知る智力。十、知永斷習氣智力、一切の妄惑の餘氣が永く斷じて生ぜしめぬことに於て能く如實に知る智力。
【一〇】三有、三界の異名。生死の境界に因あり、有あるのを有と云ふ。三有は三界の生死である。一に欲有、欲界の生死である。二に色有、色界の生死である。三に無色有、無色界の生死である。
【一一】淤泥、どろ、ぬかるみ。淤泥、どろ、ぬかるみ。
【一二】迦尸 (Kāśī) 國波羅捺 (Vārāṇasī) 城、前出。
【一三】梵摩達 (Brahmadatta) 事跡不明。
【一四】憍滿、憤、心亂る、みだる、闕、さわがしきこと。

貧窮の人に賑賜す、

充足せざる者なし。

爾の時夫人、太子を生み已つて、端政殊特にして満月の如似し。年始めて八歳にして聰明慈仁なり。其の父王崩し、國人愛樂して盛満月の如し。時に輔相あり、名を言説と曰ふ。言説輔相は即ち太子を立て、以て王位を紹ぐ。復た年稚なりと雖も、本誓願力あり、衆愚を作らず、體性賢善、諸の衆生に於て深く悲愍あり。王宮に處すと雖も、志、閑靜を求め、華堂に處ると雖も、猶ほ塚間の如し。憤悶に處すと雖も禪志を修行し、生死を厭患して其過を稱量す。道を以て心を修め、王務を棄捨す。諸臣諫めて曰く、『今日大王は、専ら道行を行じて國事を理めず。若し是の如くんば、衆愚必ず起つて王の風化を敗らん。譬へば海を渡るが如し。若し船師なければ、必ず諸難の敗壞する所とならん。』即ち偈を説いて言く。

「王、祖先の嗣を承け、

藉地、法の如く得。

唯萬民を垂理す。

願くは國を放捨する勿れ。

若し王、正法を以て治めば、

諸善過ぐる者なし。

人帝應當に知るべし。

護國の福は最勝なり。』

爾の時其の王、是の語を聞き已つて、歎息して思惟す。偈を説いて答へて言く。

「我れ若し國を理めずんば、

吾が國必ず當に敗るべし。

我が力能く國を護らば、

邊惡敢へて侵さず、

我、若し國を治めば、

王務、我が心を塵せん。

若し罪を犯すものあらば、

必ず須しく毀害を加ふべし。

應當に彼を繋閉せよと言ふべし。

當に彼の手足を截つべし。

彼應に死罪に入るべし。

彼應に其の眼を挑むべし。

下らうとした。天上より僧徒合まで金銀玻璃の三道を虹の如くに懸つた。佛陀は梵天帝釋を左右に従へ、その中道の寶階を踏んで下つたので、四方の道俗は之を仰ぎ視て、成佛するを願ふたと。

【三】蓮華比丘尼。一般的事跡不明。

【四】轉輪王 (Chakravartin Rajan) 輪(武器の一種)を投じて世界を統一し、正義の法に基いて正しく良き政治を爲すといふ、印度人の理想の世界統一王。七寶千子を有すると傳ふ。

【五】神通力による身體の變化。

【六】迦葉佛 (Kashyapa-buddha) 現世界にて入壽二萬歳の時に出世して正覺を成じ、釋迦より直ぐ前に出世した佛。

【七】梵行 Brahmacarya 普通淫欲、飲酒等を絶ち、清淨なる攝欲の行爲を爲すを言ふ。

【八】忍辱 (Kshanti) 波羅蜜、佛教徳目の一、侮辱、苦難等に耐へ忍び、怒らぬこと。

【九】十力 (Dasabala) 佛の十力である。一、知覺處非處智力、處とは道理の義、物の道理、非道理を知る智力である。二、智三世業報智力、一切衆生の三世の因果業報を知る智力である。三、知諸禪解

教習を以ての故に、是等の比丘心に皆に甘樂す。衆闍を以ての故に、見諦を得ず。臨終の時にして是の念を作す。我れ^{一七}十力を見るに其所説の法、微妙深遠にして聞くを得べきこと難し。然るに我れ聞くを得たるも、放逸を以ての故に道果を獲ず。我れ清淨持戒して能く忍辱を行し、以て衆人を教化すと雖も、憤闍の故に定心を侵毀すること、彼の霜雹の善苗を害するが如し。是の故に我をして道果を獲ざらしむ。」即ち偈を説て言く、

「我今、^{一〇}三有・

猶ほ老瘦象の

彼の辟支佛の如きは、

譬へば犀の一角の如し、

猛熾火を避くる如し。

憤闍を遠離すべし。

徒黨業の憤闍を遠離すべし」と。

是の誓願を發し、命終つて天に生れ、天上の樂を受く。福盡きて命終つて^{三三}迦尸國^{三三}波羅捺城中^{三三}梵摩達王第一夫人の胎中に生る。入胎の時、夫人の身體、譬へば清池に柔軟花あるが如し。爾の時夫人娘める有るを覺ゆ。偈を以て王に白す。

「我、娘めるあるを覺へ來る。

此れ必ず是れ兒志なり。

時に王聞いて歡喜し、

又復た王に白して曰く、

王聞いて益々歡喜し、

衆惡の煩惱中に溺る。

深き^{二〇}淤泥に没するが如し。」

獨り林間に處して、

諸の徒衆を遠離して

應當に獨り修行して

願くは我れ常に

歡悅して恩恵を生ず。

宜しく應に有罪を赦すべし。」

尋ねて即ち天下に赦す。

復た應に廣く布施すべし。」

尋ねて即ち庫藏を開き。

【一七】三十三天である。佛が三十三天にあつたのは、忉利天にある亡母摩耶夫人に説法せん爲であつたと傳へる。

【一八】閻浮提。Jambhūdvīpaの音譯。現在の印度を言ふ。印度古代世界觀にて須彌山を中心として分洲し、南には閻浮樹(Jambū)が中心にあるので、かく名付けた。

【一九】帝釋(Sakra)。金剛針論の下に出す。

【二〇】思首羯磨(Viśvānātmān)「凡、を造る」。この名は力ある神、インドラとスールヤの代名として行はれてゐたが、創造力的人格化に用ひられ、後世は宇宙の大工巧神の名に用ひられるに至つた。

吠陀の二讃歌にも現れ、叙事詩時代には吠陀工巧神トウアシュトリの力と役を有し、大工藝家で、神々の武器や裝飾を作り、最もすぐれた工藝家で、神々の戰車をも作る言はれてゐる。佛教説話にても神々の命にて、佛・佛弟子の爲精舎・裝飾物を造ること屢々である。

【二一】僧尸沙(Sankhisa)。又僧佉舍。天より佛の下れる國名。佛上天中、諸弟子信者佛の不在を悲しみ、目連、佛に下降を乞ふ。佛は僧佉舍に舍利弗が安居するを見て、之に

辟支佛因縁論 卷上

失

譯

一、波羅捺國王、辟支佛を悟る緣

二、輔相蘇摩、辟支佛を悟る緣

三、月愛大臣、辟支佛を悟る緣

一、波羅捺國王、辟支佛を悟る緣

一切智・世尊。

無上出要の法。

我、寂靜辟支佛の

心に瑕穢なく、煩惱を除き、

譬へば秋天の雲翳なきが如し。

今我れ彼の功德を渴仰し、

彼所に於て疑を懐かんと欲すと雖も、

孰か快士の清眞行を聞きて、

我れ將に今辟支佛の

昔先師に従つて相傳聞して

大象道を行きて象子隨ふ。

了達三世の大燈明に歸命したてまつる。

并及に應眞諸勝僧に歸命したてまつる。

悟解の因縁の所行を聞けり。

善く禁戒を護りて常に清淨なり。

淡泊にして自ら林藪の間を守る

誠心敬順して信樂を生ず。

彼の力我に感じて強く信ぜしむ。

敬信心を生ぜざる。

功德妙行の少分を説かんとす。

唯だ正言を述べて偽説なし。

是の故に我今聞いて顯示す。

【一】二卷、失譯。波羅捺國王等八人の辟支佛覺悟の因縁を説く。

【二】波羅捺(Vārāṇasī)。恒河中流にある印度中部の都城、普通國名としては迦尸(Kāśī)と言ふ。然し、都名をそのまゝ國名に用ひることは多い。現在のベナレス市 Benares である。當時宗教文化の中心にて、修道者多く住し、靈場とされた。釋尊の説法されたのも、この郊外の鹿野園であつた。交通の要路、軍事上もあり、交通の要路、軍事上の要害に當つてゐるので、南北の大國の爲侵略されること多く、むしろ中心地帯として獨立を保つてゐた。

【三】辟支佛。詳しくは辟支迦佛陀 Prakṛyabuddha 舊譯は緣覺、新譯では獨覺といふ。師なく自覺し、説法せずして靜居するをいふ。正統的の解釋によれば、初發心の時に佛に值つて、世間の法を思惟し、後に得道する。身、無佛の世に出でて性寂靜を好み、加行滿じて師友の教なく、自然に獨悟すれば獨覺と名けると、又内外の縁を觀時して、内には飛花落葉を、外には十二因縁を觀じて、聖果を悟るので、緣覺といふとする。天台一家の義では之を別種とし、

感じて。

二、王子の時、行幸に當つて坑穴に墜死せし臣あるを見て苦を感ず。

第七、過去佛

在位中、天災あり、太夫の勧めにて讓位し、遊行中、婆翹多城王子國を諍ふを見て。

之によつて知られる如く、過去に比丘

とし刻苦修行し、現世に多く生死の無常、

第八、過去佛

王の二夫人互に相嫉妬し、一夫人、他を偽つて毒殺し、隠し切れず、大患にかゝつたのを見、生死の過を思つて。

第九、過去佛

最小子、轉輪王の威儀を見、九百九十九兄あり、即位し難きを思つて開悟す。

貪愛の罪深きを思ひ、翻然開悟してゐる。

大乘的な思想、誇張的記述はなく、梵語

はれる。系統の小乗的譬喩譚の流を汲むものと思

昭和六年十月十五日

譯者 平等 昭 識

【1】Ibid. p. 301 ff.
同、二七九—二八〇頁。

第二 内 容

本論の内には特に注意すべき思想は含まれてゐない。行文も極めて平易にして諒解し易く、内容的には説明すべきもの

はない。唯此處に各物語中の人物、場所は覺悟動機を分類してみやう。

主人公名 主人公の履歴

其他の人物

覺悟場所

過去世師佛

覺悟因緣

第一、—— 比丘、天、太子波羅捺國王

蓮華比丘尼・梵摩達、王夫人(母)、大臣・輔相 迦尸國

第二、蘇摩 比丘、天、輔相子輔相

輔相夫人(母)、婆翅多城國王、婆翅多城

第三、月愛 (長者子) 比丘、天、大臣

瞻婆國王、佞臣、估客(馬の) 瞻婆國

第四、—— 比丘、長者子、後長者

友人妻子眷屬 王舍城

第五、月出 比丘、天、太子、波羅捺國王

國王子、妹胥(臣) 波羅捺城

第六、大帝

一、比丘、天、國王
二、比丘、天、國王
王子 大長者、
大長者、
墜死者 拘舍彌

第七、毘羅 (仙士) 比丘、拘舍彌國王、出家

太史、婆翅多諸王子 拘舍彌、
婆翅多

第八、親軍 波羅捺國王

二夫人 波羅捺

第九、—— 轉輪聖王最小子

父王、母妃、九百九十九兒

第六、迦葉佛

一、王、親友長者子の病篤きを悲しみ、無常を三、王位の罪咎を思ひ、王を子に譲つて開悟。

第一、迦葉佛 王、王位を嫌ひ、大臣に讓位す。國亂る。舊臣、隣國王の力を借り、王の爲國を回復す。王、生死の過罪を嘆き、開悟す。

王妃、蘇摩に戀慕し、拒まる。蘇摩、園苑に學び、耕牛の苦を痛む。王妃の讒言にて王の刺客至る。愛欲の深さと無常を感ず。王妃發狂す。開悟。

第三、迦葉佛 王、估客より馬を購ひ、代金を拂はず、月愛に拂へりと偽らしめんとす。月愛、敢へて勇猛心を起し、妄語せず。王斬らんとす。開悟。

人事繁煩、生死常なるを嘆き、園林中に大木斫られるを見て開悟す。

第四、過去五佛、迦葉 一、輔相子、王子をそゝのかし、父王、王子に他意ある故、王を殺さしめんとす。王子、父王に實を祈ふ。王子病む。王位、無常を悲しむ。

二、子の病を見、宮に還る。敵王來り攻め、互に殺害す

及び敬虔の意である。而してアバダーナとは「偉業に關する物語」時には佛陀崇拜の平凡な行爲のこともある。即ち聖者の敬虔なる行爲である。而して之等の物語は同一構想で作られてゐる。先づ長老又は長老尼は瞿曇佛陀の先驅者である。過去の過去佛に捧呈した恭禮を述べ、次で將來の瞿曇佛陀の法を聽聞す可しとの當時の佛陀の豫言を述べ、最後に如何にしてこの豫言が適中して羅漢位に到達したかを述べてゐる。この譬喩譚は聖典中最後の年の著作に屬することは確實である。」

一方アツアダーナたる梵文の場合では、「この語は宗教的若くは道德的大行爲」或ひは「大行爲物語」を意味する。かゝる「大行爲」は或は自己の生命を犠牲に供し、或ひは單に芳香・花卉・香料・黄金・寶石を供養し、又は精舎(傘塔婆・塔等)を建立しても成ぜられるのである。此等の物語は通常「黒業は黒果を、白業は白

果を、もたらす」ことを示さんとするが故に、又業物語である。即ち現在の行爲が過去並に未來の行爲と如何に密接に關係して居るかを示さんとするものである。普通人の見地からすれば勿論傳説的のものであるが、佛教徒の目からみると、此等は眞の出來事である。否佛自ら宣べ給ふ所で、「佛語」として經同様の保證があるものである。本生話と同じく譬喩も亦一種の説教である。故に常に佛が何處で如何なる過去物語をなされたかを序論的に述べ、そして終りにその物語から教義を引出して居るのである。故に正當な譬喩は現在物語・過去物語並に道德より成立する譯である。若し過去物語の主人公が菩薩である時は、斯る譬喩は「本生話」と言つて差支へないのである。或る特殊の譬喩になると、佛陀は過去物語は話されないで、未來の豫言をされることとがある。未來物語は過去物語と同様、

現在の業(行爲)を説明するを目的とする。又二種類の物語の一所に出て居る譬喩もあれば、尙又現在に於てもその善惡の果を結ぶ行爲(業)のあるのを示した譬喩もある。

凡てこの種の譬喩は「巴利語・梵語共に一律・經兩藏に一つ一つ出て來ることがある、多くは大集録中に編集されてゐる。それは單に教化を目的とするか、或は文學上の野心を以て編纂されたものである。」

辟支佛因緣論も名は譬喩譚ではないが、先づ佛法僧に恭敬し、瞿曇佛が辟支佛覺悟の因縁を說法する動機を記し、各比丘が迦葉佛の下にて尊佛求法の念強く、無常を感じて念佛し、刻苦修道して辟支佛位を得てゐる。佛弟子の修道物語たる點、譬喩譚の一種たるを失はない。

【1】 Winternitz: Gesichte der Indischen Literatur. Kte. II. S. 128.

中野大佛氏譯「印度佛教文學史」、一七〇頁

辟支佛因縁論解説

辟支佛因縁論は原本存在せず、その譯者名も不明である。従つてその成立經過を定めるに就いては全く何等の手懸りもない。唯此處には内容論、本論の結構と系統と思想を紹介するに留る。

第一 結構と系統

辟支佛因縁論はその名の示す如く辟支佛 (Pratyekabuddha) 覺悟の因縁を語つたものである。因縁論とあるが、決して論書ではなく一種の因縁譚 (nirāna-kāṭīhi) である。辟支佛となつた人名と場所と機會・理由を物語風に平易に語つたものであつて、上下二卷に分れてゐる。

上卷三章、下卷六章で、九章より成つてゐる。之を表示すれば次の如くである。

【上卷】

- 第一、波羅捺國王悟辟支佛緣
- 第二、輔相蘇摩悟辟支佛緣
- 第三、月愛大臣悟辟支佛緣

【下卷】

- 第四、王舍城大長者悟辟支佛緣
- 第五、波羅捺國王月出悟辟支佛緣
- 第六、拘舍彌國王大帝悟辟支佛緣
- 第七、拘舍彌國王悟辟支佛緣
- 第八、波羅捺國王親軍悟辟支佛緣
- 第九、轉輪聖王最小子悟辟支佛緣

古來廣義の佛教文學の内に譬喩 (梵 Avadāna, 巴 Apadāna) 文學と名付く可きものがある。主として佛弟子の修道物語を譚話風に記述するのであるが、之等の譬喩文學には二種あつて、巴利語 (Pāli) で書かれたものと梵語 (Sanskrit) で

記されたものがある。後者は更に二に分れ一方は小乘文學に、他方には大乘文學に根底を有してゐる。後者の内でも古い著作は尙小乘に屬して居り、巴利本生話に類する傾向を有し、之に類する佛陀崇拜があるが、然し大乘の無限無窮の神話的物語は未だその姿を現さない。然し他方新しい著作は完全に大乘的になつてゐる。

元來、本生話 (Jātaka) では菩薩即ち佛陀の前生物語を述べてゐるが、ヴィンテルニッツ教授によれば、『巴利小阿含 Khuddaka-nikāya』には『譬喩』 Apadāna と言ふ韻文物語の集録があつて、之には羅漢位 (Arhat) に達した佛陀の高弟や長老尼の物語を述べてゐる。それ故に本生話が佛陀の前身菩薩の修道物語とすれば、これは聖者の傳説である。アパダーナ Apadāna (梵語 Avadāna) は『偉業・英雄的行爲』を意味する。偉業とは犠牲

解すべきである。但し梵本にては「一切は尿糞に汚さる。而して同一の根(五感)と境(五感の対象)とを有す」と譯す。

【一七】五根。根(Indriya)は感覺機關を言ふ。眼耳鼻舌身をいふ。眼にて見、耳にて聽き、鼻にて嗅ぎ、舌にて味ひ、身にて觸れる。

【一八】以下梵本に無し。漢譯にはこの後に梵本にて前に出でし句を多く譯す。大括弧内の數字に注意されし。

【一九】以下の句、梵本には仙の言としてこの部分に無し。この漢譯の部分は、漢譯の原本にあり、現存梵本に失はれたるか、漢譯者が増補したのか。

【二〇】戒野怛呬經(Satyatī)梨俱吠陀中の最も神祕な讃歌で、その婆羅門も朝夕繰返し、讀誦する。今生成者サウイトリ(Savitri)としての日に呼びかけてゐるので、サウイトリ(Savitri)とも言はれる。サウイトリは女神として人格化されたので、梵天 Brah-

【二一】の妻で、四吠陀、二生族即ち四階級中前の三階級の母である。

【二二】蹤跡。足跡。

【二三】以下梵本にては先に出でたり。金剛針論三〇。その方論文の構造上、よし。原本には恐らく前に出でゐたのであらう。

象牛馬等は足跡異なる爲異種なりと言ひ得る。然し、人間の足跡の形は同じ故四姓の高下ありと言へずと論ず。

【二四】陽根。陰門を言ふ。

【二五】四姓中の各人の形、血肉等區別し難し。

【二六】刹怛呬花、不明。染は煩惱の意。

【二七】交契。性交を言ふ。

【二八】憂曇鉢樹。梵本 Udam-bha 無花樹の一種。 Erens thornu.

【二九】交會。性交するを言ふ。

【三〇】彌私瑟姪(Vasishtha)。前出。

【三一】彌野婆(Vyasa)。前出。この二人の傳説重複して出す。

【三二】半拏鷲(Fardava)。バ

【三三】半拏鷲(Fardava)。バ

【三四】五王子を言ふ。詳しくはユナイシユテイラ Yudhishtira 王の項を見よ。パインドウ王には二妃あり、シュニラセーナ Sursur-pana の王シュニラ Bura の娘クンテイ Kunti 又はプリター Pritha とイドラス王 Madras の妹 イードラ Matri

【三五】彼に置かれた病と呪の爲に妻と交ることが出来ず、雪山に退いて死んだ。二妃は五子を生んだ。神々が王の父であると言はれるが、王は子として認め、子はパインドウア(パインドウの子)として呼ばれる。クンテイは長兄三人、マードリは末弟二人の母である。ユナイシユテイラ Yudhishtira (戦に確かなる)は最年長で、マル(Dharma)の典で、男らしさと正義と廉潔の典型とされる。ピイア又はピイアセーナ(Bhishma)は風神ヴァアユの子、力と勇敢と勇氣で知られてゐる。然し粗暴で、高慢であつた。大食で、狼の腹と呼ばれ

た。アルジュナ Arjuna は空の神インドラ Indra の子で、最も秀れた性格で、武人より詩人的であつた。勇敢で、心高く、寛大で、心柔く、名譽の觀念に於て武士的であつた。ナクラ Nakula とサハデーヴァ Sahadeva は第四、五子で、日神スールヤ Surya の双子神アシニウイニクマール Ashvini Kumaras とあつてのイードラ Matri の双子である。

【三六】金剛針論三〇(高楠博士譯一三一—一四頁)に當るが、増補してゐる。

【三七】梵本には第十五結文として、在の句あり。

【三八】理性を滅却せる再生族の迷妄を破る爲に、我々に依て説かれし所のもの、もし適切ならば、善人は之を採容せよ。もし不適切ならば、則、之を抛棄せよ。

【三九】こは悉地成滿の阿闍梨耶馬鳴師の製作なり

として賤族の胎より生れたものが、大仙となつた例を擧げ、徳行が婆羅門の所以なるを説く。(金剛針論二一—二九。高楠博士譯一—二) 神話多し出す。この部分に相當する漢譯は前にあり。

【九】迦癡那、Kapala、前出。カピラ仙の鹿胎より生れしを聞かず、クシユヤシユリンガ仙の迦陀か、この部分には梵本には迦陀仙が蓮本の胎より生れたと記す。

【九五】罽野裝(Vijaya)、前出。

【九六】探魚女(Kaṭvartī)。

【九五】「故に」に別に意味なし。

【九六】嚩斯瑟吒(Vasistha)、前出。

【七〇】烏呬嚩尸(Urvaśī)、前出。

【六八】鹿角大仙、リシユヤシエリンガ(Rayasringa)、即ち一角仙人のこと。

【九五】尾濕嚩彌怛咎(Viśvamiṭra)、前出。この外に梵本は飄女の胎に生れたる那維陀(Nāgadhā)を擧ぐ。

【一〇〇】善覺大仙。鹿角大仙のこと。

【一〇一】尾濕嚩彌仙・彌怛囉大仙は二人にて、Viśvamiṭraなるを一人に誤解した。

【一〇二】最囉那。不明。
【一〇三】第十四として、四姓に

本質に區別なきを立證す。極めて科學的な立論である。
【一〇四】梨俱吠陀一〇、原人の歌。

【一〇五】梵王(Brahmā)。印度の三位一體の第一、宇宙の創造者としての最高神。彼は第一の最高原因によつて配列された世界卵から生れた。生主Prajāpati、生物の主である。聖者又は諸生主の第一である。この世界が燒かれてゐた時に、聖者・神・要素丈が殘つてゐた。彼は目覺めて、世界の生物を創造した。梵天は赤也で、四語を持ち、彼の一頭は不遜に語るので、ソヴァ神の中央の眼に燒かれてゐる。四の手を持ち、その各々に弓・水瓶・數珠玉の糸、王節、吠陀を持つ。妻は學藝の女神サラスヴァティー(Sarasvatī 辨才天)で、乗物は白鳥である。
【一〇六】婆羅門の修行者の服裝である。
【一〇七】父が同じ梵天ならば、子たる四姓も同等なるべきであると論ずる。梵本と一致す。
【一〇八】象馬牛等なら、足跡が異なる故、別種とも言へる。然し、四姓の各の足跡は同形成、同種である。
【一〇九】この次に梵本にては種種の鳥の羽毛、形の異ると、

四姓の相違とは異なるを論ず。この句は漢譯にては後の部分に出づ。

【一〇】漢譯にては簡單。梵本は花樹の例を次に多く出す。之に相當する句は、梵本にては後に出づ。

【一一】喻地瑟致囉(Uddhisāhira)。摩訶婆羅多(Mahābhārata) 詩中に活躍する英王である。パインダウ五王子の長兄にして、神話的は法神ダルマの子と言はれる。

クル族に持國王 Dhṛtarāṣṭra と槃頭王あり、前者に百子、後者にユデイシユライラ以下五王子があつた。持國王は盲目にて、パインドウ(Pandu) 王即位し、その死後首王持國王が位に即ち、五子を王廷に養つた。持國王は亡弟の情義から五王子の長兄ユデイシユテイラを立太子した。之は百子に嫉まれ、五王子は流浪のやむなきに至り、クル國は兩分され、二派に分けられた。ユデイシユテイラは温厚であつたが、唯賭博を好み、百王子に破れ、王國王位を失つた。

流浪した。印度の慣で、十二年一定地に漂住し、更に一年變裝して發見されず居るを要した。満期満ち、王は王國王位を要求したが、百子は

言を左右にして與へなかつた。こゝにユデイシユトラ以下五王子とツルヨーダナ以下百王子はクル Kurū の平野に大激戦を試みた。最後に五王子は勝つて、王國を復するを得た。やがて王はアルジュナ Arjuna の孫ハリクシット(Purikṣit) を王位に即し、自らは四王弟と共に雲山に隱棲した。王は武人といふより、正義の代表者にて支配者・指導者であつた。

【一二】吠婆波瀝(Vaiśampāyana)。黑夜柔吠陀の天の教師である學識ある仙。ウイヤーナの子で、マハーベエラタを彼から學び、宴席に於てヂヤナメーヂヤヤ Janamejaya 王に讚誦したと傳はれる。ハリウヴァンサ(Harivamśa) は彼によつて傳承せられたと云ふ。

【一三】德、相、梵本 Lukāna (相)、物の定義をなすには、常に相を説明するのが一つの條件となる。

【一四】以下婆羅門の眞の卓越は德行なるを論破す。

【一五】胎生。印度にて生物の出生による分類の一。母胎より生れるもの。他に卵生、水生、濕生あり。

【一六】梵漢譯にては生殖器に

ものである。この金剛針論の成立時代には既に少くとも前ミーマーンサは存在してゐたのである。

【六九】 僧伽論。Sankhya 印度六派哲學中の白眉。教論と譯す。初期に於ては數論學地 Sankhya-yoga と並び考へられた。然しながら數論は無神論的で、瑜伽は神論的である。數論は神論的には毘羅離仙に初められ、自在黒 isvarak-arya によつて建てられたとする。發達した形では二元論であつて、神我 Purusa と自性 Prakriti を立て、神我は展眺せず、獨自のものにて自性より世界が次第に開展したと考へ、自性より覺(Buddhi)我慢 Ahankara 五唯・五知根・五作根・意根・五大開展し、神我を加へて廿五諦を説く。現象世界の迷と流轉を解脱し、獨存 Ke-Iyarya の境地に達するを究極とする。數論頌 Sankhya-kavika を經典とす。

【七〇】 譯史迦(Vaisesika)。勝論と譯す。印度六派哲學中の雄。迦那陀(Kanada)を開祖に立てる。ミーマーンサと異り、包括的の種類又は類概念を立て、一々の聲義の代りに特定の句義 Padartha の常住を認め、自然哲學の立場から

金剛針論

萬有を解釋し、解脱の眞道を示さんとした。萬有の成立要素を六乃至十の句義、即ち範疇に分け、その結合の仕方如何によつて世界に種々相ありと説く。衛世師迦經 Vaisesika-ika sutra を經典とし、三百七十句よりなり十卷に分れる。

【七一】 梵本は諸論に當る部分に「占星 Jangna 活命法 Jivika 等の諸典」と記す。又吠陀の次に文法 Vyākaraṇa (記論)を擧げる。即ち波尼備(Pāṇini)の梵語文典である。

【七二】 梵本。次に第七第五問として習俗を論ず。漢譯は苦行と術数を論じ、少しく異る。

【七三】 梵本は舞倡(nata)傭兵(Mukta)漁郎(katvarta)幫間(Chandru)等を擧ぐ。

【七四】 梵本。第八、第六問として行作の故に先天的に婆羅門は他の三に卓越せずと論ず。(高楠博士金剛針論八頁)

【七五】 檀行。梵本は行作(Karman)とする。

【七六】 判帝利。印度古代の四階級の内の第二階級に屬す。武士階級にして王族もこれに屬す。軍事行政に當る。政治的社會的には婆羅門より事實有力であつた。

この漢譯の依つた梵本にはこの句が先にあつたのか、或ひは現存梵本に依つたが、譯者かこの部分丈を轉倒したのかも知れぬ。梵本より簡單である。(看高楠博士金剛針論九) 【七七】 軍那華(Jandva) 藥馨(ヂヤスマン)の一種。學名 Jasmium multiflorum or jandoseen. 【七八】 一切の染。染、染まるもの、即ち煩惱を言ふ。 【七九】 第九第七問として吠陀によつても、婆羅門は卓越の理由なきを論ず。 【八〇】 速骨嚙大仙、不明。 【八一】 旃陀羅(Undaria)。賤族。前出。梵本は羅婆那(Karyana)と名ける羅剎鬼(rikasana)とす。 【八二】 印度の仙人にて五神通を得たものを言ふ。五神通とは天眼通、天耳通、他心通、宿命通、如意通(神通)と言ふ。有漏の禪定にて外道にても五神通を得るもの多し。 【八三】 梵本はこの間に、第十一首陀羅位として、波爾尾の文法の接尾字の法則を引いて、四階級の内の首陀羅が終に置かれるので、賤しいといひ立論を、他の文法語の例を引用し

て、反駁してゐる。 【八四】 婆迦迦(Bhagavata)。一尊者の意。ヴィイシヌメクリシユナ Vignakana の名。又シヴァ Siva 神の名。 【八五】 大自在天。Mahesvara. シヴァ神のこと。印度教の三位一體の神で、深く信仰される。この神の性格は深く廣い。ルドラ Rudra 又は大黒天 Mahakala としては破壊の神とされる。シヴァ又はシャンカラとしては幸福の神で、イーシュウアラ Iyara としては最上神、大天 Mahadeva としては大神である。再生の神としてはリンガ Linga を象徴とし、マハーキー Mha-yogi 又は大苦行者である。この神は吠陀時代には知られず、唯ルドラ Rudra として現れたが、後世最も重要な神の一人となつた。 【八六】 梵本は第十二として食を賤女より受けしものは墮落すと説くに對し反駁す。(金剛針論一八一—二〇) 漢譯は單に絶食が婆羅門の證ならば、首陀羅も絶食すと説く。 【八七】 梵本では賤めの呼吸に驚れしものも墮落すると説く。 【八八】 地獄。梵本叫喚地獄(Kanvya)とす。 【八九】 第十三婆羅門位の獲得

タの庵室を問ふた折、彼は饗應の美味を望むまゝに出す欲牛 Kamadhenu を所望した。

ヴァレンシュタが拒んだので、兩者の間に戦が起り、欲牛の召喚した軍隊にヴィンユヴァーミトラは破られた。之は婆羅門族が刹帝利より勝れる體左とされるに至つた。婆羅門にある爲に、彼が苦行を修してゐる間に、トリシヤンク王と知り合つた。王は甘露族 (Ikavaku) の後裔で、王は宮廷僧ウアシユタ天に生れるやうに祈るを乞ふた。ウアシユタが拒むと、王は尙頼むので僧は王はチャンダーラに墮落すべしと命じた、ヴィンユヴァーミトラは憐れんで王を生天せしめたとする。之とやや似た話はハリウヴァンシヤにも出でゐる。

マハーベラターとラーマヤーナには彼の苦行中誘惑する爲天神がアプサラフ(女神)のメーナカーを送り、ヴィンユヴァーミトラは誘惑され、シヤクンタラー姫を生した。

仙は恥じて北方の山に退き、そこで千年苦行した。等々 (cf. Hindu Classical Dictionary 364ff.)

看、「佛陀の生涯」四・二〇四二頁。註一六頁。

【三】 旃陀羅。Gandhara 階級が墮落したもので、最低で最も輕蔑された混血の部族の男。シユードラの父と婆羅門の女とより生れたもの。旃陀羅女 (Gandhari) はその女。

【四】 離愁婦。Yasrajña「富める」意、多への讃歌を作つた吠陀仙。七仙の一、十生主の一人。刹帝利出身にて婆羅門となつたウアシユヴァーミトラ仙との間と激しい競争があつた。望むものを出すナンヂニニー Nandini と名ける欲牛を持つてゐた。ニトラ Mitra とヴァアルナ Varuna の子で、ウルウアシイー Urvashi の靈より生れた。二神がウルウアシイーを見るや、子としてウアシユタは地に、アガスタヤは瓶の中に生れたと。その他の説話についてはウイニウヴァーミトラの項を見よ。(cf. Dictionary: Hindu Classical Dictionary 339ff.) 看、「佛陀の生涯」四・七七。五二頁。註一八頁。

【五】 烏哩嚕 Urvashi 天女(アプサラス Apasaras)で、美しいので、ミトラとヴァアルナ神によつて、アガスタヤとウアシユタを生んだ。二神の怒に觸れて、地界に下り、ブルーラウアムス Pururvasa の妻となつた。二人の情事はシヤタバタ、ブラーフマナス Brahmanas、Brahmanas に語られてゐる。この英雄及びウルウアシイーの戀はウイクラモールウアシイー Vikramorvasi と名けるカリターサー Kalidasa の戯曲の主題となつた。

【六】 天所生の女。ウルウアシイーにて天女(アプサラス Apasaras)にて、その子ウアシユタは婆羅門ではあり得ぬ譯である。

【七】 成嚕底經。梵本 Sūtra (聖傳)の音譯。スムリタイについては前項を見よ。

【八】 この次に梵本には數行あるも、漢譯は抄略す。

【九】 以下、金剛針論一〇一—一一。

【一〇】 摩奴の法典 (Manava-dharmasāstra) を言ふ。

【一一】 紫曠。梵本 (Jāta) 漆。

【一二】 成陀。Sudra 首陀羅と同じ。第四階級。

【一三】 毘舍。Vaiśya 四階級中の第三階級アーリヤ族であるが、庶民階級で、農工商等の職に携ふのけ之に屬す後者には之の階級より富者出で於婆羅門、刹帝利より實力に勝るに至つた所謂長者なるものけ之である。

【一四】 第五、第三問として身

體の故に婆羅門は卓越すといふ説を非難す。高楠博士金剛針論八頁。漢譯、現存本を逐字的に譯さず。

【一五】 古來。婆羅門は梵天の口より、刹帝利は兩臂より、毗舍、首陀羅は足より生じ、その故に身分の高下ありと、婆羅門教は説く。梨俱吠陀一〇原歌(三〇)この句梵本になし。

【一六】 姓は生の意か。

【一七】 檀行。梵本は Dāna 他人に物心を施すこと。

【一八】 第六。於て婆羅門知識として、知識に於て婆羅門が先天的に卓越を主張する理由なきを論及す。

【一九】 彌陀婆。Mīmāṃsā 印度六派哲學の一派。前ミーンサ Pūrva Mimāṃsā と後ミーンサ Uttara Mimāṃsā とに分ける。前ミーンサを普通ミーンサと呼び、後ミーンサを吠檀多 Vedānta と言ふ。前ミーンサはヂヤイニ Jaiyini により初められ、後ミーンサは吠陀の編纂者のウヤーサ Yāsa によつて初められたと言ふ。前ミーンサは文法派の流れを汲み、之を哲學的に解釋して、聲の常住を論ずる。成立年代は不明であるが、紀元五世紀以後の

呵厭さるる所にして、之を行ふべきにあらず。

又如し身語不善を捨離し、恒に淨業を修するを婆羅門と名く。彼毘舍等も亦能く之を行ふ。彼の
大仙を得て、^{ニヒョウシシユタ} 竊私瑟姪と名く。

又世間の火能く柴薪を燒きて、分別なきが如し。今婆羅門餘の諸姓に對して異なるなきも亦た然
り。

又彼宗、^{ニヒシヤウサ} 彌野婆大仙の如し。本是れ採魚父の生む所にして、亦た是れ彼の婆羅門の生にあらず。

又、^{ニヒクシシタツ} 半拏嚙王の如し。兄弟五人同一母生にして父乃ち各々別なり。此れ宿業に由つて母を同し父
を別にし姓に由るに非ず。而して妄りに別に執す【三〇一】。

又世間の鹽水に處すれば、形隠るべしと雖も、味なきに非らず。宿業身に隨つて隱顯すること亦
然り。是の如く妄りに執す。諸有の智人、應に當に審かに悉くすべし。依信すべきに非らず。【三〇二】

【四九】 野鹿採魚人生。梵本

鹿女(Mrgi)と採魚女(Kalya-
rini)の二人とす。鹿女は一
角仙人(Rajasinga)の母で、
一角仙人の父は鹿と交つて、
同仙を生きました。仙覺、又仙
鹿、一角仙人のこと。一角仙
人(Rajasinga)はカシユバ
(迦葉) Kasappa 子孫のウイ
バーンダガ(Vidhantaka)の
子で、仙士、マハーバータ
ではリシニヤシユリンガ Be-
rusinga(男鹿の仙人で、鹿の
子)の子で、狼に一角あり、森
にあつた。アング(Anga)因

金剛針論

に早魃があり、ローマバーダ

(Lomavada)王の招で雨を降
らし、娘シヤンター娘(Sin-
ta)と結婚した。看アツマチ
ヤリタ四・一九。平等佛陀の
生涯一四二、註一五。採魚人女
(Kalyanika)は普通名詞。
【五〇】 嚙野僧子覺を囉。嚙野
僧(Vyasa)普通毘耶婆。一般
的に「編纂者」の意であるが、
殊にVeda-vyasaを指す。吠陀
の編纂者で、傳説的にマハー
バータの編者吠檀多 Veda-
ntaの哲學の創設者、富維那
Puranaの整理者とも言はれ

る。バラシヤラ Parāśaraと

サトヤヴァテイー Satyavati
の私生兒で、クリシュナ・ド
ヴァイバーヤナ(Krishna-dva-
ipayana)とも呼ばれる。
【五一】 尾濕彌恒覽仙(Vish-
nukra)、刹帝利族の大仙で、
苦行によつて婆羅門階級に上
り、七六仙の一人となつた。ク
シカ Kusika 王の子ともガー
ディ Gadhi の子とも言はれ
る。ウイシヌヌ・ブラーナに
よれば、ガーディの娘サトヤ
ヴァテイーと婆羅門リチタイ
カ Kricika との間に生れたと。

一〇

antaの弟子で、パーニニ Par-
iniによく引用される。夜柔
吠陀(Yajurveda)のタイテイ
リヤ本典は彼の作であると
言はれてゐる。

【四七】 捺囉輪、不明。日(三)鹿
女)の意か、漢譯又如名捺囉
輪子名仙覺。梵本「微塵名(Be-
nuka) ジャドアグ(二)妻)
は羅摩(Rama、斧の羅摩)を生
めり。註四九參照。

【四八】 漢譯一又如母名野鹿採
魚人生、其子乃名嚙野僧子
覺を囉。梵本は「鹿女は一角
聖仙(リシニヤシユリンガ)を
生み、採魚女は廣博仙(嚙野
僧ウヤイサ)を生み」とあり。
漢譯誤解す。(金剛針論八)

彼は婆羅門出身のウアシシユ
タ仙(Vasishtha)と刹帝利と婆
羅門が何れが卓越するかにつ
いて、激しく争つた。(梨俱吠
陀)兩人は違つた時に夫々ス
ダース王の宮廷僧であつた。
ウイシユウーミトラ Vism-
itraの百子はウアシシユタの
呼吸によつて殺された。羅刹
からウイシユウアーミトラの
力で變化したカルマーシヤバ
ーダ王に、ウアシシユタ王の
百子は食はれた。
ラーマーヤナによれば、ウイ
シユウーミトラがウアシシユ

仙人復た噓地瑟恥囉に告げて言く、「有情を殺さば、貪瞋を遠離し、清淨比なし。是の如きは名けて婆羅門の行と爲す。諸根を調伏して布施忍辱し、眞實の梵行を行ひ、一切有情を悲念慈護し、習慧を修習す。是の如きを名けて婆羅門行となす。邪なる苦行を離れ、有情機の所有の衆苦に應ず。是の如きを名けて婆羅門の行と爲す。」

又婆羅門、^{ニ〇} 諷野恒哩經咒中に説く。苦行執を離れ、諸根を調伏し、四時施を行じ、有情を愛念し、睡眠を捨離し、恒に淨行を修して千劫を經れば、方に名けて眞婆羅門と爲すを得。」

仙人復た噓地瑟恥囉に告げて言く、「若し人、四圍陀論を解し了れば婆羅門と名け、性の最上と稱す。餘の首陀姓も亦た能く了解すれば、何ぞ最上にあらざらん。」

譬へば四性同じく聖境に遊ぶが如し。所有の^{二三} 蹤跡は此の人の蹤、彼の人の跡にあらずと分別すべからず。一姓四姓亦復た是の如し。假の施設に由り、本と差別なし。

又世間牛馬等の形は相狀異りと雖も、男女の二根同類にして殊ならざる如し。彼の婆羅門と刹帝利・毘舍首陀と、一姓四姓相望むも亦た然り。

又た一人の血肉屎尿手足諸根と衆多人の所有の血肉との如く、同類なるも亦然り。

又蓮花、^{二五} 刹恒哩花月螺は光色分ちて差別すべし。餘の四姓に於ては色相異なるなし。如何ぞ差別あらんや。又た牛馬乃至象鹿の^{二六} 染欲を行ふが如し。交契して分ちて差別すべからず。今婆羅門と刹帝利・毘舍首陀と、互に相交契して染欲を行ふ。皆同じく胎生なり。何の差別かあらん。

又婆羅門所生の女の如し。餘の婆羅門同姓姊妹に對し、云何ぞ交契せんや。姊妹兄弟夫妻乃ち爾り。世間の首陀、此の法を行ふに非らず。

譬へば世間の^{二九} 鬘雲鉢樹の如し。花果枝葉復た衆多なりと雖も、根身異なるなし。能く此彼の花を分別すべきにあらず。汝、婆羅門亦復た是の如し。同姓の姊妹に^{二九} 交會すべきにあらず。世に

【四三】 迦羅舍。梵本 *Kaṇha* (男中性名詞・水瓶) の音譯。

【四四】 訥嚙擊。Draṇi の音譯。「水瓶」の意。婆羅門で、父ブラトウアーチャによつて水瓶の中に生れた。阿闍梨(Ācārya) 教師で、ビシシュマの腹

異の妹と結婚してアシユウツターベン Aśvaththaman の父となつた。カウラウア Kaurava 及び パンダヴァの双方の軍師で、ドロナーチャー

ールヤ Dronacharya とも呼ばれる。パンチャラー Yama

はの王ドルバダ Dronudika 輕蔑され彼の敵となつた。パ

インダヴァの助によつた。ドルバダを捕虜とし、王国の半を奪つた。二人の死まで、互

の遺恨は續いた。パラータ達の大戦争に於てはドローナは

カウラウア黨に味方し、ビシマの死後指揮官となつた。

その第四日目にドルバダを殺し、その代りに子ドリシユタ

ドフンナ Dursiddhanta に父の譬として殺された。ドロ

ーナは又クータダチ Kūṭāra と呼ばれ、「山の頂より生れし」又は「水瓶より生れし」を意味する。

【四五】 底逸底呬。titina (鷓鴣) の音譯。

【四六】 底帝哩呬迦。Tittira (鷓鴣) の意。古仙で、ヤースカ

時に彼の仙人、吠婆波瀟乃ち王に告げて曰く「三二」。「忍辱・精進・靜慮・般若、此れ乃ち名けて婆羅門の徳となす。貪瞋及び諸の一切有情を殺害するを遠離す。是を第一の婆羅門の相と名く「三三」。他の所有一切の財物に於て貪受するに非ず。是を第二の婆羅門の相と名く。暴悪を遠離して性行溫和にして我人を封せず。繫縛及び諸の欲染を捨離す。是を第三の婆羅門の相と名く「三五」。人天女乃至傍生に於て恒に染著を離る。是を第四の婆羅門の相と名く「三六」。又復た一切有情を成熟して恒に悲愍を起し、諸根を調伏して清淨最勝なり。是を第五の婆羅門の相と名く「三七」。是の如く五種悉く皆具足するを婆羅門と名づく。若し彼我を封じて五相を具するに非ざるを皆首陀と名く」と。「三八」仙人復た噓地瑟耽囉に告げて言く「非族非姓及び苦業を修して婆羅門と成る。彼の旃陀等も王相を具足すれば、亦名けて眞婆羅門と爲すを得。是の如き理に出つて彼の婆羅門も亦首陀と名け、首陀も亦眞婆羅門と名く「三九」。

彼の噓地瑟耽囉、仙人に白して白く「彼の婆羅門は不殺行を行じて果の清淨なるを得たり。此乃ち少しく分ちて婆羅門と名づく。」

仙人、復た噓地瑟耽囉に告げて白く「此の四姓の別は過去宿業の因縁に依る「四〇」。猶ほ世間の胎生、有情、一切皆穢處根より生ずるが如し。何の差別かあらん。是の故に戒行復た徳業を修するを婆羅門と名づく。乃至首陀、徳行を修すれば、婆羅門と成る「四一」。若し婆羅門、徳業を修せざれば、此れ亦下劣の首陀と名づくるを得。又此の「五根能く惡業を起せば、常に應に調伏すべし。猶ほ大海、有情を沉溺すれば、濟度を求めて彼岸に超えしむべきが如し」と「四二」。

其の時噓地瑟耽囉王、仙の所説を聞いて了解踊躍し、此の所聞を以て施を一切無邊の有情に廻して悉く曉悟せしむ。自身の爲めにし及び己の命を貪るをせず。我今、日夜忍辱を修習し、眷屬及び嫉妬を遠離して、一切欲境更に耽著せず。解脱を趣求して恒に淨行を修む。

の子孫を意味す。クシカ族の王で、インドラの權化と言はれる。(ウイシシュス、プラーナ (Vajra Purāṇa)。尙看アッタチャリタ (Buddhaśāstra) 一、四九及び平等「佛陀の生涯」九頁同註六頁。梵本はカウシカ、クシヤ(吉祥)草より生じたこと。

【三七】 俱舍子、不明。Kaṅṅīra (クシヤ俱舍の子)の音譯か。

【三九】 僧薩多説、不明。迦癡那 (Kaṅṅīra)。カビラ kaṅṅīra は赤褐色を言ふ。こゝでは「紅日」を指す。

【四〇】 迦癡羅 (Kaṅṅīra)。仙の名。傳説的に印度六派哲學の白眉數論 (Sāṅkhya) の始祖とされる。ハリウアンサ (Harīraṅśa) P はウイタタ (Vita-tā) の子とされる。一瞥を以てサガラ王 (Sagara) の百千子を殺したと言はれる。

【四一】 婆在處。度。梵本 (Sāṅkhya) 沙羅叢林) の音譯か。

【四二】 憍怛麼 (Jantama)。普通爲答摩と音譯する。シャラドブット仙の名で、ゴータマ仙 Gotama の子である。インドラに誘惑されたアハルヤ Aharaya の夫である。この誘惑は神話的にはインドラが日

で、アハルヤが夜であることを意味するといふ。

【第十四 四姓一元】

又彼の執する如く、『婆羅門の姓は梵王の口より生じ刹帝利の姓は梵王の臂より生じ、毘舍の姓は梵天の體より生じ、梵足より乃ち首陀を生ず。』是の故に虚妄多く是の執を作す。又執して苦行して堅く其の志を守るを婆羅門と名く。應に採魚人・染師・皮作及び首陀等は志を堅くし苦行すべし。應に皆總じて婆羅門と名くべきや。

又彼の形に執し、其の髻髪を編み、腰に素繫を帯び、手に木杖を執り、衣素に儉食なるを婆羅門と名くるならば、餘の成陀等も亦能く之を行す。應に此を總じて婆羅門と名くべきや。又執す。四姓皆梵より生ずと。如何にして父は一にして子の姓乃ち別るや。應に首陀乃至餘の族は一たるべし。父生む所、子の姓殊るべきは、此既に爾らず。彼、云何ぞ然らんや。

又婆羅門は一梵天の口中より生まる。姉妹兄弟自ら相交契するは世の呵厭する所。汝能く之を行ふ。云何ぞ清淨なる。是の故に妄に非淨を執して淨と稱す。如し一父母が四子を生みしならば、別姓なるべきにあらず。云何ぞ妄執せん。此は婆羅門、此は刹帝利、此は是れ毘舍、此は是れ首陀なりと。云何ぞ一父子にして姓各々別ならん。此の故に四姓は妄りに差別に執するなり。

象・馬・牛・羊・鹿・獅子・虎狼の形足各々異り、此は是れ手跡乃至象跡なりと差別を分つべきが如きに非ず。又一樹の花果を出生し、異なるなかるべく、餘の花弁あらざる如し。生處同じからずして同じからしむべからず。汝の今の四姓道理亦然り。若しは婆羅門、若しは刹帝利乃至首陀、皆一父より生ずる處なるが故に、云何ぞ妄りに四姓の差別を執するや。【三〇】

復た天王有り、喻地志攷囉と名く、虔恭し合掌して仙人、吠婆波瀝に來詣し、頭面禮足して大仙に白す【三一】云何ぞ婆羅門の徳と名くるを得る。復た云何ぞ婆羅門の相と名くる。差別之相、復た幾種ありや。願くは今演説して我をして了解せしめよ。』と。

tra 及びヴァルナ Varuna の子と考へられ、ヴィンドヤ山 Vindhya に平伏するやうに命じたと考へられてゐる。マハーバータでは、彼は祖先が坑の中で踊で立つてゐるのを見、彼が子を生めば、それを救ふことが出来る」と知り、ヴィダルヴァ (Vidarbha) の宮殿に色々の獸の長座を持つ娘を造り、自分はその宮殿に入つて、その王の娘となつた女を王に強いて乞ふて妻とした。ローバムドライ Rajahmundry が之である。ローマヤナ (Ramanaya) ではヴィンドヤ山の南に庵室を持ち、南方の庵室の主であり、南を苦しめる羅刹 (Rakshasa) を支配下に置いた。駝摩 (Rama) が法刑中、彼はラーマ、ラクシャナ、Lakshmana、シータに遇し、忠告者となり。彼にヴィンテス Vintesa の弓を與へた。但し彼がアガステイ花より出生した記事、見當らず。【三】 布沙野左、梵本になし。不明。

【三〇】 嬌尸伽。Kamśika 駒尸迦 (Kamśika) の子孫で、ヴィンテス Vintesa の父又は祖父で、ガーデー (Gadhi) のこと。カウシイカ (Kamśika) はクマカ Kusika

【第十三 婆羅門位の獲得】

迦癡那大仙ニニフの如き、鹿胎より生じ、苦行修學して乃ち仙道を證す。此の仙、豈に婆羅門より生ずるべけんや。

鷲野婆大仙ニニフの如く、採魚女より生む所なるが故に苦行修學して仙道を生ず。此の仙豈に是れ婆羅門の姓ならんや。是の故に妄執正理に契はず。【二二】

又 鷲野鷲野大仙ニニフの如し、烏哩鷲野天女ニニフより生ずる所。苦行修學して乃ち仙道を得たり。此の仙豈に婆羅門の姓ならんや。【二三】

又 鹿角大仙ニニフの如し、鹿胎に生れて、修習苦行して仙道を生ず。此の仙豈に是れ婆羅門ならんや。

【二四】

又 尾濕鷲野彌怛嚕大仙ニニフの如し、旃陀羅家の女の生ずる所。【二五】此の仙豈に是れ婆羅門ならんや。是の故に應に知るべし。諸根を調伏して我人を執せず。梵行を勤修して遠く欲染を離れ、永く諸惑を息む。此に由つて方に眞婆羅門と名く。而も彼の族姓より生ずるに非ず。如何にして妄に婆羅門の姓を世間の最上なりと執し、戒行清潔にして族姓雜無しと執するや。此の妄執を以て最に非らざるものを最となす。是の故に應に知るべし。彼の婆羅門は姓に非ず、命に非ず、族に非ず、行に非ず、業に非ず、生に非ざるものを婆羅門と名く。【二七一九】

又多くの人本下種姓にして、持戒修福して生天を得たる如し。何ぞ族姓に因つて乃ち天に生ずるや。

又汝の宗迦癡曩大仙・尾野婆大仙・鷲野鷲野大仙・覺善大仙・尾濕鷲野彌怛嚕大仙・曩囉那大仙ニニフの如き。此等の大仙は皆下姓の種族より生じ、苦行修因して乃ち仙道を得たり。何故妄に種姓の雜に非ざるを世間の最上と執するや。是の故に虚言は應に信受されざるべし。

【二六】 意味不明瞭。奥義書八卷、高楠博士譯六頁を参照されたし。

【二七】 首陀 (outen)。古代印度の四階級の内、第四の階級。上三の階級はアーリヤ民族なれども、第四のステドラは被征服民族たる先住のドラヴィド人 (Dravidian) が侵入民族アーリヤ族に奴隷とされたもの後で、生権は極度に奪はれ、政治は勿論宗教を聞く自由もなく、救済されることもない婆羅門教では考へられてゐる。この條の梵文「首羅より布施を受くる婆羅門は驢馬として生るべし」。

【二八】 摩拳の法典十八、九章にある管であるが、見當らず。

【二九】 梵文金剛針論六以下に當る。但し、逐字的に符合せず。第二問として「族生」を扱ふ。

【三〇】 種姓間雜。種姓加雜婚混血によつて混雜するをいふ。

【三一】 那洛乞叉、不明。梵本に無し。

【三二】 兵議羅仙、不明。梵本に無し。

【三三】 阿訶悉帝。梵語 Agastya (Agnasti) (アガステイ花)、即ち Agasthi Grandhima 又、アガスタヤ仙と同じ。

【三四】 阿訶悉帝。Agastya 仙名。吠陀時代には Agastya M-

是の故に此の速骨磨大仙の所説を知るを得、此の婆羅門は姓に非ず、業に非ず、徳に非ず、行に非ず、亦工巧に非ず。旃陀羅の四圍陀を善くし、工巧藝を能くし、德行具足するが如し。應に婆羅門と名づくるを得べきや？。是の故に應に知るべし。命に非ず、姓に非ず、智に非ず、身に非ず。亦業行に非ざるを婆羅門と名く。

又首陀の如し。善行修學して四圍陀を解し、五通仙を獲たり。汝婆羅門云何にして此の下種姓に奉事するや。又彼の仙道を四姓は皆獲たり。云何ぞ餘姓は最上に非ずと名や。

又帝釋の如し。往いて善業を修して彼の天に生らるゝを得たり。本下種の姓なり。彼の經の正文は是の如き説を作す。此の婆迦晚及び帝釋は彼の下種姓なり。是の如く徴詰して一に前に准す。

又彼の所説なり。大白在天、及び天后の口中に於て彼の帝釋諸天及び器世間を生む。世間より大白在を生み、及び天后を生ずるに非ず。本能く末を生み、末本を生むに非ず。是の故に此の言、彼の正説に違ふ。本下種姓なり。云何ぞ妄に彼より生ずと執するや。故に非理を知る。亦首陀の如きは、命終つて彼の大白在天に生まる。彼の婆羅門。云何ぞ彼の下種姓に奉事せんや。

【第十二混血】

又汝が説くが如く、婆羅門の法は服氣に餌藥苦しんで絶食を行ずるを婆羅門と名くるならば、彼の首陀等も亦能く之を行す。此は應に婆羅門と名くるを得べきや。

又彼の執する所あり。「首陀處に於て手中に食を受けて一月を経れば、現身變じて首陀の身と爲り、後報生中に決定して狗となる。」と。

「又婆羅門、首陀の女を聚つて以て妻と爲せば、父母家神皆悉く遠離して、死して地獄に入る。」と。

此の執は理に非ず。婆羅門の姓と彼の首陀と何の差別有らんや。

と温観との源と考へられる。アティテイ (Aditi) の子又は曉の女神ウシヤス (Ushas) の子とも言はれ、又ウシヤスは彼の妻であるとも言はれる。アシニゲイン (Asvini) は彼の子であり、後世には日種族甘蔗族は彼の後繼であるとも言ふ。

【九】命 (Jiva)。出生所謂生れを言ふ。

【一〇】婆囉帝山。不明、林本に相當句なし。

【一一】七畜獸。梵本 sapta varjaha (七人の獵師) とあり。

【一三】全文、七人の獵師は十處の森に在りし。

【一四】婆囉帝山。梵本 Dushit-ranya (十處の森) Dusharna 國を指すの音譯。

【一五】迦陵迦哩山 (Kalidjaly)。月神族「クマ」の國。印度中國に位し、肥沃にして、古代印度の文化の中心であつた。デ

イリー (Dohli) に近い平原で、カウラバ黨 (Kurava) とパー

ンダブア黨 (Andava) との間に激戦があつた。ターネサール (Thanesar) の東南で、パー

ニハット (Panhat) に遠から

ず、後世多くの戦ひの場面に

なつた。

【一六】摩訶婆羅多詩中ハリツ

アシニヤ Harivansha 五、一二

九二—三。

六七 第六 第四問知識

此れ應に然るべからず。所以は何ぞや。身智の中、何者か名けて婆羅門と號することを得ん。首陀羅等皆身智有るべし、悉く應に婆羅門と名くるを得べきや。

又彼の妄執は四圍陀及び彌鮮婆并びに僧佉論・尼世史迦を解し、乃至諸論皆悉く了達するを婆羅門と名く。此の理亦非なり。首陀等の如く、亦彼の論を解して彼の義を曉了す。皆得て婆羅門と名くべきや。

七二 第七 第五問習俗

若苦行を修すを婆羅門と名くれば彼の首陀等亦能く之を行す。應に亦得て婆羅門と名くべきや。諸の術數を解するを婆羅門と名づけば、彼の採魚の人及び諸樂人、術數の種々の差別を了解すれば、亦婆羅門と名くを得べきや。

七三 第八 第六問行作

此の故に應に知るべし。檀行は婆羅門に非ず。業は婆羅門に非ず。檀行を受くる者は婆羅門に非ず。彼の刹帝利・毘舍・首陀も亦能く之を行ふ。應に皆婆羅門と名くるを得べきや。是の故に應に知るべし。族に非ず、業に非ず、行に非ず、生に非ず。乃至德に於て婆羅門と名く。

七四 第十 婆羅門位

彼、何に因つて立つるや。曰、婆羅門位は軍那華の如く、亦白月に似たり。一切染を離れて善く勝行を修し、威儀缺くることなく、戒行具足す。善く諸根を伏して煩惱を除斷し、無我無人にしての執著を離れ、及び貪瞋癡皆悉く遠離す。是の如きは乃ち眞婆羅門と名く。

又愛染乃至畜生を離れ、貪著を生ぜず、清淨行を修す。之を婆羅門と名く。

八二 第九 第七問吠陀

【六】日天 (Surya)、吠陀時代の太陽神である。太陽の實體を指し、具體的に光炎赫々たる日を指すものである。光

【七】月天。梵本 Poma (蘇摩) 元來ソーマは一種の蔓草からしぼられた強い酒であるが、後世月天の名にも用ひられるに至つた。月の名としてはアトリ聖 (Atri) の子である

【八】月天。梵本 Poma (蘇摩) 元來ソーマは一種の蔓草からしぼられた強い酒であるが、後世月天の名にも用ひられるに至つた。月の名としてはアトリ聖 (Atri) の子である

【九】日天 (Surya)、吠陀時代の太陽神である。太陽の實體を指し、具體的に光炎赫々たる日を指すものである。光

【十】婆羅門位は軍那華の如く、亦白月に似たり。一切染を離れて善く勝行を修し、威儀缺くることなく、戒行具足す。善く諸根を伏して煩惱を除斷し、無我無人にしての執著を離れ、及び貪瞋癡皆悉く遠離す。是の如きは乃ち眞婆羅門と名く。

【十一】若苦行を修すを婆羅門と名くれば彼の首陀等亦能く之を行す。應に亦得て婆羅門と名くべきや。諸の術數を解するを婆羅門と名づけば、彼の採魚の人及び諸樂人、術數の種々の差別を了解すれば、亦婆羅門と名くを得べきや。

【十二】此の故に應に知るべし。檀行は婆羅門に非ず。業は婆羅門に非ず。檀行を受くる者は婆羅門に非ず。彼の刹帝利・毘舍・首陀も亦能く之を行ふ。應に皆婆羅門と名くるを得べきや。是の故に應に知るべし。族に非ず、業に非ず、行に非ず、生に非ず。乃至德に於て婆羅門と名く。

【十三】彼、何に因つて立つるや。曰、婆羅門位は軍那華の如く、亦白月に似たり。一切染を離れて善く勝行を修し、威儀缺くることなく、戒行具足す。善く諸根を伏して煩惱を除斷し、無我無人にしての執著を離れ、及び貪瞋癡皆悉く遠離す。是の如きは乃ち眞婆羅門と名く。

【十四】又愛染乃至畜生を離れ、貪著を生ぜず、清淨行を修す。之を婆羅門と名く。

【十五】日天 (Surya)、吠陀時代の太陽神である。太陽の實體を指し、具體的に光炎赫々たる日を指すものである。光

【十六】月天。梵本 Poma (蘇摩) 元來ソーマは一種の蔓草からしぼられた強い酒であるが、後世月天の名にも用ひられるに至つた。月の名としてはアトリ聖 (Atri) の子である

【十七】日天 (Surya)、吠陀時代の太陽神である。太陽の實體を指し、具體的に光炎赫々たる日を指すものである。光

【十八】婆羅門位は軍那華の如く、亦白月に似たり。一切染を離れて善く勝行を修し、威儀缺くることなく、戒行具足す。善く諸根を伏して煩惱を除斷し、無我無人にしての執著を離れ、及び貪瞋癡皆悉く遠離す。是の如きは乃ち眞婆羅門と名く。

【十九】若苦行を修すを婆羅門と名くれば彼の首陀等亦能く之を行す。應に亦得て婆羅門と名くべきや。諸の術數を解するを婆羅門と名づけば、彼の採魚の人及び諸樂人、術數の種々の差別を了解すれば、亦婆羅門と名くを得べきや。

【二十】此の故に應に知るべし。檀行は婆羅門に非ず。業は婆羅門に非ず。檀行を受くる者は婆羅門に非ず。彼の刹帝利・毘舍・首陀も亦能く之を行ふ。應に皆婆羅門と名くるを得べきや。是の故に應に知るべし。族に非ず、業に非ず、行に非ず、生に非ず。乃至德に於て婆羅門と名く。

【二十一】彼、何に因つて立つるや。曰、婆羅門位は軍那華の如く、亦白月に似たり。一切染を離れて善く勝行を修し、威儀缺くることなく、戒行具足す。善く諸根を伏して煩惱を除斷し、無我無人にしての執著を離れ、及び貪瞋癡皆悉く遠離す。是の如きは乃ち眞婆羅門と名く。

【二十二】又愛染乃至畜生を離れ、貪著を生ぜず、清淨行を修す。之を婆羅門と名く。

【二十三】日天 (Surya)、吠陀時代の太陽神である。太陽の實體を指し、具體的に光炎赫々たる日を指すものである。光

【二十四】月天。梵本 Poma (蘇摩) 元來ソーマは一種の蔓草からしぼられた強い酒であるが、後世月天の名にも用ひられるに至つた。月の名としてはアトリ聖 (Atri) の子である

【二十五】日天 (Surya)、吠陀時代の太陽神である。太陽の實體を指し、具體的に光炎赫々たる日を指すものである。光

【二十六】婆羅門位は軍那華の如く、亦白月に似たり。一切染を離れて善く勝行を修し、威儀缺くることなく、戒行具足す。善く諸根を伏して煩惱を除斷し、無我無人にしての執著を離れ、及び貪瞋癡皆悉く遠離す。是の如きは乃ち眞婆羅門と名く。

【二十七】若苦行を修すを婆羅門と名くれば彼の首陀等亦能く之を行す。應に亦得て婆羅門と名くべきや。諸の術數を解するを婆羅門と名づけば、彼の採魚の人及び諸樂人、術數の種々の差別を了解すれば、亦婆羅門と名くを得べきや。

【二十八】此の故に應に知るべし。檀行は婆羅門に非ず。業は婆羅門に非ず。檀行を受くる者は婆羅門に非ず。彼の刹帝利・毘舍・首陀も亦能く之を行ふ。應に皆婆羅門と名くるを得べきや。是の故に應に知るべし。族に非ず、業に非ず、行に非ず、生に非ず。乃至德に於て婆羅門と名く。

鳥哩鴉尸ウリヤシと名く五五。天所生の女は婆羅門に非ざること、上に説く所の如し。何に因つて固執して、婆羅門を人間の最上と云ふや。又所執の如く五六。戌噶底經は正しく亦理に非ず。是の故に所有の婆羅門の法は道理亦非なり五七。「九」

又所執五八。婆羅門の法の如く、新肉・紫礦六〇及び鹽等の物を六二。成陀應に受くべし。汝婆羅門は宜しく之を受くるなかれ。今何ぞ爾らざる。「一〇」

又彼が計するが如くば乳賣の婆羅門は行いて虚空より墮落し、婆羅門に非ず。肉を食して空より墮つるは非理亦爾り。是の故に正に知るべし。買賣乳肉、婆羅門は成陀の法に非ず。此に由つて當に知るべし。一切の食肉乳等の人に非ざる及び買賣に非ざる者は、皆總じて婆羅門と名くるを得るや。是の故に當に知るべし。乳肉計賣するは婆羅門に非ず。妄に非法を執す。「一一」

【第五 第三問身體】

又世間の姓は妄に最上を執す。亦正法に非ず。刹帝利クセトリア、毘舍ヒシャ、戍達各最上を執するは、應に皆總じて婆羅門の姓を名くべし。

又苦身を執して婆羅門と名けば、諸有ちゆうゆうの苦身は一切總じて婆羅門と名くべし。

又彼れ妄に執して、婆羅門を殺せば、罪を得ること重し。彼の眷屬を害して罪を獲ることも亦爾り。復た執す。彼は六四。淨き天の口より生れ、刹帝利六五の姓は彼の天の身上より、毘舍六六・首陀六七は身足よりして生ず。若し彼を殺せば、その故に重罪を獲る。

彼の執は理に非ず。所以は何ぞ。應に餘の姓を殺すべし。其の罪は有るに非ず。餘の眷屬を害するも有るに非らざること、亦然り。是に由つて妄執は正理に契六八はず。

又彼の所執は彼の行を破壊し、積行六九を破壊し、及び彼は施を受く。若しは智、若しは身、皆重罪を獲る。

(Kānyānu) 摩訶婆羅多 (Mahābhārata) 富羅 (Purāna) 法典 (Dharma-Śāstra) 行論 (Niti-śāstra) 等を含む。

【九】 能所詮 Dharmārthayukta 義利を具せり。の譯。

【一〇】 以下、婆羅門が諸聖典によつて自らの卓越を主張す。生命(個性 jīva)、族生 (jāti)、身體 (śarīra)、知識 (jñāna) 慣習 (vācya) 行作 (karma) 吠陀 (Veda) によつては、婆羅門は卓越を主張する理由なしと論破す。但し梵本と漢譯とは名目少しく異し。

【一一】 姓。普通 jīva を姓と譯するも、ここでは jīva を姓と譯せるか。

【一二】 名。普通 nāman を名と譯するも、ここでは jīva を名と譯せるか。

【一三】 知。jñāna を譯す。知識の故である。知識あるが故に婆羅門は尊しとす身體 (jīva) と譯す。

【一四】 行業。行 (karma) 業 (Karma) 行は慣習の意に、業は業作の意である。

【一五】 吠陀 (Veda) 前出。以下第一問として生命により婆羅門の卓越せざるを主張す。

梵本は「日、蘇摩、因陀羅が家畜であつた(シヤタバ梵書一三・二七・一三一―一五、

三三〇 迦陵惹哩山にあり、彼の山に有る所の鸚鵡・鷲・鵝・鹿之類は生れて人中 俱嚕國に在り。彼より死し終つて婆羅門の中に生れし、四圍陀論を解す。

三三二 此禽獸鹿・鷲・鵝は、人中に出生す。彼の獸の命は是れ婆羅門にして婆羅門に非ず。所以は云如。彼の命是の若くして禽獸に非ず。彼の命若し彼の婆羅門に生ずるに非ずんば、此の言、理に非ず。〔三三〕

婆羅門は執す。四圍陀論は是れ萬法の本にして、亦眞如と號す。餘の姓に於ては食を受くるを許すに非ず。

首陀の處に於て數々利を受くれば、正しく自宗に違ふ。何ぞ淨行と名けん。此に由つて生命は亦直婆羅門に非ず。〔四一五〕

【第四 第二問族生】

三三九 又四圍陀は婆羅門の法なり。妄りに正命及び正法に於て婆羅門種を執するも亦復た理に非ず。云如なるが正法なりや。種姓間雜す。何れを最上と名けん。所以は何ぞ。最間雜に非ず。其の事云何。

且らく父は 那洛乞叉と名け、其の子乃ち 兵誼維仙と名くる如し。又父を 阿誼悉帝と名け、其の子亦 阿誼悉帝と名くる如し。又父を 布沙野左と名け、其の子乃ち 嬌戸迦と名くる如し。

又其の父を 俱舍子と名け、其の子を名けて 僧薩多誼と爲すが如し〔六〕。又父を 迦癡那と名け、其の子を亦 迦癡那と名くるが如し。又父を 婆左虞臘麼と名け、其の子乃ち 嬌但麼と名づくる如し。又父を 迦羅舍と名け、其の子乃ち 訥嚕拏左哩野と名づくる如し。又父を 底逸底哩と名

け、其の子乃ち 底帝哩吹迦と名くる如し〔七〕。又父を 捺囉給と名け、子を仙覺と名くる如し。又父を 野鹿採魚人生と名づけ、其の子は乃ち 鶉野僧子覺乞囉と名くる如し〔八〕。父は首陀の

姓にして其の子は乃ち 尼濕彌恒覽仙と名け、母は是れ 毘陀羅なり。子を 鶉瑟施と名け、母を

ある。

【五】 四圍陀 (Vedā) 普通吠陀と音譯する。吠陀とは知識の義で、婆羅門の信する所によれば、右の聖人が神の啓示 (Śruti) を受けて誦出したもので、悉く神智聖智の發現であるといふ點で、この名稱が與へられた。吠陀語 (Vedā) で書かれた印度最古の聖典である。四に分れ、梨俱吠陀 (Rigveda)、夜柔吠陀 (Yajurveda)、沙磨吠陀 (Sāmaveda)、阿闍

婆吠陀 (Atharvaveda) である。四の四吠陀と稱する。第一の梨俱吠陀は祭式に神を招請する勸請偈 (Hōri) の爲に編され、沙磨吠陀は神徳を讚する詠歌偈 (udātī) 用に、夜柔吠陀は神の供養を司る。祭儀偈 (Akharyā) 用に、阿闍婆吠陀は祈念を司る祈禱偈 (Brahman) 用に編された。多く自然現象を神格化した。多分に擧げた宗教的讚歌である。

【六】 正。pṛṇāna の譯。普通、標準「量」と譯す。物を規定する標準の意である。

【七】 念 (Smṛti)。普通聖傳、聖念と譯す。記憶されたもの

の意。天啓 (revelation) と區別される。傳説によつて憶念され、傳へられたるもの。廣く用ひられ、吠陀部分 (Vedānīya) 經書 (Sūtra)、羅摩耶那

金剛針論

法稱菩薩造

西天譯經三藏朝散大夫試鴻臚少卿傳
教大師臣 法天、詔を奉じて譯す。

【第二總問】

婆羅門の言ふが如く、衆典の内 四圍陀を 正とす。又此の中に於て 念を正とす。又此の念の中、能く詮す所を正とす。又其の中に於て能く詮すを正とす。唯此の最上なるは法の此に過ぐるなし。世若し此なくんば、行此如何が作さん。此の能詮によつて若しは愛、若しは悲、此より生ず。一切姓は婆羅門を上とすが如し。今又此の言詮、又々是の如し。

此の理然らず。所以は何ぞ。彼の婆羅門は何の 姓、何の 名、又云何なる 知によりかく言はるるや。行業は云如。云如なるものの故に此の婆羅門の名を得るや、又此の 圍陀は云如にして正と稱するや。【二】

【第三 第一問生命】

「帝釋は元の因なり。云如が。傍生なるや。傍生とは云如？。月天に於て生ず。日天は元の因にして、復た傍生を生ず。風天火天水天は元の因なり。展轉して往來す。」云如にして是の如きか。

又彼れ妄執す。「天の中に死し終つて復た天中に生る。人中死し終つて復た人中に生る。傍生復た然り。」四圍陀内に此の説をなす者、皆正理に非ず。此の 命とは是れ何ぞ。何に因つて命と名くる。婆羅門等亦復た是の如し。

汝外道婆羅門の曰く。「正典の説く所あり。婆囉帝山に 七禽獸を産す。那婆囉陀及び別に鹿は

【一】梵本題名、左の如し。
Aṅgī ośaś Vajrasūtra (a Buddhist commentary on Vajrasūtra) 20
梵本よりの良譯高楠順次郎博士によつて興義書全集第八卷（世界文庫刊行會改造社）に出す。漢譯は行文難解なれば、讀者は高楠博士の和譯をも併讀されたし。

【二】法稱菩薩 (Dharmakīrti-Bodhisattva) 然し梵本は「馬鳴阿闍梨の作」Kṛtīyāna śiddhāntaśāstraṅgahoa-pāṭhanam」となつてゐる。馬鳴は大體紀元後一世紀であつて、法稱は遙かに後世（紀元五世紀）である。著作者の考證については解題を見られたし。大括弧の題は便宜上附けたし。漢譯歸敬文を缺く。

【三】法天 (Dharmadeva) 紀元九六〇—一一二七年在世し、同九七三—九八一年に金剛針論を譯出す。

【四】婆羅門 (Brahman) 印度古代の四階級の内第一の階級に屬し、僧侶階級にて、祭祀を掌り、王侯の顧問として政機に與る。遂には自ら卓越せる高位のものなりとて、種々の理由を擧げて特權を主張するに至つた。以下は婆羅門卓越の主張に對する著作者の佛敎的立場からの辛辣な批評で

く覺すものがあり、刹帝利・毘舍殊に首陀羅にとつては救主の如く滋雨・甘露の如くであつたであらう。

第六 金剛論の價值と

史的地位

本論の思想的價值と論理的妙味は著者が大部分の印度思想家が殆んど盲信してゐる四姓の區別殊に婆羅門の特權説を佛敎的な精神と正々堂々たる論鋒を以て、しかも敵の最も尊ぶ武器を利用して虚を突いて論難した點である。この明徹なる論理を以て包れた自由な慈愛に満ちた精

神主義には、何れの論敵も殆んど論駁の餘地が無かつたであらう。

本書は又ヴァジュラ・スーチイカー・ウパニヤツド *Vajrasūtra-upaniṣad* の様式を受け繼ぎ、しかも印度敎の大論師 シヤンカラ・アーチャールヤ類書を書かした點、印度哲學宗教史の主潮流に立つ著作と言ふことが出来る。

殊に文化史上興味深いのは、本書が思想上最も重要な梨吠陀・シヤタバタ梵書・タイテイリーヤ本集・摩奴の法典・摩訶婆羅多詩等を自由に引照し、僧佉・彌曼婆・勝論・文法等に解説してゐること

で、若し本書の著者と著作年代が正確に知ることが出来たら、大莊嚴論經と共に此等の諸重典籍の成立年代をも推定し得て、文化史上貢獻することが多いと信ずる。

殊に本書が現代に於ても相當の思想的敎示を含んでゐることは面白い。よし階級成立に經濟思想を織込んでないにせよ、現代思想としても相當の存在價值を有するものである。

【一】 *Winternitz: Geschichte der in-
dischen Literatur II.*

昭和六年十月十五日

譯者 平等 昭 識

彼等を婆羅門と承認しない。

第七に吠陀に依つても婆羅門でなく、羅婆那 (Ravana) といふ羅刹鬼は四吠陀を學んだが、婆羅門でない」と述べる。

かくて婆羅門位は所謂婆羅門の主張する聖典・聖儀・族生・宗族・吠陀・行作でもなく、誓戒 *vrata*・苦行 *tapas*・制戒 *ni-yama*・齋戒 *upavāsa*・布施 *dāna*・調御 *dama*・寂靜 *śama*・制感 *saṁyama*・善行 *upācāra* であつて、之が梵であり、この反對が非婆羅門であると白色仙シユクワの高を引つて論ずる。〔一一一七〕

首陀羅位は婆羅門・刹帝利・毘舍・首陀羅 *Brahma-kṣātra-viśudhī* で終位にあるが、之は四姓の合成語 (*Samāsa*) であるに過ぎず、波爾尼六典六・四・一三三によれば狗子 *śvan*・若年 *yuvān*・最惠 *Maghvan* に於て最惠は最後に置かれるのである。

婆羅門の性交も一定したものでない。

摩奴法典に言ふ如く賤女の口沫を飲む者・氣息に觸れた者、胎に生れた者は贖罪なく、賤女の手にて飲食した者は生前は首陀羅にて死後は犬として生れ、首陀羅女に圍透され、その女が家庭の供祭主ならば、叫喚地獄 *Paṇava* に墮ちる。〔一一〇〕

又賤族の胎より生れても前述の霧野僧等諸仙は婆羅門位を得て大聖であつた。要するに徳行が勝因である。〔一一一九〕

更に四姓も一元なりと主張し、梨俱吠陀一〇『原人の歌』を引用し、『婆羅門は口から、刹帝利は兩臂から、毘舍は兩胯から、首陀羅は實に兩足から生る』と言ふが、今は各階級に婆羅門の儀式行はれ、一父所生なる故に四姓は同一なるべしと論じ、更に明確なる例證を爲し、牛・象・馬・鹿等は足跡が區別出来るが、四姓各々の間にては婆羅門乃至首陀羅の足跡と

區別立て難く、姓は唯一であると論究する。苦・樂・命・覺・業・務・言・動・死・生・怖・畏・性交・品行等に於ても婆羅門の特徴はない。四姓は一樹所生の華果の同一なるが如くである。〔一一一〕

かくて噓地談致羅 *Yudhisthira* と吠沙波瀧 *Vaiśampāyana* 仙との對話を引用して、眞の婆羅門たる五の特相を擧げ、往古にて一切は一姓にて行作の特相によつて四姓が樹立されたと述べ、忍耐・愛愍・布施・眞實・清淨・憶念・同情・明・識・超勝が婆羅門の特相にて、これを持する者は首陀羅たりとも婆羅門であり、之無きものは婆羅門たりとも首陀羅であると、精神主義の上に立つて、形式主義の婆羅門特權説を完膚なきまでに鋭く駁論してゐる。〔三〇一五〕論理整然明徹にして、秋風烈日の論鋒である。傳統と特權の夢圓らかであつた婆羅門にとつては金剛針の如き論鋒は氷水の如く晴天の霹靂の如

は夫々に昔日のまゝに自己の獨異性・卓越・尊高を主張し、相互の間に普通人には想像し得ない蔑視・嫉妬・反感・惡意を持ち合つてゐる。

金剛針論はこの婆羅門が自らの編纂した一都合よく一經典によつて自族の卓越と四姓の峻別を主張してゐるのに對し、觀察鋭く、その引用經典と婆羅門自身の出身者・性行・慣習との中から反證を探し出して反駁してゐるのである。

著者は第一に先づ婆羅門が生命が婆羅門の所以なりと主張するのに對し、「日天スールヤ(Sūrya) 鉢摩(月天 Soma) 因陀羅(Indra) が家畜なり」とのシヤタバタ梵書 Satapatha-Brahmana 一三・二・七・一三ノ一五及びタイテイリヤ本集 Taittiriya-Saṃhitā 五・七・二六の句によつて、獵師・鹿・白鳥・鴛鴦が吠陀に通曉する婆羅門として生れたとの摩訶婆羅多詩 Mahābhārata 中ハリヴァンシヤ Hari-

vaṅśa 五・二九二—三三の句によつて、吠陀を攻究するも首陀羅族より布施を受くる婆羅門は驢馬として生れるとの摩奴法典 Manava Dharmasāstra(十八、九章?)の句によつて、生命が婆羅門にあらずと論駁してゐる。【一—五】

第二に族生が婆羅門なりと主張するに對しては、聖傳 Smṛti 中に阿俄悉多仙 Agastya 阿俄悉帝花(Agasti)より生じ、拘尸迦カウシヤ仙 Kaushika 古祥草(Kusa)から生じ、迦毘羅カピラ仙 Kapila 紅日(Ka-pila)より、喬多摩ガウタマ仙 Gautama 沙羅叢林(Sala)より、一角仙人 Rjyasringa は鹿母より、鷲野僧 Vyasa 採魚女より、尾濕彌恒覽ビシミヤ仙 Visvāmītra 氈陀羅カシヤ賤女より、鷲私瑟姪ヴァシシタ仙 Vasistha 烏頰カウラ鷲戸天女 Urvasi から生れ、婆羅門生でないとの論據から難じてゐる。【六一—一】

第三に身體が婆羅門なりとの説に對

し、身體が婆羅門なら、屍體を燒く火も殺婆羅門となり、親族も荼毘を命ずる故殺婆羅門の罪がある。婆羅門の身液から生れた利帝利・毘舍・首陀羅も婆羅門であるべき筈であると駁してゐる。

第四に知識が婆羅門であるとの主張に對し、首陀羅たりとも吠陀ヴェダ文法 Vyākaraṇa 彌曼婆 Mimāṃsā 僧サイニヤ法 Śāṅkhya 勝論 Vaiśiṣṭika 占星 Jagna 活命 Jivika の諸典に通曉してゐる者もあるが婆羅門と扱はれないと皮肉る。

第五に習俗(acētra)が婆羅門であると主張に對し、幾人でも習俗のある首陀羅があり、無倡 傭兵・漁夫等に從ひ婆羅門である筈であるが、婆羅門とされないと難する。

第六に行作(karma)が婆羅門であると主張するが、利帝利・毘舍・首陀羅にて施祭・司祭・讀誦・教習・布施・受施・嗜好等の行作をなすものがあるが、婆羅門等は

族が侵入し、その際宗教上の見解の相違で一部は別れて西に、今のペルシャに入つてイラン文化を形成し、他はアールヤ民族として印度本土に侵入して、土着民族を征服したのである。この際、征服民族のアールヤ人は最初は勿論分業分職はなく、各人が各職を兼ねたのであるが、次第に祭祠・思索に長ずるものと、軍略・武技に秀でる者との間に最初に區別が生じ、婆羅門・刹帝利と分け、更に安泰な社會が成立し、産業が盛に起るに従つて、その専門家である吠舍ワシヤが成立したのである。一方、被征服者は永久的に奴隸の極印カウリヤを印されることとなつた。

これらの階級成立には色々の原因が數へられるのであるが、教權・血・民族・職業等が主なものであらう。文教の地位にあり、法典編纂に當る婆羅門族が自らの特權を擁護する爲に、婆羅門の職權と地位を他の階級と引離して最高にまで高揚

し、他と峻別したことは極めてあり得べきことである。又階級が各職分職業により自然に分れ、同種の職分にあるものは一階級を形成し、又は類似の職業に屬するものは互に交渉が深くなり、連絡團結するに至り、ギルドGuildに類するものまで形成するに至つたのも當然と思はれる。又階級といふ言葉は梵語ではヴァルナVarṇa(色)と言ふが、之は征服民族でアールヤ種族の白色と被征服民族で黒色の非アールヤ種族との區別を意味し、言語上からも種族が階級成立の原因になつてゐることを現してゐる。又征服民族の常として血の純粹を尊び、混血はより一段賤しい他の階級を形成し、所謂クラシClassに似たものを作つてゐた。而して之等の四大階級別は極めて嚴格嚴肅で、正規上には一糸も亂す可らざるものとされ、法規に外れて、道德的墮落・雜婚・混血・職業の變更が行はれれば、アウ

ト・カストOutcaste 即ち階級追放が行はれ、一階級乃至數階級下されるか、別に低い新しい階級を作ることとなつてゐた。一階級を隔れば、即ち婆羅門と庶民との如きは正式に結婚することは出来なかつた。同じ階級に屬しても職業・性行・慣習の同異によつて小階級が作られて行つた。即ち鍛冶屋は鍛冶屋で一カストCasteを作つたのである。かうして墮落・混血・職業の相違によつて印度の階級は數千年の時の流れの間に實に現代印度の極めて因襲的な排他的な數百數千の階級に分裂し、協調し難き群少の集團・階級が個立・對立するに至つたのである。首陀羅Shudraの如きは奴隸奴僕として賤められ、共に坐食行住するを許されなかつた。この階級のどん底に落ちたものが所謂賤民で、民族的に卑しいことと死體糞尿を處理し、職業的に卑しいことによつて、極度に蔑まれた。現代でも尙その小階級

第六問 隨法は婆羅門なるか。

而して本書の佛教的註解と見られる金剛針論では左の如き結構をなしてゐる。

第一解 生命は婆羅門に非ず。

第二解 族生は婆羅門に非ず。

第三解 身體は婆羅門に非ず。

第四解 知識は婆羅門に非ず。

第五解 習俗は婆羅門に非ず。

第六解 行作は婆羅門に非ず。

第七解 吠陀は婆羅門に非ず。

「かくの如く兩書の内容は大略同一問題を扱つてゐる。その積極的に婆羅門位の特徴〔第九〕を説く所でも、奥義書は單に之に一項を與へたのに對し、馬鳴の註解は婆羅門位〔第一〇〕の上に更に四項を添へ、首陀羅位〔第一一〕混血〔第一二〕得婆羅門位〔第一三〕四族一元〔第一四〕の詳解を與へて全篇を結んでゐる。その上に第一の序偈と第十五結文とは著者馬鳴の製作に關する偈文であるので、之を別とす

れば兩書の結構・内容は全く詳略の差のみとなるのである。」

【一】高楠博士、ウパニシャット全書八、三六七頁。

【二】漢譯に叙説なし。該項註を見よ。

【三】高楠博士譯ウパニシャット全書八、三六七—八。

【四】Harprasāda Śāstri: *Souandamandakavya*, Preface, xxii—xxiii.

【五】高楠博士、ウパニシャット全書八、三六八—九頁。

第五 思想内容

馬鳴の金剛針論は婆羅門教の立場に立ち、婆羅門書類を引用して、佛教的精神に基いて、四姓の差別を無意義とし、婆羅門(Brahma)・刹帝利(Kṣatriya)・毘舍(Vaiśya)・首陀羅(Sūdra)の階級相互間に本質的優劣は見出されないと、婆羅門教の主張の缺陷を金剛針 Vajrasaci の如く鋭く突いてゐるのである。

元來この四姓(Catur-varṇa)は先づ侵入民族のアーリヤ民族が先住民族たるド

ラヴィデイアン Dravidian を征伏し、

彼征伏民族を奴隸とし、首陀羅とし、自族の内に更に職掌により婆羅門族・刹帝利族・毘舍族に分裂したのに端を發する。

印度では既に紀元前三、四世紀の佛陀時代に於ても、この階級はブラーフマン婆羅門と稱し、祭祠・政教に與る僧侶階級、

クシャトリヤ刹帝利と稱し、軍事政治に携る武士階級(王族を含む)・ヴィジュヤ吠舍といふ産業を主とする庶民(農工商)階級、シュードラ首陀羅といふ奴隸階級

とに四大別され、人々は生れながらに峻烈に區別されてゐた。釋尊自身も之に對してはその無意義と弊害とを猛烈に攻撃されたのであつたが、この階級組織は既に牢固たるものであつた。所以印度には土着のドラヴィデイアン其他の諸族があつたのであるが、紀元二、三千年以前に北西部からヒンヅークシ山脈を越へて、現代のヨーロッパ人と同族の印度伊蘭種

【三】 平等(佛陀の生涯一九一〇、阿)梵文佛傳文學の研究」五七一—六三〇。

【四】 Linders: Bricketische des Kalpa-nāmaññitika des Kumāralāra, Leipzig, 1926.

【五】 Prasādāsāstri: Saundaryānandam kāvyam, Calcutta, p. 126. E. H. Johnston: The Saundaryānanda of Aśvaghōṣa, Oxford, 1928, p. 141.

第四 成立過程並に結構

一、成立 馬鳴の金剛針論に先立つて、ヴァジュラ・スーテイカー・ウパニシャツド(Vajrasūtra-Upaniṣad)と云ふ書がある。高楠博士によつてウパニシャツト全書八に譯出されてゐるが、この書は「他のウパニシャツトとその趣を異にし、階級的婆羅門位を排斥し、性格的婆羅門位を主張したものである。而して一見、反正統派の對抗意見であるかの如く見へるが、その第九婆羅門位の真相を語るに至つて、上示の特徴を有せる者は眞の婆羅門なりとは天啓・聖傳・史話等の主張な

り」と結んである所を見ると、全く正統派の奥義であつて、階級的偏見を持せる婆羅門に對する戒飾なりと見るを正當とするのである」

馬鳴の金剛針論はこのウパニシャツドの演意的註釋と見る可き書である。唯高楠博士の高説の如く「この書は本奥義書の主張を殆んど順序を逐ふて敷衍しながら、終始反婆羅門教の態度を執り、巧みに正系の正言量を引いて血族的婆羅門位を排斥したものである。これは本奥義が婆羅門教者として、内より傳統説を排斥したのに對し、馬鳴は佛教者として外より反駁説を唱へたものと見なければならぬ。著者馬鳴が佛教者たることは序説に於て、^二文殊菩薩を頂禮してゐるのも明白である。且佛所行讚・經莊嚴論の著者馬鳴菩薩の製作として寸毫もその不適當な點は見出さないのである。」^三而して之等の論法は印度思想界に多大

の衝動を興へたと見へ、婆羅門復興の大學者シャンカラ・アーチヤールヤ Śaṅkara-Ācārya も『金剛針論の演意的註解を著してゐる。印度で發見された馬鳴の金剛針論はシャンカラの徒の改竄が加へられてゐることである。ウイリアムソン氏 Williamson は「ラルス Berens のヒリチブル Ellichpur で、ヴァヂユラス・チイータンカ Vajrasūtrika」と題する婆羅門によつての反駁が一八三九年に公刊された著の寫を見出したとのことである。^四

二、結構 ヲアジュラ・スーテイカー・ウパニシャツドの結構は左の如くなつてゐる。

- 第一問 生命は婆羅門なるか。
- 第二問 身體は婆羅門なるか。
- 第三問 族生は婆羅門なるか。
- 第四問 知識は婆羅門なるか。
- 第五問 行作は婆羅門なるか。

(Megarjuna)、提婆 (Deva) 及び馬鳴である」と言つてゐる。同じく義淨は印度滞在中に佛教會堂其他で馬鳴に歸せられる神聖の編纂が讀まれたと言つてゐる。¹³

馬鳴の著作として確實なものは、『佛陀の生涯』¹⁴と孫陀羅難陀詩 (Saundara-nanda-kavya) である。大莊嚴論經は從來馬鳴の著作と信じられて來たが、リユータース Lüders 教授は之は鳩摩羅跋 (Kumārata Jadhva の誤か) 著の Kai-paṇṣamaḍṭṭika の譯であるとしてゐる。¹⁵

然し思想・表現・記述事項が馬鳴の他の眞著作と一致類似してゐるので、略々彼の著作であることは確かであらう。金剛針論も支那では法稱作とされてゐるが、婆羅門の特權・墮落を非難する記述事項が『佛陀の生涯』と記述と一致するので、或ひは馬鳴の作と思はれる。然し其他の馬鳴作と傳へられる書は、彼の著であるのは殆んど疑しい。殊に從來馬鳴著と傳

へられた大乘起信論は更に何等かの文獻が見えない限り、現在に於ては思想・文體上馬鳴著作と考へ難い。『佛陀の生涯』等は思想は原始佛教思想を多く出でず、多少大衆部的進歩思想を有してゐるだけなのに、大乘起信論は發達した純然たる大乘思想であり、文體は前者は美しい雅文であるのに、後者は簡拙な論文である。唯孫陀羅難陀詩の卷末には他に

『解脱の爲に』 Mokṣat 書いたと書してゐるから、他に何か哲學的著書があり、大乘起信書の原始的厚型 (若しありとすれば) の如きものを書いたかも知れない。古來馬鳴が大毘婆沙論編纂に關係したと傳承するが、之は疑しい。『梵文佛所行讚譯』については参照平等『佛陀の生涯』

- 【一】ウパニシャット全書八、八頁。
- 【二】大正大藏經三二、論集部一六九。
- 【三】ウパニシャット全書八、三六八。
- 【四】『梵文佛傳文學の研究』一九一九五、東京岩波書店、昭和六年。
- 【五】大莊嚴論經三、大正藏經四、二七二

頁A。同卷六、同二八七A。
【六】付法藏因緣傳第五には梅檀闍毗吒王が東征の折馬鳴を連れ歸つたとす。(藏九、一〇五b)。馬鳴菩薩傳には北天竺小月氏王が中國侵入の折馬鳴を連れ歸つたとす。

- 【七】婆藪槃豆法師傳、藏九、一一六b。
- 【八】Johnston: The Saundaramanda of Aśvagh ḡa p. 142, Oxford, 1929.
- 【九】四皮陀とは、梨俱吠陀 (Rgveda)、夜柔吠陀 (Yjurveda)、沙磨吠陀 (Sama veda)、阿闍婆吠陀 (Atharvaveda) 六論とは、數論 (Sāṅkhya)、瑜伽 (Yoga)、論理 (Nyāya)、勝論 (Vaiśiṣṭika)、吠檀多 (Vedānta)、聲論 (Mīmāṃsā) の印度六派哲學八分毘伽羅論とは波備尼大仙 (Pāṇini) の八部の文典、十八部とは佛教小乘十八部を言ふ。
- 【一〇】付法藏因緣傳第五(藏九、一〇五b) 馬鳴菩薩傳(藏九、一一二a)、前書には彼は王の三重臣の一人で、大臣摩吒羅 (Mātra) 醫者遮羅迦 (Quaraka) と共に王の信任を得て、之を補佐してゐたと。
- 【一一】付法藏因緣傳第五(藏九、一〇四以下)。
- 【一二】白象入胎說(佛陀の生涯、一・一九)。
- 【一三】玄奘は馬鳴・提婆 (Deva) ・龍樹 (Nāgārjuna)、鳩摩羅跋 (Kumārakabha) を世界を照らす四陽とも言つてゐる。
- 【一四】平等譯、『梵詩邦譯佛陀の生涯』昭和四、印度學研究所。

い。又一方佛教の法燈傳承の歴史の方からも、馬鳴の師と傳へられる脇 Parivā 尊者は一世紀の人である。馬鳴の思想も亦略々その時代に置くを妥當とする。其故、馬鳴は一、二世紀在世の人と考へるのが最も妥當と思はれる。そして紀元前にも紀元二世紀以後にも置くことは出来なうと思はれる。

彼の生地は一般に舍衛國婆枳多 *Trāṣṭī-sita* (*Sāketa-Āyodhya* 今日のオード *Oudh*) とわれ、或ひは婆羅捺斯 (*Vārāṇasī* 佛祖通載) 又は巴連弗城 (*Bālīputra*) とも言はれてゐる。彼の著『孫陀羅難陀詩』と西藏譯『佛陀の生涯』 *Buddhaca-riya* の頭號にはサーケータ生れ *Trāṣṭī-sita* と自稱してゐる。何れにしても彼の中印度の生れなのは確かであらう。母はスヴァルナークシイー (金色眼 *Suvarṇakṣī*) と言つた。婆羅門族の出身で、深い婆羅門教育を受け、婆藪繁豆 (世親) 法師傳の

傳説によれば、八分毘伽羅論・四皮陀・六論に連じ、(十八部を解し) たと言はれてゐる。智慧深く、識見高く、辯舌論議に巧みで、如何なる問題も彼の説き能はざるものなく、如何なる難問も彼の論破し得ざるものなかつた。論敵を壓倒すること恰も猛風が朽木を吹き抜くが如くで、

彼に並ぶものなく、有我思想を稱へて佛教に反對し、佛僧を論破して中印度では彼に勝つ者がなく、憍慢心を抱くに至つた。その時北方から『馬鳴菩薩傳』によれば脇尊者 (*Parivā*)、付法藏因緣傳によれば富那奢 (*Pinṅgava*) 尊者が来て、彼と論議して論破し、馬鳴は彼の弟子となり、教化されて佛教に歸依し、修道に勵み、教義の宣場に努めた。傳説によれば、その後東征の罽吒王に連れ歸られ、北印度に赴いて、王を補佐教化したと言はれるが、その眞偽は断定し難い。馬鳴は佛教傳燈史では第十一世とされ、菩薩・

尊者 (*Arjuna*)・阿闍梨 (*Ācārya*) の稱號を與へられ、脇比丘又は富那奢比丘から法燈を受け、達磨密多比丘に傳へたと言はれてゐる。

馬鳴の佛教思想は大體小乗の説一切有部 (*Śālistvādin*) に屬して原始佛教を多く出でてゐないが、大乘部等の進歩思想を多少取り入れ、又文體氣分態度から、自由思想の佛教詩人として分別部又は分別部的行き方を取つた進んだ人のやうに思はれる。大乘思想家ではないが、佛陀の崇拜讃嘆に力を入れる内、心内に大乘の萌芽を藏するに至つた。然し、それは十分芽生えなかつたらしい。西曆六七一年から六九五年迄印度に滞在して居た支那の求法僧義淨は、異教徒と好んで論議をなし、佛教の教義を宣揚して此の世で人天以上の尊敬を拂はれた學僧について「かゝる大人物は各時代に一人か二人しかなく、之を古代に求めれば龍樹

nsika (金剛針論六・佛所行讚一・四九)、迦毗羅仙 Kapila (金七)、喬答摩仙 (Gautama) (金七・佛四・一八)、一角仙 Paryasāyīsa 金八、佛四・一九、麴野僧 Vyasa (金八・佛一・四七・四・一六・孫七・三〇)、尾濤彌恒覺仙 Visva-mitra (金九・佛四・二〇)、烏嘿囉尸天女 Urvashi、轉私瑟姪仙 Yasishā (金九・佛四・七七・孫七・二八)、等は之である。之等は兩著が同一著者になることを思はしめる。摩奴法典・數論・彌曼婆・勝論等を明瞭に引用するのは(金剛針論十一)唯、馬鳴(紀元一世紀)としては明確過ぎると思はれぬでもない。漢譯は金剛針論は法稱造^二としてゐる。法稱 (Dharmakīrti) は紀元六世紀頃の論師である。漢譯金剛針論と現存梵本とは結構は略々同一にして記述内容も一致し、同一書と認められ、順序の多少の相違は譯文の不完全に歸す可き性質のものである。然らば漢譯は何故に法稱造と傳

へるのであるか。本書が後世に現存經典が成立したと思はれる摩奴法典・彌曼婆・勝論・僧伽耶等を引用するのは、紀元一世紀以後の馬鳴以外の人の作と考へるのが妥當の如くにも感ぜられる。一面馬鳴作でないものが、高名な馬鳴作に歸せられることは往々あり得る。然し、この場合は法稱も知名の論師故馬鳴作と改變する必要は認められない。漢譯に法稱造とあつたとて、梵本に馬鳴作とある以上それが竄入でない以上一餘程の有力な證據がない以上、馬鳴作を覆へすことは出来ない。現存の資料によつては—今後新資料が発見されれば兎に角、馬鳴作と爲した方が學的に妥當である。高楠博士は『馬鳴菩薩の原著が久しく佛教學者間に流布して、第五六七世紀頃論議全盛時代に用ひられ、法稱(第六世紀)も多く之を利用した爲、法稱の著として佛教の一部に相承されたのを法天は支那に將來して

譯出したものであらうと思はれる。』と言はれるが、或ひは妥當かと思はれる。馬鳴作にしても、後世多少の本文の改竄も想像されるのである。

馬鳴に就いては拙著『梵文佛傳文學の研究』一九一九五頁間に當時の自分としては最上の程度に論究し盡したので、今茲に詳述する必要は認めない。讀者の便宜の爲に之を略記すれば、馬鳴は不世出の佛教詩人であつた。深遠な思想を著へた史上須要な佛教思想家であると同時に、才氣喚發たる天才的詩家である。

馬鳴の年代は西曆紀元後一世紀後半から二世紀前半にかゝるものと思ふ。梅檀鬪尼吒王又は眞檀迦膩吒王(Kaṇṭha)の名が略々馬鳴の著とされる大莊嚴論經三卷六卷にも出で、他書には馬鳴と交渉があつたとされてゐるが、この王は紀元後一、二世紀在位が略々定説になつてゐる迦膩色迦王 (Kanishka) と同一人らし

漢譯は北宗(九六〇—一二七一年)の法天(Dharmadeva?)によつて紀元九七三—九八一年間に譯された。この法天は後には法賢と改めたが、中印度那爛陀(Nālandā)寺の沙門であつて、九七三—一〇〇一年間に多くの著作を譯出した。紀元九八二年に皇帝から傳教大師の尊號を受けた。彼は又西天譯經三藏・朝散大夫・試鴻臚少卿の稱號を持つてゐる。同年に彼は法賢と改めた。其れ故彼の翻譯年代は譯者として記された二種の名によつて明確に二つに分けられる。彼は一〇〇一年に死んで、玄覺禪師の追號を贈られた。一切經中に百十八作彼の譯著があり、その内四十六作は法天の名の下に第一期の紀元九七三年より九百八十一年迄に作された。

漢譯は法稱(Dharmakīrti)の造としてゐることは注意すべきことである。然しながら法稱の漢譯金剛針論と馬鳴の梵文

金剛針論とは全體の結構は略同一であつて、その間には別本である程の相違はない。その記述事項も内容も殆んど一致し、原典は同一のものによつたと思はれる。唯後半に於て梵本と漢譯との順序が顛倒してゐる部分があるが、之丈では別人の異本によつたとは思はれない、唯法

天の漢譯は、生涯に百十八の經典を譯出した譯經家にも拘らず、梵文を誤解すること多く、行文極めて難澁にして、翻譯は不完全である。讀者は漢譯のみを讀んだのでは金剛針論の主張を諒解し難い。

邦譯は高楠順次郎博士によつて大正十二年爲され、世界聖典全集ウベニシヤツト全書八の内に公にされた。梵文をよく邦語に移し、行文明快な良譯である。漢譯は不完全であるが爲に、讀者は高楠博士の邦譯を併せ讀まれんことを切望する。

尙金剛針論の西藏語譯はなし。(cf. B. Nandio: Catalogue of the Chinese

Translation of the Buddhist Tripitaka, nr. 1303, p. 288.)

梵文金剛針論の原典羅馬字化・並びに語彙は拙著梵語初等文典に編入されてゐる。

【一】世界聖典全集、ウベニシヤツト全書、一一六、三六七—八、世界文庫刊行會、大正十二年。

第三作 著

梵本には「こは悉地成滿の阿闍梨耶馬鳴師の製作なり」(kritir iyaṅ siddhacāryasvaghosapitānam itī)とあり、馬鳴作の題號を有してゐる。思想内容から言つても、論究態度からも、馬鳴眞作と認めて些も差支へないものである。金剛針論中の墮落仙の神話と佛所行讚(Buddhacarita)・孫陀羅雜陀詩(Saundarānanda-Tāvya)中の神話とは共通する者極めて多し。阿俄悉多仙 Agastya (金剛針論六・佛所行讚四・七三)・迦尸迦仙 Ka-

金剛針論解題

一千八百二十九年ホチソン(Hodgson)が金剛針論 *Vijrasuci* の翻譯を公にし、次いで一千八百三十九年ウイルキンソン(Wilkinson)氏がこの梵文を出版するや、金剛針論は歐米の讀書界に一の衝動を與へた。梵本として印度學者を喜したのみでなく、一般讀書子の民主的精神を熱狂せしめたのである。蓋し、この書には四民の平等を主張し、『婆羅門も首陀羅も種族・族生・生活・知識は同一であつて、優劣なし』と説いてゐるからであつたのである。本書の主張は論旨明確、佛教主義よりの階級批評であつて、近代的色彩濃厚に、現代人に今尙興味深きものがあ

第一 金剛針論の梵本

譯書並びに研究

馬鳴 (Aśvaghoṣa) 作との題號を有する金剛針論の梵本は先づ一千八百三十九年ウイルキンソン(Lancelot Wilkinson)氏によつて次の題名で出版された。

“Wujra Soochi or Refutation of the Arguments upon which the Brahmanical Institution of Caste is Founded, by the learned Buddhist Ashwa Ghoshu.”
この中には既に一千八百二十九年に *Transa, der RAS, vol. III.* に出たホチソン (B. H. Hodgson) の譯を含んでゐる。同じく一千八百三十九年に

“The Tunku by Soobajee Bapoo, being a Reply to the Wujra Soochi.”
が公にされた。(之等は手に入れ難し。) 更にウエバー (A. Weber) によつて良校訂本が獨逸譯・研究を附して出版され

た。

“Über die Vajrasuci” (Abhandl. der preuss. Akademie d. Wiss. phil.-hist. Kl. 1859. S. 205 ff.

金剛針論について最もまとまつた良書である。

金剛針論の研究としては次の出版がある。

B. H. Hodgson, *Essays on the Languages, Literature, and Religion of Nepal and Tibet*, London, 1874, p. 126 ff. S. Lévi: *Journal Asiatique*, 1908, S. 10, t. XII. p. 70f. 参照

尙梵本寫本については次の書を参照されたい。

Catalogue of the Hodgson Manuscripts, III. 54. 55; V. 64; VI. 66; VII. 91.

第二 漢譯並びに邦譯

觀釋は菩提心の内容と修道德目(波羅蜜)を細かに論究してゐる。更に菩提行論は寂天(Samantibhadra)の有名なBodhicaryāvataraの漢譯であつて、行文は難解であるが、美しい偈文で菩提心と六波羅蜜を説明し、美しく興味深き佛教概論をなしてゐる。福蓋正行所集經は平易な行文にて波羅蜜修行の福田を實例を以て懇切に例證したものである。

讚法界頌・廣大發願頌以下は美しい簡潔な頌文であつて、漢譯としては難澁であるが、極めて行文は美しく、思想も亦深淵なものであつて、佛教詩頌の集大成、佛教文學の鳥瞰の觀がある。内、事師法五十頌は馬鳴作と傳へられる偈文であるが、佛教徒の師に事へる心得を示して詳細懇切にして、師弟の道の厚きを示してゐる。一百五十讚は摩訶里制吒(Mahāśīta)の傑作であつて、義淨之を譯し、現今中央亞細亞でその梵本斷片が発見された有名な著作で、行文美麗、韻律流暢、印度佛教徒にして經文を讀誦するを得る位のもの皆學つて精舍で讀誦したと言はれてゐる。その外の偈頌も皆佛法僧を讚嘆したものであつて、思想深淵に行文も亦麗しいものである。

こゝに論集部一卷は簡潔にして思想深淵な論書を骨子とし、之を行文麗しき偈文の衣裝にて嚴飾したもので、一切經の各形式を網羅した一大縮圖を爲してゐる。内に佛教倫理を組織的に論究する精緻なる論文あり、一方に三寶を言莊麗しく讚嘆する叙情的美文がある。佛教的修養・求道を淳々と語る菩提行論の如き宗教があると共に、佛教の要諦を詩の衣で美しく表現する藝術がある。この一卷はある意味で宗教と藝術との融合の境地と言ふことが出来る。

尙各經書の詳細な解説は各經夫々の部分になすこととして、之を論集部第六卷の總序とする。

因みに各經書の個々について示教を受けた方々にはその項に於て謝意を示すこととし、論集部全體に當つて父信之の助力を受くること多かつたことを茲に附記する。

昭和六年十月七日

平等通 昭誌

論集部第六卷 總序

一切經中論集部は經律論の三藏中で他の部に屬さぬもの、又は所依の經論ではないもの内、特に論藏を中心として之に後世の讚偈文等を配して編輯したものである。この中には因明正理門論本・因明正理門論・因明入正理論等の因明關係の重要書、入大乘論・大乘寶要義論・大乘集菩薩學論・集大乘相論・隨相論・大乘起信論等の大乘の重要論書、阿毘達磨論書として重要な地位を占める立正阿毘曇論・成實論・解脫道論・三彌底部論等を含んでゐる。之等の要書は他の專攻者が當一切經中に譯出されるのであるが、論集部の一冊としての小生の分擔にしてこの卷に收めるものは、之等の大論書を除いた小論書と偈文の殆んど全部である。論集部と言ふと如何にも論部のみにて思想は深淵であるけれども無味乾燥臘を嚙む如くであると思はれ易いが、この卷に出る論集は普通の所謂哲學的の論でなく、倫理修道を中心とした滋味掬す可き、興味深き好書であつて、しかもこれに美しき偈文の讚嘆文を十數篇點綴して美しく飾つてゐる。

例へば論書としては『金剛針論』Vajrasūci は行文難澁ではあるが、馬鳴 Aśveghoṣa 作と傳へる梵本を有し、婆羅門教が婆羅門 Brahman は生れながらに生命・族生・身體・知識・習俗・行作・吠陀の修得等によつて卓越してゐると稱し、その教權と階級卓越・特權を主張するに對し、佛教の平等主義・階級否認の立場から、種族的には婆羅門も他の三族も同じ人間にて、知識・習俗・行作・吠陀の知識は首陀羅 (Śūdra) 中にも婆羅門より卓越したものであり、婆羅門中にも倫理的墮落をなし、不倫・混血・雜婚を行ひ、卑劣なる生活をなすものありと、金剛針 (Vajrasūci) の如く鋭くその矛盾を攻撃非難し、階級組織の論究のやかましい昨今、一つの興味深き佛教文獻たるを失はない。辟支佛因緣論は平易な文體にて如何にして求道者が辟支佛位を覺悟したかの實例を譬喩譚的に語つてゐる。十二因緣論・緣生論は十二因緣の註釋にして、寶行王正論は王に向つて美しき偈文を以て佛教の要諦と修道法を説いてゐる。發菩提心經論・菩提心離相論・菩提心

卷の第一 [一 — 一六] 三〇二

讀菩提心品第一 三〇三

菩提心施供養品第二 三〇五

護戒品第三 三〇七

卷の第一 [一七 — 三六] 三二八

菩提心忍辱波羅蜜多品第四 三二八

菩提心精進波羅蜜多品第五 三三〇

卷の第二 [三九 — 五七] 三四〇

菩提心靜慮般若波羅蜜多品第六 三四〇

卷の第四 [五九 — 八〇] 三五七

菩提心般若波羅蜜多品第七 三五七

福蓋正行所集經解題 [一 — 七] 三六二

福蓋正行所集經十二卷 [一 — 八九] 三六九

菩提心離相論解題 三六九

菩提心離相論 [一 — 一九] 三七六

索引 卷末

發菩提心經論解題

〔一—八〕……………一五

發菩提心經論

〔一—三〇〕……………一三

卷の上

〔一—一五〕……………一三

歡發品第一

……………一三

發心品第二

……………一六

願誓品第三

……………一七

檀波羅蜜品第四

……………一六

尸羅波蜜品第五

……………一七

羼波羅蜜品第六

……………一七

卷の下

〔一七—三〇〕……………一七

毘梨耶波羅蜜品第七

……………一七

禪那波羅蜜品第八

……………一八

般若波羅蜜品第九

……………一八

如實法門品第十

……………一八

空無相品第十一

……………一七

功德持品第十二

……………一八

菩提行論經解題

〔一—一〇〕……………一五

菩提行論經

〔一—一八〕……………一三

九、轉輪聖王最小子、辟支佛を悟る緣…………… 九

十二因緣論解題…………… 二〇

十二因緣論一卷…………… 五

緣生論解題…………… 三

緣生論序…………… 三

緣生論…………… 一五

止觀門論頌解題…………… 七

止觀門論頌…………… 八

寶行王正論解題…………… 三

寶行王正論一卷…………… 五

安樂解脫品第一…………… 一〇

雜品第二…………… 一一

菩提資糧品第二…………… 一三

正教王品第四…………… 一三

出家正行品第五…………… 一四

目次

論集部第六卷總序

(本丁)

(通頁)

金剛針論解題

[一—九]

三

金剛針論

[一—一〇]

一四

辟支佛因緣論解題

[一—四]

一六

辟支佛因緣論

[一—二九]

三

卷の上

[一—一四]

三

一、波羅捺國王、辟支佛を悟る緣

三

二、輔相蘇摩、辟支佛を悟る緣

元

三、月愛大臣、辟支佛を悟る緣

四

卷の下

[一五—二九]

四

四、王舍城大長者、辟支佛を悟る緣

四

五、波羅捺國王月出、辟支佛を悟る緣

四八

六、拘舍彌國王大帝、辟支佛を悟る緣

五一

七、拘舍彌國王、辟支佛を悟る緣

五四

八、波羅捺國王親軍、辟支佛を悟る緣

五七

論集部 六

平等通昭譯



CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
0th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

國譯一切經

大東出版社藏版

